PERSONA3　Re:Call

清良　要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＰＥＲＳＯＮＡ３　Ｒｅ：Ｃａｌｌ

【Ｎコード】
Ｎ９４５３Ｓ

【作者名】
清良　要

【あらすじ】
主人公・有里湊は高校２年の春、１０年前に自分が家族を失った土地へ転入生として戻ってきた。従姉と再会し、新たに友人たちと出会い、暗い思い出の地で新しい日常を過ごしてゆく。だが、その日常も日常の裏“影時間”の住人たちによって壊されていった……。はじめまして、この作品はＡＴＬＵＳさんのＰ３Ｐ（ペルソナ３ポータブル）を原作とした二次創作となります。男主人公の視点で両主人公のストーリーをミックスした感じの内容を、原作沿いにすすんでいくのですが。プレイ済みをほぼ前提に書いている部分があり

ます。そのため、未プレイやプレイ途中の方には分からない部分があると思いますし、ネタばれが嫌という方は今のうちにお戻りください。ただ、ストーリーは原作沿いですが、独自解釈・オリジナル設定などを盛り込み原作とは別の物語りにしていく予定です。ちなみに作者はペルソナシリーズはＰ３Ｐしかやっていないので他作品の設定はわかりません。

第一話（前書き）

はじめまして、清良と申します。初投稿作品のため誤字脱字が多数あったり、分かりづらい文章などがあるかとは思いますが、よろしくお願いします。

この作品では基本的に日付で1話ごとにして書いていこうと思います。

また、各章が書き終わるごとにまとめて投稿しようと思っているので、投稿は不定期になります。次の話を書いてるときにふとしたアイデアを前の話にいれたり。途中でミスに気付き戻って修正したりしているので、各話投稿はいまのところしない予定です。

各章投稿後にその章での新たな登場人物の設定、すでに登場した人物の新たな設定などをまとめて書いた『設定』の話を設けたいと思います。そのときに感想や質問などがきていたら前の章の内容に対するものでもなるべく答えたいと思いますので、登場するペルソナやスキルなどについては事前に確認してから読んでいただいた方が、より場面状況が理解しやすいと思います。

それではよろしくお願いします。

第一話

4／6（月）

家族で車で買い物に行った帰り、自分たち家族は事故にあった。
覚えているのは、横転し燃えていた車。
なんとか這い出し必死に父と母の名を叫んでいた自分。
車を包んでいた炎がより激しくなったと思った瞬間、爆発音が聞こえた。
吹き飛ばされ、意識を失っていくとき。自分はだれかに抱かれていた。
その人もボロボロだったけど、とても綺麗な人だったと思う。
『ゴメンなさい』と繰り返すその人の後ろに、とても大きな月が見えた…

夜――新都市交通”あねはづる”車内

『え～、本日は、ポイント故障のためダイヤが大幅に乱れ…お急ぎのお客様には、大変ご迷惑をおかけしました。次は～、巌戸台～…』

車内放送の音で目を覚ます。モノレールに乗っていたら、いつのまにか眠っていたようだ。事故のときのことを思い出すのは久しぶりで、いつもなら嫌な気分で目を覚ましていたけど、今回は自分を助けてくれた人の顔をいつもより思い出せていたからそこまで悪い気分じゃなかった。

《キキィー》

見たばかりの夢のことを考えているとブレーキの音が聞こえ、電車

内のスピーカーから構内放送が流れてきた。

『巌戸台、巌戸台です。この電車、辰巳ポートアイランド行き、本日の最終電車となっております。お乗り忘れの無いようご注意ください』

放送が終わり完全に電車が停止するとドアが開いた。僕はバッグを肩に担ぐと忘れ物がないかを確認して電車を降り。人の流れについていって改札を出た。それにしても到着が遅くなってしまった。別に誰かを待たせている訳じゃないが、入寮が今日だと言ってあるのにもうすぐ0時だ。

《カチャン》

時刻が丁度0時なったころ、そんな風に電源が落ちる音が聞こえ。駅内の券売機や電灯が次々と消えていった。終電が終わったからと言ってこんなにすぐに電源を落とすことはないだろう。ということは、ここでも0時になったらあの不思議な時間が存在するということか。まぁいい、ともかく寮へ急ごう…。

――駅からの道

人気の無い街に、棺のようなオブジェが並んでいる…。不気味なほど巨大な月。たしか、あの日の月も今日と似たよう感じだった気がする。夢を見たばかりだからか、どうしても事故の時のことを考えてしまう。だが、これ以上遅くなってはまずい。とりあえず、前に下見で通った道を思い出しながら向かうこととしよう。

”月光館学園　巌戸台分寮”

ここが、入学案内に書かれていた寮だ。昼間に見たときは綺麗で時

代を感じさせる上品さのある印象だったが、この時間に見るとどこか寂しく不気味な印象をもつ建物だとおもった。さすがに、もう閉まっているかと思ったが鍵は開いていたので中へとはいった。

――ラウンジ

「ようこそ」

寮の扉を開けて中へ入ると、そこには囚人服のようなデザインの服を着た。見知らぬ少年がいた。この少年も寮生なのだろうか?そんな風に考えていると、少年が笑いながら話しかけてくる。

「遅かったね。長い間、君を待っていたよ。この先へ進むなら、ここに署名して。一応、“契約”だからね。怖がらなくていいよ。ここからは、自分の決めた事に責任を取ってもらうってだけだから」

そう言われ少年を見ると、1冊の冊子を手にしている。誰も待たせていないと思っていたが、どうやら入寮の手続きが必要だったようだ。この少年には悪い事をしたと思うと、僕は謝りながら話かける。

「ごめん、電車が故障で遅れてしまって。印鑑とかはいらないのかな?」

そう言いながら差し出された冊子を受け取って開くと、中にはメッセージが書かれている紙があった。そこに書かれている言葉は、

“我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん”

というものだ。…この子も言ってたけど、自分の決めた事の結果がどうなっても責任は自分が負いますってことかな?すでに義務教育課程を修了した高校生だ。それぐらい当たり前なんじゃと、考えな

がらも僕は自分の名前を書いた。

【有里（ありさと）　湊（みなと）】

「…うん、確かに。時は、誰にでも結末を運んでくるよ。たとえ、耳と目を塞いでいてもね。…さぁ、始まるよ」

言い終わると見知らぬ少年は、闇に溶けるように消えてしまった…。どうやったんだろう?とそんな風に考えていると。今度は奥の方から《カタン》という物音がした。その音のした方へと振り向くと、1人の少女が立っていた。そのまま僕が向こうを見ていると、相手も僕に気付いた。

「…誰!?　この時間に…どうして…まさか…」

自分の方をみて驚いている少女は、銃のような物を手にしている。正直、そんな物を見せられては、自分の方が驚きたいとこだが。もしかして、僕は泥棒かなにかと思われているのだろうか?そんな誤解を解くため話しかけようとするが、それは突然現れた人物の声に妨げられた。

「待て!」

「…!!　あかりが…」

銃を持った少女のさらに後ろから現れた人物。その人物の発言で動きを止めていると明かりが点いた。そうして、あの不思議な時間帯が明けると。銃を手にしていた少女は安心したのか、先ほどの強張った表情をといていた。

その様子から、武器を持っていた間の緊張が解けたのを確認し。先ほどの自分の誤解を解こうと再び話しかけようとすると、またしても後から現れた少女に遮られた。

「到着が遅れたようだね。私は、【桐条（きりじょう）　美鶴（みつる）】。この寮に住んでいる者だ」

「あ、どうも。お待たせしてしまったのなら、すみません。電車が遅れてこんな時間になってしまいました」

そんな風に、年上っぽい先輩と思われる桐条さんという人にあいさつを返すと、銃を手にしていた茶髪の子も僕の顔を数秒見てから口を開いた。

「…誰ですか？」

「彼は”転入生”だ。ここへの入寮が急に決まってね…。いずれ、男子寮への割り当てが、正式にされるだろう」

そういって自分の紹介をしてくれている桐条…先輩と呼ぶことにしよう。で、桐条先輩の言葉を聞いて茶髪の子が怪訝そうな顔をする。そんな相手の様子を観察していると、茶髪の子は桐条先輩にヒソヒソと話しかけた。

「…いいんですか？」

「…さあな」

2人の様子から判断すると。僕は、あまり歓迎されていないのだろうか。急に入寮が決まったといっても、2月中には転入手続きと入

寮手続きを終えていたのだが…。そう考えて、どうしたものかと思っていると、困った様子の僕に気付いた先輩は口を開く。

「ああ、すまない。彼女は、【岳羽（たけば）　ゆかり】。この春から2年生だから、君と同じだな」

少し考えていると、桐条先輩が茶髪の子を紹介してくれた。紹介された、岳羽という子も「…岳羽です」と、簡単だがあいさつをしてくれる。そのようにお互いの自己紹介を終えると僕は先ほどから気になっていたことを尋ねることにした。

「もしかして、ここって女子寮？」

「そういう訳じゃないですけど…何ていうか…」

あまり歓迎されていない雰囲気と、最初の少年以外女子にしか会っていないので訊いてみた僕。すると、女子寮ではないようだが、岳羽さんが答えづらそうにしている。何やら訳ありなようだな。そんな風に1人で思考の海に潜ろうとしていると、今度は桐条先輩が僕の質問に答え始めた。

「ここだけ例外なんだ。他の寮は、男子と女子が分かれている。事情は、機会があれば話そう。今日はもう遅い。部屋は2階の一番奥に用意してある。荷物も届いてるはずだ。すぐに休むといい」

「あ、じゃ、案内するんで、ついて来て下さい」

桐条先輩がそう教えてくれた。そして確かに、疲れているので先に休ませてもらうことにし。上へ向かおうとすると、今度は岳羽さんが案内を申し出てくれた。なので、部屋の場所も分からないしお言

葉に甘えることにして、僕は岳羽さんについて上へ行くことにした。

――2階廊下

岳羽さんに案内されて2階廊下の一番奥の扉の前に到着すると。岳羽さんが僕のいるこっちへ向き直り話しかけて来た。

「この部屋だね。いちばん奥だから、覚えやすいでしょ？　えっと、何か訊きたい事ある？」

「んー、じゃあ玄関で書いたあの署名は何？」

「え？　署名？　…何のこと？」

特に訊きたいことはないが、質問を受け付けられたのでちょっと気になっていたことを訊くことにした。しかし、そのことについては岳羽さんは何も知らないようだ。もしかして、最近になってから始まったことなのか？そうして一人でまた考えていると、今度は岳羽さんの方から質問してきた。

「あの…ちょっと訊きたいんだけど。…駅からここまで来る間、ずっと平気だったの…？」

「…平気だったけど？　このぐらいの時間なら暗さもこんなもんじゃないかな？　それに別に不良みたいな人とかもいなかったし」

自分の答えにひっかかるものがあるのか、訊いてきた岳羽さんは微妙な表情で考えている。だが岳羽さんは、今考えても答えがでないと思ったらしく考えるのをやめたようだ。そして案内を終えた岳羽さんは元来た方へ戻ろうとする。

「そっか……ならいいんだ。ごめん、気にしないで。じゃあ、私は行くね…」

そういって去ろうとした岳羽さんだったが、彼女はもう一度ふりかえり。やや暗い表情でこちらを向いて口を開いた。

「あのさ…色々と、分からない事あると思うけど、それはまた、今度ね…おやすみなさい」

「うん、わかった。おやすみ」

そうして挨拶をして、岳羽さんが階段を下りて行くのを見送ったあと、僕は自分の荷物を持って部屋に入った。

――自室

ここが割り当てられた部屋か。めちゃくちゃ広いというわけではないが、一人暮らしには充分な広さだ。届いていた荷物から明日必要なものと、寝るのに必要なものを出し。着替えた後、すぐにベッドへ横になった。

「あー……まあ、今日は良いか。それより明日から学校か。大丈夫、知り合いもできたしどうせ新クラスなら在校生も転入生もかわらない。特別心配するようなことはない。明日も早いしもう寝よう」

そうして部屋の明かりを消すと、僕は枕とタオルを整えて眠ることにしたのだった。

第二話（前書き）

第二話になります。主人公は天然ではないですが、めんどくさがりの脱力系なので普段はぼけっとしてます。

第二話

4／7（火）

朝――自室

《コンコン》

『岳羽ですけど、起きてますかー？』

…起きてませんよー。と、そんな風に心の中で答えつつ僕は、タオルケットを頭まで被る。朝のこの時間はまだ寝ていたいんだ。しかし、そんな思いが相手には伝わらなかったようで、相手はまだノックをして話しかけてくる。

『お願い、出てくれないと困るのー。悪いけど入るよー《ガチャ》』

そういうと岳羽さんが本当にはいってきた。確かに鍵は開けていたけど、昨日会ったばかりの男子の部屋に勝手に入ってくるとか…。そんな風に相手の行動にちょっと呆れていると、岳羽さんは明るい笑顔で話しかけてきた。

「おはよう、眠れた？　あのね…って、起きてよ！　なんでこの時間でまだおもいっきり寝てるのよ。私、先輩に案内しろって頼まれちゃったんだから起きて準備して」

「案内はいらない、まだ寝る…」

僕はそう言いながらまた布団にもぐっていく。というか、眠いんだからほっといてほしい。電車のせいであんな時間に着いたのだ。こ

っちにしてみれば睡眠時間が全然足りていない。その分を充電するため再び寝ようとすると、相手はちょっと気分を損ねたようだ。

「あ、断るかな、ふつう…。てか、人が喋ってんのに寝直すな！　お互い、初日から遅刻ってワケにもいかないでしょ？　はい、支度、支度！」

「うー、一緒なら大丈夫だよ。なら、シャツとってー」

「これ？　ハイ。って、私はお母さんじゃないっつの！　それに一緒でも大丈夫なわけないでしょうが、時間過ぎてんだから急いで！」

お母さんのことはよく覚えてないけどお母さんじゃないって言うぐらいだし、他所のお母さんはこんな感じなのかな？そんな風に考えながら僕は、岳羽さんに急かされるのでのそのそと起きて準備を始めた。

――新都市交通”あねはづる”車内

がんばって学校の準備をして寮を出たあと、岳羽さんの後ろをついていき電車にのった。走る音も静かで揺れも少ないから乗り心地良いな。つい、ウトウトしてもしょうがないよね。

「通学には、これ使うの、モノレール。珍しいでしょ？　特にココ、海の上進むみたいな感じで好きなんだ。あ、学校があるのは、終点の“辰巳ポートアイランド”って駅ね。聞いた事ない？　辰巳ポートアイランド。人工島の真ん中に、うちの学校があるの。あ、ほら、見えてきた」

岳羽さんが色々教えてくれるけど、正直眠くて聞いてないんだ。ご

めんね。

『次は終点、辰巳ポートアイランド～』

「あ、もう着くから降りる準備して…って、寝るなっての！　ほら、ただでさえ走らないと危ないんだから」

少し遅れたとこで転入生を連れて来てましたって言えば大丈夫なのになんで、そんなに時間を気にしてるんだろ？そう思ってると岳羽さんに手をとられ強制的に走らされることになった。…疲れる。

――校門

「おはよー！」

友達だろうか？　岳羽さんにあいさつをして横を通って行く女生徒に、岳羽さんも笑顔であいさつを返す。

「おはよう！　さぁ、着いたよ。もう、朝からすごい疲れたー。起こすぐらいなら良いけど、起こしたらちゃんと起きてよね？　それに自分で歩くこと。わかった？」

「うん」

ほとんど寝ぼけた状態でそう答えても岳羽さんが引っ張ってくれるから、安心だ。

「ハァ…。まぁ、いいけどここが月光館学園の高等部。よろしくね」

――学生玄関

岳羽さんに引かれながら、なんとか下駄箱まで到着することができた。

「ここからは1人で大丈夫だよね。えーと…まず先生にあいさつか。職員室は、この先を左に入ってすぐだから、詳しい事はそこでね。…以上、ナビでした。何か、分からない事とかある？」

ん？ここで一回お別れか。じゃあ、しっかり目覚ますかな。そう思い意識を完全に覚醒させると、岳羽さんの方を見て相手に返事をする。

「学校全体について分からない事があったら先生に訊くから大丈夫だよ。そういえば、岳羽さんはどの組？」

「えっ…さあ？まだクラス分け見てないし」

それもそうか。でも、知り合いが同じクラスの方が安心だから一緒のクラスだといいな。そんな風に考えていると岳羽さんが話しかけてきた。

「…あのさ。昨日の夜、その…色々見たでしょ？　あれ、他の人には言わないでね。…じゃあね」

そういうと、岳羽さんは掲示板前の人だかりへと去って行った。そういや、今朝から自分は岳羽さん岳羽さん言いすぎじゃないだろうか？まぁ、どうでもいいし自分は先に職員室に向かうように言われてるから、そっちに向かうとしよう。

――職員室

職員室の前に着くと、やっぱりノックとあいさつは必要かなと考えた。なので、すぐにそれを実行し職員室のドアを開ける。

《コンコン》

「失礼します。転入生は先に職員室に向かうよう、言われてきました」

言いながら職員室へ入ると、僕に気付いた一人の女性教師が手招きをしている。なので、僕は自分を指さし相手がそれにうなづくと向かうことにした。

「転入生君よね？」

「ハイ」

「…”有里湊”。２年生で間違い無いわよね…」

そう言いながら女性教師は、手もとの資料をめくっている…。資料を見てなかった感じだ。

「ふうん…結構、転々としてきてんのねぇ…。えー、ご両親は、１０年前の…あッ…。ああ、ごめん…バタバタしてて、詳しく読んでなくてさ。ええと、私は国語科主任の【鳥海（とりうみ）】です。よろしくね」

「…はい、よろしくお願いします」

「クラス分け、もう見た？　君は私の担任する”Ｆ組”よ。でもこの後もうすぐしたら始業式だから、先に講堂ね。私はＨＲの準備があるからもう少しかかるんだけど…待ってる？　それとも、先にいっとく？」

先生がそう聞いてくると僕は講堂の場所を思い出してみる。確か講堂は前に編入試験を行ったホールのことだったはずだ。席も向こうに行けばわかるだろうから、先にいくことにしよう。少し考えそう決めると僕はすぐに答えた。

「先にいってます」

「わかったわ。じゃあ、また後でね」

そうして準備をするという先生と別れると職員室をあとにし。廊下へ出て講堂へ向かうことにした。

――職員室前廊下

《ガラガラ》

「失礼しました」

向かうのはいいけど、購買で飲み物でも買って行こうかな。いまの気分はライオンとかウサギがパッケージに描いてる乳酸菌飲料だ。そんな風に職員室から出ながら考えていると、窓側の壁に寄り掛かっていた女子が急に声をかけてきた。

「待ってたよ！　湊君、同じクラスだね♪」

「んあ？」

職員室から出たばかりのとこで話しかけてきた女子は、暗めの茶髪をヘアピンとゴムでまとめている。そんな彼女の名前は【草摩（そうま）　公子（みこ）】。自分と同い年で父方の従姉にあたり、両親が死んだあと中学のときから自分を世話してくれている伯父さん夫婦の一人娘だ。

「ってか、くるの結構遅かったね。もう少しで始業式始まるよ？」

「ホントは遅刻コースだったんだけどね。岳羽さんって人が先輩に頼まれたからって、引っ張ってくれたんだよ」

「湊君、朝弱いもんね～」

そう言って自分を見ながら、楽しそうに笑う公子と並んで元来た生徒玄関の方へ向かう。しかし、講堂へ向かう前に飲み物を買うことを思い出した僕は、それを公子に伝えることにした。

「あ、購買で飲み物買いたいんだけど？」

「飲み物？　あたし、お茶なら持ってるけどとってこようか？」

「ううん、いまは乳酸菌飲料の気分」

言いながら理想は８０円サイズだなと思っていると、公子がちょっと考えてから顔をあげて口を開く。

「乳酸菌飲料ってあのよく飲んでた動物のだよね？」

「そうそう。最悪、類似品でも可」

「…でも、うちの購買そういう系は置いてなかったと思うよ？」

なん…だと…？これは今後の学園生活に多大な影響を及ぼす事態だ。始業式が終わったら購買の人に仕入れてくれるように頼んでおこう。そう決意すると気持ちを持ち直し公子に返事をする。

「んー、じゃあ諦める。あとでお茶くれる？」

「うん、いいよ！」

そうして僕らは話しながら講堂へ向かった。

――講堂

『えー、諸君らの新しい1年の始まりにあたり…あー、”文筆頻々、然る後君子”という言葉を、紹介します。うー、これの意味はといいますと…』

校長先生の長話が続いている…ようだ。自分は寝てるから関係ないけど。だが、寝ていると後ろの男子生徒が話しかけてきた。

「ねぇ、ねぇって」

……うるさいな、僕は寝てるんだ。くだらないことで話しかけるようなら、当然無視だ。

「あのさ、今朝、岳羽さんと一緒に登校してたのって、キミだよね？　見てたぜ。仲良さげだったじゃん？　キミってさ、岳羽さんとどーゆー知り合い？　つーか、講堂くるとき草摩さんとも仲良くしてたけど、二人とどーゆー関係？」

どうでもいいだろ…、関係によってはなんかあるのか？そんなことを思いながらも寝続け無視するが相手も諦めない。

「ちょ、寝てないで教えてよ。マジで、みんな知りたがってるんだって」

そうして少しの間、男子生徒が頑張って話しかけ続けていると、隣のクラスの教師らしき人が歩いてきた。

「おやぁ？　なんか話し声がしましたねぇ？　鳥海先生のクラスの辺りですかぁ？」

「…ったく、静かにしてよ！　怒られんの私なんだから！！」

鳥海先生がちょっとずれた怒り方でクラスの生徒に注意したが、その後も周りでの小声がたくさん聞こえていた…。

――教室

ホームルームでは皆の自己紹介をしてから、今後の軽い予定の説明をして終わった。この学園で初めての放課後だ…購買に行かなきゃ。

「よっ、転校生！」

お気に入りの飲み物を仕入れてくれるよう購買へ言いに行こうとしたら、顎鬚を生やした野球帽をかぶった男子に呼び止められた。

「なぁんだよ、そんなマジビックリした顔すんなって！」

「なんか用？　これから購買に行かなきゃいけないんだけど…」

「ちょっ…反応冷てぇなあ。まあ、いいや。オレは【伊織順平（いおりじゅんぺい）】。ジュンペーでいいぜ」

ん？ああ、自己紹介か。ジュンペーね。おぼえた…よし、購買へ行こう。

「実はオレも、中2ん時、転校でココきてさ。転校生って、色々と1人じゃ分かんねえじゃん？　オレが最初に声かけなきゃってな。へへッ、イイ奴だろ？　…っておい！　人が喋ってんのに行くなよ！」

「え、ジュンペーだろ？おぼえたって。乳酸菌飲料を購買に仕入れてもらわないといけないから、じゃあね」

「おいっ、お前の中でのオレの優先度は乳酸菌飲料以下か！」

購買へ向かおうとする自分を必死に順平が引きとめていると、少し呆れた表情で岳羽さんが近づいてきた。

「……」

「お、ゆかりッチじゃん！　またおんなじクラスになれちゃうとは、思わなかったぜ」

「まったく、相変わらずだね…誰彼かまわず、馴れ馴れしくしてさ。ちょっとは、相手のメーワクとか、考えた方がいいよ？」

「な、なんだよ。ただ親切にしてるだけだって」

「ふうん、なら、いいんだけど」

ジト目で順平をみていた岳羽さんがこっちへ向き直った。僕の方を見るときは普通の笑顔なんだな。

「なんか…偶然だよね。同じクラスになるなんてさ…」

「そうだね」

「うん、驚いた…」

どことなく嬉しそうに岳羽さんが話していると順平が話しに加わってきた。

「おいおい、オレだって同じクラスだぜ？　なんか扱い違わねーか！？　てか、実際、訊きたいことあんだけどさ。お二人さん、仲良く一緒に登校したんだって？　詳しく聞かしてくれよー」

やらしい笑い方をしながら訊いてくる順平。よくみると、クラスに残っていた他の生徒も聞き耳を立てているようだ。

「えっ、ちょっと、やめてよ！　彼とは、たまたま寮が一緒ってだけ。何でもそういう話に結び付けすぎだっての。てか、そもそもウワサになるの早すぎ…不安だな…そういうの」

そういうウワサが本当に嫌いなのだろう。どことなく暗い表情になった岳羽さんだったが、急に声の音量を下げて話しかけてきた。

「…ちょっと、いい？　あの事とか…言ってないよね？」

「うぇ？　あの事？？」

「ちょっと！　昨日の今日でしょ？　昨日の夜の事…ホント、言わないでよ…？」

なんのことだか本当にわからない…拳銃か？似合ってたと思うけど

な。まあ、どれのことか分からないけど黙っていよう…ん？順平がボケッとした表情でこっちをみてる。

「……」

「な、なに？」

「き、昨日の夜って…え？」

そう言われ急に顔を赤くする岳羽さん。すると岳羽さんは少し焦りながら口を開いた。

「ちょっ…なんか誤解してない！？　とにかく！　彼とは昨日会ったばっかで、ホント何でもないの。まったくもう……じゃ私、弓道部の用事あるから行くけど、変なウワサ広めないでよ…？」

そういうと、岳羽さんは荷物をまとめて教室を出て行った。そして少しすると、その出て行ったドアの方をみていた順平がこっちに向き直り話しかけてきた。

「別に、ウワサなんてどって事ないじゃん。なあ？　チョイ、自意識過剰っぽいよな…でも、スゲーじゃん転校生！　初日から浮いたウワサなんてよ！　あいつ、アレでケッコー人気あんだぜ？　一目置いちゃったよ、実際！　しかも、公子ッチとも仲良げに歩いてたらしいじゃん。うちの学え「私がどうかしたー？」うぉあ！　き、公子ッチじゃん。びっくりさせないでくれよ…」

どうやら順平の声が本人にも聞こえていたらしく、公子がやってきた。そして急に話しかけられた順平は驚きすぎて1メートルほど飛び退いた。そんな順平のようすを見ていると、やってきた公子が苦

笑して謝りながら話しかけてくる。

「ゴメン、ゴメン。でも、ゆかりも言ってたけどそういう噂ばっかり話してるのはよくないよ？」

「なに言ってんだよ。うちの学園の可愛い部門2トップ『岳羽ゆかり』『草摩公子』って言ったら他校の生徒にまで知られてるくらいだぜ？　転校初日から二翼をおさえるたぁ、やるな転校生！　うらやまけしからんぜ！　って思ってもしょうがないだろ？」

「可愛い部門ってなんのランキングよ…。それより、はい湊君。言ってたお茶。半分しか残してなくてごめんね？」

「いや、良い。ありがとう」

そう言って公子から受け取ったペットボトルのお茶をゴクゴクと飲み干す。

「そう？　ならいいけど。それより、一緒に帰ろう？」

公子にはただ一緒に下校しようと誘われただけなのだが、その瞬間教室の後ろの方に居た男子たちの中に泣き出す者が現れた。

（「ちくしょう、憎しみで人が殺せたらとこれほど強く思ったことはない！」）

（「朝は岳羽さんで、帰りは草摩さんだとっ。リア充、爆発しろ！」）

（「ゆかビッチなんかどうでもいい、だがハム子を奪うのは許さん！」）

（「あ？　お前、おもてでろ！」）

……ずいぶんと騒がしくなってきたな。そろそろ教室を出よう。残っていた生徒の様子をみてそう思い、僕は帰るために荷物をまとめる。すると、やや顔をひきつらせながら順平が声をかけてきた。

「ま、まあ、とりあえず、これからいろいろよろしくな！」

「うん、じゃあね」

「ばいばい、順平」

そういって順平にあいさつをすると、僕と公子は一緒に教室を出て行った。

――校門

予定通り購買によったあと。公子に誘われた通り、僕らは一緒に帰ることにした。昨日と今朝は出会わなかったが、公子も同じ寮で自分の上の部屋らしい。

「うんうん。走ってるなー、運動部！　あ、湊君はどっか部活入ったりするの？　新規入部ってことになるから、入れるのは体験入部の期間あけ、４月末ぐらいになるけどね」

「公子は部活してるの？」

「私は、薙刀部だよ。持って歩くの大変だから道具は全部学校と寮においてるけどね。ちなみに、他の寮生だとゆかりは弓道部で、真田先輩っていう男の人がいるんだけどその人はボクシング部。そして、桐条先輩って昨日会った人いるでしょ？　あの人はフェンシング部だよ」

ふむ、自分入れて寮生は5人だったのか。それにしても、みんな運動部だな……。そんな風に考えつつ適当に返事を返す。

「そうなんだ。まあ、興味が出たら見に行ってみるよ」

「うん！　湊君は疲れるって運動嫌ってるけど、運動神経良いからどこでも活躍できると思うな」

そうして公子と、たわいもない話をしながら帰った。

――寮

「…君たち一緒だったのか。お帰り」

寮につくと桐条先輩がラウンジのソファーにいて出迎えてくれた。

「最近は物騒になってきている。夜に外を出歩くのは控えてほしい。それより今日は色々あって疲れただろう。ゆっくりと休んでくれ」

「あ、わかりました。じゃあ、公子。僕は部屋に戻るね。なんかあったら呼ぶか来るかしてね」

「うん。じゃあ、私もあとであがるけど、またね」

公子にそう告げたあと、僕は先輩にあいさつしてすぐに部屋にもどることにした。

――ラウンジ　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

美鶴が一人で読書をしているところに、ひとりの少年が上階から降

りてきた。

「ちょっと、出てくる」

「…ん？」

降りてきた少年はふと思い出したのか美鶴の前で立ち止まる。

「気付いてるか　？…このところの新聞記事」

「…ああ。それまで普通だった者が、ある日を境に、急に口も聞けない程の無気力症に陥る…最近、流行らしいな。記事ではストレス性という事で片付けられているが…」

「そんな訳あるか。絶対”ヤツら”の仕業だ。…でなきゃ、面白くない」

少年は言いながらやや不敵な笑顔をつくる。それを見た美鶴はやや苦笑しながら少年に尋ねる。

「相変わらずだな…1人で大丈夫か？」

「なに、心配ない。トレーニングのついでだ。それにあとで草摩もくるつもりらしいしな」

そういって、少年は出て行った。

「まったく、明彦のやつ…遊びじゃないんだぞ…」

――自室　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

「さてと、また見られてるな。防犯のためってんならいいけど。…だよね、廊下やラウンジならともかく個人の部屋はおかしいよね。誰かしらないけど、どういうつもりなんだか」

まあ、いまのとこ気にすることないし、もうちょい付き合ってあげるかな。

第三話（前書き）

文才なにそれ？おいしいの？っと…三話目です。

第三話

4／8（水）

朝――教室

1限は鳥海先生の現代文の授業だ。

「はい、教科書開いてー。最初の小説は…”葛西善蔵”か。今年は何だかマニアックねえ。…葛西もいいけど、先生、最近は窪田空穂にハマってるのよね。歌人としてが有名だけど、随筆もとってもいいのよ。なんで教科書に無いのかしらね。今度持ってくるから、そっちやろうね」

先生は楽しそうに自分のオススメの作家の話をしている。しかし、話を聞いていなさそうな生徒を発見し視線が鋭くなる。

「…ねえ、伊織くん！　先生の話、聞いてた？　先生が好きな作家、言ってみなさい！」

「え、えええ…っと…おい、湊。おいって！　先生、誰が好きって？　って、お前の方がおもいっきり寝てんじゃねえか！」

「もう！　どうして先生の話、聞いてくれないの！？　先生、泣いちゃうじゃないの！　もっと先生を見てよ！」

「あ、あの、あの…ご、ごめんなさい！　うらむぜ湊…！」

順平に理不尽なことを言われた気がしたが、自分は岳羽さんの背中に隠れるように眠り続けた…

昼休み――教室

「湊君、お昼一緒にたべよー！」

そう言いながら公子がお弁当を持って、近くの席の椅子をよせてきた。ちなみに、自分を基準に前の席が岳羽さん、左が順平、後が公子といった席順である。わざわざ、こなくても自分が後ろを向いて食べれば良いだけとも思ったが、いわないことにした。そうしてると、順平がカバンからコンビニの袋を取り出しながら話かけてきた。

「お、公子ッチは湊と仲良いねぇ。こりゃ、ゆかりッチも負けてらんないな！」

「だから、それやめてってば…。あんま、しつこいと怒るよ？」

「へいへい。っと、冗談なのに…なぁ？　湊は別に気にしてないよな？」

よく分からないが、順平が同意を求めてきた。しかし、話を聞いていなかったので良く分からない。なので僕は少し考えたあとにとりあえず無難な答えを返すことにした。

「よくわかんないけど、嫌がってるならやめれば？」

「うわっ、おまえ友情よりも愛情とるってのかよ。短い友情だったなぁ…」

「湊君は女の子の味方だもん。順平も変なこと言ってないで見習ったら？　…ハイ、湊君。飲み物」

順平に対し真顔でそう言いながら公子が飲み物を渡してくる。…あ、乳酸菌飲料だ。購買との交渉は上手くいったけど、入荷は来週以降だからこれは嬉しい。僕は「ありがとう」と言って公子から受け取り飲み始めると、椅子に横座りする形で振り向いた岳羽さんが話しかけてきた。

「でも、順平じゃないけど。私から見ても公子はちょっと有里君にベッタリって感じかな。ってか、昨日の時点で仲良かったけど、どこで接点あったの？　寮ではまったく会わないで学校で初めて会ったんでしょ？」

昨日今日であれこれ僕の世話を焼く公子を見ていたのか、岳羽さんが聞いてくると。公子は食べていた物を飲み込み口を開いた。

「ん？　言って無かったっけ？　私たち従姉弟なんだよ」

「え、マジ！？　んだよ、言えよ湊。昨日の時点で何人の公子ッチファンが泣いたと思ってんだよ。現在進行形でネットの学校掲示板で『【ゆか】失恋ご愁傷様ｗ【ビッチ】』とか『ハム子ちゃんは転入生にハムハムされました』とかって、失恋スレが乱立してんだぞ」

「は？　なにそれ。ってか、ゆかビッチって私のこと？」

「ハム子って…。それにハムハムって何？」

酷い名前だな…。まあ、どうでもいいか。…いや、さすがに女の子にビッチはダメだと思うけど。

「いや、オレっちに言われてもわからないけど。ファンの間では

ゆかりッチのは『おてて繋いで登校事件』、公子ッチのは『秘密の放課後デート～間接キスもあるよ～』って名前で扱われてるみたいでさ」

「おてて繋いで？　間接キス？　僕、そんなことした覚えないけど？」

本気でそんなことをした記憶がない…。順平の言葉を聞いて昨日のことを思い出していると、あることを思い出した。

「…あ」

「なんだ、湊。やっぱ覚えあったか？」

「たぶんだけどね。おてて繋いでは、岳羽さんが僕を引っ張って歩いてたことだと思う。よく考えたら駅から生徒玄関までずっと繋いでたしね」

「ちょ、あれは有里君が寝ぼけて歩かなかったからじゃない！　遅刻したらいけないからって必死に引っ張ってきたのに」

「うん、ありがとうね。岳羽さん」

笑顔でお礼を言うと岳羽さんは「わかってんならいいけど…」とか、ゴニョゴニョ言ってる。少しテレてるのか顔が赤い気がするけど、面白い人だ…。そう思っていると、今度は公子が尋ねてくる。

「で、私の方の間接キスは？」

「ん？　ああ、昨日帰る前に僕にお茶くれたでしょ。ペットボト

ルの」

「うん…」

「あれ、半分飲んでたやつの残りを僕が飲んだから、それだと思うよ」

僕がそういうと公子は「ムムム…」と、なにか考えているようだ。すると今度は、スレッドタイトルの真相がわかった順平が「なるほどねぇ…」と言いつつ話しかけてくる。

「ま、両方とらえ方に問題あるけど事実だったんだろ？　しょうがねえじゃん」

「そうだけど、実はひっかかることがあるんだよね」

「ん？　なんだよ？」

「僕が公子からお茶をもらったことを知ってるのって昨日、放課後に残ってた何人かだけのはずなんだよ。それなのにその情報がネットに出てるってことは、残ってた生徒の中にリークした人がいるってことだよね？」

「あ、じゃあ」

「うん。犯人って言っていいのかわかんないけど、書き込みした人間を見つけるのは簡単だと思うよ。僕は残ってた人を全員覚えてるからね」

そういって目だけが全く笑って無い笑顔を昨日後ろで騒いでいた集

団の方へむける。とっさに数人が目を逸らしたから牽制ぐらいにはなったかな…。そうして食事を再開すると、公子が食事を続けながらみんなに話しかけた。

「ま、いまさら犯人見つけたとこでどうにもならないから、もういいけどね。ただ、ゆかりの方のタイトルは悲惨だわ」

「まったくよ！　誰がビッチだっつーの。男の子と2人で登校したのだって初めてだってのに…」

「おお…意外と純情なんだな、ゆかりッチ…」

「あ゛？　なんか、言った？」

「…いえ、なんでもありません」

岳羽さんに睨まれた順平がしゅんと小さくなる。怒られるって分かってるのに、なんで言うんだろう？そういう性格だとしたら、難儀だな。

「…そういやぁ、湊にききてえ事あったんだ。答えづらいなら言わなくてもいいけど、おまえ右目に眼帯してっけどそれなんかあったんか？」

「ちょっと、順平、失礼だよ。有里君も別に答えなくていいから…」

確かに自分は右目に医療用の白い眼帯をつけている。子供の頃はこれでよくからかわれたっけ。でも、中学入ってからは誰も訊いてこなかったし、こんなにストレートにきかれたのも初めてだと思うと

思わずおかしくなる。

「ありがとう、岳羽さん。でも、別に気にしてないから大丈夫だよ。で、眼帯のことだったね。実は１０年前に事故にあってその時に怪我したんだ。でも、別に片目での生活にはもう慣れたし、これといった不便もないから問題ないけどね」

「そうだったのか…。悪いな、ツライ時のこと思い出させちまって。なんか、不便なことあったら遠慮なくオレっちに言えよな！」

少し暗い空気になったが、順平はすぐにいつもの調子に戻って笑って言った。自分に気をつかってわざと明るくふるまったのだろう。だが、そういった心遣いが嬉しかった。

「んじゃ、順平もゆかりも早く食べちゃおう。昼休み終わっちゃうよ！」

「ああ！　ほんとだ！　あと、１０分しかねえじゃん。公子ッチももっと早く教えてくれよ～」

「いや、あんたが喋ってばっかいたからでしょ。公子のせいにしないの」

そうして、みんなと喋りながら昼休みを過ごし午後の授業を受けた。

夜――ラウンジ

学校がおわったあと、今日は部活のミーティングがあるということで公子とは別れ、途中まで順平と一緒に帰った。そして寮に着くと既に帰っていた岳羽さんと見知らぬ男性が話しているところだった。

「あ、帰ってきました」

「なるほど…彼か」

岳羽さんに言われ気付いたのか、僕の方をみて男性が興味深そうな顔をしている。ただし、この人の視線は異質だ。初めて会った人間にするものというより、見世物や研究材料をみるような視線だ…。

「やあ、こんばんは。私は、【幾月（いくつき）　修司（しゅうじ）】。君らの学園の理事長をしている者だ。イ・ク・ツ・キ。…言いにくいだろ？　おかげで自己紹介はどうも苦手だよ。油断すると、噛みかねん…。部屋割りが間に合わなくて、申し訳なかったね。正式な割り当てが決まるまで、まだ少しかかりそうだ」

理事長の幾月という人は申し訳なさそうな顔をして笑っているが、やはり視線は同じままだ。理事長というがどうも経営者タイプには見えない。だが、理事長にはなにも経営者だけがなるわけじゃない。教師など学問をする側の人間でなる者もいるらしい、この人もそちら側なのだろうか？　そのため職業柄こういう風にものを見る人なのかもしれない。

「さてと。正式な部屋割りが決まる時期以外に何か訊いておきたい事はあるかい？」

理事長は先ほどの申し訳なさそうな笑顔をやめ、やわらかく笑いながら質問してきた。別に訊きたい事はないが…。

「では、なぜ理事長であるあなたがこの寮へ？　理事長というなら、暇ではないでしょう」

「なぜって…君を迎えるためさ。ダメかい？」

「いえ、お忙しい中、ありがとうございます」

転入生を迎えるだけにわざわざ理事長が出てくるのか？なら、新入生のいる寮の方にもいっているのだろうか。今度、順平にでもきいてみよう。

「…あ、岳羽君。そう言えば、桐条君は？」

「ハイ、もう上に」

「いつもながらマジメだねぇ。顔くらい出せばいいのに…」

理事長は先輩とはそれなりに知り合いなのだろうか、言いながら理事長は苦笑気味に少々あきれてる感じだ。だがすぐに表情を戻すと再び僕に話しかけてきた。

「あ、すまないね。他に質問はあるかい？」

「いえ、ありません。これから、よろしくお願いします」

「よろしい。じゃあ、よい学園生活を。私はそろそろ失礼するよ。君も転入したては色々と疲れるだろ？早めに休むといいよ。身体なんて、ぐーぐー寝てナンボだからね。昔、マンガにあったろう？”ぐーぐーナンボ”？…なんちゃって」

「……」

理事長のノリについていけず黙っていると岳羽さんが小さく「ごめんね…」と言って来た。別に誰が悪いわけでもないが…。ともかく言われたとおり、今日は休むことにしよう。

そして僕は自分の部屋に戻って、寝ることにした…。

――寮のとある一室　｛Ｎｏ　Ｓｉｄｅ｝

入口のドアが開き幾月が入ってきた。部屋の中には美鶴、ゆかり、公子の３人がいた。

「お疲れ様。どうだい、”彼”の様子は？」

「先ほど就寝しました。今は眠っています。理事長、やはり彼は…」

「まあ、とりあえず見守ろうじゃないか。…もうすぐ、“影時間”だ」

部屋の時計が０時をさす。世界が時を止め緑色に塗りつぶされた…

影時間――寮のとある一室

本棚やソファーにテーブルなど一般の家具の他にこの部屋には、なにかを操作するものだろうか、それなりの大きさのある機械が置かれていた。その機械と繋がっている大型のモニターには湊の部屋と寝ている湊の姿が映っていた。

「フム…平然と眠ったままか。毎晩０時になるたび訪れるこの”影時間”は、言わば、隠された時間だ。普通の人間は棺のような姿に”象徴化”して、この時間がある事すら感じない」

顎に手をあて湊の様子を観察しながらいう幾月にゆかりが尋ねる。

「じゃあ、彼は…」

「見ての通り、彼に”象徴化”は起きてない。眠ってはいるけど、彼は今、ちゃんと影時間を体験している。後は”適正”があるかどうかだ。と言うか、あるんだろうね…無ければ今頃、”ヤツら”の餌食になってる」

「餌食…ですか」

幾月の物騒なセリフにゆかりも顔をわずかにしかめる。

「とにかく、もう何日かは、こうして様子をみてみないと。桐条君、たのんだよ」

「はい」

彼らの話を聞きながら、理由があるとはいえ、クラスメイトを黙って監視することにあまり納得できていないゆかりがいう。

「隠れてこんな事して、ちょっと、気が引けますけどね…」

「いや、隠れてっていっても無駄だと思うけどね～」

ゆかりの言葉に公子も答えるが、それに疑問をもったゆかりが訊き返す。

「どういうこと？」

「ん？　そのまんまの意味だよ。先輩にも理事長にも止めといた方がいいって言ったのに監視して。たぶん、バレてますよ？　湊君、嘘とか隠し事とかすぐ見破るんです。逆に自分はそういうの上手いんですけどねー」

公子のセリフに美鶴も幾月も驚くが、まだバレている確証はないため監視を続けることにした。

――？？？　〔湊　Ｓｉｄｅ〕

どこだろうここは…白と黒のチェックの床があり、その上を飛んでいるように感じる。意識がはっきりしていないが誰かに呼ばれていることに気付く。

「さま…」

声の聞こえ方が大きくなるにつれ意識もはっきりしてくる…

「有里　湊さま…」

自分を呼ぶ声がしっかりと聞こえた瞬間目の前にドアが現れ開いたかと思うと、僕は光に包まれた。

――謎の部屋

「ようこそ、”ベルベットルーム”へ」

声がきこえ目をあけると自分は椅子に座り知らない部屋にいた。そして、目の前のテーブルをはさみ向こう側にはやたら鼻の長い老人が椅子に座っており、その左右には青い服を着た男女が立っていた。

「ほぅ、今度のお客人は少々変わった力をお持ちのようだ。申し遅れました。私の名は、イゴール。…お初にお目にかかります。こちらはエリザベスにテオドア。同じくここの住人だ」

イゴールという老人がそう説明すると、エリザベスと呼ばれた女性とテオドアと呼ばれた男性があいさつしてきた。

「エリザベスでございます。お見知り置きを」

「テオドアと申します。テオとお呼びください」

とても丁寧にお辞儀をしてあいさつしてきた2人に自分もあいさつを返す。

「丁寧にどうも。自分は有里湊です。湊と呼んでください。それより、ここはどこですか？」

あいさつを終え、ずっと疑問に思っていたことをきくとイゴールが説明を始めた。

「ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所…ここは、何かの形で”契約”を果たされた方のみが訪れる部屋…」

イゴールの前に、寮の玄関で署名したカードが置かれている…学校の書類じゃなかったのか。

「今から貴方は、この”ベルベットルーム”のお客人だ。貴方は”力”を磨くべき運命にあり、必ずや、私の手助けが必要となるでしょう。貴方が支払うべき代価は1つ…”契約”に従い、ご自身の選択に相応の責任を持って頂く事です」

「力とか言われても、よく分からないんですが…」

それをきくとイゴールは楽しそうに笑いながら答える。

「…今はまだ、それで宜しい。これをお持ちなさい」

そういってイゴールは青く光るアンティークな形をした鍵を渡してきた。

「それは“契約者の鍵”というものです。それと…エリザベス、お客人にあのリングをお渡しして」

「ハイ…こちらにございます。普段から身に着けておいでください」

そういわれ、今度はエリザベスさんから白い金属…プラチナかな？で、できた細い2本のリングが少しクロスしたようなデザインの腕輪をもらった。

「そちらの鍵とリングの説明は、“力”に目覚めてからという事で。それではまた、お会いしましょう…」

イゴールがそういうと僕の意識はまた深く潜っていった…

第四話（前書き）

話によって長さがバラバラです。今回の四話は長めですが読んでいただけるとうれしいです。それと今回から湊だけでなく公子の視点でも物語が進むようになりますのでご注意ください。視点が変わる時は｛湊　Ｓｉｄｅ｝｛公子　Ｓｉｄｅ｝｛Ｎｏ　Ｓｉｄｅ｝のように表示しますので、コロコロ視点が変わりますがご容赦ください。

第四話

４／９（木）

朝――自室

何か、不思議な夢を見た気がする…。でも、起きた時には夢でもらった契約者の鍵と白金の腕輪が手に握られていた。ってことは、現実だったってことだよな。…まあそろそろ、学校へ行く時間だし言われた通りに身に着けておくか。

そうして、腕輪は右腕に、鍵はホルダーにつけて腰に身に着けると学校へ行くことにした。

――校門

学校へ行くためラウンジに降りると公子もちょうど出るとこだったらしく、一緒に登校してきた。そうして歩いていて校門まできたとこで後ろから順平が話しかけてきた。

「おーす…眠いなー、今日も。こういうときは授業中に寝るに限る！ってね。家で寝るより、なーんかスッキリシャッキリするときあるよな？」

「…分かる気がする」

「だろ？　あの”みなぎってきた”感、いーよなー」

居眠りについて楽しそうに話す順平を公子が諫める。

「わからなくもないけど、寝るのは良くないよ」

「ええー？　公子ッチはマジメちゃんかよー。あの”みなぎってきた”感がいーのにさ。…ま、たしかに授業聞いてないから後で苦労するけどな！　あ、けど今日古文だな…イヤミ田か…。湊も古文の時間は寝ない方が良いぜ？　イヤミ田、いや江古田のことだけど、あいつネチネチうるさいからな」

そのまま順平たちに教師の評判を聞きながら教室を目指し、その後の授業は寝ながらすごした。そして、放課後は公子に誘われ、一緒に帰ることにした。

放課後――ポロニアンモール

公子にどこかによっていかないかと誘われ、さまざまな店の並ぶポロニアンモールというところにきた。

「ここ、来たことある？　放課後になると、ウチの生徒が結構いるんだ。カラオケとかＣＤショップとかあるし。あと、美味しいカフェもあるからさ。あ、クラブもあるんだけど…さすがにそれはねー」

公子が楽しそうに話しているが、自分はそれどころではない。公子の言うとおり、うちの学校の生徒が結構いるんだが、やたらと男子がこっちを見てくる。順平の言ってた可愛い部門２トップは冗談ではなかったのか…

「まあ、いまの説明はほとんどゆかりの受け売りなんだけどねー…って、どうしたの？」

「いや、なんかやたらと男子の視線が…」

「あー、んじゃカラオケ行こっか。個室なら気にならないとおもうし」

そう言うと公子は「レッツゴー！」と楽しそうに自分の腕を引っ張りながらカラオケ屋へと向かって行った。

夜――ラウンジ

カラオケ終え、夕食を食べてから寮に帰ると桐条先輩が窓の近くに座っていて出迎えてくれた。

「…君たちか。お帰り。今夜は月が綺麗だな。たまには月明かりで本を読むのもいいかも知れないな」

「あ、ただいまです。知的な雰囲気で、とても絵になりますね」

「ふふ、そうか？　ありがとう。まだ慣れない事で疲れてるだろう。早めに休むといい」

先輩と少し話すと自室へ向かった。

――自室

「今日は疲れたよ。まあ、学校自体は基本的に寝てるから大丈夫なんだけど、岳羽さんのときもだけど公子と歩いてるだけで男子の視線がとにかくキツい。順平が言ってたのもあながち冗談じゃないのかもしれないな…。ま、いいや。もう寝よう」

シャワーを浴びたあと、次の日の準備だけして今日はもう寝ることにした。

影時間――寮のとある一室　〔Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〕
また、幾月が部屋に遅れてはいってきた。

「どうだい、桐条君。“彼”の様子は？」

「…昨夜と同じです」

「フムフム…やはり興味深いね、”彼”は。たとえ影時間への”適性”があっても、初めはもっと不安定になるものだ。記憶が消えたり、混乱したりね。今までの誰とも違う。実に例外的なケースだよ」

湊という今までにないレアケースが見つかったのが嬉しいのか、幾月がとても楽しそうにいう。

「でも、なんか…これじゃモルモットみたい」

「そう言ってくれるな。彼は君と草摩君の、クラスメイトだそうじゃないか。同学年で、しかも今度は男の子が仲間になったら、君も心強いだろ？　我々には、どうしても力が必要なんだよ」

「それは、分かってますけど…」

ゆかりと幾月がそのように話していると、部屋に外からの緊急呼び出し音が鳴り響いた…

《ピピピ！》

「こちら、作戦室だ。…明彦か？　どうした？」

呼び出し音に美鶴がでて、真田との通信を繋ぐ。

『凄いヤツを見つけたっ！　これまで、見た事もないヤツだ！！
ただ、あいにく追われててな…もうすぐそっちに着くから、一応、知らせておくっ』

移動しながらなのだろう、真田からの連絡がところどころ切れながらになっているが、それが逆に現在の状況が切羽詰まったものだという事実を知らせる。それを理解したゆかりが戸惑いながら言う。

「え？　それ…ヤツらが、ここに来るって事ですか！？」

「理事長！！　今日の監視は、ひとまず、ここまでに。我々は、応戦の準備をします！！」

「…た、頼んだぞみんな！！」

そういうと美鶴たちは準備のため各々の部屋へと向かった。

――ラウンジ

《キィ…》とドアが開くと同時に真田が寮へと飛び込むかのように入ってきた。

「ハァ…ハァ…っ！」

「明彦ッ！」

逃げるときに敵にやられたのか、脇腹をおさえて顔をしかめる様子をみた美鶴が心配そうに近づく。しかし、真田はそれを手で制すと嬉しそうに顔をあげた。

「大丈夫だ。それより、凄いのが来るぞ。見たら、きっと驚く」

「面白がってる場合か！」

怪我だけでなく走って逃げていたときの疲労があるにもかかわらず、初めての出来事に嬉しそうな顔をする真田を美鶴が諌めると。上の階から幾月が階段で降りてきた。

「真田君、“ヤツら”なのか！？」

「はい。ただ、普通のヤツでは…」

《ドゴン！》

「キャッ！！なにこの揺れ…冗談でしょ！？」

真田が敵のことを説明しようとしたとき、寮の建物全体を大きな衝撃が襲う。その衝撃で思わず倒れてしまったゆかりが、あまりの事態に困惑する。さすがにこのままでは拙いと思った美鶴が皆に指示をだす。

「理事長は、作戦室へ！　岳羽、君は2階に居る彼を起こして、裏から逃がすんだ！」

「えっ…先輩たちは！？」

全員が避難すると思っていたゆかりは思わずきき返してしまう。そしてそれを聞いた美鶴がゆかりの方を見てから答えた。

「ここで何としても食い止める。明彦、連れて来たのはお前だ。責任は取ってもらうぞ。草摩も敵の殲滅を手伝ってくれ」

「了解です。ったく、先輩は余計なもん連れてきてー」

「ヤツらの方が勝手について来たんだ！　まったく…。何してる！　早く行け、岳羽！」

「わ、分かりましたっ！」

固まっていたゆかりも真田に言われると、急いで湊の部屋へと向かった。

――自室　〈湊　Ｓｉｄｅ〉

大きな物音で目が覚めてしまった。外の様子を見に行こうか…いや、まだ寮の外だが間違い無くなにかがいる。そう考えていると、廊下をバタバタ走る音が聞こえたあと、この部屋のドアが強く叩かれた。

《ドンドン》

「起きて！！　ゴメン、勝手に入るよっ！」

岳羽さんはそういうと、僕が返事をする前に部屋に入ってきた。

《ガチャ》

「悪いけど、説明してるヒマ無いの。今すぐ、ここから出るから！」

「ん、分かった。必要なものは？」

「とくに無い、とにかく急いでるの！　１階の裏口から外へ出るよっ！」

そういって岳羽さんは走り始めるかと思ったら、止まってこちらを振り返ってきた。すると左手に持っていた物を僕に渡しながら口を開く。

「忘れてた！　念のため…コレ、持ってて」

やや小型の片手剣を渡された。ふむ…銃やら剣やら持ってるとは、もしかしてこの人は武器マニアなのか？

「…じゃ、一気に行くよ！　私に付いてきて！！」

岳羽さんはそういうと、今度こそ走り始めた。

――分寮近くの道路　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

「はあっ！」

黒いスライムが仮面をつけたかのような見た目の敵、『臆病のマーヤ』を薙刀で斬り払う。これでもう十数体は倒しているはずだ。

「いったい、どれだけいるんですか！」

「俺にきくな！　それにこいつらは雑魚だ、俺が見つけた大型のシャドウが現れていない」

真田先輩も敵を倒しながら答える。だが、たしかに先輩の言うとおりこのシャドウは、よくイレギュラーとして街中に出現するので倒している。ということは、先輩の言ってたシャドウはどこにいるのだろうか？私がそう思っていると、真田先輩がシャドウを相手にしながら口を開いた。

「美鶴！　大型シャドウの反応は探知できないのか！」

新たに現れた3体の敵を相手にしながら真田先輩がきくと、聞かれた桐条先輩が焦りながら答えた。

「そんなことは、とっくにやっている！　だが、こいつらが大量にいるせいで上手く探せないんだ」

「じゃあ、もう少し減らさないといけないですね。きて……“オルフェルス”！」

そういうと私は自分の頭を拳銃型の召喚器で撃ち、竪琴を背負った長髪の女性型ペルソナ“オルフェウス”を呼び出す。無事に召喚できたことを確認すると、一気に敵を倒しにかかるためオルフェウスに命令をする。

「オルフェウス、アギで敵を焼き払って！」

そういうとオルフェウスが敵に接近し手から炎を出し、目の前の敵を焼き払う。そして、その横を私は通り抜け薙刀でさらに1体の敵を倒した。終わってから周りをみると、真田先輩も敵を倒したところだったらしく呼吸を整えている。そうして一息つきながら周囲を警戒していると、敵の位置を探っていた桐条先輩が何かの反応をとらえた。

「っ！？　大型シャドウの反応がわかったが拙い。敵の反応は反対側、寮のすぐ近くだ！」

「なんだと？！　岳羽と転入生が危ない。美鶴、草摩、急いで戻るぞ」

真田先輩はそういうと走り出したので、私たちも先輩に続いて急ぎ寮へと戻るため駈け出した。ゆかり、湊君、無事でいて…。

――1階、裏口へと続く扉　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

僕は部屋を出たあと、まわりの状況を確認しながら慎重にすすむ岳羽さんに続き1階まで降りてきた。そうして、なんとか寮の裏口の扉近くまでくると安心した岳羽さんが口を開いた。

「よし、ここまで来れば…」

無駄だと思うな。さっきまで遠かった気配が逆に近付いてきてるのがわかるし…。そんな風に考えていると電子音がなった。

《ピピピピピッ》

『岳羽、聞こえるか!?』

「桐条先輩!?　ハ、ハイッ!　聞こえますっ!」

さっきの電子音は岳羽さんの持っていた通信機の呼び出し音で、相手はどうやら桐条先輩のようだ。冷静にそれを考えていると、桐条先輩の焦ったような声が聞こえてくる。

『気をつけろ!　敵は1体じゃないみたいだ!　ここは別に大型シャドウ、つまり本体がいる!』

「マジですか!?」

『ああ、反応では寮の近くだ。急いで戻っているが、間に合うか

わからない。身の安全が最優先だが、もしものときは逃げる時間か私たちの到着までの時間を稼ぐだけでいい。任せたぞ！』

そういって通信が切れた瞬間、寮の建物を先ほどより大きな衝撃が襲う。

《ドゴン！》

「うわっ！？　ひ、ひとまず、退却！？」

岳羽さんかなりテンパってる状態だが、僕は黙ってその後ろにしたがった。

――2階

岳羽さんについて上にあがってきたとこで、今度はなにかが割れる音がした。

《パリーン》

「なに、今の！？」

物音だけで半泣きになってるけど、お化けとかそういうの苦手なタイプなのかな？まあ、どうでもいいけど…かなり近くにきてるな。そう思っていると足音ともつかない音が近付いてくるのが聞こえた。

《かしゃん…かしゃん…かしゃん》

「な、なんか来るっ！？」

岳羽さんが驚き大声をあげると、その声に反応したのか音の近付いてくる速度があがった。

《かしゃんっ、かしゃんっ、かしゃんっ！》

「屋上にいくよ。急いで岳羽さん！」

「え！？　う、うん」

僕はビビって固まってる岳羽さんに声をかけると、とりあえず周りが確認できて広さのある屋上をめざした。

――ラウンジ　〔公子　Ｓｉｄｅ〕

急いで戻ってきた私たちは呼吸を整えながら寮内の状況を確認する。

「戦った形跡はないですね」

「ああ、だが無事に逃げられたかわからない。一応、岳羽にはもしものときは力を使えと言ったが、初めての実戦で上手く召喚できるとは思えない。一度、作戦室に行き岳羽たちの居場所を探そう」

桐条先輩がそう言って歩き始めると、私と真田先輩は後ろに続いて作戦室を目指した。

――屋上　〔湊　Ｓｉｄｅ〕

急いで屋上へ逃げ足音が聞こえなくなったからか、岳羽さんは冷静さをいくらか取り戻したようだ。だが、岳羽さんは屋上について扉を閉めるなり、鍵をかけてさっきの気配が昇ってこれないようにした。けど、これって退路も断ってるよね。

《カチャン》

「フゥ…鍵も掛けたし、ひとまずは、大丈夫かな…」

そういって鍵をかけ終わり岳羽さんが安心していると。下の方から鳴き声のようなものが聞こえてきた。

《…グァーン！》

「うぇっ…！？」

岳羽さんがその声に驚いていると、なにかがゆっくり上へと近付いてくる音がした。

《ぴちゃ…ぴちゃ…》

音が止まったかと思ったら、今度は屋上の縁から仮面を持った手のようなものが現れた。そして、まるでなにかを捜すかのように手に持った仮面で周りをキョロキョロしたかと思うと、僕たちの方を向いて止まり多数の手にそれぞれ剣を持って出してくる。

《シャキーンッ！》

「嘘ッ…！？　外を昇って来たの…！？」

岳羽さんはその様子に驚いているが、まぁ、見てたんだしそうだろうね。さて、片手剣１本でどこまでいけるか……あれだけの武器を潜り抜けて一撃当てれたら奇跡だな。とりあえず、岳羽さんが逃げる時間を稼ぐとしよう。

――作戦室　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

ゆかりと湊君、それに大型シャドウの居場所を捜すため私たちは急いで作戦室にきた。先にいた理事長でも現在のそれぞれの状況が分かっていないらしく、急いで捜さなくてはならない。そうしていると、真田先輩がなにかに気付いたのかモニターの１つを指さし声をあげた。

「いた！　屋上だ！！」

そしてメインモニターに屋上の様子が映し出される。っ？！…状況は最悪だ。２人の居場所がわかったと思ったら、その場には目標の大型シャドウまでいるなんて。それになんて大きさなの、いままでの５倍以上はある。さすがの桐条先輩も大きさをみて驚きの声を出す。

「…な、なんだ、あの巨大なシャドウは！？」

「ヤツらが危ない。２人とも、行くぞ！！」

一刻も早く駆けつけようと、部屋を出て行こうとする。だが、理事長が私たちにかけた言葉は真逆のものだった。

「待て！　もう少し様子をみる」

そんな！？このままじゃ２人が…。

――屋上　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

屋上に現れた異形の敵の姿をみて岳羽さんの表情が緊張したものにかわる。すると、真剣な雰囲気のまま口を開いた。

「あれがココを襲って来た敵…〝シャドウ〟よ！」

岳羽さんがシャドウと呼んだ敵は、こちらの出方を窺っているのか、動く気配はない。そうしてると、岳羽さんが移動して僕から離れ、足のホルスターからこの前の銃をとりだした。だが、あんな生物かどうかも怪しいやつに銃など効くのだろうか…。そう考えていると、岳羽さんが小さく何か言っている。

「そ…そうだ、戦わなきゃ…”召喚”…私だって、できるんだから…」

……召喚？まあ良い。それよりどうして銃を自分の頭にあててるんだ、死ぬ気か？だが、そんな自分の考えを知る由もなく岳羽さんは引き金を引こうと指をかけた。

「いくよ…ハァ…ハァ…」

だが、そうして引き金をひこうとした瞬間、シャドウが動いた。

《ゴォ！！》

「キャアッ！」

「岳羽さん！！」

シャドウが手から放った炎が、岳羽さんの目の前の地面で爆発すると。その衝撃で吹き飛ばされた岳羽さんの手から銃が離れ、僕の方へ滑ってきた。

《カチャ》

滑ってきた銃を拾ったがどうすればいい！このままじゃ2人とも殺される。なんでこの銃には弾がこめられてないんだ。

「どうする…考えろ、考えなければ2人とも死ぬ！」

死ぬ？……岳羽さんの死を意識した瞬間、さっきの岳羽さんが吹き飛ばされたときの映像が頭をよぎり。自身の過去の記憶がよみがえ

ってきた。

「――燃えてる――大きな月の夜に――――父さんも母さんも――死んだ」

そうして、呟きながら。僕は夢で何度も見た１０年前のあの事故のときの映像を思い出す。

「２人とも――死んだ――――違う。殺されたんだ――あいつらに――――シャドウに！」

そうだ、目の前にいるシャドウよりも大きなシャドウが突然現れ、僕の両親が死んだあの事故を起こした！そして、今度はこいつが岳羽さんを殺すのか！

「そんなこと……させない！！」

敵を睨み持っていた剣を腰の鞘におさめ、銃を右手で強く握ると貰った腕輪が光り始めた。……何故かはわからないけど、なにをどうすればいいか理解できる。だが、そうしてるとシャドウは再び動き出し岳羽さんに向かって行った。それに気付いた岳羽さんが恐怖から声をあげた。

「やっ…こ、来ないでッ！！」

彼女を助ける…ただそう思いながら、左手を腕輪にかざし、カードを引き抜くように動かす。すると、僕の手には炎の絵柄のカードが握られていた。これで！そう思いながら敵の姿を捉えカードを空中に投げる。

「Ｃａｌｌ！　マハラギ！！」

そう唱えながら手にした銃でカードを撃ち抜くと。カードがガラスのように割れ、そこから炎が生み出され敵に向かってゆく。

《ガァアア》

生み出した炎が岳羽さんに向かっていたシャドウ包み、くらったシャドウは叫び声のようなものをあげた。だが、僕は油断せずに敵の様子を窺う。

「いけるか？」

炎で包まれた事で敵の動きを止めることはできたが、正直これだけでいけるかわからない…。そう思っていると、案の定、自分より近くで敵の様子をみていた岳羽さんが大声で伝えてきた。

「ダメ！　こいつ火球出してたし、炎に強いみたい！」

「やっぱりか…なら」

岳羽さんの言葉を聞くと、そういいながらもう一度腕輪に手をかざし。今度はカードを2枚引き抜いて、そのまま空中に投げて撃ち抜く。

「Ｃａｌｌ！　ガル、ブフ！」

撃ち抜かれた、2枚のカードから風と氷が現れ効果が合わさり吹雪となって敵を襲う。今度も吹雪がおさまるまで様子を見ていると、敵は死んでいないが凍って動けないようだった。なら、一気に止め

を刺す。

「よし！　これで終わりだ。Ｃａｌｌ！　マハジオ！」

止めを刺すため新たに引いたカードを撃ち抜くと、激しい雷が現れ凍ったシャドウの体を砕いてゆく。広範囲に発生した雷は砕けた敵の破片をさらに細かく砕いていく。それがおさまった後には細かくなったシャドウの体が残っていたが、それも最後には煙のようになって消えて始めた。

――作戦室　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

屋上の様子を見ているとどうやら大型のシャドウは消え去ったようだ。だが、それを見ていた先輩らは驚いているようだ。

「……！！」

「何だ、今のは…！？」

２人が無事でよかった…。先輩たちと理事長もそう思ってるみたいだけど、桐条先輩も真田先輩も表情から見ると戸惑いや驚愕と言った感情の方が強いみたい。でも、本当にいまのはなんなの？あの銃は普通の召喚器。ペルソナを呼び出すためのものでしかないはずなのに…。

「……」

理事長も、湊君が見せたさっきの力が分からないのか。顎に手をあて難しい表情で黙っていた…。

――屋上　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

敵を無事に倒し終えると、僕は思い出したように呼吸をして新鮮な空気を肺に入れる。

「はぁ…はぁ…はぁ」

…頭が痛い。腕をあげるのも面倒なほど体が疲弊しているのがわかる。まぁ、さっきの力はそれほど異質なものなのだろう。普通に生きている分には出会うことのない、まさに”異能”といったものだ。

《シュン…》

呼吸を整えつつ先ほどのことを考察していると、腕輪の光がおさまった…。いまはなにも感じない。腕輪の力を引き出すには条件があるのかもしれないな。そう考えていると、倒れていた岳羽さんが身体を起こして座ってから、戸惑い気味に口を開いた。

「終わった…の？」

岳羽さんはそう言いながら、敵が消えたことで少し安堵の表情をうかべている。でも、そういえば岳羽さんは攻撃くらってたよね。すぐに医者なり医療チームなり呼んでもらわなくては。そんな風に考えつつ扉の鍵を開けていると、後ろから岳羽さんが叫んできた。

《ぴちゃ…ぴちゃ…》

「…っ！？　有里君、まだ、動いてる…！」

「なにっ！？」

終わったと思ったら。砕けて消えかけていた”シャドウ”の破片が

少しずつ集まり、2体のシャドウとなった。そして、そいつらは周囲を見回すと岳羽さんに向かい始めた。

「逃げて、岳羽さん！」

「っ！　ダメ…さっきの攻撃で足を痛めたみたいで動けないの！！」

クソッ、もう一度、助けなければ…！助けれるならこの後どうなったって良い。僕はそうやって覚悟を決めると、頭や身体の痛みを無視して敵へと走り出す。

「うぉおお！！　はあっ！！」

走りながら腰の剣抜き、その勢いのまま1体の敵を剣で切りつける。僕はその衝撃の痛みと腕の限界で剣を握っていられず、おもわず手から離してしまった。だが、その1体が煙のように消えていくの確認すると、今度はもう1体の方へと駆けだす。

「っく！　岳羽さんに、触れるなぁあ！」

腕が使えない分、全身のばねを利用し跳び上がる。跳んだときの痛みでバランスを崩しかけたが、そのまま空中で縦に回転しその勢いを踵にこめシャドウの仮面に叩きこむ。すると、もう1体のシャドウと同じように攻撃を喰らったシャドウは消えていった。これで怪物たちは全部消え失せた…。

敵を倒し着地すると、周囲を見回して敵がもういないことを確認する。どうやら岳羽さんを無事守り切れたようだ……。体が重い…意識が遠のいていく…。

《ドサッ》

「あっ…！！　ちょ…大丈夫！？　ねえ、ちょっと！　ねえってばっ！！　起きてったらーー！！」

岳羽さんを無事に守り切りれたことを確認したあと、僕は倒れ意識は闇へとのまれていった。

第五話（前書き）

第一章は今回の第五話で終わりです。１話は日付、章はボスごとに変えていく予定です。それではおねがいします。

第五話

――ベルベットルーム
ここは確か…”ベルベットルーム”…？

「再び、お目にかかりましたな。貴方は”力”を覚醒したショックで意識を失われたのです」

自分の居場所を確認していると、声をかけられ意識がはっきりする。すると、前回と同じく目の前にはイゴールがいた。そのイゴールは僕のことを見ると興味深そうに眼を細めた。

「ほう…このような覚醒した力は初めてみました。なるほど、興味深い」

覚醒した力？先ほどのカードから出た魔法のような物のことだろうか。相手の言ったことの意味を考えていると、初めて見るものが本当に興味深いらしくイゴールは楽しそうに笑っている。相手は色々と知っているようだし、どうせ考えても分からないので僕は尋ねることにした。

「この腕輪からカードが出たんですが、この腕輪はなんですか？」

「それは”ペルソナ”という力を得るであろう、貴方への贈り物のつもりだったのですが…」

途中まで言いかけると顎に手をあて考えるイゴール。どうやら別の用途で使うはずの物だったみたいだ。そう思っていると笑顔になり続きを話し始めた。

「まあ、良いでしょう。それより“ペルソナ”とは、もう1つの貴方自身なのです。」

「もう1つの自分？」

「はい。ペルソナとは、貴方が貴方の外側の物事と向き合った時、表に出てくる”人格”…様々な困難に立ち向かって行く為の、”仮面の鎧”と言ってもいいでしょう」

戦うための力ってことか？ってことは、岳羽さんの言ってた“召喚”ってのは、自分のペルソナを呼び出すためのものだったのか。…でも、なんで銃で頭を撃ち抜く方法にしたんだ？そう考えていると、イゴールが言葉を続ける。

「”ペルソナ能力”とは”心”を御する力…”心”とは、”絆”によって満ちるのです。他者と関わり、絆を育み、貴方だけの”コミュニティ”を築かれるが宜しい。”コミュニティ”の力こそが、”ペルソナ能力”を伸ばしてゆくのです。よくよく、覚えておかれますよう」

「でも、僕はペルソナを召喚してません…」

「ええ、わかっております。…その腕輪は、先ほど申しました通り、貴方がペルソナに目覚めたとき使うはずでしたが。用途は貴方のペルソナにスキルを教えるというものでした」

スキル？あの魔法のことか…。じゃあ、あれはカードをそのまま使うんじゃなかったんだな。そんな風に相手の言葉から色々と考察していると、イゴールは最初に見せた興味深そうな表情で話しかけて

くる。

「…ですが、私たちも知らないことが起きました。それが先ほどの貴方の戦いです。カードはペルソナに目覚めた者にしか引くことはできず。また、スキルもペルソナに教えて行使させる以外に使うことはできません」

「それだと、僕は両方の条件を満たしていません」

「そうです。しかし、貴方は使う事ができた…世の中には偶然などと言うものはありません。使えたからには理由があるのでしょう」

そう言いながら、先ほどと同じく嬉しそうに笑うイゴール。確かに何かしらの理由があるんだろうが、僕には考えても分かりそうにないな。そんな風に自身の力の意味を知ること諦めていると、軽い笑顔の表情に戻ったイゴールが口を開いた。

「さて…貴方のいらっしゃる現実では、多少の時間が流れたようです。これ以上のお引き止めは出来ますまい。貴方の力の謎や、ペルソナの力を有しているかなどの話は今度お目にかかる時にでも。次回、貴方は、自らここを訪れる事になるでしょう。では…その時まで。ごきげんよう」

イゴールがそういうと僕の意識は再び深く潜っていった。

4／19（日）

……。少しずつ、意識がハッキリしてくる…どこだ…？

――病院

……白い天井が見える…自分はどのくらい眠っていたのだろう…。ぼんやりとした意識の中でそう考えていると、すぐ傍に人の気配がする…。相手は僕が目覚めたことに気付くと話しかけてきた。

「…あ、気がついた…？　き、気分は…どう？」

岳羽さんの声がきこえる。どうやら付き添ってくれていたみたいだ。そんな風に考えつつも、話しかけられたのでリアクションを返すことにする。

「知らない天井だ…」

「そういうのいいから！　はぁぁ…でも、良かった…やっと起きたよ…本気で心配したんだから…体の方は、心配無いって。過労みたいなもんらしいけど…」

僕の冗談に律義にツッコミながらも本当に心配してくれていたみたいだ。でも、お約束だと思ったんだけどな…。そう考えて身体を起こすと岳羽さんが少し言いづらそうに話しかけてきた。

「あ、あのさ…ごめんね。あの時は、何にも出来なくて…でも驚いた。…スゴいね、あの力」

「僕自身もよくわかってないんだけどね。でも、あの”怪物”はいったい…」

「…シャドウの事ね。シャドウは、私たちが戦っている敵。それと、あなたが使った力はちょっと分かんないけど、私たちが”ペルソナ”って呼んでる力が使えるスキルと似てるっていうか同じものみたい。大丈夫、後でちゃんと説明するから。ごめんね、隠してて

…」

そういいながら、申し訳なさそうな表情をして謝ってくる岳羽さん。ペルソナか…ベルベットルームでも聞いたけど、どんな力なんだろう。召喚というぐらいだから何かを呼び出すものなんだろうけど…。そうやって話を聞きつつ思考の海に潜っていると、岳羽さんがまた言いづらそうな表情に戻り話しかけてくる。

「えっと、さ…いきなりでナンだけどさ…私もね…あなたと一緒なんだ」

「…どういう意味？」

「私のお父さん、小さい頃、事故で死んじゃってさ…お母さんとも、距離が空いてて……あなたも…独りなんでしょ？」

独り…ね、どうなんだろう。伯父さんたちに引き取られる前は、独りどころか生きてすらいない感じだった。引き取られた後は、伯父さん伯母さんがよくしてくれたし、公子は僕のことが心配なのかいまだに世話を焼いてくれている。これで独りといっては申し訳ない気がする。そう思っている間も岳羽さんの告白は続く。

「実は私…あなたの身の上、色々、聞いちゃっててさ…私だけ知ってるのも嫌だし、話さなきゃって、ずっと思ってて…」

ま、盗撮ってか監視してたぐらいだし個人情報とかも調べられてるとは思ったけど、まさか岳羽さんまで関わってるとはね。状況から考えるにあのシャドウがらみの組織なのかな？そう考えていると岳羽さんが話しを続けた。

「昔さ…この辺りで大きな爆発事故があったの。父さん死んだの、そのせいらしいけど、詳しい事情、分かってないんだ…父さんが勤めてたの、桐条グループの研究所だったの。だから、ここに居れば父さんの事、何か分かるかもって、思って。学園に入ったのも、この前みたいな事やってるのも、そういうワケ。…もっとも、怖くてあのあり様だったけどね…私も初めてだったんだ…敵と戦うの。ゴメンね…私が頼りないせいで、こんな…」

初めての実戦ね。召喚も初めてだったみたいだし、ただの学生が初の実戦で全て成功させようなんて無茶な人だな。心の中でそんな風に苦笑しつつも僕はそれを表情に出さない。なぜなら、いま笑うと相手が傷つくか怒ってくる気がしたからだ。でもま、

「自分も怖かったよ」

僕の場合は相手への恐怖じゃなくて、岳羽さんが死ぬことだけどね。今度こそ苦笑を表情に出しながら言うと、それを聞いた岳羽さんは僕が自身と同じ気持ちだったことに安心したのか笑顔になる。だがすぐに、申し訳なさそうな表情に戻ると話しかけてきた。

「ほんと…？　でも、ゴメンね……それに、起きた早々こんな話。待ってる間、色々考えちゃってさ。今まで、色々隠してたし、まずは自分のこと話さなきゃって。でも、聞いてくれてありがと。誰かに話したかったんだ、ずっと。…じゃあ、そろそろ行くね。目を覚ましたって、知らせないといけないし」

岳羽さんはそういって席を立つと、部屋を出るため自分のカバンを持つとドアへ向かった。

《がらがらがら》

「…あ、あのさ。私のこと…”ゆかり”でいいからね。同じ寮生だしクラスメイトだし、その…仲良くしようね」

岳羽さんはドアをあけたまま急に立ち止まったと思うとそういってきた。そして、すぐに立ち去ろうとする。

「じゃ、じゃね」

「待って」

「な、なに？」

すぐに立ち去ろうとする岳羽さんを呼び止めると、相手はテレているのかやや顔を赤くしている。心の中でその様子を笑うと僕は本心からの笑顔を相手に向け口を開いた。

「起きた時、隣にいてくれてありがとう、ゆかり」

「ふぇっ！？」

名前で呼んだ瞬間さらに顔を赤くしたゆかり。恥ずかしいなら、自分から言わなきゃいいのに。だが、呼ばれたことが嬉しいのか真っ赤な顔のまま笑顔になると、ゆかりはだいぶ動揺しながら返事を返してくる。

「い、良いのよ！　じゃ、じゃあね！！」

そういうとゆかりは走って部屋を出て行った。ってか、ドア閉めてってよ……。そう思いつつも、しょうがなくベッドから出て、とても遅いスピードで閉まっていくドアを完全に閉めてまたベッドにも

どった。そして、ベッドに戻ると僕はタオルをかけなおしながら1人呟く。

「面白い人だな。彼女は悪い人には見えないし、部屋の監視も別の人だろうね。ま、可能性としては理事長と桐条先輩あたりかな。どうでもいいけど。でも、まだ少し眠いや。もうちょっと寝よう」

そうして僕は、眠気に抵抗せずにそのまま目をとじ、再び寝ることにしたのだった。

第五話（後書き）

これで第一章のストーリーは終りです。次に一章の『設定』を掲載したので興味があればご覧ください。ありがとうございました。

第一章　設定（前書き）

設定と書きましたが、メインは第一章の人物設定になります。あと今回の章で、鳥海先生・江古田先生・校長などの方も出てきましたが、日常パートでもあまり重要でないため入れておりません。鳥海先生は書こうか悩んだんですけどね。

人物設定の後に作品の中での括弧の使い方などの解説を入れておきますので、次読む機会がありましたら参考にしてください。

人物設定の見方ですが、

名前　（よみ）　所属
一人称：（よみ）
見た目：
設定：
戦闘：
番外設定：

以上をテンプレにしていきたいと思います。最後の番外設定ですが、これは自分が考えた裏設定のようなものです。ネタやキャラ背景など人物や章によって違ってきますので「そんな設定なんだぁ」といった感じに思ってもらえればと思います。

第一章　設定

第一章　人物設定

有里　湊（ありさと　みなと）（原作男主人公）　２－Ｆ所属
一人称：僕、自分（ぼく、じぶん）
見た目：青みがかった長めの黒髪で右目がほとんど隠れている、右目に白い医療用の眼帯、
設定：１０年前の事故で両親を失い、右目を怪我した。口数は少ないが喋らないわけではなく、状況をみて頭の中で考えているため、すぐには喋らないだけである。自分から話をすることは苦手だがお喋り自体は嫌いではない。めんどくさがりでボケッとしているが鈍いわけではなく、ＯＮとＯＦＦの差が激しいだけである。公子曰く、運動神経は良いらしい。

戦闘：実戦をしてきたわけではないので決まった武器はないが、初戦闘ではゆかりに渡された片手剣を使用した。体術もできるのか、腕が使えない状況で回転の勢いを加えた踵落としをシャドウにくらわせるなど、身体能力は高いと思われる。ペルソナの召喚はできないがカードを使うことでスキルを発動させて戦う。カードスキルは、『Ｃａｌｌ（コール）』といってからスキル名をいって発動するか、そのままスキル名のみをいって発動する。

番外設定：両親を失ったあと小学生の間は親戚中を盥回しにされていた。また、親戚には厄介者扱いを受け、外では怪我や両親がいないことでイジメのようなものを受けていた。そのため、幼かった自分の心を守るため感情が消えていった。その後は余計に不気味におもわれるようになり、さらに酷い扱いを受けるようになっていた。現在のように再び人間らしくなれたのは、中学のときから公子たち

家族と暮らすようになり、家族として愛情を受けて過ごしたからである。

草摩　公子（そうま　きみこ）（原作女主人公）　２－Ｆ、薙刀部所属

一人称：私（わたし）

見た目：落ち着いた暗めの茶髪、ヘアピンとゴムで髪をまとめている、

設定：主人公の従姉。明るく活発で誰にでもフレンドリーなため、男女問わず人気がある。ゆかりとともに月光館学園の女子ランキング（学校側には非公式）可愛い部門トップである。湊のことが大好きでなんでも世話を焼きたがる。また、それを湊も受け入れるため、さらに…と、いった感じで今のベッタリ状態になっている。だが、公子の湊に対する感情は母性と姉心であり異性に対する愛情ではない。ただし、湊に告白されたとして断ることは…多分ない。ペルソナを使い戦っていたことからシャドウに関わることは知っているよう。

戦闘：薙刀で戦う中・近距離タイプ。ペルソナは愚者・オルフェウス（女）。状況判断に優れていて、ペルソナに命令しながら自分も敵を倒しに行くなど、対複数の戦闘もこなせる。

番外設定：小学生の間は父親の仕事の関係で海外に住んでいた。帰国後、親戚の集まりにて感情がなくなっていた主人公が、親戚中を疎まれ盥回しにされているのをみた父親が親戚全員に対し激怒。その後、主人公を引き取り養子にしようとするが、主人公がそれを拒否したため養子縁組をせず親権だけを移したことで名字は違ったままだが家族になった。また、主人公の両親の遺産はほとんどが他の親戚たちに渡っていたが、法的な手続きをし、すべて主人公のもとへ返却させた。そのようなことがあり、主人公とは中学生の間一緒

に住んでいて高校で寮生活になった際に分かれて以来、長期休暇を除けば約一年ぶりの再会となった。公子だけでなく両親も湊に甘いので一家揃ってのミナコン（湊コンプレックス）である。ちなみに公子の父親の弟が主人公の父にあたる。

岳羽　ゆかり（たけば　ゆかり）　２－Ｆ、弓道部所属
一人称：私（わたし）
見た目：明るい茶髪、首にハートマークのついた白いチョーカーをつけている、
設定：父親を１０年前の事故で亡くし、現在は母親と不仲で疎遠になっている湊と同じクラスで弓道部に所属する女子。月光館学園へは父親の死んだ事故の原因を調べるためにきた。学校ではそこそこ誰とでも話すので人気は高い。公子と同様、月光館学園の女子ランキング（学校側には非公式）可愛い部門トップである。ペルソナの召喚はまだできないが、公子と同様ある程度シャドウに関する情報は知っている。
戦闘：ペルソナが召喚できるようだが、その能力や物理攻撃時の武器などは不明

番外設定：わりと面倒見のいい性格のため、だらけている主人公の世話を公子ほどではないが焼いたりしている。照れ屋。アクシデントやハプニングに弱く、突然の事態にはフリーズしてしまう。

伊織　順平（いおり　じゅんぺい）　２－Ｆ所属
一人称：オレ、オレっち
見た目：顎鬚を生やし、授業中だろうが常に野球帽をかぶっている、
設定：湊のクラスメイト。過去に自分も転校生だったため、右も左もわからないであろう主人公に声をかけるなど親切で友達思いな性格。誰とでも仲良くなる性格や、軽いノリをしているためムードメ

ーカー的ポジションだが、女子からは馬鹿・アホなやつと思われている。

番外設定：帽子は洗濯できるよう同じやつを3つもっているためキレイな状態である。

桐条　美鶴（きりじょう　みつる）　３－D、フェンシング部所属
一人称：私（わたし）
見た目：赤く腰辺りまで伸びる髪、
設定：湊と同じ寮に住む先輩。大人びた印象で彼女を「お姉様」と慕う女生徒も多い。美人でスタイルも良いため男子からの人気もすごいが、桐条グループという世界有数の大企業の令嬢であるため、おそれ多いと近付く者は少ない。真田の幼馴染である。シャドウやペルソナについても知っているらしく、湊を監視していた。
戦闘：ペルソナの能力、物理攻撃の武器ともに不明。しかし、外で敵の反応を探査できることから感知タイプの能力はある模様。

番外設定：怪我をしていた真田や、大型シャドウの近くにいる湊たちをかなり心配するなど、仲間や知り合いに対しては心配症気味。

真田　明彦（さなだ　あきひこ）　３－C、ボクシング部所属
一人称：俺（おれ）
見た目：白っぽい髪で短めの髪型、赤いベストを着ている
設定：湊とはまだ面識はないが同じ寮に住む学校の先輩。ボクシング部の部長で１６戦無敗のエース、見た目のカッコ良さもあり女子に高い人気がある。美鶴とは幼馴染で、シャドウに関することも深く知っている。戦いを楽しむ傾向があり、大型シャドウに追われながらでも状況を楽しめるほどである。

戦闘：物理攻撃はグローブをつけた己の拳。ペルソナの能力に関しては不明。

番外設定：夜はイレギュラーに現れるシャドウと戦うため頻繁に出歩いている。

幾月　修司（いくつき　しゅうじ）　月光館学園の理事長
一人称：私（わたし）
見た目：ウェーブのかかった肩より長い茶髪、メガネをかけている、
設定：月光館学園の理事長でダジャレ好き。新しくきた湊をわざわざ出迎えるなど、理事長にしてはよくわからない行動をとる。シャドウなどについてもよく知っているようで、主人公を監視していた。
戦闘：ペルソナ、物理攻撃の武器ともに不明。だが、シャドウ襲撃時に作戦室にいくように言われていたことから戦闘能力はないのかもしれない。

番外設定：懐には常にネタ帳と筆記具をいれている。

イゴール　ベルベットルームの主
一人称：私（わたくし）
見た目：かなり長い鼻をしている、ギョロっとした目をしたおじいさん、
設定：ベルベットルームの主。主人公には契約者の鍵と白金の腕輪を渡した。ペルソナに対する発言だけでなく、アイテムなども持っていることからかなり深い情報まで知っている様子。

エリザベス　ベルベットルームの住人
一人称：私（わたくし）

見た目：銀髪で短めのボブカット、金色の瞳、青色のエレベーターガールのような服を着ている
設定：丁寧な言葉で話すイゴールに仕える従者。主人公に白金の腕輪を手渡した人。イゴールと同じくペルソナなどについては詳しく知っている模様。

テオドア　ベルベットルームの住人
一人称：私（わたし）
見た目：銀髪のオールバック、青いジャケットに黒いパンツのベルボーイのような服を着ている
設定：丁寧なしぐさと言葉で話すもう一人のイゴールの従者。他のベルベットルームの住人と同じくペルソナなどについても深く知っている様子。

―この作品での括弧の使い方―
「」：セリフ
『』：通信や放送のセリフ
【】：登場人物の名前をかこむ用
〈〉：効果音や敵の鳴き声

第一章　設定（後書き）

以上が一章での設定になります。

自分がキャラに作った設定や、このキャラはこう動かすようにしているって感じのも書くか考えましたが、ネタ帳的なものを書くと後で矛盾が出てきたり、この設定のが良かったと思ったときに修正がきかなくなるので番外設定ぐらいでやめとこう思います。

この他の用語やペルソナなどについては、本作オリジナルの設定以外は書きませんので公式の方の情報をご覧ください。ありがとうございました。

第六話（前書き）

お久しぶりです。一章投稿からインフルなどにかかり、予定より遅くなりましたがやっと書き終えたので、投稿したいと思います。よければ読んでください。

第六話

４／２０（月）

朝――校門

昨日はあの後、ゆかりが先輩たちに目が覚めたことを伝えると何人もの医者がきて僕の検査をしていった。その検査も夕方ごろに終わり、問題がないので退院して良いということになった。そして、今日はずっと寝ていたためピンとこないが約１０日ぶりの登校というわけだ。

そうやって、なんか浦島太郎もこんな気分だったのかなぁ…と、頭の中で自分の状況について考えていると、後ろから順平が走って声をかけてきた。

「おーす、久々じゃん。どした？　ハラでも壊してたか？　つか、ちょと聞いてくれよー」

「普通、お腹壊したりしたら１０日も休むもんなの？　…まぁ、いいけど。どうかした？」

「実はさー……あーっと！　言っちゃダメなんだった！　今の無しな、無し。ナハハハハ」

ははっ、こやつめ。自分から言っておきながら…と、話題を振っておいて勿体ぶる順平に小さくイラッと　しながら歩いていると、後ろからゆかりが声をかけてきた。

「朝から元気だねー、ったく…向こうからでも聞こえたよ？」

「あれ？　オフタリサン、同じ寮なのに別出勤？　また噂のマトになっちゃうと…的なアレ？」

ニヤニヤしながら順平がそんなことを言うと、途端にゆかりが不機嫌そうな表情になる。

「もー、そのネタうるさいっつの。つか、この子と話あるから。バイバイ、順平」

「ええ～…」

表情通りの不機嫌さを元凶である順平にぶつけると、シッ、シッ！と動物を追い払うかのようなジェスチャーをしながら隣に並んだゆかりが話しかけてきた。

「…体大丈夫？　……湊君」

やや顔を赤くしながら名前を呼んでくるゆかり。恥ずかしいなら、名字で呼べばいいのに…。

「長い事寝てたから全快ってわけじゃないけど、問題ないよ。ゆかり」

「ふぇっ…ん、あのさ。起きて急に、って感じで悪いんだけど…今日ね、理事長からあなたに、話があるらしいの。たぶん、この前のこととかこっちの事情についての説明だと思う。だから放課後、寮の４階に来て欲しいんだ。忘れないでよ？」

「うん、了解」

そう答えると、笑顔で「ありがとっ、お願いね。」とゆかりが返してきたが、逆側のやや後方をみると驚いた表情で順平が突っ立っていた。登校中の生徒に迷惑なので、声をかけて再起動を促しておこう。

「順平、遅れるよ」

「…お、オマエら…いつから名前で呼び合う仲に…ま、まさか」

「名前？　昨日、ゆかりの方から言ってきたんだけど。それがどうしたの？」

よくわからない質問に答えると、戸惑いの表情に変っていた順平の表情が再び驚愕の表情に戻った。なんなんだ？なんか、隣のゆかりも赤い顔して俯いてるし…。

「…ゆかりッチの方から？」

「そうだって。」

案外、しつこい性格だな…と、考えてると順平が急に泣きながら走り出した。

「ゆかりッチの嘘つきー！！　会って数週間で付き合うなんて不潔ーっ！！」

なんて、捨てゼリフを残して。これを聞いた瞬間、ゆかりが顔を真っ赤にして驚きの表情をつくり、直後に怒りの表情にかえる。

「違うっ！！　なに勝手に誤解して大声で口走ってんのよっ。待て、ゴラァ！！」

順平を追いかけて行ったゆかりの後ろ姿を見て、みんな表情変えたり、走り回ったり元気だなぁと、思いながら教室に向かい久しぶりの授業を寝て過ごした。

夜――４階の部屋

学校から帰るとラウンジには誰もおらず、確か４階に来るように言われていたので向かうと、ゆかり・公子・桐条先輩の他、理事長と、見知らぬ男子が座っていた。…あれが真田先輩かな？

「遅れてすみません。いま、帰りました」

そう言いながらソファーに向かうと理事長が出迎えてくれた。

「やあ、来たね。体の方は、大丈夫そうで何よりだ。男の子だけど万一のことがあったらこの子たちにどんな目にあわされるかって、心配していたが安心したよ。退院早々ここへ呼んだのは、他でもない。君に、話さなきゃいけない事があってね。まあ、かけて」

言われた通り、空いているソファーに腰掛ける。ちなみに座席は

【真田】【桐条】

【理事長】―　テーブル　―【僕】

【公子】【ゆかり】

といった感じで、先輩たちと公子たちは二人掛けのソファーに座っている。

「あ、そうそう。前に名前だけは言ったと思うけど、彼が、真田くんだ」

「3年の【真田（さなだ）　明彦（あきひこ）】だ。よろしくな」

「2年の有里　湊です。よろしくおねがいします」

真田先輩にあいさつを返すと、これからが本題のようで理事長が話をすすめる。

「さて…いきなりでアレなんだけど…実は、1日は24時間じゃない……なんて言ったら、君は信じるかい？」

「…何の話ですか？」

楽しそうに理事長は言ってるけど、あの切り取られたような時間を知らなければ普通はどん引きすると思うな。と、考えながら答えると、今度は桐条先輩が口を開いた。

「フフ、まあそうだろうな…しかし君は、もう実際にそれを体験してるんだ」

まあ、あの時間に気付いたのは事故の少し後ぐらいだけど…この人たちは、ついこの前知ったと思ってるのかな…。

「初めてここに来た夜の事を覚えているか？　あの日…君は色々と不思議な体験をした筈だ。消える街明かり…止まってしまう機械…道に立ち並ぶ棺のようなオブジェ…薄々は感じたんじゃないか？　自分が“普通と違う時間”をくぐったこと…あれは“影時間”…1日と1日の狭間にある“隠された時間”だ」

「おっしゃってる事が、よくわかりません」

わかっててもここは知らないフリをしておく。こちらに何かを求める人間は相手が理解できていないとわかると、自分の都合のいいように物事を語るからね。嘘や誤魔化しが分かりやすくなる。

自分が話の内容を理解できていないように答えると、理事長が苦笑しながら話しかけてくる。

「気持ちは分かるよ。突然こんな事言われたって、そりゃね。でも“影時間”は、毎晩必ずやって来る。“深夜0時”にね。今夜も。そして、この先もだ」

「普通の奴は感じられないってだけだ。みんな棺桶に入ってお休みだからな。けど影時間の一番面白いところは、見た目なんかじゃない。お前も見たろ…“怪物”を。俺たちは“シャドウ”と呼んでる。シャドウは、影時間にだけ現れて、そこに生身で居る者を襲う。だから、俺たちでシャドウを倒す。どうだ…面白いと思わないか？」

楽しそうにやや獰猛な印象を受ける笑顔できいてくる真田先輩。だが、次の瞬間には桐条先輩に「明彦！どうしてお前はいつも…」と注意されていた。

「まぁ、いいじゃないか。ちゃんと戦ってくれてるワケだし。結論を言おう。我々は“特別課外活動部”。表向きは部活って事になってるけど、実際はシャドウを倒す為の選ばれた集団なんだ。部長は、桐条美鶴君。僕は、顧問をしてる」

「…はぁ」

理事長のいうことに相槌を打つと、桐条先輩がさらに続けて来る。

「シャドウは“精神”を喰らう。襲われれば、たちまち“生きた屍”だ。このところ騒がれてる事件も、殆どがヤツらの仕業だろう」

「いや、分かってるなら警察に任せればいいじゃないですか」

「残念だが、影時間に警察は機能しないな…」

桐条先輩が僕の言った事に残念そうな表情で返す。ま、普通の人間は棺桶でお休みって言ってたしねぇ…。

考えながら聞いていると、理事長が笑顔で話をすすめる。

「実は、ごく稀にだけど、影時間に自然に適応できる人間が居てね。そういう人間は、シャドウと戦える“力”を覚醒できる可能性がある。それが“ペルソナ”…あの時、君が使って見せた力はちょっと特殊みたいだけど、根っこは同じさ。シャドウはペルソナ使いにしか倒せない。つまりヤツらと戦えるのは、君たちだけなんだ」

「…よく分かりません」

まだ理解が追い付いていないように見せると、桐条先輩が足元に置いていたトランクを机の上にあげ開けた…。銀色の銃が、怪しく輝いている。

「要するに、君に仲間になって欲しいんだ。君専用の“召喚器”も用意してある。君の力を貸して欲しい」

「急に言われても…」

戸惑っているふうにしていると、真田先輩と桐条先輩がさらに続ける。

「そんなに深刻に考える事ないだろ。ちょっと付き合えよ」

「私からも是非、お願いしたい」

ずいぶんと強引な人たちだな…。そう考えていると、ゆかりが僕のフォローにまわってくれた。

「ちょっ…先輩らに詰め寄られたら彼だって困るんじゃ…そりゃ、仲間になってくれるなら、その…心強いですけど」

ナイス、ゆかり。まあ、正直どうでもいいんだけどね。公子と、こっちで仲良くなったゆかりに被害が出なければさ。…さて、そろそろ切り返そうかな。

「正直、どうでもいいです」

そう言った瞬間、嬉しそうな顔をするゆかり。Ｏｈ…なんでプラスにとったし。

「それ、拒否しないって事だよね？　ふぅ、良かった。あなた、断ると思ってた…ちょっと…心強いかも」

「受けてくれて助かるよ。分からない事は、何でも訊いてくれ」

「いや、感謝するよ、ホントに。ああ、そうそう。君の寮の割り当てだけどね。このまま今の部屋に住んでもらう事にしよう。偶然、

のびのびになってたけど、こりゃケガの功名だね、ハハハハ…」

桐条先輩に理事長まで続けて安心した表情で僕を歓迎している。…うむ、どうしたものか。さらに、理事長のいったことにゆかりが続ける。

「偶然のびのびって、あれは…調子いいと言うか…」

と、ここで今まで口を開いていなかった公子が初めて口を開いた。

「歓迎ムードになってるとこ悪いけど、ちょっと待ってくれる？」

歓迎ムードの中、1人だけ様子が違う公子に、ゆかりが問いかける。

「なに？　公子」

「湊君は『どうでもいい』とは言ったけど。参加するなんて一言も言ってないよ？　ってか、あれ活動に対しての『どうでもいい』だよね、湊君？」

「ありがと、公子。まあ、そうだね。参加に関して『どっちでもいい』って意味に取られたけど、自分には関係ないって意味の『どうでもいい』だよ」

僕がそう言った瞬間、公子以外のみんなの表情が驚きと戸惑いに変わる。苦笑気味に話していると、桐条先輩が立ち上がり言葉を発する。

「この活動がどうでもいいだと？　人間が襲われているんだぞっ！」

「別に野生動物に襲われるのと変わらないでしょう？　それに、死んでるわけじゃない」

「野生動物だと？　君もシャドウと戦っただろう。そして、入院までしておきながらアレを野生動物と同じだと言うのかっ！！」

常に冷静沈着、完璧な人間を地でいく生徒会長ってきいてたけど、感情的になりやすい人だな。こっちが素の桐条美鶴なんだろうけど。

「戦ったのは、ゆかりを守るためです。入院だって戦闘というより、魔力回路とでも言いましょうか…まあ、今まで使った事のなかった力を使ったことによる反動です。魔力の通り道をこじ開けるのにエネルギーを使い過ぎたんですよ」

僕がそう説明すると今度は理事長が口を開く。

「岳羽君を守ってくれたことは感謝するよ、ありがとう。ただ、私もだけどここにいる桐条君と真田君はこの部活で、ずっと人々を守ってきたんだ。それを、どうでもいいと言うのは流石に失礼じゃないかな？」

「ああ、そうなんですか？　言い方で不愉快になったのなら謝ります。すみませんでした」

そういって、先輩たちの方に向き頭を軽く下げる。頭をあげると再び理事長の方を向き口を開く。

「でも、失礼なのはお互い様でしょう？」

「…どういう意味だい？」

場に緊張した空気が満ちる。まぁ、僕があえて相手にプレッシャーを与えるような雰囲気を出してるからなんだけどね…

「こっちが知らないと思って、随分と自分たちの都合がよくなるようリードしてたじゃないですか」

「都合がよくなるようリード？　そりゃあ、仲間になってほしいんだ。なるべく、良い答えがもらえるように喋るさ。それがなにかいけなかったのかい？」

不思議な事を言うといった感じの表情で理事長がこたえる。

「公子、この人たちに僕が嘘を見抜く事は伝えた？」

「ん？　一応はね。あと、自分は隠し事上手いってことも」

そういって笑いながらこたえる公子。この中で場の雰囲気にのまれてないのは公子だけだな…。ヤバいと思ったら止めてくれるだろうし、理事長たちにはもう少しお付き合い願おう。

「そう。じゃあ、少しぐらい強く言っても大丈夫かな…。理事長と先輩方は僕に仲間になって欲しいと言いましたが、嘘をついたり隠し事をするのが仲間なんですか？」

「有里、お前なにをいって「話は最後まできいてくださいよ、真田先輩」」

途中で口を挟んでくる真田先輩の言葉を遮り、続ける。

「影時間でしたっけ？　そんなのかなり前から知ってますよ。まあ、“影時間”という呼び方は初めてききましたけど。でも、シャドウという存在はこの街にきて初めて知りました。だって、他の街にはいませんでしたから」

そう。影時間は事故の少し後から知っていたが、シャドウなんてここ以外では遭遇したことがなかった。

「そこで質問なんですが。桐条先輩、シャドウはこの街以外では目撃されているんですか？」

「いや、目撃情報というか出現が確認されているのは、ここら辺だけだ。理事長の方ではどうですか？」

「私の方でも同じだよ。だが、それがどうしたんだい？」

こちらの質問の意味が分からないのか、聞き返してくる理事長。

「出現エリアがわかっているのに何故なにもしないんです？　人々を守るのが目的なら、お金がかかってもここら辺を封鎖すればいいじゃないですか。ここは“桐条”の土地でしょう？　これが疑問点1」

わざわざ見えるように右手の人差指だけを立てながらいう。

「次に、理事長は戦えるのは僕たちだけと言いました。ここで自分たちと言わないってことは、つまり、理事長はペルソナを召喚できないってことですよね？」

「…ああ、私は影時間への適性を高め動いたりする事はできるようになったが、ペルソナは呼び出せないよ」

…やっぱりか。そして、適性強化も可能っと。

「そうですか。では、やっぱりおかしいですね。僕は小型の方ですがシャドウを剣と蹴りで倒しました。これはシャドウには物理的な攻撃が効くということです。適性を高め、影時間での行動が可能になるなら、どうしてそういった人間を増やさないんです？　大型はペルソナでしか倒せなくても、小さいシャドウは物理攻撃で倒せるんだから、人海戦術でもとればいいじゃないですか。これが疑問点の２です」

僕の話を聞くうちにみんなの表情が暗くなっていく…公子はニコニコこっち見てるけど。

「出現エリア、出現時間、執れる対策…これがわかってなんで動かないんです。ってか、シャドウが悪い者って言い切れないんじゃないですか？　影時間なんて普通に生活してる人には関係ない。逆に自分たちみたいな方がイレギュラーだ。これって、もしかしたら僕たちが彼らの世界を荒らしてるって可能性もあるんじゃないですか？」

そういった瞬間、ゆかりがハッとした表情になるが構わず続ける。

「まあ、仮にシャドウが僕たちの生活を脅かす敵としましょう。で、それと戦うってのに『面白いと思わないか？』とか『そんなに深刻に考える事ないだろ。ちょっと付き合えよ。』ってどういうことです？　コンビニに行くんじゃないんですよ？　ずっと戦ってきたなら、シャドウとの戦いの危険性なんてわかってるはずだ。そう

いう人の発言とは思えない軽率さです。仲間を殺す気ですか？」

そういって真田先輩の目をしっかりと見る。もちろん、軽蔑したような目で。

「そ、それは…すまない。俺の言い方が悪かった…だが、シャドウとの戦いを軽視したことなど一度もない！」

自分の発言の軽率さを謝罪し、こっちをしっかり見てくる真田先輩。まあ、被害がないならどんなスタンスで戦っても良いと思うんだけどね。

「まだあるんですよ？　理事長」

「…なんだい？」

「なんで、この前シャドウが襲ってきたとき助けをよこさなかったんです？　あのとき、僕はかなり無理して戦ってたんです。無事に最後まで戦えたのが奇跡ってぐらいに」

…奇跡なんてこの世にないけどね、そう思いながら続ける。

「戦えないなら、作戦室っぽいこの部屋にいたはずだ。戦ってた場所は屋上、ドアを出てすぐです。気付かないはずがない。通信で知りましたが、公子と先輩たちが外にいて僕たちのとこに向かってたなら、僕たちの場所を知るためにここに一度はきたはずだ。場所がわかったのに来ないってことは、他の敵に苦戦していたか誰かに止められたってことだ。…どっちですか？」

「後者だよ。…理由はもちろんある。君の様子がおかしかったか

らね、その時迂闊に行くのは危険だと判断したんだ。だが、助けにいかなかったのは事実だね。すまなかった」

そういって頭を下げる理事長。

「謝るのは僕ではなく、ゆかりにです。組織の新人1人に民間人の避難を任せて、新人と民間人が危険になったのに助けをよこさないなんて普通じゃありませんよ。下手したら死体が2つ出来てるところです」

そういうと今度はゆかりが急に青ざめた顔をする。ま、トラウマになってもおかしくないよね。

「部下や仲間を大切にしない組織になんて入りたくありません。丁重に、お断りさせて頂きます」

僕がそういって頭をさげると、桐条先輩が慌てた様子で言う。

「数々の事、本当にすまないと思ってる。だが！「いいんだ、桐条君」」

先輩の言葉を理事長が遮る。ふむ、少しは現実的に考える冷静さがもどってきたかな？

「しかし、理事長！　われわれには！」

「分かっているよ。…だが、こちらの不義理が招いた結果だ。確かに、この戦いは命を失う危険があるものだ。それを信用できない人間と一緒になんてできる訳がない。そんなのを強制することなんてできないだろ？」

「しかしっ……わかりました。すまなかったな、有里。寮に関しては、また後日になるが移れるよう手配しておく。話に付き合ってくれてありがとう。今日はもう休んでくれ」

そういって頭をさげてから、席を立つ先輩。ここでまた、公子が口を開く。

「反省してるみたいだし、これぐらいで良いんじゃない？」

「そうだね。まあ、いまはまだ信用できないけど先輩のこととか別に嫌いじゃないしね」

笑いながら答える僕に、桐条先輩が話がよくわからないと言った表情で尋ねてくる。

「何の話だ？」

尋ねる先輩に対し、少し勿体ぶってこたえる。

「んー、先輩。ビジネスの話でもしません？」

「ビジネス？　なんの事だ？」

ころころ変わる話題について来れてない桐条先輩。…この人は発想の柔軟性がたりないなぁ、なんて思いながら話を続ける。

「ビジネスったらビジネスですよ。シャドウ狩りのね」

「仲間になってくれるのかい？」

話をきいてた理事長が聞いてくる。

「仲間じゃありません、あくまで力を貸すだけです。もちろん、それ相応の報酬を要求しますが」

「要するに傭兵ってことか？」

真田先輩も話に加わってくる。

「そんな感じです。金額についてはこれから決めますが、とりあえず前のシャドウとの戦闘は初回サービスってことで２０万で良いですよ」

「２０万！？　ぼったくりだろう！」

真田先輩は驚きと怒りを混ぜたような表情で言ってくる。自分は怪我したくせに…。

「見殺しにされかけたんだから、本当なら賠償金も取りたいのにサービスしてるんですよ？　それに、あれで怪我してる人よりは使えると思うな」

意地悪く言うと、真田先輩が立ち上がって反論してくる。

「この怪我は、偶然見つけた適性者候補を逃がすために囮として行動していて負ったものだ！　断じて油断や、戦闘中に楽しんで負ったものではない！」

プライドの問題なのだろう、傷を負った理由が人を逃がすためとい

う名誉の負傷と言いたいらしい。そこに公子の鋭い言葉が突き刺さる。

「いや、怪我してたら一緒でしょ」

「草摩、お前はどっちの味方なんだ！」

「は？　未来永劫、湊君の味方ですけど？」

真田先輩の問いに、何言ってんだこの人といった感じで即座に答える公子。公子の口撃（言葉による攻撃の事）はまだ続く。

「ってか、みんな普段の雰囲気から勘違いしてますけど、湊君って強いですよ？　いま、この場のみんなが全快だとしてまとめて相手しても勝っちゃうくらいに」

「っな！？」

流石にその言葉は予想外だったのか、黙ってしまう真田先輩。ってか、話作んないでよ公子。勝てないよ、たぶん…そう思っていると復活した真田先輩が呟くように言った。

「…完治したら勝負だ、有里」

と、言った。正直、やりたくない。忘れることを祈ろうと思う。そして、脱線した話を戻す。

「で、桐条先輩…まぁ、理事長でも良いですけど、どうします？」

「…わかった。契約しよう、君の力を貸してくれ」

「交渉成立ですね。報酬の設定や、契約についての決り事…まぁ、それ破ったら契約は取り消させてもらうってやつですが。そういうのは後日、話し合いましょう」

話が終わったので、召喚器を手にとって席を立つ。

「では、これ貰っていきますね。あと、最初の２０万は今週中に現金でお願いします」

「わかった、準備しておく。これからよろしく頼む」

そういって部屋に戻ろうとしたが、思い出したのでドアの前で立ち止まり言っておく。

「先輩、男子に興味があるのか知りませんが盗撮は犯罪ですよ。じゃあ、ゆかり、公子。おやすみなさい」

「っな!?　ち、違う！　私はっ」

まだ何か言っていたが無視して部屋に戻り寝ることにした。

影時間――自室

…ベッドでウトウトしていると、誰かの気配を感じた…。目をあけると、最初の日に僕を出迎えてくれた少年が居た。

「やぁ、元気かい？」

「いや、寝てたのに元気もなにもないと思うんだけど…何処から入ったの？」

そう尋ねると、嬉しそうに笑いながら少年がこたえる。

「僕は、いつだって君の傍に居るよ…フフ…もうすぐ…“終わり”が来る。何となく思い出したんだ。だから、君に伝えなきゃと思って」

「“終わり”って？」

「“全ての終わり”だよ。…って言っても、実は僕も、ハッキリとは分かんないんだけどね。それより、とうとう“力”を手に入れたみたいだね。それも、ちょっと変わった“力”みたいだ。何にでも変われるけど、何にも属さない“力”…それはやがて“切り札”にもなる力だ。君のあり方次第でね」

“力”って、スキルのことか。切り札ねぇ…。

「初めて会った時のこと、覚えてる？　交わした約束は、ちゃんと果たしてもらうよ。僕はいつでも、君を見てる。たとえ君が僕を忘れててもね…じゃ、また会おう」

少年は消えてしまった…。返事くらい聞いて帰ればいいのに。まあいい、久しぶりの学校で疲れているので、僕はもう一度寝ることにした。

第六話（後書き）

次は第七話ではなく、第六話　ａｆｔｅｒということで湊が去ったあとの別視点になります。一章の設定で湊と公子の過去の設定をみてないと何の話かわからない部分があるやも知れませんので、少し見てから読むことをオススメします。

第六話　ａｆｔｅｒ（前書き）

というわけで、第六話の続きのａｆｔｅｒエピソードになります。

第六話　ａｆｔｅｒ

――作戦室　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

湊君が去った後、私たちはまだ部屋に残って話をしていた。

「ね？　湊君には嘘とか通じないっていったでしょ？」

「ああ、草摩の言う通りだったよ。しかし、とんでもないな。彼は。」

彼の去り際の一言で酷くやられたらしい桐条先輩が苦笑気味にいう。

「たしかに。仲間っていうか戦友？のようなものになってくれるのは、ありがたいが完全に彼のペースだったね。桐条君があんなに慌てているのは初めて見たよ。」

こちらも少し疲れた様子の理事長が笑顔でいう。

「ってか、公子の話ってホント？　普段の彼をみてると強そうには見えないんだけど？」

「ああ、同感だ。俺は、自分が最強なんておこがましいことは言わないが、それなりに実力はあるつもりだ。なのに、この校内のオールスター級のメンツで相手して勝てないだと？　冗談にしか思えん。」

ゆかりと、真田先輩が私の言ったことが信じられないのか尋ねてくる。

「完勝は無理だろうけど、たぶんイケるんじゃないかな。」

「なんだ多分か。草摩、情報はある程度の信憑性があるものを持ってこい。」

ちゃんとした情報ソースがないことから、信じない真田先輩。

「いや、割りとマジですよ？　昔ってか中学時代、雨の日にちょっと喧嘩みたいなことしたんですけどね。なんていうか、湊君が荒れていた時期がありまして。道場帰りに友達から湊君が路地裏に連れてかれてくの見たって聞いて、急いで路地裏のひらけたとこに駆けつけたときには。湊君のまわりに１０人以上のいわゆる高校生の不良さん達が倒れてたんですよ。」

「嘘でしょ！？　中学生の男子１人で高校生１０人以上って勝てる訳ないじゃない！」

流石に信じられないらしく、ゆかりが大きな声を出す。まぁ、私も目を疑ったけどね…

「ホントだって。相手はバットとか持ってたみたいだけど、へし折れててさ。拳を血だらけにして、雨の中その真ん中で立ってたの。」

「信じられないな…。だが、それがなぜ彼と君の喧嘩の話に繋がる？」

あまりの話に、いまいち信じ切れていない様子の桐条先輩が問うてくる。

「あぁ、なんかそれ見たら頭の中、カッとなっちゃって。」

「有里がやられていたなら分かるが、圧勝しているのにカッとなる要素がどこにある？」

私の行動の意味がよくわからないらしい真田先輩がきいてくる。

「…泣いてるように見えたんです。環境が変わって戸惑ったんでしょうね。自分の居場所とか、そういうのが当たり前にある生活なんて知らなかっただろうし。」

…そう、やっと人間らしさを取り戻し始めた頃、居心地が良いのが逆に怖くて、あえて辛い環境にいきその後に自分の無事を確認することで生を実感する。一度死んで、再び人間になったからこその戸惑いなんだと思う。

「自分を辛い場所に追いこんで、無事だったときに生を実感するだなんて悲しいじゃないですか。私たち家族なんですよ？　怖いなら怖いって、悲しいなら悲しいって言えばいいのに、なんで独りで泣いてるんだって思ったら、薙刀持って突っ込んでましたよ。」

ははっ、と自嘲気味に笑いながら言う。そうして理事長が真剣な顔で続きを促す。

「それで、どうなったんだい？」

「え、私が負けましたよ？　初めてでしたよ、本気でいったのに勝てなかったなんて。」

「本当か？　君は当時すでに超高校生級だったと聞いたんだが…」

桐条先輩がいう通り、当時中学2年の時点で大会に出るときは高校生のクラスにエントリーして優勝したりしていた。それが、片目が眼帯で見えない、既に何人もの高校生を相手にしていた素手の中学生男子にボコボコにやられたのだ。

「やられた私が一番信じられなかったですよ。横から不意打ちで突っ込んだんですけど、最初に全力の一撃を頭に振り降ろして当てて、湊君が前に倒れるように体勢を崩したんです。そのまま柄の方で裏拳みたいな感じで後頭部狙おうとしたら、視界が反転してたんですよ？　最初、何が起きたか分かりませんでした。で、次の瞬間脇腹に衝撃があって吹き飛ばされました。」

「どうしてそんな事になったのよ？」

状況が上手く想像できないらしいゆかりが、説明を求めてくる。しょうがないなぁ…

「私の初撃で体勢崩した湊君は、そのまま勢い乗せて逆立ちしながら踵を私のこめかみに当ててきたの。で、そのまま起き上がっての回し蹴りってかんじ。これ全部が数秒の間の出来事だよ？　自分が攻撃したはずなのに、気付いたら自分が吹き飛んでるとかフィクションの世界にしかないと思ってたよ。」

笑いながら言う私に、ゆかりが複雑な表情で続きをきいてくる…そんなに湊君の昔話が聞きたいのか？

「その後は？　それで終わりってわけじゃないでしょ？」

「まぁね。正直、キツかったけど起き上がって、今度はスピード重視の小技で挑んだけど、当たらない当たらない。むしろ、途中で受

け流されてお腹に膝喰らったよ。」

「うわ、容赦ないね彼…」

話を聞きながら想像したのか顔をしかめる理事長。

「いや、私も本気でいってますから下手に手を抜いたら、それこそ死にますよ。」

「まぁ、そうだが女子相手には十分すぎるだろ。俺には真似出来ん。草摩だと気付いてなかったのか？」

「ちゃんと、最初から気付いてたみたいですよ。だから、あれで結構手加減もしてたと思います。」

「こめかみ、脇腹、お腹に膝で手加減もないでしょう…」

真田先輩の疑問に答えると、それをきいてゆかりが呆れた顔をする。

「それで、膝はなんとか踏ん張って耐えたけど、また回し蹴りされたの。今度はなんとか薙刀でガードしたんだけど、ガードごと吹き飛ばされたよ。で、さらに拳で追撃してきたから、ガードで拳潰そうと思ったら、薙刀を拳で折られちゃって思いっきりお腹にパンチ喰らっちゃったんだ。」

「中学生でなんちゅう死闘をしてるんだお前たちは…」

今度は真田先輩まで呆れた顔をする。まあ、確かに普通のレベルは超えてたかな…。

「武器を破壊されて、そのあと草摩君はどうやって戦ったんだい？」

「いえ、そこで終わりです。さすがに立てませんよー。」

理事長にきかれ、苦笑しながら続ける。

「その後は、湊君に背負われて家まで帰りました。湊君も私の初撃で頭から血流してたし、私もボロボロだったので帰ったら両親にビックリされて、そのまま病院に連れてかれました。2人ともそのまま入院。医者に『どうやったら姉弟喧嘩でここまでなるんだ』って怒られましたよ。両親は私たちが納得してるなら何も聞かないって言ってくれましたし、始めての姉弟喧嘩はそれで終了です。」

楽しそうに私がそういうと、げんなりした顔で真田先輩が口を開く。

「…その話が本当なら、俺は草摩にも勝てる気がせん。」

「お医者さんの言う通り、姉弟喧嘩どころかガチの殺し合いレベルじゃない…どんな中学生時代よ。」

ゆかりも同じくげんなりしながら言ってくる。

「でも、その後からどんどん仲良くなったんだよ？　なんていうか、ちゃんと甘えてくるようになったっていうか。」

「フム、お互い本気でぶつかり合い向き合ったから、そういった関係を築けたのかも知れないな。」

さすが、桐条先輩。まさに、その通りだろう。あれで本当の家族になれたんだし終わり良ければってやつだよね。

「まぁ、草摩君にとってハッピーエンドなら良いが、話の通りなら、確かにまとめてかかっても勝てないね。ギリギリ草摩君が少し対抗できるくらいかな？」

「…いえ、幾月さん。俺もこの怪我が完治すれば、特別メニューを組んで有里に勝ちにいきますよ！　それまでは有里の戦力の分析だな。」

そう言いながら急にやる気を出した、真田先輩は立ち上がると自室へと帰っていった。そして私たちもお開きと言うことで、自室に戻り寝ることにした。

第七話（前書き）

あ、うちの湊は漫画とかアニメとか物によりますが、大好きっ子です。公子が子供らしさを与えるために見せたりしたんですけどね。

第七話

4／21（火）

朝――校門

朝、1人で学校へ向かっていると昨日と同じく、ゆかりが後ろから話しかけてきた。

「湊君、おはよ。」

「おはよう、ゆかり。」

「昨日はその…ありがとね。真田先輩もケガしちゃってるし、私たち女3人だけになって不安だったんだ…」

男子が一人でもいると安心なのか、僕が加入した事を喜んでくれるゆかり。

「まぁ、報酬の分くらいの働きはするから任せて…なんてね。」

そんな風にアニメの傭兵のようなことを冗談でいってみる。少し楽しい。

「ふふっ、うん。一緒に頑張ろうね。それにしても、先輩のケガ、いつ治るんだろうね。シャドウにやられて少しあばらを痛めただけだって言ってたけど…」

「あばらなら3日あればいけるんじゃない？」

「いや、普通ムリだから！」

なんて、くだらないことを言いながら一緒に教室へ向かった。

放課後――教室

授業終了のチャイムの音で目を覚ますと、ゆかりが話しかけてきた…

「あー、ねむ…マジ、寝ちゃうかと思った…」

背伸びしながら言うからお腹見えてますよー。なんて、帰る準備をしながら話をしてると教室のドアが開き桐条先輩があらわれた。

「ちょっといいか。今日、帰ったらラウンジに集合してくれ。全員に伝える事がある。詳しい説明はその時にな。じゃあ、伝えたぞ。」

《ガラガラー》

はや、桐条先輩は用件だけ言うと去って行った…。

「はやいね。用件だけだったし…」

「私たちと違って、忙しいんでしょ？　生徒会とか、そういうのでさ。」

そうして話していると、順平にも聞こえたのか寄ってきた。盗み聞きはよくないよ順平…。

「え…あれ？　ゆかりッチって…桐条先輩のこと嫌い？」

「別に…嫌いじゃないけど。そ、それより帰ろ、湊君。」

ゆかりに誘われたので一緒に帰る事にした。途中、部活のミーティングのため一緒に帰れないと公子が泣きついてきたり、男子たちに殺気のこもった目で見られたりしたが無視して帰ることにした。余談だが、なぜか殺気軍団に嫉妬部隊（ジェラシー）として順平が参加していたのでローキックをお見舞いしておいた。

――巌戸台駅前商店街

ついでだから少し寄り道して帰ろう、という事になり商店街の方にきた。ぼーっと、前を見て歩いていると、ゆかりが話しかけてきた。

「さ、さっきの…別にホントに、嫌いとかじゃないからね？　桐条先輩のこと……」

「大丈夫、わかってるから。お父さんのこともあって、少し苦手なだけでしょ？」

「う、うん…順平って、ホンッット、いらんことばっか言うよね！　しかも言うこと為すことオヤジでしょ？　歩くセクハラかっつの、マジで。去年もさ～…」

自分が来る前の歩く猥褻物（？）にまつわる“ここだけの話”を交わしながら、仲良く帰った…。

夜――寮の４階、作戦室　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

寮に帰り着替えてから作戦室に向かうと既にゆかりと先輩たちが座っていて、桐条先輩に出迎えられた。

「おかえり。」

「あ、ただいまです。遅れてすみません。」

そうやって、あいさつを返す。あれ、湊君は?と、考えていると真田先輩が口を開く。

「待ってたぞ。紹介しておこう。」

「え?」

急に紹介しておこうと言われ、ゆかりが思わず聞き返す。だが、それに答えず真田先輩がなかなか出てこない人物を急かす。

「…おい、まだか?」

「ちっと待って、重っ…」

そう言いながら大きなトランクとともに呼ばれた人物が部屋に入ってくる…あれ?もしかして…

《ガチャ…バタン》

「テヘヘヘ。どうもっス。」

「えっ、順平っ!?…なんであんたが、ここに!?」

「2年F組の伊織順平だ。今日からここに住む。」

驚くゆかりを無視して真田先輩が順平の紹介をする。いや、紹介されなくてもクラスメイトなんで知ってますけど…未だに状況についていけてないゆかりが更に驚きの声をあげる。

「今日から住むって…うそっ！？　何かの間違いでしょ！？」

「この前の晩、偶然見かけたんだ。目覚めてまだ間もないようだが、彼にも間違いなく“適性”がある。事情はだいたい話してあるが、俺たちに力を貸すそうだ。」

「ああ、逃がすために名誉の負傷を負ったのって、順平のことだったんですね。」

私がそう言うと真田先輩が「…っく」と悔しそうな顔をする。人の話を聞かないで話をすすめる罰だ。そうやって勝ち誇っていると、ゆかりが順平に問いかける。

「“適性”があるって…それ、ホントなの！？」

「オレ、夜中に棺桶だらけのコンビニでマジベソかいてたらしくてさ。つか、正直あんま覚えてないんだけど、見られてたみたいで…ハッズカシー！　でもまー、なんつーか、最初のうちは仕方ないんだってさ。記憶の混乱とか、アリガチらしいんだよね。キミたち、そういうの知ってた？」

「私たちは多少あったけど、湊君は全くなかったよ。」

「まーた、庇っちゃって。ま、これペルソナ使いの常識だから。」

そこで庇う必要なんてなくない？まあ、もういいけど。と、考えていると順平が話を続ける。

「…けどさ、正直言うと驚いたぜ？　オマエらも、”そうだ”って

聞かされた時はさ。…でも、知ってる顔が居て良かったよ。1人じゃ、不安だったしな。ま、オマエらも、オレっちが仲間んなって、ホントんとこ、嬉しいだろ?」

順平の質問に、顔をやや引き攣らせながらも笑顔を作りゆかりが答える。

「え?　ま、まあね…」

「宜しくな、湊。」

「湊君ならこの部屋にいないよ?　でも、仲間が増えると頼もしいよ!」

私がそういうと順平が嬉しそうにいう。

「へへッ、だろ?　でも、アイツはどこにいんだ?」

「あ、眠いっていうから部屋においてきちゃった。私、呼んでくる!」

そう言いながら、ゆかりが部屋を出て行った…部屋って湊君の部屋だよね?ゆかりの部屋じゃないよね?私も行ってこようかな…と考えていると真田先輩が話を続けていた。

「そういうワケだ。よろしく頼んだぞ。よし…だいたい戦力も整ってきたな。これで、始められそうだ。」

そういったところで丁度、理事長が入ってきた。

《ガチャ》

「よし、全員…あれ？　有里君と岳羽君はまだのようだが、まあいいか。だいたい全員来ているようだね。ちょっと聞いて欲しい。」

言いながら理事長は、みんなのとこにきてソファーに腰掛け話を始める。

「我々の擁するペルソナ使いは、長い間、桐条君と真田君の２人だけだった。けど、最近とんとん拍子に仲間が増えて、今や有里君も含めると６人にまで増えてる。…そこでだ。今夜０時から、いよいよ“タルタロス”の探索を始めようと思う。」

「タル…？　…なんスか、ソレ？」

理事長が言った“タルタロス”という言葉に聞き覚えがないのか順平が首をかしげるので、聞いてみる。

「“タルタロス”だよ。てか順平、本当に見た事ないの？」

「ハテ…？」

「見てなくても、不思議はないさ。なにせタルタロスは、影時間の中”だけ”に現れるからね。」

本当に知らない様子の順平に、理事長が説明する。

「影時間の中だけ…？」

「シャドウと同じってことさ…面白いだろ？　それに、俺たちのスキルアップにもうってつけの場所だ。あそこは、言ってみればシャ

ドウの”巣”だからな。」

真田先輩がまた面白そうとか言ってる。湊君にまた怒られるよ?だが、順平には逆効果のようでシャドウの巣と聞いて委縮している。

「お、おお…シャドウの”巣”っスか…」

「て言うか、先輩…その名誉の負傷の体で行くんですか?」

私がそういうと桐条先輩が「フフッ」と笑いながら話し始める。

「明彦はケガが治ってない。同行はしてもらうが、探索は無理だ。」

「…分かってるさ。」

私の皮肉が効いたのか、それとも桐条先輩に探索の許可がおりなかったのがツライのか悔しそう答える真田先輩。それをみて何故か順平がやる気をだした。

「先輩の分はオレがバッチリ、カバーしますって!」

「なんか、不安だな…」

本当に不安だな。いまのとこ戦えることが分かってるのって、2年じゃ私と湊君だけだし…そう考えていると、桐条先輩が理事長はどうするか尋ねた。

「理事長は、どうされますか?」

「僕はここに残るよ。…どうせホラ、ペルソナ出せないしさ…」

いや、湊君が言ってた通り生身でも戦えると思うんだけど…まあ、いいか。

そうして、ゆかりに引っ張られながら上がってきた湊君と合流して６人でタルタロスに向かうことにした。

――月光館学園　正門前　{湊　Ｓｉｄｅ}

ゆかりに起こされて４階に行くと、タルタロスとかいうとこに向かうことになっていた。ってか、なぜか順平も増えてた。…どうでもいいけど、と考えていると学校の前に到着した。

「は…？　ここ…？　え、どういう事っスか？　ここって、学校じゃ…」

「見てれば分かる。ほら、０時になるぞ。」

順平が不思議がっていると、真田先輩が言葉を遮る。そして０時になった…

影時間――

《ゴゴゴゴゴゴ！！》

影時間になると同時に奇妙な形をした巨大な塔が地面から現れた。

…たけのこ？

「これが”タルタロス”…影時間の中だけに現れる”迷宮”だ。」

「メーキューって…なんなんだよ、それ！？　オレらの学校、どこいっちまったんだよ！？」

順平があまりの事態に、桐条先輩にさらに説明を求める。

「影時間が明ければ、また元の地形に戻る。」

あぁ、そういや影時間だけのものか。なら安心だな、そう僕が思っても順平はまだパニクっている。

「こんなデカい塔が、丸ごと”シャドウの巣”って…てか、オカシイっしょ!?　なんだってウチの学校んトコだけ、こんな…」

「……。」

…ふぅん。ま、分からない事は話せないってことにしておくかな。黙っている桐条先輩に順平が問いかける。

「先輩達にも…分からないんスか?」

「…ああ。」

「きっと色々あるんでしょ…事情が。」

ゆかりがそう言って順平を納得させると、真田先輩が口を開いた。

「分からなきゃ、調べればいい。ここを本格的に探索するのは、俺や美鶴にとっても今夜が初めてだ。ワクワクするだろ?　どう見たって、ここには絶対何かある。影時間の謎を解く、カギになるものがな。」

またこの人はワクワクとか言ってるけど、昨日のこと本当に反省してるのか?そう思っていると桐条先輩が真田先輩を諫める。

「明彦。意気込むのは勝手だが、探索はさせないぞ。」

「う、うるさいな…何度も言うな。」

でも、これが“タルタロス”か…ともかく、中に入ることにした…。

――タルタロス内部入口

中に入ると目の前に大きな階段があり、その右側には変な装置のようなものが置いてあった。

「おお…中もスゲェな…」

「でも、やっぱ気味悪い…」

中の様子に関心している順平に対し、何度かここまでは来ているゆかりが気味が悪いと感想をもらす。変な感じだけど、個人的には好きなデザインだな…と、思っているときに桐条先輩が話しかけてきた。

「ここはまだ”エントランス”だ。迷宮は、階段の上の入り口を抜けてからさ。」

「まずは慣れてもらう。今日の探索は、お前たち４人だけで行け。」

真田先輩のセリフに驚くゆかり。

「えっ!?　新人だけでですか!?」

明らかに新人だけの状況を不安がっているゆかりに、桐条先輩がい

う。

「深入りさせるつもりはない。それに、必要な情報は、私がここから通信でナビゲートする。」

「それとな、現場でのチーム行動を仕切る”リーダー”を決めておこうと思う。」

「リーダー？　それ、つまり探検隊の隊長!?　ハイ、ハイハイッ！　オレオレッ!!」

真田先輩のリーダー決めに立候補する順平。だが、先輩は別の人間を指名した。

「……有里。お前がやれ。」

「…え？」

「なんでっスか!?　こいつ、隊長っぽくないっしょ？」

なぜか僕が選ばれ、順平が不満をあらわしている。だが、そこにゆかりの嬉しくないフォローが入った。

「あのね、彼はもう実戦経験者なの。」

「えっ…マジ？」

なら、公子でもいいんじゃ…。そう考えていると、真田先輩が説明を進める。

「確かにそれもあるが、選んだ理由はもっと簡単だ。まず1つ、順平。それに岳羽もだが…ペルソナの召喚、草摩のようにちゃんと出来るか？」

「も、もちろんッス！　バッチリ、決めますって！」

「私も、大丈夫です。」

言われた2人が力強く頷く。そして、さらに真田先輩が続ける。

「相手はシャドウだ。出来なきゃ話にならないぞ。」

「はい、分かってます。」

もう一度ゆかりが頷く、

「よし、では2つ目の理由だ。っていっても、理由と言うより役割の問題だな。順平、お前の武器はなんだ？」

「え？　武器っスか？　太刀っつーか、大型の剣とかっすね。」

真田先輩に訊かれ順平が答える。

「では、続いて草摩・岳羽・有里の順でコイツらの武器を言ってみろ。」

「えーと、公子ッチが薙刀。ゆかりッチが弓で、湊が…なんだ？ってか、オマエだけ手ぶらじゃねぇか！？」

失敬だな。僕だって最低限の荷物くらい持っている。

「いや、ちゃんと財布とケータイぐらいもってるよ。」

「なんの役に立つんだよ!?　先輩、やっぱリーダー変えましょうよ。」

「…っく。いや、まあいい。説明に戻るぞ。順平がいま言った通り全員武器が違うな？　と、言うことは戦闘での役割も違ってくるということだ。」

そういって真田先輩が戦闘時の役割について説明を続ける。

「有里は置いとくが、順平は近距離、草摩が中・近距離、岳羽が長・中距離といった感じだ。さて、リーダーともなると戦闘中に全体をみて指示を仲間に出すことになるが、近距離型のお前がイチイチ遠くにいる岳羽に指示を出してられると思うか？」

「…思いません。」

「そういうことだ。これで見ると、消去法でリーダーは美鶴・草摩・有里の誰かになるんだよ。逆に近距離型の俺とお前は攻撃重視のエースアタッカーってわけだ。わかったか？」

「エースアタッカーすか!?　うぉー!!　燃えてきたー!!」

順平はエースアタッカーという響きが気に入ったのかやる気を出している。でも、まだ僕はリーダーやるって言ってないんだけど…

「よし、じゃあ行って来い。準備はいいか、リーダー？」

「だってさ、リーダー？」

そういって公子に問いかける。しかし、僕の淡い希望は次の瞬間、無残にも砕け散った。

「がんばってね、リーダー！」

「フッ、みんなやる気があって頼もしいな。」

桐条先輩までそう言って笑う。なんて、人の話をきかない人たちだ…まあ、言われたとおり、まずは中に入ってみよう…

…？エントランスの端のほうに、奇妙な扉がたたずんでいる…。そっちを見ているとゆかりがきいてくる。

「湊君、どうしたの？」

「え？　いや…」

手元の、“契約者の鍵”が光っている…吸い寄せられるように、扉の鍵穴に差し込んだ…。

《ギィ》

そうして僕は中に入っていった…

――ベルベットルーム

少し歩くとまたドアがありそれを開けるとベルベットルームに辿り着いた。そして彼らの前まで進むと着席を促されたので座る事にした。

「…お待ちしておりました。いよいよ、その力…使いこなす時が訪れたようですな。今から挑まんとする“塔”は、果たしてなぜ生まれ、何の為に存在しているのか…残念ながら現在の貴方では、まだ答えを導く事はお出来にならぬでしょう。だからこそ、進まれる前に知っておかれるが宜しい。ご自身の”力の性質”というものをね。」

「力の性質？」

あの少年も力がどうとか言ってたっけ…。考えていると、イゴールの話は続く。

「貴方の力は、他者とは異なる特別なものだ。言わば、数字のゼロのようなもの…からっぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る。私どもが調べたところによりますと、本来、貴方はお1人で複数の”ペルソナ”を持ち、それらを使い分けることが出来るのです。だが、今の貴方にはそれができない…原因は分かりませんが、その代わり能力だけは使うことが出来るようです。」

…ふぅん、つまり何らかの要因が僕の本来の力を封印してるのか。ま、スキルが使えれば十分だと思うし問題ないかな。そう思っているとイゴールの話がもうすぐ終わるようだ。

「さて…いよいよ私も忙しくなりますな。次からはご自分の意思で扉を開けて、ここへ来られるといい。その時こそ、私の本当の役割…貴方への手助けについて、お話ししましょう。では、最後にこれをお持ちください。」

そういって、イゴールから白金の腕輪に良く似た1本のリングを渡される。

「それを腕輪にあてて下さい。そうすれば、これからはカードだけでなくジェムやミックスレイドも腕輪から取りだす事が可能になります。これらはカードと違い召喚器で撃たずとも、魔力を通すだけでスキルを発動させることができます。ただしその分、魔力の消費が激しくなるのでご注意を。」

言われた通りリングを腕輪にあてると、光につつまれ光が消えると腕輪が3本のリングが絡み合い1本の腕輪になっているデザインに変わっていた。

「カードもですが、使えるスキルはどうやら貴方の強さによって増えていくようです。もっと力が使えるようになりたいならば、強くおなりなさい。では、再び見える時まで…ごきげんよう。」

そういって別れる前に、前に考えていたことを訊いてみる。

「ねぇ、テオ。テオって何か道具を作ったりってできる?」

「道具…と、申しますと?」

「うん、剣とかでも放てるような剛弓とかって作れないかなって。」

そう言うと少し考えて、テオが口を開く。

「作れるとは思いますが、それ程の強さですと貴方のような普通の人間では引く事ができないと思いますが、それでも宜しいですか?」

「うん、お願い。」

僕が依頼すると、テオドアが右手を胸にあてながら深く頭を下げながら言った。

「かしこまりました。次に貴方がこられるまでには用意しておきます。希望の色はございますか？」

「じゃあ、黒でお願い。代金とかはどうすれば良い？」

「お代は結構です。私だけ貴方に何もお渡ししていませんでしたから、プレゼント、ということにさせて下さい。」

そういって、整った顔を楽しそうに歪める。なかなか、お茶目なのかもしれない。

「わかった、ありがとう。今度何かお土産持ってくるよ。じゃあね。」

「はい、またお越しくださいませ。」

そういってドアに向かうが、出ていく前に、もう1人の住人にもあいさつをしていくのを忘れない。

「エリザベスもまたね。お土産もってくるから。」

そういうと、声をかけられると思っていなかったのか少し驚いた顔をした後、笑顔で

「はい、お待ちしています。」

と言ってくれた。そうして僕は部屋を出て行った。

――エントランス

ドアから戻ってくると心配そうな顔をしたゆかりと公子に話しかけられた。

「ちょっと、大丈夫？」

「疲れてるなら、今日は待っててもいいんだよ？」

他の人にはただボーっとしていたように見えるのか、と考えていると順平にも声をかけられる。

「どうしちゃったワケ、ボーっとしちゃってサ？」

「いや、なんでもないよ。」

「まさか、寝てたとか！？　オマエは、あれか。国会で居眠りする大物政治家か？　まっ、ここはひとつ、オレっちに頼ってもらって構わないけどな！」

楽しそうにそういう順平。ま、戦闘になれば誰にも頼るつもりはないんだけども…。

「はいはい。何でもないならいいの。とにかく行こう。」

「湊君、これ入る前に渡しとくね？」

ゆかりにそう促され、４人で階段を上っていく。入る前に公子に持ってきて貰ってた、片手剣を受け取るのを忘れない。その後ろでは順平が元気になにか言ってる。

「よっしゃ、行くぜ！　そんで、オマエより活躍して明日からオレがエースアタッカー兼探検隊のリーダーだ！」

無茶だろ…そうおもいながら、ゲートをくぐっていった…

――タルタロス内部

中に入ると元が学校とは思えない光景だった。壁や床に血のようなものが大量に付着していたり、壁の一部が大きく崩壊していたりなど、グロ耐性があまりない人では長時間の滞在は無理だろうといった光景だった。

「いよいよ、こっから本番か…」

「なんか、すぐ迷いそう…」

「期待してるよ、リーダーさん♪」

順に順平、ゆかり、公子の発言だが1人だけテンションがおかしい気がする。そう思っていると、通信がはいった。

『4人とも、聴こえるか。』

「おっ、桐条先輩！？」

急に声が聞こえた事に驚く順平。

『ここからは、私が声でバックアップする。覚えておいてくれ。』

「えっ…中の様子が分かるんスか？」

『私のペルソナの特性でな。実は、このタルタロスは、中の構造が日によって変わってしまう。私もそちらに加わりたいところだが、外からのサポートが欠かせないんだ。』

「まぁ、たぶん大丈夫だと思いますけどね～」

「うわっ、ますます迷いそう…」

未だに変なテンションで公子がこたえる。逆にゆかりはネガティブ気味だ。そして、桐条先輩からの通信が続く。

『ところで、いま君らの居る場所は、既に、いつ敵が出てもおかしくない。敵のレベルは低いはずだが、注意して進めよ。習うより慣れろだ。』

「うっす！」

「了解です。」

「がんばります！」

またもや、順平、ゆかり、公子の順だ。関係ないけど、みんなの返事をきいていて自分だけ返事をし忘れた…。通信が切れると、ゆかりがため息を吐きながら小さな声で言った。

「ったく…なんか勝手だなぁ…」

「気持ちはわかるけど、いこ？」

「え…？　聞こえちゃってた？」

気まずそうにする、ゆかり。とりあえず、みんなで進むことにした。

『では、行動開始だ！　今日はここ２Ｆで実戦を行う。フロアにうろつく敵シャドウを片付けてくれ。』

先輩からミッションスタートの合図があり探索を始める。みんな口々に、

「桐条先輩ってどこまで私たちのこと見えてるかな…」

とか、

「ここ、ホントにオレらの学校の中なのか…？　この辺、実はオレらの教室の前辺りだったりしてな。」

などと言っていたが、順調にすすんでいく……ん？あれは…

『気をつけろ！　前方に「突き穿つ死翔の槍（ゲイボルク）！！」シャドウ反…応…だったんだが、消えた？』

「うぉい！？　あぶねぇな、なに急に叫んで剣なげてんだよ湊！」

僕が持っていた剣を急に投げた事に驚いた順平が怒ってくる。…なんで？

「え、いや『突き穿つ死翔の槍（ゲイボルク）』だよ？」

そういうと、ゆかりまで不思議そうな顔をしてきいてくる。

「ゲイボルクって何？」

「え、だから『突き穿つ死翔の槍』でゲイボルクだって。知らない？」

「「はぁ？？」」

あ、ハモッた。ってか、後ろで爆笑してる公子がうるさい。

『おい、有里。そっちでなにかあったのか？　急にシャドウの反応が消えたぞ？』

「大丈夫ですよ先輩。湊君が剣を投げてシャドウを倒しただけですから。」

やっと話せるようになった公子が先輩の質問に答えてくれる。

『剣を…投げた…？』

状況が理解できないのか先輩がきき返してくる。今度は自分でちゃんと答える。

「あ、はい。敵がいたんで剣を投げて倒したんです。」

『そんな事が可能なのか？　君たちのいる場所から３０m以上離れていたんだぞ？　というか、その暗さでそこから見えたのか？』

「見えるっていうか、まあ見えるのもそうですけど。ナビなくても構造とか敵の位置っていうんですか？　そういうのだいたい、わか

るんで。」

そういうと向こうからの通信が止む。

――エントランス　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

湊からの通信を聞いていたエントランスの２人。

「なぁ、明彦…」

「……なんだ。」

美鶴に声を掛けられ、真田がこたえる。

「彼はなんなんだ？」

「知るか、俺に聞くな。」

さらに考えながら美鶴が真田に尋ねる。

「地形に敵の位置情報だぞ？　生身でそんな事が分かるのか？」

「だから俺にきくな！　というより、できるわけないだろうがっ！」

「そうだな…特殊なのは彼の方だよな？」

「ああ。それは断言できる。」

真田の答えにより一応の落ち着きを取り戻した美鶴は、再びサポートに戻る。

――タルタロス内部　{湊　Ｓｉｄｅ}

先輩から通信が途切れている間、暇なので投げた剣をとりに行っていると、通信が復活した。

『すまない、取り乱した。』

「あー、気にする事ないっスよ先輩。こんなのできる湊と、見て驚かない公子ッチの方が特殊なんですから。」

なんか失礼なこと言われているが、気にしないでおこう。

「私たち特殊だって。お揃いだね～♪」

……次、変な事言ったら部屋に呼び出そうかな。

「で、先輩。探索ってなにすれば？」

『ああ、とりあえず君たちは大丈夫そうだから、岳羽と伊織に実戦慣れして欲しいんだ。だから、そのフロアでシャドウとの戦闘を繰り返し、ある程度慣れてきたら戻ってきてくれ。』

「了解です。」

『あぁ、あとさっきのゲイボルク？というヤツは使わないでくれ。あれでは戦闘訓練にならない。』

えー…と、思ったけど。まぁ、投げた後とりに行くのめんどくさいしな。

「わかりました、突き穿つ死翔（ゲイボルク）の槍は封印ですね。まあ、宝具をバ

ンバン使ってると相手のマスターとサーヴァントに真名がばれますしね。」

「湊君、ノリ過ぎだよー。みんなは『Ｆａｔｅ』知らないんだからさ。」

「え、そうなの？　先に言ってよ。さっきのはゲーム・漫画・アニメのどれでもいいけど『Ｆａｔｅ』って作品に出てくるランサーってキャラの技なんだよ。」

そう説明するとゆかりがさらに質問で返してくる。

「え？　あれ、なんちゃって技なの！？」

「なんちゃって技が何かは分からないけど、真似して力に任せて剣を投げただけだよ？」

何かのスキルと思っていたらしく、驚いているゆかり。すると聞いてた順平まで、話に加わる。

「能力じゃねぇって、なんだよそれ！？　んじゃ、オマエのペルソナって何ができるんだよ？」

順平の質問に今度は公子が答える。

「先輩から聞いてないの？　湊君は適性があるだけでペルソナ召喚できないよ？」

「はぁ！？　ちょ、聞いてないっスよ真田サン！！」

『うるさい！　言っても言わなくてやる事は同じだ。さっさと、探索に戻れ！』

逆ギレカッコ悪い…と思いながらも、探索を再開することにした。

探索中――

『近くに階段がある。確認できるか？　階段は上の階層に進む唯一の手段だ。今日は先の領域への探索は許可できないが、頭の片隅には入れておいてくれ。』

探索中――

『前方に新たなシャドウ反応だ！　敵からアタックを受けると戦闘が不利になる。常に狙って先手を取るように心掛けてくれ。』

戦闘中――

『こいつは【臆病のマーヤ】。火が弱点のシャドウだ。弱点を狙って戦ってみてくれ。』

探索中――

『曲がり角に敵がいるようだ。死角から不意打ちを喰らわないよう慎重に近付いてアタックを仕掛けるんだ。移動の際は、マップを見て、常に周囲の状況に注意するようにしてくれ。』

探索中――

『前方にシャドウ反応だ。体力は大丈夫か？　消耗が激しいようなら、戦闘を開始する前にスキルやアイテムで回復した方がいい。戦いの前には常に状態を確認する習慣を付けてくれ。』

探索中――

『…ム？　いつもは無尽蔵に湧いてくるシャドウが今日は湧いてこないな……まあいい、一通りの実戦経験はできたので今日は引き上げよう。このフロアに脱出ポイントがあるはずだ。脱出ポイントからエントランスに戻ってくることができる。丁度、フロアの敵も居ないことだ。手分けして探した方がいい。仲間に散開命令を出し、脱出ポイントを発見しろ。ただし、散開中に仲間が君から離れすぎると、スキルやアイテムの使用などができなくなる。その点だけは注意してくれ。』

そんな感じである程度、探索を続けていると桐条先輩がそういってきたので別れて探索をすることにした……んだけど

「なんで、みんなついてくるの？」

そう、散開を指示したのに3人とも僕についてきていた。

「え？　だって、どうせ湊君の行く方に脱出ポイントがあるんでしょう？」

キョトンとした表情で公子がきいてくる。

「わかってんのに、わざわざ逆の方に進むなんて面倒な事したくねぇだろ。」

順平とゆかりも同じか…。一応、言っておくか。

「ってか、少し疲れたから早く帰ろうよ。」

「あのさぁ、構造把握と敵の位置を察知するのだって完璧じゃないんだよ。説明できないけど、なんとなく分かるってぐらいの精度な

の。それを頼られても困るし、おまけに道具は落ちてても目視しなきゃ気付かないんだ。もしかしたらレアアイテムが入ってるかもしれないんだから、そういう取り逃しがないようにするためでもある散開をちゃんとしてもらわなきゃ困るよ。」

「あ、そうなの？　やたらアイテムスルーして進むのって湊君がいらないからだと思ってた。ただ気付いてなかったのかぁ。」

説明に納得するゆかり。まあ、いらないのもあるだろうけど、気付いてたなら教えて欲しい。

「うん、これからはしっかりしてね。じゃあとりあえず、ダッシュで逆サイドまでいってらっしゃい。ズルしたらわかるからね？　最下位の人には何か罰ゲームしてもらおうかな…」

楽しそうに僕がそういうと驚くゆかりと順平。

「なんだよ、それ!?」

「聞いてないよ!?　ってか、公子スタートはやっ!?」

流石、公子。言った瞬間にはスタートしてたな。急いで、2人も追いかけてるけど、大剣持ってる順平が最下位だろうな…なんて考えながら、脱出ポイントへ向かった。

『無事、脱出ポイントを発見できたようだな。こちらに戻ってくれ。』

「わかっ、りっ、ました…」

息をきらせながら答えるゆかり。全力で走ったのに最下位でバテバテの順平は声を出す元気すらないらしく、座り込んでいる。

「ねー、一番の人にご褒美はないの？」

と、横でしつこい人間もいるがそれは無視してエントランスへ戻ることにした。

――エントランス

《シュインッ》

転送は変な感じだったけど、無事エントランスに戻ってきたようだ…。

「よし、全員戻ったな。有里、どうだった？」

「眠いんで帰って寝たいです。」

桐条先輩にきかれ答える。そういや起きぬけで連れてこられたんだよね…眠くて当然だわ。

「フフ、緊張が解けたからか？　数をこなしていけば、じき慣れる。」

なにその素敵な勘違い。ただの睡眠欲求に慣れはないよ。そんな事を考えていると、バテから少し復活した順平が今日の戦闘について興奮した様子で語っている。

「すげぇ…自分の”力”っての、初めて実感したぜ！　でも…なんでだ？　なんか、ミョーに体がシンドいんスけど…」

「単なるハシャギ過ぎじゃないの？」

「んな事言って…ゆかりッチだってもろバテ気味じゃんか。」

順平と同じように疲労した様子のゆかりがさらに返事をする。

「バテるってか、なんか、息苦しいような…なにコレ…」

「あー、それはね。影時間のせいだよ。特殊な環境のせいで普通より体力を消耗しやすいの。ま、慣れれば普通と同じようになるよ。」

そう説明する公子。体力を消耗しやすい環境なのに、慣れれば普通になるのか？ペルソナ使いはすごいな…考えていると、みんなの報告を聞いていた桐条先輩が嬉しそうに口を開く。

「しかし、想像してたよりも、行けそうじゃないか。明彦も、うかうかしてられないな。」

「フン、ぬかせ。」

と、まだ自分の方が勝っているという風に答える真田先輩。そういや、また始まる前にワクワクとか面白いとか言ってたからな、いじめておこう。

「ボソッ（…あばら）」

「っ！？　有里、お前！」

「なんですか？　疲れたんで早く帰りましょうよ先輩。」

そういうと悔しそうな顔をする先輩。面白い人だなぁ。

「…完治したら覚えてろよ。」

そう言ってエントランスから出ていく先輩。みんなも後に続いて寮へと戻り休むことにした。

――自室

タルタロスから戻り、お風呂や着替えをすまし、寝るため電気を消しベッドに横になっている。

「今日は疲れたな…、戦闘よりもフォローの方だけど。無駄な動きの多さと、次の動作への移りの遅さが課題かな。…自分と同じ動きなんて求めないよ。人には向き不向きがあるんだから。まあ、とりあえず公子と打ち合いができるレベルにはなってもらうよ。じゃあ、寝るね。おやすみ、――ス。」

そういうと、僕の意識はすぐに深く潜っていった…

第七話（後書き）

前書きで言ったことを理解していただけたでしょうか？『Ｆａｔｅ』ってのはアダルトゲーム原作の『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』のことです。湊は公子に紹介でアニメから入り漫画とかも読んだ口なので原作はプレイしてません。ってか、エッチなものは公子が許しません。そんな感じです。

第八話

４／２２（水）

朝――校門

今日も１人で登校してると、後ろから知らない男子が話しかけてきた。

「よう。お前、有里だろ？」

「そうだけど？　ってか、きみは誰？」

「そうか、やっぱお前か。順平から聞いたぜ。岳羽さんに草摩さんと、仲いいんだってな。…ふうん。…ま、別にいいけどな。正直、“ガキ”には興味ねーしさ。急に呼び止めて悪かったな。俺、同じクラスの【友近（ともちか）　健二（けんじ）】ってんだ。確か、これから朝礼あるし、急がないとマズいぞ。」

それだけ言うと友近は走っていった。…高校生でババ専とか変わってるなぁ。そう思いながら教室へ向かうと朝礼ということなので、講堂へ向かうことにした。

朝礼――講堂

『…以上で、全校朝礼を終わります。続きまして、生徒会から、新しい役員の紹介があります。生徒会代表、生徒会長、３年Ｄ組、桐条美鶴さん。』

「はい。」

司会の生徒に呼ばれ桐条先輩が壇上にあがっていると、ゆかりが話しかけてきた。

「やっぱ先輩に決まったんだ。ま…あの人の人気、スゴいもんね。」

「なんつっても“桐条”だもんな。オーラ出てるっつーか、近寄り難いっつーか。しかも“桐条グループ”てこのガッコの母体なんだろ？」

順平がそう言ったところで、壇上にあがり終えた桐条先輩がマイクを持つ。

『生徒会長という大役を拝命するにあたり、私の所信をお話ししておきます。学園がより良くあるために1人1人の積極性は確かに大事です。しかし、全員が1つの思いを1年間ずっと切らさずおくのは、簡単ではないでしょう。大事なのは、それが途絶えても確実に回る仕組みをいかに造っておくかです。その為に、各自の中の明日への思いを確認し、今、この青春の時をどう過ごすのか。現実から逃げることなく、如何にして未来を直視するのか。全てはそれに掛かっています。私1人の視野では、見えない物もたくさんあるでしょう。充実した学園生活を共にするため、皆さんの知恵と力を貸してください。よろしくお願いします。』

所信表明が終わるとまわりから《パチパチパチ》と拍手がおこった。話の内容に驚いてる順平が今度は僕に話しかけてくる。

「すげー…なんだあれ。オマエ、意味分かった？」

「ん？　聞いてないよ…」

そう言って寝る作業に戻る。

「…そうか。フリーダムだな、オマエ…ってか、なんでオマエだけ後ろ一列占領して寝てんだよ!?　しかも、公子ッチの膝枕付きで!」

「だって、そのまま寝たら硬くて痛いでしょ?」

そう公子が答える。ってか、枕として良い高さなんだよね。

「えっ、マジ?　理由、そんだけ?　ふざけんな、枕買ってやるから代われ湊!」

順平がそういうと他の男子も同じように騒ぎ出す…そんなに枕買ってもらっても困るよ。そう考えていると、鳥海先生がやってきて騒ぐ生徒を注意する。

「うるさいわよ!　なに騒いでるの!」

「いや、先生。湊だけいろいろおかしいでしょ!」

順平が代表して抗議する。

「は?　寝てるだけでしょ?　人が話してるのに騒いでるあなた達の方が問題よ。怒られるの私だって言ってるでしょ!　分かったら、終わるまで黙って座ってなさい。」

そう注意すると先生は教師の席に戻っていった。さっきまで騒いでいた男子も注意されるのは嫌なのか、静かになった。ただ、ぼそぼそと

（「理不尽だ…」）
（「なんで有里だけ…」）
（「ちくしょう、草摩さんの太ももが…」）

と、聞こえてきたが無視して寝ることにした。

放課後――校門
今日の授業が終わり帰ろうとすると玄関先で、ちょうど帰るところだったらしい順平と会い、一緒に帰ることにした。…？校門前がやけに騒がしいと、思っていると細い女子と派手な女子が真田先輩になにか言っていた。

「来たわよ、真田先輩！」

「待ってくださぁーい！」

「……。」

真田先輩は面倒そうな表情で黙っている。すると、横にいた順平が話し始めた。

「オマエ、真田サンのこと、よく知らないだろ？　いいよなー、アレ。…ま、オレも仲間に誘われるまで、ほとんど、話したことなかったけどな。真田サンの周り、いつもあんなんらしいぜ？　全戦無敗のボクシング部主将。確かにカッコイイと思うけどさ…普通、ボクシングって、こんなキャーキャー騒がれるもんか？　マンガでも見れないぜ、あんなの…って思ったけど、オマエもデタラメなスペックで校内女子ランク可愛い部門のトップ両取りだったな。けど今から、どっか遊びに行くんかなー。」

話していると僕たちに気付いた真田先輩が近付いてきた。

「おい、お前達、これからヒマか？」

「え、あ、オレらッスか！？　ヒマっちゃヒマッスけど…それって、ひょっとして、その子たちと…」

「なら、今から“ポロニアンモール”まで、２人で来てくれ。場所は知ってるな？　そこの“交番”で会おう。いいな。」

遊びの誘いだと思っていた順平は、真田先輩の言った“交番”という待ち合わせ場所を不思議がる。

「え、交番？　あの、真田サンのお友達と、遊びに行くとかじゃないんスか…？」

「友達？　この子達のことか？　いや、名前も知らない。正直、うるさくてかなわん。とにかく、俺は先に行くからな。必ず来いよ。」

用件を伝えると、先輩は去っていった。ついでに言うと取り巻きの子も「ちょっとセンパ～イ、少しは相手してくださいよ～！」と、後を追って行った。

「名前も知らないって、１人もか！？　ありえねーだろ、普通…ま、とにかく、行かなきゃダメな流れだな…」

とりあえず、順平と“ポロニアンモール”の“交番”に向かうことにした。

――交番

ポロニアンモールに着き交番をみつけ中に入ると真田先輩がいた。

「じゃあ黒沢さん、これ戴いていきます。あと、さっきの話、こいつらの事です。」

「……。」

先輩に黒沢と呼ばれた警官は黙って立っている。すると、先輩が相手の紹介をはじめた。

「この人は【黒沢(くろさわ)】巡査。俺たちの活動に協力してくれてる。それと…まずこれは幾月さんからだ。」

「え、マジいいんすか!?」

先輩に言われ順平が封筒を受け取ると５０００円が入っていた。

「で、有里…これは美鶴からだ。」

先輩は嫌そうな顔をしてさっきより少し厚みのある封筒を渡してくる。確認すると新札の諭吉が２０人いた。それをみた順平が驚く。

「はぁ!?　なんで桐条先輩が湊にそんな大金渡すんだよ。オマエ先輩の弱みでも握ってんのか?」

「お前は知らなかったな、有里は正確には俺達の仲間じゃないんだ。傭兵と言えば分かりやすいか?　こいつの能力を金で借りてるってわけだ。」

「え、オレらタダ働きなのにこいつだけ給料出るんスか？　ズルいっスよ、そんなの。」

そういって自分と部活メンバーとの差に不満を漏らす順平。ってか、命がけなのにタダ働きなのか…こんど、公子とゆかりと遊ぶ時はなにか買ってあげよう。

「うるさい、理事長らに直接交渉しろ。で、話を続けるが手ぶらじゃ戦えないからな。ここで、準備しろ。黒沢さんは、仕事のコネで俺たちの“装備品”を揃えてくれる。もっとも、タダにはしてくれないけどな。」

「当たり前だ。世の中にタダのものなど無い。」

「分かってますよ。じゃあ、俺はこれで。」

そういうと《カシャン》とドアを閉め真田先輩は出ていった。そして、黒沢さんの方に向き直ると僕たちに話しかけてきた。

「君たちの事は聞いてる。俺の仕事は、街の治安を守る事だ。たとえそれが、どんな事情であってもな。“力”など無くても、俺にはこの街の異変は分かる。俺は、俺が正しいと信じる事をする。…それだけだ。ま…あまりモノは無いが、役には立つだろう。好きなのを買って行け。」

そういって武器や防具を見せてくれる黒沢さん。でも、僕は気になったことを訊いてみる。

「あの、黒沢さんいくつか訊きたいんですけど良いですか？」

「…なんだ？」

間があったが、答えてくれるようだ。

「この武器ってどこから仕入れてるんですか？」

「その質問には答えられない。だが、裏にはこういうのを専門に扱っている者がいるということだけは教えといてやる。」

「…横流しですか？」

そういうと、黒沢さんはピクッと反応する。わかりやすい人だな…。後ろで順平がビクビクしながら止めてくるが、無視して続ける。

「で、質問続けますね。特殊なルートで手に入れたこれらを僕らが買ったら…そのお金ってどこにいくんですか？」

少し間をもたせて静かに言うと、黒沢さんは汗をかきはじめた。これぐらいで動揺しちゃいけないでしょ。

「こ、これは相手側の信頼によって先に商品を渡してもらっているんだ。君たちの払ったお金はすぐに相手側に届けることになっている…」

「ダウト。良いんですか？　警察官がそんな嘘ついて。『俺は、俺が正しいと信じる事をする。』がそういう事でしたら、ちょっと僕はお世話になるわけにはいかないんですが…」

今度は前に真田先輩に向けたときと同じように、しっかりと相手の方をみて疑惑と軽蔑の視線をおくる。そして目の合った黒沢さんは

「…グ。」と言って、黙ってしまう。順平は半泣きになりながら引っ張ってきて「もう止めよう」とまだ言ってくるが続けて無視して口を開く。

「そう言えば…」

そう言った瞬間、黒沢さんの体がビクッっと反応するが、それを見ながら続ける。

「ここの道具って少し高いですよねー、高校生のお小遣いじゃちょっと厳しいなぁ。セールとかないのかなぁ…」

わざとらしく言って黒沢さんをもう一度見ると、両手の拳を握りしめながら口を開いた。

「わ、わかった…今日は新人の君たちに特別サービスだ。１つずつ好きなのを持っていきなさい。」

そう言った瞬間さっきまでの雰囲気を解いて笑顔でいう。

「良いんですか？　ありがとうございます。」

お言葉に甘えて、造りのしっかりした片刃のコンバットナイフを鞘ごと貰う事にした。後ろでは順平が「すみません、本当にすみません」と土下座して謝っていたが黒沢さんも「いや、いいんだ。君も選びなさい。」といっていた。面白い人たちだなぁ。とりあえず、装備ももらったし帰る事にした。

「では、ありがとうございました。今後もよろしくお願いします。」

「あ、ああ。また来てくれ。」

顔をひきつらせながらもあいさつを返してくれた黒沢さん。また来てくれって言われたしちょくちょく来ようかな、と思いながら交番からでた。

――ポロニアンモール

出て少し歩くと、順平が怒ったように言ってきた。

「５０００円かよ、しけてんよな…って、思ってたらオマエなにしてんだよ!?　警察官を脅すとか正気か!?　一歩間違えたら恐喝で捕まってたんだぞ。」

一気にまくしたてるように言ってくる順平。でも、順平も半分諦め状態になった黒沢さんのオススメで結構良さそうな大剣を貰っていたはずだ。貰っておいてなんで言うのかな?

「あー…何かメッチャ疲れたし、オレ、先帰るわ…んじゃな。」

そういって先に帰った順平と別れた後、時間がまだあったのでポロニアンモールをまわることにした。

――路地裏

フロスト人形とかいうぬいぐるみを、寮の女子の人数分とった後、ひと気のない路地に、怪しい扉をみつけた。また、手元の“契約者の鍵”が光っている。鍵を扉の鍵穴に差し込みドアをあけ中に入った…。

――ベルベットルーム

中に入るとまたベルベットルームに辿り着いた。すると、入ってきた事に気付いたイゴールに声をかけられた。

「フフ…いらっしゃいましたな。ようこそ、ベルベットルームへ。さて…では以前のお約束の通り、私の本当の役割についてお教えしましょう。私の役割…それは、“新たなペルソナ”を生み出すことです。貴方はまだお持ちではありませんが“ペルソナカード”を掛け合わせ、１つの新しい姿へと転生させる…言わば“ペルソナの合体”でございます。」

合体ねぇ。公子のオルフェウスと、ゆかりのイオを融合！って感じなのかな。なんか、面白そう。そう考えている間もイゴールの話は続く。

「あなたのペルソナ能力に秘められた可能性の数は、最大で１７０あまり…これ程の可能性を示されたお客人は、過去にはいらっしゃいません。しかも、貴方がコミュニティをお持ちなら、ペルソナはより強い力を得るやも知れない…フフ、楽しみでございますな。カードを手に入れられたなら、是非ともこちらへお持ちください。」

そうして、イゴールとの話を終えると、従者の２人に話かける。

「ごめんね、今日は偶然扉を発見しただけだからお土産を持ってきてないんだ。」

「いえ、お気遣いだけで私どもは満足でございます。」

と、頭を下げながらテオドアがいう。本当に丁寧な人だな、と思っているとテオドアが話を続ける。

「次に来るまでにと言っていたのですが、生憎まだ途中でして完成は貴方の世界の時間で2日後になりそうです。申し訳ありません。」

「急ぎってわけじゃないから、大丈夫だよ。」

「ありがとうございます。」

そういって、また頭をさげるテオドア。そういや、公子たち用のお土産だったけどエリザベスってぬいぐるみ好きかな?と、思ったので訊いてみることにする。

「ねぇ、エリザベスはぬいぐるみって好き?」

「ぬいぐるみでございますか?」

「うん、これなんだけど…」

言いながら、さっき獲った戦利品の『フロスト人形』×3をテーブルの上に乗せる。すると、エリザベスの表情が驚きにかわる。

「い、いただけるのですか?」

「え、うん。欲しいなら3体ともあげるけど。」

そういって3体ともエリザベスに手渡すと、彼女は「ありがとうございます。」と笑顔で言いながら、フロスト人形をギュッと胸に抱いた。…うむ、幸せになれよお前たち。

「じゃあ、帰ろうかな。今日はごめんね、今度くるときはちゃんとお土産準備してくるから。」

「いえ、姉はジャックフロストが大のお気に入りでして、貴方に頂いた人形は宝物になるはずです。」

テオドアがそういうと、エリザベスが慌てた様子で「テオ！」といって、彼をとめる。

「コホン…失礼しました。テオの言った通り貴方に頂いた人形は宝物にさせていただきます。ありがとうございました。」

顔を赤くしながらエリザベスがお礼をいってきた。この人たちも慌てたり照れたりするんだな…。

「喜んでもらえて良かったよ。また来るけど、今度一緒に遊びに行ったりしようね。」

そういうと、2人は少し驚いた表情になったあとすぐ笑顔になり、

「「是非。では、またのお越しをお待ち申し上げます。」」

と、2人揃って見送ってくれた。そうして僕はベルベットルームをあとにし路地裏に戻ったあと寮に帰る事にした。

夜――ラウンジ

寮に着きラウンジに入るとソファーに座っていた桐条先輩に出迎えられた。

「…君か。お帰り。ちょうどいい所に帰ってきた。聞いておいて欲しい話がある。いよいよタルタロスの探索が始まったが、探索の日取りは、ひとまず君に任せたい。明彦の復帰にはまだかかりそうだ

しな。今は君が探索のリーダーだ。この前ここを襲ったような強敵が、いつまた現れるか分からない。今のままのレベルでは、これから先、確実に厳しくなっていくぞ。探索に出る日は、私に声を掛けてくれ。行けるメンバーをタルタロスに集合させよう。…それと、準備もあるだろうから、今後は特別に、夜間の外出を許可する。じゃあ、頼んだぞ。」

「了解です。…ああ、そういえば報酬ちゃんと受け取りました。ありがとうございます。」

「いや、君のした仕事に対する正当な報酬だ。気にする事はない。だが、タルタロスの探索が本格化してきた。そろそろ、規約や報酬などについてまとめておいてくれ。ある程度は君の条件をそのままのむつもりだ。」

そういって、テーブルに置いてある紅茶に口をつける先輩。

「え、桐条先輩を嫁に欲しいとかでもですか？」

そういった瞬間、思い切り咳き込む先輩。

「げほっ、げほっ、君はなにを言いだすんだ！」

思い切り咳き込んだからか、涙目になっている先輩。すると、上からすごい勢いで誰かが降りてきた。真田先輩と公子？

「嫁ときいて飛んできました！」

「有里、貴様それが目的だったのか！」

なにこの人たち…どうでもいいか。

「試しに聞いてみただけですよ。別に結婚とか誰かと付き合うとか、今はどうでも良いんで。」

そういうと、少し冷静になる先輩たち。…なんで、逆に公子は落ち込んでるんだ。いくぶん落ち着いた桐条先輩が咳払いをしながら言う。

「そ、そうか。だが、その…私を嫁にするとかは無しにして欲しい。これでも桐条の娘だ。自分だけの体というわけではないのでな。」

「わかってますよ。僕もこれで“草摩”なんでね。じゃあ、今日はもう部屋に戻って休みます。おやすみなさい。」

そういって、自分の部屋へもどって休むことにした。

第九話（前書き）

今回はちょろっとオリキャラがでます。

第九話

４／２４（金）

放課後――教室

今日は朝から特になにもなく授業が終わった。そう言えば、まだ定員を締め切っていない運動部があるらしい。部室を探せば入部できるかもしれないけど…どうしようかな？めんどくさいし。そう思っていると、公子が話しかけてきた。

「湊君、運動部の追加入部が始まったけど部活どうするの？　薙刀部入らない？　女子しかいないけど湊君なら私は大歓迎だよ♪」

などと、犯人は意味不明の供述をしており…ってね。そんなとこマネージャーでも入れるわけないだろうに。

「いや、女子部はやめておくよ。あんまり、入る気ないけど放課後いろいろ見て回ろうかなって思ってるんだ。」

「あ、じゃあ今日いこうよ。私も部活ないから一緒にみてまわれるよ。」

そういって公子とまわるために教室を出る事にした。

――渡り廊下

「あれ、公子なんで今日こっちきてんの？」

部活棟のある方へ行くため渡り廊下を歩いてると、ロングの黒髪をポニーテールにしている公子の知り合いらしき人に出会った。

「あ、理緒。今日は追加入部見学する湊君の付き添いだよん♪」

「ああ、君が“噂の湊君”か。私は【岩崎（いわさき）　理緒（りお）】、同じ2年で公子とは薙刀部仲間なんだ。」

そういって岩崎さんがあいさつをしてきたので、自分もあいさつを返す。

「はじめまして、有里　湊です。で、噂のって僕なんか噂になってるの？」

「んー、まぁね。あの岳羽さんをオトした男子って話とか、公子が溺愛する謎の転校生とかってね。まあ、私たち薙刀部では公子の湊君好きは有名だしそれだけでも“噂の湊君”って感じだよ。」

なんということだ。平穏な学園生活を望んでいたのに変な噂が広まっているとは…。考えていると、岩崎さんが話を続ける。

「で、付き添いって湊君はどの部活見に行くか決めてるの？　私も暇だから一緒についていこうと思うんだけど。」

「え？　決めてないけど、公子のオススメ「薙刀部！」…それ以外である？」

そうきくと「う～ん」と考え始める公子。なんで、薙刀部しか考えてないんだ。

「あ、じゃあ真田先輩のボクシング部とか、ゆかりのいる弓道部は？　これなら、男子部か男女ある部活だよ？」

それなら大丈夫かな？　とりあえず、先輩のボクシング部から行ってみよう。

「じゃあ、ボクシング部からで」

「んじゃ、レッツゴー！」

そう言って走り出す公子。だが、僕と岩崎さんは普通に歩いて追った…この人も公子のことよく理解してるんだな。

――ボクシング部

ボクシング部に行くと、部屋の中は熱気で包まれていた。バシンッ、バシンッとサンドバッグを叩く人や、すばやく縄跳びをする人などやっていることは様々だった。すると、後輩を教えていたらしい真田先輩が僕らに気付いて近寄ってきた。

「よう、有里。それに草摩とその友達か？　どうした、こんなとこに来て？」

「湊君が追加入部の見学を、両手に花状態でしてまわってるんです。」

なんで、こんな変な言い方をするんだ。真田先輩は気付いてないけど、ボクシング部の人らに睨まれたじゃないか。

「そうか、羨ましい限りだ。で、なんかしていくのか有里？」

「え、なんかさせて貰えるんですか？」

「道具を試しに叩くか…あとは、試しに3Rスパーしてみるとかだな。スパーは逃げ切ればお前の勝ちってルールでいいぞ。」

楽しそうに言う先輩。んー、でもなぁと、考えていると、岩崎さんが話しかけてきた。

「どうせなら、スパーリングしてみれば？　道具叩くよりは部活のこと分かりそうだし。」

「おう、じゃあ相手は同じ2年でいいな。おい、佐々木！　追加入部見学にきてるやつの相手しろ。」

岩崎さんの言葉をきき真田先輩が勝手に準備を始めてしまった…めんどくさい。

――リング

準備を終えたらしく、リングに呼ばれる。相手はなかなか実力のある2年らしい。

「じゃあ、審判は俺がつとめる。3分間を3R逃げ切れば有里の勝ち。ダウンやKOは普通にとるぞ。」

「頑張ってねー、湊君♪」

真田先輩のルール説明が終わると公子が応援してくる。だが、相手の男子は顔を赤くして怒っているようだ。そして相手が口を開く。

「先輩、本気で彼を相手していいんですか？」

「ああ、やるからには真剣にだ。油断してやられたりするなよ？」

「まかせてください。」

そういうと、まわりのボクシング部員も彼を応援する。

（「佐々木、全力で潰せ！」）

（「２トップの他にまだ女がいたなんて許せねえ！」）

（「絶対負けんじゃねえぞ！」）

…なんだ、それで怒ってたのか。僕のせいじゃないのに。

「それじゃあ、始めるぞ。Ｆｉｇｈｔ！」

開始の合図とともに集中する。大丈夫、相手の動きは全部みえる。なかなか手を出してこない事に痺れをきらしたのか、相手が向かってくる。

「オラァ！」

そう言いながら左手で牽制のジャブを2発放ち、右手のフックで顎を狙ってくる。だが、こんなの当たるわけがない。中学のときにやった公子の方が倍は早かった。

「どうした！　逃げてばっかで、恥ずかしくないのか！」

かわしてるだけなのに相手が挑発してくる。もうめんどうだし、すぐに終わらせることにしよう。

「腹筋に力いれといた方が良いよ…」

「なに？《ドゴンッ》…っ！？　ぐほっ！！」

そういって相手が身体をくの字にしてリングに沈む。

やったことは簡単だ。ただ、近付いて通り過ぎるように左手で腹を殴っただけ。だいぶ、セーブしたんだけど、油断しすぎじゃないかな？

固まっていた真田先輩も状況を理解したのか、部員に指示をとばす。

「1年、氷嚢もってこい！　2年は慎重に佐々木を長椅子まで運べ！」

指示をきいた部員たちが慌しく動く。すると、先輩が興奮した様子でこっちにきた。

「すごいじゃないか、有里！　アイツ、あれで結構強い方だったんだぞ？　それをたった23秒しかも一撃で倒すだなんてお前、このままウチの部に入れ。一緒に上を目指そう！」

…この人、クールって思われてるけど、かなり熱血だよね。さすがにこの部はやめておこう。

「いえ、今日は他の部も見てまわるので、これで失礼します。相手の人には謝っていたと伝えて下さい。では」

そういって、リングから降りて公子たちのもとへ行くと、

「楽勝だったね～」

「ってか、湊君てかなり強いんだね。私、見た目に騙されてたよ！」

と、2人に迎えられた。公子はともかく岩崎さんもずいぶん楽しそうだけど、格闘技とか大丈夫なタイプなのかな？

「相手が油断してたから勝てただけだよ。足が止まってたでしょ？」

「それでもすごいって！　いやぁ、公子がウチに欲しがる気持ち少しわかるな。」

そう喋りながら、ボクシング部の部室をあとにし、弓道場へ向かう事にした。

――弓道場

弓道場につくと、顧問である物理の竹ノ塚先生がいた。

「どうした、有里。めずらしいじゃないか、なにか用か？」

「あの、追加入部の見学にきたんですけど。」

「ああ、そんな時期か。待ってろ。おーい、西脇！　見学者が来たから案内してやってくれ。」

先生がそういうと、西脇と呼ばれた女子がこっちに走ってきた。

「はーい。って、女子もですか？　今日は女子部の方は休みだから部長さんくらいしかいませんよ？」

「私たちのことはお構いなく。付き添いで、きてるだけですから。」

そういって笑顔で返す公子。岩崎さんも軽く頭を下げてるのを見て西脇さんも「そう?」と言ってる。そうしてると、先生が西脇さんの紹介をする。

「こいつはマネージャーの西脇。」

「【西脇(にしわき)　結子(ゆうこ)】、よろしく。2年でしょ?　タメなんだし“結子”って呼んでくれていいから。」

やや褐色な肌をしている、男子弓道部マネージャーの西脇…本人も言ってるし結子でいいか、結子があいさつをしてきたので、自分もあいさつを返す。

「2年の有里です、よろしく。」

「私は、草摩　公子。こっちは友達の岩崎　理緒だよ。よろしくね!」

と、なぜか公子が岩崎さんの分まであいさつしてる。あいさつを聞いて何か思い出したのか結子が納得の表情をしてる

「ああ、君が有里君か。噂通りだけど、今日はゆかりじゃなくて、えっと岩崎さんだね。岩崎さんが一緒なんだね。」

また噂か…なんでこの学校は転校生の噂がこんなに広まってるんだ。

「噂通りって?」

「えっとねー、なんか基本的にゆかりか草摩さんと一緒にいるって感じの。」

「いや、いないから。」

そう否定するけど、後ろで公子と岩崎さんが大笑いしてる…

「すごいね、湊君。今度は理緒まで噂になるんじゃない？」

「それは困るなぁ、有里ハーレムに入るつもりないし。」

そう言ってまたおかしそうに笑う2人。見学しにきたのに付き添う気あるのか？話が進まないので結子に話しかける。

「見学ってなにやれば良いの？」

「そうだなぁ、もう少しでみんな休憩になるからそれまでは見てて。休憩になったら試しに射ってみる？」

そういって、部員たちの方を指さす。

「素人が射っていいの？」

「うん、だから休憩中のだれもいないときにやるんだよ。あ、空いたみたい。ちょっと、みんなに言ってくるね。」

結子は上級生らしい人に事情を説明しにいき、話し終わったのか手を振っている。そっちに向かおうとすると、公子と岩崎さんが声をかけてきた。

「頑張ってね～、『錬鉄の英雄』だよ。」

「なにそれ？　まあ、頑張って当たるといいね。」

2人の応援をきき手を振って返す。結子のとこに行くと、上級生らしい男女がいた。

「やあ、見学だってね。俺は男子弓道部の主将、3年の【高木（たかぎ）】だ。よろしく。」

そういって、眼鏡の男子にあいさつされる。

「わたしは、今日は休みだけど、女子弓道部主将、3年の【秋名（あきな）】よ。よろしくね、有里君。」

今度は肩より少し短めの黒髪の女子にあいさつされたので、自分も二人にあいさつを返す。

「2年の有里です。よろしくお願いします。」

「じゃあ、さっそくやってみようか。今まで矢を射った経験は？」

「あ、ないです。」

そういうと、秋名先輩が部の練習用の弓を渡してくれた。

「じゃあ、まずは的に向かって真っすぐ立って。」

言われた通り、正面に立つ。すると今度は高木先輩から指示がとぶ。

「そのまま体ごと横を向いて…そう。じゃあ、構えてみようか。」

今度は後ろから自分の手の位置など直接指導される。

「そう…弓をもつ手は肩より下げないで。引く方の手はだいたい口ぐらいの高さでいいわ。そして、そのまま真っすぐ狙って手をはなす。わかった？」

「はい。あ…自分の知ってる人の構えをちょっと意識してやっても良いですか？」

「ん、岳羽さんかな？　まあ良いよ。誰もいないし好きにやってみて。」

許可が出たのでイメージする『錬鉄の英雄』を…

――弓道場入り口〜公子　Ｓｉｄｅ〜

部員の人たちに指導を受けながら構えの練習をする湊君。その様子を私は理緒と一緒にみていた。すると、理緒が話しかけてきた。

「ねえ、公子。さっきので湊君が強いのはわかったけど、こういうのの実力はどうなの？」

「んー、たぶんやったことないと思うよ。うん、全くの素人。」

笑顔で答えると、理緒が不思議そうに尋ねてくる。

「なんでそんなに嬉しそうなのよ。好きな人の失敗してるとこってあんまり見たいもんじゃないでしょ？」

うーん、なんで失敗することが前提なのかな？

「失敗するとは限らないでしょ？　ってか、見てればわかるよ。たぶん、本人と私以外ここにいる全員が驚くと思うよ？」

言い終わると余計に不思議そうな顔をする理緒。だけど、向こうを見ると準備ができたのか湊君から部員の人たちが離れたので視線はそちらに向ける。

湊君がゆっくり構え始めると、その瞬間まわりの空気が“変わった”…

――弓道場・射場　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

自分の中のイメージをなぞり、さっきのスパーとは比べ物にならないほど集中する。イメージするのは『錬鉄の英雄』その姿。

自分が集中を始めると、まわりの空気がかわるのがわかった。構える間、弓道場から音が消えた。

イメージは完璧、あとは自分がその想像を創造し体現するだけ。大丈夫、的はよくみえるし風の動きもわかる。ただ当たると思うだけ…そのまま僕は弓を引き矢を放った…

――弓道場入り口　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

《キィン》と高い音が聞えたと思ったら、すぐに《カンッ》という音が聞こえてきた。そのまま、周りをみると言ってた通りみんなの表情が驚愕のものに変わっていた。

「き、公子…」

「なに？」

「湊君って、素人だよね？」

驚きの表情のまま、視線を湊君の方から一切離さず理緒を尋ねてくる。

「そういってるじゃん。」

「…当てちゃったよ？　…真ん中に。」

そう、みんなが驚くのも無理はない。全くの素人が人生で初めて射った矢が的の真ん中を捉えたのだ…まあ、なんとなく当たると思っていた私でも、まさかど真ん中に当てるとは思ってなくて内心驚いているのだ。他の人はまさに絶句と言った感じだろう。

…しかし、このままではマズイのでみんなの再起動のため湊君に声をかけるとしよう。

「やったね、湊君！」

――弓道場・射場　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

矢を放ち、的に当てると入り口の方から声が聞こえてきた。

「やったね、湊君！」

その瞬間、弓道場に音が戻ってくる。

（「うおー！すげー！ど真ん中とか初めてみたよ！」）

（「素人！？　冗談だろ、あの瞬間ここの空気変わってたぜ？」）

（「誰か、入部届けとってこい！絶対逃がすな！」）

再起動を始めたらしい部員たちが口々に言う。すると、後ろで見ていた主将たちが興奮した表情で寄ってきた…真田先輩もだけど主将って熱血派ばっかりなのか？

「すごいじゃないか、有里君！」

「あなた、ホントに素人？　それに構えも岳羽さんと違ってたけど、誰の構えを意識したの？」

「まあ、ちょっと。ゆかりじゃなくて、好きな漫画のキャラをイメージしただけです。」

そういうと余計に驚いた表情になる主将たち。

「漫画！？　そんなのであそこまでイメージできたのかい？　こりゃ、本物だな…」

苦笑しながら言ってくる高木先輩。まあ、それほどまでにアーチャーがすごいってことだ。イメージするだけで矢が当たるんだからな。

「ねぇ、有里君。あなた、見学って言ってたけどここに決めちゃいなさいよ。部員が嫌なら女子部のマネージャーとして指導してくれるだけでも良いわ。」

「なに言ってんだ、秋名。これだけの才能、選手にしなきゃ勿体無いだろ。有里君、ぜひ頼むよ。ウチに入ってくれないかな？」

うーん、正直さっきの一射で満足しちゃったんだよね。どうしよっかな…と、考えていると、公子たちが近付いてきた。

「さすがだね、まさか本当にイメージだけで当てるとは思ってなかったよー。」

「すごいね、湊君！　こりゃ、公子じゃなくて惚れるわ。カッコよすぎでしょ！」

と、なぜか岩崎さんのテンションが変になっているが気にせず会話する。

「ああ、ありがとう。それでなんか、すごい誘われてるんだけど、どうしようかな？」

「入っちゃいなよ。ここならウチの部活の使ってる道場と近いから、すぐ遊びにこれるし！」

「ちょっと、落ち着きなよ理緒。…まあ、楽しかったなら入れば良いんじゃないかな？　別に参加は強制じゃないんだから、好きなときにきて射ったら良いんだし。」

そんな軽いノリで良いのかな？　まあ、たまに来てばすばす射たらいいか。暇なら公子の方に遊びにいけば、公子か岩崎さんが相手してくれそうだし。

「わかったよ。…んじゃ、暇なときに遊びにくるので良ければ入ります。」

「ありがとう！　これで更に上が狙えるようになるぞ！」

「ちょっと、たまには女子の方にも貸してよね。あんなお手本めったに見れないんだから。」

そう言って嬉しそうに笑う主将たち。…あれ？入部届けってどこで貰うんだ？わからないので、結子に聞いてみる。

「ねえ、結子。入部届けってどこでもらうの？」

「え、担任から貰ってないの？　ちょっと待ってて、すぐ持ってくるから。」

結子はそういうとどこかへ走っていき、戻ってきたときに今日の部活は終わりと言うことになった。その最後、新しく入るということで先生から部員たちに紹介された。

「と、言うわけで、今日から我が男子弓道部に入部する、有里　湊だ。」

「よろしくお願いします。」

あいさつすると、部員から拍手され歓迎された。そして、今度は先生から部員の紹介があった。

「あと…おい！　宮本！」

「うっす！」

宮本と呼ばれた男子が寄ってくる。

「うちの部の次期主将最有力候補だ。大会で結果出してる。腕は信じていい。お前、同じクラスなんだろ？　面倒見てやれ。後学も兼ねてな。」

「いいっすよ。」

そこで解散となり、待っていた公子たちと帰ろうと思ったら宮本が声をかけてきた。

「よう。転校早々、岳羽をオトしたって…お前だろ？　プチ有名人。【宮本（みやもと）　一志（かずし）】だ。顔くらいは知ってんだろ？」

「え、知らないけど？」

「お前なぁ、軽くプライドが傷ついたぜ。けっこう顔させるタイプだってのによ。途中入部だからって甘く見ないぜ。ビシビシいくから、そのつもりでな！」

宮本から歓迎されているようだ…。そのまま、公子たちと合流し、岩崎さんを送ってから寮に帰ることにした。

夜――ラウンジ
寮に帰るとゆかりがいた。

「…あ、お帰りー。あ、そうだ。ねえ、湊君、部活どっか入った？」

「うん、一応ね。放課後、公子と岩崎さんって子といろいろまわって決めたんだ。」

「ふうん、そっか。…湊君、運動神経とか良さそうだし、やれば何でも出来そうだもんね。あ、ところでさ、今日、タルタロス行っとかない？　影人間とかの事件を少しでも減らせるなら、放っとけないでしょ？　それに実は、今日って部活が休みでさ。なんか体動か

したいし…」

ゆかりがそういうと、本を読んでいた桐条先輩が顔をあげ口をひらく。

「気を抜いてかかると危険だぞ。…分かってるな？」

「あ、はい…それは分かってます。」

言われてシュンとするゆかり…可愛いな。まあ、そんなどうでもいい事考えながら、ゆかりに答える。

「いいよ。今日は見学してたくらいだから、疲れてないし。」

そうして影時間にみんなでタルタロスへ向かう事にした。

影時間――タルタロス・エントランス
久しぶりで2回目のタルタロスだ。エントランスにつくとまず、桐条先輩がみんなに声をかけた。

「今後はここをベースにタルタロスにアタックすることになる。よろしく頼むぞ。それで、準備はいいか？」

「はい、大丈夫です。」

そうして階段をのぼっていこうとすると、伝え忘れがあったらしく桐条先輩に呼び止められた。

「そうだ、タルタロスについてもう1つ分かっている事があるんだ。実は何層か昇ると、道が塞がっていて、それ以上先へ進めなくなっ

ている。どうもタルタロスは、そういった形で全体が複数のエリアに分かれているようだ。中の構造は日によって変わるといったが、この点だけは変化しないらしい。まずは、その場所まで辿り着くのを目標にしようと思う。」

ふぅん、目的もなく上を目指すより、そうやって目標があるとやっぱりモチベーションが違うよね。そう考えている間も、先輩の話は続く。

「ただし、無理はしないでくれよ。入口から入り直せば、今まで到達した最上階から再開することもできるからな。それと、念のためこれも渡しておく。危険を感じたら迷わず使ってくれ。じゃあ、今日も頼んだぞ。」

先輩から傷薬を受け取り、僕たち４人はゲートをくぐった。

――タルタロス・内部

中に入ると、さっそく先輩から通信がはいる。

『先の階層を探ってみる。少し待ってろ……！？　微かだが、上の階に強い反応があるな。まだ離れているようだが気をつけて進んでくれ。』

「了解です。じゃあ、みんな行こうか。」

「戦闘がスムーズにいくかどうかは、全てリーダーの指示次第だから。その場の状況に応じた指示を的確にしていってよねリーダー。」

いたずらっぽく笑いながらゆかりがそう言う。…じゃ、今日は入れ換わり攻撃でも教えるかなと、思っていると後ろで順平がやる気を

出している。

「どんな敵が出てこようが、オレがバッサバッサとなぎ倒してやんぜ！　ま、期待しててちょーだい。」

そんな言葉をききながら僕たちはシャドウを倒しつつ上を目指した。

――タルタロス・５Ｆ

ある程度、入れ換わりながら連続で攻撃をしていくことに慣れ始めたころ、５階についたときに先輩から通信がはいった。

『フロア中央に反応が3体！　新手の敵だ。これまでの相手とは格が違うぞ。万全の状態でないなら、一旦引き返し態勢を立て直してくれ！』

そういわれ、警戒しながら通路を進んでいく。すると、エントランスにもあった脱出ポイントに似た装置をみつけた。

『む、その装置！　もしかすると…すまない。その辺りにある装置を調べてもらえないか？』

「わかりました。」

言われた通り装置を調べていると、スイッチのようなものがあったので押してみた。

「お、装置が動き出した！　使ってみようぜ、湊」

順平の希望通り、起動した装置を使ってみると僕たちは光に包まれた。

――タルタロス・エントランス
《シュンッ》
光に包まれた僕たちは、エントランスにあった先ほどと同じ型の装置へ転送されていた。

「やはりそうか！　その装置は、装置同士を繋いでいる、いわば“転送装置”と言えるだろう。装置を起動させることで、エントランスとの行き来はもちろん…装置同士の移動も行えるはずだ。見つけたら是非起動してくれ。今後の探索の大きな助けになるはずだ。」

新しい発見を喜ぶ先輩。そういえば、さっきのフロアもだけどいくつかの階には強敵がいるようなので、戻る前に頼んでいた武器をとりに行くことにした。

――ベルベットルーム
部屋に着くと早速、テオドアに出迎えられた。

「お待ちしておりました、湊様。ご依頼の品、既に用意しております。」

「ありがとう、テオ。あ、これ来る前に買ってきたんだ。みんなで食べてよ。」

そういって、帰りに車で移動販売してたわらび餅をこっちに来たエリザベスに渡す。

「わらび餅ですか？　ありがとうございます。あとでいただきますね。」

笑顔で受けとってくれる、エリザベス。…どうでもいいけど、なんで前にあげたフロスト人形を1体抱いてるんだ?そんなに気に入ったのかな、と考えているとテオドアが弓をもってきた。

「こちらにございます。普段、持ち歩くには不便だと思いましたので、魔力を通してあります。」

「魔力を?」

「はい。魔力を通していれば、その腕輪に入れておくことができます。」

へー、便利だな。じゃあ、服とかも入れておけるのかな?疑問に思ったのできいてみる。

「じゃあ、魔力を帯びた服とかも持ち歩けるの?」

「ええ、生き物や食物などでなければ、そのはずです。」

おおっ、さっそく試してみよう。

「エリザベス、帽子かして?」

「帽子でございますか?　どうぞ。」

そういって、エリザベスの帽子を受け取り腕輪にかざす。かざした帽子は予想通り魔力を帯びていたのか、光に包まれその光は腕輪に吸い込まれていった。

「本当だ!　すごい。」

「では、ご依頼の品お渡しします。」

言いながら黒い弓を渡してくるテオドア。受け取った弓は、少し見るだけで見事な物だとすぐわかった。高級感のある落ちついた黒を基調として、両端はその黒によく映える深紅のカラーリングだった。

試しに引いてみると、たしかにかなりの力を必要とするようだが、問題なく引く事ができそうだ。その様子をみていたテオドアは驚いた表情をしている。

「驚きました。言われた強度を出す為に現実世界では造る事も使う事も不可能は設計になっていたのですが、簡単に引く事ができるとは…貴方は本当に不思議な方だ。」

そういって楽しそうに顔を歪めるテオドア。よし、じゃあ戻ろうかな、と思い弓を収納するとドアへ向かった。

「じゃあ、また来るね。」

「はい、お待ちしています。」

そうしてドアをあけ出ていこうとすると腕を掴まれた。これはかなり予想外だったが、相手は顔を赤くしたエリザベスだった。

「…なに？　エリザベス。」

「あの…帽子を返していただきたいのですが。」

恥ずかしそうにいう、エリザベス。そういえば、入れてそのままだ

った。

「……これ、どうやって出すの？」

「…え？」

僕の発言が予想外だったらしく、驚くエリザベス。その後ろで楽しそうにテオドアが笑っているが、こっちはそれどころじゃない。笑ってないで助けろ。

「失礼しました、姉のこのような姿はあまり見る機会がないもので。」

言いながらやってくるテオドア。いいけど、エリザベスが怒っているみたいだぞ。

「カードを引くときと同じように、取り出したい物をイメージしてください。そして、それを掴めば取り出せるはずです。」

言われて、エリザベスの帽子をイメージする…だがどうしても、帽子だけをイメージできずエリザベスごとイメージする。なんとか、上手く取り出すことができた。

「はい、ごめんね。」

「いえ、別になくとも構わないのですが、身に着けていた衣服を殿方に持っておかれると思うと、なんとも恥ずかしくなってしまいまして。」

本当に恥ずかしく思ったらしく、顔を赤くしたまま言うエリザベス。

なんか、聞いてると僕が少しアブノーマルなことをしていたように聞こえるぞ?僕にそんな趣味はないからな。

「じゃあ、今度こそまたね。」

そういって、エントランスへ戻り転送装置で5階へと向かった。

――タルタロス・5F

5階に戻り、さきに進むと鳥のようなシャドウが3体いた。

『突破するぞ！　普通のシャドウとは格の違う相手だ。慎重に行け！』

言われて相手のようすを見ながら指示をだす。

「ゆかり、牽制になればいいから手前の1体をねらって。順平と公子はアギを残りの2体狙いで。相手を2：1に分断して少ない方から片付けるよ。」

「「「了解！」」」

同時に答える3人、言われた通り素早く弓で手前の1体を狙うゆかり。それと同時に召喚を始める順平と公子。僕はみんなの攻撃が邪魔されないよう、重ねがけで威力をあげたブフで相手の動きを制限する。

「Ｃａｌｌ！ブフ×2」

威力をあげた吹雪をまともに喰らっては上手く動けないのか、ゆかりの放った矢が敵を捉える。その敵がかなりのダメージを受け落下

したのを見てこいつらの弱点に気付く。

「…！！　ゆかり、こいつら貫通が弱点みたいだ。アギが止むのとほぼ同時に残りのヤツらも狙って！」

「わかったわ！」

言いながら、落下した敵のもとへ剣を振り降ろしながら行く。その一撃で1体を倒すと、先に放っていた順平たちの特大アギで敵にダメージを与えるのが見え、ゆかりが矢を放つ寸前だった。

「順平は落下するシャドウを、公子は残りの1体を警戒。できるなら、対空の一撃で仕留めちゃって。」

指示を飛ばしてる間にゆかりの矢を喰らった1体が落下し、走ってきた順平の振り降ろし攻撃で消え去る。もう1体は公子が跳び上がり本当に対空の一撃で沈めた。

「敵反応なし。おつかれさま、みんな。」

そういうと、みんなが安心した表情でよってくる。順平がまず嬉しそうに口を開いた。

「いまの、メッチャ調子よくなかったか？　こう全員の華麗なコンビネーションって感じでさ！」

同じようなテンションで公子も答える。

「確かに、ゆかりのおかげで楽に倒せたしね♪」

「あれは偶然、シャドウの弱点が貫通だったからいけただけよ。それより、公子の最後の攻撃なに？　なんで、あんた飛んでんのよ。」

弱点を見事についたゆかりの攻撃のおかげで、戦闘がかなり有利に進められたのはたしかだ。だが、その状況をつくるために公子たちに敵の分断をお願いしたのだ。

「いやー、湊君に期待されちゃイクっきゃないでしょ？」

公子は笑いながら答えるが、指揮官として言うなら命令だけでなく期待以上の働きをしてくれる存在というのは非常にありがたい。コンビネーションに慣れてきたら、各自の得意技からの必勝パターンでも考えようかな？そう思っていると、先輩から通信が入った。

『みんな、強敵相手によくやってくれた。キリが良いので今日はそれぐらいにして戻って来ないか？』

「そうですね。テンションあがってまだまだイケるって、思ってるでしょうけど、それは明日以降にまわして今日は戻ることにします。」

そういうと、順平が不満そうにいう。

「えー、このまま一気に行っちまおうぜ？　こんな調子いい時めったにないって。」

まあ、その気持ちはわかるけどねぇ。

「いや、今日はまだ探索2回目だし戻るよ。それより、今日の活躍をしっかり覚えておいて。その動きを意識しておくのが上達への近

道だから。」

「ちぇー…でも湊が言うんならそうなんだろうし、今日はオレっちの活躍を何度も思い出しながら寝るぞー！」

と、楽しそうに言いながら転送装置の場所まで戻っていく順平。僕たちも後へ続き、エントランスの先輩たちと合流して寮へと戻った。

第九話（後書き）

ボクシング部2年の佐々木はもう二度と出ないキャラなので見た目のイメージも考えてません。弓道部の主将たちはまた部活があれば出ると思います。見た目とかモデルになった人物がいるんですが、それは二章の設定で書こうと思います。あと、P3P未プレイな方や、女主人公サイドをプレイしてない方に言っておくと、岩崎さんは実際に女主人公の部活仲間で登場するキャラです。

第十話（前書き）

今回はオリ話の上に短いです。

第十話

４／２６（日）

朝――自室

今日は学校が休みだ。ケータイが点滅していたので見てみると友近から電話があったみたいだ。休日の８時台なんておきてるわけないよ…。そうしてもうひと眠りしようか悩んだけど、こっちにきてからほとんど休みがなかったため、地理について何も知らないことに気付いた。

「市街地でも散歩するかな…」

そう思い出かける準備をした。

昼――ポロニアンモール

とりあえず、遠くから行こうと思いポロニアンモールにきたら、ゆかりと出会った。

「あ、偶然だね。湊君も買い物？　便利だよね、ここ。大概の物は揃っちゃうし。」

「いや、街中をブラブラしてるだけだよ。」

そういうと、ゆかりも僕がこっちに来てからのこと思い出したのか理由に納得したようで、話を続ける。

「それもいいかもね。まだこの街に慣れてないでしょ？　今度、ゆっくり案内するよ。可愛い服や雑貨を売ってる店もあるから。」

いや、可愛い物は嫌いじゃないけど…暗にねだってるのか？

「うん、ありがとう。じゃあ、またね。」

そうしてゆかりと別れ、次の場所に移った。

――商店街

今度は歩いて駅前の商店街にきた。すると、今度はここで順平と出会った。

「よう湊！　何してるんだ？」

「いろんなとこ、ブラブラしてるんだよ。あんまり、見て回れてなかったからさ。」

「そうだな、オマエ越してきたばかりだし。街に慣れるんだったら、ブラブラするに限るわな。」

そうして話をして話題がちょうど途切れたので、順平は何をしていたのか尋ねてみることにした。

「そういや、そっちは何してたの？」

きくと、順平は「あぁ」と言いながら話し始めた。

「オレはメシ食ってきたんだ。タルタロスで身体動かしてるモンで、最近ムショーに腹が減ってな。」

ふーん。まあ、まだ2回しか行ってないけどペルソナ使いって燃費

悪いのかな?とりあえず、話も終わったので順平と別れる事にした。

「じゃあ、僕ほかもまわってみるから、またね。」

「おう、知らない土地だし気ぃつけてな。」

そうして別れたあと、小腹が空いたのでたこ焼きを買って行くことにした。

――神社

たこ焼きを買ったのはいいけど、どこで食べるか悩んでいると静かな神社があった。

「少し、丘になってるからか風があって気持ちいいな。ここで食べよ。」

境内のなかを進み、賽銭箱の後ろの本堂の縁側のようなとこに腰掛け買ってきたたこ焼きを食べ始める。

「あ、美味しい。…でも、これ中身なんだ?　タコじゃないだろ。」

よくわからない中身のたこ焼きは、少し恐さもあったが美味しかった。次にベルベットルームに行く時はこれをお土産にしようかな?そしたら、中身がなにか分かるかもしれないし。

「こういうゆったりとした時間は久しぶりだな…食べたら眠くなってきたし、少し寝ようかな。」

そう思い僕は横になり寝ることにした…

夕方――神社

「わん！　わん！」

…ん、犬の鳴き声か？少し離れた場所から犬の鳴き声がきこえ僕は目を覚ました。

「ふぁ～…ん？　さっきの鳴き声はあの犬かな。」

境内の入り口の方をみると、白い中型犬とコートにニット帽を被った男が一緒にいた。男は持っていたスーパーの袋からなにかを取り出している。

「エサでもあげてんのかな？　見た目はちょっと柄悪い系だけど、動物好きとか良い設定だな。昔のヤンキードラマの不良みたいだ。」

見てるとエサを食べ終わったらしく、男は食べさせた物の片づけをすると今度は袋からテニスボールを取り出して遊び始めた。

「ほら、取ってこいコロちゃん！」

「わん！」

男が投げたボールを嬉しそうに追いかける犬…コロちゃんって呼んでたけど。コロが名前か？まあいいか。みてるとまだ楽しそうに遊んでいる。

「ほれ、もう一回いってこい！」

「わん！」

そういって投げたボールはこっちの方に転がってきた。犬はボールを銜えると僕の方を不思議そうにみている。なかなか犬が戻らないため、飼い主っぽい男もこっちにきた。

「おう、どうしたんだコロちゃ…」

僕がいることに気付いていなかったのか、僕をみて固まる飼い主。なんていうか、あいさつでもした方がいいよね?

「こんばんは、この犬の飼い主さんですか?」

話しかけると男は再起動しはじめ、僕の質問に答えてくれた。

「…飼い主じゃねぇ。こいつの飼い主はここの神主だったやつだ。」

「だった、ってことは今は違うんですか?」

「ああ、なんでも事故に巻き込まれて死んじまったんだと。」

ふーん。飼い主がいなくなった犬にエサあげて遊んであげてたのか。この人、良い人っぽいな。

「飼い主がいなくなった犬にエサあげたりして、優しいんですね。僕は犬はちょっと苦手で…この犬、名前はなんていうんですか?」

「…コロ丸だ。ホントは虎に狼ってかいて【虎狼丸(ころうまる)】って名前だったらしいが、今じゃみんなコロ丸って呼んでる。」

毛は白いし、目は赤い…アルビノか。動物のアルビノって初めて見たや。それで、長生きできるようにって強そうな名前つけたんだろ

うな…と、考えてると今度は男が質問してきた。

「んで、お前はなにしてんだ？　賽銭泥棒ってわけじゃねえだろ？」

「オヤツ食べたら眠くなっちゃって寝てました。それで、さっきコロ丸の鳴き声で起きて、あなたがコロ丸と遊んでるのを見てたってわけです。」

そういうと、男の人はコートのポケットに入れてない方の手（右）を顔に当てて俯く。見られたくなかったのか…

「…ここで見た事は誰にも言うんじゃねえぞ。」

「…え？」

男が急に言ってくるので、おもわず聞き返してしまう。

「だから、ここで見た事は誰にも言うなっつったんだ。」

「わかりましたけど、お名前は？」

「…あ？」

僕の言ってる事がよく分からないらしく、男の人がきき返してくる。

「あなたの名前ですよ。わからないと街中であっても犬の人としか呼べないじゃないですか。」

「っな？！　…っち、【荒垣（あらがき）】だ。」

ちゃんと教えてくれる辺り、良い人だよな。

「僕は有里といいます。では、そろそろ晩御飯の時間なので帰りますね。さようなら、荒垣さん。」

「…ああ、じゃあな。」

そうして荒垣さんと別れ、寮へと帰った。寮に帰るとほんとに公子が晩御飯を作ってくれていたので、それを食べてからお風呂にはいり寝ることにした。

第十話（後書き）

早めに会わせるのは伏線に出来る可能性を増やすためです。これで、この先また再会したら「お前、あの時の…」って、話を膨らますことができますからね。原作沿いに少しでも変化をつける苦肉の策です。

第十一話（前書き）

湊は別に2ちゃんねらーでもＶＩＰＰＥＲでもありません。

第十一話

4／27（月）

朝――講堂

今日はなんでも臨時の朝礼があるということで、荷物を置くとすぐに講堂に向かった。いつもの指定席で寝ていると、壇上に司会の先生がきた。朝礼が始まるらしい。

『えー、では全校朝礼を始めます。まずは、校長先生からのお話しです。では、お願いします。』

「…うむ。」

そういうと校長先生は教師の席を立ち、壇上へあがっていった。あがって行くのを見ているとゆかりが話しかけてきた。

「急に、なんだろ？　…やっぱり、最近の事件のことかな。世間も騒がしいしね…」

言われて順平がそれに返事をする。

「さぁな…でも、シャドウの事とか、校長が知ってるわけないしな。なんにしても、あんま、長くならなきゃいいけどナ…」

「うちの校長、話し好きで有名だもんね…」

ゆかりはそう言うと「ハァ…」と溜め息を吐き、マイクを持った校長先生の方に視線をもどした。

『えー、諸君らに今日は特別に、大切な話をしようと思います。あー、世間では、不可解な事件や、理不尽な事件が多いようですが…うー、この学園の生徒である諸君らには、関係ないことだろうと思います。えー、しかし高校生という若い時期には、様々な悩みもあるでしょう…まー、だからといって、あまり、思い悩むことはないのです。えー、“過ぎたるは及ばざるが如し”という言葉を、紹介します。あー、これの意味はといいますと…』

…あー、校長先生の長話が続いているけど、これってあれだよね？同じ事思ったのかゆかりも話しかけてくる。

「これって…もしかして、前の桐条先輩のスピーチ、意識してる…？」

「たぶん、そんなトコだな…ま、同じ男として、気持ちは分かるけどさ…」

「湊君、寝てていいよ？　終わったらちゃんと起こしてあげるから。」

公子にそう言われ僕は寝ることにした。余談だが、校長の話が終わったのはそれから２０分後だったらしい…長すぎだろ。

昼休み――教室

午前の授業が終わり、教室で公子作のお弁当を食べていると、桐条先輩が入ってきた。

「有里。悪いが、今日の放課後空けておいてくれ。仕事を頼まれてほしい。」

「仕事…？　嫌ですよ、めんどくさい…あ、唐揚げ美味しい。」

僕がそう言うと、軽くショックを受けがらも先輩は話を続けた。

「…急な話しで申し訳ないのだが、君しか適任を思いつかない。詳しい事は放課後に話す。また、後でな。」

先輩は用件だけ伝えると帰って行った。まあ、返事してないし帰っていいよね？

「湊君、帰ろうと思ってるでしょ？　ダメだよクライアントのご機嫌もたまには取らなきゃ。」

するどいな、公子。確かにクライアントは大切にしなきゃいけないけど…

「業務外のことはなるべくしない主義なんだ。それにそろそろ依頼報酬の決ってきたから、先輩もほぼ言い値で払うって言ってたし機嫌とる必要もないでしょ。」

そういうと前の席に座ってるゆかりが話しに加わってきた。

「決まったって、いくらくらいにしたの？　最初の１体はサービス込みで２０万だったじゃない。」

「えっとね。まず、点数制っていうの？　医者みたいなさ、あれみたいに何したら何円って加点方式にしようと思うんだ。」

横できいてた順平もパンを食べながら、質問して来る。

「んじゃ、働けば働くだけ金になるのか？　こりゃ、こいつリーダーにしてたら大変だぞ。基本的に皆勤賞だし、戦闘も好きに指示出して美味しいとこ持ってけば楽して金ゲットだろ？」

「いや、基本的に僕はそこまで戦わないよ。指示出して、それをみんなが実行しやすいようにサポートするのが仕事だしね。討伐記録で言うなら順平がトップでしょ。」

そういうと、戦闘中のことを思い出したのか納得する順平。それにトップと言われたのが嬉しいのか笑顔になっている。

「で、点数制は良いけど値段設定は？」

「相手の強さでランク分けして、ランク１なら１体５０００円とかってしようと思ってる。頑張れば日給１０万いけるね。」

そういって笑うと、ゆかりが不満そうな顔をする。

「日給１０万はいいけど、私も少しくらい報酬ほしいなぁ。装備とか薬って基本自腹でしょ？　流石にバイトしまくるわけにはいかないし、結構キツイのよねー。」

「ゆかりッチもそう思う？　オレっちもそう思って真田サンにきいたら桐条先輩か理事長に直接交渉しろってさ…できるわけねぇじゃんかなぁ？」

さっきまでの笑顔が消え、落ち込む順平。命がけなんだから、遠慮することないのに…。

「つか、湊が特殊過ぎんだよ。金貰って、そのうえ装備は基本割引き価格ってな。」

「え、なにそれ？　私、割引きしてもらったこと1回もないよ？」

順平の言葉に驚くゆかり。…どうでもいいけど、公子は食べてる時に頭撫でるのやめてくれる？

「コイツ、初めて会ったその日に黒沢さん脅してさ。それ以来、コイツが行けば最低でも1割引きなのよ。」

順平の言葉を聞きさらに驚愕するゆかり。いや、冗談で言ったのに黒沢さんが勝手に信じて怯えただけだからね。買うときはたまに多めに包んだりしてるし。

「なんか、普通と違い過ぎてなんにも言えないわ…。」

「だから言ったじゃん。湊君を目指しても誰もたどり着けないって。」

そう言って何故か勝ち誇る公子。別に公子は何もしてないだろうに。

「まあ、それでも真田先輩は復帰後に湊君と戦うつもりらしいけどねー。」

「え、なにそれ？　初耳なんだけど。」

「そう？　えっとね、中学のときの姉弟喧嘩の話でまず火が点いて。んで、この前の追加入部のスパーで完全に燃え上がったって感じかな。」

なんだよそれ…ってか、姉弟喧嘩ってあの薙刀で人のこと撲殺しようとしてきたやつか？

「うわっ、そりゃご愁傷様…安心しろ湊。オマエが戦線離脱したらオレが代わりにリーダーやってやっからよ！」

やけに嬉しそうに言う順平。てか、僕の敗北が前提かい。それを聞いてたゆかりが呆れたように言う。

「…なに言ってんの、むしろ命の危険があるのは先輩の方よ。」

「はぁ？　知らねーのか、ゆかりッチ。真田サンっったら全戦無敗のボクシング部主将だぜ？　いくらコイツが規格外でも勝てるわけねえって。」

なにいってんだ、という表情でゆかりに言う順平。だが、ここで公子が口を開いた。

「先輩の無敗記録ってボクシングの話しでしょ？　それを言うなら湊君なんてルール無用のストリートファイトで無敗だよ？　素手でバットとか薙刀とやり合ってへし折るんだよ？　湊君が本気でやったら、それこそ一撃で人生終わるよ。」

「なっ！？　…さすがに嘘だろ？」

公子の言ったことが信じられないという顔をしてる順平。てか、公子の言い方だと人が壊し屋みたいじゃないか。

「そういや、公子が姉弟喧嘩の話したのって順平が来る前だったね。

聞いてたら普通、公子にも勝てると思わないし。」

呆れたように苦笑しながらゆかりが言うと、公子が嬉しそうに答える。

「へへっ、まあこれで私も“草摩”ですから！」

「なんの関係があんだよ…昔は忍者の家系でしたってか？」

順平がそう聞くと丁度、昼休み終了のチャイムがなったので、話はそこまでとなった。

放課後――教室

人に言っておいて来るの遅いなー、順平は帰ったし、公子とゆかりも部活行ったから暇だと思っていると、やっと先輩がやってきた。

「…待たせてしまって、すまない。」

そういって謝ってくる。知ってるか？仕事において時間にルーズなやつは信用されないんだぜ？などと考えていると先輩が真面目な表情で話し始めた。

「単刀直入に言う。生徒会に入ってもらいたい。」

「だが、断る。」

またビックリしてるけど、この人もアクシデントとかハプニングに弱いのかな。

「生徒会の活動は定例だが、君を常時拘束するつもりはない。時間がある時に生徒会室に来るよう心がけてもらえるだけでいい。」

めげずに勧誘して来る先輩。

「なんで自分が？　正直、公子とか、ある意味責任感とか使命感なら順平の方がありますよ？」

「君の適応力を買っている。生徒会長というのも、なかなか多忙でね。緊急時に口裏を合わせられる人間が欲しい。私の“事情”に通じた人間…君を“リーダー”と見込んで頼みたい。」

公私混同してないか？いや、普段からの根回しが必要なのはわかるけども。んー、本気で面倒だけどどうせ諦めないだろうしな…

「わかりました。じゃあ、今度先輩の部屋に遊びに行かせてください。」

「へ、部屋？　…君なら、何か条件を言ってくると思っていたが何故、私の部屋に？」

思惑がわからないと言った感じできいてくる先輩。

「なんとなくですよ？　先輩ってお姫様ベッドで寝てるイメージあるんで部屋とかどうなってるのかなって。」

「まあいい。今度、紅茶を用意して待っていよう…では、事後報告になるのだが、君の生徒会所属の件はすでに承認済みだ。ただ、登録の手続きだけは君が直接やらなくてはならない。」

生徒会に入るためには、鳥海先生に会う必要があるらしい。そこで、生徒会に入る意思を伝えなければならないようだ…まあ、あの先生は緩いから結構好きだ。この前、購買に乳酸菌飲料を買いに行ったら偶然会ってケーキをくれた。持って教室に帰ったら、順平や他の男子が騒いでたっけ。…あれ？公子とゆかりにひと口ずつ、あ～んってしてあげたから騒いでたのか？そう考えてる間も先輩の話は続く。

「相談もなしに段取りをつけた事は詫びるが、君を必要とする私の境遇を理解してほしい。手続きを終えたら生徒会室に来てくれ。待っている、有里。」

そういうと先輩は教室から去って行った。…なら、僕のメンドクサイという心境も考えてくださいよ。とりあえず、鳥海先生のとこ行くかな。

――職員室

「失礼します」と言って職員室に入ると、先生をみつけた。

「あら、有里くん。何か用？　お菓子食べる？」

「なにがありますか？」

僕がそう尋ねると、机の一番下の大きな引きだしをあけてお菓子を探し始めた。って、お菓子とかお茶用の道具ばっかりだな…。

「わりといろいろあるけど…きのことたけのこどっちが良い？」

「じゃあ、きのこで。」

そう言ってきのこのチョコスナックを受け取った。先生はもう1つのたけのこの方を食べるらしい。

「ングング…で、何の用？」

「ああ、生徒会のことできました。」

そういうと先生は「あぁ、はいはい。」と言って、机の上のファイルから書類をとりだした。

「桐条さんから聞いてるわ。じゃあ、これに目を通したら名前書いて。直筆のサインが無いとダメなの。」

言われて、鳥海先生が差し出した書類に名前を書いた。

「有里　湊…よし、大丈夫ね。じゃあ、後は任せて。がんばってね、生徒会。」

「はい、お菓子ありがとうございました。」

生徒会室に入れるようになったので、先生と別れ職員室をあとにした。

――生徒会室

もらったお菓子を食べながら生徒会室に入ると先輩が驚いた顔をしていた。まあ、それでも食べ続けてるんだけど。

「…まあ、いいか。先日も話したが、彼が有里　湊だ。今日から生徒会の一員として働いてもらう。」

そういって僕を紹介する先輩。するとオールバック気味の髪型をした男子に話しかけられた。

「有里君か…僕は【小田桐（おだぎり）　秀利（ひでとし）】。風紀委員を仕切らせてもらってる。」

続いて眼鏡のおどおどした女子もあいさつしてきた。

「会計の【伏見（ふしみ）　千尋（ちひろ）】です。1年生で、わからない事の方が多いので、その…お、お手柔らかに…有里さん。」

「んぐ…よろしくおねがいします。」

あいさつを返してまた食べ始める。

「……。」

小田桐に見つめられている…欲しいのか？

「…失礼、会長が人を推薦するなんて君、よっぽど有能なんだろうって思ってね。だが、なぜお菓子を食べ続けているんだい？」

「承認の紙を書きに行ったら、鳥海先生がくれたからだけど？」

僕がそう言うと余計に不思議そうな顔をする小田桐。すると考えるのをやめたのか、もう一度こっちに向き直った。

「まあ、これから宜しくたのむよ。」

「うん。非常勤だけど、よろしく。」

小田桐に興味を持たれたようだ…。あいさつを終えるとそろそろ下校の時間になっており、桐条先輩が声をかけてきた。

「…今日は顔見せ程度でいいだろう。有里には…我々の手伝いをやってもらう。君の生徒会室への立ち入りを特別処遇として公認する。放課後の君の行動は任意だが、“生徒会室”という選択肢を忘れないでくれ。今日はありがとう、有里。」

「え、一緒に帰らないんですか？」

「ん？　一緒に帰りたいのか？　戸締りして鍵を返しに行くから待っていたら、遅くなってしまうぞ？」

そういって笑う先輩。そういえば、先輩って桐条の車で送迎されてるのか？いや、前に校門で普通に会ったし電車だろう。うん。

「大丈夫です、生徒玄関で待ってますね。」

そういって生徒会のメンバーと別れ、桐条先輩と合流すると寮に帰ることにした。

夜――ラウンジ
先輩と一緒に寮に帰ると順平がいた。

「…ういっす、おかえりー。あ、そうだ！　聞いたぜ…オマエ“生徒会”入んだって！？　桐条先輩、いいんスか？　こんなヤツ入れちゃって！？」

「任意で手伝いを頼んだだけだ。何も強制はしてない。なんだ？

伊織も手伝ってくれるのか？」

先輩がそういうと、順平は「マズった」という表情をして答える。

「え、あ、いや…遠慮しときます…」

そのあと、僕たちは再びタルタロスに挑み、１０Ｆにいたフロアボスを倒したとこでキリが良いので帰り休むことにした。

第十一話（後書き）

うちの鳥海先生は基本的に湊に甘いです。なので、湊にとっても仲良しな人です。

第十二話（前書き）

今回は短いです。

第十二話

４／２９（水）

朝――自室

今日は“昭和の日”で、学校が休みだ。そういえば、今日からインターネットが使えるらしい。そんな事を考えながらぼーっとしてるとドアがノックされた。

《コンコン》

「私だけど、湊君いるー？」

ゆかりがくるなんて珍し…くもないか。ほんとは異性の部屋に行くのは禁止らしいけど、桐条先輩が僕だけ特例っぽく扱ってるから、よく公子やゆかりたちと部屋に行ったりきたりしてる。

「どうぞー」

僕がそういうとゆかりが入ってきた。

《ガチャ》

「急にごめんね。ちょっと話したいことがあるんだけど今日って空いてる？」

「とくに予定はないけど…デートのお誘い？」

きいた瞬間、顔を真っ赤にして慌てるゆかり。

「ち、違うわよっ。ただ、少し真面目な話がしたいから時間貰えな

いかなって思って。」

言いながら、だんだんと暗い表情になるゆかり…ま、なんかワケありか。暇だし少し出ようかな。

「いいよ、着替えて準備するからラウンジで待ってて。」

それをきくと「わかった」と言って、ゆかりは部屋を出ていった。さて、着替えるか。あまり待たせても悪いので着替えてすぐ降りることにした。

昼――ポロニアンモール・喫茶店“シャガール”

一緒に出ると静かな場所で話したいということで、ポロニアンモールにある喫茶店にやってきた。注文したコーヒーがきたところで、ゆかりが話し始めた。

「あ、あのさ、えっと…私、湊君…に言わなきゃいけないことがあるんだ。」

「…何？」

やけに暗いし話しづらいことなのかな？

「えっと、さ、ほら…覚えてないかもだけど…あのね…湊君が入院してて、目が覚めたとき…ほら、寮がシャドウに襲われて、あなたがスキルを覚醒した後のこと。」

言いづらそうにしていたゆかりは、意を決したのか顔をあげて話し始める。

「あの時…私、目覚めたばかりの湊君に色々言ったでしょ？　“私はあなたと同じ”とか、親のこととか、“あなたも独り”とか…その…押し付けだったかなって反省したんだ。だって、私は父親だけいないけど、あなたはご両親だし…それにね、たとえそこが同じでも、感じ方なんて人それぞれ違うのに…あなたのこと無視して、私ばっかり押し付けてた。だから、ヒドイこと言ったんじゃないかなって、ずっと気になってて…ちゃんと謝りたかったんだ。…ゴメンね。」

ああ…、そんなこと気にしてたのか。

「でもね、やっぱりあなたには親近感…っていうの感じるんだ。“親がいない”なんてことでね…あなたは嫌かもしれないけど。身近にいなかったから…クラスのみんなは、違うんだ。お父さんもお母さんも一緒に家にいて…“お母さんきらーい、帰りが遅いって怒られた”とかってフクれてる…そういうの聞くとね…うらやましいんだ。でも、うらやましいと思うのがイヤで、隠して…言えないから友達ともキョリを感じて……寂しいなって。だから、あなたに救われた気がした…」

親がいない…そうだね。なんで自分だけって思うこともあったし、悪気はないんだろうけど怒られないのが羨ましいって言われたこともあったっけ。でも、そういう人は知らないんだ。孤独の辛さを。

「…って、ゴメン、また勝手に一緒にしちゃった。でも、湊君が居てくれること、私…支えになってるみたい。あなたが仲間になってくれて、嬉しいよ…ハハ、なんかコレ、いつまでも傷舐めてるって感じかも。でも…ホントの気持ちだよ。」

そう言って自嘲気味に笑うゆかり。支えか…昔は僕もそうだったか

もしれないな。

「僕とゆかりは違うよ。」

「…え？」

不思議そうな顔をするゆかり。僕はそのまま話を続ける。

「ゆかりが言うように境遇が似てたり、それで同じような時を過ごしたかもしれない。…でも、やっぱり違うよ。僕はゆかり程強くないんだ。」

「どうして？」

遠慮がちにきいてくるゆかりに、答える。

「僕はね、普段ほかの人に甘えたりしてるけど、それを支えだなんて思ったことはないんだ。絆とか支えっていうものを信じるのはやめたんだ。」

「なん、で…どうしてそんな悲しい事言うのよ！」

僕の言葉をきいて激昂するゆかり。…ま、こんなこと言われたら普通怒るよね。

「どうしてって…疲れたんだよ。比べることも、比べられることも。どれだけ望んでも、僕はもう普通の人が受けられる、『当たり前の幸せや生活』は手に入らないんだ。あ、これはシャドウとかの話じゃなくてね。」

話を聞くうちに俯いていったゆかりが顔をあげずに言う。

「…もう手に入らないから、望む事を、先に進む事をやめたの？」

「そう。僕と違って、支えを得てでも前に進めるゆかりは十分強いよ。誇っていい。」

そう言って少し冷めたコーヒーに口をつける。すると、俯いてたゆかりが急に立ち上がり僕を指差した。

「上等じゃない！　諦めたっていうなら、私がそれを与えてあげるっ。確かに失った家族との生活は取り戻せないわ。でもね、未来にまで絶望されちゃ困るのよ！　あなたは私の支えになってるの、その人が進む事やめてちゃ私まで困るわ。だから、私が与えてあげる。当たり前の幸せや生活ってやつを、新しい家族としてっ！」

そういってビシッ！っと僕の顔を指差すゆかり。急に立ち上がって大声で言うもんだから、他のお客さんまでビックリしてるよ。フフッ。

「フフッ、それってプロポーズ？」

そう言った瞬間、自分の言った言葉の意味がそうとしかとれない物だと気付き真っ赤になるゆかり。パニックになっているのか、上手く喋れないでいる。

「え、ちがっ、あの！」

「アハハ、ありがとう。嬉しかったよ。じゃあ、当たり前の幸せや生活ってやつを与えてもらおうかな…新しい家族としてね？」

そういって、伝票を持って立ち上がる。まわりで話をきいてたお客さんからは

（「やったな、ボーズ！」）
（「女の子からの公然プロポーズなんてはじめてみたー」）
（「え、あれ？岳羽さんじゃね？」）

と、いった声が聞こえてきた。そして、レジに向かってる最中ゆかりは必死に「違うんです！そういう意味じゃないんです！」と大声で言っていた。おもしろいなぁ…。

レジでお金を払い終わると店員さんに、

「おめでとうございます。今日のお客様をみたマスターが、今度カップルメニューを新しく作るらしいので、是非またいらしてください。」

と、笑顔でいわれた。それを聞いたゆかり半泣きになりながら「本当に違うんです。誤解なんです。」と言っていたが、面白いのでほっておいた。

店を出た後なんとか落ち着いたゆかりと寮へ帰ることにした。寮に帰ると、何故か喫茶店のことが順平の耳にはいっており、それをからかわれたゆかりがキレて召喚器無しでペルソナを召喚し暴れるなどの一騒動があった。

なぜ、召喚できたか先輩にきくと召喚器はあくまで安定して召喚するための物で、感情の高ぶりがある一定以上になれば召喚器無しでも召喚できるそうだ。これからは気をつけようと思う。

第十二話（後書き）

今回の話は女主人公の恋愛コミュの話をベースに日付とかいじって考えたものでした。使える素材っていろんなとこにあるんですね。

第十三話（前書き）

今回も短いです。

第十三話

４／３０（木）

昼休み――教室

今日は朝からとくに何もなく寝て授業を過ごしたが、やっと昼休みだ。前の席ではゆかりがぐったりしている。

「ゆかりー、ご飯たべないの？」

「ちょっと、朝から疲れちゃって食べる元気ない…」

机にうつ伏せになりながら答えるゆかり。まあ、朝からずっと喫茶店の話しを訊かれちゃ疲れるよね。元気がないなら助けてあげようかな。

「食べれないなら食べさせてあげようか？　…家族として。」

満面の笑みで言った瞬間、ゆかりが立ち上がりこっちを向いて手刀を振り下ろしてきた。

「違うってっ、言ってんでしょうがー！！」

《ガシッ》

「…なにやってんのかなぁ？　ウチの湊君に…」

手刀が当たると思ったら、当たる寸前で公子がその腕を掴んでいた。ナイス、公子。だが、とめられたゆかりの怒りは収まらない。

「離しなさいっ、この人の皮を被った悪魔を私は倒さなきゃいけないの！」

「それは私と本気でやり合うって受け取っていいかな？」

2人の後ろで『ゴゴゴゴゴ！』という文字が見えそうな迫力で睨みあう公子とゆかり。隣の順平なんてビビって壁際に逃げている。

「どうでもいいけどご飯食べないの？　昼休みおわっちゃうよ？」

「アンタのせいでしょうがっ！！」

そう言って怒ってくるゆかり。

「いや、知らないけど。公子も離してあげなよ。」

「…わかった。」

僕に言われて渋々ゆかりの腕を離す公子。…まったく、この2人には冗談が通じないのかな？すると、席に戻った公子が僕らの方に向かって言う。

「言っておきますけど、姉としてあなた達2人の交際は認めません！」

「付き合わないって。それに姉としてってなにさ？」

何故、公子までキレているのか意味がわからない。

「良い？　湊君。私はね、あなたのお姉ちゃんなの。その姉が認め

ないってことは、絶対に駄目なのよ。」

「いや、初めのとこから分かんないんだけど。お姉ちゃんって呼んで欲しいの？」

僕の言葉をきいて目を輝かせる公子。

「それはすごい魅力的な提案！　でも、公子って名前で呼んでもらうのも捨てがたい。ムムム…」

そう言って考え始めてしまったので、とりあえず放置しておこう。今度はもう1人の方だ。

「なんで、ゆかりはそんなに怒ってるの？」

訊いた瞬間、椅子に座ったまま『キッ！』という感じで睨まれた。

「湊君がいらないこと言うからでしょ！！」

「家族のこと？」

「そう、それ。」

そう言いながら「フンッ」といった感じで、怒ってるのかスネているのか微妙な表情をして鞄からお昼を取り出すゆかり。

「たしかに言ったのは私よ？　でも、そういう意味じゃないっつーの。」

「ふーん。ゆかりってたまに天然なのか、自爆するよね。」

まだ言うか、という怒りの視線を送られたので黙ってみる。

「なんで、みんなそう言う話題ばっかですぐ盛り上がるかな？　仮に本当でも本人たちの問題なんだし、他人がゴチャゴチャ言うことじゃないでしょ。」

「まぁ、この年代だとそれが普通なんじゃない？」

「それは分かるけど、度が過ぎるってのよ。ホント、朝からずっとで疲れちゃった。」

言いながらお弁当を食べ始めるゆかり。ここで順平がやっと復活したのか話しかけてきた。

「まあ、有名税ってやつじゃねぇの？　さすがにゆかりッチだって自分がいろんな男子の憧れだってわかってんだろ？」

「そりゃー、こんだけ騒がれたらね。でも、それって勝手な押し付けじゃない。私は少ない友人と交友を深めるとかでいいのよ。」

そういって、少し暗くなるゆかり。

「まあ、来週にはおさまってんだろ。部活ないなら今日明日はさっさと帰った方がいいな。」

「…そうする。」

順平の言葉に頷いて答えるゆかり。そうして、もうすぐ昼休みが終わるな、と思っていると後ろで「そうね、やっぱりお姉ちゃんも捨

てがたいけど公子の方よね。うん！」と、1人で納得してる人がいた。

放課後――教室

今日の授業が終わったところで携帯電話が鳴った。非通知だ……どうしようかな。まあ、いいか。取ってみよう。

『もしもし。こちら、テオドアでございます。』

「テオ？　なんで番号知ってるかは…まあ、きかないでおくよ。」

『フフッ、いつもお世話になっております。お話がございますので、ベルベットルームまでお越しください。既に、ご存じでしょうがベルベットルームへは、ポロニアンモールからもお入り頂けます。“扉”をお探しください。…では、お待ちしております…『テオ！』《ドゴン！》うわ、姉上やめてくだｓ…ツーツー』

通話は切れたが、切れる直前の音と声はなんだ？テオドア大丈夫かな、いまから行ってみるか。

――ベルベットルーム

ベルベットルームに行くと扉をあけてすぐのとこにエリザベスがいて出迎えられた。

「お呼び立てして申し訳ございません。実は…折り入ってお願いがございます。」

「お願い？　それはいいけど、テオは？　テオに呼ばれてきたんだけど。」

僕がそう言うと少しムッとした表情になるエリザベス。その後ろから声が聞こえていたのか、テオドアがやってきた。なんだか疲れているようにみえる。

「ようこそいらっしゃいました。実は先ほど電話は、我々2人からのお願いについてなのです。」

「ああ、そうなの。それで、電話の最後の物音ってなんだったの？」

「そ、それは…」

テオドアに訊いたつもりだったのに、何故かエリザベスが言いづらそうにしている。すると、テオドアが僕に声をかけてきた。

「ここではなんですし、席にご案内します。お茶でもしながらご説明しますね。」

「ありがとう。…あ、来る前にたこ焼き買ってきたんだけど、食べれる？」

きくと2人とも不思議そうな表情をする。あれ、たこ焼き知らない？

「たこ焼きって知らない？　小麦粉の生地の中にタコを入れて球状に焼いた軽食みたいなものなんだけど。」

そういうと、エリザベスが口をひらく。

「名前と見た目は存じておりますが、実際に食したことはございません。楽しみでございます。」

「では、お茶も紅茶など香りと甘みのあるものは避けた方がよろしいですね。ほうじ茶というものがありましたが、そちらでも宜しいですか？」

「うん、ほうじ茶なら大丈夫だとおもう。でも、どこで食べるの？　ソースの匂いあるから個人の部屋はやめといた方が良いと思うけど。」

僕が質問すると、エリザベスがこたえる。

「では、テオドア「姉上、やめて下さい」…では、ダイニングキッチンの部屋があるのでそちらにご案内いたします。」

つまらなそうに言っているが、エリザベスは何かテオドアに恨みでもあるのだろうか。

――ベルベットルーム・ダイニングキッチンの間

案内された扉をくぐるとダイニングキッチンの部屋に繋がっていた。ここの扉は本当に不思議だな。頼めば客間みたいなとこで寝かせてくれるかもしれない。

「では、お茶の用意をしますので、姉と一緒に席についておいてください。」

言ってテオドアはヤカンでお湯を沸かしはじめる。ってか、お洒落なヤカンだな…。

席に着こうとしたら、エリザベスが「失礼します」と言って椅子をひいてくれたので、ありがたく座らせてもらう。

「ありがとう。」

「いえ。」

僕が席に着くと、お茶の用意を終えたテオドアが急須と湯呑を３つ持って来た。４人掛けの席で僕の向かいにエリザベス、その右隣にテオドアが座った。

「どうぞ。熱くなってるので、お気を付け下さい。」

「ありがとう。…はい、君らには２つずつ買ってきたんだ。…さあ、どうぞ。冷めるといけないから、食べながら話そう。」

お茶を受け取るとそう言って、自分の前に１つ置き、２人の前に２つずつ重ねて置く。僕が置くとエリザベスとテオドアが食べ始める。

「では、失礼します。…これは！？」

「かぐわしい香り、そして味の方もまた大変美味でございます。これほどのものですと、お値段の方もそれなりにするのでは？」

驚いた顔すると無言でパクパク食べてるエリザベス。そして、テオドアは心配そうな顔をして僕に値段を訊いてくる。

「大丈夫、これ１パック４００円なんだよ。安くて美味しいのがウリみたい…エリザベス。テオドアのを狙うくらいなら僕のあげるからこっち食べな。」

自分の分を食べ終わり、テオドアの残りの１つジッと見ていたエリザベスにそう言って自分の分をわたす。

「こ、これは…すみません。ありがたく、頂戴いたします。」

顔を赤くしながら受け取ると、嬉しそうに食べるエリザベス。気に入ったみたいだし、また買ってこようかな。そういえば中身に気付いたかな?そう思って訊いてみる。

「そういや、たこ焼きって名前だけど、ここのは中身がタコじゃないみたいなんだ。中身なにかわかる?」

「人は…知った物事を意図して忘れる事はできぬ定め…僭越ながら、この世には…知らない方がよい事というのもございます。」

「そ、そう。じゃあ、聞かないでおくよ。」

エリザベスが恐い事を言ってきたので、それ以上は訊かないでおくことにした。そして、みんな食べ終わったとこでお茶を飲みながら、テオドアが口を開いた。

「さて、電話のときの話でございましたね。実は今回、貴方をお呼びするのは姉の役目だったのです。ですが、いつまで経っても悩んでばかりで電話をかけないものですから、私がおかけしたのです。」

そこで一度言葉をきりお茶に口をつけるテオドア。その横では顔を赤くして俯いてる小動物がいた…可愛い。

「そして、貴方と電話していることに気付いた姉が、怒って主の机を投げてきたのです。」

ヤレヤレと言った表情でそう言うテオドア。自分の方は正確には姉

じゃないけど、姉ってのはどこもデンジャラスってかバイオレンスなのかな？

「そうだったんだ。エリザベスも気にしないで電話してくれたら良いのに。あ、そういや非通知じゃなくすることってできる？　番号表示じゃなくて、『エリザベス』とか『テオドア』って表示されるだけで良いんだけど。」

「そうですね。多分ですが、できると思います。次回から、私か姉かかけた方の名前が表示されるようにしておきます。」

「うん、お願い。で、2人のお願いって何？」

そう尋ねると俯いてたエリザベスが、まだ少し赤い顔のまま話し始めた。

「私…思う所がございまして、お強い方を探しておりました。そこで、もし宜しければ、私たちよりの“依頼”にお応え下さいませんでしょうか。中には、あなたのエスコートが必要な特別な依頼もございますが…もちろん、依頼達成の暁には、相応の“報酬”もご用意しております。」

んー、どうしよっかな。最近、部活に生徒会ってなかなか忙しくなってきてんだよね。でもま、いろいろとお世話になってるし出来る事ならやってみるか。

「わかった、出来ることで良ければ受けるよ。」

「ありがとうございます。お客様がお力を示しにいらっしゃるのを、私…心よりお待ち申し上げます。」

お礼を言われたあと、お茶を飲み終わるとそろそろ帰ることにした。出口のとこまでくると、テオドアが話しかけてきた。

「依頼の件、ありがとうございました。貴方のお力を、私も見てみたいのです……では、お待ちしております。またお越しくださいませ。」

「うん、またくるよ。エリザベスもまたね。」

「はい。またのお越しをお待ちしております。」

そうして僕は寮に帰って、すぐ休むことにした。

第十三話（後書き）

ベルベットルームのはオリジナル設定です。湊も予想で言ってたので、そのうちお泊りに行かせるのも良いかもしれません。

第十四話　前編（前書き）

今回のは長くなったので分けました。それと名簿を届ける日も変わっています。

第十四話　前編

5／2（土）

朝――校門

朝、学校へ向かっていると校門のところでゆかりに声をかけられた。

「おっはよ。なんか、すっかり暖かいねー。まあ、昨日からもう5月だもんね。早いと思わない？」

「確かに…って、言いたいけど4月の三分の一を寝て過ごしたからなんとも言えないな。」

苦笑しながらそう言うと、ゆかりもしみじみ答える。

「ほんと、色々あったしねー。…って言えばさ。無気力症の事件、全然減らないね…シャドウと戦えるの、私たちだけだから…この前みたいにさ、何かあったときのために、もっと力つけないとね…私は自分のペルソナの力…もっと、強くしないと。いつも守られてるワケにいかないから……あ、行こ行こっ。」

言われて遅れないよう、教室に向かった。授業はもちろん今日も寝て過ごした。

放課後――教室

授業が終わり、帰る準備をしていると順平が話しかけてきた。

「そう言や、知ってた？　真田サン、今日、検査入院でさ。さっき連絡あって、病院に届けモノ頼まれちゃったんだよネ。オレって、

結構頼られてる？」

「そんなの、帰宅部ならヒマだろうって頼んだんでしょ。」

ゆかりのキツイ一言に順平も「そ、そんな事ねーだろ。」と、動揺しながら答える。…少し、納得したんだな。そして、ゆかりが続ける。

「ハハ、冗談だって。で、何を持って来いって？」

「隣のE組の、“クラス名簿”だってさ。」

順平の言ったことをきき不思議そうに考えるゆかり。

「名簿…？　どうすんだろ、そんなの。て言うか、今日、たまたま部活休みだし、付き合おっかな、それ。2人も行くでしょ？」

「んー、まあ私も部活ないし別に行っても良いよ。湊君はどうする？」

「え、行かないよメンドクサイ。」

ってか、名簿なんて真田先輩のことだから、取り巻きの子に飽きて新しい子を探すためか、新しい適正者探しだと思うし。そう考えていると、ゆかりが僕に対して口を開く。

「まぁた、そういうコト言う。病院まで来いなんて、何か、大事な用っぽくない？」

「つか、オレが頼まれたのになぁ…」

そうだよ、順平が頼られて喜んでたのに役目奪っちゃ可哀想だよ（棒読み）…口に出さないと棒読みしても意味ないな。

「諦めなよ、湊君。」

「大事な用なら、みんなで行っといた方がいいって。ね？」

そういって、2人に引っ張られながら教室を出て病院に向かった…順平をおいて。

――辰巳記念病院

ナースステーションで真田先輩の病室をきき部屋にきた。だが、部屋のどこにも先輩の姿はなく、代わりにベッドには見知らぬ少年が…あれ？あの人って。

「……。」

「ここって真田サンの病室……じゃなかったりします？」

順平が元気よく入ったが知らない少年がいたためトーンダウンする。数秒間そうしてると、廊下から誰かがやってきた。

「ん？　お前たち。どうした、大勢で？」

入ってきたのは真田先輩だった。それを確認すると、やっとこの空気から解放されるとばかりにゆかりが先輩に話しかける。

「お見舞いに来ましたっ！　…でも、なんか平気そうですね。」

「ただの検査入院と言ったろ。」

先輩がきたことで、ベッドに座っていた少年が立ち上がり先輩に声をかける。

「アキ、もういいか？」

「ああ、参考になった。」

「ったく…いちいちテメェの遊びに付き合ってられるか。」

そうして部屋を出るため、少年が僕たちのいる入り口の方へやってきた。あ、この人やっぱり…。すると、相手も気付いたのか立ち止まった。

「お前…」

「やっぱり、犬の人だ。」

「っな！？」

僕がそういうと、犬の人こと荒垣さんが驚いた顔をして、僕の腕を掴んできた。

「アキ、こいつ借りてくぞ！　じゃあなっ。」

そうして僕だけ部屋の外に連れていかれた。人攫いじゃね？

――病室　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

ニット帽を被った男の人が部屋を出て行くためにこっちへ来ると、

湊君の前で立ち止まった。

「お前…」

「やっぱり、犬の人だ。」

「っな!?」

湊君がそういうと、湊君が犬の人（?）と呼んだ人が驚いた顔をして、湊君の腕を掴んで引っ張っていく。

「アキ、こいつ借りてくぞ!　じゃあなっ。」

そういうと、犬の人は湊君を連れたまま病室から出て行った…誘拐!?

「ちょっ、湊君が犬の人とかいうヤツに誘拐された!!　真田先輩、アイツの居場所を教えて下さい!!」

「どうした急に、落ち着け草摩!」

落ち着けですって?湊君が攫われたのに落ち着けるわけないでしょ!私がそう考えてると、順平が先輩に尋ねる。

「だ…誰っスか、今の?」

「一応、同じ学園の生徒だ。先月から増え出した“謎の無気力症”…お前達も知ってるだろ。アイツたまたま、患者の何人かを知ってな。話が聞きたくて呼んだ。なぜ有里と知り合いなのかは知らんがな…それより順平、頼んでた物は?」

うちの生徒?…なら、学校で会ったら覚えてろ。私の湊君を連れ去った報いを受けるがいい!

私が密かな決意を固めている間も先輩たちの会話は続く。

「モチ、持って来たッス。」

「済まんな。じゃあ、そろそろ行くか!」

そういって腕をブンブンまわしながら病室を出て行く先輩。見ていた順平が驚きの声をあげる。

「ちょっ。んなに腕ブンブン振ったら、また…」

「平気だ、このくらい。あまり長いと部活にも響くだろ。取り戻す時間が惜しい。」

言いながら腕を回し続ける先輩。そこでゆかりがふと口を開く。

「そう言えば先輩って、なんでボクシングを?」

「…始めた理由か? そうだな…別にボクシング自体に思い入れはない。素手の格闘技なら何でも良かった。昔、自分の無力さを思い知った事があってな……もう、ああいう後悔はしたくないんだ。」

そう言って少し悲しそうな顔をする先輩。そう言えば先輩って妹さんを火事で…そういうことか。

少しして先輩が顔をあげると、いつもの明るい表情に戻っていてそ

のまま話を続ける。

「それに、自分がどこまで強くなれるのか、興味もあるしな。まぁ、言ってみれば“自分対自分”の、終わらないゲームみたいなものだ。」

「な、なるほど…ゲームっスか…好きっスよ！　オレもゲームッ！」

先輩に気を遣ったのか無理矢理明るい調子で言う順平。すかさず、ゆかりのツッコミが入る。

「あんたのはテレビゲームでしょ？」

「あ、でも“格ゲー”もやるよ？」

順平がそういうと疲れた表情をしてゆかりが「…どうでもいい。」と言った。多少、無理矢理でもこうやって気遣えるって良いよね。そう思いながらみんなで寮に帰って行った。

――巌戸台駅前商店街・ラーメン屋“はがくれ”　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

荒垣さんに連れられ商店街のラーメン屋にやってきた。席に着くと荒垣さんが話しかけてくる。

「好きなの頼め…奢ってやる。」

「え？　なんか奢ってもらえるようなことしましたっけ？」

「いや、無理矢理連れ出した、そのお詫びってやつだ。」

あぁ、勢いとはいえ勝手に連れ出したこと気にしてたのか。

「別に良いですよ。もともと、友達に引っ張られて連れてかれただけですから。」

「…そうか。まあ、無理矢理連れ出して悪かったな。勢いで連れてきたのもあるが、少し話が訊きたかったんだ。食いながらで良いから、答えれるなら答えてくれ。」

「わかりました。じゃあ、荒垣さんと同じものをお願いします。」

「あいよ。」

そういって特製ラーメンを2つ注文する荒垣さん。頼んで少しするとラーメンが運ばれてきたので、食べながら話し始める。

「で、何が訊きたいんです？」

「ん？　…ああ、お前らアキ…お前らで言う真田のことだが、アキとはどういう知り合いだ？」

んー、どう答えるべきかな。たぶん、荒垣さんもこっち側だと思うけど確証ないしな。遠まわしにきいてみるか。

「関係ない話をしますけど、荒垣さんは無気力症の原因はご存知ですか？」

「なんだ急に？　…ああ、そういう事か。お前らも影時間のこと知ってんだな。」

「お前らもってことは、やっぱり荒垣さんもこっち側の人間でした

か。」

いってから、ラーメンに口をつける。前に友近に連れられてきたときは普通のラーメンにしたけど特製の方が美味しいな…と、考えていると、荒垣さんが答える。

「まあ、“元”だがな。今は世間で言うただの不良だ。」

「ペルソナは心の鎧であり、武器でもあるってききました。一度覚醒したら余程のことがない限り、力が使えなくなったりしないのでは？」

「…力が使えなくなったわけじゃねぇ。捨てただけだ。」

そういって荒垣さんは少し暗い顔をした。

「そうですか。ま、僕もペルソナ使えないんですけどね。」

「…なに？」

僕の言ってる意味が理解できなかったのか、荒垣さんは疑問の中に驚きを混ぜたような表情をむけてくる。

「僕も力が使えないって言ったんです。召喚器で撃ってみても何も反応がないんです。知り合いがいうには、何かが邪魔をして力を抑えてるんじゃないかって話ですけど。」

「んじゃ、なんで仲間やってんだ。理事長と一緒にサポートでもしてんのか？」

サポートねぇ…理事長ってあんまサポートとかしてないと思うんだけど、いろんなとこに根回ししたりしてんのかな？

「いえ、一応みんなと一緒に前線で戦ってますよ。まあ、そっちでサポートにまわってるんでサポート役ってのは変わりませんが。」

言ってからラーメンのスープを飲み干す。うん、お腹がタポタポする。すると、荒垣さんが話しかけてきた。

「力がねぇならやめとけ、命落としてからじゃおせぇんだぞ。」

「…そうかも知れませんね。」

「わかってんなら、さっさとやめやがれ。お前が死んだら他のやつらがそれを背負うことになんだぞ。」

そう言って荒垣さんは立ち上がった。背負う……か。まあ、わかってはいるんだけどね。でも、この人は僕だけじゃなく、部活メンバーのことも考えてるんだな。やっぱり優しい人だ。

「食い終わったんなら行くぞ。」

言われて僕も席を立つ。荒垣さんが会計をしてる間に外で待っておくことにした。

――巌戸台駅前商店街

店の前で待っていると会計を終えた荒垣さんが出てきた。

「ごちそうさまでした。」

「おう。」

そう言って、階段を降りて行くので僕もそれの後ろをついていく。
下まで降りると荒垣さんが振り返って口を開く。

「じゃあな、話きかせてもらって悪かったな。」

「いえ、こちらこそご馳走していただき、ありがとうございました。」

言って、頭を下げる。

「気にすんな。じゃあ、アキたちによろしくな。…それと、仲間を助けたいのは分かるが、力がないなら諦めろ。足引っ張ってお前が仲間を殺すことになるぞ。」

荒垣さんは、そう忠告して去って行こうとする。だが、僕も伝えておかなくちゃいけない。

「…仲間じゃありませんよ。」

「…あ？」

話しかけたことで振り返る荒垣さん。そして、僕はそのまま続ける。

「僕に仲間はいません。みんなが僕をそう見ても、僕にとって彼らは仲間じゃない。」

「…んじゃ、なんだってんだ。」

「友達です。仲間っていうのは、お互いに信頼して命を預けれる関係でしょう？　僕はそこまで人を信用したりできません。だから…友達です。」

僕の言ったことを聞いて相手はなにか考えている。だが少しすると、顔をあげ口を開いた。

「なら、なんで一緒に戦ってんだ。信用できない人間と戦うって事は、背中を斬られる危険があるってことだろ？」

「そうですね。でも、襲ってきても逆に殺せるならどうですか？」

「なに言ってんだ？　お前だって知ってんだろ。ペルソナ使いはある意味、兵器みてぇなもんだ。たとえガキでも、ペルソナさえあれば大人の男にだって圧勝できるんだぞ。」

呆れたようにそう言う荒垣さん。ま、僕みたいなイレギュラーな能力を持ってるやつがいるなんて普通思わないしね。

「くだらねぇ妄想してねぇで、さっさと諦めろ。お前はこれから先、仲間と並んでは歩けねぇんだからよ。友達としてでも一緒にいたいなら、前線は諦めて理事長と一緒に裏方にまわれ。それが“元”先輩としてのアドバイスだ。んじゃ、今度こそまたな。」

「…はい、ありがとうございました。また会いましょう。」

そう言うと、荒垣さんは背中越しに手を振ってくれた。少しして姿が見えなくなったので、僕も寮へ帰ることにした。

夜――ラウンジ

寮に帰るとみんながラウンジにいたが、最初に声をかけてきたのは順平だった。

「…ういっす、おかえりー。明日から華の3連休だな。誰か誘って遊びに行こうかと思ったけど、ノッて来んの男のダチばっかでさぁ…ヒマだわ、結局…」

そう言って少し脱力しているが、桐条先輩からのありがたいお言葉がかかる。

「休日の事までとやかく言う気は無いが、中旬からは中間試験だ。計画的に過ごせよ?」

「うげー…せっかく忘れてたのに…」

先輩の言葉をきいて嫌そうな顔をするゆかり。でも、うげーはないだろ。可愛くない。そんなことを考えていると、桐条先輩が僕に話しかけてくる。

「…それはそうと、有里。明日から連休だし、どうだ…タルタロスへ出向かないか? 明彦の復帰はまだ少しかかる見込みだが、またこの間のような事があるとマズい。それに、例の事件がこのところまた増え始めている。…妙な胸騒ぎがしてな。今のうちに力をつけておいて欲しいんだ。」

そうだな。荒垣さんに言ったことじゃないけど、仲間がいなくてもどれだけできるかってのをもう少し把握しておきたいし行こうかな。

「僕はいけますよ。着替えてくるんで、行く人は準備しておいてください。」

そういって部屋に戻った。

――自室

準備をしに戻り電気をつけようとすると部屋にはあの少年がいて、僕に話かけてきた。

「やぁ、元気かい？　フフ…」

「君は…」

「この前も会ったよね。元気だった？　1週間後は満月だよ…気をつけて。また1つ、試練がやってくるからね…」

満月がどうしたんだ?それに試練てなんだろう。疑問におもったので聞いてみることにした。

「試練ってなんのこと?」

「君が“やつら”と出会う事さ。試練と向き合うには準備が必要だ。でも時間は、無限じゃない…もちろん、君なら分かってると思うけどね。じゃ、それが過ぎたら、また会いに来るよ。」

そう言うと、少年は見えなくなった…少年の言った“やつら”ってのはシャドウのことか?それに満月…そういうことか。あの少年のいうことが本当だとしたらだけどね。この仮定の答え合わせは一週間後だな。それじゃ、みんなを待たせてるし準備するか。

そうして準備を終えるとみんなと一緒にタルタロスへ向かった。

影時間――タルタロス・１１Ｆ
前回来た時に１０階のフロアボスを倒したとこで帰ったので今日はその続きからだ。１１階についたとこで早速先輩から通信がはいる。

『…また、フロアをうろつくシャドウの雰囲気が変わったな。もし戦闘に慣れてきたなら散開して個別に戦うのも一つの手だぞ。敵との戦力差というリスクを抱える分個別に戦うことは、大きな経験となる。しかし、敵が強いようなら先を急がず集合して戦った方がいいだろう。集合と散開を状況に応じて使い分けてみてくれ。』

先輩もそう言ったことだし、今日は単独行動とらせてもらうかな。

「じゃあ、先輩が言った通り今日は分かれて探索してみようか。」

そういうと、ゆかりが質問してくる。

「じゃあ、湊君のいない方のリーダーはどうするの？　ってか、どう考えても戦力のバランス取れなさそうなんだけど。」

「ああ、それなら問題ないよ。もう１つのチームは公子にリーダーやってもらうから。中・近距離タイプだし、３人の中で一番戦い慣れてるから適任でしょ？」

聞いてある程度、納得したのか順平がさらに尋ねてくる。

「それはいいけど、結局チーム分けはどうすんだよ？」

「ん、僕とそれ以外でだけど？」

「はあ！？　いくらなんでも無茶だろ！」

チーム分けをきいて驚く順平。ゆかりと公子も順平ほどではないが驚いているようだ。すると、公子が説明を求めてくる。

「チーム分けの理由を教えてもらっていいかな？　理由によってはその判断には従えないんだけど。」

「簡単だよ。サポート無しで、どこまで出来るようになったのかの確認。それに僕以外の指揮で動く練習もしておかないと、突然の事態に対応できないでしょ？」

その説明で納得したのか黙る3人。じゃあ、先輩にも伝えておくか。

「桐条先輩、きこえてましたか？　これから、僕と3人で別行動をとります。サポートを期待されては困るので僕が先行したいと思います。ですので僕が抜けた分、彼らのナビをしっかりお願いします。逆に僕の方はナビは必要ありませんので、こちらから連絡しない限り通信はしないでください。彼らがピンチのときも助けに行かないのでその時は撤退指示を宜しくお願いします。」

『説明はわかったが本気か？　撤退指示をしても逃げれるかはわからない。敵も強くなったようだし、初めてのフロアだ。安全を考え、下のフロアから始めた方が良いと思うが。』

「なら、下のフロアから始めてもらっても構いません。僕はこのまま行くので脱出ポイントまでは送りましょう。それで良いですか？」

そういうと通信機の向こうでさっきよりも動揺する先輩。それに3人も少し不満げだ。

「なに言ってんだ湊。先輩はオマエが1人で行くことも危ねぇっていってンだぞ。」

「どうして？」

僕が尋ねるとゆかりも口を開く。

「どうしてって、今までより強い敵が出てくんのよ？　私たち3人だけで、このまま進むならまだしも、湊君1人は下のフロアか先輩たちと待機が普通でしょ。」

「普通ねぇ…。まぁ、どうでもいいよ。じゃあ、先輩。3人のことよろしくお願いしますね。」

そう言って僕は歩きだす。すると、順平が腕を掴んで止めてくる。

「待てっつってんだろ！　なに、勝手に行ってんだよっ。」

「…あのさ。勘違いしてない？」

「あ？　何がだよ？」

僕の言葉に不思議そうにする順平。そのまま僕は話を続ける。

「何がって、僕と君たち部活メンバーの関係の話だよ。僕はお金で雇われて力を貸してるだけで、仲間じゃないんだよ？　召喚器と一緒にトランクに入ってた腕章を着けてないのもそういう理由。そんな雇われを新人のリーダーに当ててちゃ駄目でしょ。正規メンバーの中でもリーダーが出来る人材を育てて、他のメンバーにも指揮官が変わっても動けるようにしておかないと、いざって時に全員死ぬ

よ？」

話をきいて黙るメンバーたち。…なんだ、仲間だと思ってたのか？最初から違うって言ってたのに。まったく。

「まあ、クライアントがどうしてもって言うなら、今日も一緒に行動しますよ。ただし、今日は他のメンバーにリーダーをしてもらいますけど。どうします？」

『わ、私は…君の言う事も理解できるが、安全を優先したい。リーダーは君が言った通り草摩に代わってもらうから、一緒に行動してくれないか？』

「…了解。じゃ、先導と指示をお願いします。リーダーさん。」

そういって公子の方をみると、黙っていた公子が口を開く。

「…わかった、リーダー引き受けるよ。じゃあ、先ず湊君。貴方は1人で行動して。今日は貴方がいるとチームが機能しないから。」

公子がそういうと桐条先輩が慌てて通信を入れてくる。

『何を言ってるんだ、草摩！　いま、安全のことを考え同行を依頼したばかりだろう！』

「そうです。だから、安全のことを考えて湊君をメンバーから外すんです。私はともかく、他の2人はいま湊君と一緒に戦えそうにありませんから。」

『っつ、わかった。もういい、今日は全員戻ってこい。少し頭を冷

やせ。これは命令だ。』

先輩がそういうと少し間をおいて公子が答える。

「…わかりました。では、脱出ポイントまで誘導お願いします。いくよ、2人とも。…じゃあ、気をつけてね。湊君。」

「うん。まあ、脱出ポイントまでは送って行くよ。」

そう言って僕も歩きはじめる。だが、ゆかりと順平が動かないまま、声をかけてきた。

「どういうことだよ？　なんで、オマエは戻らないみたいに言うんだよ？」

「そうよ。桐条先輩、命令だって言ってたじゃん。湊君も帰るんだよ？」

…2人はまだ理解してないのかな？

「なんでさ。みんなは帰るんでしょ？　なら、僕の業務はそこで終了じゃん。僕の仕事はみんながタルタロスに挑むときの手伝いなんだから、他は勝手に行動していいはずだよ？」

「んな、屁理屈どうでもいいんだよ！　全員戻れって言われたんだからオマエも戻れよ！」

順平が怒りながらそういうと、桐条先輩からも通信が入る。

『伊織たちの言う通りだ。私は全員戻れと言ったんだ、勝手な行動

は許可しない。勝手な真似をするのであれば、召喚器を取り上げさせてもらう。草摩、有里から召喚器を取り上げろ。』

「だってさ。召喚器を渡してくれる、湊君？」

「…わかった、ハイ。」

言いながら、公子に召喚器を手渡す。そして、ゆかり達に声をかける。

「…じゃあ、行こうか。」

――タルタロス・１１Ｆ脱出ポイント

さて、ここまでで良いかな。

「じゃあ、起動してくれる？　リーダー。」

「…わかった。起動するから全員よって。」

僕に頼まれ公子がそういうと、順平とゆかりが装置のまわりに集まる。

「いくよ、起動。」

そういって、装置を起動させるとみんなが光に包まれ始める。そして、完全に包まれる前に気付かれないよう、飛び退くとみんなは転送されて行った。

「んじゃ、最初に貰った剣以外使ったことなかったし、新しい装備も使ってみるかな。」

僕は言いながら、上のフロアを目指した。

――タルタロス・エントランス　{公子　Ｓｉｄｅ}

《シュンッ》

私たちがエントランスに戻ると、いきなり桐条先輩が怒ってきた。

「まったく、お前たちは何を考えているんだ！　これは遊びじゃないんだぞ。確かにメンバーとのトラブルで一緒に行動したくないときもあるだろう。だが、そう思っていても協力しなくてはいけないときもあるんだ。わかったら、今日の事は全員反省しろ。」

まあ、たしかに私も少し熱くなってたかな、と考え、桐条先輩の話も終わると真田先輩が、口を開いた。

「ん？　おい、有里はどうした。」

言われて振り向くゆかり。

「え？　あれっ、転送のときたしかに私の横らへんにいたのに！？」

「まさか、有里のやつ召喚器を持たないまま行ったのか！？　美鶴、こいつらを向かわせろ。ダメなら俺が向かう！」

そう言って、グローブと召喚器を準備する真田先輩。だが「なにを言ってる！」と、やはりそれを許可しない桐条先輩。

「…っち、通信も繋がらない。しょうがない、草摩たちを向かわせるから、明彦はここで待機だ。草摩、引き続きリーダーを頼む。岳羽、伊織、リーダーが代わって勝手が違うとは思うが時間がない。

実戦で慣れてくれ。有里と別れてから、まだあまり経っていない。召喚器がないからスキルを使えず進行は遅いだろうから、すぐ追いつけるはずだ。行って連れ戻してくれ、頼んだぞ。」

「わかりました。急ぐよ、2人とも。戦闘はなるべく避けるから、素早く行動してね。」

私がそういうと2人は揃って「「了解！」」と答えた。そして、転送装置を使い急いで湊君を追いかけた。

だが、先輩のその予想は外れ、私たちは追い付けないまま階を進んだ。そして、１４階に着いたとき桐条先輩の『フロア中央に反応が１体！　かなり強いが、誰か戦っているようだ。有里に違いない、みんなも気をつけろ！』という言葉をきき急いでその場所に向かうと信じられない光景に遭遇した。

第十四話　前編（後書き）

後編もよろしくお願いします。

第十四話　後編（前書き）

前編の続きです。

第十四話　後編

――タルタロス・１４Ｆ　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

雑魚を倒しながら階をあがっていくと、１４階で今までより強い気配を感じた。５階と１０階のフロアボスより、かなり強いみたいだ。順平がタルタロスはいくつかのエリアに分かれてるって言ってたから、こいつがエリアボスなのかも知れない。少し警戒していくかな。

警戒しながら進むと転送装置があったので、電源だけ入れておく。どんどん気配が強い方へ進んでいくと少し拓けた場所にそいつはいた。鎧を着たような胴体、真横に伸びたランスのような両腕、何本もの足が付け根から膝を曲げた状態でつき見た目は卍の形をしたタイヤのようになっている両足。雰囲気からアルカナは戦車だろう。物理に強く耐久力もあるか…ま、なんとかなるだろう。

「よし、いくぞ。」

そういって、敵に向かっていく。まずは弱点を探すため、片手剣を装備し接近する。

「その腕、もらうぞ！」

言いながら一気に加速し相手の懐に潜り込む。そして、相手のタイヤのような足を蹴って跳び上がり、剣を敵の腕の付け根のランスで言う持ち手の細い部分に叩きつける。だが、

「っち、ほとんど効いてないか。」

叩き斬るため全力で振り降りしたにも関わらず効いてないと分かる

と、バックステップで距離をとり剣を鞘にしまう。しかし、敵もただ止まっているわけではない。両腕が光ったかと思うと、広範囲に電撃を飛ばしてきた。

「くそっ、マハジオか。」

ダメージを受けないようにするため、回避に集中する。だが、あまりに広範囲のため避けきれない部分が出てくる。

「なら、これで！」

そう言って剣を鞘ごと抜き、避けきれない電撃に当てていく。剣の鞘は革製のため、電気を通さないからだ。そして、電撃が止むと次の行動に移る。

「こい、【黒紅（くろべに）】！」

白金の腕輪に手をかざし、テオドアに貰った弓を取り出す。この弓の良いところは普通の弓として使う際は、魔力をこめればいくらでも矢が出現するところだ。まぁ、魔力でできた矢だからずっと顕現してるわけじゃないけどね。そのまま、矢を3本出現させ、同時に射る。

「縦三ってねっ」

そういって、シャドウの顔・胸・股間に矢が命中するがこれも効果がないようだ。

「…物理全滅か？　っうお！？」

射ち終え弓をしまい、効き目を見ているとシャドウが突っ込んできた。順平のヘルメスが使っていたアサルトダイブみたいだ。来る前に回避して敵の背後をとり、そのまま最後の物理属性である打撃を狙う。

「痛そうだから、足でいくぞっと！」

背後にまわり、今度は相手の背中を蹴って跳び、さらに胴体の鎧の襟のようなとこを足場に相手の頭上を取る。

「そうれっ！　…っち。」

勢いをつけた回転踵落としを頭部に喰らわせるが、これも効いた様子がない。斬・打・貫のすべての物理技が効かない事がわかった。着地すると同時に急いで距離を取る、この距離でマハジオをされては避けることも防ぐこともできないからだ。だが、今度は距離を取りきる前に敵も接近してきた。

「また、アサルトダイブか？　っ！？」

同じように避けようとすると、敵は左腕のランスを正面に向けその場で右足を軸に時計回りに回転した。横に逃げていた僕は空中にいるときにそれを喰らい避けきる事ができない。

「がっ！　痛ってぇ…右目側の死角を、突かれるとはね。」

なんとか腕でガードし吹き飛ばされることで、貫かれることを回避した。だが、かなりの距離を飛ばされ転がりながら壁に叩きつけられたことで、結構なダメージを受けてしまった。…っ！？

「公子たちか…先輩の指示で追いかけてきたのか？　なら、来る前に終わらせなきゃな！」

そういって、再び白金の腕輪に手をかざす。

「いくぞ、カデンツァ！」

腕輪から取り出した魔石に魔力を注ぎ、ミックスレイドを発動させる。さっき喰らったダメージが回復し、さらに身体が軽く感じる。どうやら、回復だけでなく回避力も上昇するようだ。だが、僕がまだ倒れていないことに気付いたらしく、シャドウが突っ込んでくる。

「時間がないから、一気にいくぞ。」

公子たちもかなり近付いてきてるため、一気に仕留めにかかる。右手のひらを上に向け、左手も腕輪にかざす。意識を集中しそれぞれ右手には緑、左手には赤の小さな魔石であるジェムを取り出し、大量の魔力を送る。

「ちぃ、たしかに魔力をかなり持ってかれるな。」

だが、敵も迫ってきているため、休んでいる暇はない。魔力を送り終えたジェムごと手をシャドウにむけスキルを放つ。

「喰らえ、マハガルとマハラギの融合、“炎の嵐”！！」

発動した瞬間、凄まじい炎が荒れ狂う風と融合し、フロアを吹き飛ばすのではないかという威力の炎の嵐を生み出す。突っ込んできていたシャドウも炎にのまれるが、視界全体を炎が占めているため倒せたかどうか分からない。

「どう、なってんのか、わからないけど…このまま押し切るぐらいでいいよなあ！！」

そういって、さらに魔力を送り続けるとおさまりかけていた炎の嵐が再び暴れ狂う。

――タルタロス・１４Ｆ　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

《ドゴォオオオ！！》という音が聞こえたと思ったら、凄まじい炎に私たちは吹き飛ばされていた。

「キャア！」

「うわぁ！！」

ゆかりと順平も一緒に吹き飛ばされる。でも、なんなのこれ！？喰らったのは攻撃の余波みたいだけど、余波だけでこの威力のこんな敵、いまの私たちのレベルで勝てる訳ないじゃない！

「ぐぅ…なん、っだよ。このデタラメな攻撃は！？」

「湊君、こんなの１人で相手してるっていうの！？」

そうだ、むこうではこの敵と湊君が戦ってるんだ。たとえ、自分がどうなっても助けにいかなきゃ！

「ゆかり、順平！　攻撃がおさまってきたら一気に突っ込むよ。湊君を発見次第、つれて離脱。こんな敵、倒そうなんて考えないで！」

「わかった。じゃあ、オレと公子ッチが前衛でいくぞ。ペルソナに

火耐性ついてる分、ゆかりッチへのダメージを少しぐらい軽減できるだろ！」

「ＯＫ！　じゃあ、ゆかりは私たちの後ろからきて。いくよ！」

おさまってきた時を狙い起き上がって走り出す私たち。でも、今現在戦ってるであろう場所に向かおうとした瞬間、再び衝撃に襲われ倒れてしまった。一体何なの！？ゆかりと順平も２度目の衝撃に戸惑っている。

「なによこれ、さっきより威力上がってんじゃないの！」

「何体かフロアボス倒してきたけど、こいつだけ規格外すぎだろ。倒せる気がしねえよ！」

たしかに異常だ、こいつだけ別格過ぎる。でも、それでも湊君を助けなきゃ！

「ゆかり、どうにかして風で道作れない？」

「無茶言わないでよ、それこそ私たち全員分の力注ぎ込んでも勝てないってのに。」

っく、じゃあどうしたら…そう思っていたら炎がおさまってきた。どうやら、さっきとは違い完全に止みそうだ。

「攻撃が止んだ。行くよ、順平、ゆかり！」

「「わかった！」」

そういって、私たちは戦闘場所へ向かった。

――タルタロス・１４Ｆ　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

「はぁ…はぁ…」

かなり魔力を使ってしまった。もう、小技を１つ２つしか使えないだろう。ジェムが消えると同時に風と炎が止まり、暴れ狂っていた炎の嵐もおさまった。見渡してみると、敵は跡形もなく消し飛んだようだ。ってか、あれでダメなら確実に殺されてたと思う。

「ふぅ、疲れた。んじゃ、公子たちを迎えに行くか。」

そうして壁に手をつきながら立ち上がり、公子たちの気配のする方へ向かう。どうやら向こうもこっちへ向かってきてるようで、徐々に姿が見えてきた。

「おーい。」

そういって、手を振ってみると向こうも気付いたみたいで走るスピードをあげたみたいだ。先頭は公子で、後ろに順平、ゆかりって順でよってくる。

「湊君っ！！」

言いながら公子が飛び付いてきた。

「うぉあ！！　どうしたのそんな急いで？」

「大丈夫！？　怪我してない！？」

「少し疲れてるけど、大丈夫だよ。んで、なんで急いでたのさ。」

公子の質問に答えながら再びきいてみると、順平が焦りながら尋ねてくる。

「そんなことより、敵はどうしたんだよ！　まさか、倒したとか言わねぇだろうな！？」

「え、いや倒したけど。なんで『まさか』なのさ？」

僕がそういうと今度はゆかりが口を開く。

「なに言ってんのよ、あんなデタラメな攻撃してくるようなやつに生身の湊君が勝てるって思う方がおかしいでしょ！」

「デタラメ？」

いや、たしかに変な姿してたし物理無効は反則ぽかったけど別に…あぁ、さっきのことかな？一応、心当たりがあるので訊いてみる。

「デタラメな攻撃って“炎の嵐”のこと？」

「名前なんか知らねぇけど、たしかに炎の嵐って言われりゃ納得の攻撃だったな。んで、どうやって倒したんだよ。オレら3人なんて立ち上がることすら出来なかったんだぞ。」

順平がそういうと他の2人も気になるのか僕をじっと見てくる。正直、言いづらいな…「その攻撃したのが僕です」なんて。よし、誤魔化そう。

「まあ、いいじゃない。みんな無事だったんだし。それより、ここまで来たんならついでだし上いこうよ。もう少しっぽいし。」

「何言ってんの？　あんなのと戦った湊君をそのままにできる訳ないじゃない！　今日は一回帰るよ、ほら早く。」

そう言って僕を引っ張る公子。えー、なにそれめんどくさい。あと、2階登ればエリア終了っぽいんだから行きたいのに…助けて、ゆかり！

「ゆかりは別に登って良いと思うよね？」

「はぁ？　それこそ冗談でしょ。見た目は大丈夫でもあんな相手と戦って無事な訳ないんだし、公子の言う通り帰るよ。」

なんてこったい。嫌だなぁ、言ったら絶対怒るもん。でも、言わないと強制連行だし…カミングアウトするか。

「あのね、みんな。」

「ん？　どうしたんだよ、湊？」

「どうしたの？　やっぱり怪我してた？」

「怪我してるなら、ディアで応急処置だけどしてあげるよ？　どこ怪我したの？」

なんか、みんなの優しさが心に痛い。でも、言わないとね。

「さっきの“炎の嵐”だけど、あれやったの僕なんだ…。」

そういうと、ぼけっとした顔になるみんな。とくに酷い顔なのが順平。公子とゆかりはキョトンって感じだから可愛いと言えば可愛いしね。そう考えていると、再起動し始めるみんな。

「ゆかり、急いで戻るよ。どうやら、記憶の一部に障害おこしてるみたい。」

「わかった。順平、湊君のこと背負ってあげて。その方が早いと思うから。」

「おし、任せろ！　ほら、嫌かも知れないけど乗れ、湊！」

うわぁ、みんな酷いや。こりゃ、威力弱いのでいいから何かスキル発動しなきゃ納得してくれないな。よし。

「じゃあ、ちょっと見てて。」

そういって、集中し始める。危ないから、マハガルジェムに少し魔力注ぐだけでいいか。やることを決めると、左手にマハガルジェムを出現させ魔力を込める。いくぞ。

「マハガル！」

そう唱え、込めた魔力分スキルを解放するとあたりに突風が巻き起こる。すると、公子とゆかりが慌ててスカートをおさえる。

「こら！　わかったから、その風止めなさい！」

「どんなスキルの使い方してんのよ！」

言われたのでジェムを消して風をとめる。下に視線をおくると順平が倒れている。どうやら、僕を背負うためにしゃがんでいたとこに、背中にマハガルを喰らい前のめりに倒れたようだ…ドンマイ☆

「ってか、なんで召喚器も無しにスキル発動できてんの？」

「なんでって召喚器使ってスキルを発動させるのは、カードだけだもん。魔力消費が増えるけど、他の媒体なら召喚器無しでもスキルぐらい発動できるんだよ。」

僕がそう説明すると呆れたような顔をするゆかり。

「じゃあ、召喚器とりあげたって意味ないじゃない…。ってか、あんなの出来るなら下層のフロアボスくらい楽勝でいけそうだし。なんで黙ってたのよ？　つか変態。」

「楽勝かも知れないけど魔力消費激しいから、長時間の探索が出来なくなるんだよ。ってか、どさくさで変態って言わないでよピンクのくせに。」

言った瞬間、顔を真っ赤にして怒ってくるゆかり。

「ピンクっていうな！　ってか、見たんならお金払いなさいよド変態！」

「ピンクってカーディガンのことだよ。なに？　下着の色言われたと思ったの？　下着ピンクなの、ふーん可愛い趣味してるね。」

「なっ、違うわよ！　誰も今日の下着がピンクとは言ってないじゃ

ない。湊君こそ、なに想像してんだか！」

「え、下着見られたら金銭要求する人よりマシだと思うけど？　別に下着の色想像するほど暇じゃないしさ。」

僕たちが言いあってると、相手にされてなかった公子が話しに加わってくる。

「湊君、ひどいよ！　ゆかりのパンツばっか見て、私のは見てくれなかったんだね！」

「…え？」

「姉のは見れないのに、自称・妻（笑）の下着は見るんだね。見損なったよ！」

「はぁ！？　誰が自称・妻（笑）よ。そんな変な称号もらった覚えないわよ！」

今度はゆかりと公子の言いあいが始まる。誰が、止めるんだよ…。そういや、これ真田先輩も聞いてんだよな。

「知らないふりして、しっかり聞くなんて真田先輩ってムッツリなんですね。」

僕がそう言うと言いあいしていた2人がこっちを向き、さらに通信機に真田先輩からの通信が入る。

『馬鹿、そこで俺に話を振るやつがあるか！　それに俺は聞きたくて聞いてたわけ『明彦、お前というやつは！　そこに直れ、処刑し

てやる！』やめろ美鶴！？』

うわ、なにこのカオス…。順平はまだ倒れてるしさ、もういいや。先進もう。

「じゃあ、僕は先進むからまたね。」

言って歩き始めようとすると、公子に腕を掴まれる。

「待ってよ、怪我はなくても疲労状態には違いないんだから1人じゃ行かせれないって。」

「大丈夫だよ。疲れてても、君ら3人よりは戦えるから。ってか、心配なら召喚器返してよ。それあれば、残りの魔力でもスキル使えるし。」

そういうと、倒れていた順平が起き上がってきた。

「つか、前から気になってたんだけど、湊がいう“魔力”ってなんだよ？」

…え、今まで戦ってきて今更その質問するの？ってか、それならペルソナ召喚のときなに消費してんだよ。

「なんだよって、魔力は魔力だよ。ＭＰでもＳＰでも呼び方は自由だけど、順平だってペルソナ使うときに消費してる力あるでしょ？」

「いや、あるにはあるけど魔力じゃねぇだろ。使ってんのは精神力みたいなもんだ。」

それが僕の言う魔力じゃないの？すると、ここでゆかりも話しかけてくる。

「たしかに今まで普通に聞いてたけど、湊君の言う魔力っておかしいわよね。順平の言う通りペルソナ召喚に使うのは精神力だから、勝手に持ってかれるもんなのよ。自分でコントロールしてどうこうするエネルギーみたいなものじゃないの。」

そうなの？じゃあ、みんなまだ魔力のコントロールとかが出来るレベルじゃないのかな。考えていると公子が口を開く。

「もしかして、私たちと湊君じゃ使ってる力が違うんじゃない？調べてみたいんだけど、湊君なにか魔力で発動させるもの出せる？」

「ん？　じゃあ、これでいいか。…ハイ。」

言われたのでカデンツァの魔石をわたす。ジェムだと基本攻撃系だから危ないからね。すると、ゆかりが驚いた表情で尋ねてくる。

「え？　それどっから出したの！？」

「どこって腕輪からだよ。それはいいから、発動してみなって。」

僕に言われ魔石をギュッと握って、うんうん唸っている公子…何してんだ？

「なにしてんの？　魔力を少し込めるだけだよ。ちゃんとやらないなら他の人に渡しな。」

「ち、違うよ！　ちゃんと真面目にやってるけど、その魔力を込め

るってのができないの！」

慌ててして自己弁護を図る公子。ってか、そんなキレながら言い返さなくても…

「じゃあ、とりあえず他の人にもやらせてみな。無理だったら、それあげるから…敗北記念に。」

僕がそういうと交代しながら熱心に魔力を送ろうとする3人…馬鹿っぽい。とりあえず、もう用はないので僕は先に進む。すると、それに気付いた公子たちがかけよってくる。

「待ってよ、行くっていうなら私たちも同行するから。」

「そうだぜ、湊。オレらに頼るつもりがなくても、力が必要になるかも知れないだろ？　…っダメだぁ。なんの反応もしねー。」

順平は言い終わると、握っていた拳をほどき魔石をみながらガックリしている。すると、今度はゆかりがチャレンジするのか、順平からそれを奪う。

「貸して、絶対にやって見せるんだから…てか、コツとかないの？」

「コツっていうか、みんな魔力回路ひらいてないんじゃないの？回路ひらいてなかったら出来ないと思うよ。」

「回路？　なにそれ、どうやったらひらくのよ？」

歩きながら尋ねてくるゆかり。…どうやってって僕も知らないよ。

「僕も知らないよ。初めてスキル使った日に無理矢理こじ開けたような気がするし。」

「なんだぁ、じゃあ私たちには無理だねー。んじゃ、ゆかり敗北記念のやつ頂戴♪」

「え？　いいよ、私が持っておくって。今回の敗北を覚えておくために。」

ゆかりがそう言った瞬間、2人の間にピシリッという音が聞こえたような気がした。これはまたマズイ事になると思ったので素早くゆかりの手から魔石を奪う。

すると、「あっ、ちょっと返してよ。」と言ってきたが無視して魔力をこめる。

「カデンツァ！」

唱えて発動すると魔石が消え全員の身体が淡い光に包まれ傷が癒されていく。その効果に驚く順平。

「なんだコレ！？　メッサすげぇじゃん！　さっきのダメージが全部消えたぜ。ありがとな、湊。」

「あー、勿体無い。回復は嬉しいけどさっきの綺麗な石欲しかったよ～。」

そういって、ぶーたれる公子。まぁ、欲しいならいくらでも出せるけどね。喧嘩する子にはあげません。ゆかりも似たような感じでションボリしてる。だが、気持ちを切り替えたのか僕に質問してくる。

「ねぇ、さっきの石ってあの色しかないの？」

「魔石自体はスキルによって色が違うけど…ピンクでも欲しかった？」

「うん。宝石とも鉱石とも違う、変わった光り方してて綺麗だったからね。」

ふーん、でもまだピンクのは出せないな。あるかもわからないし。ちなみにカデンツァはスポーツ飲料ぐらいの透き通った白い色の魔石だ。ジェムの方は、属性で色が決まってて術の強さで色の濃さが違ってくるみたい。覚えやすいね。

「ピンクのはまだ出せないし、あるのかも分からないから、代わりに今度一緒に出かけた時にピンクの石のアクセサリーでも買ってあげるよ。」

「え、いや悪いよ。魔石を欲しいって言ったのもそもそも私の我儘なんだし…。」

そういって自分の前で手をバタバタ振って遠慮してくるゆかり。

「いいんだ、日頃のお礼も兼ねてるから。暇なときがあったら教えてね。」

「わかった……ありがと。」

言って少し顔を赤くするゆかり。なんか、後ろから順平がジト目で見てくるけど無視して、横で拗ねて脹れてる人にも声をかける。

「公子も別の日に行こうね。」

すると、驚いた顔をした後すぐに目を輝かせる公子。

「え、良いの!?　ありがとう！　じゃあ、その湊君とお揃いの腕輪が良い♪」

「え、これ？　これはちょっと無理かな。貰い物だからどこに売ってるかもわからないし。」

まぁ、そうは言ってもどこにも売ってないと思うけどね。そう考えていると、僕の話をきいて不満そうにする公子。

「え〜、誰にもらったの？　その人にどこで売ってるか聞いてみてよー。」

「誰って、エリザベスだけど…多分、非売品だと思うよ。」

言うと、後ろでジト目をしていた順平が話に加わってくる。

「いや、誰だよエリザベスって…。今日の先輩の友達の人とも知り合いぽかったし、オマエ不思議な交友関係もってんな。」

「そう？　荒垣さんとは、神社で会っただけなんだけどね。それと、エリザベスは…なんだろ。年齢は訊いたことないけど、同年代か少し上くらいの女性だよ。青いエレベーターガールみたいな服着てるんだ。」

「どこでそんな人と会う機会があんだよ…。」

そういって何やら呆れたような表情をする順平。別に僕から会いに行ったわけじゃないさ。そんな風に話しながら僕たちは上を目指した。

――タルタロス・16F

途中の敵を1人で蹴散らしながら進んで、みんなに呆れられたがなんとか行き止まりのフロアに着いた。すると、桐条先輩から通信が入る。

『ここで行き止まりか…ごくろうだった。一旦、帰還してくれ。』

そう言われ公子を先頭に脱出ポイントの装置へ向かう。…ん?なにか落ちてる。パソコンで使う情報記憶させて保存しておくものだ。でも、なんでこんなとこに?とりあえず、持ち帰ることにしみんなと一緒にエントランスに戻った。

――タルタロス・エントランス

《シュンッ》

みんなと一緒にエントランスに戻ると先輩たちが待っていた。そして真田先輩が真剣な表情で口を開く。

「有里、なんで1人で勝手な行動をした。」

「勝手な行動もなにも、先輩にも理事長にも僕の行動を制限する権限はないじゃないですか。」

僕がそういうと、今度は桐条先輩が話しかけてくる。

「確かに行動を制限する権限はない。だが、君の行動一つでそれを

心配したメンバーが危険な行動に出るかもしれないんだぞ。それをちゃんと理解しているのか？」

まぁ、理解はしてるけど…どうでもいいし。

「一応、理解はしてますよ。…でも、それを止めるのが先輩たちの仕事でしょう？　それをこっちに押し付けられても困るんですが。」

「止めることができるなら止めるさ。だが、他の2人もだが特に草摩が止めて聞くようなやつじゃないと、君が一番知っているだろう？」

桐条先輩がそうきいてくるが、そんな質問に意味があるのだろうか？

「知ってますけど、こっちも人間なんだ。1人であれこれしたい時だってありますよ。それとも、自分を犠牲にしてまで先輩の大切な部活メンバーのことを尊重しなくちゃいけませんか？」

「…いや、そこまでは言わない。だが、今回のような無茶は控えて欲しいだけだ。」

「まあ、善処しますよ。」

僕がそういうと複雑そうな表情をする桐条先輩。そして、真田先輩がさらに質問を続ける。

「もう1つ訊いておきたい。なぜ、他の力のことを黙っていた？」

「黙っていたって…別に訊かれなかったし、全部の手の打ち明かすほど信用してませんから。」

「なんだとっ！」

そういって僕の胸倉を掴んでくる真田先輩。ってか、最初にあんだけ言われてもう信用されてると思ってたのか？

「…放して下さいよ。」

「お前はこいつらを何だと思ってるんだ！　仲間じゃない、信用してない、だと？　お前がそうやって、相手を拒絶しているから信用できないんだろうが！」

「明彦！　お前の気持ちも分かるが、少しは冷静になれ。」

「美鶴は黙ってろ、俺はいまこいつに言ってるんだ！」

いって、さらに力を強めてくる先輩…鬱陶しいなぁ。

「先輩は何か仲間ってものに対してコンプレックスでもあるんですか？」

「なに？！」

「信用するとか、仲間とかにこだわって…別にいいじゃないですか。ちゃんと、仕事はこなしてるんです。プライベートな部分や部活メンバーに対してどういうスタンスで接するかなんて、人の勝手じゃないですか。」

言いながら僕の胸倉を掴んでいる先輩の腕を掴み話を続ける。

「それに、僕が相手を拒絶してるから信用できないですって？　よくそんな事が言えましたね。最初に言ったでしょう、嘘や隠し事をしたり命令一つで仲間を見捨てるような人間を信用したりできないって。」

先輩の腕を掴む力を強めながら、さらに続ける。

「信用されるようなこともしないで、相手だけ責めて…自分は出来る限りのことはしたって言えるんですか？　今現在、戦えもしない口だけの人にとやかく言われたくないんですよ。」

そういって、先輩の腕を思い切り掴むと、「っぐぅ！」と言って手を離す先輩。手が離れたことで僕も掴んでた手を離し帰るため出口へ向かうが、伝え忘れたことがあったので立ち止まる。

「そういえば今日、荒垣さんに“元”先輩のアドバイスとして言われました。『お前はこれから先、仲間と並んでは歩けねぇ』って。あの人は違う意味で言ったんでしょうけど、結果としてはあってるかも知れませんね…それじゃあ、先に帰ります。お疲れ様でした。」

それだけ伝えると僕はタルタロスを出て、先に寮へ帰った。

――タルタロス・エントランス　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

湊君が帰ったあとも、誰も口を開けないでいた。…まぁ、あれだけの言い合いがあればしょうがないよね。だが、いつまでもこうしてる訳にはいかないので、桐条先輩が口を開く。

「…フゥ。とりあえず、寮に戻ろう。戻ったら有里について少し話したいので、荷物を置いたら作戦室まできてくれ。」

そう言われ、全員返事をして寮に帰ることにした。

――作戦室

荷物を置いて部屋にいくと、湊君はこないとして順平以外がすでに揃っていた。そして、席についたところで順平も遅れて入ってきて席に着いた。

「さて、有里のことだが…現状を確認しておこうと思う。」

言って間を少しあけると桐条先輩が話し始めた。

「みんなも分かっているだろうが、彼はいうならば傭兵だ。金で力を貸してくれているに過ぎない。」

先輩がそういうと順平が口を挟む。

「ってか、訊きたいんスけど、どうして湊はそんなもんになってんすか？　そんな面倒な契約…とかしないで、普通に仲間になってくれって頼めばいいじゃないですか。」

そういえば、湊君の話が決まったのって順平の加入前だっけ。どう説明したもんかな。すると、桐条先輩が説明を始める。

「そう言えば、有里が協力してくれるようになったのは、君がくる前のことだったな。良いだろう、説明する。」

そう言って先輩は湊君が大型シャドウと戦ったときのことから説明し始めた。説明を聞きながら、驚いたり戸惑ったりする順平。

それから少し経って説明が全て終わると、途中から黙ってしまって

いた順平が口を開いた。

「…話はわかりました。先輩たちの取った行動も、納得できない部分はあったけど理解はできます。でも、話きいてみたら湊の言ってることも余計に分かっちまって…オレなんて言ったら良いか。」

そういって口を紡ぎ俯く順平。そこで真田先輩も話に加わる。

「タルタロスでは熱くなって怒鳴ってしまったが、たしかにあいつの言ってる事は間違いじゃない。だが、それでも俺は部活のメンバーを仲間だと思っているし、もちろん有里のことも仲間だと思っているんだ。それをあんな風に否定されては冷静ではいられない。」

言い終わると先輩も俯いて黙ってしまう。ここでずっと黙っていたゆかりが初めて喋った。

「湊君の言ってる事も分かっちゃう部分があるから、強く言えないんですよね…。湊君を仲間に誘った日、彼の言ってる事を聞いてて確かに先輩たちの行動もどこかおかしいなって思っちゃったんです。」

そう言って自嘲気味に笑い、続けるゆかり。

「だけど、それ以上に彼が誰も信用してないってのが悲しくて。一緒に行動してるうちに信用して本当の仲間になってもらおうって思ってたんです。でも、まったく伝わってなかったんですね。」

そういって、ゆかりは悲しそうな顔をしながら話を続ける。

「今日のタルタロスでエリアボスの後、疲れてるはずなのに彼は1

人で戦ったんです。最初はなに無理してんだって怒ろうとしたんですけど、何も言えませんでした。強さのレベルが違うんです。前に公子が言った私たち全員とまとめて戦っても勝つってのが、本当なんだって分かってしまうくらいに。だって、疲れてるのに敵をほとんど一撃で倒すし、複数いれば走り抜けながら倒していくんです。…でも、彼の強さを知って感じた感情は安心ではなく疑問と戸惑いでした。なぜ自分を孤独に追い込むの、何でそこまで孤独に生きていこうとするのって。」

そう、今日の湊君はどこか様子がおかしいと思ったけど、合流後の戦いをみてわかった。湊君は徐々にだけど孤独だった中学時代の状態へ戻りつつあるってことを。考えていると、ゆかりが今度は私たちに尋ねてくる。

「だから、先輩たちと公子に教えて欲しいの。私は公子と同じ時期だけど途中から入った形だから、湊君の過去もいろんな親戚を転々としてたってぐらいしか知らない。一体、なにがあって彼はあんな風になったの？　それに前に公子が話してくれたときに言ってた『一度死んだ』ってどういう意味？」

それをきいて、私も先輩たちも黙ってしまう。なぜなら、これは湊君のかなり個人的な情報だからだ。いろんな親戚の家を転々としていたぐらいなら問題ないが、そこでどのような生活をしてどんな状態になったかなど、気易く話して良い事ではない。

「…悪いけど、それは言えない。意地悪とか、都合が悪くなるからって理由じゃなくて、湊君自身に深く関わることだから本人以外が他人に気易く話していいことじゃないの。」

「それは『一度死んだ』って部分も？」

そういって、強い視線で見ながら訊いてくるゆかり。本当なら全て黙っておくべきなんだろうけど、今の状態のゆかりは危ない。下手をしたら湊君自身に問い詰めにいくかもしれない。これは、ゆかりに限らず順平にも言える事だ。それなら…

「わかった。核心には触れないけど、これを聞いても湊君を問い詰めるようなことは絶対にしないで。ゆかりも順平もこれを約束して。」

「…わかった。」

「ああ、オレも約束する。」

2人の返事をきいてから、核心に触れないよう気を付けながら話し始める。

「まず、ゆかりは知ってるだろうけど、湊君は10年ぐらい前に事故でご両親を亡くしてるの。そのあと葬儀とかは親戚とかご両親の知り合いの方がやってくれたんだけど、問題は湊君を誰が引き取るかって話になったの。当時、すでにご両親のご両親、つまり湊君のお爺ちゃんお婆ちゃんのことだけど、その人たちは他界してたの。だから、親戚の誰かが引き取らなきゃって揉めたらしいわ。」

ここまで大丈夫かという視線を2人におくり、問題がないようなので話を続ける。

「湊君のお母様は一人っ子だから、母方の親戚は連絡すらつかず全滅。お父様の方は上に兄がいたんだけど、それが私のお父さんね。でも、私たちは当時、お父さんの仕事の関係でアメリカに住んでい

たの。だから自然、父方の遠縁の親戚に預けられることになったわ。でも、小学校にあがるくらいの年齢の子が急にご両親を失い知らない人の家と知らない土地ですごせなんて言われて耐えきれるわけがなかったの。」

ここで、一度区切り2人が話についてきてるか確認する。2人とも真剣な表情で聞いているから大丈夫だろうと思い、続きを話す。

「そんなことを繰り返すうちに、湊君はどんどん話さない子になったの。そして、次に再会した時には虚ろな目をして、話しかけられたときのみ返事をするようになってたわ。つまり、『一度死んだ』っていうは、その年頃に見合った子供らしさとか人間らしさを失ったって意味なの。そのあとは、帰国して日本で暮らすようになった私たちと一緒に暮らすうちに今のように人間らしさが回復していったってわけ。わかった?」

「…うん、ありがとう。でも、それなら余計に孤独よりも、人との繋がりを求めるようになると思うんだけど。」

話をきいて質問してくるゆかり。それに今度は桐条先輩が答える。

「あくまで推測だが、“だからこそ”なんだと思う。絆ができれば再び失うかも知れない、それならいっそ絆など持たなければいいという風にな。まあ、本人に訊いてみなければ本当のとこはわからないが。」

…うん、でもそれも間違いじゃないと思うの。湊君はまわりを頼らないし、なるべく関わらないようにする。関わるときは、絶対にどこかに線引きをしてそれ以上は進まないし、進ませない。それは家族になった私たちにも同じ事。

絆を得ることが失う恐怖を思い出させるのか、絆を失うこと自体を恐れているのかは分からない。両方なのかも知れないけど、湊君が仲間じゃないと言ったからには私たちと湊君が仲間になることは、彼が線引きをやめない限りあり得ないことだ。

だから、私たちに出来る事は、日常を彼と過ごす事で絆をゆっくりでも育むか、これ以上仲間ということに触れず昔の湊君に戻らないよう注意するかだ。だから、今後の対応をどうするか先輩に尋ねる。

「それで、先輩はこれから湊君とどうか関わっていくつもりですか？」

「そうだな…。本音を言えばやはり仲間になって欲しいが、それは当分無理だろう。なら、現状維持というのか、仕事をともにする人間、学校の先輩・後輩の間柄だけでいこうと思う。」

うん、一番それが現実的だよね。でも、他の人はやっぱりそこまで割り切れないみたいで、先輩に意見する。

「待ってくださいよ。確かに湊を無理矢理に仲間にしても逆効果ってのは、わかりますけど。だからって、一緒に戦ってきたやつをそこまで割り切って考えられないっスよ。」

「なら、どうする？　伊織が彼をどう思うかは自由だが、彼は私を含めメンバーと仲間として慣れ合う気はないぞ。それなら、彼も同じ学生として接するときは普通に友達でいるようだし、割り切って友好な関係を築くべきじゃないのか？」

言われて言葉に詰まる順平。そして何かを決意した表情で口を開く

真田先輩。

「そうだな。俺も無理矢理な勧誘などしないが、勝手にあいつを仲間だと思わせてもらう。」

「そ、そうっスよね！　いますぐは無理でもいつか仲間になるんなら、こっちがアイツを信じてなきゃなれませんもんね。よし、アイツがなんと言おうと、アイツとオレらは仲間だ。そう決めた！」

順平の言葉を聞いてキョトンとする桐条先輩。だが、我にかえると突然笑い始める。

「フフッ、そうだな。伊織の言う通りだ。信用され仲間になってもらうには、先ず私たちが彼を信じ続けないといけないな。」

「順平に気付かされたのは癪だがそういうことだ。無理な勧誘、勝手な行動の制限などはしないが、常に有里を仲間だと思い続けることにしよう。そして、いつかあいつに自分たちを仲間だと認めさせる。」

「やる気を出すのは良いが、それには先ず怪我を治さないとな明彦。」

「わかっている。怪我を治し実力をつけ、口だけと言ったことを後悔させてやる。」

そういって右手を《パシン！》と左手に打つ先輩。さっきまでの暗い雰囲気はもうない。みんな決意を固めたようだ。いつになるか分からないけど、湊君が仲間になるそのいつかを信じて。

方針が決まるとみんな部屋に戻って休むことにした。これから頑張るぞ、湊君と仲間に…本当の家族になるために。

第十四話　後編（後書き）

最初は前後編を合わせていくつもりでしたが、かなり他のより長くなるのでやめました。だいたい、長くて1万ちょいの文字数にしてます。

第十五話（前書き）

今回も短めですかね。

第十五話

5／8（金）

放課後――

タルタロスの行き止まりのフロアに到達してから約一週間が経った、あれだけつっかかってきた先輩達も「熱くなって、すまなかった」と、謝ってきて今後は無理な勧誘や個人で行動することもなるべく口出ししない事に決めたらしい。その代わり無断で行くことだけはやめて欲しいそうだ。一言、「今日はちょっと出てきます」とでも言えば深くは訊かないそうだ。それぐらいなら僕も気にしないので、分かりましたと伝えておいた。

そう言えば、ゆかりや順平にも変化があった。あれからも何回かタルタロスに行ったけど、戦闘中に僕の動きをみたり、公子をリーダーにして3人で戦うので見ていて気付いた事があればアドバイスして欲しいなど、自分たちの実力をつけることに真剣になっている。

それもあってか、公子とゆかりは前以上に部活で熱心に練習し、地力の底上げをしているようだし、順平は順平で隠れて筋トレやランニングをしてるみたいだ。なにがあったのかは知らないけど、あの少年が言った“試練”というのがくるのは明日だし、本当に大型シャドウが現れるんだとしたら良いタイミングでの心境の変化だ。

…そんなことを考えながら僕はいま神社を目指している。最近、忙しかったのに偶然ぽっかりと暇ができたからだ。オヤツとジュースを買って、涼しい場所で1人でのんびりした時間を過ごすために、前に1度行った丘の上の神社を目指し僕は歩き続けた。

――長鳴神社

神社について、前と同じとこで座ってオヤツを食べようと歩いていたら、小学生の女の子が1人で寂しそうに遊んでいた。最近は物騒な世の中だからな、一応なにしてるのか声をかけてみるか…。

「きみ、こんなとこで何してるの？」

「おにいちゃん、だーれー？　【舞子（まいこ）】ね、知らない人についてったら、ダメって言われてるのよ。…おにいちゃん、悪い人？」

そんな風に尋ねられて「はい、私は悪い人です」って言う人なんているのだろうか？そう思いながら、僕は舞子ちゃんの質問に答える。

「良い人のつもりなんだけどね。もしかしたら、悪い人かも知れないよ？」

僕がそう言うと舞子ちゃんは驚いた顔をしてから楽しそうに話してきた。

「悪い人!?　すっごーい！　悪い人はじめて見た！　…でも良い人ってほんと？　舞子、信じてうらぎられるのイヤよ」

裏切られるのがイヤねぇ…それもここで1人遊んでたことと、関係あるのかな？そう考えていると、舞子ちゃんは残念そうな顔をして続ける。

「でも舞子、おなか減ってるんだ…だから、遊んであげられないの…」

「んー、じゃあ僕と一緒にオヤツ食べる？　ここで食べようと思

ってたこ焼き買ってきたんだ」

「ほんとっ!!　舞子、それだーい好きっ！　おにいちゃん、ありがとーございます!」

いってから、舞子ちゃんと近くのベンチに座って一緒にたこ焼きを食べた。そして、食べ終わると舞子ちゃんが、再び話しかけてくる。

「おいしかったね!　舞子がほとんど食べたけど!　あー、舞子、のどかわいちゃった…のど、カラカラだなー…」

言いながら、舞子ちゃんは何かを期待する目で見上げてくる…ってか、誰に教わったんだ?将来、男を手玉に取るような子にならなければ良いけど。そう思いながら袋からジュースを取り出して尋ねた。

「ジュースもあるよ。乳酸菌飲料とモロナミンGとどっちがいい?」

「モロナミンGがいいっ!!　舞子、これだーい好きっ！　おにいちゃん、ありがとーございます!」

そういった舞子ちゃんに開けてから“モロナミンG”を渡すとゴクゴクと飲み始めた…炭酸飲料を一気ってキツくないか?そんな風に考えていると、飲み終わったようだ。

「ぶっはー!　これのために生きてますなあ!」

って、オヤジかい。親はこの子にどんな教育をしてるんだ。男を手玉に取るオヤジくさい子ってキャラ濃いぞ。なんて思っていると、舞子ちゃんが口を開く。

「…おにいちゃん、やさしい人ね。舞子、友達に…なってあげてもいいよ。今度また、遊んでくれる？」

「もちろん…って、言いたいけど毎日これるわけじゃないから、たまにで良いなら喜んで」

僕がそういうと、舞子ちゃんは嬉しそうにベンチから立ち上がりこっちを向きながら話してくる。

「ほんと！？　じゃあ舞子、ここで待ってるからね！　ウソつかないで、来てね！」

やっぱり寂しかったのかな。そろそろ日も暮れてきたし、帰る前にたまにしか会えないお詫びとしてプレゼントでもあげるか。そう決めると僕は舞子ちゃんに話しかけた。

「舞子ちゃん、手出してくれる？　たまにしか会えないお詫びにお土産をあげるよ」

「手？　いいよ、なにくれるの？」

そう言って不思議そうに僕を見つめてくる舞子ちゃん。しかし、僕はまだ答えないで相手の視線を手の方へ向けさせる。

「見てて、いくよ……」

そう言って両手で舞子ちゃんの右手を包み集中すると、手の中に光が集まる。その光が消えると舞子ちゃんの手にはカデンツァの魔石が現れていた。すると、興奮した様子で目を輝かせる舞子ちゃん。

「えっ!?　すっごーい!　どうやったの!?　この石キレー!」

どうやら喜んでもらえたようだ。まず、壊れる事はないだろうけど壊れても石が消えるか、カデンツァが暴発するだけだから問題ない。それじゃあ、そろそろ帰るかな。

「じゃあ、そろそろ帰るけど舞子ちゃんも暗くなってきたから、すぐ帰るんだよ?　それじゃあ、また。気をつけて帰ってね」

「魔法使いのおにいちゃん、オヤツとお土産ありがとー!　約束、だからね!　ちゃんとまた来てあそんでね!」

そう言って姿が見えなくなるまで、お互いに手を振り続けたあと、僕は寮へと帰った。

夜――ラウンジ

寮に帰るとみんながラウンジにいた。僕が帰ってきたことに気付いたゆかりが出迎えてくれた。

「…あ、お帰りー。ねえ、湊君。今夜、タルタロス行っとかない?　先月の襲撃の後、何も起きてないから、妙に不安になってきちゃってさ…それに、最近、増えてない?　…例の“無気力症”。何かの前触れとかじゃなきゃいいんだけど。…って、考えすぎかな?」

まぁ、ゆかりの不安は当たっているはずだ。戦っているからか、女性だからは分からないがゆかりはそこらへんの勘が鋭いみたいだな。そんな風に話を聞きつつ考察していると、話を聞いていた順平も話に加わってくる。

「確かにこのところ、街ん中とか、ヤバいのが増えてきてるよな……けど、かといって、なんか起きてるってワケでもねえし…なんかこう、バーッと活躍してえよな。…そうだな退屈しのぎに、タルタロス行くか？」

そんな風に順平が僕に尋ねてきたとき、丁度聞こえていたのか。ソファーに座っていた真田先輩も口を開き話に乗ってきた。

「なら、俺も様子を見に行くかな…順平と同じく、退屈で死にそうだ」

「…明彦。私を怒らせたいのか？」

言った真田先輩を怒る桐条先輩。この2人はいつもこんなやり取りをしている気がする…飽きないのか？2人を見つつそう思っていると、先輩達がコントをしている横で公子が話しかけてきた。

「それで湊君は今日のタルタロスどうするの？」

「んー…ゴメン、今日は少し考えたいことがあるんだ。いくなら公子がリーダーでお願い。なにかあるといけないから、公子達も今日は連携と動作確認ぐらいであがった方が良いと思うよ」

「うん、わかった。それじゃあ、ゆっくり休んでね」

公子と話を終え、上にあがるために階段に向かうと。コントが終わったのか桐条先輩もメンバーらの話に参加した。

「…しかし、私も気になるな。どうにも静か過ぎる」

「シャドウの事か？」

桐条先輩の言葉に真田先輩が尋ねると、桐条先輩も頷いてから言葉を続ける。

「1ヶ月前の襲撃…あれで最後だとは、到底思えない」

「確かに、この1週間、巷で“影人間”が急激してる。そろそろ何かあるかもな…」

そう言って難しい顔をする真田先輩。そんな風に警戒している先輩らに僕は一応伝えておく事にしようと考えると、一度先輩達の近くで立ち止まりゆかりや公子達に聞こえないように言う。

「…先輩、明日ですよ。明日、敵が来ます」

「…なに？」

上手く聞こえなかったのか、聞き返してくる桐条先輩。だが、2年組にはまだ伝える気はないので、僕はそれに答えず上へと向かう。

「それじゃあ、僕はもう休みますね。みんなも気を付けて。おやすみなさい」

そういって、みんなからの「おやすみ」という言葉をきいて自室に戻った。

――自室

僕が部屋に戻ったあと、みんなは影時間になる前にタルタロスへ向かったため、寮には僕しかいない。

「明日が、あの少年の言ってた“試練”の日か…。言ってたことが本当なら大型シャドウは満月に現れるってことになるな。まあ、敵の出現周期がわかっても僕には何のアドバンテージも生まれないから意味ないけど」

言って1人苦笑する。そう、僕の戦闘スタイルはほぼ無型だ。無手の近接なら蹴りを主体に戦うけど、それは蹴りの方が強いからだし、武器を使うなら効率で考えて使うから決まった武器も得意な武器もない。それに加えてカードと魔石でスキルも魔力が続く限りはオールマイティ。これを聞けばある意味最強と思われるが、逆だ。この戦い方には先がない。

「みんなは今ある自分を高めようと頑張ってるけど、僕のは生きる為の戦い方だ。みんなのように上達することも、発展して新たなスタイルを持つ事もない。だから、敵がくることがわかっても、それに向けて苦手を克服したり得意技を練習したりする意味がない。何故なら、そんなものはないから…」

今度の敵の強さはたぶん前回と同じレベルかそれ以上だろう。前回以下なら、それはもう試練になどならないぐらいの強さを得ている。

だが、順平とゆかりでは正直まだ1人で強敵や複数の敵と戦うことはキツイだろう。順平とゆかりは戦闘タイプは真逆だが同じ極端なタイプだ。近接物理と遠距離魔法、戦闘に慣れてくれれば複数を相手するときでも一対一の状況をつくり戦うことは出来る。だが、2人には経験も実力もまるで足りない。

「最近になって強くなってきたけど、まだ中学時代の公子にも追い付いてない。明日は分かれることがあっても、それぞれ僕か公子

がつけるように注意しておくかな。まぁ、出来るならペルソナの属性が被らないように僕が順平の方へ行きたいけどね」

そんな風に思いながら、ゆっくりしていると時計の針が0時をさした。

影時間――自室

時計の針が0時をさすと同時に世界が変わった。

「影時間…もう0時か」

『本当は、ゆかりと同じ方へいきたいんじゃないの?』

僕が1人で呟いていた事を聞いていたのか彼女が話しかけてきた。別に影時間外でも会話は可能だが、区切りが良いのでいま話しかけてきたのだろうか?そんな風に考えつつも、とりあえず僕は返事をする。

「ん?　…いや、戦闘のときにそんな個人的な感情を優先するようなことはしないよ。それに彼女に恋愛感情を抱いたことはないしね。まぁ、これは公子や他の知り合いの女子全員に言えることだけど…」

『随分と酷いのね。以前と違って、公子の貴方への愛情は家族に対するものから異性に対するものへ変わってきているわ。それに気付かない貴方じゃないでしょう?』

彼女は半透明な状態でベッドに腰掛けると、そういって僕に尋ねてくる。まぁ、相手の言いたい事は理解できるよ。でも、僕には他人の好意の違いまでは理解できない。

「…さぁね。僕は人の愛情とかってのが未だによくわからないから。特別な感情を向けられても答えることはできないよ」

『…そう。いつか、貴方も愛情というものが理解できるようになればいいわね』

「それはそれで怖い気もするけどね、情は執着と同義だから」

僕の事を思って彼女は言ってくれるが、僕はそれに苦笑しながら返す。しかし、相手もコッチをよく知っている身だ。特に気にした様子もなく言葉を返してきた。

『けれど、人は執着するからこそ、それを奪うか守るかするために強くなろうとするわ。無型の貴方が先へ進むにはそういった強さを得るしかないと思うの』

「なにかの為の強さか…別にいいよ。僕はいまの居場所を守るだけの強さがあればそれで。それに誰もいなくなったとしても、きみがいてくれる」

『フフッ、そうね。私は貴方のそばにいるわ…ずっとね』

笑いながら言うと相手も僕に笑顔を返し頭を撫でてきた。まぁ、相手は実体じゃないから触れれないんだけどね。けど、そんな優しさが嬉しいので僕はお礼を言う。

「ありがとう。じゃあ、明日もあるしそろそろ寝るね。おやすみ――――ス」

『ええ、おやすみなさい。愛してるわ、湊』

そうして彼女との会話を終えると、僕は眠りについたのだった。

第十五話（後書き）

一章から夜にひとり言を言っていたのは、今回の声の主と話していただけなのでしたっと名前と見た目は決まってますが、設定にも出るのは先です。

第十六話（前書き）

今回がこの章のストーリーでは最後の話になります。

第十六話

5／9（土）

朝――校門　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

今日は部活の朝練もないのでゆっくり学校へ向かっていると、校門のところで真田先輩に出会った。

「先輩、おはようございます。」

「よう、草摩。どうだ？　少しはタルタロスで力を付けたか？」

「バッチリですよ！　湊君にはまだまだ追い付くどころか背中すら見えませんけど、名誉の負傷とか言ってる人には勝つ自信あります。」

意地悪くそういうと、苦虫を噛み潰したような顔をする先輩。

「…俺はお前になにかしたか？」

「え？　だって先輩、私とゆかりのパンツのはなｓ「そ、そうか！　それは楽しみだ。力は付けて困るものじゃない。鍛錬しておけよ。いつ何が襲ってきても後悔しないようにな！　あと間もなくで、俺のケガは完治する。戦線に復帰すれば戦力が上がるだろう。だが…油断はするなよ。」……。」

そう言って慌てて私の言葉を遮ってくる先輩。…ってか、本当に聞いてたんだ。そう思いながら先輩と話をして靴箱まで行き、別れてから教室へ向かった。

放課後――教室　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

今日は満月。先週、あの少年が“試練が来る”と予告した日だ。前回の大型シャドウ襲撃日が満月だったからそう予想したが、大型シャドウ以外の可能性もある。何か良くない事でも起きるのだろうか…。とりあえず、何が起きてもいいように、今日は寮で待機していた方がよさそうだと思い、すぐに帰ることにした。

影時間――作戦室　｛Ｎｏ　Ｓｉｄｅ｝

美鶴が、ひとりで情報支援用の機材を操作している。

「フゥ…」

少し疲れたのか休憩しようとしたところで、真田が部屋に入ってきた。

《ガチャ》

「なんだ、まだやってたのか？」

「まあな。敵はいつ来るとも限らない。それに昨日の有里の言葉が気になってな。」

「確かに、意味のないことを言うやつじゃないが。だが、タルタロスの外まで見張ろうなんて、そう簡単に出来るものか？」

真田がそう尋ねると、美鶴が落ち込んだような表情をしながら答える。

「本音を言えば、力不足だな…私の“ペンテシレア”では、情報収集はこの辺りが限界かも知れない。」

そう言って、溜め息を吐くが気持ちを切り替え、楽しそうな表情をして続ける。

「しかし、ペルソナの力というのは、想像していたより、だいぶ幅広いものらしい。何しろ、次々とペルソナの能力であるスキルのみを扱い戦える者まで現れたくらいだ。“彼”の能力には、特別なものを感じる。まだ覚醒して間も無いというのにな。」

「確かに、あんなヤツが現れるとは驚きだ。しかし、ペルソナを使うのは俺たち自身。同じように、その力を生かせるかは、アイツ次第だな。」

2人でそのように話していると、機材のシャドウ探査用のレーダーに反応が出た。

《キュイン…ピー》

「ん…？　これは…シャドウの反応…！？」

「なに！？　ホントに見つけたのか！？」

突然のシャドウの出現に驚く真田。だが、普段のイレギュラーシャドウと反応が違うことに気付く美鶴。

「でも待て、反応が奇妙だ。大き過ぎる。こんな敵は今まで…」

「まさか、先月出たのと同じ、デカいヤツか！？」

「…間違い無いだろう。」

美鶴がそう言うと、嬉しそうに獰猛な笑顔をつくる真田。

「そうか。有里がなぜ敵の出現を知っていたかは謎だが、思いがけず、楽しめそうじゃないか。他の４人を起こすぞ？」

「ああ。」

美鶴がそう答えると、真田は急いで緊急招集のアラームを鳴らした。

――自室　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

《ビィービィービィー！》

緊急招集のアラームが鳴ると、夜に備え私服のまま寝ていた僕は目を覚ました。

「きたか。気配は…駅の方か少し遠いな。でも、なんで気配が動いてないんだ？　まあ、いいか。とりあえず、作戦室だ。」

そう言って、装備を整え作戦室に向かった。

――作戦室

作戦室につくと、先輩達と公子がいた。少しするとゆかりと順平も部屋に駆け込んできた。

「お待たせしました！」

「何スか！？　敵スか！？」

突然の緊急招集に驚いた順平が尋ねると、桐条先輩がそれに答える。

「タルタロスの外で、シャドウの反応が見つかった。詳しい状況は

分からないが、先月出たような“大物”の可能性が高い。外に出た敵は仕留め逃がす訳にはいかない。影時間は、大半の者にとって“無い”ものだ。そこで街を壊されたりすれば“矛盾”が残る。」

それを聞くとやる気を出す順平。まぁ、力を発揮したがってたしね。

「あ、要は倒しゃいいんでしょ？　やってやるっスよ！」

それに呆れるゆかりと注意する公子。

「また、あんたは…」

「やる気出すのはいいけど、油断してるとアバラ怪我するよ？」

それを聞いて真田先輩が「っく。」と悔しそうにしている…そろそろ、そのネタやめてあげなよ公子。そう思っていると、桐条先輩が真田先輩に対して口を開く。

「明彦は、ここで理事長を待て。」

「なっ…冗談じゃない！　俺も出る！」

桐条先輩の言葉に納得できない真田先輩はくってかかるが、桐条先輩はその意見をバッサリ却下する。

「まずは身体を治す方が先だ。足手まといになる。」

「なんだと！？」

「彼らだって戦えるさ。少なくとも、今のお前よりはな。明彦…も

っと彼らを信用してやれ。みんなもう実戦をこなしてるんだ。」

「……くそっ。」

ある程度、実力があるからこそ桐条先輩の言っていることが、事実だとわかってしまうのだろう。だが、それでも悔しそうにする真田先輩に順平が安心させるために言う。

「まかして下さい！　オレ、マジやりますからっ！」

「仕方ないな…現場の指揮をたのむ、有里。」

「やっぱそう来るんスね…」

真田先輩の言葉にがっかりする順平。だから、順平はアタッカーだからブレインにはなれないんだって…。そう思っていると、今度は桐条先輩が公子にも声をかける。

「もしものときは、草摩も頼むぞ…出来るな？」

「はい、私でできることなら…。」

それを聞いてさらにガックリする順平。

「つーか、もうこのままオマエらがリーダー固定っぽいよな…公子ッチなんて、女の子なのにさぁ…」

順平がそう言うと、その発言が差別的な意味を含んでいることに怒りあらわす桐条先輩。

「男も女も関係ない。できる者がやるだけだ。女だからと言う理由で、今後彼女を見下すような言動をしたら…」

「あ、や、いやいや！　別に下に見てるとか、そーいうんじゃ…」

焦る順平…まぁ、心配しての意味も含んでたみたいだし助け船をだすか。

「先輩、順平は男がリーダーをするのが普通だろって意味で言った訳じゃないですよ。可愛い女の子がリーダーなんてしてたら、危ない目に遭いやすいだろうって心配して言ったんです。」

「ん？　そうだったのか？　すまなかった、伊織。リーダーは有里と草摩に頼んだが、エースは君だ。岳羽も一緒になって、しっかりリーダーをフォローしてやってくれ。頼んだぞ。」

「「はい！」」

桐条先輩に言われ、しっかりと返事をする順平とゆかり。…どうでもいいけど、「可愛いって言ってくれた～♪」と言って背中に抱きついてる人をどうにかして欲しい。あと、ゆかりもそれを見て「むぅ…」とか言わない。そう考えていると、真田先輩が話を進めるため口を開く。

「よし、じゃあ４人は先に出ろ。美鶴は準備がいるんだろ？」

「ああ、駅前で落ち合おう。」

桐条先輩がいうと、復活した公子が元気に返事をした。

「了解です。じゃ、みんな行きますか！！」

――巌戸台駅前

桐条先輩はまだやって来ない…まあ、敵の気配も動いてないからいいけど、何体か雑魚もいるみたいだな。そう思っていると、待ちくたびれた様子のゆかりが口を開く。

「まだかな…」

「んじゃあ、しりとりでもする？　最初はなににしようかな…」

「いや、しないけど…ってか、今夜は満月か…なんか、影時間に見ると不気味ね…」

ゆかりがそう言ったが、『今夜は』っていうより、『今夜も』の方が正解だね。今回のことで大型シャドウは満月の日に現れるって仮説がほぼ証明されたから。そう思っていると、遠くからエンジン音が聞こえてきた。

《ドゥルルーン！》

「…ん？　なんだぁ！？」

順平がその音に驚いていると、遠くの方から大型のバイクがやってきて目の前に止まった。

《ドゥルルン！キキィ！》

「遅れて済まない。」

そう言ってヘルメットを脱ぎながら桐条先輩が話しかけてきた。ってか、そのシャツでバイクって寒くないのかな?そんなことを考えていると、驚いていたゆかりが思わず呟く。

「バ、バイク…」

そんなことを気にせず桐条先輩が説明を始める。

「いいか、要点だけ言うぞ。情報のバックアップを今日はここから行う。君らの勝手はこれまで通りだ。シャドウの位置は、駅から少し行った辺りにある列車の内部。そこまでは線路上を歩く事になる。」

説明を聞いて順平が尋ねる。

「え、線路歩くって、それ、危険なんじゃ…」

「心配ない、影時間には機械は止まる。むろん列車もだ、動く筈は無い。」

「や、でもそのバイク…」

さらに聞いてくる順平に、なぜか嬉しそうに答える先輩。

「フフッ、これは“特別製”だ。それに、状況に変化があったら私が逐一伝える。よし、では作戦開始だ!」

それを聞いた公子が嬉しそうに号令をかける。

「皆の者、出動だ!」

「えっ、う、うん！」

「そういうノリ？」

戸惑うゆかりと、順平…馬鹿っぽい。そう思いながら、僕たちは列車を目指した。

――線路上

駅から線路に降りて線路を歩いていると、少し行ったとこで目的の列車はとまっていた。それを見つけ聞いてくるゆかり。

「これ…だよね？」

答えようと思ったら、先輩から通信が入った。

《ピピピピピッ》

『４人とも、聴こえるか？』

「あ、はい、大丈夫です。今着いたんですけど、パッと見じゃ、特に…」

先輩の通信に答えるゆかり。まあ、中にいるんだから外見は変わらないだろうね。

『敵の反応は、間違いなくその列車からだ。４人とも、離れ過ぎないように注意して進入してくれ。』

「了解です。」

「分かりました。」

「へへッ、腕が鳴るぜっつーか、ペルソナが鳴るぜ！」

先輩の言葉に、真剣な表情で返事をする公子とゆかり。順平もやる気は満々なようだ。みんなが返事をすると、ゆかりが元気に出発の声を出す。

「じゃ、乗り込みますか！」

《カンカンカン》

電車のすぐ近くに行くとゆかりは真っ先に、乗車口へ続く足場に飛びつき、登っていく…。ゆかり・公子・順平・僕の順で登っていると何かに気付いたのか僕たちの方を見て話しかけてきた。

「…ノゾかないでよ。」

「へいへい、ノゾかねえっつの。……てか、見えたらしょうがねーよ？」

「…公子、湊君。順平、ここに埋めていこうか。」

真顔でそう言ってくる、ゆかり。なんで、順平はアホなこと言うかな。まぁ、いいか。とりあえず、先進むよう促そう。

「いいから、登ってよ水色さん。」

僕がそう言うと、動揺するゆかり。

「ちょ！？　なに言ったそばからノゾいてんのよ！」

「つか、よく一番下から見えるなオマエ…」

「また、ゆかりのばっかり！　私のも見てって言ってるでしょ！」

関心してくる順平に、意味のわからないキレ方をする公子…テキトーだって。

「テキトーに言っただけだよ。見えるのは、順平の靴底ぐらい。」

「テキトーでいらんこと言うなっ！」

キレてから、登るのを再開するゆかり。自分から話題振ってきたくせに…「見んなよ、絶対に見るなよ」みたいなさ。そんな、くだらないことを考えていると、公子が登りながら質問してくる。

「じゃあ、私のは何色だと思うの？」

「…赤の水玉。」

「うぇっ！？　なんで分かるの！？　湊君、ホントにみてないの？」

驚く公子。だから、靴底しか見えないってば…。すると、今度は順平が遠慮がちに質問してくる。

「じゃ、じゃあよ。…桐条先輩は？」

「…白。」

『ブフゥ！　ゴホッ、ゴホッ…伊織、あとで処刑だ。』

「えぇ！　なんで、オレなんスか！？　普通、湊でしょ！」

処刑と言われ本気で焦っている順平。ってか、質問してきたの順平なんだから、そりゃ怒られるでしょ。そんな、くだらないことをしながら登っていると…

《シュー、ガチャン》

「あれ？」

――モノレール・車内　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

中に入ると棺のようなオブジェがぽつんと立っている…。それを見ていると登ってきたばかりの、順平が話しかけてきた。

「これ、人間…つか、乗客だよな？」

「うん、そうだよ。」

私がそう答えていると…

《シュー、ガチャン》

「あれ？」

ドアが全て閉じてしまった…。ってか、いまの湊君の声って外から聞こえなかった？そう思っていると、先輩からの通信が入る。

『どうした、何があった！？』

「それが、閉じ込められたみたいで…」

『シャドウの仕業だな…確実に、君らに気付いてるという事だ。何が来るか分からない。より一層、注意して進んでくれ！』

先輩にきかれ、ゆかりが返事をした。そして先輩から注意して進めと言われたが、問題はそこじゃない。そう思ってきいてみる。

「それは良いけど、湊君は？」

「「…え？」」

ゆかりと順平がそろって答えると列車の外から声が聞こえてきた。

「なんか、列車に乗車拒否されたんだけど…これって鉄道会社に文句言うべき？」

「いや、何言ってんの。私たち無賃乗車だよ？」

私がそういうとツッコミを入れてくるゆかり。

「そこじゃないでしょ！　ってか、なんで乗れてないのよ？」

「ゆかりがパンツの話題で盛り上がって遅れたからでしょ…まったく。」

湊君がそう言うと、顔を赤くして怒るゆかり。

「誰も盛り上がってないわよっ！　…て、本当にどうする？　私たちだけで進む？」

現状の拙さから冷静になるゆかり。すると、先輩から通信が入る。

『しょうがない、中の3人はこのまま進んでくれ。有里はこっちに戻ってくれ。』

「いえ、屋根を進んで行ってみます。車外にシャドウがいないとも限りませんから。」

『そうか、分かった。気を付けてな。それでは、草摩をリーダーに探索を始めてくれ。』

「了解です。」

そうして、私たち3人は先頭車両の方へと進み始めた。

――車内

前の車両へ進むがシャドウの姿は見えない。それを見て順平も驚いた表情をしてからガックリしてる。

「あれ？　シャドウいねえじゃん？　んだよ。拍子抜けだよ…」

「なんか妙に静かだね…」

ゆかりもそう言いながら、進んでいると。

「うわっ！？」

「出やがったなッ！」

…!?突然、シャドウが現れたが、先頭車両へ走り去っていった…。
それを追って行こうとする順平。

「ちょっ、コラッ!!」

『待てっ！　敵の行動が妙だ。イヤな予感がする。』

「そんなっ！　追っかけないと、逃がしちまうっスよ!?」

『草摩、現場の指揮は君だ。この状況…どう思う?』

…明らかに誘われてるよねぇ。でも、進まないといけないんだし慎重に行くかな。そう思い答える。

「明らかに誘われてます、慎重に進みましょう。」

『私も同意見だ。うかつに追うべきじゃないな。』

私の意見に先輩も同意する。だが、それを聞いてた順平が口を開く。

「…いーよ、オレだけで。オレがどーんと倒してやっからさ！　見てろ、オレ1人だってやれるっつーの!」

そう言って、追って行ってしまった。…ったく、ただでさえ人数少ないってのに。なに、勝手なことしてんだか。そう思っていると、ゆかりも追いかけて行った順平を呼ぶ。

「あ、コラ、順平ッ!?」

『危ない、後ろだ!!』

言われて振り返ると2体の敵が出現していた。ふぅー…

「ったく…さっそく敵のペースじゃん…。いくよ、ゆかり！」

「了解！」

追いかける為に、まずはこいつらを倒すことに集中する。

「先輩、こいつらの弱点は？」

『待ってくれ…どうやら炎に弱いようだ。いけるか、草摩？』

「当っ然！」

そう言って、召喚器を頭に当てる。

「きて、オルフェウス！」

頭に当てた召喚器の引き金を引き、頭を撃つ抜くと。竪琴を持った女性型ペルソナ“オルフェウス”を召喚した。

「オルフェウス、右側の敵にアギ！　ゆかりはもう1体を弓で狙って。隙をついて、私が片付けるから。」

「わかった…はぁ！」

ゆかりがそう言って矢を敵に向けて放つと、当たった敵が後退する。それをそのまま走って近付き武器で薙ぎ払う。

「えーい！」

攻撃が当たると、敵は霞のようになり消えていった。そして、もう1体の方を見るとオルフェウスの放ったアギで燃えながら消えていく敵の姿があった。

「…じゃあ、進むよ。ゆかり。」

そう言って声をかけると先輩から通信が入る。

『こうなっては仕方ない。とにかく、君らも伊織を追ってくれ。このままでは各個撃破の的だ。』

聞きながら順平に対して怒るゆかり。

「もう、順平のやつ！　自分からはぐれてどうすんの！？」

『反応では、何両か先へ行ってるだけだ。では、急いでくれ。』

そう言われ、私たちは先へ急いだ。

――列車の屋根の上　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

「よっと。」

先輩に言った通り外の警戒をするために、屋根の上へ登った。でも、大型シャドウの気配は車内なんだよな…。

「窓も開かないみたいだったし、どうしようかな…ん？」

そう思っていると、前から敵が3体やってきた。なんか、王冠かぶ

ったイカみたいな敵だ。

「イカなら、燃えてスルメにでもなってろっ。」

言いながら、上着の中のホルダーから召喚器を引きぬき、腕輪からもカードを引く。

「Ｃａｌｌ！　マハラギ！」

召喚器でカードを撃ち抜くと広範囲に激しい炎は放たれ敵をのみこむ。…どうやら、それだけで燃え尽きたようだ。

「弱点だったのか？　まあ、どうでもいいか。先に進もう。」

そう思い、何車両か先に進んでいると…

《ガクンッ…ウィーン》

「あれ？　動き出した。動かないって言ってたのにどうなってんだ？　ってか、この時間だとまだ前に走ってる列車あるはず…やばい！　止めなきゃ。」

このままでは、先に進んでいるが影時間でとまっている列車にぶつかる危険があるため、急いで先頭車両を目指す。

しかし、さっきよりも屋根の上の敵が増えていてなかなか先へ進めない。

「ちっ、邪魔すんなっての！　っ！？　ぐわぁ！」

敵を蹴散らしながら進んでいると、複数体の敵がまとめて押し寄せてきたため、攻撃をくらって吹き飛ばされてしまう。

「っ！？　マズッ！」

『有里っ！！』

吹き飛ばされた僕は、そのまま走っている列車から落下した…

――車内　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

「って…邪魔だっての、もうッ！！」

言いながら天秤のようなシャドウに矢を放ち倒すゆかり。

「これで全部だね、それじゃ進もう。」

倒し終わったことを確認し、ゆかりに先に進むことを促す。すると、心配そうな顔をしながら小さな声でゆかりが言う。

「順平、どうしちゃったんだろ？　何かあったのかな…」

――６・７号車

「順平、この車両にもいないね。ったく…一人は危険だって分かってるはずなのに…順平、何か様子おかしかったよね？　公子、気に障ること言ったりした？　ま、順平に聞けば分かるか…とりあえず急いで後を追うよ！」

――４・５号車

５号車ぐらいだろうか？そこまで進むと戦っている音が聞こえてきた。ゆかりもそれに気付いたようだ。

「あ、いた！　ヤバ、敵に囲まれてるじゃん！？　助けるよ！」

確認すると、3体の敵に囲まれているようだ。順平は何かを言いながら戦っている。

「くそっ…オレがやってやるんだっつの！　コノ、コノッ！　…オレ1人だって！」

…はぁ、馬鹿。なにカッコつけてんだか。

「一気にいくよ、ゆかり！」

「OK！」

先ずは囲まれている状況をなんとかするため、まわりの敵を吹き飛ばす。

「ゆかり、ガルで天秤のシャドウをお願い！」

「了解…お願い、イオ！」

そう言ってゆかりは召喚器で頭を撃ち、牛の頭骨型の椅子に座ったような女性型ペルソナ“イオ”を召喚する。

「イオ、ガルで敵を吹き飛ばしちゃって！」

ゆかりがそう命令すると、イオが突風を起こし天秤型シャドウを吹き飛ばした。

「次は私よ、オルフェウス。もう一度あのイカを焼き払っちゃって！」

命令しながら、オルフェウス呼び出し最初に出てきたのと同じ敵にアギを放つ。あとは手の形したシャドウ1体。なら…

「順平、きめちゃって！」

「うぉー！！」

残った敵は順平の全力の振り降ろし攻撃で消えていった。それを確認すると、ゆかりが順平の元まで近付く。

「言わんこっちゃない！　1人で勝手するからよ、もう。…で、だいじょぶ？」

「大丈夫に決まってんだろ！？　つーか、別に助けなんか…」

「ちょっと、あんたねぇ！」

強がっている順平をゆかりがさらに怒ろうとすると、桐条先輩から通信が入った。

『おい、気をつけろ！　敵の動きが急に静まった。警戒を怠るな！』

《ガクンッ…ウィーン》

先輩がそう言うと、急にとまっていたはずの列車が動き始めた。それに驚く順平。

「おわっ…なんだよ！　動かねんじゃなかったのかよ！？」

『どうやら、列車全体がシャドウに支配されてるらしいな…』

「“らしい”って…ちょっと、大丈夫なんですか！？」

先輩の言葉に不安そうにするゆかり。順平もさすがに怖いのか不安げに尋ねる。

「お、おい…ヤバくねえ？」

『マズい、このままスピードが落ちないと、数分で、１つ前の列車に追突する！　っ！？　有里っ！！』

「追突！？　なんなんですか、それ！？」

「湊君になにかあったんですか！？」

ゆかりと私が先輩に尋ねる。すると、先輩も少し動揺しながら答える。

『っく…いいか、落ち着いて聞くんだ。動き始めたあと、屋根の上で大量のシャドウの反応があったんだ。そして、有里は交戦中に押し寄せてきたシャドウの攻撃で走行中の列車から落下してしまった。』

「そんな！？　それで、湊君は無事なんですか？」

私がそう聞くと言いづらそうにしながら、先輩が答える。

『正直なところ、分からない。落下の衝撃で通信機が壊れたらしく応答がないんだ。こちらからも救助に向かうが、君たちの方が近いだろう。さっきから先頭車両に強い反応を感じる。多分それが“本体”だ。行って倒し、列車を止めるんだ！』

「クッソ！　何のアトラクションだよ、ったく！！　待ってろよ、湊！」

先輩の通信を聞き、順平がそう言うと私たちは先頭車両へ急いだ。

――2号車
『時間がない！走れ！』

湊君を助けに行くよりも先ず、衝突までのタイムリミットがあり、急いで敵を倒しながら進んでいると、ここでさらに列車が加速を始めた。…時間がないのに！

「え、何！？　もしかして、加速してない？　この電車！」

ゆかりもそれに気付き動揺する。だが、先頭車両へ続くドアの前にくると先輩の通信が再び入る。

『本体はこの中だ！　準備はいいな？』

「はい…みんな、いくよ！」

みんなが真剣な表情で頷くのを確認すると、本体を倒すため先頭車両に突入した。

――線路　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

「ぐ…っいってぇ…」

押し寄せてきたシャドウの攻撃を喰らい落下してしまった僕は体中怪我をしていたが、なんとか無事だった。

「あー…ダメだな。完全に壊れてる。」

落下の衝撃を受けてしまった通信機を、腰から外して確認するが完全に壊れてしまっている。…さて、どうするかな。回復スキル使っても流れた血は回復しないから、止血程度の意味しかない。

「ん？　加速した？」

遠くに見える列車がどうやら加速したようだ。でも、どうやって列車を動かして…。

「シャドウが乗っ取っている？　じゃあ、倒してもブレーキをしないと…っち、キツイっていうのに！」

急いで腕輪から魔石を取り出し、魔力をこめる。

「カデンツァ！」

止血の応急処置にすぎないが、カデンツァを発動させ傷を塞ぐ。

「これで、速度もあがるだろ…じゃあ、追い付ける可能性がなくても、行くしかないよな！！」

そうして、列車を目指し走り始めた。

――先頭車両　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

先頭車両の中に入ると、髪がメデューサのようになっていて、身体の左右で色が白黒に分かれている女性型の大型シャドウがいた。

「いた…！　うっわ…すげー事になってんな…コイツが本体？　でも、Ｍ字開脚っておかしいだろ…」

順平が敵を見ながらそんなことを言う。それにゆかりが答える。

「先はもう無いし、コイツで間違い無いよ！」

『急ぐんだっ！』

そう急がないと衝突してしまうし、湊君を助けに行かないと！

「いくよ、みんな！」

「おう！」

「了解！」

号令を出し、みんなで大型シャドウへ向かっていく。時間がないから、弱点を調べるのは先輩に任せて、私たちは攻撃に専念する作戦でいく。

「先輩はアナライズをお願いします。順平はスラッシュ、ゆかりはガルで斬撃と風が効くか様子をみて！」

『わかった、急いで調べよう。』

先輩がそう答える間に指示を聞いていた2人は行動に移っている。

「こい、ペルソナ！　スラッシュだ！」

「イオ、ガルで攻撃して！」

順平が召喚した甲冑に機械の翼を持ったような男性型ペルソナ“ヘルメス”が、敵に接近してその翼で敵を斬りつける。

ゆかりが召喚したイオが放ったガルは相手を直撃する。

「…特別効いてるわけじゃないけど、相性は普通ってことね。なら、このままいくよ。ゆかりは弓で敵の注意を引きつけて。順平はオルフェウスに続いて全力の斬撃。ただし、相手の動きに注意して各自で回避も忘れないで！」

そう言ったそばからシャドウが動きを見せる。

「っ！？　なんかくる、回避！」

言って相手の正面から飛び退くと、シャドウの口から氷の息吹がはかれ、元いた場所を含めシャドウの正面の床が凍りついていた。

「っあっぶねぇ！　なんて威力のブフだよ。喰らったら、少しの間うごけねぇぞ。」

「違う。これはマハブフだよ、要注意だね。みんなやつの正面は避けて、斜めから攻撃するようにして。」

「「了解！」」

言い終わると中断してた先ほどの行動に移る。

「きなさい、オルフェウス！　突撃！　行って、順平！」

「まかせろ！」

私の召喚したオルフェウスが竪琴を持って、左側から相手に接近する。そして、順平がその後ろを大剣を構えながらついていく。

「さぁ、こっちよ！　くらえっ！」

ゆかりはその接近を阻まれないよう、逆の右側から敵の顔に向けて矢を放ち当てる。

だが、それを無視しながら敵は小型シャドウを2体召喚した。

「召喚！？　そんなこともできるの？」

「ここまでくれば、カンケーないぜっ！　うぉりゃあ！」

相手が召喚している間に接近していた順平は、オルフェウスが攻撃した相手の右足の脛を思い切り斬りつけた。

「よし、きいてるよ！　順平は下がって。態勢を整えたら、召喚されたイカごと焼き払うよ。」

「おっけー！」

敵の動きを見ながら順平がこっちへ戻ってくる。だが、敵はそれを

阻むように攻撃をしてくる。

「ヤバい！　オルフェウス、順平をアギで守って！」

召喚したときにはすでにマハブフが順平に迫っていたが、ギリギリのところでオルフェウスのアギがそれを相殺する。

「いまのうちに下がって！」

「お、おう。悪い公子ッチ、助かった。」

なんとか攻撃を喰らわずにすんだ順平が急いで戻ってくる。

「はぁっ！　公子、小型を1体倒したわよ！」

私たちが大型の攻撃を受けている間に、小型の相手をしてくれていたゆかりがそう言ってくる。

「ナイス、ゆかり！　時間がないから一気にいくよ！　集まって、アギとガル！」

「よっしゃ！」

「OK！」

言いながらシャドウの正面に3人で集まり、ペルソナを召喚する。

一ヶ所に集まったことで相手も狙いを定め攻撃態勢に入る。

「「「いっけぇー！！」」」

そう言って、オルフェウスとヘルメスのアギと、イオのガルが合わさり大きな炎を生み出す。そして、シャドウも同時にマハブフを放ち、炎と氷がぶつかり合う。

「みんな、おしてるよ！　もうひと息！」

「よっし、気合入れろ、ヘルメス！」

「頑張って、イオ！」

一気に押し切る為にスキルを出し続けると、炎は小型と大型の両方のシャドウをのみ込み消し去った。

「ギリギリ…セーフか？」

倒した事で安心した順平が言う。だけど、列車のスピードが落ちる様子がない。それに順平とゆかりも気付く。

「…ってオイ！　止まんねえじゃんか！」

「そっか！　ブレーキかかんないと、すぐには…！」

どうしよう、このままじゃ…そう思っていると先輩から通信が入る。

『おい、どうしたっ！？　前の列車は、すぐそこだぞ！』

「うがー！　こんなモンの運転なんて分かっかよ！」

順平が半分パニックになっている。でも、列車を止めなきゃ！

「とにかく、ブレーキ！　っ！？　ダメっ、運転席側からカギがかかっててドアが開かない！」

「どいてっ、ガルでドアを吹き飛ばすわ！」

そう言って、ゆかりが召喚器を当てながらドアに向かって立つ。でも、そんなことしたら！

「ダメ！　そんなことしたら、機械まで壊れちゃう！」

「んじゃ、どうすんだよ！　もう、向こうの方に前の列車みえてんだぞ！」

焦って、冷静さを失う順平。でも、確かに時間がないし。どうすれば……なに、この音？

「ねぇ、なんか変な音しない？」

「音！？　今はそれドコロじゃねぇだろ！」

順平はそう言うが、私に言われてゆかりも気付く。

「ホント…後ろの車両の方からだ。」

《ドン……ドン……》

そう言って、後ろの車両の方を向く私たち。さすがに2人に言われ音が近付いてくると、順平も気付いた。

「なんだぁ！？　まだ、敵が残ってたのか！？　つか、こっちに向

かってきてんじゃねぇか！」

順平の言う通り、音がこちらに近付いてくる…上？

「上から聞こえてくる。敵は列車の上だよ！」

「だからって、どうすんのよ。外に出ようにも窓もドアも開かないし、前の列車はもうすぐそこよ！」

ゆかりがそう言ってるとさらに音が近付いてくる。

《ダンッダンッダンッ…》

「…音が止んだ？」

《ガシャーン！》

音が止んだかと思うと、今度は運転席の方からガラスの割れる音がした。振り返って、そっちを見ると、

「…え？」

そこにはあり得ない人がいた…。

――線路　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

カデンツァで回復し、移動速度も上げたが走ったところでスピードの乗った列車に追い付けるわけがない。だが、どうにか離されないようにだけは済んでいる気がする。

「はぁ…はぁ…、時間が…ない。」

そう、深夜のため日中に比べれば一時間に走る本数は極端に減っている。だが、３０分に1本はあるのだ。列車が動いて既に１０分は経っている。このまま行けば、あと１５分もかからずぶつかるに違いない。そんなことになったら…

「もう…目の前で……ぐっ…」

応急処置のため大して魔力も込めずに発動したためか、傷口が開いたようだ。でも…

「…誰も……死なせないっ」

そう言って、痛む身体を無視して速度を上げる。だが、それでもまだ追い付くには足りない。

「足りないなら、補えば良いんだろ！　カード使ってる暇がない。ジェムでいくぞ、マハガル！」

走りながら右手にジェムを取り出し、魔力を込めてスキルを発動する。発動したマハガルを利用し自分の前の空気と風を後ろに流し、さらに後ろ向きに風を吹き出すことで速度を上げる。

健康な状態でも負担がかかる速度を、重症な状態で出せばその負担はかなり大きい。いくら丈夫な僕でも何度もこけそうになるが、それでも走り続けると列車に追い付いてきた。

「あと、少しっ…届けぇ！！」

もう少しという所で、足に力を込めて一気に跳ぶ。すると、なんと

か窓枠に手がかかり、そこから屋根へとよじ登って行く。

「はぁ…はぁ…ん？　休んでる暇もないってのか。くそっ、間に合えよ！」

屋根に上り、少し休もうと思ったら遠くの方に前の列車が見えた。このままだと5分後には衝突するだろう。疲労した身体に鞭を打ち全力で走りながら先頭車両を目指す。

――先頭車両付近

１０両以上の屋根の上を走って、なんとか先頭車両へ近付いてきた。さっきと違って、シャドウがいなかったのも大きいだろう。あと、もうちょっとだが…

「そういや、中にはどうやって入ろう。それに運転席にはカギがかかってるはずだし…車掌が顔出す窓を蹴り破るか。そうと決まれば！」

言いながら先頭車両に到着し、車両の少し出っ張っているとこに手を掛けながら飛び下り、窓に蹴りを叩きこむ。

《ガシャーン！》

窓を蹴り破ると急いで緊急停止用のブレーキを探す…あった！

「じゃまだ、どけ！」

そう言って、車掌であった棺桶を蹴って壁際に追いやる。

「止まってくれよ！」

言いながら、緊急停止用と書いたブレーキのレバーを下に下ろす…だが。

「これじゃあ、距離が足りない！？」

そう、スピードは落ち始めたが、停止までに必要な距離が足りないのだ。このままでは、停止前に衝突する。…だが、みんなを死なせたりはしない！

「もってくれよ、身体ぁ！」

言いながら、運転席のドア開き外に出る。ドアを掴んだまま、壁を移動し連結部を足場に列車のフロントガラスに背を預ける。そして、腕輪から両手にジェムを取り出す。

「出ろ、“炎の嵐”っ！！」

そう言って、スキルを同時発動させ対エリアボス戦で放った炎の嵐を起こす。

「ぐぅっ！！」

ジェットの逆噴射のように、炎の嵐を発動して一気に減速を図るが、列車を減速させるほどの力で車体に抑えつけられた上に、列車自体からも前に進もうとする力を受けるのだ。本来、生身の人間が耐えられる圧力のレベルをはるかに超えている。

「ぐ…とまれぇ！！」

さらに威力をあげると、列車は減速していき最終的に止まった…。

「よかっ、た…」

そこで僕の意識はとぎれた…

――車内　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

「うわぁああ！」

「キャァァッ！」

《キキィー！》

湊君が現れ、ブレーキをかけたかと思うと、外に出て前に見た炎の技で列車に急ブレーキをかけた。

「と…止まった？」

「止まってる…みたい。」

列車が止まったことを確認する、順平とゆかり。すると、桐条先輩から通信が入る。

『おい、怪我はないか！？』

先輩の質問にゆかりが答える。

「い、一応、大丈夫です。や、やば、あたしヒザ笑ってる…」

「あーっ、あーもうっ、メチャメチャ、ヤな汗かいたっつーの…おい、へーキか、公子ッチ？」

「私も怖かったけど大丈夫だよ…」

『フゥ…無事らしいな。今回は、バックアップが至らなかった。済まない…私の力不足だ。シャドウの反応はもう無い。よくやってくれた、安心して戻ってくれ。』

私たちの無事をきいて安心する先輩。だけど…

「そうだ、湊君はっ!?」

『いま、最後に反応が確認された場所へ向かっている最中だ。』

「違うんです！　湊君がきて、列車を止めてくれたんです！」

『なんだとっ!?　わかった、至急そちらに向かう。』

そういうと先輩からの通信がきれる。

《ガチャン、プシュー》

シャドウからの支配が完全にとけたからか扉が開いた。そしては私たちは急いで外に出て湊君の元へ向かう。

「「湊君っ！」」「湊っ！」

私たちが叫びながら列車の前へ行くと、そこで湊君は倒れていた。急いで近付き抱き起こす。でも、この温かいのって…

「っ!?　酷い怪我っ、どうしてこんな身体で無茶するの！　ゆかり、ディアかけて！　早くっ！」

「わ、わかった。お願い、イオ！」

言われて、急いでペルソナを呼び出しディアをかけるゆかり。そして、心配そうな顔をして順平も尋ねてくる。

「…お、おい。湊の様子はどうなんだ？　意識ねぇみてぇだし、大丈夫なんかよ？」

「大丈夫じゃない、酷い怪我の上に大量に出血して体温も下がってきてる。先輩にいって、影時間が明け次第急いで病院に運んでもらわないと。」

聞いて、驚く順平。そして、ディアをかけていたゆかりも状況が変化しないことに苛立つ。

「体温下がって、って本気でやべぇじゃん！？　先輩、急いで来て下さい！　このままじゃ、湊が！」

『わかっている！　明彦にも連絡して、影時間終了と同時に病院への搬送の連絡をするよう頼んだ。君達も最寄りの駅などに移動して、すぐ搬送できるようにしてくれ！』

「全然、血が止まらない…力があったって、大切な人を救えなきゃなんの意味もないじゃないっ！」

そうしてその後、私たちはなるべく負担にならないよう湊君を近くの駅まで運び、影時間終了後に呼んだ救急車で一緒に病院へ向かった…。

――作戦室　{Ｎｏ　Ｓｉｄｅ}

一方その頃、寮の作戦室。現場からの通信が入った。

《ピピピッ》

「俺だ。」

『明彦か？　こちら現場だ。たった今、全て片付いた。モノレールの被害もガラスが１枚割れたぐらいで軽微だ。それより、影時間が明け次第病院に連絡して救急車を手配してくれ。』

美鶴の言葉を聞いて、現場の状況を心配する真田。

「なにかあったのか？」

『走行中の列車から落下したはずの有里が、どうやってか再び列車に現れ力ずくで列車を止めたらしい。』

「なんちゅう、無茶苦茶なやつだ…それで？」

再び真田が尋ねると、暗い雰囲気で美鶴が答える。

『…みんなが駆け寄ったときには意識を失い重症だったそうだ。大量に出血していて体温の低下も始まっている。私もいま向かっているが、処置しながら搬送した方が良いだろう。』

「っな！？　わかった、すぐに手配しよう。」

『ああ、頼んだぞ。』

湊の状態に驚きながらも真田が手配を了承すると、美鶴がそう答え

た。話が終わると、そこで幾月も口を開く。

「ご苦労さま、桐条君。やー、列車を乗っ取られたと聞いた時は正直どうなるかと思ったけど、上出来だよ。これなら明日の朝刊にへンな大見出しが出るような事は、無くて済むね。」

幾月に言われ、湊のことが気がかりながらも美鶴が答える。

『彼らがよくやってくれました。短期間で驚くほど成長しています。』

聞いて、真田も話に加わる。

「しかし、シャドウの様子…ただ事じゃないですね。モノレールを乗っ取るなんて、調子に乗り過ぎてる。」

「こちらでも調べてみるよ。」

『ついに…“始まった”という事なんでしょうか?』

美鶴の問いに、顎に手を当て唸りながら幾月が答える。

「うーん…まだ早計には言えないけどね…ま、とにかく、まずは現れるきっかけを突き止めない事にはね。いつも、こんな土壇場まで分からないのはどうにもマズい。」

『私にもっと力があれば、みんなの負担を軽く出来るんですが…。それに力を貸してくれているだけの彼に、負担がかかり過ぎている。』

美鶴が悔しそうに言うと、幾月も労うように話しかける。

「気にしなくていいさ。君はよくやってくれてる。そんな事よりね…真田君さー…なんか、飲みモノ持ってない？」

「は…？　と言うか幾月さん、今日、何だか疲れてませんか？　まさか、表に停めてあった自転車…」

真田にそう言われ、肩や腰を手でおさえながら言う幾月。

「明日、いや、あさってあたり…筋肉痛かな、こりゃ。」

そうしてその後、影時間が明けると言われた通り病院へ連絡し救急車を手配すると、真田と幾月も病院へ向かった。

第十六話（後書き）

以上が二章の本編でした。あとは設定を書けば二章終了です。しかし、二章登場人物からまとめないといけないので少し時間がかかりそうです。

第二章　設定（前書き）

というわけで第二章の設定になります。今回は『人物設定、オリジナル設定・道具解説、一章・二章のあとがき出張編』の構成になります。ストーリー本編と違い説明のため改行などは項目が変わるときぐらいしかしてませんので、読みづらいとは思いますが、ご了承ください。それとテンプレは主人公たちと、その他のキャラで違います。まず、主人公たちのは下のものになります。

名前（よみ）　所属
【設定】
【装備】
・装備名―装備場所
【戦闘】
【番外設定】

というものです。見た目や一人称は前回書いたので飛ばしてます。所属は新たに追加されたもの、【設定】は新たに増えた作品内での人物説明です。【番外設定】も同じように追加のものですが、こっちは過去のエピソードや、このとき実はこうだったなどの補足的要素を含んだ内容です。次に他のキャラのテンプレは下のものになります。

名前（よみ）　所属
【一人称】（よみ）
【見た目】
【設定】

こっちでは番外設定がありませんが、それはこっちの【設定】が両

方を含んだ内容だからです。ですので、この作品でのこのキャラはこういうヤツなのかと思って読んでください。それとオリジナル設定・道具解説もほぼ同じ所属や【一人称】を除いたテンプレを使用しますが【見た目】の項目はありません。それは【設定】の方に書いていますので。では、前書きはこれぐらいにして、設定本編をどうぞ。

第二章　設定

―人物設定―

《影時間・関係者》

有里　湊（ありさと　みなと）　特別課外活動部に傭兵雇用、男子弓道部入部

【設定】公子に言われて見るようになった漫画やアニメが今でも好きで、お気に入りは『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』。中でもアーチャーが特に好き。生身でシャドウの位置やタルタロスの構造が把握できる特殊能力のようなものがあるが、エスパーというわけではない。同じく、下着の色当ても直感で言っているだけで、本当に見ていないし具体的なイメージしているわけではない。好きな色を聞かれて答える感覚である。１人でいるとき、たまに謎の女の声と会話している。他人の嘘を見抜き、逆に自分は相手に内面を読まれないことを得意としている。その延長で表情などの演技もできるようになったため、脅しや交渉の際に使用している。

【装備】

・白金の腕輪（カード、ジェム、ミックスレイド、黒紅）―右手首
・ゆかりに貰った片手剣―腰の左側のベルトに鞘を固定して装備している
・召喚器―上着の内側に肩から掛けるようにホルスターをつけて入れている
・コンバットナイフ―腰に上着で見えないようにつけている

【戦闘】中学時代から喧嘩のようなことをしていたため戦闘力は高い。そのときの経験もあり基本的に決まった戦闘スタイルはなく、

状況に応じて武器やスキルを使い分けて戦う。本来は個人戦闘タイプだが、リーダーを命じられたためフォローにまわっている。しかし、他の者が戦うより湊が1人で戦った方が早かったりする。

【番外設定】

・極端に仲間や絆というものを信じないが、これは幼少期の生活の中で心が摩耗した際に救いや希望、奇跡というものを諦めたからである。同情してくれる人間もいたが憐れむのみで助けてくれる者はいなかった。それを見ながら自分が壊れていくのを感じる中で、世界や他人というものに見切りをつけた。そのため、他人と仲良くなることはあっても深くは踏み込まないし、踏み込ませないように距離をおいている。だが、両親の死を通じて他人の死を嫌うようになったのか、公子たちに危険が迫った際は自分の身を顧みず助けに向かう。

・中学時代に大勢の人間と喧嘩のようなことをしてきた。最初は公子との仲を妬んだ先輩数名に呼び出されリンチまがいのことをされそうになり撃退したが、その後その先輩がＯＢの高校生に頼み襲わせるがそれも撃退する。だが、その高校生の中に不良グループに入っている者がいたため不良たちとも喧嘩をするようになったというネズミ算式に敵を増やしていっただけで湊から手を出していった訳ではない。しかし、湊自身もそれを拒否したりはしなかった。理由は単に鬱陶しいから二度とこないように痛めつけるというもので、別に公子の言ったように生を実感したかったという訳ではない。公子と戦闘した日も動いて熱くなった身体に雨が気持ちいいと思ってボーっとしていただけで泣いてなどいなかった。そのため、公子に攻撃されたときは本当に驚いたが、本気できていることがわかったため、テキトーに相手して黙らせたのである。だが何故その後、公子と仲良くなったのかと言うと、入院した際同じ病室になり頻繁に公子が怪我を心配してきて、相手するのが面倒だったため膝枕させ

寝ることにした。それを公子が甘えていると勘違いし、余計に湊に甘い状態で構ってくるようになったため諦めてそれを受けるようになったからである。ちなみに湊の気配察知や構造把握は事故後に目のことや劣悪な生活環境に置かれたことがあり身に着いたものだが、待ち伏せや多人数を相手にしているうちに磨きがかかり現在のレベルになった。

・六話　ａｆｔｅｒで公子が言っていた考察は実はほとんど間違っている。当時の湊はまだ人間らしさを取り戻していなかったので、自己というものがなくありのままを受け入れる状態だった。そのため、新しい環境に戸惑うなんて考えることも出来なかったのだ。そして、自分の無事を確認して生を実感するというのも、違う前提が存在するためあり得ない。その前提とは、湊は自分の生に対してなんの執着も持っていないというものである。湊は既に世界に見切りをつけているため自分の命を顧みたりはしない。いま、生きているのはオマケの人生だと思っているのだ。そのため、好きに生きようとするし、他人が死にそうなら命懸けで救おうとする。救うために無茶をして自分がどうなったとしても、救うという目的が達成されさえすればその後のことはなにも考えていないのである。湊が『Ｆａｔｅ』のアーチャーが好きな理由は無意識に、理想を抱き他者を救い続けて死んだその姿に憧れているからなのかもしれない。

草摩　公子（そうま　きみこ）　特別課外活動部所属
【設定】湊に年頃の子供らしさを芽生えさせるために、男の子が好きそうなアニメや漫画を勉強し湊にそれを見せたりしていた。現在では自分も普通にそれらを楽しんで見たりしている。実はそれなりに料理ができるため、たまに湊にご飯やお弁当を作っている。その際、順平がつまみ食いしようとしてくるが、湊のために作っている物を他の人間が先に食べる事を許したりはしないため、虚ろな目で

包丁を持ち近付いて脅しをかけたりする。最近では湊への愛情が異性へのものに変わってきている。余談だが公子の料理している姿を見ていたため湊も同じレベルかそれ以上には料理ができることを公子は知らない。

【装備】
・薙刀―普段はケースに入れているが探索中は手に持っている
・召喚器―腰の左側にホルスターをつけそこに入れている
・ペルソナ―愚者“オルフェウス”

【戦闘】自分がコマのときは命令通りに動き期待されれば、その期待に応えるという湊に次ぐ戦闘力を持つオールラウンダー。自分がリーダーのときは湊の指示から学び、各自が敵と一対一になれるように指示を出す。だが、一掃する方が好みのため、いけそうならメンバーとスキルを合わせて特大火力で焼き払おうとする。スキルの魔法攻撃属性は火。

【番外設定】
・中学時代からかなりの強さを持つが、それは近所にあった古流武術の道場に通っていたためである。その道場では現在のスポーツ武術のようなルールのあるものではなく、純粋な戦いのための武術を教えていた。最初は公子もそこでボロボロになったりしていたが、姉として湊を守るには心の強さだけでは守れないと思ったため諦めずに鍛錬を続け今の強さの基礎を身につけた。まわりからは天才型と思われているが、本来は少し優れている程度で他者を圧倒できるほどではない。それが今のレベルになったのは、湊に敗北し守るべき者が自分を必要としていないことを否定したかったからである。今ではそのようなことを思っておらず、自分が湊を愛して湊もいつかそれに応えてくれればそれで良いと思っている。

岳羽　ゆかり（たけば　ゆかり）　特別課外活動部所属

【設定】湊と名前で呼び合うようになり、さらに周りから誤解されるようになった。その上、喫茶店のことで湊にプロポーズしたと周りに思われている。それを最初は必死に否定していたが、今は無視を決め込むようにしている。ピンク色が好き。まわりから、湊との関係をいろいろ言われるのを嫌がっているが、最近では湊にべったりのスキンシップをとる公子の行動が気になったりしている。

【装備】

・弓―ケースに入れて持っていくが、探索中は手に持っている
・矢―どこから出しているのか不明、ただし湊と違い実体のものである
・召喚器―右足にホルスターを巻いていてそこに入れている
・ペルソナ―恋愛“イオ”

【戦闘】遠距離魔法攻撃タイプ。指示されたときは命令通りに動くが、それ以外は基本的に援護の形で弓で敵の注意をそらしたり隙をついて攻撃する。スキルの魔法攻撃属性は風。湊を除けば新人では唯一の回復技を使える存在。しかし、威力はあまり高くないため軽傷ぐらいしか治療できず、それ以上は止血と痛み軽減くらいしかできない。

【番外設定】

・最近になって弓道部の先輩らに期待の新人（湊のこと）が入ったと聞いたが、未だに会えないでいる。名前を聞いても他の部活にも秘密にしたいからと教えてもらえていない。実は湊がどの部活に入ったのか気になっていて、放課後に少し他の部活を見てまわっている。

・親がいない境遇が同じため湊を気にしていたが、喫茶店での出来事や1人で戦っている姿を見て公子と同じように湊のことを心を含めて心配するようになった。だが、湊は自分の内面を相手に読ませないため、余計に心配してちょくちょく気にかけて共に行動するようにしている。結子の聞いた噂の元ネタはこのあたりかも知れない。

伊織　順平（いおり　じゅんぺい）　特別課外活動部入部

【設定】影時間のコンビニで真田に発見され、適正があることがわかりペルソナ使いになった。最近、湊がいろんな女子（公子、ゆかり、美鶴、理緒、結子、鳥海など）と歩いてたりする場面をみて他の男子と一緒に嫉妬しているが、嫉妬部隊として出動したときに喰らったローキックが思いの外痛かったため、現在は心の中で思う程度に留めるようになった。

【装備】

・大剣―鞘ごと袋に入れて持ち運ぶが探索中は抜き身で手に持っている

・召喚器―腰の左側にホルスターをつけそこに入れている

・ペルソナ―魔術師“ヘルメス”

【戦闘】近距離物理タイプ。大剣による物理攻撃がメインだが、様子見で自分と同じ攻撃属性の物理スキルをペルソナに使用させたりもする。スキルの魔法攻撃属性は火。大剣を使いこなすには筋力がまだ足りないのか、大振りになったりするが、昔にやっていた野球のスイングなどで自分に合った使い方を探している。

【番外設定】

・みんなを救うヒーローに憧れて、特別課外活動部に入る事に決めた。だが、実際は自分よりも他の仲間の方が強いため負けないよう

に影で努力したりしている。今の目標はみんなに頼られる不動のエース。

・列車内で単独行動をとったのは自分しか男がいないため、自分がみんなを守るんだと意気込んだからである。

桐条　美鶴（きりじょう　みつる）　生徒会長、特別課外活動部部長
【設定】支持率８０％超えで月光館学園の新生徒会長になった人。完璧超人と思われているが、湊のように常識はずれな存在には弱い。そのため、湊の行動や言動でフリーズしたり動揺したりよくしている。スケベな人間には容赦しないが、やはり湊は特殊なため対象から除外されている。

【装備】
・武器―不明
・召喚器―腰にホルスターをつけていてそこに入れている
・ペルソナ―アルカナ不明“ペンテシレア”

【戦闘】不明

【番外設定】
・自分のバイクが気に入っていて、順平に特別製と説明する際、嬉しそうにしていたのは相棒をみんなに紹介した気分だったからである。

真田　明彦（さなだ　あきひこ）　ボクシング部主将、特別課外活動部所属
【設定】順平を逃がすために一章の大型シャドウの囮になり、怪我

をした。よく湊と公子にアバラネタでいじられるが、アバラはほぼ完治している。

【装備】
・グローブ―普段は手に持っているが、使用中は手にはめる
・召喚器―腰の右側にホルスターをつけそこに入れている
・ペルソナ―不明

【戦闘】本人の説明では近接タイプ

【番外設定】
・公子に姉弟喧嘩の話をきき、スパーでその実力の片鱗を見たため、完治後は本気で湊と対戦するつもりである。そのため、治療中は負担にならない筋トレ法を医者に聞き励んでいる。

幾月　修司（いくつき　しゅうじ）　特別課外活動部顧問
【設定】特別課外活動部の顧問。ペルソナは召喚できないが、適正を訓練により高めたため影時間でも活動は可能。普段は根回しや影時間に関わることを研究・分析している完全な裏方。なぜ、適正もなかったのに顧問をしているのかというと過去に桐条で影時間に関わる研究をしていたからしい。

【装備】
・非戦闘員のため無し

【戦闘】影時間に活動ができるだけで戦闘はできない。むしろ、運動は苦手。

【番外設定】

・追加情報は特になし

荒垣　真次郎（あらがき　しんじろう）　元・特別課外活動部、月光館学園3年所属
【設定】元・特別課外活動部の仲間で、現在は力を捨ててなるべく関わらないようにしている。しかし、いまでも過去の仲間が心配なのか様子をみたり、調べ物を頼まれれば少し手伝ったりしている。

【装備】
・不明

【戦闘】不明

【番外設定】
・毎日ではないが、コロ丸にエサをあたえ遊んでやっている。他にも駅前のたまり場で野良猫にエサを与えていたりもする。だが、それを人に見られるのを嫌いかなりまわりを警戒してからエサを与えている。なので、湊に見られていたときは自分が気付けなかったことにも驚いていた。

《一般人》

友近　健二（ともちか　けんじ）　２－Ｆ所属
【一人称】俺（おれ）
【見た目】特徴ないのが特徴
【設定】原作男主人公の魔術師コミュの人。同級生の女子をガキという年上好き。しかし、主人公が可愛い女子と仲良くしているのを見ると羨ましくはあるらしい。

鳥海　いさ子（とりうみ　いさこ）　　月光館学園国語科主任、２－Ｆ担任
【一人称】私（わたし）
【見た目】歳は２０後半～３０前半といった感じ、髪は少しくせのついた茶髪、わりと美人
【設定】湊たちの担任。ケーキが好きだが、甘いものならわりとどれでも好き。見た目は美人だが普段のテキトーさや性格から少し残念な人と生徒に思われている。ぼけっとしている湊をなにかと気にかけているため、仲が良い。他の男子から抗議を受けても教師の特権（罰で掃除や荷物運びをさせる）で黙らせるなど、いろいろめちゃくちゃな人。

黒沢（くろさわ）　　ポロニアンモール交番勤務の警官、
【一人称】俺（おれ）
【見た目】少し強面、警察官の制服を着ている
【設定】ポロニアンモールの交番に勤務する警察官。階級は巡査。湊達に武器や防具を売っているがその入手場所は謎。ただし、グレーゾーンぎりぎりのものもあるらしく、そのことを追求されても答えられなかった。最初は湊のことを苦手に思っていたが、支払いの際多めに包む事があるので悪い子ではないのだろうと思うようになり、今では普通に接することができている。

岩崎　理緒（いわさき　りお）　　月光館学園２年、薙刀部所属
【一人称】私（わたし）
【見た目】黒髪ロングのポニーテール
【設定】原作女主人公の戦車コミュの人。公子の薙刀部仲間の女子。２年だが、実質リーダー的な立場にあり公子と一緒に熱心に指導し

ている。実力的には強い方だが公子には遠く及ばない。あまり目立たないが整った顔立ちをしているため実は人気がある。部活見学以降、学校内で湊と会うと気軽に話しかけたりしている。そのため徐々にゆかり、公子に加え理緒も噂になりつつある。湊の強さや集中したの時の姿をみて惹かれるものを感じたが、恋心は抱いていない。

高木（たかぎ）　月光館学園3年、男子弓道部主将
【一人称】俺（おれ）
【見た目】週刊少年ジャンプの『バクマン。』に出てくる高木秋人
【設定】オリジナルキャラの男子弓道部主将。見た目と名前のモデルは『バクマン。』に出てくるシュージンこと高木秋人。面倒見が良い性格で、見学にきた湊に丁寧に指導し「初心者の指導好きだし、できれば入ってくれると良いなぁ」と思っていたところ、湊の腕前をみて驚愕。そして、これは他に逃がしてはいけないと思い熱心に勧誘した。入部を決めた湊だがあれ以降1度も来ていないので、もう来ないのかと少し心配している。

秋名（あきな）　月光館学園3年、女子弓道部主将
【一人称】わたし
【見た目】週刊少年ジャンプの『バクマン。』に出てくる岩瀬愛子
【設定】オリジナルキャラの女子弓道部主将。見た目と名前のモデルは『バクマン。』に出てくる岩瀬愛子。なぜ、名前が違うかと言うと岩崎理緒がいたため、「岩〇」というのが他にいると紛らわしいかなと、岩瀬のペンネームである秋名愛子の名前からとることにした。高木と同じくわりと面倒見が良いがさっぱりしてる性格のため、まわりからはクールと思われている。湊の射る姿をみて自分より実力が上ということで、年下だが尊敬している。ただし、それは同じ弓道に関わる者としてなので恋愛感情は全くない。

西脇　結子（にしわき　ゆうこ）　月光館学園2年、男子弓道部マネージャー
【一人称】私（わたし）
【見た目】色黒の肌、髪を後ろで縛っている
【設定】原作男主人公の剛毅コミュの人で、原作女主人公の戦車コミュに登場したりもする。弓道部の宮本の幼馴染で、よく世話を焼いている。面倒見がよく、子供が好き。好きなタイプが「線が細いけど運動神経が良い人」なので湊のことが結構良いかなと思っている。部活に1度もでない湊に校内で会うと「暇なら遊びにきなよ～」と軽いノリで誘っていたりする。

宮本　一志（みやもと　かずし）　2－F、男子弓道部所属
【一人称】俺（おれ）
【見た目】短い黒髪、部活で射る時以外はいつもジャージを着ている
【設定】原作男主人公の戦車コミュの人。かなりの熱血派で「根性」という言葉を好む。結子の幼馴染で彼女や親しい人には「ミヤ」と呼ばれている。次期部長最有力候補で大会でもそれなりに結果を出している。実はゆかりのことが少し気になっていて同じクラスになれたことを喜んでいたが、湊と手を繋ぎながら（本当はゆかりが引っ張っていただけ）登校してきたのを見てショックを受けていた。その後、湊が公子や美鶴とも親しげにしていて、そのうえ鳥海先生に気に入られていることに他の男子同様、嫉妬していたが持ち前の切り替えの早さで部活に打ち込むことにした。だが、見学に現れた湊の実力をみて自分が負けていることを知り、それ以降は前以上に練習に励んでいる。

虎狼丸（ころうまる）　神社の犬
【一人称】ワン（わん）
【見た目】アルビノの柴犬
【設定】長鳴神社の神主の元・飼い犬。頭がよく人の言葉を意味も含めて、ある程度理解している。神主が事故で死んだあとも神社を守っており、近所の人が掃除しにきてくれるとき以外は自分で見回りをしている。他の人からの愛称は「コロマル」や「コロちゃん」など。

小田桐　秀利（おだぎり　ひでとし）　月光館学園2年、生徒会副会長、風紀委員
【一人称】僕（ぼく）
【見た目】オールバック気味の黒髪
【設定】原作男主人公の皇帝コミュの人。規則を守る事を第一としている。美鶴ほどではないが、生徒会の仕事をかなり負担している実力者。今回、実力・カリスマ性ともに校内トップと言われる会長の推薦できたということで湊に興味を持った。

伏見　千尋（ふしみ　ちひろ）　月光館学園1年、生徒会会計
【一人称】私（わたし）
【見た目】眼鏡、ストレートの長い暗めの茶髪
【設定】原作男主人公の正義コミュの人。生徒会の会計をしている1年生で、人付き合いが苦手なため話すときはおどおどしている。とくに理由はないが若干男性恐怖症のため、なるべく話さないで良いように教室などでは本を読んで過ごしている。

大橋　舞子（おおはし　まいこ）　小学生

【一人称】舞子（まいこ）
【見た目】髪をビーズの髪留めで縛っている、ランドセルを背負っている、
【設定】原作主人公の刑死者コミュの人。神社で1人で遊んでいたところを湊に声をかけられ、会ったばかりでも食べ物をせがむなど、なかなかにしたたか。知り合いをみて覚えたのか、一気飲みのあとの発言がオヤジ臭かったりといろいろな意味でキャラの濃い子。湊に貰ったカデンツァの魔石を大切にしており、また会える事を楽しみにしている。

《その他》

イゴール　ベルベットルームの主
【一人称】私（わたくし）
【設定】湊にさまざまな道具をあげたりしている、ベルベッドルームの主。その本来の役割は契約者のペルソナを融合し新たなペルソナを生み出す事。だが、今回の契約者である湊がペルソナを使用できないため、その本来の役割が果たせるのはまだ先になりそう。イゴールは実は、人間ではなくある人物に生み出された命を持った人形。そのため食事ができないので、湊は彼にお土産を買ってきていないのである。

エリザベス　ベルベットルームの住人
【一人称】私（わたくし）
【設定】イゴールの従者にして、テオドアの姉であるベルベットルームの住人。可愛い物が結構好きで、ペルソナではジャックフロストが好き。そのため、湊に貰ったフロスト人形は宝物にしていて、ときどき抱いている。プレゼントをくれた湊を少し意識しており、電話をかけることを悩むなどなかなか奥手。だが、勝手に電話をか

けたテオドアにイゴールの机を投げつけるなど、戦闘力は高いようだ。

テオドア　ベルベットルームの住人
【一人称】私（わたし）
【設定】イゴールの従者にして、エリザベスの弟であるベルベットルームの住人。手先が器用で色々な物を作る事が出来る。お茶の準備をしたりなど、家事スキルも持っているがそれは姉であるエリザベスも同様である。湊の持って来たたこ焼きを食べて気に入り再び食べれることを期待するか、自分でも作ってみるか悩んでいる。湊に渡した黒紅を使えることから力はかなり強いよう。いままで頭の上がらなかった姉が最近、湊に対しては弱いようで、その様子を楽しそうにみている。

謎の少年（本名は不明）
【一人称】僕（ぼく）
【見た目】囚人服のようなものを着ている、短めの黒髪、泣き黒子がある
【設定】湊を最初に玄関で出迎えた少年。影時間や夜に湊の前に現れ不思議な事を伝えてから、忽然と姿を消す謎の存在。ただし、湊への悪意はないようで親しげに話しかけている。見た目からすると年齢は１２・３歳といったところだと思われる。

謎の声の女（本名は不明）
【一人称】私（わたし）
【見た目】不明
【設定】一章の頃から湊と自室や病室にて話していた存在。その存

在を知っているのは本人たちのみで、謎の少年にも知られていない。湊との仲は良いようで、絆などを信じない湊ともお互いに信頼し合っているようだ。湊のセリフから本名は「～ス」で終わることがわかる。

―オリジナル設定・道具解説―

白金の腕輪（プラチナのうでわ）

【設定】湊がエリザベスに貰ったスキルカードを取り出せる腕輪。2本のリングが絡み合うようなデザインだったが、後にイゴールから貰った白金のリングをかざすと光に包まれ3本のリングが絡み合うデザインに変わった。デザインが変わったあとは、能力もバージョンアップされジェムとミックスレイドも取り出すことが可能になった。本来の用途は複数のペルソナ所持できる湊がペルソナにスキルを覚えさせるように、ということで渡されたもの。魔力を通した物（ナマモノや生き物を除く）を収納してカードと同じように自由に取り出すこともできる。

黒紅（くろべに）

【設定】湊がテオドアに依頼し作ってもらった弓。色は落ち着いた高級な黒を基調とし、両端はその黒が映える深紅になっている。黒紅という名前は湊が自分でつけたもので、見た目そのままだが「名はその存在を示すものだ」とのこと。製作者のテオドア曰く、湊の注文通り剣なども射ることができる強度を出すため、人間界では製造も使用（扱える者がいないという意味）も不可能な代物。だが、湊が普通に引いたのを見てテオドアも驚き、さらに興味をもつようになった。普段は白金の腕輪に仕舞っていて、戦闘時には弓に魔力を送ることで矢を生成することが出来、それを使って戦っている。

生成された矢は魔力でできているので時間が経てば消える。

カード

【設定】ペルソナのスキルを使用することができるカード。使用時は、白金の腕輪から引いて、召喚器で撃ち抜く事でスキルが発動する。本来、カードはペルソナに目覚めた者しか引く事ができず、スキルもペルソナに教えることでしか発動できないらしいが、召喚器を使用してでも発動できる湊の力はかなり特殊らしい。引く事のできるカードの種類は湊が強くなることで増え、中のカードは何枚引いてもなくなることはない。カードを引いた後、放置していると魔力でできているため消える。

ジェム

【設定】カードと同じく、ペルソナのスキルを使用することができるようになる小さな魔石。カードに比べると種類が少なく、消費魔力が多いがその分、召喚器で撃ち抜く必要がないため湊も頻繁に使っている。

ミックスレイド

【設定】スキルが使用できるようになる、ジェムよりも少し大きな魔石。ジェムよりもさらに種類が減り、消費魔力も増えたが、単一スキルしか使えないカードとジェムと違い、カデンツァのように『回復＋回避力上昇』など多数の効果がある特殊スキル”ミックスレイド”を使うことができる。

魔石

【設定】ジェムやミックスレイドを使うためのもので、宝石とも鉱石とも違う不思議な光り方をする石。形が決まっておらず、取り出すときにイメージすればブリリアントカット風にもできる。色はスキルによって決まっており、攻撃魔法の場合は魔法の強さで色が濃くなっていく。大きさはジェムは直径３ｃｍ、ミックスレイドは直径５ｃｍ程度となっているが、取り出すときにイメージすれば倍くらいに大きくする事は可能（小さくする事はできない）。かなりの硬さのため、踏んだり地面に叩きつけたり程度では傷もつかない。壊れた場合は魔石が消えるか、スキルが暴発する。ただし、魔力を通して発動した訳ではないので爆竹が１つ程度の爆発が起きるぐらいである。

魔力

【設定】湊がスキルを使うときや、矢を生成するときに使う力。体力とも精神力とも違う体内で練り上げるエネルギー的なものらしい。これを使用するには魔力回路という魔力の通り道が身体にないとできないが、普通の人間には存在しない。使いきっても少々だるくなる程度なので、そこまで危険はない。だが、なぜ湊は最初の大型シャドウ戦後に倒れたかというと、魔力消費ではなく魔力回路を開いたことに身体が耐えられなかったためである。一度開けば安定するのでその後は心配なく使える。現在登場した中でこれが使えるのは湊とベルベットルームの住人たちのみである。

精神力

【設定】公子たちがペルソナを召喚する際に使う力。召喚だけでも減るが、スキルを使う際にも減るので無駄に使う事はできない。魔力との違いはエネルギーではないためコントロールできず必要な分だけ持っていかれ、使い切れば気を失うという点だ。

ベルベットルーム

【設定】契約者の鍵を使用することで開くドアから入れる部屋。そこにはイゴール、エリザベス、テオドアがいてお客がくるの待っている。中と外では時間の流れが違ったり、寝ている契約者を夢を介して呼び出す事もできる。入るためのドアは契約者しか見る事も感じる事もできないようになっている。中に入ると中にはいくつかのドアがあり、それぞれが別の場所に繋がっている。

『一章・二章を書いてのあとがき』

ここからは私が一章と二章を書いたときの裏話や元ネタなどを書きたいと思います。実はＰ３Ｐを買ったのはペルソナ２のポータブルが発売する２日前で、それまではペルソナシリーズは名前しか知りませんでした。暇潰しに良い物はないかと思い買ってみたら、見事にはまってしまい一週目をクリアした後は二週目をしながら二次創作を読み漁る日々でした。そして、自分でも話を妄想するようになり、ついには執筆を始めてしまったわけです。「よくその文才で書くつもりになったな！」と自分でも思っているのですが、「が、学生のうちしか自由に書いたりできないんだ！」と言い訳をして現在も書いています。まぁそんな訳で、書く前から大筋のストーリーは妄想で考えているので、原作会話を打ち込む作業さえなければ半分の時間で済むと思っていたりします。そんなこと言っても打たないといけないから時間かかるんですけどね。では、自分のことばかり書いてもあれなので、キャラ設定を考えたときの話を始めます。

【有里　湊】

まず、湊ですが…どうでしょうか？　どこかのまえがきか、あとがきにも書きましたがハッキリ言ってオリキャラだと思います。性格は実は初期の時点では決まってませんでした。そのかわり、一人称は『僕』、戦うときはペルソナじゃなくて直接スキルを使っちゃおう、隻眼設定、とは考えてました。何故かと言うと「能力バトルって素敵やん？」というわけです。なので、最初は自分の中にいるペルソナのスキルを召喚せずに自由に魔力で発動しようと思ってました。しかし、みんなは武器と召喚器持ってるのに手ぶらってビジュアル的にどうだって思い、「そうだ、スキルカードあるじゃん！」と考えたんです。そこで、湊はペルソナは使えなくてスキルカードを使って能力を使うという設定に変わりました。さらに、「カードドローして魔力流して発動も地味だし召喚器使って撃つか。あ、アニメのデビチルで言ってた『コール』ってカッコイイ！」で、発動方法から掛け声までが決まったのです。隻眼設定は「両親が事故で死んだのに怪我しないのはおかしい」的な考えです。髪型も丁度良かったですしね。で、そこまで考えて見切り発車したわけです。まぁ、最初にも書きましたが妄想でストーリーはほぼ最後まで決まっていて、これが伏線で…とかも考えているのですが。それと、オリキャラ湊と謎の声の女の作者の勝手なイメージを書きます。自分のイメージを崩したくない人は飛ばして下さい。

【作者の勝手なキャライメージ】

・有里　湊　ＣＶ．保志総一郎さん（『ガンダムＳＥＥＤ』のキラ・ヤマト系の声をしているときの）

原作では石田彰さんですが、性格含め別人状態なので同姓同名で同じ見た目の別人と思ってください。キャラを考えるときに最初に思

い浮かんだのが保志さんでしたが、阿部敦さんも良いなと悩み、最初に思い浮かんだ方で考えるようにしました。そのため戦闘中は『スクライド』のカズマや、『ひぐらしのなく頃に』の前原圭一っぽい感じに喋らせています。

・謎の声の女　ＣＶ．田村ゆかりさん（『ひぐらしのなく頃に』の素の古手梨花系の声をしてるときの）

オリキャラだし自由にして良いよねってことで、この声のイメージです。別に湊とセットでカズマや圭一とのやり取りを想像したわけでは…少しは考えましたけど、先に声のイメージがあったので問題ありません。ってか、上で素の古手梨花系って書きましたが、わかりやすく言うと『うみねこのなく頃に』のフレデリカ・ベルンカステルっぽい感じですね。それと、見た目は梨花ちゃんではないので姿の説明したときに「俺のイメージと違うじゃねぇか！」とならないように注意してください。ここを読んでくれている人にはおまけとして先に少し教えておきますが、見た目の年齢は１２・３歳です。梨花ちゃんより年上なのでこれで、梨花ちゃんのイメージにはなりませんね。

という感じです。ＣＶ．までイジっちゃダメだろと思わなくもないのですが、そもそも主人公の声って「ペルソナ！」とか「オルフェウス！」しかないので、石田彰さんのイメージで考えられないんです。じゃあ、石田彰さんはファルロスと綾時に専念して、湊は別キャラで声も他の人のイメージでつくる方が筆も進むだろうと思ったわけです。さらに言うなら最後のバトルのあと石田さんの声で部活メンバーに声がかけられたのを見て「主人公が喋った！？」と勘違いしたこともあり、紛らわしいのは避けたいって気持ちがあったんです。キャラ製作の話はこれぐらいですね。

次に本編内での動かし方は『フリーダム　ａｎｄ　作者の代弁』をモットーにしてます。フリーダムってのは、その方が文章が硬くなり過ぎず読みやすいだろうってので設定してます。作者の代弁ってのは仲間になるシーンでの疑問点や列車でのシーンが分かりやすいですね。「適正高めれるなら、専用部隊作れよ」とか「ブレーキって、運転席行くドアに鍵かかってるだろ」っていうものです。他の作者様はそこらへんは、こまけぇこたぁ…ってやつで触れてないようなのでオリジナリティを入れる為に入れてみました。まぁ、その分うちの湊に負担かけるんですけどね。けど、最後までは死なないので問題ないです。湊はこれぐらいですね、次は公子について書きます。

【草摩　公子】

公子ですが、公子はわりと難産でした…名前がですけどね。公式が発売前に使っていたらしい【主人　公子】って名前から下の名前は公子にしようと最初に決まっていたんですが、名字に悩みまして。名家とか旧家っぽいイメージの名前を付けたくて「橘、鷹村、篁（たかむら）、妃」とかいろいろ考えて今の草摩って名前にしました。「響きと字が綺麗でしょ？」と、そんな風に自画自賛しながら決めた訳です。あとは常識を持ちながらも湊が相手だとどうしても甘くなってしまう性格は、ブラコンっぽい姉像を体現させたかったからですね。湊の事故後の生活などの設定背景は考えていましたので、その後の人間らしさの復活にはとにかく愛情が必要だと思いミナコン一家完成って感じです。

ヒロイン候補の１人ですが、妄想ストーリーでは大筋の戦闘や設定からくる伏線を考えていただけですので、恋愛描写を考えていない

んです。そもそも自分に恋愛描写が書けると思ってないのでこれからどうするかな…って感じですね。まぁ、最後までメインヒロインっぽい扱いは続けるので、湊が誰も選ばなくてもファンの方に「俺の公子があんなヒロインもどきに負ける訳がない」とは言われないんじゃないかな…と思っています。

次に動かし方ですが「1．湊、2．常識、3．仲間」が基本の行動時の優先事項ですね。2と3は順序はどっちでもいいです、結局は1に塗りつぶされますから。そんな感じで湊に対しては暴走気味ですが、基本は常識的で冷静な判断を下せる人物です。ある意味、湊を除けばメンバーで一番大人な思考の持ち主って感じですね。そのため、メンバーを諫めたり必要とあらば行動を中断させたりもする実質的なリーダーポジションと言えます。こんな感じですね、次はゆかりたちメンバーをまとめていきます。

【部活メンバー】

原作キャラだし、セリフは基本的に作中のものをそのまま使っているので、そんなに書く事はないです。ただ、湊が心は孤独って感じなので原作のように理不尽さをぶつけるのは控えさせました。逆に仲間を大切にしていくようにって心情の変化を書くようにしています。男性陣2人はそれがよく出ているんじゃないでしょうか。というか、熱血系だから分かりやすく出ていると言った方が正しいですね。美鶴は部長の立場があるため己を捨ててでも利を得る判断を優先します。ですが、本当は誰よりもみんなを心配している歳の離れたおねえちゃん的なキャラです。そして、ゆかりは実は仲間思いってわけじゃありません。公子と同じように湊を優先的に気にかけているって感じです。これは異性としてではなく、同じ境遇の人だからという理由と心の孤独を感じ取ったからです。それがあるため、

なるべく声をかけるようにしたり、寮では部屋に行き来して1人にしないようにしてます。まあ、仲間の無事のことも考えてますけど比率が6：4で湊って感じですかね。そんなゆかりもヒロイン候補ですが、やっぱりどうなるかは未定です。あ、言い忘れてましたが桐条先輩は候補から除外されています。理由があって、公子が今後は姉からヒロインへシフトしていくので、美鶴には湊と今後、先輩後輩より歳の離れた姉弟みたいな付き合いになってもらいたいので除外されています。美鶴好きの方がいたらすみません。メンバーに関してはいまのところこれぐらいでしょうか。次はベルベットルームの住人達です。

【ベルベットルームの住人たち】

彼らも基本は原作のイメージですね。というか、イゴールのことは何も考えていません。ほとんど、関わりないですしね。逆にエリザベスとテオドアは楽しく考えています。しかし、言っておきたいことがあって、実は自分は女主人公サイドをプレイしてないんです。投稿済みのとこまでしかしていないと言った方が正しいですが、そのためテオドアのキャラを知りません。なので、丁寧で何でもできるが少しお茶目というキャラにしています。声も『テニスの王子様』の跡部、『Ｆａｔｅ』のアーチャーなどをしている時の低くて落ち着いた声の諏訪部さんをイメージして書いています。だから、エリザベスをからかったり出来ている訳です。まぁ、テオドアに関してはそれぐらいですね。そして、エリザベスですが原作よりも女の子させています。常識を知らない分、奥手だったりプレゼント系のサプライズに弱かったりで、年頃の異性との交流に徐々に戸惑いをって感じです。あと一応、エリザベスもヒロイン候補です。でも、他のメンバーみたいに共に戦いに行ったりはしないので、選ばれるにしても「エリザベス大勝利！」ってエンドにはならないと思います。これでベルベットルームの住人も終わりですね。あとはモブとコミ

ユキャラですか。

【学校関係者・コミュキャラ】

って言っても、書くようなことがないんですけどね。まだみんな一見さん状態ですし、普段の様子はキャラ設定の方に書いているので、製作秘話とかも別にって感じです。あえて言うなら、理緒と鳥海先生かな。理緒は本当なら薙刀部にはいませんが、こっちの公子に引きずられる形で薙刀部所属になりました。それと、テオドアと同じくプレイしておらずキャラが把握できていないため、やや明るくなっています。イメージ的には『とある科学の超電磁砲』の佐天さんに近いものがあります。そして鳥海先生は…なんでしょう。Y子コミュで湊好きというのが発覚していたので、学校ではゆるボケ系のうちの湊と仲良しにしようと思い、お菓子をあげたり寝てても特別扱いといった感じにしています。そんな感じなので先生はヒロインから除外です。それと、理緒を含めた他のコミュヒロインは、湊争奪戦のライバルとして描写はされるかも知れませんが「大勝利！」は１００％ありませんのであしからず。まぁ、キスぐらいはさせてもいいですけどね。

という感じで、キャラ製作や動かし方をあとがきとして書きましたがどうでしょうか？　普通は連載終了後に書くのでしょうが、ストーリー終わってからじゃ読者様が読んで抱いていたキャラのイメージ壊すかもってことで早い段階で書かせて頂きました。少しでも本編や設定では分かりづらい部分の補足になればと思いますが、「余計にわからなくなったわ。」という方もおられるでしょう。でもまぁ、そこまで考えて読む作品ではないです…ぶっちゃけ。原作ではキャラクター同士の微妙な距離感などが丁寧に描かれていますが、

自分の話は『ダークヒーロー系によくある話』に近いので、「感情と行動が素で一致してないぜ湊！」で読んでいけば自然と「ああ、あれこういう意味だったんだ。」とか「へー、それをそういうのとして作者は考えたのか」と地味に納得していただけるのではと思っています。なので、音楽でも聴きながらとか、休み時間や授業中、家に帰って暇なときなどに気軽に読んでもらえればなと思います。

以上、設定とあとがき出張編でした。ここまで、お読み頂きありがとうございました。出来る限り早く更新したいと思うので、これからもよろしくお願いします。清良でした。

第二章　設定（後書き）

以上が二章まで設定になります。あとがき出張編はやりすぎかなとも思いましたが、まあ気にしないでおこうと思います。では、また三章でお会いしましょう。ありがとうございました。

第十七話（前書き）

みなさん、お久しぶりです。ってか、まとめて投稿するため、これは毎回言うことになる気がします…。まぁ、今回はグダってる話が多いです。読みづらかったらすみません。

第十七話

５／１４（木）
放課後――辰巳記念病院
列車を止めた後、僕は意識を失った。その後、影時間が明けてから呼ばれた救急車で病院に搬送されたらしく、今日になってベッドの上で目を覚ましたというわけだ。目を覚ますと黙った状態でパイプ椅子に座り俯く公子と、同じくパイプ椅子に座ってぼーっと暗い表情をしながら窓の外を眺めているゆかりがいた。

「ん……ふぅ、知らｎ「「目を覚ましたのっ!?　大丈夫っ!?　ここがどこだかわかるっ!?」」　…す、すごいシンクロだね。大丈夫、意識ははっきりしてるし、あの後どうなって今ここにいるかは想像ついてるよ。」

僕がそういうと、僕が目を覚ましたことに驚いて立ち上がってた２人が椅子に腰を落とす。そして、ゆかりが話しかけてきた。

「良かったぁ、目を覚まして…。湊君、あれから４日も眠り続けてたんだよ?　今日が５日目で１４日の木曜日。ずっと、目を覚まさなかったらどうしようかと思ったよ。」

「前回よりは早く目覚めたでしょ?　…まぁ、心配かけてゴメンね。」

「ホントよ…って、言いたいとこだけど助けられたしね。こっちこそ、ごめんなさい。また貴方に助けられちゃった。」

そう言いながら膝の上で手をぎゅっと握りしめるゆかり。…かなり

気にしてんだね。こっちにしてみれば全員無事だし、どうでもいいんだけど。そう考えていると公子も涙声になりながら口を開く。

「良かったよぅ…グスッ…ホントに、私どうしようって…グスッ…」

「心配かけたね。でもまぁ、みんな無事だったし良かったよ。」

そう言うと、公子が目に涙を溜めながら立ち上がり怒ってきた。

「どこが無事なのよっ!! 身体中にたくさん怪我してるのにあんな無茶して、私たちが駆け寄ったときには湊君は血だらけだったんだよ? 確かに湊君のおかげで誰も死なずに済んだけど、それで湊君が死ぬような目にあってちゃ意味ないじゃないっ!!」

言い終わって再び俯きながら、ポタポタと床に涙を落とす公子。

…やっぱり、公子はこんな風に僕のために泣いてくれたりするんだね。いや、最近になって出会う人はみんな似たようなもんかな。誰かのために泣いたり、怒ったりってさ。そんなことを思いながら、公子に返事をする。

「ゴメンね、それにありがとう。」

僕がそういうと、座ってたゆかりが急に立ち上がり声をかけてくる。

「あ、あの…私、先生に目を覚ましたこと伝えてくるね。あと、先輩達と順平にも。それじゃあ、またあとでねっ。」

ゆかりはそう言いながら少し慌てて病室を出ていった。気を利かせてくれたのかな? ありがとう、ゆかり。

「…おいで、公子。」

「…グスッ……うん。」

呼ぶと公子は靴を脱いでベッドに入り抱きついてきた。そのまま静かに泣いていたので、僕は泣きやむまで頭を撫で続けた。

――病室

泣きやんだ後少しすると落ち着いたのか、顔だけ僕から離して人の腕を枕にしながら話しかけてきた。

「無事だから良いけど、本当に心配したんだよ?」

「わかってるよ。だから、謝ったでしょ?」

「前回も今回も、人の命がかかってたからしょうがないとは思うけど。毎回、倒れられる方の身にもなってよ。」

言いながら、頬を膨らまして怒ってくる公子。まぁ、頭ではわかってるけど毎回そのときは必死だからなぁ。気をつけますとしか言えないや。なんて考えている間も公子の言葉は続く。

「私はね、仲間のみんなに無事でいて欲しいけど、誰よりも無事でいて欲しいのは湊君なの。湊君が死んじゃったら、私も悲しくて死んじゃうってくらいにね。」

「…それは流石に困るかな。みんなが死なないように頑張ったりしてるんだから。」

そういって苦笑しながら公子の方をみると、少し哀しそうにしながら話してくる。

「それは分かるけど、私にとっては湊君もその“みんな”の中に入ってるの。だから、本当に無茶しないで?」

「うん、気を付けるよ。」

「もう、本当にわかってんのかなぁ。」

僕が笑いながら言うと、そう言って再びむくれる公子。心配してくれるのは嬉しい…のかな?まぁ、ありがたいとは思うよ。でも、助けるときにそんな自分の事なんて考えてられないからさ。気を付けるって言ったので我慢してくれないかな?そう思いながら公子の身体を抱き寄せると、公子が「はぅ…」と言って顔を赤くしているが構わず話しかける。

「…公子にも譲れないものや、譲りたくないものがあると思うんだ。それが僕にとっては公子やゆかりっていう友達の命を守ることなんだよ。」

「…じゃあ、湊君の命はどうなるの?」

「僕の命?…考えたことなかったな。でも、やっぱりそんな物よりもキミ達を優先すると思う。だから、無茶しないとは約束できない。ゴメンね。」

そういうと「ずるい…」と言いながら公子も僕を抱きしめ返してきた。少しの間そうしていると、病室に誰かが入ってきた。

《ガラガラー》
「湊っ、目覚ましたって本…当……し、失礼しましたーっ！！」
順平が走って入ってきたかと思うと、今度は走って出ていってしまった。すると今度は、廊下の方から出ていった順平と真田先輩の声が聞こえてきた。
『だから、いまはダメですって！　少し時間おいてからにしましょうよー！』
『なにわけのわからんことを言ってるんだ…有里、入るぞ。』
言いながら、真田先輩がドアをあけ入ってきた。
《ガラガラー》
「久しぶりだな。どうだ、ちょう…し…は……すまない。また、後で来る。」
先輩も順平と同じようにすぐに出ていってしまった。…ああ、公子と抱き合ってるの見て誤解したのか。ムッツリな先輩は分かるとして、歩くセクハラ（ゆかり談）の順平も案外ウブなんだな。まぁ、みんな来るみたいだし、公子も泣いてたから目をあらって冷やさないといけないし起きるか。
「公子、そろそろみんな来るみたいだから、起きて目を洗ってきな。」
「え～、このままが良い。」
「そんなこと言わないで行ってきなって。洗わないと腫れちゃうし、

それに部屋の前で聞き耳立ててる2人が入ってこれないでしょ？」

僕がそういうと廊下から《ガタッ》という音が聞こえてきた。…馬鹿だろ、あの2人。そう考えている間に、渋々離れてベッドから出る公子。

「じゃあ、行ってくるね。飲み物とか欲しかったら買ってくるけど、欲しいのある？」

「んー、じゃあ缶のコーラがあればお願い。なかったらペットボトルでもいいけど、赤い普通のやつね。他社のとかダイエットはあんまり好きじゃないから。」

「ん、わかった。じゃあ、待っててね。」

そう言って公子が出ていくと、入れ換わりで少し気まずそうに順平と真田先輩が入ってきたので声をかける。

「やぁ、久しぶり…になるのかな？　ずっと、寝てたからイマイチ久しぶりって感じしないんだけどね。」

苦笑しながら言うと、2人とも呆れたような表情をしながら口を開く。

「ったく、オマエは人心配させといて、なに起きて早々病室でイチャついてんだよ。」

「まったくだ。本当に心配して損した気分になったのなんて初めてだ。」

勝手に勘違いしといてよく言うよ。そう思っていると真田先輩が改めて口を開く。

「まぁ、無事でなによりだ。しかし、美鶴とこいつらに聞いたが、無茶し過ぎだお前は。普通、走行中の列車から落下しただけでも大怪我でリタイアして病院に搬送だぞ。」

「オレは助けてもらったから強く言えねぇけど、確かに無茶し過ぎだな。でも、おかげでこうして生きてる。ありがとな、湊。」

そう言って笑顔を向けてくる順平。ま、死なせたくなくて勝手にやったことだからお礼言われても困るんだけども…。そうして話していると、公子がゆかりたちと一緒に入ってきた。

「どうだ、有里。体調に問題はないか？」

「あ、桐条先輩。…そうですね、別に問題はないと思います。怪我ももうほとんど治ってますしね。」

そう言って勝手に腕の包帯をほどいていく。すると、それを見たゆかりが制止してくる。

「あっ。こら、勝手にとっちゃ駄目でしょ！　まったく、湊君てたまに子供みたいなことするよね。随分とお姉さんが甘いようだけど、それが原因だったりするの？」

言いながら僕の腕に包帯を巻き直していくゆかり。だが、言われた姉は黙っていられない。

「ひどい、ゆかり。私は別に甘やかしてないもん。それに、日常生

活に必要な常識とか一般教養は基本的に教えたよ？」

「じゃあ、どうして勝手に包帯とったりするのよ。それに部屋に遊びにきたら、すぐ人のベッドで眠いって寝るのよ？　教えた知識に間違いか偏りでもあるんじゃないの？」

「えー、それって私のせい？　湊君の性格の問題じゃないの？」

本人を目の前にしてそんな事を言いあう公子とゆかり。だが、それを聞いてた順平が話しに加わってくる。

「え、うちの寮って異性の部屋はもちろん。男子にいたっては女子のフロアにも立ち入り禁止じゃないんスかっ！？」

順平がそう言って桐条先輩に尋ねる。

「規則ではそうだ。」

「んじゃ、なんで湊は行き来してんですかっ！」

なにやら必死な表情でなおも先輩に聞く順平。別に先輩に強く言う必要ないだろうに。

「なんでって…なぜだろうな？　そう言えば考えた事がなかった。」

そう言って腕組をしながら不思議そうに首をひねる桐条先輩。ってか、別にそこまで真面目に考えなくても…。そう思っていると、順平がさらに続ける。

「ならこれからは、規制緩和するか湊に罰則与えるかしましょうよ。

真田サンだってそう思ってますよ。」

「勝手に人を巻き込むなっ、俺は別になにも思っていない。」

順平が勝手に同志にしてくるので、それを否定し怒る真田先輩。まぁ、似たとこあるからなぁ…。考えていると、桐条先輩が口を開く。

「…まあ、良いだろう。なんせ相手は有里だからな、深く考える必要もないだろう。だが、風紀の問題もあるので規則は変えない。お前たち2人や今後入ってくる男子生徒がいても、そいつらは女子の部屋やフロアへ行く事は禁止だ。」

「えぇっ!?　差別じゃないっスか！　真田サンもなにか言って下さいよー。」

「だから俺に振るなと…ハァ、まあいい。美鶴その判断にはなにか理由があるのか?」

桐条先輩の言う事に怒る順平。そしてまた順平に無茶振りされた真田先輩が諦めた表情で桐条先輩に尋ねる。

「なに、特別な理由はない。あえて言うなら、お前たちと違い有里には邪な考えがないからだ。」

それを聞いて強く抗議する2人。

「な、なんだその理由はっ！　順平ならいざ知らず、俺には邪な考えなどない！」

「ヒッデ、なに自分だけ紳士ぶってんですか！　でも、湊だって邪

な考えありますよ。むしろ、ありまくりですって。さっきだって、部屋に入ったら公子ッチとベッドで抱き合ってたんですよっ！」

なにやら凄い勢いで、とてつもなく誤解を与えそうな言い方で順平がそう言うと、桐条先輩の表情がとても真剣になり、僕に事の真偽を尋ねてくる。

「……有里、伊織の言ったことは本当か？」

真剣を通り越して少し恐い表情で先輩が僕を見てくるけど、気にせず質問に答える。

「誤解をまねく言い方でしたが本当ですよ。」

「…ワケを聞かせて貰えるか？」

表情をかえずに僕の目をまっすぐ見て、説明を求める桐条先輩。別に隠す事でもないので僕も簡単に説明する。

「えっと、まず僕が起きてからの話しになるんですが、目を覚ましたことに安心して公子が泣いてしまったんです。そのとき、ゆかりもいたんですが気を利かせて2人にしてくれたので、『もう大丈夫だよ、心配させてごめんね』ってことで抱きしめて頭を撫でてあげてたんです。」

真剣な表情のまま話を聞いてくれているので、僕も説明を続ける。

「で、それから少ししして泣きやんで、そのまま話をしていたとこで順平と真田先輩が順番にやってきたんです。確かに誤解を与える光景だったかもしれないですけど、普通に考えれば見た以上のことは

ないって分かるはずなのに、2人はどうやら年頃の男子としては健全ですが、考え方としては不健全な想像をしてしまったようです。」

僕がそう言い終わると、黙って聞いていた桐条先輩が「…ふむ」と言いながら組んでいた腕の片方を顎に持っていき何かを考え始めた。その光景をみんな黙ってみていると、考え事が終わったのか組んでいた腕をほどき桐条先輩が話しかけてきた。

「…話はわかった。草摩、素晴らしい家族をもったな。確かによく無茶をするやつだが、これからも家族の絆を大切にすると良い。」

「ハイ！」

先輩に僕を褒められたのが嬉しいのか、元気よく返事をする公子。そして、桐条先輩は振り返り今度は順平と真田先輩に話しかける。

「やはり邪なのはお前たちのようだ。先に帰っていろ、下衆な考えの者がいては有里も女子たちも安心できまい。お前たちの処遇などの話は寮に戻ってからにする。いけ。」

そう言って冷たい視線を2人に向けて退室をするよう促す。だが、言われた方は黙っていられない。

「「ちょっと「いけ。」…わかった（わかりました）。」」

《ガラガラー》

反論しようとしたが、桐条先輩にそれすら許さず退室するよう言われ、2人はトボトボと部屋を出ていった。だが、廊下でなにか言っているようだ。

『…真田サン、今日は2人で飯食って帰りましょう。』

『ああ。だが、なぜこんなにも…っく。』

『語りましょう、語り合いましょう2人で。…いや、むしろゆかりッチや公子ッチファンの人らも呼んで【有里湊被害者の会】でも結成しましょう。』

『それも良いかもしれんな…ハァ。』

……なんの被害者か言ってみろ。と、廊下から聞こえる順平と真田先輩の声を聞きながら思ったが、とりあえず桐条先輩に話しかける。

「ってか、先輩でもあんな風に冗談言うんですね。」

「フフッ、バレていたか。2人には悪い事をしたと思うが、目を覚ましたばかりで大勢の相手をするのは疲れるだろうと思ってな。」

そう言って、楽しそうに笑う先輩。どうやらこの人もたまにはお茶目なことをするみたいだ。でも、あの2人は本気で言われたと思ってるんだろうな…と、思っていると先輩が僕が寝ていた間の報告をしてくる。

「さて、冗談はこれぐらいにしよう。…それで、有里が「先輩、湊で良いですよ。いつまでも有里じゃ、他人っぽいし湊の方が言いやすいでしょう?」しかし…フフッ、わかった。では、これからは私のことも下の名で呼ぶと良い。」

僕が先輩に名前で呼ぶように言うと、先輩も笑いながら自分を名前で呼べと言ってきた。なら、さっそく呼んでみよう。

「…わかったよ、美鶴。」

「「ブフゥっ！！」」

僕がそう言った瞬間に公子とゆかりが吹き出した…女の子なのに、はしたないなぁ。そんな風に思っていると先輩も顔を少し赤くして話してくる。

「で、できれば呼び捨てではなく、後ろに『さん』や『先輩』を付けてくれないか？　いや、呼び捨てが悪いわけではないんだが。その…他の者の目がある前で年上を呼び捨てというのはな？」

少し慌てた様子で僕にそう言ってくる先輩。まあ、面白いかなって冗談で言っただけなんだけどさ。予想よりも大人しい反応だったな…公子とゆかりを除いて。

「み、湊君っ！　先輩を呼び捨てにしちゃダメでしょう！　しかも、名前でなんて言語道断っ！」

「ホントよ、寝過ぎて頭の中身溶けちゃったんじゃないの？」

復活した公子とゆかりが僕にそう言ってくるが、ゆかりって地味にヒドイこと言ってくるよね。僕のガラスのハートが傷ついてしまうよ（棒読み）。なんて、考えながら返事をする。

「冗談だよ。それに溶けてもみんなよりは、幾分まともだから安心して良いよ。」

とても良い笑顔でそう言うと、ゆかりがなんか怒っているが無視し

て先輩に話の続きを聞く。

「病院なのに少しウルサイよ、ピンクフリル。…それで美鶴さん、話の続きは？」

「あ、あぁ。あり…湊が入院していた間のことだが、あの日の翌日にモノレールの大幅なオーバーランということでそれなりに大きなニュースになったよ。だが、君が割ったガラスから何かが運転席に投げ入れられたのでは？と、なって運転手もあまり責任は追及されないらしい。まあ、減給と言ったとこだろうな。」

そんな風に淡々と影時間明けの影響の出方などを説明する先輩。ついでにタルタロスも、１６階の階段を囲っていた柵がなくなって先に進めるようになったらしい。話を整理しながら聞いていると、先輩がさらに続ける。

「それと、無気力症の患者だが何人も回復に向かっているらしい。やはり、大型シャドウとなにか関係があるらしいな。…まぁ、報告は以上だ。」

「わかりました、ありがとうございます。それで、僕はどれぐらい入院していれば良いんですか？」

「そうだな…医者の許可が下りればだが、今日と明日は検査などでこのままだな。早ければ、土曜には学校に行けるだろう。」

なんだ、最短で2日後か…。

「入院していて大変だと思うが、来週は中間テストだ。休んでいた間の授業の事は、草摩や岳羽に聞いておくといいだろう。それでは、

悪いが私は先に失礼するぞ。またな、湊。」

「はい、さよなら美鶴さん。」

なにか用事があるらしく先に帰る先輩にあいさつをすると、先輩は部屋を出ていった。それにしても来週はテストか。早く帰れるな、と考えていると。僕にピンクフリルと言われたゆかりが再起動する。

「また人の下着のこと言って！　なに？　覗いたりしてるの？　それとも、人の下着の色や柄を全部把握してるのかどっちよ？　まぁ、どっちにしろ許さないけどねっ！」

なんて言って赤い顔のままむくれるゆかり。そろそろ下着の色でからかうのは止めようかな。二代目歩くセクハラとか言われたくないし。そう思いながら、返事を返す。

「テキトーに言ったんだけど、傷つけたならゴメンね。」

「…もう、言わないでよ？　当たり外れ関係なく、男の子に言われると恥ずかしいんだから。」

素直に謝ると許してくれたのか、まだ少し赤い顔のまま言ってくるゆかり。

「うん、わかった。」

許してくれたゆかりに笑顔で返すと、横で聞いていた公子がやや不機嫌に尋ねてくる。

「…で、湊君はなんでゆかりの下着をいつも把握してるの？　部屋

に遊びにいったときに、いかがわしいことをしているんだったらお姉さんは許しませんよ？」

「いつもと言うより一度も把握してないけど…。それにいかがわしい事ってなにさ？」

「自分の胸に訊いてみれば？　何度も言いますけど、２人の交際は認めないから。」

今日はやけにつっかかるなぁ、と思っているとゆかりが公子に反論する。

「何もしてないわよ！　普段は談笑するぐらいで、それ以外じゃ私がお茶とか用意してる間に、湊君は人の毛布にくるまって熟睡してることもあるんだから。起こすのもあれだし、その間は放置して本読んだり音楽聴いたりしてるけどね。」

「えっ！？　湊君、ゆかりの毛布まで使ってるの？」

ゆかりの話を聞いて、なにやら驚いた表情で公子が訊いてくるので僕もそれに答える。

「毎回じゃないけど、だいたいはそうだよ。ねぇ？」

「頻度はかなり高いわね。まぁ、ちゃんと洗ってるから使われてもそんなに困らないけど、他の女の子とかにしちゃダメよ？　相手によるけど、気にする子がほとんどなんだから。」

「そうなの？　知らなかった…。」

ゆかりに言われたことを本当に知らなくて、覚えておこうと考えていると、公子がなにやら鋭い視線で僕達を見てきて口を開く。

「なんで私の部屋で寝るときは毛布使わないのに、ゆかりのは使ってんのよ！　そんなに他所の女の匂いの方が良いのかっ！」

などと訳のわからない怒り方をしてくる公子。ってか、他所の女ってなに?どこにも女なんか作ってないんだけど。そう思いながらも言葉を返す。

「ゆかりが良い匂いなのは認めるけど、別に匂いフェチじゃないよ。」

言ってる間にそれを聞いてたゆかりが、また顔を赤くしているが構わず続ける。

「ってか、ゆかりのは使って、公子のは使わない理由はちゃんとあるよ。」

「…なによ?」

「だって公子、僕が寝るとき膝枕か撫でてきたりするじゃん。それで毛布使ったら暑いよ…。」

僕がそう言うと途端にキョトンとした表情になる公子。

「え?　理由ってそれだけ?」

「そうだよ。公子が放置してくれたら毛布使うし、ゆかりが膝枕とか撫でてきたりしたら毛布使わないよ。」

言った通り僕はわりと涼しい状態で寝るようにしている。そのため、なにもないなら薄いタオルケットを1枚かけて寝るし、暖房器具代わりがあるならそれでいいのだ。ってか、そんなに気になるなら…

「そんなに気になるなら今度、3人でパジャマパーティーしよっか。誰かの部屋に敷布団もってけば寝れるでしょ？」

それを聞いてなにやら考える2人。

「面白そうだけど…女子2人と男子が同じ部屋はいいのかなぁ？」

「私はまぁ、家族旅行とかで両親もいたけど同じ部屋で寝たことあるから別に良いよ。」

「そう？　んーじゃあ、日曜日にテスト勉強しながらそのままって感じで良い？」

公子はOKだということで、ゆかりもそれなら別に問題ないらしい。退院後、テスト前日に勉強会もかねたパジャマパーティーが決定した。さて、それじゃ誰の部屋にするかな。

「個人的には、君たちが道具を取りに行く負担少なくて済む女子部屋の方が良いと思うんだけど？　それに男子のフロアで夜に女子を連れ込んでるとまた、邪ま組が五月蝿いから。」

「そうだねー。私はどっちでも良いけどゆかりは希望ある？」

「別にないし、ジャンケンかコインでテキトーに決めましょう。」

そういって、ジャンケンをした結果、公子の部屋でやることになった。予定も決まったし、そろそろ暗くなるので2人は帰るようだ。

「じゃあ、湊君。明日も学校終わったらくるからね。それと、頼まれてたコーラも渡しとくね。」

「うん、ありがとう。」

お礼を言いながら公子から頼んでいたジュースを受け取ると、ゆかりも立ち上がり口を開く。

「勉強がメインだし、あんまり必要なものもないだろうけど。あなたが退院するまでにお菓子とかジュースでも買っておくかなぁ。」

「あ、じゃあ…って、僕の財布とケータイってどこ?」

「えっと…」

僕がそういうと公子がなにか言いづらそうにしている。もしかして、あの日に全部落としたとか?いや、走ったりしてるときにポケットに入ってる感覚あったぞ。そう考えていると、覚悟を決めた表情で公子が話をする。

「あのね。財布は無事なんだけど、ケータイの方は衝撃と大量の血がついたからかダメになっちゃったの。幸いデータは吸い出せたからメモリーに入れておいたよ。ハイ、財布とメモリー。」

そういって、公子は僕の財布とケースに入れたメモリーを渡してくる。…とくに思い入れはないけど、ケータイなくなるとは思ってなかったな。まぁ、退院したら買うか。

「わかった、ありがとう。それとゆかり、夜食とかジュースとか買うならこれ使って。」

言いながら受け取ったばかりの財布から、諭吉を1人抜いてゆかりに手渡す。

「えっ!?　こんなにいらないって。それに自分たちも食べる分まで出してもらっちゃ悪いし。」

「良いんだよ。ゆかりたちも一緒になって稼いでくれたお金だからね。それに荷物運びもできないしさ。それぐらいさせてよ。」

ぼくがそう言うと渋々納得したようで「ありがとう」と言って受け取ってくれた。

「じゃあ、私たちも帰るね。勉強とかは日曜に私の部屋でみるから、ここには持ってこないね。」

「ちゃんと、安静にしてるのよ?　じゃないと、パジャマパーティーは無しだから。」

公子とゆかりがそう言って部屋を出ていくので、僕も「わかった、またね。」と返しておいた。

「……ふぅ」

『久しぶりね。怪我の具合はどう?』

1人になったとこで、彼女が僕に話しかけてきた。

「久しぶり。怪我はもう大丈夫だよ、ほとんど消えてる。だから、包帯も外そうとしたんだけど、ゆかりに止められて巻き直されちゃった。」

苦笑しながらそう答える。だが、それを聞いて彼女は呆れた様子で返してくる。

『やっぱり回復早いわね。寝てる間に診察にきた医者もあまりの回復の早さに驚いてたわ。』

「そうなの？　って言っても、落下しただけだから打撲や擦り傷だったはずだし、刺し傷・切り傷みたいな縫う必要のあるものよりは早いんじゃない？」

『お馬鹿。骨折してもおかしくない衝撃で出来た打撲が、痕まで綺麗に治るなんて数日でできるわけないでしょう。』

まったくこの子は…といった感じでさらに呆れたとばかりに言われる。しょうがないじゃん、昔から傷の治りはなぜか早いんだから。そう思いながら彼女に問いかける。

「で、心配して話しかけただけじゃないでしょ？」

『いえ、今回はメインがそれよ。まぁ、確かにそれだけではないのだけれど。』

そう言ってから、間をおいて話を続ける彼女。

『…あの少年が言ったことが本当だったわね。ということは、満月

の度に敵が来るわけだけど、部活メンバーの強化はどうするつもり？　敵も毎回1体とは限らないし、他の者が助けられるとは限らないわ。』

「…そうだね。でも、なにも特別なことはしないよ。これまで通り本人たちの自主性にまかせる。僕は頼まれたときに手伝う程度かな。」

何でもないように、そう言うと相手はさらに質問を続ける。

『また、今回のような無茶をするつもり？』

「なるべくそれは勘弁して欲しいけど、そんときになったらそうだろうね。」

そう。公子にも言ったが止めろと言われても結局、感情で動いてるのであって理性で動いてる訳じゃない。そんなものをコントロールしろと言われても無理なのだ。そんな風に思っていると彼女は再び口を開く。

『どんな風に行動するかは貴方の自由だけど。そんなことを繰り返していると本当に死ぬわよ？』

「構わないよ、今の自分はおまけの人生を生きてるに過ぎない。一度死んで、再び貰ったこの命。誰かを救うために使えるならそれでいい。…目の前で誰かを失う方が僕には死ぬより辛いんだ。」

『……でも、私も公子や他のメンバーだって貴方に死んでほしくないわ。それは分かってるんでしょう？』

少し哀しそうな声色で彼女は僕に問うてくる。…わかってる。みんなが僕を仲間だと思ってくれていることも、無茶をする度に自分たちが無力であることに悔しさを感じていることも。それでも…

「それでも僕は戦うよ。」

揺ぎ無い意志を瞳に込めて言葉を続ける。

「再び命を貰った時に決めたんだ。今度は誰のためじゃない、自分のために生きようって。だから、たとえ死ぬ事になっても、やりたいことをするよ。それこそ死ぬまでね。」

最後に悪戯っぽい表情をしながら僕は笑う。すると、彼女は大きな溜め息をして話し始めた。

『はぁぁーー…お馬鹿もここまでくれば立派ね。なら、最後までやり通しなさい。それまでは死ぬなんて許さないわ。』

僕と同じく彼女も諦めて覚悟を決めたように言う…ありがとう。僕の我儘を笑って聞いてくれて。だから僕も前に進めるんだ。

「ありがとう、大好きだよ。」

『ええ。私も愛してるわ、湊。さぁ、今日は少し疲れたでしょう？明日は検査で忙しいみたいだから、もう寝なさい。』

「うん、おやすみ。――ス。」

そう言って眠りにつくと、意識がなくなる前に彼女の『おやすみなさい、湊。』という声が聞えた。

第十七話（後書き）

１話目からいきなり１万字を超えてます。書いた自分が一番驚いてます。

第十八話（前書き）

日付とか内容とかいじってます。まぁ、湊の脅し方はリンゴでやりたいことランキング1位ですよね。

第十八話

５／１６（土）
朝――校門
あれから僕は、検査や怪我の調子を診察するなどをし、昨日の夜にやっと寮に帰ることができた。そして、今日が約一週間ぶりの登校というわけで退院直後で心配だからという公子と一緒に学校へきたわけだが、後ろから真田先輩が走ってきた。

「ハア、ハア…ぜぇ、ぜぇ…お、おはよう。」

「朝から『はあ、はあ』言って頭の具合でも悪いんですか？」

公子がそう言うと、先輩は息を切らせながら途切れ途切れに話し始めた。

「ハア…、馬鹿、言え…その、逆だ…走ってきた。もうすぐ、全快って、医者に、言われたんだ。気が、はやってな。来週の中間試験が終われば、いよいよ復帰だ。部活にも、シャドウとの戦いにも…今のうちに、もっと力を付けておかなければ殲滅できないからな。」

…公子は頭の具合っていったのに見事なスルーだな。そう思いながら一緒に靴箱までいき、別れて教室へ向かった。

放課後――教室
とくに何事もなく今日の授業を終えた。そういえば、入院とかして会えてなかったし、久しぶりにベルベットルーム行ってみるかな。そう思い、ポロニアンモールからベルベットルームに向かうことにした。

――ベルベットルーム

「おじゃましまーす。エリザベスとテオドアはいる？」

そう言いながら僕はドアを通ってベルベットルームへときた。すると、僕の声を聞いてエリザベスが嬉しそうな顔をしながらこちらへ来た。

「お久しぶりでございます。たいへんお待ちしておりました。」

「うん、久しぶり。でも、一週間ぶりぐらいだし、そこまで久しぶりでもないと思うけど。」

僕がそう言うと、「そ、それは…」とエリザベスは赤くなった。そして、それを見ていたのか「クックッ」と笑いながらテオドアがこちらによってきた。

「お久しぶりでございます。それで…姉のことですが、実はこのまえ姉がお客様に電話をかけたのです。ですが、何故か繋がらなく最近、沈んでいた…というわけです。」

「テ、テオッ！？」

自分の様子がいつもと違う理由をバラされ、驚きながら怒るエリザベス。…でも、タイミング悪かったなぁ。気軽に電話しろっていったのにかけたら電話が壊れて繋がらないとか。

そんな事を考えながら今日来た理由を説明し話を続ける。

「ゴメンね、エリザベス。実はこの前の戦いで電話が壊れちゃった

んだよ。明日、新しいの買ってくるから待っててね。…で、今日来た理由なんだけど。前に言ってた『ポロニアンモールの案内』って依頼をしようと思ったんだ。2人とも行ける？」

僕が2人にそう言うと嬉しそうに返事をしてくる。

「まぁ。心待ちにしておりました。それではお願いいたします。」

「ありがとうございます。それでは、ご案内をよろしくお願いします。」

それじゃあ、準備があるだろうから終わったらポロニアンモールの噴水にきて、と伝えて僕は先に集合場所へ向かった。

――ポロニアンモール

飲み物を飲みながら2人を待っていると、裏路地に繋がる通路の方からいつもの服装の2人がやってきた。…でも、あの服装は目立つなぁ。色が原色過ぎるんだよ。少し考えないとな。

と、考えながら2人に向かって手を振る。すると、それに気付いたエリザベスがやや駆け足でやってきて、テオドアもその後ろを歩いてきた。

「お待たせしました。あ…これは…早くも、見事な逸品との出会いが…！」

「ここがポロニアンモール……ま、想像通りというところですね。」

と言いつつ、テオはやけに目を輝かせている…ってか、エリザベスは噴水をやたら見まわしてるけど、そんなすごいのかコレ？そう考

えながら、テオドアに話を振る。

「そう言いながら、目が輝いてるけど…楽しみだった？」

「そ、それほど単純ではありませんよ。」

テオドアは口ごもっている。まぁ、楽しみにしていてくれたのなら期待に応えないとね。そう思っていると、テオドアが尋ねてくる。

「…？　これは、何ですか？」

言われてそっちを向くと、テオドアは噴水を指差している…噴水集合って言ったのに噴水を知らなかったのか？考えている間にテオドアの考察は続く。

「こんなところに水辺…？　……こちらの世界の住人は、随分、喉が渇きやすいのですね。」

「本気で言ってる？」

「……わ、分かってますよ。その…手を洗うのでしょう！」

「いや、違うよ。」

僕がそう言うと、さらにテオドアの動揺は大きくなる。ってか、エリザベスは知ってるのにテオドアは知らないのか。結構、姉弟で違いがあるんだな。そこでテオドアも動揺から少し立ち直り口を開く。

「……ちょっとした、冗談じゃないですか。…その…じ、実際には、何なのですか？」

テオドアがそう尋ねてくるので、さっきまで噴水の周りを見てまわっていたエリザベスの方を指差す。

「これが“噴水”…命の源たる水をもてあそぶ、罪深きアート…その魔性ゆえに、硬貨を投げ入れた者の願いを叶えてしまうものまであるとか…」

それを聞いたテオドアは、

「…景観のため？　……そうですか。」

テオドアは何故かガッカリしてる…なんだったら良かったんだ？ってか、エリザベスは何しようとしてるんだ。

「タイム、エリザベス。少し落ちつけ、なにしようとしてる？」

「いえ私、この時のためにと意気込んで、硬貨を少々持って参りました。５００円硬貨に数えまして２０００枚…締めて１００万円からスタートでございます。」

そういうと、エリザベスは、おもむろに大きく膨らんだサイフを取り出した。ってか、そんなのどこにしまってた!?僕の腕輪と同じ原理か?そう思いながら急いで止める。

「…!?　ストップ。それやる前に少し着替えようか。２人の服装はちょっと目立つからね。楽しむなら現地の服装でまわった方がより楽しめるでしょ？」

僕がそう言うと、エリザベスはコインを入れようとするのをやめた。

そして、僕に聞き返してくる。

「着替え…ですか？」

「うん。それは仕事のときの服装でしょ？　なら、遊ぶならそれにふさわしい服を着なきゃってね。エリザベスはそのカエルのガマ口に１００万あるみたいだし、テオドアもお金は持ってきてるんでしょ？」

「ええ。まあ、姉のように１００万は持ってきていませんが。一万円札を５０枚ほど…」

うん、まあ僕もそれよりちょっと少ないぐらい持ってるし、問題ないな。

「じゃあ、服を買いに行く前にエリザベスは両替しようか。コインでジャラジャラ買い物するのは、マナーとしてあまり宜しくないんだよ。」

「そうなのですか？　では、よろしくお願いします。」

そういって、３人で両替するため交番へ向かった。

――交番前

交番前に着くとテオドアとエリザベスが尋ねてきた。

「おや…？　ここは、何の施設でしょうか？」

「中に険しいお顔立ちの御仁がいらっしゃいますが…こちらに貼ってある顔写真は…指名手配…報奨金…これは…私共の討伐依頼と同

様のものと考えて宜しいのでしょうか？」

「それは指名手配って言って、罪を犯した者がまだ捕まってないので、誰か情報があれば連絡くださいってものだよ。だから、討伐はしないんだ。」

そう説明すると、２人はやけに納得している。

「なるほど…生け捕りでございますね。得心致しました。」

「…高度なハンターがいるものだ。こちらにも腕のいいハンターがいるのなら、私も依頼を……ああ、いえ、私には貴方という最高のお客様がいらっしゃいましたね。」

そういう気遣いは別にいらないけど、話が進まないから中に入ろう。

「とりあえず、エリザベスは両替するから中に入るよ。テオはどうする？」

「私も大変興味がありますが、この“案内掲示板”という物で地理を確認しておきたいので、またの機会に。」

「ん、わかった。じゃあ、ちょっと待っててね。」

テオドアにそう伝え、僕たちは中に入った。

――交番

僕らが中に入ると、黒沢巡査が気付いて話しかけてきた。

「ん？　君か。今日はどうした？」

「こんにちは。実は知り合いがこっちに初めてきた人で、硬貨しか持ってないんです。それで、買い物するにも不便だから両替してもらえたらなって。」

説明すると少し悩むようなしぐさをした後、黒沢巡査は口を開く。

「…わかった。だが今度から、そういうのは銀行に頼みなさい。ここは一応交番なんだ。本来、商いする場所じゃないからね。」

「わかりました、ありがとうございます。ほら、エリザベスお金出して。とりあえず、半分をお札に替えるよ。」

「わかりました、お願いします。」

そう言ってエリザベスは、カエルの財布を逆さまにして机の上にジャラジャラと硬貨をすべて出した…いや、いきなり出さないでよ。しょうがないと思いながら、黒沢巡査と一緒に１０００枚数えて５０万円だけ、お札に替えた。

――交番前

両替を終え、エリザベスと一緒に交番を出ると、案内掲示板を真剣に見ているテオドアに声をかける。

「おまたせ。」

「いえ、おかげ様で地理の確認ができました。」

「それなら良かった。それじゃあ、服屋に行こうか。」

言いながら僕たちは2人を私服に着替えさせるため、服屋のエリアへ向かった。

――紳士服ショップ

女性の方が時間がかかると思ったので、まずテオドアの方の服を店員さんに選んでもらっている間に、僕とエリザベスで女性物の服屋へ行くことにし、テオドアに似合いそうな服を置いてる店を探した。

やっと見つけて入ると、若い女性の店員さんが元気に迎えてくれた。

「いらっしゃいませー！」

僕はその店員さんに近付いて、テオドアのことをお願いするため話しかけた。

「すみません、ちょっといいですか？」

「はい、なんでしょう？」

「この人の服を4着か5着セットで選んで欲しいんです。いま着ているのが仕事の制服で、1着はそのまま着ていくんでタグとかも取ってください。」

そう説明していると、レジの方にいた数名の若い女性店員さんがなにやら話している。

（「すっご、モデルみたい！！」）

（「ってか、後ろの女の人も綺麗だし、話してる子もカッコ良くない！？」）

（「やっべ、よだれが」）

…まあ、気にしないでおこう。ってか、ここは若い女性たちだけでやってる店なのか。そう思っていると、店員さんが話しを続ける。

「スタッフ共が大変申し訳ありません！！」

「いえ、気にしてませんので。私の方からもよろしくお願いします。」

テオドアがそう言って丁寧な仕草で礼をすると、レジの方で『きゃー！！』と黄色い声があがり、目の前の店員さんも顔を赤くしている。

「は、はい。承りました。では、大きいサイズのコーナーへご案内します。」

そう言って、大き目のサイズを扱うコーナーへ行くようなのでここで別れる。

「じゃあ、テオ。僕たちはエリザベスの服見てくるから、終わったら交番の前で待ち合わせにしようか。」

「わかりました。では、またあとで。」

そう言って別れ、エリザベスの服を選ぶため女性の服をあつかってる店を目指した。

――婦人服ショップ

さっきの店を出て少し行くと女性物の服屋のエリアについた。その中で何軒かまわると、若い子向けだけど派手過ぎない服を置いてい

る店があったのでここにすることにした。
ここの店でも若い女性の店員さんが元気に迎えてくれた。
「いらっしゃいませー！」
さて、今度も店員さんに選んでもらおうかな。と、思っているとエリザベスに服の裾をツイツイと引っ張られる。…可愛いな。
「どうしたの、エリザベス？」
「いえ、あの…私の服は貴方に選んで頂きたいのですが…。」
少し恥ずかしそうにそう言ってくるエリザベス。んー、良いけどファッションとか流行ってよく分かんないんだよな。じゃあ、店員さんにオススメとか聞いてから選ぶか。
「わかったけど、ファッションとか流行とかってわからないから、店員さんにオススメとか聞いてからね。」
「はい。それで結構です。」
僕の言葉を聞いて嬉しそうにするエリザベス。とりあえず、選ぶために近くの店員さんを呼ぶ。
「すみませーん。」
「はい、なんでしょう？」
「この人の服を選びたいんだけど、流行とか分からないんでオスス

メとか教えてもらえますか。」

そう言うと、店員さんは少し勘違いして口を開く。

「そうですねー。彼女さんなら、美人でスタイルも良いんでなんでも似合うと思いますよ。」

「か、彼女っ!?」

店員さんに彼女と言われ顔を赤くして驚くエリザベス。でも、それを放置して店員さんの話を聞く。

「では、夏向けに涼しめのワンピースなどいかがですか?」

言いながらいくつかのワンピースを持ってくるので、それを見ていくと…

「あ、これ似合いそう。エリザベス、これはどう?」

そう言って、店員さんが持ってきた中にあった、黒のシースルー生地でできたシフォンワンピースとグレーのマキシワンピースを重ねて着るものを選ぶ。

「これは…とても可愛らしいと思いますが、私に似合うでしょうか?」

服は気に入ったようだが、自分に似合うか自信なさげにエリザベスが聞いてくると、店員さんが横から声をかけてくる。

「よろしければ試着もできますが、してみますか?」

「あ、じゃあお願いします。行っておいで、エリザベス。」

「はい。」

言って、エリザベスは選んだ服をもって店員さんと試着室の方へ消えた。

待っている間、暇だったので他にも何着か選ぶため見ていると、試着を終えたエリザベスが先ほどの服を着て現れた。

「あ、あの…どうでしょうか？　やっぱり、変ですか？」

「そんなことないよ。良く似合ってる、すごく可愛いよ。」

お世辞抜きにとても似合っている。その思ったままの感想を伝えると、エリザベスは再び赤くなり恥ずかしそうにしながら言う。

「では、これにします。このまま着ていっても宜しいですか？」

「あ、ではタグなどを取りますので、もう一度試着室にお戻りください。」

「わかりました。では、湊様。行ってる間に他のも選んでいただけますか？」

「ん、わかった。いってらっしゃい。」

そう言って見送ると、帰ってくるまでに４着分ほど選びサイズにも問題がないようだったので。セットで靴とサンダルを数点買って店

を出た。余談だが、合わせて諭吉が9人ほど去っていった。僕の服なんて…公子や伯母さんが選ぶときは似たようなもんか。

などと、くだらない事を考えながら2人で待ち合わせの交番前に向かった。

――交番前

交番前に行くと既にテオドアが待っていた。テオドアも私服に着替えていて上は黒の無地のTシャツにシルバーのネックレス、下は同じく黒のジーンズというなんともシンプルな服装だ。だが、だからこそ素材の良さが引き立つと言うもの。さっきから何人もの女子が彼の方を見て騒いでいる。

「ゴメン、遅くなったね。」

「お待たせしました。」

僕たちがそう言って近付くと向こうも気付いて話しかけてくる。

「いえ、それほど待っていませんので、お気になさらず。ですが、服を買うと言うのも大変ですね。何着も着替えさせられ、割引するからと写真まで撮られました…。」

言って少し疲れた顔をするテオドア。まあ、店員さんたちもはしゃぎ過ぎたんだろう。

「災難だったね。じゃあ、荷物を一度おいてからまわろうか。」

「あ、いえ。それには及びません。」

エリザベスがそういうと、ポケットから琴のようなものを取り出した。

「これは白金の琴といって貴方の腕輪のように道具をしまっておけるのです。」

「へぇー、でも魔力は通したの？」

「それはこれからです。テオ。」

呼ぶとテオドアがエリザベスの荷物を受け取り目を閉じ魔力を送る。

「ふぅ…これで出来ました。姉上、私の分も入れておいてもらえますか？」

「わかりました、ではこっちへ。」

今度はテオドアから荷物を受け取ると、エリザベスは次々に琴へと収納していき、それが終わると琴を再びポケットにしまった。…ってか、

「聞きたいんだけど、エリザベスのいま着てる服を僕が腕輪に入れたら、琴ごと入るの？」

「えっ！？　あの、その、それはそうですが。それをされると、私は全裸になってしまいますので…。」

顔を赤くして慌てるエリザベス。え、でもいま全裸って言わなかったか！？

「え、下着つけてないの！？」

「なっ！？　ち、違います！　身に着けている物には既に魔力が通っているので、服と一緒に収納されてしまうという意味です！　テオも、笑ってないでこの方に説明しなさい！」

ノーブラノーパン説を言われ、かなり慌てて説明するエリザベス。

そして、後ろで姉の狼狽ぶりを見て楽しそうに笑うテオドア…ってか、テオって結構いい性格してるよな。

そんなことをしていてエリザベスが落ち着くと、モール内を見てまわることにした。

――クラブ前

少し歩いていると、エリザベスとテオドアがある店の前で立ち止まりエリザベスが口を開いた。

「こちらの建物は…まさかここは…“クラブ”！？」

「ここが噂の…」

「今度はテオも知ってるんだ？」

僕がそう尋ねると、やや苦笑気味に答えるテオドア。

「ええ、散々聞かされてましたから…“内なるパトスのまま踊り狂う、光と音の地下庭園”…と。…この目で見るのは初めてですが。」

2人で話していると、ドアに手をかけようとしたエリザベスがなにか言っている。

「そんな…今は閉まっているのですか？　…残念でございます。ぜひ私もと思っておりましたのに…」

それを聞いてテオドアも「そんな…」と、がく然としている…。すると、今度は残念そうに口を開いた。

「…もう、帰るしかありませんね。」

テオドアは少し涙目になってる。ってか、見た目ではこの中で一番年上なのに…。しょうがないので、ゲームセンターに案内してあげることにした。

「んじゃさ、ゲームセンター行かない？」

「ゲーム…センター…？　…真ん中？　……い、いいでしょう、行きましょう。」

本人も行く気になったので、諦め切れなかったのか非常に精巧な動きで踊りだしたエリザベスに、声をかけてから向かうことにする。

「エリザベス、僕たちはゲームセンターに行ってるから、終わったらきてね。」

「イエーイ！」

…本当にわかったんだろうか？とりあえず、そのままにして2人でゲームセンターに向かった。

「フゥ…いくぶん気が治まりました。それにしても…どの場所も大

変興味深く、目移りをしてしまいます。…宜しければ、あなたのお薦めを……あら？　いない…いったい、どこへ？」

――ゲームセンター

２人でゲームセンターにくると、テオドアは、ゲームセンターの前に置いてあるクレーンゲームを凝視している…

「“未確認飛行物体捕手”…？」

まぁ、確かにＵＦＯキャッチャーを直訳したらそうなるけど…。そう思っていると、テオドアが続ける。

「……このケースの中に詰まっているのが、未確認飛行物体でしょうか？　布でできた、“ぬいぐるみ”に見えますが……。いつか、未確認飛行物体が襲来したときのための模擬練習…ですか？」

「いや、違うけども。元々は別の名称になる予定だったんだけど、その名前に合わせた形にすると見た目が悪いからって、このアーム部分に合わせた形にしたんだよ。すると、このアームの上の部分がＵＦＯに見えるからって“ＵＦＯキャッチャー”って名前にしたんだって。」

テオドアはなにやら感心している。

「よくご存じですね。どこでそういった知識を？」

「ん？　別にどこってこともないよ。いろいろ教えられたり、調べてるうちに知ってたってだけだから。」

「そうなのですか。ですが、そういったモノでも様々な事を知って

いるというのは、それだけで羨ましいものです。」

そう言って楽しそうに笑うテオドア。そう言えば、公子や伯父さん達もすぐに吸収するからって、楽しそうにいろいろ教えてくれたっけ。でもま、

「みんなそう言うけど、本当に必要なのは見る力と考える力の方だよ。もしいま、テオがアームの上の部分を注意深く見ていたらＵＦＯの形に似ているって気付けたかもしれないだろ？　そしたら後は、連想ゲームみたいに『ＵＦＯで景品をキャッチするからＵＦＯキャッチャーなのか』って思えただろうしさ。知識なんてなくっても、人は発見し考えることで真実に近付くものさ。」

笑いながらそう言うと、テオドアも納得したように笑い返してきた。そのまま店内に入り少し遊ぶとある程度満足したので、いつまでも来ないエリザベスのとこへ戻ることにした。

戻るために店を出たところで何かに気付いたテオドアが口を開いた。

「あ…失礼。こちらにも水辺があったのですね。」

そう言うとテオドアは、ポロニアンモールの隅にある噴水へと向かって行った…。

「……。」

無言で噴水を見てるけど、どうしたんだろう?そうして見ていると、何故か、ソワソワしている…あ、今度は何故か、キョロキョロしている……いきなり、手を突っ込んだ!?何してんだ。

「8度ですね。」

「残念、7度でしたっと。で、さっきから、突っ込みたかったの？」

「なっ…何のことか、分かりませんが。それより、なぜ7度だと？」

最初、質問されてばつが悪そうにしていたテオドアがそう尋ねてくる。

「ヒントだけ教えてあげる。ヒント1：テオドアの服装。ヒント2：空気。ヒント3：水質管理。」

僕がそういうと、考え始めるテオドア。少しすると答えと思ったものを言ってきた。

「ヒントから考えたもので合っているか分かりませんが…ヒント1から導き出したのは、私の服装が普段よりも涼しい物のため、私自身の体温が下がっているということでしょうか？」

「そうだね、合っているよ。」

自分の出した予想が合っていることに安心しながらテオドアが続ける。

「では、2つ目のヒント…空気と言われ、最初はわかりませんでしたが、もしかしてことベルベットルームの空気…つまり気温が違うということでよろしいですか？」

「んー、若干違うけど、ニュアンスは合ってるかな。続けて。」

「では、最後のヒント。水質管理ですが、ここの水場…噴水でしたか？　それは水を送るか循環させるもののようですので、機械によって管理されているのでしょう。機械で管理する以上、なるべくイレギュラーを避け、一定の条件に揃える必要があります。なので、どこかで同じ水質に調整した後にここに送られているということで？」

最後のヒントから読み取った事を告げて正否を聞いてくるテオドア。僕もそれに答える。

「正解。じゃあ、それらから考えられる答えは？」

「自信はありませんが、体温が下がった状態で触ったのでいつもより温く感じた。おまけに一定の室温に保たれているベルベットルームと違い、ここは日差しや風などで体感気温が狂う。それによって私は触った水温を間違えたと。そして、湊様が水温を当てられた理由はここの水温が普段から一定に保たれているから…で、よろしいですか？」

一番最後の答え合わせ。テオドアも自信がないと言っただけに少し緊張しているようだ。単なるクイズなんだから、ただ楽しめばいいのに…。そう思いながら答える。

「大正解。ね？　カケラの情報しかなくても、考えれば分かるもんでしょ？」

「そうですね。ですが、なかなかに疲れます。」

そう言ってテオドアは苦笑しながら手に付いた水をハンカチで拭く。そして、それをポケットにしまうと一緒にさっきのクラブ前に向か

った。

――クラブ横・噴水

僕たちがクラブのとこに戻ると、近くにある噴水のとこでしょんぼりしたエリザベスが1枚ずつコインを落としている…なにしてんだ？

ってか、さっきから変な男2人組みが必死に口説いてるみたいだけど完全無視だな…。早めに声かけるか。そう思ってエリザベスを呼ぶ。

「おーい、エリザベスー」

僕が呼ぶとハッとした表情で顔をこちらに向け、やや涙目になってこっちに向かってくるエリザベス。

「どこに行っておられたんですか！？　私、1人で探したんですよ？」

「ゴメン、ゴメン。でも、踊ってるときにゲームセンターに行くって声かけたよ？」

そう言うと、キョトンとした表情になり、少し恥ずかしそうにし始めるエリザベス。やっぱり、踊ってて聞こえてなかったのか、と考えているとエリザベスが謝ってくる。

「そ、それは申し訳ありませんでした。」

「いや、いいよ。僕も確認してなかったし…それより、ハイ。」

言いながらゲームセンターでとってきた、ぬいぐるみを3体手渡す。

「前のと違うポーズのフロスト人形だよ。」

「よ、よろしいのですか？　ありがとうございます。」

受け取ると、嬉しそうにギュッと胸に抱くエリザベス…でも、ホントに何歳なんだろう？これで二十後半なら恐ろしい若さだ。などと考えていると、さっきエリザベスを必死に口説いていたガラの悪い2人組みがやってきた。

「オイ、オマエら。なに人が口説いてた女横取りしてんだ？」

「痛い目見たくなきゃ、女おいてさっさと消えろや。」

なんて、随分とテレビに出てくるチンピラみたいなこと言ってくる。ってか、僕らに喧嘩売るとか命知らずだなぁ…。

「どうする、テオ？」

「そうですね…。姉はぬいぐるみに夢中のようなので、ここは私が片付けましょうか？」

「いや、テオがやったら死んじゃうよ…。」

そう、この中で最弱は僕だ。それでもチンピラ2人ぐらい楽勝なのに、テオがやったら病院送りじゃ済まなくなる。どうしようかな…ん？

「テオ。そこの大き目の石とって。」

「これですか？」

言われてテオドアは、近くに落ちていたミックスレイドの魔石ぐらいの大きさの石を僕に渡す。それを見ていたチンピラがさらに煽ってくる。

「ああ？　テメェ、そんなん持ってオレらとやる気か？」

「バッカじゃねーの？　石ころ握ったぐらいでそんな変わる訳ねぇだろ。そんなら、そっちの男がやった方がマシだ。」

そう言って僕を馬鹿にして笑うチンピラ達。だが、僕はそれを無視して少し集中し、石を握っているのが相手に見えるようにしながらチンピラに声をかける。

「見てて…《バゴンッ！》…」

「「っ！？　……。」」

力を思い切り入れて握ると石は粉々に砕け散り、その様子を見ていたチンピラは言葉を失う。相手も、もう声をかけてこないようなので、一言だけ言ってから去っていくことにする。

「次、エリザベスにチョッカイかけたら、お前らの首でやるから…」

そう言うとチンピラは「「ひぃっ！」」と言って腰を抜かしたが、ほっといて最初の噴水に向かった。

――中央噴水

噴水につくとテオドアが話しかけていた。

「それにしても驚きました。湊様は力が強いとは思っていましたが、あれほどとは…」

「そう？　あれぐらいテオドアでも出来るでしょ？」

「いえ、腕力なら人間より上ですが、あそこまでの握力は魔力で身体強化しないと出来ませんよ。」

ふーん、魔力ってそんなことも出来るのか。今度、1人でタルタロス行ったときに練習するかな…そう思いながら返事をする。

「ホントに出来ると思ってなかったけどね。最近、身体能力が徐々に上がってるみたいなんだよ。力に目覚めた影響かな？」

そう尋ねると、ぬいぐるみから復活したエリザベスがそれに答える。

「多分そうですね。それに加え、湊様は魔力回路もお持ちで魔力を扱う事ができますから、その魔力に耐えられる肉体に変化しているものと思われます。」

「え、魔力回路ってペルソナ使いとかなら持ってるんじゃないの？」

「いえ、普通の人間にはありません。この世界では我々ベルベットルームの住人と湊様だけです。」

今度はテオドアが僕の質問に答えてくれた。でも、なんで僕にだけそんなものが…まあ、これはまた後で考えるか。そう思って気持ちを切り替えて2人に話しかける。

「まぁいいや。それより、次はカラオケでも行かない？」

そう言うとエリザベスが驚いた表情をして口を開く。

「“カラオケ”…それはまさか…歌舞音曲の本職である歌い手に、ワンボタンで挑戦できるという、あの…！　私の秘密のレパートリー…ついにお披露目のときが訪れたようですね…。」

「その…”カラオケ”とは一体何ですか？」

エリザベスが何やら自信ありげにしていると、テオドアそう尋ねてきた。

「えっと、歌を歌うとこだよ。曲を選ぶとスピーカーから音楽が流れるから、テレビの画面に表示された歌詞を見ながら歌うんだ。好きな曲選んで自由に歌っていいから、結構ストレス解消になったりするんだよ？」

「ほぉ、そういった物なのですか。わかりました、参りましょう。」

そう言って僕たちは3時間ほどカラオケで過ごし、途中エリザベスがドリンクバーで謎のジュースを作ったり、それをテオドアが飲まされ口を押さえながらトイレに駆け込むなど楽しい時間を過ごした。余談だが、テオドアの低音ボイスのバラードはやばかった。どれくらいやばいかって言うと、ゆったりリラックスし過ぎてエリザベスの膝で寝てしまうくらいだ。

――中央噴水

カラオケから出て最初の噴水に戻ると、テオドアとエリザベスが口を開く。

「そろそろ、行きましょうか。遅くなるといけませんから……。こちらの世界も、なかなかいいものですね。いつかまた…こうして出かけたいものです。今日はありがとうございました。」

「本日は数々の貴重な体験をさせて頂きました。依頼の方は、十二分に“達成”でございます。宜しければまたいつか…ご一緒させて頂きたく存じます。」

そう言って2人は丁寧にお辞儀してきた。まあ、楽しんでもらえたならホスト側としては、一安心かな。

「楽しんでもらえたのなら良かったよ。次また出かけるときは、今日買った服を着て来てね。それじゃあ、戻ろうか。」

僕はそう言うと、2人とベルベットルームに向かった。

――ベルベットルーム

ベルベットルームに戻ると、2人は栞から荷物を取り出しそれぞれの荷物を持ってドアの中へ消えていったので待つことにする。

少しすると、いつもの服に着替えた2人が現れテオドアが話を始める。

「ポロニアンモールへのご案内、ありがとうございました。早速、このベルベットルームにも噴水を設置してほしいと主に申し上げたのですが…残念ながら、却下されてしまいました。即答でございました。せめて“未確認飛行物体捕手”の設置をお願いできないかと、掛け合っております。」

「私もこのベルベットルームを“クラブ”にして欲しい…というのは、主に断られましたので…他の願い…となると、難しいところでございます。ですが、本日はポロニアンモールへのご案内、まことにありがとうございました。」

2人してそんなことを言っているが、言われたイゴールが少し気の毒な気がしてきた…。そう思っていると、エリザベスが話を続ける。

「それでは、報酬の方ですが「ああ、それはいいよ。」…どういうことでしょうか?」

僕が報酬を拒否すると、エリザベスが不思議そうに尋ねてくるので、それに答える。

「友達と遊ぶのに言葉以上のお礼なんていらないってだけだよ。それに、報酬があるとすればカラオケでもらってるしね。」

そう言って笑顔をむけると、僕が寝てエリザベスの膝に頭を落としてしまった時のことを、思い出したのか顔を赤くするエリザベス。だが、そこでテオドアも僕に尋ねてくる。

「姉はそれで報酬を払ったことになりますが、私は何もしていませんよ?」

「ん?　そんなスペシャルな報酬を貰えたのは、テオの歌のおかげなんだから気にしなくていいんだよ。」

言いながらテオドアにも悪戯っぽい笑顔を向けると、一瞬キョトンとした表情をしてから「フフッ」と笑いながらテオドアもそれを了承した。

そうして、そろそろ時間も遅くなってきたので帰るためドアに向かう。

「それじゃあ、今日は楽しかったよ。また遊びに行こうね。」

「はい、またいつか。」

「帰りもお気をつけて。」

テオドアとエリザベスにそう言って見送られながらドアを通り、ポロニアンモールに戻るとそのまま寮に帰り休むことにした。

第十八話（後書き）

性格改変ヤベェ。

第十九話　前編（前書き）

今回は前に活動報告かどっかで書いた、『原作設定殺し』の回です。
湊が大切なものを失います。そして、ゴメン…順平。

第十九話　前編

５／１７（日）
朝――自室
今日は学校が休みだけど、夜には公子とゆかりとテスト勉強を兼ねたパジャマパーティーをする予定だ。そのため、前の戦いでケータイが壊れてしまったので、新しいのを買いに行くには日中に行くしかない。

「それじゃあ、少し面倒だけどポートアイランド駅前の方まで行きますか。」

言ってから、ベッドを出て出かける準備をする。目的の場所はポートアイランドにある携帯ショップだ。ポロニアンモールにもあるが、あっちは１社の専門店なので、普通は駅前の総合携帯ショップの方へ行くとゆかりから聞いている。

顔を洗い、髪を整えてから着替えると、そのまま部屋を出て駅前へ向かった。

昼――ポートアイランド駅
最初は散歩がてら歩いて行こうと思ったが、手続きに時間がかかるのでさっさと行ってまわりで時間を潰そうと思い、電車でやってきた。

「今日はけっこう暑いなー。」

電車を降りて駅を出ると、そう言って眩しいので日差しを手で遮る。そういえば、今日は初夏ぐらいの気温になるって出る前に見たニュ

ースで言ってたっけ。そう思いながら、駅の階段を下りていくと、

「おおっ、白いゴスロリだ。すごいけど、暑くないのかな？」

そう、階段を下りていくと近くにあるベンチに白いゴシック・アンド・ロリータのファッションをした女の子が座っていたのだ。

よく見てみると、靴を脱いでベンチに体育座りして何かしているようだ。

「んー…あれ、スケッチブックか。んじゃ、絵でも描いてるんだな。どんなの描いてるんだろ？」

ロリ子さん（『ゴスロリを着た女の子』から命名）がどんな絵を描いているのか気になったので見せてもらいに行くことにした。

――駅前ベンチ

近くで見るとロリ子さんは化粧もしてない本当にロリ子さんだった。歳は自分と同じか1つ下ぐらいだろう。とりあえず、立ってても怪しいので声をかけて絵を見せてもらえないか聞いてみる。

「すみません。」

「……。」

声をかけてみたが、ロリ子さんは完全に無視して絵を描き続けている。諦めずにもう一度声をかける。

「あの、すみません。」

「……なに？」

もう一度声をかけると、一瞬だけこっちを見てからまた絵に視線をもどしながらも答えてくれた。

「えっと、どんな絵を描いてるのか気になったから見せてもらえないかなって思って。」

「…勝手に見れば。どうせ、私にしか理解できないし。」

「うん、ありがとう。」

許可が出たので後ろにまわってスケッチブックを見る…うわぁ、真っ赤だ。なに見て描いてるんだ？そう思って、ロリ子さんの視線の先を見る。

…なんだろう。建物じゃない……街路樹？それと…座って話してる人か？でも、なんで赤で……あ。

「ああ、命か。」

「え？」

「え？　いや、命かって。」

僕がそう言うと、ロリ子さんは少し驚いた顔をしながら後ろにいた僕の方を向き、絵を描く手を止めて僕に尋ねてくる。

「…どうしてそう思ったの？」

「どうしてって、街路樹とか座ってる人を描いてるように見えたからだけど？」

訊かれたので答えるが、ロリ子さんは納得していないのか、さらに訊いてくる。

「それじゃあ、答えにならない。なぜ、この赤を見てからそれらを見て『命』を描いてると思ったの？」

んー、なんでって訊かれてもな。そう思ったからなんだけど…と、思いながらも一応説明する。

「確信はなかったけど、街路樹とか人をやや大きく描いてるでしょ？」

「うん…。」

「それが生物の命の輝きってか、命を燃やして生きてる様子を描いてるように見えたってだけなんだけど…違った？」

間違っていたら結構恥ずかしいこと言ってるなぁ、と思いながらロリ子さんに正解を尋ねる。すると、少ししてからロリ子さんが口を開く。

「…んーん、合ってる。でも、そこまで当てた人は初めてだったから驚いただけ。」

「そうなんだ。まあ、普通は生き物を見て、命をそのものを描いてるとは思わないからね。」

苦笑しながらそう答える。まぁ、僕だって1回死んでなきゃ他人を命そのものとして見るなんて見方出来なかったと思うしね。そう考えていると、ロリ子さんが再び話しかけてくる。

「【チドリ】よ。」

「え？」

「私の名前、チドリ。君は？」

「ああ、ロリ子じゃないんだ…えっと、湊だよ。」

僕がそういうと不思議そうな顔をしてロリ子改めチドリが聞き返してくる。

「…ロリ子ってなに？」

「え？　名前だけど。」

「誰の？」

「チドリの。」

「「……。」」

…すごい気まずい。ちくしょう、ロリ子なんて口に出すんじゃなかった。何か話題を逸らさないと。そう思っているとチドリの方から話しかけてくる。

「ロリ子って私、湊と歳同じぐらいだと思うけど。」

「ああ、ゴスロリの女の子でロリ子ね。ロリっ子って意味じゃないから、大丈夫。」

「そう…で、湊はなにしにきたの？　ナンパ？」

ロリ子と言われやや不機嫌になったのか、ジト目か半目か際どい視線で問いかけてくるチドリ。一応、聞かれたので答えることにする。

「ナンパされたかったの？　悪いけど、僕はケータイが壊れたから新しいのを買いに来ただけなんだよ。期待させてゴメンね。あ、でもお昼ぐらいなら奢るよ？」

「違う、ナンパなんていらない。…ケータイ？」

強くナンパを拒否すると、聞き返してくるチドリ。答える前にいつまでも振り返った状態で話させるのは悪いので、隣に腰掛ける。

「よっと。で、うん。ケータイだよ。なんかぶつけたショックと水没？みたいな感じで壊れたんだ。これから見に行くけど、チドリもくる？」

「…うん。どうせ、絵も暇で描いてただけだから。」

そう言って移動のためスケッチブックをたたみ、画材道具を片付けていくチドリ。そう言えば、靴履いてなかったな。訊いてみるか。

「そうなんだ。あ、靴履かせようか？」

「うん、お願い。」

言われたので履かせてからリボンを結んでいく…ってか、すごい厚底だな。歩きづらくないのか？そう思いながら両方とも結び終わると立ち上がり、携帯ショップまで案内することにした。

――携帯ショップ

チドリと2人で歩きながら携帯ショップを探していると、映画館の入っているビルの一階にそれを見つけた。ここでは、日本の主要３社に加え海外によくいくビジネスマンに人気の海外の会社や、ＰＨＳの機種も扱っている。

「どれにするか決めてるの？」

「いや、別に。わりと色で選んだりするからね。」

「ふーん。」

言いながらキョロキョロとまわりを見るチドリ。やっぱこの年代の女子は新機種とかに興味あるのかな？そう思いながら僕もいろいろ見ていく。

少し見ていくと、スライド式のダイヤルキー付きのケータイを手にとってみる。

「あー、これグルグルして項目進めたりするのか。楽そうだな。」

そう言ってみてると、後ろからチドリが寄ってきた。

「どれ？」

「ん？　これだよ、はい。」

どれか訊かれたので、僕の持っていた見本を渡すと、チドリは「ふーん」と言いながらダイヤルキーをグルグルまわしている。ってか、チドリはどんなの使ってんだろ。

「そういえば、チドリはどんなの使ってんの？」

「私？　私、持ってないよ。別に連絡する相手いないし。」

言ってから再び視線を見本に戻してグルグルするチドリ…気に入ったのか？

「それ、気に入ったの？」

「…別に。」

「……。」

「…少しだけ。」

僕がジッと見ていると、諦めたのか顔をやや逸らしながら答えるチドリ。まあ、気に入ったなら絵を見せてくれたお礼にプレゼントしようかな。

「じゃあ、色違いで買おうか。２台買うとお得だし。」

「いい。そんなお金持ってないから。」

少し残念そうにチドリが言うので、僕が続ける。

「絵を見せてくれたお礼にプレゼントするよ。使用料の請求もこっちにくるから問題ないでしょ？」

「でも、会ったばっかりだし…」

「良いんだ。どうせ、死んだ両親が残したお金だから誰かのために使うなら、両親も良いって言うと思うし。」

そう、両親の遺産は伯父さんが親戚から返却させ、現在は僕の口座に入っている。だが、元々それなりに裕福な実家の出だった両親が残した遺産はかなり多くて僕1人では使い切れないのだ。

ってわけで、可愛い女の子にケータイ1つプレゼントしたって問題ないし、両親も「いいぞ、もっとやれ！」と言うはずだ。僕がそう思っていると、チドリがこっちをむいて口を開く。

「…ホントに良いの？」

「うん。どの色が良い？」

僕が希望の色を尋ねると置いてある見本を見ていくチドリ。ちなみに色は『ブラック・ホワイト・ターコイズブルー・ローズ・エメラルドグリーン・ネールピンク』の6色だ。

チドリはどうやら、あと2つぐらいまで絞って悩んでいるらしい。でも、こういうのって選ぶのも楽しいよね。そう思っていると、しゃがんで選んでいたチドリが立ち上がり見本を持ってきた。

「これが良い…。」

「ローズか、チドリの髪みたいで綺麗な色だね。僕はブラックにするからお互いが映える色だね。」

そう言って笑うと少し照れたのか顔を背け会計を促してくるチドリ。

「そ、そんなのどうでもいいから、買うなら早くいこ。」

「フフッ、わかった。でも、契約してから電話を使えるようになるまでの手続きで、1時間くらいかかるけど大丈夫?」

「うん。夜まで予定ないから今日はずっと絵を描くつもりだったし。」

「そうなんだ。」

そんな風に話しながらカウンターに見本を持っていくと、若い女性の店員さんに迎えれた。

「いらっしゃいませー。本日はご新規ですか? 機種変ですか?」

「あ、新規でお願いします。」

「わかりました、そちらにおかけしてお待ちください。」

言われて近くにある席に2人とも腰掛ける。少し待つと、さっきの店員さんが契約書類を持ってきた。

「お待たせしました。本日はご新規と言うことで、こちらの書類に必要事項をご記入いただけますか? 書けたらまた来ますのでお呼

びください。」

言いながら店員さんは僕とチドリの前にそれぞれの書類とボールペンを置くと、席を立ってカウンターに戻って行った。すると、チドリが話しかけてきた。

「湊、私これの書き方知らない。」

「ああ、そっか。ってか、両方僕の名前で契約することになるのか？　チドリって名字なんて言うの？」

「え…その、知らないの。昔のこと、ほとんど覚えて無くて。」

そう言って暗い表情をして、下を向くチドリ。まあ、命を見て描くぐらいだしワケありかなとは思ったけどね。わからないなら、それはそれでいいさ。

「ゴメンね、失礼なきき方して。なら、僕の名前で契約すれば良いだけだから気にしないで。」

「ううん、別にいい。」

それから僕は2人分の書類を書き、チドリはそれを横で見ていた。

2人分書き終わり書類に不備がないか、確認したところで丁度さっきの店員さんがやってきた。

「書き終わりましたか？」

「あ、ハイ。お願いします。」

言って、書類を渡すと店員さんが目を通していく。

「あ、彼氏さんの名前で両方契約するんですね。ご利用プランはどうされますか？　こちらのカップル割は、契約の名義が同じでも店頭でカップルの証明に写真をお撮り頂ければ適応されますが？」

そう尋ねてくるがどうしよう…一応、きくか。

「どうする、チドリ？」

「そっちの方が安いの？」

「ハイ。カップル間はメールも通話も全て無料の上、月々の基本使用料も半額になります。」

「ふーん。」

話を聞いて、理解したのかしてないのかよく分からない返事をするチドリ。まぁ、お金は気にしないでいいんだけどね。それより、カップルの方を気にするべきだと思うな。

「いいよ。あんまり、湊に負担かけたくないし。」

「え、でもカップルだよ？」

「どうせ、2ショット撮るぐらいでしょ？」

「良いのかなぁ…。」

考えていると、店員さんが確認してくる。

「どうされますか？　写真と言っても、撮った後はお客様のケータイにデータを送るので、こちらには残りませんが。」

「うん、大丈夫。それでいい。」

「承りました。でも、そのままかけてお待ちください。」

そう言うと店員さんはカウンターの奥へ引っ込んでいった。

「本当に良いのチドリ？　これで、キスしてくださいとか言われたら、洒落にならないよ？」

「よく分かんないけど、こういうのってそこまでさせるの？」

「いや、僕も知らないからなんとも…。」

話していると、さっきの店員さんがデジカメを持ってやってきた。

「それでは、くっついて頬で良いのでキスしてください。」

「「っな!?」」

ちくしょう、本日2度目のちくしょうだ。頬とは言え年頃の女子に、さっき会ったばっかの男にそんなことさせられる訳ないだろ。そう思い、やっぱりやめると言おうとすると、チドリがこっちの椅子にきて僕の顔をおさえて頬にキスをしてきた。

「ん…」

《カシャ！》

って、カシャ！じゃないよ。なにシャッター音機能使ってんだ。え、これ今度は僕の番的な？チドリがしちゃったから今更やめるって言えないし…よし、覚悟決めよう。チドリの手が離れたのでそっちを向き話しかける。

「チドｒ　「っ！？」」

《カシャ！》

…なんで手を離して顔はほぼ同じ場所なんだよ。しかも、店員さんそれ撮っちゃうとかどんなスナイパーだよ。

状況を説明しよう。手が離れたから僕がチドリの方を向くと、なんとチドリは移動してなかった。そんな状態で僕が顔をチドリの方へ向けるとどうなるかお分かりいただけるだろう。そう、唇が触れるくらいのものだが、本当にキスしてしまったのだ。なんで、ケータイ買いにきてファーストキスを失うはめに…

そう思っていると、店員さんから声がかかる。

「ハイ、ＯＫでーす。いやぁ、ナイスハプニングでしたね。彼氏さん狙ってました？　それでは、手続きしますので、１時間後ぐらいにまたお越しください。ありがとうございました。」

言って、店員さんはカメラと書類を持って去って行った。…気まずいってレベルじゃねぇぞ。絶対に怒ってるよこれ。どうしようかな…。

「…いこ、湊。」

「え？」

「1時間後だって。だから、外行こう。」

「う、うん。」

チドリに言われて僕たちは店から出ることにした。

――ファミレス

携帯ショップから出ると、お昼過ぎだったのでご飯を食べることにし、2人でファミレスにきた。現在も会話は最低限のものしかない…。

「あのー。」

「…なに？」

「えっと、そのゴメン。僕が急にそっち向いたから。」

僕がそう謝るとチドリは溜め息を吐いて、話し始めた。

「はぁー…別にいい。私もすぐに離れたらよかったんだし、今回のはケータイの代金として奪われたと思う事にする。」

「ちょっと待って、僕そんな鬼畜じゃないよ！」

「どうだか。新手のナンパは手が早いのね。」

そう言って、水を飲みながらジト目で見てくるチドリ。くっそ、立

場的に強く言い返せないっ。…そうだ、こちらもファーストキスを奪われたんだ。なら、こちらも被害者では？よし。

「…僕はファーストキスだったんだけどなぁ。」

「っ！？　『僕は』ってなによ。こっちだって初めてだったのに！」

そう言ってチドリは顔を少し赤くして怒ってくる…ってか、たった1度のハプニングで世界から2つのファーストキスが消えたのか。恨むぞ、神よ。

「そ、それはゴメン。えっと…ありがとう？」

「なにそれ。なんのお礼？」

チドリがジト目のまま尋ねてくるので、僕も質問に答える。

「え、ファーストキスもらったら言うんじゃないの？」

「そんなの初めて聞いたわよ。…そういえば、お昼ぐらい奢ってくれるのよね？」

「うん。ってか、だから入ったんじゃないの？」

僕がそう言うとチドリはメニューを見始めたので、僕もメニューをみて選ぶ。まぁ、ファミレスではだいたいハンバーグなんだけど。そう思いながら見ていると、チドリが声をかけてきた。

「私、これ。」

「ん…単品？　ご飯かパン、あとスープとかサラダ欲しいならセットにしな。」

「え？　じゃあ、このサラダバー付きのセット…パンで。」

「ん、了解。」

そのあと、店員を呼び2人分の注文をして、チドリがサラダをとってきたとこで料理もきたので、食べながら話をする。

「そういえば、チドリはなんで選んだとき驚いてたの？」

「え？　だって、わざわざ高いの選んだのに、セットまで聞かれるとは思ってなかったから。」

「食べたかったなら、別に良いじゃん。残すなら、少しくらい食べるし。」

もきゅもきゅとサラダを食べているチドリにそう言うと、なぜだか呆れたような目で見てくる。どうでもいいけど、白と赤のカラーリングで野菜食べてるとウサギみたいだなぁ。

「はぁー…なんか、湊って世間からずれてるわよね。私もかなりだけど、その私から見てもズレてるもの。」

「そう？　自分ではよくわかんないけど。」

言ってハンバーグを口に入れて、ご飯を食べる。

「…あの、親の遺産って両親はどうしたの？」

「ん？　ああ、１０年前ぐらいにここの近くの橋で交通事故があってさ。それが僕とその両親の乗ってた車なんだよね。で、僕はなんとか脱出したけど、両親はそのまま炎上した車の中で炎に包まれて死んだんだ。この右目もそのときにね。」

そう言って、右目の眼帯を指差すと、話を聞いてたチドリは暗い表情になる。

「…そうなの。」

「別に気にしなくていいよ？　小さい時のことだから、今はもうふっ切ってるしさ。それより、デザートは食べる？」

僕が尋ねると、キョトンとした表情でこっちをみるチドリ。すると、今度はくすくすと笑い始めた。

「フフッ。あなたって、おかしな人ね。」

そのあと、追加でデザートを頼み食べ終わると、会計をしてから携帯ショップへと向かった。

――携帯ショップ

店につくとさっきの店員さんが僕たちに気付き出迎えられた。

「お待ちしておりました。では、あちらの席でお渡ししますので、かけてお待ちください。」

言われてさっきと同じ席に2人とも座る。

「では、こちらが本体になります。先ほどの写真のデータはすでに移してありますので。」

そう言われ受け取りスライドさせて画面をつけると、待ち受けにさっきのキスの写真が表示される。

「「ブフゥ！」」

思わず僕らは吹き出すが、店員さんは説明を続ける。

「そして、こちらが先ほどの写真をプリントアウトしたものになります。２枚ずつ印刷したのでそれぞれの記念にどうぞ。」

言われて受け取ってしまったが、どうすんだよこれ…。見つからないように机にしまっておかなくては。そう、心に決めケータイの箱に写真をしまう。

「では、手続きは以上です。アドレスの変更などは説明書をお読みください。本日はありがとうございました。」

そういって、店員さんに見送られながら店を出て最初のベンチに向かった。

――駅前ベンチ

店を出て最初のベンチにくると、２人で腰掛ける。

「ふぅー。まさか、いきなりキスの画像を見せられるとは思ってなかったよ。」

「…そうね。でも、これどうみても私からキスしたようにしか見え

ないわよね…湊がしてきたのに。」

受け取ったばかりのケータイを見ながらそういうチドリ。なんで最後に恨めしそうに言うんだよ。そりゃ、僕の頬にキスした状態とほぼ同じ状態で止まってたらそうなるだろうさ。一応、こっちにもプライドがあるので言い返しておく。

「目もしっかり閉じてるしね、これもうチドリからしてきたってことで…ごめんなさい。嘘です。」

言ってる途中で思いっきり睨まれたので謝っておく、ってか、最初に会った時より随分と印象が違うな。僕が初めて絵を理解した人間だからか?そう思っていると、チドリが質問してくる。

「ねぇ、これどうやってアドレス変えるの？　あと、待ち受けも。」

「えっと、メール画面の設定から」

「これ?」

「うん。それを…」

そうやってチドリのアドレスを変更し、僕も新しいアドレスに変えると、そろそろ時間だからという事で僕らは別れて帰ることにした。

夜――巌戸台駅前

寮に帰るためポートアイランド駅から巌戸台の駅まで戻ってくると、ケータイにメールがきた。

――――――――――――――――

Ｆｒｏｍ：チドリ
Ｔｏ：湊
今日はありがとう。ケータイも
買ってくれて嬉しかった。また、
その内会えたらいいね。

Ｐ．Ｓ．ファーストキスのことはまた
別にお詫びをしてもらうから。

―――――――――――――

…なんてこったい。そう思いながらも、返事を返す。

―――――――――――――

――???　〜チドリ　Ｓｉｄｅ〜
湊と別れて住んでる部屋へ向かっているとメールが返ってきた。

「やっぱり、慣れてる人は返信早いのね。」

そう言いながら届いたメールを開く。

―――――――――――――

Ｆｒｏｍ：湊
Ｔｏ：チドリ
絵を見せてくれたお礼だから気
にしないで。それに僕も楽しか
ったからさ。

それと普段から、気軽にメール
でも電話でもしてよ。“カップル”
だから、お互いのアドレス帳の

0番に登録されてるんだし。

P．S．ごちそうさま♪

――――――――――――――

「なっ！？　…確かにカップルで契約したけど、ごちそうさまってなによ！」

そう思い早速電話をかけることにした。

――巌戸台商店街　〔湊　Ｓｉｄｅ〕

チドリからのメールに返事を返してケータイをしまい、テクテク歩いていると電話がきた。相手はもちろん1人しかいない。なぜなら、家にメモリーを忘れたため、他の人にケータイを変えた連絡を出来ていないからだ。そう思ってる間もコールが鳴りやまないので、電話にでることにした。

《ピッ！》

「はい、もしもし。」

『はい、もしもしじゃないでしょ？　何か言う事があるんじゃないの？』

低いトーンでそう言ってくるチドリ。え、なにかあったっけ…。

「ごちそうさまでした？」

『なんで、丁寧に言い直すのよ！　問題はそこじゃなくて、言葉自体でしょ。』

「…おいしか『そうじゃないってば！　食事から離れなさいよ。』」

僕の言葉を遮って怒ってくるチドリ。最初の無気力＋無関心なチドリは一体どこへ…なんて思いながら話を続ける。

「冗談だよ。正直、唇の感触ぐらいしか覚えてないんだ。」

『…それも忘れて。』

「でも、お互いの初めてだよ？」

『誤解を生むような言い方し・な・い・で！』

そんな風に語尾を強調しながらクレームをつけてくるチドリ。まったく我儘だなぁ。

「善処しますよっと。」

『はぁー…調子狂う。いつもは冷静なのに。』

「最初だけだったね。キス以降は今の感じだったよ。」

疲れた様子のチドリにそう声をかけると、強めの口調でチドリが言葉を返してくる。

『そうよ、あなたがキスなんてするからじゃない。それを、ごちそうさまだなんて、どう責任とってくれるのよ？』

「責任って…本当に付き合うとか、結婚するってこと？」

僕がそう言うと『なっ！？』とチドリの驚く声が聞える。そして少しの間、無言が続くと低いテンションでチドリが口を開く。

『…それはダメ。会ってすぐ付き合うなんてイヤ。』

「そう？　じゃあ、次に会うまでに何か決めといてよ。わりと何でも付き合うし。」

『ん、わかった。…今日はありがと。また電話とメールするね。』

チドリがそう言ってきたので、返事とともに伝えておく事があったのでそれを言っておく。

「うん。あ、今日の夜はちょっと友達とテスト勉強するから電話できないんだ。だから、用があったらメールにしてね。」

『わかった。またね。』

「うん、またね。」

《ピッ！》

チドリとの通話を終えると、そろそろ勉強会を始めているころだと思ったので、少し急いで帰ることにした。

――？？？　〜チドリ　Ｓｉｄｅ〜

「わかった。またね。」

『うん、またね。』

《ピッ！》

湊との通話を終え、１人で部屋に向かいながら今日の事を考える。

最初会ったときは、いつもの物珍しさできた人間だと思って相手にしないようにしてた。でも、彼は私の絵を…いや、私が何を描いているかを初めて理解した人。

湊は何故それを描いてるように見えたか説明してきたけど、なぜ湊は生き物を見て命が炎のように燃える様が見えたの？私は自分の命や死をどうでもいいものとして見ている。だから対比として、他人の命の輝きや炎のように燃えるのがなんとなく見える。…もしかして、湊も？

そう考えながら歩いていると自分の住んでいる部屋のあるマンションに着く。一応、言われた通り郵便受けを確認してからエレベーターに乗って上がって行き、降りてから自分の部屋の鍵を開けて中に入る。

「…ただいま。」

靴のリボンをほどいていると、奥のリビングの方から声がかかる。

「おう、帰ったんかチドリ。今日はえらい遅かったんやな？」

「うん。ちょっとね。」

返事をしながら靴を脱ぎ終えリビングに入って行くと、同居人の１人【ジン】がソファーで新聞を読んでいた。

「…タカヤは？」

「ああ、今日の依頼は1人で十分っちゅうて、1人で行きはったわ。」

「ふーん。」

話を聞きながら剣の形をしたヘッドアクセサリーとヘッドドレスを外していく。そうやっていると、何かに気付いたジンが声をかけてきた。

「ん？　お前その袋、ケータイ買ったんか？　前にわしとタカヤが言うたときは、いらんって言っとったのにどないしてん？」

「これ？　買ったんじゃいないよ、買ってくれたの。」

私がそう言うと、余計に訳が分からないといった表情をして尋ねてくるジン。

「はぁ？　誰がや？」

「…今日、会った人。」

「なんで初めて会った人間がお前にケータイ買って渡すんや？　ってか、どこでおうてん？」

やたらと聞いてくるジン。でも、あんまり話したくないかも。

「いつもの駅前で絵を描いてたら、見ても良いかって声かけられて。」

「おう」

「それで、勝手に見ればって言ったら、絵をみて私が何描いてるか当ててきたの。」

「あの絵を理解したんかっ!?　えらいやっちゃな、そいつ。」

聞いて本当に驚いた様子のジン。まぁ、いままで誰も理解できなかったから、なんの絵か教えてなかったしね。そう考えていると、新聞をたたんでしっかり話を聞く姿勢になるジン…あんまり話したくないんだけど。

「…で、それがなんでケータイの話しに繋がんねん?」

「うん。ナンパか聞いたら違うって言われて、ケータイを買いに来たけど気になったから見にきたんだって説明されたの。で、暇ならくるかって言われて、私の絵を理解した相手に興味あったからついて行ったの。」

「それも新手のナンパちゃうんか…。」

そんなツッコミを入れてくるジン。でも、確かに言われてみれば…とりあえず、それは後でメールで聞くことにして話を進める。

「で、ケータイ見てて相手が気に入ったのがあったみたいで、相手の持ってた見本を受け取ってグルグルいじってたら、ケータイ持ってないって話しになって、気に入ったなら買おうかって。」

「いや、すまん。その時点でわからんわ。なんで、チドリがケータイ持ってないからって、そいつが買う話しになんねん?」

「絵を見せてくれたお礼だってさ。使用料の請求も向こう持ちって言われて、相手に悪いし会ったばっかりだから断ったんだけど。どうせ親の遺産だから他人のために使う方が良いだろうって。」

ジンは私の説明を聞いてるうちに、どんどん理解できなくなってるみたい。頭良い人には湊の行動って理解の範疇超えてるもんね。

「で、色選びなって言われてこれにしたの。」

そういって湊に買ってもらったケータイを見せると、少し考える余裕のできたらしいジンが口を開く。

「んー、そいつは親の遺産で道楽遊びしてるってことか？　そんなん聞いたら両親泣くでぇ。」

「違うよ。ちゃんと自分の生活する分とかはバイトで稼いでるって言ってたもん。」

「バイト？　いい大人が親の遺産とバイトで暮らしとんか？」

呆れたような言い方をしてくるジン。でも、なんか勘違いしてる…。

「大人じゃないよ。いま、高校2年って言ってた。」

「学生でそんなんするってどんなやつやねん…アカン、わしの理解超えとる。」

言いながらぐでーっとソファーに寝転ぶジン。だが、ハッとして勢いよく起き上がり座り直すと、私に尋ねてきた。

「なぁ、そいつの写真ないんか？　どんな面してんのか拝んどこうおもってな。」

…あるけど、見せれるもんじゃない。２枚とも私からキスしてるように見えるんだもん。

「…ない。」

「…今の間はなんや。まぁ、見せたくないなら無理には見んけど。んで、そのあとは？」

言われたので私も今日の話を続ける。

「それで、契約するときに写真とって、手続き終わるまで近くのファミレス？に行ってご飯食べてた。」

「なんで契約に写真なんて撮んねん？　それにあの近くにファミレスなんてないやろ。」

「あぁ、写真はカップｒっ！？　…なんでもない、気にしないで。」

思わずカップルの証明写真を撮った事を言いそうになった。…バレてないよね？話を逸らすためにファミレスの方の話しに移る。

「で、ファミレスだけど。相手はそう言ってたよ？　『昼だしファミレスでいっか』って。」

「いや、あの辺はファーストフードと…チドリ。お前、そこで何食うた？」

なにか思いだしたのか少し真剣な表情で聞いてくるジン。でも、お昼くらいでなんで?そう思いながら答える。

「なにって、お肉だよ。牛肉のステーキって言うの?　私はそれ食べて、相手はハンバーグ食べてた。」

私がそういうとジンは下を向いて、テーブルに向かってハンマーのように拳を振り下ろした。

「なんでやっ!　なんでお前らみたいなガキが、昼間っからそんなとこで仲良く飯食うてんねやっ!」

「えっ?　急にどうしたのジン?　私たち、普通にファミレスでご飯食べただけだよ?」

そう言うと、テーブルを叩くのをやめたジンがゆっくり顔をあげるが、やや涙目になっている…どうして?

「……お前らが行ったんは、ファミレスやない。そこは世間でもわりと有名な高級ステーキハウスやっ!　こっちは昼に1人でカップ焼きそば食うてるっちゅうのに、お前は男と美味い肉食うてきたんかっ!」

ジンは表情を涙目から悔し泣きに変えながら怒ってくる。…でも、湊がファミレスって言ったから知らなかったんだもん。

「その…なんかゴメンなさい。」

「クソッ…食いもんの恨みは恐ろしいでチドリ。」

なんで私が恨まれるのよ、湊に言いなさいよ。そう思ったが言うとややこしくなるので、話を進める。

「で、お昼を御馳走になったあと、ケータイ受け取ってアドレスだけ変えたとこで時間だから帰ってきたの。…あ、ジン。待ち受けってどう変えるの？」

私がそう尋ねると眼鏡をはずして涙を拭いていたジンが答える。

「あ？　簡単や。ケータイ貸してみぃ。」

「うん。」

そう言ってケータイをジンに渡すとこで、渡したら待ち受けを見られることに気付きやめる。

「っ！？　やっぱダメ！　見せたくないから変えたいの。」

「あぁ？　よーわからんけど、ならケータイの袋よこしてみい。」

「袋？　ハイ。」

言われて袋を手渡すと、ジンはその紙袋から本体が入ってた箱を取り出した。

「こういうもんは、使いながら覚えていくもんやけど、最初のうちに分からんことがあったら中の説明書に大概書いてるもんや。それ見ながら自分でやってみい。」

言いながら、箱を開けて説明書を取り出そうとするジン…ん？

「どうしたの？　説明書ちょうだい。」

声をかけるが、固まって動かないジン。だが、徐々にプルプルと体を震わせ始め、口を開いた。

「チ、チドリちゃん？　お兄さん、少し訊きたいんやけど、ケータイ買ってくれたのって青っぽい色した髪の男子かなぁ？」

「そうだけど。なに、その変な喋り方。気持ち悪いよ？」

急に変な口調で話し始めたジンにそう言うが、どうして湊の見た目がわかったんだろう？そう思っていると、ジンが言葉を続ける。

「その男子って眼帯してるかなぁ？」

「そうだけど…ってなんで会ったこともない相手の見た目を知ってるの？」

尋ねると、ジンは話しながら箱から何かを取り出した。

「お、お兄さんにこれはどういうことか説明してくれるかなぁ？」

そう言うジンが見せてきた物の方を見ると…っ！？

「ちょっと、それ返してっ！」

「どういうことや、チドリ！　ケータイ買ってもらうために、今日初めて会った男にキスしたんかお前は！」

「違うっ！　いいからそれ返して。勝手に見ないでよ、まったく！」

言いながら、急いで写真を奪い返す。…失敗した、湊とアドレス変えてるときに、折れたらイヤだからって2人とも箱にしまったの忘れてた。そうしたとこで、第二の同居人が帰ってきた。

「ただいま戻りました…おや？　どうしたんです、2人とも。」

「ちょっと、聞いて下さいよ。チドリったら「五月蝿い、黙って。」《ドゴッ！》」

【タカヤ】にまでバラそうとするジンを急いで黙らせると、それを見ていたタカヤが口を開く。

「おやおや…。ん？　チドリもケータイを買ったんですか？」

「こ、こいつ男に「黙ってって、言ってるでしょ。」《ドゲシッ！》」

しつこいジンを今度は蹴りで黙らせ、箱や袋を回収していく。

「まぁ、いいでしょう。買ったなら、あとで私たちのケータイにも番号とアドレスを送っておいてください。連絡できた方が便利ですからね。」

「わかった。今日はもう休むね、おやすみ。」

「ええ、おやすみなさい。ジンもそんなとこで寝ないで自分の部屋に行きなさい。」

「は、はい…」

タカヤにそう伝えると、回収した物を紙袋に入れてヘッドアクセサリーとヘッドドレスも持って、部屋にもどった。

第十九話　前編（後書き）

後編に続きます。

第十九話　後編（前書き）

前編の続きです。

第十九話　後編

――ラウンジ

寮についてラウンジに入っていくと、ソファーには理事長が1人で座っていた。

「こんばんわ、理事長。」

「やぁ、おかえり。この寮も流石に今日は静かだなー。ちょっと来る日をしくじったかな？　試験勉強は大変結構だが、オジサン少し寂しいかもしれんよ。」

そう言って「ハハッ」っと笑う理事長。だが、理事長は笑うのをやめると不思議そうな表情をして尋ねてくる。

「ところで…時々聞こえる叫び声は何かね？」

「叫び声ですか？」

言われて耳を澄ましてみる。

『うっがー！！　なんだよコレ！？　こんなの習ったおぼえねぇぞ！！』

…完全に順平です。本当に（ｒｙってね。でも、ここまで聞こえてくる叫び声って他の人の迷惑になるんじゃ。そう思いながら、荷物を置いて着替えるため部屋に向かう。

「どうやら、順平が奮闘しているみたいなので、クレームがない限

り放っておいてください。では、僕は部屋にもどりますね。」

「ああ、有里君も勉強、頑張ってくれたまえ。」

そう言われながら、階段をのぼり部屋に戻った。

――自室

部屋に戻り、箱から写真を出すとそれを鍵付きの引き出しにしまう。これがバレたら公子や順平が五月蝿い気がするからだ。それに、いくら僕でも年頃の女の子とキスしてる写真を見られるのは恥ずかしい。

「これでよしっと。」

写真をしまうと、今度は普通の引き出しからメモリーを取り出し、ケータイに差し込む。そして、アドレス帳やお気に入りページ、あとは写メや画像のデータを移していく。

「あとは皆にメールするだけだな。『壊れたのでケータイ変えました。』っと。」

送信して1分も経たないうちに返信がきた。早いな…

―――――――――――――――

Ｆｒｏｍ：公子

Ｔｏ：湊

了解です！

―――――――――――――――

ってか、もしかして私が新携帯で初

めて湊君にメール届けた人？ヤッタネ♪

P．S．もう、ゆかりも部屋きてるからいつでも来てね～

――――――――――――――

…どうしよう、喜んでるとこ悪いけど、電話もメールもチドリが最初だ。これは伝えるべきか？まぁ、自分より早く返信した人間がいたのかって思うだけだろうしな。部屋行ったときに言えば良いだろう。

そう思い、部屋着に着替えるとシャワーを浴びに行き、部屋に戻って筆記具とケータイを持って公子の部屋へ向かった。

――公子の部屋

《コンコン》

『どうぞー』

ノックをすると中から公子が返事をしたので、部屋の中に入る。

「お邪魔しますよっと。やぁ、午前中ぶり。」

「いらっしゃーい。」

「湊君、ちゃんと勉強道具持ってきた？」

部屋に入りあいさつすると、公子とゆかりが出迎えてくれる。２人ともすでに寝巻に着替えてその上にジャージやパーカーを着ているようだ。そう考えてから、とりあえず、ゆかりに返事をする。

「筆記具とルーズリーフは持ってきたよ。」

「いや、それでなに勉強するのよ…」

さっそく、ゆかりから突っ込まれる。でも実際、別に勉強することないしなぁ。そう思ってると、公子から声がかかる。

「まぁ、入り口に立ってないでこっちきなよ。クッションはテキトーに使っていいから。」

言われて公子たちが勉強しているテーブルにつく。座席は、

公子―テーブル―ゆかり

僕

といった感じだ。クッションは近くにあったクラゲっぽいやつを使う事にする。ちなみに、公子はウミガメ、ゆかりはジンベイザメのクッションを使っているが、これは公子のお気に入りの『お魚クッション～海の仲間たち編～』のものだ。ほかにも、古代魚シリーズや寿司シリーズもあるらしいが、寿司は既に魚じゃないと思う。

「そういや、メールで書いてたけど残念ながら最初にメールくれたのは公子じゃないよ。公子は2番目だね。」

「そうなの？　結構頑張ったのになぁ…で、最初の人は何分で返してきたの？」

なん…だと…、そんな返しは予測してなかった。これで、夕方ぐらいにメールしたって言えば「なんで皆に連絡する前にメールしたの

？」って聞かれるに決まってる。くそ、どうしよう…そう思っていると、ゆかりから救いの手がさしのばされる。

「それより、どんなのにしたの？」

「え？　ああ、これだよ。」

そういって、テーブルの上にケータイを置く。すると、ゆかりが尋ねてくる。

「ダイヤルキーかぁ、触っても良い？」

「どうぞー」

それを聞くと、ゆかりは置いてあるケータイを手に取る…っ！？やばい、待ち受け変えてない！

「ちょっと、ゴメン！」

「え、なに？」

バレたらマズイので急いでゆかりの手からケータイを取ろうとしたが、ずれてケータイを弾いてしまう。それがさらにマズイことに、スライドして待ち受けがみえる状態で公子が一番近いところに落ちてしまった。そのため公子がとりに行こうとする。

「急にどうしたの？　とってあげ「Ｙｏｕ　ｋｅｅｐ　ｍｕｓｔ　ｓｉｔｔｉｎｇ！」…え？」

咄嗟に英語でそのまま座っていてくださいと言って、相手が混乱し

ているうちにテーブルを飛び越えてケータイを回収する。…ふぅ、危なかった。

「いや、ゴメンね。ちょっｔ「…ねぇ、湊君。その待ち受けの写真…なに?」…え?」

ケータイを回収できて安心して言っていると、ゆかりが低いトーンでそう言ってきた。いや、待て。まだ、完全に見られたか分からない。様子を見るため、聞き返す。

「…写真ってなんの?」

「…言い訳も誤魔化しもなしよ。その待ち受けのキスしてる写真はなに?」

アウトー、完全にアウトです。ってか、あの僕が弾くまでの一瞬で画面見えてたのか。そう思って現実逃避してると、もう1人の様子もおかしなことになっている。

「へー、その話し私も聞きたいなぁ。席についてゆっくりお話しようよ。お菓子と飲み物もあるしさ?」

そう言ってくる公子の表情は素晴らしい笑顔だ…目を除いては。

「どうしたの?　早く席につきなよ。」

「そうだよ。私たち、ちょうど休憩にしようと思ってたとこだからさ?」

2人とも明るい言い方してるけど、声と雰囲気が一致してません。

背景に「ゴゴゴゴゴゴ！」や「ドドドドド！」といった効果音が見えるようです。ここで座ったら僕の命はない。よって、戦略的撤退を選ぶ！

「あ、ゴメン。ちょっとトイ《《バンッ！！》》…気のせいでした。」

なんで、同時にテーブル叩くんだよー！！ヤバイ、シャドウとかなんかよりマジ怖い。逃げたいけど逃げたら殺されるし…助けて美鶴さん！その願いが通じたのか誰かにドアをノックされた。

《コンコン》

『すまない、私だ。悪いが、湊がどこにいるか知らないか？　今後について話したかったんだが、部屋の方にいなかったんだ。』

やった！天は我に味方せりってね。そう思いながら、返事をする。

「美鶴さん、僕ならここにいますよ。」

『ん？　そうか。すまない、はいるぞ。』

言いながら先輩がドアをあけて入ってくる。

《ガチャ》

「テスト前に悪いが、タルタｒ……取り込み中だったか？」

先輩は入るなり部屋内の重苦しい雰囲気を感じ、そう尋ねてくる。だが、僕も生き残るためにこのチャンスを逃す訳にはいかない。なんとか、部屋をでなくては！

「いえ、テスト勉強していただけです。用って、タルタロスの探索予定の話しですか？」

「あ、ああ。だが、取り込みｔ「いえ、大丈夫です。」…そうか？」すぐに帰ろうとする先輩を引きとめるため、言葉を遮ってでも留まらせる。よし、次はさりげなく話をする場所を変えようと言うだけだ。

「でも、ここじゃなんですし作戦ｓ「気にしないでいいよ、湊君。」…いや、そういうのってしっかｒ「あ、じゃあ私たちもお茶持って作戦室に行くよ。」…。」

そう言って、公子とゆかりがどうやっても僕を逃がさないようにしてくる。ちくしょう…僕がなにしたって言うんだ。仮に僕が誰かと付き合ったりキスしたりしても、それはプライベートな話しなんだから浮気や不倫みたいな倫理に反する行動でないなら、他人にどうこう言われる筋合いはないと思う。そう考えていると先輩が口を開く。

「まぁ、君らがいても問題はない。なら、上へ移動するから勉強道具もついでに持ってくるといい。」

そう言って先輩が部屋を出ていくと、公子とゆかりが荷物をまとめて立ちあがる。

「「じゃあ、行こうか。」」

「…はい。」

僕は2人にそう言われただ従うことしかできなかった。

――作戦室

2人の後ろを歩きながら作戦室に行くと、先輩が紅茶の準備をして待っていた。

「お茶を入れたから、好きに座ると良い。」

そう言われ、僕たちは席につく。席順はこうだ。

公子・ゆかり

美鶴―　テーブル　―

僕

…はい、正直キツイです。そう思っていると先輩が口を開く。

「…で、なにがあったんだ?」

僕たちの方を交互に見ながらそう言うと、公子が僕をジッと見ながら答える。

「湊君が浮気しました。」

……は?何言ってんだこの人?そう思っていると、公子の言葉を聞いて真剣な表情になった先輩が尋ねてくる。

「…それは本当か湊?」

「いえ。それ以前に、僕は彼女がいたことがありません。」

本当のことなので正直に答えると、先輩は「ふむ…」と言って顎に手を当てなにか考えてから、今度はゆかりに質問する。

「岳羽。本当は何があった？」

「…湊君が知らない子とキスしてそれを隠してました。」

訊かれて不機嫌さを隠さずに答えるゆかり。でも、隠すも何もワザワザ言うことじゃないだろ。考えている間に先輩の質問は続く。

「それが発覚したのは？」

「さっきです。新しいケータイを見せてもらおうとしたら、堂々と待ち受けにしてました。」

言いながら鋭い視線を僕に向けてくるゆかり…って、堂々と待ち受けにしてた訳じゃないよ。店員がやったのを変え忘れてただけだ。と、思っていると先輩は再び口を開く。

「ふむ…隠していたのは良くないが、それで君たちが怒るのはおかしくないか？」

「ですよねー「「あ　？」」…すみません。」

先輩が僕の思っていたことを言ってくれたので、思わずこぼしてしまったのを聞かれ2人に睨まれる。…なんだよぉ、明日はテストなんだから勉強してろよぉ……グスン…。

「ってか、思ったんだけど湊君って、こっちに来てから女子の知り合い多過ぎだよね。」

「いや、男子の知り合いも普通にいるけど？」

公子に言われて、そう答える。すると、ゆかりが口を開く。

「じゃあ、書き出してみてよ。男女比で女子のが倍だったりすると思うから。」

えー、なにそれメンドクサイ。ってか、最初に寮で出迎えてくれた少年とか、ベルベットルームの住人とかって書いていいのか？そう思っていると、流石に見ていられなくなった先輩が話しに加わる。

「岳羽。いくらなんでも、それはプライベートに踏み込み過ぎだ。それに湊も年頃の男子だ。恋愛の１つや２つ経験してもおかしくないだろう？」

「盗撮しといて何言ってんですか。それに、湊君は”草摩”です。普通の人と同じに考えないでください。」

先輩がせっかく場の収拾をつけようとしたのに、公子がやや喧嘩腰に言う。ってか、僕は草摩家に名を列ねてるだけで一般人だよ。

「あまり人前でその名を出すのは感心しないが、確かにそうか。…だが、湊はどうなんだ？　ちゃんと、相手の子との事を真剣に考えているのか？」

え、考えるってなにを？そう思っている間も先輩は話を続ける。

「君は私のように世間に知られていないし、草摩のように両親について行って要人に顔を知られているわけでもない。だが、間違いなく将来は私たちよりも要人として扱われる身だ。相手はそのことを知っているのか？」

だから何の話だよ。ってか、勝手に人の将来を決めないで欲しい。

そこでゆかりが話しについて行けず質問してくる。

「あの、すみません。さっきから言ってる”草摩”とか、顔を知られているって何の話ですか？　公子の実家って、なにかやってるんですか？」

「ん？　そうか、君や明彦たちは知らなかったな。草摩はあの草摩家の御息女なんだよ。しかも、宗家のな。」

「あのって…私、草摩なんて知りませんけど？」

先輩に言われてもよく分かっていないゆかりがそう答える。すると、先輩がさらに続ける。

「本当に知らないか？　江戸時代から続く、様々な伝統芸能や茶道・華道の大本山だぞ？」

それを聞いて驚くゆかり。

「っ！？　え、あの草摩本家ですか！？　なんで、そんなとこの娘がＳＰもつけずに庶民の生活してんですか！？」

あまりのことに軽くパニックになるゆかりだが、それも無理はない。

『草摩・草摩家・草摩本家』など人によって様々な呼び方をするが、

草摩家とはこの日本で最も強い力を持つ家なのだ。海外でも『日本で生きたきゃ草摩は敵にまわすな』と言われるほどで、実際に草摩を怒らせて日本から撤退を余儀なくされた企業がいくつもあった。

美鶴さんの実家である桐条も日本ではかなり有名で、世界でも知られるようになっているが、『歴史・家柄・人脈・影響力』などあらゆる面で、草摩には及ばない。桐条ほどの力を持っていても本気の草摩を相手にすれば1年も抵抗できずに潰されるだろう。草摩とはそういう家であり、一族なのだ。

もっとも、公子の父親である47代目当主は優しい人なので余程のことをしなければ怒ったりはしない。前に怒ったのは僕を引き取る前の一族の集まりのときだ。そのときはそこにいた分家の人たちを破門にしたっけ。そう思っていると、ゆかりの様子を見て少し悪戯っぽい表情をした先輩が声をかけてくる。

「で、お相手の方との事は真剣に考えているのですか、48代目？」

「えぇっ！？」

ゆかりは驚き過ぎて口をパクパクしている。…だがまぁ、そうなのだ。宗家の弟筋でしかも有里の家に婿養子になった父親の子である僕が次代の草摩家当主候補筆頭ということになっている。本来なら後継者の資格すらないはずだが、どうやら宗家の血を残すため、兄弟筋で他家の養子になった者でも資格は残るらしい。なので、実質宗家筋の子は公子と僕しかいないので、どちらかが次代当主になることになる。

「で、でも、なんで湊君が当主なんですか？　現当主の実子は公子なのに。」

「あぁ、それは“才”の問題かな。うちの家は性別で序列が優先されることはないんだけど、秀でた者が序列で上になるようになってるんだよ。」

ゆかりの質問に答える公子。それを聞いたゆかりは、さらに聞き返す。

「“才”？　秀でた者って何によ?」

「何にってあらゆる物にだよ。見た目・頭脳・体術・話術・芸能に、っていっぱいあるけど、とりあえず誰もが認める天才のような人が上にくるんだぁ。」

「ふーん。でも、それだとやっぱり公子の方が目立ってると思うんだけどなぁ。言っちゃ悪いけど、湊君って非常識でボケボケなイメージしかないもの。」

なんて失礼なことを言ってくるゆかり。でも、話題がそれていくのでラッキーだと思いながら話を聞いておく。

「だからそれは雰囲気に惑わされてるだけ。非常識ってのもあるけど、いろいろと規格外なんだって。」

「ああ、そう言われたら分かるかも…で、キスの話しに戻るけど。」

なんでだよ!せっかく話が逸れて盛り上がってきてたのに、戻す必要なんてなかったじゃないか。ゆかりってハイスペックなのか馬鹿なのかよく分かんないや。そう思っていると、ゆかりが話を続ける。

「いつから付き合ってるのよ？　ってか、誰とも付き合う気ないって言ってたくせに。」

「あんまり怒らないから言ってみなよ。まぁ、嘘吐いてた罰はうけてもらうけど…。」

ゆかりと公子がそう言ってくるが、先輩はそれを見て頭に手をあててヤレヤレと言った表情だ。でも、なんで付き合ってる前提なんだろ…。

「はぁ…湊。彼女らは、正直に説明しないと諦めないようだ。恋愛は個人の問題なのはわかるが、言える範囲で喋った方が君のためだぞ。」

「えー…ってか、本当に誰とも付き合ってないんだけど。」

正直に言ったのにそれを聞いて、テーブルを叩いて怒る公子。

《バン！》

「だから、ホントのこと言いなさいって言ってるでしょ！　あんまり冗談言ってると、いくら湊君でも怒るよ！」

…もう怒ってるじゃん。

「仮にそれが本当だとして、なんでキスしてんのよ？　公子じゃなくたって信じないわよ。」

呆れか、軽蔑かといった目で僕をみながら聞いてくるゆかり。なんでって…。

「なんでって事故だよ。相手の方を向いたら唇が接触したっていう。」

「そもそもキスできる距離に近付いた理由はなんなんだ？」

今度は先輩がそう聞いてくる…なんだよ、先輩も何気に興味津津じゃないか。

「理由は写真撮るためですよ。店員さんにくっついてって言われたので。」

「「「写真？」」」

僕の話を聞いてハモる3人。そのままゆかりが質問してくる。

「なんの写真よ？」

「ケータイの契約するときにいるからって、店員さんがカメラ持ってきたんだよ。」

「え？　私、身分証は持ってくけど、写真いるなんて言われたことないよ？」

僕の説明を聞いて、公子が不思議そうな顔をして聞き返してくる。だが、説明するのも面倒なのでテキトーに返すことにする。

「まぁ、そんときは必要だったんだよ。」

「……なぁ、湊。その写真をみせてく「お断りします。」…そうか。」

何か考えていると思ったら、そんなことを先輩が言ってくるので即座に拒否する。ってか、そんなにしょんぼりしなくても…。そう思っている間に復活した先輩が口を開く。

「だが、なぜ証明写真をワザワザ他の人と一緒に撮るんだ？　それも、くっついて撮るなんて聞いた事もない。」

「ってか、相手の子はどこの誰でいつ会ったのよ？」

先輩に続けて質問してくる公子。僕はチドリの話をしてから先輩の質問に答えることにする。

「どこの子かは知らないけど、今日ポートアイランドの駅で会ったんだよ？　絵を描いてたから見せてもらったんだ。で、なんやかんやあって写真を撮ったって感じ。」

「コラ、重要なところをなんやかんやで済ますな！」

そんな風に怒ってくるゆかり。…ゆかりってたまに、お母さんとかお姉ちゃんみたいな怒り方するよね。

「ってか、今日会ったばっかりの子にキスして、よく無事だったわね。」

「いや、相手も初めてだったんだってさ。で、帰りに電話でどう責任とってくれるか聞かれて、じゃあ、次に遊ぶ時までに考えといてってことで落ち着いたんだ。」

話を聞いて先輩とゆかりが「ふーん」といった表情をするが、公子

だけ違うとこに喰い付いたようで質問してくる。

「…なんで番号知ってるの？　今日会って早速交換しちゃったってこと？」

「いや、なんでって一緒にケータイ買ったし。」

僕がそう言うと何かブツブツ言い始める公子。

「…一緒……ケータイ…写真……っ！？　てっめぇ、カップル契約したな！　絶対に許さない。オルフェウス、突撃ッ！！」

今までの情報から、僕がカップル契約したことに気付いた公子。そのままブチ切れた状態で立ちあがり、召喚器無しでオルフェウスを呼び出し僕に攻撃してくる。って正気か！？

《ドゴン！》

「ごふっ！」

両手で顔面はガードしたけど、勢いをつけた竪琴の攻撃で僕はソファーからふっ飛ばされる。だが、公子の怒りはまだ治まらないようで、さらにオルフェウスで追撃してくる。

「寝てんじゃないわよ！　オルフェウス、そんな浮気者なんて沈めちゃって！」

命令され、オルフェウスが竪琴を僕のお腹に振りかぶって振り降ろしてきたので、急いで後転して回避する。ってか、洒落になんないぞこれっ。

オルフェウスが攻撃した床を見ると、見事に床板が割れている。これをお腹に喰らったら間違いなく、無事では済まないだろう。骨の2・3本は確実に折れる。

「ちょ、公子やりすぎよ！」

「落ちつけ、草摩！」

「うるさい！　会ったばっかの女とカップル契約するようなヤツが悪いのよ！　オルフェウス、止めをさしなさい。」

先輩たちの言葉も聞かず公子は止めをさしにきた。運悪く、入り口の近くのため、後ろにも横にも逃げれない…なら、こっちもやるしかないよな！

「魔力…注ぐよう……集中…」

そう言ってる間もオルフェウスが僕に迫り竪琴を振りかぶっている。

「これで終わりよ！」

「…っ甘い！」

テオドアの言ってた、魔力による強化をぶっつけで拳に施し、真正面からオルフェウスの攻撃とぶつかり合う。

《《ドゴンッ！！》》

「きゃあっ！」

ペルソナの受けたダメージは、召喚した本人も同じように衝撃とし

て受けることになる。竪琴を破壊されそのままボディーブローを喰らい消えたオルフェウス。そのダメージを公子も受け、その衝撃に声をあげる。

「ふぅ…今回は僕が悪いから許すけど、次に僕に刃を向ければいくら公子でも容赦しないよ？」

息を整えながら、ダメージを受け床に座り込んでいる公子に向かってそう告げる。

「…ゴメンなさい。でも、なんで会ったばっかりの子とカップル契約したの？」

「ああ、相手がケータイ持ってなかったから、絵を見せてくれたお礼に買ってあげたんだよ。で、相手が僕にあんまり負担かけると悪いからって、安くなるそっちの割引契約にしたってわけ。」

「むぅ…それでも納得いかない。」

言って、お腹を押さえながら立ちあがり脹れる公子。すると、先輩とゆかりがやっと再起動し話しかけてくる。

「っ！？　湊、君は無事なのか！？」

「ってか、どうやって素手でオルフェウスを撃破したのよ！？」

先輩もゆかりもどうやら僕がやられると思っていたらしい。だが、結果はむしろ逆。無傷で撃破したぐらいだ。そしてゆかりは、向こうからはこっちに物理攻撃できるが、こっちからペルソナへは物理攻撃どころか触れることが出来ないのに素手で倒したことにも驚い

ている。

「ぶっつけだったけど、拳に魔力を纏わしたんだよ。で、あとは僕の腕力の方が強かったってだけ。」

それを聞いてぽけーっとするゆかりと先輩。すると、さっきの騒ぎを聞いて下にいた人たちが飛び込んできた。

《バンッ！》

「どうした！　敵襲かっ！？」

「みんな、大丈夫かい！？」

「湊がいないけど、何かあったんか！？」

真田先輩、理事長、順平という入ってきた順番で言葉を発し尋ねてくる。そしてそれに、美鶴さんが答える。

「ああ、全員無事だ。まぁ、草摩が腹部に多少ダメージを受けたが自業自得だしな。」

「そうか。で、さっきの音はなんだ？　床板も割れてるし、敵が来たのかと思ったぞ。」

真田先輩が部屋の様子を見ながら、そう質問してくる。

「ああ、あれは草摩が湊に対し怒りを爆発させてペルソナを召喚したんだ。まあ、幸い湊が迎撃したので、被害は床板とペルソナの受けたダメージが返ってきた草摩だけだ。」

「なんスか、それ…ゆかりッチとの逢瀬でも見つけちまったのか？」

「…ゆかりじゃないもん。今日会ったばっかの子とキスしてケータイのカップル契約してくる湊君が悪いんだよ。」

先輩の説明を聞いて、公子に理由を尋ねた順平に公子がそう答える。ってか、あんま話を広めないで欲しい。それに話をきいて理事長が「…ほぅ。」と言ってニヤニヤしてるのがムカつく。

「なんだとっ！？　…湊、流石にオレもキレちまったわ。屋上行こうぜ。」

「なにを馬鹿なこと言ってるんだ…。だが俺も、驚いたな。有里はてっきり岳羽か草摩と付き合ってるものだと思っていた。」

「いや、僕は誰とも付き合ったことないですよ。それに付き合う気もないですし。」

真田先輩が誤解しそうなので先に否定しておく。ってか、順平はいつまで僕を睨んでるんだよ…。そう思っていると、真田先輩が再び口を開く。

「そうなのか？　それにしては、学校でも基本的に女子といるとこしか見ないんだが…。」

「「「「……。」」」」

先輩がそんなことを言うから、真田先輩と理事長以外の全員が無言で僕の方を見てるじゃないか。

すると、ここで美鶴さんがやや真剣な雰囲気で話をする。

「…実を言うと私も多少、気になっていたんだ。友達のようだが、あまりに校内で女子といるとこしか見ないことをな。」

「ですよね。やっぱり、さっき私が言った出会った人間の男女比見ましょうよ。」

「それ、私も賛成。」

「オレっちも、異議なし。」

…なんで、みんなして僕の交友関係をそんなに気にするんだよ。完璧にプライバシー無視だろ。そう思っている間に、理事長がホワイトボードを持ってきた…コイツ。

「まぁ、生徒のことを知っておくのも教師の仕事だからね。さ、書きたまえ。」

言いながら笑顔でペンを渡してくる理事長。だが、僕になんのメリットもないじゃないか。そう思い抗議する。

「プライベートなものだし、僕にはデメリットしかないので嫌です。」

「よし。ならオレらもなにか1人1人に、オマエにとってプラスになる条件をつける。これならどうだ?」

そんなことを言ってくる順平。でも、この人たち明日がテストだってわかってるのか?そう思いそれを告げる。

「そんなことより、みんなテスト勉強しないで良いんですか？」

「「「こっちの方が重要。」」」

僕の言葉を聞き、そう言い返してくる２年トリオ…馬鹿だろ、こいつら。んじゃ、無理難題を言って諦めさすか。

「…じゃあ、女子３人は僕以外誰もいないとこでガチ告白。あ、それ録画するから。で、順平と真田先輩は今日一緒に寝て下さい。どっちの部屋でも構いませんので。理事長は今月中、ダジャレ一回言う度に僕の貯金箱に５００円入れて下さい。」

そう言うと、驚くみんな。ゆかりが真っ先に文句を言ってくる。

「ちょ、なんでそんな恥ずかしいことしなきゃいけないのよ！」

「湊、それがどう君にプラスになるのか教えてくれ。」

美鶴さんも焦りながら質問してくる。

「え？　だって、こんなレベル高い容姿の女子たちが、恥ずかしそうに好きって言ってくれるんですよ？　他の男子なら発狂しそうなほど羨ましいことじゃないですか。」

「そっちはいいが、なぜ俺と順平が一緒に寝なければならんのだ！　お前にとってなんのメリットもないだろう。」

今度は真田先輩がそう言ってくるので、それにも答える。

「いや、単なる嫌がらせですよ。女子以外は。」

「湊、テメェー！」

僕に、単なる嫌がらせと言われ順平が怒ってくる。ふぅ…じゃあ、別条件でいくか。

「なら、テストで僕より上の順位をとった人だけに無条件で教えましょう。ただし、名前をリストのように書き連ねるだけで、どこで会ったとか、どんな人かっていう詮索は無しです。それと、キスした相手は仮名で書くのでそのつもりで。これなら、勉強を頑張れるし、順位発表の夜までに会った人物も追加するから、より多くの情報が得られます。」

それを聞いて美鶴さんが質問してくる。

「…それは同じ順位の場合は見れないということか？」

「ええ、そうです。理事長は達成者が3人以上だったら見ていいですよ。」

説明を終えると途端に喜んでやる気を出す順平。

「しゃっー！　これなら、オレでもいけそうだ。なんてたって、湊は1度も授業中に起きてたことがないからな。オマケにノートも教科書も開いてないっていうんだから、負けるわけがねぇぜ！」

順平は言いながら部屋に戻っていく。そして、それを聞いてた真田先輩も自信をつけて戻って行った。

「よっし、なら頑張って勉強しよっと。行こうゆかり、湊君。」

「うん。…あ、そういえば湊君。敷布団持ってこないと寝れないよ？　私の部屋にあるからも運んじゃってよ。」

部屋に戻りながらそう言ってくるゆかり。ならばどうせ通り道だし、先にゆかりの部屋によってから公子の部屋に行くことにする。

――ゆかりの部屋

公子は先に部屋に行き、僕とゆかりは敷布団を運ぶためゆかりの部屋にきた。現在は、ゆかりが収納から布団を出している。

「よいしょっと。…はい、布団はこれね。かける物はいる？」

「ん？　一緒に寝てくれるならいらないよ、暑いし。」

僕が出された布団の上でゴロゴロしながら言うと、苦笑しながらゆかりが答える。

「なに馬鹿言ってんの、さすがに布団は別よ。じゃあ、薄いタオルも出しとくわね。」

「うん、ありがとう。」

返事をすると、ゆかりはタオルを収納から出しながら声をかけてくる。

「…少ししか見えなかったけど、可愛らしい子だったじゃない。」

「え？」

「ゴスロリって言うの？　湊君ってそう言うのが好きなの？」

タオルを取り出してこっちに振り返りながら聞いてくるゆかり。別に僕の好みって言われてもないんだけどな。

「別に特定のフェチみたいなのはないよ。ま、似合ってれば可愛いと思ったりするけどね。」

言うと、黙ってなにかを考えてる様子のゆかり。少しすると、やや不安げな表情で尋ねてきた。

「…あのさ。もし、私が一緒にケータイ買いに行って、カップル割しようって言ったら、キスしてくれてた？」

「…それはどっちが目的？　割引のためって割り切ってるなら良いけど、キスして欲しくてカップル割するっていうんならそれはしないよ。そういう、ズルイのは嫌だからね。」

尋ねてきたゆかりの目を見て真剣に答える。

「そ、そうなんだ…。」

「うん。好きとか恋とかっていうのはよく分かんないけど、それってズルイことしてそん時だけ満足するようなものじゃないでしょ？」

「…そうだね。ゴメンね、変なこと聞いて。いま聞いた事は忘れちゃって。それより、早く部屋行こう？　公子が待ってるし。」

言いながら布団とタオルを畳んで運ぶ準備をするゆかり。…よくわかんないけど、支えにしてる僕が他の人のとこに行くと思って不安

なのかな?そう思って、準備しているゆかりを後ろから抱き締める。

「ふぇっ!?　え、なっ何!?　急にどうしたの!?」

「…落ち着いて。僕は誰かのとこに行ったりしないから。ゆかりが支えだと思ってくれてるなら、僕は近くにいるから。」

そう言って、安心させるようにギュッと力をこめて抱きしめると、ゆかりも落ち着いてきたのか大人しくなる。

「……本当は自分でもよく分からないの。写真をみたときは、単純にショックだった。でもそれが、自分の支えになってる湊君を他人に取られることのショックなのか、単なる嫉妬なのか分からなかった。」

「…いまは?」

僕がそう尋ねると、ゆかりは静かに答える。

「…今もわかんない。でも、抱きしめられてると、落ち着くし嬉しいって思う。」

そう言ってゆかりは「フフッ」っと笑うので、僕も笑いながら「そっか。」と返す。

それから少しの間、抱きしめたままで過ごし、離れると公子を待たせていたので少し急いで布団を持って部屋へ向かい、あまり遅くならないうちにみんな寝た。

第十九話　後編（後書き）

はい、これで後編も終わりです。原作設定殺しとはチドリのことですね。でも、ちゃんと順平×チドリの原作話もするので安心してください。それと、今後は『湊・公子・チドリ・Ｎｏ』の４視点でいきます。湊はＲｅ：Ｃａｌｌ、公子は原作、チドリはストレガ、Ｎｏはこの３人がいないときの視点を進んでいく感じです。ストレガって良い設定なのに二次創作じゃ、あんまり掘り下げられてないんですよね～。参考にしたかったのになくて必死こいて書くはめに…。

そういえば、今回の草摩家の設定はどうですかね？最初から決めてたんですが、湊に設定つけすぎですかね。まぁ、まだ増えるんですが。

第二十話（前書き）

今章で初めて1万文字以下の話です。それでも、６７００文字ぐらいなんで前の二章よりは短編が短編じゃないっていう…

第二十話

５／２３（土）
朝――自室
今日で１学期の中間テストは終わりだ。いろんなことがあってテスト勉強は日曜の夜に提出課題を終わらせただけだ。他の人は僕の交友関係の主に女子の部分を知りたいらしくかなり勉強しているようだ。そんなことを考えながら、とりあえず準備をして学校に向かった。

――校門
「よお、有里。」

学校に向かっていると、校門のとこで真田先輩に話しかけられた。

「おはようございます、先輩。」

「試験も今日で最終日だな。俺は今日の検査で医者からＯＫが出れば、ようやくの復帰だよ。ま、結果が出るのは月曜だがな。…そこで頼みがあるんだ。今までお前と草摩に任せていた、タルタロスの探索日や、探索時の先導。これをこの後も、お前らに任せようと思う。見る限り、なんとか大丈夫そうだからな。その分、俺は力の上達に専念出来る。いいだろ？」

先輩はそう言う。んー、だから僕に任せてたらダメだって言ってるのになぁ。まあ、公子メインにシフトしていけば良いかな。そう思いながら返事をする。

「別に構いませんよ。」

「美鶴にも話してある。じゃあ、頼んだぞ。」

それだけ言うと先輩は走って行った。僕はそのまま歩いて教室に向かいテストを受けた。

放課後――教室

今日で試験が終わった。久しぶりに自由な時間ができたので、今日は舞子ちゃんに会いに神社へ向かう事にした。

――長鳴神社

神社の境内に入って見回すと、舞子ちゃんは1人でブランコに乗っていた。僕はそのままそっちに向かい声をかけた。

「やあ、久しぶり。」

「おにーちゃん！　来てくれたんだね！　舞子、待ってたんだよ！　ね、ね、遊ぼ！　遊ぼ！」

僕の顔を見るなり嬉しそうにそう言う舞子ちゃん。こんなに喜んでもらえるとは、思ってなかったな。とりあえず、今日はそれが目的できたんだ。そう思い返事をする。

「うん、今日はそのつもりで来たんだ。何しよっか？」

そう言うと舞子ちゃんは「やったー！」と言って嬉しそうにした。

僕らはそのまま、公園の遊具で一緒に遊んだ。

――神社内公園

あらかたの遊具で遊び終えると、舞子ちゃんは次はなにをしようか

考えている。

「次はね、次は…何して遊ぶ？　おにいちゃんが決めて！　何したい？」

「んー、鉄棒とか？」

「それもうやったじゃん。ちがうのがいい！」

そう言ってむくれたかと思うと、少しして暗い表情になる舞子ちゃん。どうしたんだ？

「帰りたくない……お家、楽しくないの。まだ、おにいちゃんといたいな…」

舞子ちゃんは寂しそうな顔でそう言うので訳を聞く。

「それはご両親のことが原因かな？」

「…うん。あのね、舞子のお父さんと、お母さんね…いつもケンカばっかりしてるの。それで今度…りこん…なんだって…舞子がね、りこんやだって言っても、聞いてくれないの…きっと、舞子のことなんて、どうでもいいんだよ……。ねえ、また遊んでくれるよね？　舞子とおにいちゃん、おともだちになったもんね。…おにいちゃんのこと、まってるから…」

泣きそうな顔でそう言ってくる舞子ちゃん。これは放っておけないな、よし。そう思い帰ろうとする舞子ちゃんに声をかける。

「ねー、舞子ちゃん。僕少しおなか減っちゃったから、一緒にワッ

クに来てくれない？」

僕がそう言うと、キョトンとした顔をした後、舞子ちゃんは笑って返事をする。

「うん、いいよ！　わーい、おにいちゃん、大好きー！　今日の日替わりバーガーは何かなー。」

舞子ちゃんはとても嬉しそうだ。ワイルダック・バーガーに行くことになった。

――巌戸台駅前商店街“ワイルダック・バーガー”

ワックに着くと、僕は普通のハンバーガーのセットを頼み、舞子ちゃんには日替わりバーガーの玩具付きのセットを買ってあげて席につく。

席について食べ始めると、舞子ちゃんが笑顔で話しかけてきた。

「…美味しいね！　舞子、外ゴハン大好き。だってね、外ゴハンだと、お父さんとお母さん、ケンカしないもん。」

…この子は両親にただ仲良くしてもらいたいだけなんだな。と、考えてるといつの間にか暗い表情になっていた、舞子ちゃんが尋ねてくる。

「前はね、お父さんとお母さん、いつも仲良しだったんだよ！　なんで、りこんしちゃうの？」

「そういうのは本人たちにしか分からないよ。だから、ご両親に聞くしかないね。」

「ちゃんと、聞いたもん…でも、子どもはカンケーないって…」

舞子ちゃんは今にも泣き出しそうだ…まぁ、親も自分らのことでいっぱいなんだろうな。でも、だからって…

「舞子、りこんしないでってお願いしてるのに！　お父さんもお母さんも、舞子のことキライなんだ！　い、いやだああー！　りこんはいやー！　うぅ…うわあぁぁぁん！　うわあぁぁぁん！」

そう言って、舞子ちゃんは大声で泣き出した。……うん、少し話をしに行くかな。行動を決めると、泣いてる舞子ちゃんをなだめることにした。

「泣かないで舞子ちゃん。ハイ、これで涙を拭いて。」

いって、ハンカチを渡す。すると、受け取りながら舞子ちゃんが口を開く。

「ひっく…おにいちゃん…ごめんね、舞子、泣いたら、めいわくだよね…舞子、もう泣かないよ…」

言いながら舞子ちゃんは精一杯、笑おうとしている…強い子だね。

「もう、帰らなくっちゃ…おにーちゃん。遊んでくれてありがと！」

「僕も楽しかったから気にしないで。それより、このあと少し舞子ちゃんの家に行ってもいいかな？」

「え？　いいけど、遅いから家では遊べないよ？」

そう言ってくる舞子ちゃんに「それでも良いよ」と言って、家に向かう事にした。

――舞子ちゃん自宅

「ただいま～。」

舞子ちゃんに案内され、舞子ちゃんの家にきた。だが、玄関に入ったとこで奥の方から言い争う声が聞えてくる。

『そうやっていつもあなたはっ！！』

『お前だっていつもそうだろうがっ！』

その声を聞いて哀しそうな顔をする舞子ちゃん。とりあえず、案内されて声のするリビングに向かった。

「ただいま～。」

舞子ちゃんがそう言ってリビングに入ると、こっちを見て僕に気付く父親。

「ん？　舞子、その人は誰だ。」

「お友達だよー、送ってくれたの。」

そう説明されて、興味がなくなったのか僕の退席を促してくる。

「そうか…送って頂きありがとうございました。もう大丈夫ですのでお帰り下さい。」

「いえ、今日はご両親に少しお話があってきたんです。」

「私たちに話し？」

僕の言葉を聞いて、母親が聞き返してくる。

「ええ、失礼ですが離婚についての話です。」

それを聞くと父親が表情を怒りに変えて舞子ちゃんに向かって行く。

「お前は、外でもそんなことを言ってるのか！」

そう言って手を振り上げると、舞子ちゃんの顔を叩こうとする。

《バシン！》

「っな！？」

「……話は最後まで聞けよ。」

叩こうとした手を、すんでのところで掴まれ驚く父親に冷たくそう告げる。すると、父親は驚いたまま僕に話しかけてくる。

「な、なんなんだお前は！　これは家族の問題だ、他人が口をはさむな！」

言いながら掴まれた手を振りほどこうとするが、ビクともしない。

僕はそのまま口を開く。

「ああ、確かに家族の問題だな。…でも、だから舞子ちゃんは僕に相談してきたんだろ？　関係ないと言って、両親が何も教えてくれないから。」

「そ、それは私たち親の問題に、子供を巻き込みたくなかったから言ったのよ。」

急に雰囲気の変わった僕に驚きながら、母親がそう言ってくる。…子供を巻き込みたくないねぇ。

「ふん、一番の被害者に対して巻き込みたくないだと？　よくそんなことが言えたな。」

「被害者？」

父親が聞き返してくるので、僕も続ける。

「毎日のように言い争う姿を見せられ、理由を聞いても関係ないと言われる。…本人は両親にただ仲良くしてもらいたいだけなのに。この子はそんな気持ちを溜めこんで1人神社で遊んでいたんだ。」

言われて舞子ちゃんの方を見る両親。舞子ちゃんはさっきから俯いてる。

「お前たちが離婚する理由なんてどうでもいい。ただ、それに巻き込まれる一番の被害者は子供なんだぞ！　心に傷を負い、将来は片親ということで嫌な思いをするかも知れない。そんな被害者に対し、関係ないなどとよく言えたなっ！」

そう強く言われ、明らかに動揺し始める両親。俯いてた舞子ちゃん

はいつの間にか涙をポタポタと落としている。

「…この姿をみて、まだ関係ないと言って訳も話さず言い争いを続けるのか？」

そう聞くと舞子ちゃんに駆け寄り抱きしめる母親。

「ごめんね、お母さんたちが悪かったわね。舞子ごめんね。」

「うぅ…うわぁぁぁぁん！　うわぁぁぁぁん！」

抱きしめられると声をあげて泣き始める舞子ちゃん。それを見て父親も少し俯いてから顔をあげたので、掴んでいた手を離す。

「…すまなかった。今日この後、舞子が落ち着いたら訳を話すよ。」

「ええ、そうしてあげて下さい。彼女は強い子です。ちゃんと理由を話せば、納得できなくてもあなた達のことを考えて我慢するでしょう。だから、そのときは離婚しても両親は両親だから、好きなときに会いに行けば良いことを教えてあげて下さい。」

「ああ、わかったよ。今日は本当にありがとう。」

そう言って、父親は頭を下げてきた。僕はそれを見ると、そろそろ時間なので帰ることにする。

「じゃあね、舞子ちゃん。ご両親の話を聞いて自分なりにしっかり答えを出すんだよ？」

「グス…うん。今日はありがとう、おにいちゃん。またね。」

「うん、またね。」

僕はそう言って舞子ちゃんの家から出ると、寮に帰っていった。

余談だが、後日、舞子ちゃんと神社で会うと母親についていくことになったらしい。なんでも「お母さんは1人じゃなんにもできないから。」だ、そうだ。そしてその時の話を少ししようと思う。

某日

昼――長鳴神社

街を歩いていたら舞子ちゃんに呼ばれて、神社まできた。すると、舞子ちゃんが嬉しそうに話し始める。

「ねえ、おにいちゃん！　ジャングルジム登ろー！　シーソーもやってね、缶ケリとね…あとね…ぜんぶ！　ぜんぶやろっ！」

そして、舞子ちゃんとたくさん遊んで過ごした。今は2人でジャングルジムの上に座っている。

「あーもう、つかれちゃった！」

「フフッ、いっぱい遊んだからね。」

僕は舞子ちゃんに返事をしながら笑いかける。

「これだけ遊んだんだから、もう舞子のこと、忘れないよね！」

そう言って、舞子ちゃんは寂しそうに笑っている…そういう事か。

今日はやけに甘えてくると思ったけど、今日行くんだな。そう考えていると、舞子ちゃんが口を開く。

「今日、行くんだ…おひっこし…」

俯きながらそう言うと、今度は顔をあげて話し始める。

「あのね、お父さんが言ってたの。舞子はずっと、お父さんの子どもなんだって…はなれて住んでも、かぞくのままだって…だから舞子、寂しくなんかないよ！」

そういって「ニッ！」と元気よく笑顔をみせる舞子ちゃん。あのお父さん、ちゃんと僕の言ったこと伝えてくれたんだな。そう思っていると、舞子ちゃんが再び話し始める。

「かぞくって、すごいよね。…いつか舞子も、かぞくを作るのかな？」

「うん、きっと素敵な家族を作れるよ。」

「そうだよね！」

舞子ちゃんは僕の言葉を聞いて、とても喜んでいる。すると、今度は少し言いづらそうに舞子ちゃんが僕に尋ねてくる。

「じゃ、じゃあ…おにいちゃん…舞子が大きくなったら…お嫁さんにしてくれる？」

っ！？…フフッ、まさか告白されるとは思ってなかったな。

「うん、いいよ。そのかわり、素敵な女性になるんだよ？」

「ほんとー！？　やくそくだよ！！」

僕の返事を聞いて舞子ちゃんはとても嬉しそうだ…。そして、返事をきくと舞子ちゃんはポケットから何かを取り出した。

「これ、持ってて。…舞子が作ったの。」

ビーズの指輪を受け取った…まさか、プレゼントまであるとはね。こっちもお返ししなくちゃ。そう思い舞子ちゃんに話しかける。

「ありがとう。じゃあ、僕もお返しにあげるね。まぁ、これはあるところをちょっと探検してるときに手に入れた物なんだけど。」

言いながら白金の腕輪に左手をかざし、１つの指輪を取り出す。これは“宝玉輪”、タルタロス探索中に宝箱からゲットしたものだ。オパールのようなキラキラした謎の素材でできている。

それを「ハイ」といって舞子ちゃんに渡す。

「うわぁ、すっごい！　前の石もキレーだったけど、この指輪はもっとキレー！　ありがとう、おにいちゃん！　いつか、本物のゆびわを、こーかんしようね！」

舞子ちゃんは顔を赤くしている…舞子ちゃんからプロポーズまでされたようだ。最近の子はけっこう積極的なんだね。と、心の中で苦笑すると、舞子ちゃんに話しかけられる。

「目、閉じてね…」

「？？　…うん。」

言われたので目を閉じる。

《ちゅっ》

…！？頬にキスをされた。ビックリして目を開けると、舞子ちゃんはすでに下に降りていた。

「あははっ。おにいちゃんったら、てれないの！　じゃあ…またね。きっとまた会えるよね！　おにいちゃん！」

そういうと舞子ちゃんは、寂しさを紛らわすかのように、勢い良く走り去った…。

走っていく後ろ姿が見えなくなったとこで、僕もそっちを見るのをやめる。

「フフッ、ビックリしたなぁ。また会えるといいな。」

言いながらジャングルジムの上で空を見ながら寝転がる。

『最低でも、あと１０年は待ちなさいよ？　じゃないと、捕まるわよ。』

「…急に変なこと言わないでよ。」

いきなり変なことを言いながら話しかけてきた彼女にそう返す。

『なによ、事実じゃない。…それにしても、貴方って女子の方から

キスされてばっかりね。あのチドリって子のときも向こうからだったじゃない。』

「いや、あれは…『ああ、そのあと貴方が口にしてたわね。初めて会った子に告白もせずいきなりキスとは驚いたわ。』…っく。」

クスクス笑いながらからかってくる彼女。ちくしょう、やっぱり見てたのか。そう思っている間も彼女は話しかけてくる。

『でも、どうするの？　さっきの子、間違いなく良い女になるわ。中学・高校と上がっていけばゆかり達並みにモテるでしょうね。』

「…それで？」

『はぁー…そうなっても、あの子の心には貴方が居続けるっていうのよ。』

溜め息を吐きながらそう言うと、さらに話を続けてくる。

『カッコよくて、優しいおにいちゃん。おまけに両親の問題も離婚は止められなかったけど、解決してくれた。そして、最後に魔法で出した素敵な指輪のプレゼント…ってね。これを超える男なんている訳ないじゃない。貴方もとんでもないことしたものね。』

言って再びクスクス笑ってくる。…なんだよ、こっちは普通に遊んで困ってたから助けただけじゃないか。

「子どものときの約束だよ？　それを覚えていても、そのままいるなんてないでしょ。」

『湊もまだまだ、甘いわね。むしろ、ああいう子は理想の貴方に近付くために努力を惜しまないはずよ。どうするの、高校卒業と同時に約束を果たしにきたって言われたら？』

それはないだろうと想像してみるが……やばい、ありそうだ。

『ま、自業自得ね。子どもだと思って、サービスし過ぎたのが仇になったわね。ご愁傷様…いえ、おめでとう…と言うべきかしら？』

「う、五月蠅い。…そんときはそんときで、解決するから良いんだ。」

我ながら情けないことを言って、この場を切り抜ける。

『ふーん、そう。でも、これで嫁候補がまた増えたわね。「英雄、色を好む」って言うけど、随分と可愛い子ばっかり集めたじゃない。』

「…は？　嫁候補って、告白なんて舞子ちゃんくらいにしかされてないけど？」

実際に身に覚えがないのでそう言うと、彼女が『フフン』と笑いながら言ってくる。

『ゆかり・公子・風花・理緒・結子・千尋・チドリ・舞子・エリザベス…まぁ、この他にも貴方に好意を寄せている女子は大勢いるわ。それに名前をあげた中には自覚なしの人、ちょっと良いかなぐらいに思ってる人って好意のレベルもバラバラだけどね。』

「う、嘘だっ！！　いま、言ったのは仲の良い異性の友達の名前を

あげただけじゃないか。それに僕は誰とも付き合う気はないんだ！」

少しビックリしたため、動揺を隠せないがなんとか言いたい事を言い切る。すると、彼女が少し真剣な口調で話してくる。

『…なら、態度を改めなさい。安心させるために抱きしめたり、恋人と間違えられたときに光栄だなんて言ったりしたら、どんな子でも期待していいのかなって思ってしまうわ。』

「むぅ…ホントに？」

『嘘吐いてどうすんのよ…。』

呆れたようにそう言ってくる彼女。だけど、そうなのか…可愛いとかって思う事はあるけど、好きってのはよく分からないからなぁ。恋愛とかって難しいんだな。そう考え1人で納得する。

「わかった、教えてくれてありがとう。大好きだよ。」

『…言った直後にこれって、天然なのかしらね。けど、私も愛してるわ、湊。』

お互いにそう言ったあと、僕は寮に帰っていった。

第二十話（後書き）

あ、某日ってのは後日談って感じです。なので、未登場のキャラの名前も出ています。それと、舞子は早期退場させないと1人で公園で遊んでて可哀想なので詰め込みました。急展開ですみません。

第二十一話（前書き）

今回と関係ないですけど、部活マネージャーの西脇さんの下の名前は『結子』って書いて『ユウコ』です。『ユイコ』じゃないです。『ケツコ』なんて特に違います。これ、公式なんで覚えといてください。

第二十一話

5／24（日）
朝――自室
今日は学校が休みだ。試験も終わってパァっと遊ぶ人もいるが、僕は寮でゴロゴロしてる予定だ。いや、正確には“だった”だ。テキトーに朝食を作って食べてると、ゆかりや公子がやたらコッチを見てくるのだ。しかも、自信ありげに。

どうやら試験でかなり手応えがあり、すでに勝ったと思っているのだろう。まぁ、僕は課題くらいしかできてないからね。これは常にトップの美鶴さん含め女子には話すことになるかもしれないな。

そんなことを考えながら、視線から逃れるために寮を出てブラブラすることにした。

昼――ポートアイランド駅
とりあえず、寮から近いポロニアンモールでは順平がクラスの男子とカラオケで騒ぐと言っていたので、出会わないよう遠くの駅にきた。駅から出てまわりを見回すと見覚えのある姿を発見したので、そこに向かう。

――駅前ベンチ
「キミ可愛いね。僕と一緒にお昼でも食べない？」

「……。」

うっわ、ガン無視だよ。前回も思ったけど、こうやってよくナンパされたりすんのかな？まぁ、話が進まないから普通に声をかける。

「…キス。」

《ガタッ》

ボソっとそう言うと、ビックリした顔でチドリが僕の方を見てくる。
あ、なんか表情が怒りに変わった…そう思ったとき、チドリが口を開く。

「…っく。変態、キス魔、強姦魔、あっち行け。」

「いや、そこまで酷くないでしょ。それにキスしてきたのはチドリが先だし。」

場所は頬とはいえ確かにキスしてきたのは向こうだったので、言い返せず下を向いてプルプル震えるチドリ。…この子、面白いなぁ。

「で、なんの用なのよ。私、これでも忙しいんだけど。」

「いや、なんか寮に居づらくてさ。あの日、帰ってから待ち受けみられて尋問されたんだよ。それで最終的に、僕のこっちに来てからの交友関係をリストにしてみられることになったんだぁ。」

やれやれと言った感じに僕が言いながら横に座ると、チドリは黙って聞いているので、話を続ける。

「で、それを見れる条件が『テストで僕より上の順位になること』にしたんだけど、自信あるみたいで皆やたらコッチを見てくるんだ。だから、夜まで帰らないつもりで出てきたんだよ。」

話を聞いて「ふーん」と言いながら、絵を描く作業に戻るチドリ。
そういえばお詫びどうするか決めたのかな？そう思い聞いてみる。

「そういえば、お詫びは決めた？」

「…まだ。」

少し手を止めたかと思うと、そう答えてまた絵を描き始めるチドリ。

「何か無いの？　これ買って欲しいとか、ここで遊びたいとかさ。」

「別にない。」

「ふーん。」

今日はやけに素っ気ないけど、こっちが最初に会ったときに近いし、
これが素なのかな？

「…チドリー。」

「…なに？」

「お昼食べた？」

「…まだ。」

今度は手を止めずにチドリは答える。ってか、まだならまた一緒に
行きたいな。１人で食べるのもつまらないし。

「一緒にお昼行かない？」

「なんで？　勝手に行けばいいじゃない。」

「なんでって、一緒に行きたいからだけど？」

質問に答えると、それを聞いて黙っているチドリ。少しすると、絵を描きながら口を開く。

「そういえば、この前家に帰ってから同居人が教えてくれたけど、前に行ったとこファミレスじゃなくて、高級ステーキハウスなんだって。」

「そうなの？　違いがよく分かんないけど、そうなんだ…。」

「うん。昼間っから男と美味いもの食ってきたのかって泣かれた。」

…どこに泣く要素があるんだ。ってか、同居人ってことは家族じゃないのかな？そう思い聞いてみる。

「チドリって何人暮らし？」

「え？　…3人だよ。女は私だけだけど、他2人は少し年上なの。」

絵を描きながら質問に答えてくれるチドリ。でも、あんまり進んでないな。

「ねぇ…何で描いてるフリするの？」

僕がそう言うと《ビクッ！》とするチドリ。ああ、遅いんじゃなくて本当に描いてなかったのか。

「で、一緒にお昼来てくれないの？」

「…だって、今日もお金持ってきてないもん。」

そう言って、立てた膝に置いてたスケッチブックを畳んで、普通に座り直すチドリ。

「え、そんなの気にしてたの？　男が女性を食事に誘ったら、女性は払わなくて良いんだよ。知らないの？」

それを聞くと顔をあげて僕の方をみてくるチドリ。

「それ、ホント？」

「絶対じゃないけど、僕的には本当だよ。」

僕の言葉を聞いてから、少し考えて「…じゃあ、いく」とチドリが言ったので靴を履かせてお昼を食べに行くことにした。

――イタリアンレストラン

前回と同じだと飽きると思ったので、駅から少し歩いたところにある、安い価格と豊富なメニューの美味しいランチで女性に人気のイタリアンレストランにきた。ランチタイムとはいえお昼時を少し過ぎているので待たずに座ることができた。

「ハイ、メニュー。」

「ありがと。」

そういってメニューを受け取り、料理を選ぶチドリ。僕もメニューを見ながら話しかける。

「チドリの服ってさ。布面積多くて暑そうって思ったけど、胸元けっこう大胆だよね。」

僕がそう言うと再び《ビクッ！》となって、メニューで胸元を隠し怒ってくるチドリ。

「変態、どこみてんのよ！」

「トータルで見てるけど？　別に胸ばっかりみるほど、欲求不満じゃないし。」

そういうと、たまにこっちを睨みながらメニューを眺めに戻るチドリ。当然、選んでる間はメニューで胸元が見えないようにしている。

少ししてから選び終えると、僕らはそれぞれのパスタと、ピザを1枚頼むことにした。そして、料理が来るのを待ちながら会話をする。

「…ねぇ、湊。なんで私に構うの？」

テーブルに視線を落としたまま尋ねてくるチドリ。

「なんでって…一緒に遊びたいからだけど？」

「どうして遊びたいの？」

どうしてって…けっこう難しい質問してくるなぁ。そういうのって、なんとなくだから明確な理由を聞かれても困るんだよね。とりあえ

ず、感覚的なものであることを伝える。

「明確な理由はないよ。誰かと遊びたい、誰かと一緒にいたい。そういうのってハッキリとした理由ってないと思うんだ。ただ単に、この人と一緒にいれば楽しいって思うから…理由なんてそんなもんだよ。」

僕の話を聞くとチドリは「ふーん、そっか」と、また分かったのか分かってないのか判断に困る返事をした。するとそこで、料理がきたので食べながら話をすることにする。

評判通りけっこう美味しいな。そう思ったので、チドリにも聞いてみる。

「美味しい？」

「え？　う、うん。」

この店の料理はどうだって聞いただけなのに、少しテレながらチドリは答える。あ、違うや。なんか嬉しそうに食べてる。気に入って食べるのに集中してるときに話しかけられたから、それでテレたのか。

「フフッ、可愛い。」

「う、五月蝿い。黙って食べなさいよ。」

思わずこぼした言葉が聞えていたらしく、チドリは言い返してくる。まぁ、気に入ってもらえてなによりだ。そう思っているときに、頼んでいたピザも運ばれてきたので、テーブルの真ん中において切る。

「ハイ、お皿。」

「ありがとう。」

切り終わると、取り皿をチドリに渡してピザも食べ始める。ってか、チドリって赤好きみたいだけど、辛いのダメそうだな。そう思いながら、自分の水を飲み干す…よし。

「すみませーん。」

「ハーイ！」

飲み物がなくなったので、店員を呼ぶ。

「あの、オレンジジュース1つください。チドリは飲み物いる？」

「ううん、いらない。」

「じゃあ、それだけで。」

注文をきき終えると店員さんは去っていった。そしてそこで、ピザも食べ始めたチドリに声をかける。

「チドリはタバスコいらないよね？」

「え？　…なんで、そう聞くの？」

普通だったら相手の好みが分からなければ、「タバスコいる？」と聞くのに、使わないことを前提に問いかけた理由を聞き返してくる

チドリ。

「だって、辛いのダメそうな見た目じゃん。」

「っ！？　つ、使うわよ。貸して。」

見た目で子ども扱いされたことに気付き、僕の持ってたタバスコのビンを奪って行くチドリ。奪い取ると、フタをあけ食べかけのピザにタバスコをかけるチドリ…そんなの軽く一振りか二振り程度だろ、普通。なんで、思いっきり３・４回も振るんだ。

そう考えてる間にフタを閉め終え、ピザを口に入れるチドリ。途端に少し驚いてるようだと、水を飲みながら冷静に観察する。すると、なにかを探してから涙目で尋ねてくる。

「わ、私の水は！？」

「あ、ゴメン。これチドリのだったよ、間違えちゃった。」

そう言って、空になったコップを返すと、チドリは怒りを僕にぶつけてくる。

「ぜ、絶対ワザとでしょ！　信じられない！」

言いながらテーブルの下で人の足をゲシゲシ蹴ってくる。…けっこう、痛いな。そう思っていると、丁度さっき注文したジュースがきた。

「お待たせしました、オレンジジュースになります。」

「あ、ありがとうございます。あと、すみませんが、お水2ついただけますか？」

「はい、わかりました。少々、お待ちください。」

そう言って店員さんはコップをさげて水をとりにいったので、きたオレンジジュースに口をつけながら笑顔でチドリをみる。…うわぁ、メチャクチャ怒ってるよ。

「飲む？」

「さっさと、よこしなさいよ！」

僕が尋ねると即座に奪って、チドリはそれを飲み干した。飲み終えて落ち着いたのか、チドリは口を開いた。

「人が苦しんでるの見て笑顔になるなんて、性格歪んでんじゃないの？」

「軽い冗談じゃない。それに普通あんなにかけるとは思わないよ。」

不機嫌のまま食べるのを再開したチドリにそう返す。すると、そこでさっきの店員さんが水を持ってきたので受け取り、ジュースのグラスを持っていってもらった。

食べ始めるとまた嬉しそうな顔に戻ったけど、僕と視線が合うと何故か不機嫌そうな顔で睨んでくる。なんでだろ？なんて考えながら、チドリに質問する。

「で、さっきの間接キスはどうだった？」

「っ！？　ごほっ、ごほっ！」

「ハイ、お水。」

急に咳き込んだチドリに水を渡す。僕ってなんて優しいんだろ（棒読み）。そう思っていると、復活したチドリがジト目で僕を見ながら口を開く。

「…もういい、二度と湊とはご飯食べない。」

「なんで？　好みに合わなかった？」

「料理じゃないわよ！　湊が私をいじめて楽しんでるから、食べないの。」

そういって、拗ねたようにツンとするチドリ。やり過ぎたかな？そう思い素直に謝る。

「ゴメンね。一緒に遊んでくれるのが嬉しくて、はしゃぎ過ぎたよ。」

「いいの、もう決めたから。」

僕の言葉に、食べ終えて口を拭きながらチドリが答える。

「そっか。…まぁ、それはどうでも良いんだけど、デザートいる？」

そう僕が尋ねると、チドリはガクンと席の上でずっこけたみたいになる。…器用だなぁ。

「どうでもよくないわよ。あなた、本当にどんな頭してんの！」

「え？　チドリとは対照的な暗い青っぽい色だけど？」

「…私が聞いてるのは、中身の方の話よ。」

何やら疲れた表情でチドリがそう言ってきたので、再度デザートをきく。

「それで、デザートは食べるの？」

「……じゃあ、ティラミス。」

「はいよ。…すみませーん。」

そのあと、デザートを注文し嬉しそうに食べるチドリを見ながらコーヒーを飲んだ。そして、食べ終えると、店を出てベンチに戻ってきた。

夕方――駅前ベンチ

この時間になると人も結構まばらだ。そう思いながらチドリに話しかける。

「そういや、チドリってどこに住んでるの？」

「え？　どこって、マンションだけど？」

「いや、そこは地名とかどこの近くかって答えるでしょ、普通。」

僕にそう言われ少し不機嫌になるチドリ…なんでだよ。

「湊に”普通”とかって常識の話して欲しくない。」

「失礼な。『立てば平凡座れば普通歩く姿は非常識』って言われるぐらいなのに。」

「自分で非常識って言ってるじゃないの！」

そう言って疲れた表情になるチドリ。体力なさそうだもんね、歩いて疲れたのかなっと。

「で、どこらへん？」

「…聞いてどうするの？」

聞き直すと今度はジト目で僕を見て理由を尋ねてくる。

「どうもしないよ？　遊びに行っていいの？」

そう問いかけると、なにやら考え始めるチドリ。そのまま少し放っておくと、チドリが口を開く。

「同居人がいるときはダメ、片方が五月蝿いから。でも、いない時なら良いよ。」

なんと遊びに行っていいと言われたので、尋ねてみる。

「今日は？」

「え、今日？　…いないから大丈夫だけど、もう遅いよ？」

「いや、夜まで帰らないつもりだから、チドリの迷惑にならなければコッチはＯＫなんだよ。」

そう答えると、再び考え始めるチドリ。しかし、さっきよりは早く考え終わったのか口を開く。

「いいけど、ご飯ないよ？　私、お米炊くぐらいしかできないし。」

「あー、じゃあちょっと買い物行こうか。」

そう言って僕たちは買い物に行くことにした。

――大型スーパーマーケット

ご飯が作れないという事は、冷蔵庫の中身も把握できていないだろうと思い、食料品を買いにここで一番大きなスーパーにやってきた。

「…なんかいつもより見られてる気がする。」

店内に入るとチドリがそういう。まぁ、その格好は目立つからね。

「ゴスロリが珍しいんでしょ。それに隣にいるのが、眼帯つけてるからロックとかパンクな人たちなのかなって興味持ってたりさ。」

「ふーん。…で、なに買うの？」

「ん？　なに食べたい？」

作る物を決めていなかったのでリクエストを聞くと、チドリが考え始める。その間も僕たちはフラフラと店内をまわっていると、チドリが口を開く。

「…なんでもいい。」

……考えてそれかい。それじゃあと思い。野菜売り場のトウガラシを探しにいく。売り場にいくといろんな種類のトウガラシが売っているので、どれがいいか選んでいると、後ろをついてきてたチドリが低いトーンで話しかけてくる。

「……それ買ったら家に入れないから。」

「ゴメンなさい。」

そう言われては諦めるしかないので、真面目に食材を選んでいく。メインはなんとなくで決めたオムライスにして、シンプルなサラダとスープも作ることにする。で、ついでにチドリが見てたお菓子もカゴに入れて会計を済ましチドリの家へ向かった。

夜――マンション前

「…ここ。」

チドリに案内されてついたマンションは、ポートアイランド駅に全然近くなかった。でもまぁ、僕も歩いて1時間もかからないので、寮から徒歩で行ったりするから人のことは言えない。

マンションの外観をみると結構、新しいみたいでキレイな建物だ。こんなとこに住むぐらいだし、同居人はそれなりにお金持ちなのだろう。とりあえず、見るのはそれぐらいにしてチドリについていく

…あ、ちゃんと郵便受け確認するんだ。そんなことを思いながらエレベーターにのって上のフロアへ行った。

――チドリ自宅

エレベーターに乗って上のフロアにつき、少し歩くと端の部屋がチドリたちの住む部屋だった。チドリが鍵を取り出してドアをあけて中に入る。

「…ただいま」

「おじゃまします。」

言いながら玄関に買ってきた食材を置き靴を脱ぐ。ついでだから、しゃがんでチドリの靴を脱がせる。

「ありがと、キッチンはこっち。」

案内され、廊下を歩き部屋に入るとリビングに出た。部屋をみると、ダイニングキッチンと繋がっていたので、そっちに荷物を置く。

荷物を置いて振り返るとチドリがヘッドドレスとかを外していた…あ、あの剣って刺さってなかったのか。そう思っていると、チドリが話しかけてくる。

「私は部屋に荷物おいたりしてくるから、勝手につくってて。調理器具は下の棚とか引き出しにあるの使っていいから。」

「うん、わかった。」

そう言うと、チドリは部屋に入っていったので調理を始めることに

した。

――チドリ自室　〜チドリ　Ｓｉｄｅ〜

自分の部屋に戻ると、スケッチブックと画材道具を片付けていく。

それが終わると、ヘッドアクセサリーをかけておく。

「ふぅ…連れてきちゃったけど、良かったのかな？」

物をしまったりしながら、そう呟く。今日はタカヤとジンは一緒に依頼をこなしに行ってるので、帰ってくるのはもう少し遅い。だから、湊を連れて来ても五月蝿く言われずに済むはずだ。

「…でも、私たちは普通じゃない。それを知られるのは絶対ダメ。」

普通の人は知ることもできない特殊な時”影時間”。私たちはそこで依頼された復讐をこなしている。だがそれじゃ食べていけないので、ジンがパソコンを使ってなにかしていたり、タカヤが別口で依頼された仕事をこなしてお金を稼いでいる。

「前までは、こんなこと思わなかったのに…」

以前は淡々と影時間での仕事をこなすばかりで、日中はなにもできることがなかったので絵を描いていた。だが、湊という私の描いているものを理解できる存在に会ってしまった。それから私は変わってきている。以前よりも感情を表に出したり、遊ぶことを素直に楽しいと感じてしまうのだ。

「…これじゃいけないって、わかってるのに。」

世界は楽しいことや、素晴らしいもので溢れている。それは前から

知っていた。でも、自分には関係ないものとして、興味を抱かなかった。でも、彼は違う。初めて自分が興味をもったもの。

どうして絵が理解できたの？
どうして貴方も人の命をみることができるの？
どうしてそんなに優しいの？
どうして私に構うの？
どうしてそんなにも楽しそうに生きてるの？

そんな、”どうして”という疑問ばかりが膨れ上がる。でも、そんなものに明確な答えはなくて、なによりそんな事を気にしなくて良いぐらい湊は自由に生きてる。

「…でも、ならどうして湊の命が視えないの？」

…そう。私は、他人の命が輝く様子や、命の炎とでも言うようなものを視ることができる。それはジンやタカヤのでも視える。世界に平等な死を望む彼らにでも視えるのに、湊だけはどんなに視ようとしても視えない。

「湊も自分の未来を生きようとしてないの？」

私が命の炎を視ることができないのは、自分だけだった。鏡を使ったり、自分の身体をジッと見たりしても視えなかった。自分のものだから視えなかったのか、私が自分の命に執着を持っていないから視えなかったのかは分からない。でも、もし後者なのだとしたら…

「湊は何を背負っているの？」

そう考えながら片づけを終えると、湊のいるキッチンに向かった。

――ダイニング　{湊　Ｓｉｄｅ}

チドリが部屋に戻ってから結構な時間が経っていた。すでに、スープやサラダは出来ている。あとは、チドリが来てからチキンライスを卵で包むだけだ。そう思っていると、チドリが戻ってきた。

「遅くなってゴメンなさい。」

「いや、気にしてないよ。で、あとは卵で包むだけなんだけど、大きさはどうする？」

「スープとかもあるから、ほどほどでお願い。」

「了解。」

言われて、フライパンを温める。その間に食器をチドリに準備してもらう。…そういや

「初めてだな、こういうの。」

「こういうのって？」

笑いながらそう言う僕にチドリが聞いてくる。

「いや、朝食メニューみたいなのは自分のついでに作ったことあるんだけど、こうやってちゃんとした物を誰かのために作るのって初めてだなって思って。」

「え、これで初めてなの？」

「うん。作り方とかは見てれば分かったからね。まさに見様見真似ってやつさ。」

そう言って笑いながら完成したオムライスを皿にのせると、食器を準備したままチドリが固まっているので声をかける。

「スープいれちゃって。僕は冷蔵庫に入れといたサラダを出すから。」

「あ、うん。」

再起動したチドリがスープをいれた器をテーブルに並べる。そして、僕が冷蔵庫からサラダとドレッシングとお茶を持ってきたので準備が終わり席に着く。

「…いただきます。」

「どうぞ。」

そういって食べ始めるチドリの様子を見ておく。やっぱり、初めてだから相手の反応が見たくてね。そんな風に思っていると、相手はなにやら驚いた表情をしている。

「…美味しい。本当に初めて作ったの?」

「うん。こんな風にやってたなぁ…って思いだしながら作ったんだよ。一応、味見はしながらつくったけど、問題なさげ?」

「うん、美味しい。ありがとう、湊。」

「いいえ。さ、冷めないうちに食べちゃいな。」

僕がチドリにそう言うと、チドリは嬉しそうに食べてくれた。けっこう、手間だったけどこういうのも良いもんだな。なんて、考えながら僕も食べることにした。

――リビング

食べ終えた後、残りのチキンライスとスープの入っている鍋とフライパンに蓋をして、使った食器を洗い、テーブルを拭くまでしてから食後の休憩をとることにした。

そして今は、リビングの方で2人でソファーに座っている。

「ねぇ、湊。いまの生活は楽しい？」

「どうしたの急に？　まぁ、結構楽しいかな。こっちに来てからはいろんな人に会えたし。」

変な質問だなと思いながらも、こっちに来てからのことを思い出す。シャドウと戦ったり、死にかけたこともあるけど、やっぱり来て良かったと自信を持って言える。その素直な感想をチドリに言うと少し暗い表情になり、言い辛そうに口を開く。

「…じゃあ、なんで《ガチャ》」

「チドリー、帰ったでー。」

「ただいま戻りました…おや？　男性物の靴？」

「っな！？　チドリ、お前ー！！」

チドリが何か言おうとしたとこで同居人の人が帰って来たようだ。
そして、玄関にある僕の靴をみて関西弁の方の人がなにか騒いでリビングに入ってきた。

「あ、どうも。おじゃましてます。」

「いえいえ、お構いも出来ませんで…って、ちゃうわ！　なに、男連れ込んでんねんチドリ！」

あいさつをするとノリツッコミしながら、チドリに怒る関西弁の人。
すると、その後ろから上半身裸で肩から腕にタトゥーをいれた男性が現れた。

「どうしたんです、チドリ。あなたがここに誰かを連れてくるなんて。」

「別に…ご飯作ってくれるっていうから。」

言いながら顔を背けるチドリ。あー…本当は来ちゃいけなかった系？そう思っていると、後からきた男性があいさつしてくる。

「失礼。私はタカヤ、こちらはジンといいます。」

「あ、湊って言います。すみません、今日はチドリに無理言って連れて来てもらったんです。僕はそろそろ帰りますんで。」

「いえ、気にしないで結構ですよ。それに少しお話してみたいですからね。」

そう言って、タカヤさんは笑いかけてくる。まぁ、居て良いならもう少しいるかなと思いながら、2人に尋ねる。

「あ、食事は済ませてきましたか？」

「いえ、まだですが？」

「なら、すぐ準備できますんで待っていてください。チドリ、手伝ってくれる？」

「…わかった。」

そう言って、チドリに手伝ってもらいながら準備を始めた。

――ダイニング

さっきのスープやチキンライスを温めオムライスを作りスープはチドリによそってもらう。すると、タカヤさんとジンさんが着替えや準備を終えて戻ってきたので、お皿と器をテーブルに並べた。

「お待たせしました、どうぞ。」

言いながら、冷蔵庫からお茶を持ってきてテーブルに置き、コップも2人の前に置く。

「ありがとうございます。では……美味しい。」

「めっさ、美味いやんけ…。」

そう言って、2人は残さずに食べてくれた。ちなみに、その間チドリは僕が買ってきたアイスを食べていた…チドリ食べてばっかりじ

ゃね？

――リビング

２人が使った食器を洗い、ついでだから食後のコーヒーを準備した。洗いものを終え、コーヒーと買ってきたお茶菓子をいくつかお盆にのせてリビングのテーブルに置き、ソファーに座る。席はこんな感じだ。

タカヤ―　テ　―僕
　―　―　―
　ジン―　ブ　―チドリ
　―　ル　―

そういえば、最初は睨んできていたジンさんも食事が終わると、普通に接してくれるようになった。それを見てチドリもなにやら安心していた。そう思っていると、タカヤさんがコーヒーを一口飲んで口を開く。

「で、湊君でしたか？」

「あ、呼び捨てで結構です。」

「では、私たちも呼び捨てで結構ですよ。それに敬語もいりません。」

そう言って、タカヤさん改めタカヤは再び笑顔を向けてくる。別にタメ語でも敬語でもこっちは問題ないんだけどね。そう思っていると、タカヤが話を続ける。

「それで、チドリとは一体どういう関係で？」

「結婚を《ドゴッ！》…痛い。」

「テキトーなこと言わないで。」

最初は軽い冗談で攻めようと思ったのに、チドリが脇腹を殴ってきてそれを妨害された。それをみてジンが笑いを堪えてる…笑いの沸点低いのか？なんて考えてからマジメに答える。

「えっと、関係って言われても…僕らの関係ってなに？」

「…私に聞かないでよ。こっちだって、分からないのに。」

僕に聞かれたチドリは言いながら困った表情をする。それをみて、タカヤが問いかけてくる。

「ふむ…友人や恋人ではないのですか？」

「あぁ、それはなんか違うかも。恋人では勿論ないけど、友人って感じでもないよね？」

「まぁね。ってか、まだ会って2回目だし。」

それを聞いて少し驚くタカヤとジン。

「お前ら先週会ってから1回も会ってなかったんか？」

「僕の学校がテストだったんだよ。まぁ、電話とかメールはしてたけどね。」

聞いて何かを考える始めるタカヤ。その間もジンの質問は続く。

「そういや、湊はチドリの絵を理解したっちゅうんわ。ホンマか？」

「あの赤いのだよね？　それなら、一応わかったから言ったら正解もらったよ。」

僕がジンの質問に答えると、ジンはなにやら感心している。するとそこで、考えていたタカヤが口を開く。

「突然ですが湊。あなたには世界がどう見えますか？」

「え？」

「人でも建物でも良いです。あなたにとって世界はどのように映っていますか？」

突然タカヤにそんなことを尋ねられ、僕は驚く。しかし、チドリもジンも黙って僕の言葉を聞こうとしているので、真剣に考えて答えることにする。

「僕にとって世界はどうでもいい物…でも、そこに住む人々のごく一部。僕のまわりにいる人間はとても大切に思ってる。」

そこで言葉を一度切りコーヒーに口をつける。他の3人は黙ったまま僕の言葉を待っているので、話をつづける。

「……僕は過去に1度死んだ。でも、ある家族が僕に再び命をくれた。だから、今度は自分のために生きようって決めたんだよ。…そう、僕には世界というのはただあるだけ、そこには何にもないし見

る気もないんだ。だって過去のあの日、僕はこの世界に見切りをつけたから。」

そう言うと、黙って聞いていたタカヤが真剣な表情で口を開く。

「死んだ…と言いましたが、なにがあったのですか？　それに再び命をくれたのはある家族と言った。では、あなたの家族は？」

「あとの質問から答えるけど、僕にはもう家族はいない。１０年前、ここの近くにある“ムーンライトブリッジ”で謎の事故があった、幸い深夜と言う時間に起こったため怪我人などはいなかった…そう放送されたけど、実際は違ったんだ。僕の両親とこの右目はその時に失われたものだ。」

言いながら右目の眼帯を指差す。すると、話を聞いてるチドリが、膝の上で手をギュッと握りしめている。だが、それを気にせず話を続ける。

「そのあとは親戚を盥回し。元々、僕の家族は兄弟筋以外からはよく思われていなかったから、酷い目にもあったし、転校した学校では親がいないことやこの右目のことで心ないことを言われたりもした。小学生になったばかりの僕はそれらに耐えられなくてね…とうとうある日、心が完全に壊れてしまったんだよ。それが死んだ理由。」

言い終わると今度はジンが質問してくる。

「ほんならなにか？　命をもらったちゅうんは。」

「うん。今みたいに再び感情を蘇らせてくれたって意味だよ。まぁ、

いまの状態になるまで4年ぐらいかかったけどね。」

そう言って笑うと、ジンは俯いて黙ってしまう。横を見ると、手を握り過ぎて手の色が悪くなってるチドリの姿があったので、頭を撫でてあげる。

「あ…」

「チドリは僕がなぜ命の炎を視ることができるのかって気にしてたでしょ？」

「…うん。」

頭を撫でると驚いてこっちを見てきたが、尋ねると答えて俯いてしまうチドリ。だが、僕はそのままチドリの疑問に答える。

「簡単だよ。僕はその輪の中にいないから、輪の外から眺めているだけなんだ。」

――リビング　｛チドリ　Ｓｉｄｅ｝

「簡単だよ。僕はその輪の中にいないから、輪の外から眺めているだけなんだ。」

湊は私が感じていた疑問にそう答えた。それを聞いて私は「…やっぱり」と思ってしまった。湊を見ていて思った、「この人は私たちと同じ闇を抱えている。」と。でも、さっきの話を聞いて思った、湊は私たちとは違う。それよりも深いなにかを抱えている。

「…じゃあ、ここにいる湊は誰なの？」

輪の外から眺めていると言った湊に、ならいま触れているのは誰だと聞く。

「…有里湊の残滓……いや、有里湊だったものが再び与えられた命で人間のように振舞ってるだけかもね。」

そういって、湊は苦笑してくる。……違う、最初に会ったときの自由さが消えていく。このままじゃ、私の知ってる湊がいなくなっちゃう。

「…ダメ、そっちに行っちゃダメ。」

――リビング　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

「…ダメ、そっちに行っちゃダメ。」

チドリの質問に答えて苦笑しているとチドリにそう言われた。そっち？なにを言っているのか分からないので聞き返す。

「そっちって何？」

「最初に会ったときは自由さがあった。でも、今の湊は誰との絆も結ばないっていう孤独さしか見えない。孤独は自由に似てるけど、人との絆に縛られないってだけ。世界にすら縛られない自由さとは違うよ。」

そう言って、撫でていた手をとり握ってくるチドリ。その瞳には僕を心配する様子と、なにかを失いそうという恐怖が感じられた。

「…心配してくれてありがとう。」

チドリにはそんな風に見えたのかと思いながら、心配してくれたチドリに礼を言う。そこで、タカヤが再び口を開いた。

「…あなたが遭遇した事故。それがある者たちの、愚かな行為に巻き込まれたものだとしたらどうします？」

「え？」

「もし、その事故を起こした原因になった者がいたとしたら、あなたはどうしますか？」

僕の目をしっかり見て問いかけてくるタカヤ。…あれはシャドウと誰かの戦いだ。つまり、原因は以前からシャドウを研究していたという、“桐条”が関わっていると見て良いだろう。それに対し、僕はどうするか…

「…いまさら、どうもしません。今の僕は同じ容姿同じ記憶を持っただけの別人です。死ぬ前なら憎しみや怒りに囚われたかも知れませんが、会って謝罪されても困るし、許しを請われても僕には関係がないので、許すこともできません。」

「フフッ、変わった方だ。」

僕の答えをきいて楽しそうに笑いコーヒーを飲むタカヤ。今までの暗い真剣な雰囲気がなくなったとこで、ジンが口を開く。

「で、チドリはいつまで手ぇ握ってるつもりや？」

「え？　っ！？　ち、違うこれは！」

言われて慌てて握っていた手を離すチドリ。そしてその様子を見てタカヤもジンも楽しそうだ。

あの後、コーヒーを飲みながら談笑していると、そろそろいい時間になったので帰ることにした。

――玄関

「じゃあ、今日はありがとうございました。」

「いえ、夕食まで御馳走になり、私たちも楽しかったですよ。」

帰ると言うことで玄関まで見送りに来てくれたタカヤがそういう。

「飯美味かったわ。また、チドリに会いに来るんやったら、暇あったら作ってくれや。」

同じく見送りにきたジンが笑顔で言ってくる。だが、それにチドリが言い返す。

「べ、別に湊は私に会いに来てるんじゃないわよ。」

「え？　いや、会えたら良いなと思って行ってるんだよ？」

「う、五月蝿い馬鹿。」

否定したのに、僕に否定し返され焦るチドリ。それを見ていたジンが見てられないと、声をかける。

「ホレ、イチャついとらんと、下まで送ってこいや。」

「イチャついてないわよ！」

言われて少し不機嫌になりながらドアを開けて出ていくチドリ。僕もその後に続いて出ていく。

「では、さようなら。」

「ええ、さようなら。」

「またな。」

そういってタカヤとジンにあいさつを済ませて下へ降りていった。

――マンション前

下までチドリに送ってもらいマンションの前で別れを告げる。

「今日は無理言ってゴメンね。」

「ううん、ご飯美味しかった。ありがとう。」

そうやってお礼を言うチドリ。今日は楽しかった、むしろ僕がお礼を言いたいくらいだ。そう思いながら話しかける。

「また会える？」

「…たまになら。」

「うん、楽しみにしてる。じゃあね、おやすみ。」

「うん、おやすみなさい。」

僕はチドリと別れると、そのまま寮に帰ることにした。

――チドリ自宅　｛チドリ　Ｓｉｄｅ｝

湊と別れて部屋に戻ってきた。そしてリビングにいくとタカヤとジンが待っていた。

「それで、彼はどうなんです？　チドリ。」

「んーん、何も感じなかった。むしろ、感覚が低すぎるくらい。」

私がそういうと、考え始めるタカヤ。その間にジンが口を開く。

「アイツは世界の汚い部分をよう知っとるみたいやったな。おまけに世界をなんとも思っとらん。」

「うん、私たちに似てるね。」

そう、私たちは“桐条”によって生み出された“人工ペルソナ使い”。自然覚醒したペルソナ使いと違い、ペルソナの制御が上手くできないため、定期的に制御薬を投与する必要がある。だが、重要なのはそこじゃない。

昔、連れていかれた研究所でのペルソナを強制的に覚醒させる実験や、覚醒したにも関わらず廃人になってしまった者のペルソナを他人に移植する実験など、研究所での地獄の日々は忘れない。そして研究所で事故があったとき、集められた子供の中で年齢の高かったタカヤがリーダーとなり、脱走していなければ私たちは死んでいただろう。

脱走の途中で倒れた者。外に出れたけど、衰弱していてまともに逃げれなかった者など、数多くの子どもが死に、私たち3人を除けば逃げれた者は数名程度だろう。１００人も集められたのに、９割以上が桐条のせいで死んだのだ…そして、湊も桐条の被害者だった。

「彼がペルソナに目覚めないのは残念ですが、敵につかれるよりマシだと思いましょう。同じ桐条の被害者であり、それによって人生を狂わされたのです。同志として認めましょう。」

「せやな。チドリがあんなにストレートに感情表わすようなヤツやし、料理も上手いときとる。いっそのこと、協力者として招きたいくらいや。」

そう言って2人は笑う。でも、私はそれに反対。きっと湊は私たちが依頼された復讐をしていると言っても気にしないだろう。でも、湊には影時間という裏の世界を知って欲しくないのだ。世界に見切りをつけても、あっちにいるなら生きていけるだろう。だから、こっち側には触れてはいけない。

「私は反対。遊んだり、ご飯を作ってもらうのは良いけど、影時間には関わらせたくない。」

私がそういうと少し驚く2人。そして、笑いながらタカヤがいう。

「フフッ、冗談ですよ。同志として認めるので、ここへの出入りは許可します。ですが、影時間は選ばれた者のみがいける特別な場所です。適性がないなら、諦めますよ。」

「そういうこっちゃ。アイツ呼ぶんはかまわんけど、写真以上は許さんからな。」

ジンが笑いながら話してると思ったら、最後だけ真面目な表情で言ってくる…この馬鹿！

「…写真？」

「ああ、湊とチドリはすでにキス「五月蝿い、黙って！」《ドゴッ！》…ぐはぁ！」

余計なことをタカヤに話そうとするジンを殴って黙らせると、タカヤが話しかけてくる。

「ああ、恋人ではないのにキスは済ませているのですね。いやはや、あの無関心・無表情のチドリをどうやって…不思議な少年です。」

1人で言って、1人で不思議がってる…ってか、タカヤにもバレた。ジンが余計なこと言うから！そう思って倒れているジンを蹴っておく。

《ドゲシ！》

「ぐほぉ…な、なんやねん…」

「ジンのせいでバレたから、その仕返し…じゃあ、今日はもう休むね。」

「ええ、おやすみなさい。」

「うん、おやすみ。」

そう言って私は部屋にもどった。

第二十一話（後書き）

アグレッシブ・チドリ…すみません、言ってみただけです。

第二十二話（前書き）

テスト発表の回です。『現代文・古典・数学・英語・歴史・科学・物理』で７００点の設定です。それと、表や座席表をよく使いますがズレてても勘弁してください。ケータイからの方はとくに。

第二十二話

5／25（月）
朝――自室
今日は定期試験の結果が貼り出される。…僕の交友関係をリストで書かされるかと思うと気分が重い。それに質問は無しと言ったが絶対に聞いてくるだろう。その時は力づくで黙らせるかな。そんな風に考えながら学校へ向かった。

――校門
「おはよ。」

学校へ向かっていると校門のとこでゆかりに出会った。同じ電車だったのかな？そう思っていると、ゆかりが話し始める。

「湊君はいつも通りの時間だね。順平は、青い顔してすっごい朝早く出ていったけどね。」

「今日って何かあったっけ？」

「ほら、今日って、中間の発表があるでしょ？　貼り出される前に、点数に色つけてくれって、先生に頼むんだって。…無理だっつの。」

そんなに必死になってまで見たいのか、それとも純粋に点数がやばいのかな？なんて考えながら、ゆかりと一緒に教室へ向かった。

昼休み――教室
「おーい、試験の結果、貼られたぞー。」

クラスの男子がそう言ったので、試験の結果を見に行こうとすると公子たちが話しかけてきた。

「約束忘れてないよね？」

「私、タルタロスのせいであんま勉強できてなかったけど、今回は結構自信あるんだけど。」

公子が閲覧条件の確認をしてきて、ゆかりはテストの出来がよかったから張り切ってるみたいだ。すると、順平も参加してくる。

「先生に頼んでも無理だったけど、オレっちも湊には負けてないぜ、多分。」

…笑顔で言ってるけど、多分かい。まぁ、ここで話してもしょうがないので職員室前に行くことにした。

――職員室前廊下

貼り出されたばかりなので人が多い。だが、なんとか前の方に来たので表を見てみると、みんなが驚きの声をあげる。

「え、嘘っ！？」

「冗談でしょ！？」

「んなのありかよ！？」

――――――――――――――――――――

［第2学年　成績順位一覧］

順位／２６３中―　氏　名　―点数／７００―
１位　―有里　湊―７００点―
２位　―草摩　公子―６８６点―
１１４位―岳羽ゆかり―５１９点―
２４３位―伊織　順平―２９１点―
――――――――――――――――――――
［第３学年　成績順位一覧］
順位／２６７中―　氏　名　―点数／７００―
１位　―桐条　美鶴―７００点―
６１位　―真田　明彦―５７４点―
――――――――――――――――――――

おー、学年でトップだ。美鶴さんも同じだから賭けは僕の１人勝ちだな。そう思っていると、ゆかりと公子に集団の中から引っ張り出される。

「ちょっとどんなズルしたのよ！」

「私たちに見せたくないからって、そんなことするなんて見損なったよ！」

ゆかりと公子が順に怒ってくる。いや、ズルなんてしてないけど。

「で、湊。当然、職員室に行って自首するんだよな？　さすがにそれはやっちゃいけねえよ…。」

順平までそんなこと言ってくる、自分は色つけてもらおうとしたくせに。そんなことを話していると、先輩たちがやってきた。

「順平！　お前、有里が授業中寝てるなんてよくも嘘をついたな！」

「えっ!?　なんで、オレが騙した前提なんスか!?　湊がズルしたに決まってるでしょ。」

「なに?　有里、そんなに女性関係を知られたくなかったのか。だからと言って、許されることじゃないぞ!」

真田先輩までズルしたと思ってるのか…そう思っていると、美鶴さんが話しかけてきた。

「学年トップおめでとう、湊。」

「いえ、別になにもしてませんので。」

僕らが会話してるとゆかりが入ってくる。

「先輩、こんなことして良いんですか?　どう考えたって、湊君の順位と点数おかしいですよ。」

「ん?　どこがおかしいんだ?」

美鶴さんが尋ねると、公子が答える。

「順平が言ってた通り、湊君って1回も授業中に起きてたことないんです。それなのにオール満点で1位なんておかしいじゃないですか。中学時代だって、成績は良かったけど、こんなダントツじゃありませんでしたし。」

「ふむ…逆に聞きたいんだが、君たちはどうして湊が転校してきたか知らないのか?」

美鶴さんに言われ真田先輩が答える。

「そんなの草摩に適性があったから、一応呼びよせてみたんじゃないのか？」

「私もてっきりそうだと思ってたんですけど、違うんですか？」

ゆかりも真田先輩と同じ理由と思ってたらしい、そして公子も自分の思ってた理由を説明する。

「え、私と同じ学校に行きたいってついてきたんじゃなかったの？」

「それはねぇダロ、公子ッチ…。」

公子のアホ発言に思わず順平もツッコミを入れる。それを聞いてた美鶴さんが本当の理由を説明する。

「草摩の理由は知らないが、明彦たちの理由は逆だ。試験してみたら適性が見つかったから、うちの寮にきたんだ。」

「え、じゃあ、なんの試験でそれが見つかったんスか？」

美鶴さんに尋ねる順平。

「去年の年末に特別待遇学生の募集の掲示を見てないのか？　それには、校内・校外問わずと書いていたはずだが。」

「あー…なんか見たかも。でも、設定メチャクチャでしたよ？　完璧超人でも求めてるのかってぐらい。」

「ああ、学費免除の上、成績や学外へのアピールとなる功績に応じて報奨金が出るのに惹かれたが、あまりの募集条件に諦めたくらいだ。あんなの美鶴しか無理だろう。」

美鶴さんの言ってた特待生の掲示に覚えがあったのか、公子と真田先輩がそう答える。だが、それをきいて美鶴さんが口を開く。

「まぁ、変なのが来てもアレだったのでな。で、募集をかけて通ったのが湊だ。全試験をパーフェクトで通過し、適性まで持っていたからな。さすがに我々も驚いたよ。」

そういって「フフッ」っと笑う美鶴さんと驚き声も出ないみんな。

「それに一番の驚きはその応募理由だ。」

美鶴さんがそう言うと、なんとか復活したゆかりが尋ねる。

「な、なんて書いてたんですか？」

「ん？　ああ、確か『毎日のように電話とメールをしてくる従姉が鬱陶しいので、同じ学校にくればそれがなくなると思ったからです。』だったか？」

「はい、そんな感じです。」

美鶴さんに聞かれて合っていると答える僕。だが、それを聞いて怒る公子。

「ちょっと、あんなに心配してあげてたのに鬱陶しいってどういう

こと！」

「いや、毎日毎日『湊君がいなくて寂しいよ～』とか『会いたいよ～』とか言われても困るって。」

僕が言うと、「まぁ、そうだな」といった同情した表情でゆかり・順平・真田先輩が見てきた。ほらね公子、これが普通なんだって。そう思っていると、順平が美鶴さんに尋ねる。

「じゃ、じゃあ、湊の成績って…」

「ああ、紛れもなく実力だ。私はこうなると思って、同じ順位でも見れるのか訊いたんだ。まぁ、同じ順位では見せないと言ったので、そのときには既に諦めていたがな。」

言いながら苦笑する美鶴さん。そして逆にがっかりする他のメンバーたち。…まぁ、公子が居ない間も伯父さんと伯母さんがいろいろ教えてきたからね。それなりに知識はあるさ。そんなことを考えながら、教室に戻ることにする。

「じゃあ、僕たちは教室に戻りますね。」

「ああ、またな。」

美鶴さんの返事を聞いて戻ろうとするが、動かない公子たちに再起動を促す。

「ほら、行くよ負け犬たち。…あ、アバラ負傷した負け犬はこっちきちゃダメだよ。ちゃんと、もう1人のトップに連れて行ってもらいな。」

「っ！？　有里、お前は先輩をなんだと思ってるんだ！」

僕の言葉を聞いて怒ってくる真田先輩。だが、それを無視して美鶴さんに話しかける。

「随分と吠える負け犬だなぁ。ちゃんと躾しないとダメですよ、美鶴さん。」

「フフッ。すまないな、肉とプロテインばかり与えていたらこうなったんだ。今度、躾けておくので許してくれ。」

「美鶴、お前まで！？　お前はどっちの味方なんだ！」

「可愛い後輩の味方をしてやるのが、先輩の務めだろう？　諦めろ、明彦。」

美鶴さんにまでそう言われ、悔しそうに何も言えなくなる真田先輩。このままじゃ、可哀想なので一言残しておく。

「まぁ、いつもより頑張ったみたいだから、バイト代で好きな物を今度奢ってあげますよ。ですんで、物とか食べ物とかは問わないんで決めといてください。美鶴さんにも普段のお礼ってことプレゼントするんで決めといてくださいね。」

僕がそういうと途端に元気になるみんな。真田先輩も「なら、あのトレーニング器具…いや、新作のプロテインも…」と言っていたので、喜んでいるようだ。ま、褒めて伸ばさないとね。

そんなやりとりをしながら、僕らは教室に戻った。

午後――教室

午後の最初の授業は鳥海先生の現代文だ。まぁ、今日はテスト返しと答え合わせなのでやることはない。すると、先生が入ってきて授業が始まった。

「はーい、みんな静かにー。ほら、点数見せ合うのは後にして！はい、じゃあテストの答え合わせするよー。」

「まず問1、漢字の書き取りねー。“とうろん”は全員正解だったけど、“おどろく”なんか間違えないでよ！　担任のクラスがこれじゃー、先生、恥ずかしいじゃないの！」

先生がそういうと、順平が「あ？　ぜってー、あってると思ったのにー！」と言っている。間違えたのはお前か…。

「じゃあ次ー。イジメに関する小論を読んで、感想ってやつね。こんなのサービス問題じゃないの。なーんか書きゃ点あげたわよー。“この学校におけるイジメを告発”とかねー？　…って、ウソよぉ。イジメ、無いわよねえ。無い無い。面倒。」

先生がそういうと、順平が手をあげて言った。

「せんせー！　イジメありますよ、今日もオレ、湊にテストで負け犬呼ばわりされました。いっつも、いろんな女子と遊んでるような湊君にそう言われました！」

また、いらない事を言う。先生はそれを聞いて面倒そうに答える。

「どこがイジメなのよ…それに湊くんは良いのよ、実際に学年トッ

プなんだから。あ、そうそう。湊くんと草摩さんが頑張って学年1位・2位になってくれたおかげで、担任の私にボーナスが出ることになったの。ありがとうね。また、ケーキあげるからね。」

そう言って嬉しそうにする鳥海先生。ってかそうか、教師って生徒が好成績だとボーナスが出るのか。まあ、頑張った覚えはないんだけど、お菓子とかケーキくれるからお礼になったなら良かったよ。

順平はまだ「えー、先生それ差別ッスよ。」とか言ってるけど、普通に無視されてる…憐れ。まぁ、そんな感じで午後の授業は普通に過ごした。

放課後――教室

今日の授業が終わった。テストも終わったし、賭けにも勝ったから今日はのんびり買い物にでも行くかな。そう思い学校をでることにした。

――巌戸台駅前商店街・本屋

買い物をしようと思ったが、特に欲しいものがなかったので暇潰しになりそうなものがないか、本屋に来た。

「漫画もなぁ…順平と公子が見せてくれるから、別に買わなくて良いんだよなぁ。」

そう思いながら店内をぶらつく。あ、そういやゆかりは花に詳しかったっけ。僕もそっちの知識でも仕入れようかな。

「えっと、図鑑コーナー？　ガーデニングコーナー？　どっちだろ。まあ、図鑑からで良いか。」

言いながら図鑑コーナーへ向かおうとしたら、派手めな恰好をした月高生の女子3人が通りかかる。

「きゃはは…あ？　アレ、風花じゃない？」

「ホントだ、めちゃくちゃ背伸びしてんじゃん。」

「店員呼ぶか、台使えば良いのにね。あの子、天然ていうかニブイからね。ちょっと、声かけてみようか。」

3人組は言いながら、背伸びして上の棚の本を取ろうとしてる女子に後ろから近付く。

「風花！」

「え？　っ！？　きゃあ！！」

《バサバサ》

突然、後ろから声をかけられた女子は驚き倒れてしまう。そのとき、思わず掴んでしまったのか、本が何冊か棚から抜け、そこの横にあった本も抜けた場所へ倒れ込み一緒に落下してしまった。

「いたた…」

「きゃはは！　なにやってんの風花～。」

「そんなに驚かなくて良いじゃん。」

倒れた女子に派手めな女子らが声をかける。ん？1人がなんかケータイを構えたぞ…

「カシャ！ってね。ダメじゃん風花。買ってない本をカバンに入れちゃあ。」

そう言われて、倒れた女子が本を取るために床に置いたであろう、自分のカバンを見ると、確かに開いた口に1冊の本が入りかけている。

「ホントだー。風花ったら不良だね～。」

「えっ！？　ちがう、わたし、そんなつもりじゃ！」

ケータイで写真を撮られた女子はパニックになっている。

「ハハッ、キョドリすぎ。」

「んじゃ、そろそろ行こっか。」

「じゃねー、風花。まったねー。」

そう言って、派手めな女子たちは去って行った。…本を片付けるの手伝ってやらないのか。そう思っていると、倒れた女子は座り込んでまだ動揺しているようだ。

「ど、どうしよう。写真、学校に言われたら、私っ…」

うわぁ、　見事にパニックになってるな。世界の終わりみたいな顔になってるし。さては、さっきの女子たちは普段からあの子がパニックになるの見て笑ってるんだな？悪趣味な。

とりあえず、放置してると拙そうなので、声をかけて落ち着かせることにする。

「すみませーん。」

「っ！？　ち、違うんです。ホントに万引きするつもりなんてなくて、あの、ゴメンなさい！」

言って、倒れた子は座り込んだままこっちを見ずに謝ってくる。

「いや、見てたから、誤解なんかしないけども。…立てる？」

「え？　あ、はい。」

いつまでも座らせてはおけないため、手を掴んで立たせる。そして倒れた時に怪我をしてないか、確認する。

「大丈夫？　怪我してない？」

「は、はい。大丈夫です。」

「そう、良かった。じゃあ、とりあえず本を棚に戻そうか。入れるのは僕がやるから、集めるの手伝ってくれる？」

僕がそう言うと、相手の子は「はい。」と返事をして落ちた本を集め始めた。ってか、この子小さいなぁ…1年生かな？そう考えていると、女子が話しかけてきた。

「あ、あの、集め終わりました。」

「うん。じゃあ、戻すけど取りたかった本はどれ？　ついでだし、とってあげるよ。」

「え、あの、今日はもういいです。ごめんなさい。」

「そう？」

もういいと言われたので、そのまま本を片付けるだけにする。順番通りに本をしまうと、再び女子に声をかける。

「これで終わりっと。じゃあ、とりあえず外行こうか。あんまり、ココにいたくないでしょ？」

そう言って、僕は女子を連れて本屋から出ることにした。

――巌戸台駅前・ベンチ

落ち着いて話をするような場所もないので、自販機でジュースを買ってベンチに座って話すことにした。

「で、少しは落ち着いた？」

「はい。あの、手伝ってもらってありがとうございました。」

「勝手にやったことだし、気にしなくていいよ。」

そう言ってコーラに口をつける。うん、やっぱりこの赤い缶のが一番だな。そう思っていると、女子が口を開く。

「あの。私、風花って言います。【山岸（やまぎし）　風花（ふうか）】。」

「そう。僕は湊、有里湊っていうんだ。キミ、1年生？」

「え、違います。背は低いけど、2年です。2－Eです。」

少し顔を赤くして2年であることを伝えてくる風花。なんか、知り合いにいなかったタイプだなぁ…。

「そうなんだ。ゴメンね、僕は2－F所属だよ。同級生だし、敬語じゃなくて良いよ。」

「あ、うん。わかった。」

そう言って、敬語をやめる風花。僕はさっきのことを風花と話すため、声をかける。

「で、さっきのことだけど…」

「あの、ホントに万引きする気はなかったの。倒れたときに、落ちた本がカバンに入っちゃって！」

「落ち着きなよ。見てたって言ったでしょ。」

また、パニックになり始める風花を落ち着かせる。しかし、なにを勘違いしたのか風花は変なことを言ってくる。

「はい…あの、私おかねとかあんまり持ってなくて、それに別に可愛くないし、スタイルもぜんぜんで。」

は？なに言ってんだ、この子。脅迫だと思ってるのか？面白いから、このまま聞いておくのも良いが、変なことになる前に止めることに

する。

「それで、な、なんでもしますから。誰にも言わないでください！」

「脅迫じゃないって。ってか、女の子がなんでもしますとか、簡単に言っちゃダメ。キスしろって言えばすんの？」

「えっ！？　その、私キスとかしたことないから…。」

僕がそう言うと顔を赤くして、焦っている風花。はぁ…可愛いような、メンドクサイような。まぁ、話をすすめるか。

「まぁ、今日は家に送って行くよ。帰りながら話そう。」

「わ、わかった。」

言ってベンチから立ちあがると、飲み終わった缶を捨てて風花を送るため風花の家へ向かった。

――風花家への帰り道

現在、とくに会話もないまま、風花を送るため風花の家へ向かっている。風花はさっきから、俯いている。

「ねぇ、風花。さっきのこと気にしてんの？」

「え？」

僕に急に話しかけられ、顔をあげる風花。僕はそのまま話を続ける。

「さっきの女の子たちのことなら、気にしなくていいよ。」

「でも…写真撮られちゃったし。」

「いや、だから撮ってないから気にしなくて良いって言ってんの。」

そう言うと驚いた表情で僕によってくる風花。近いよ…そう考えていると、風花が口を開く。

「だ、だって、カシャっていったの聞いたもん！」

「それ、口でカシャって言っただけね。」

「え、えっーー！？」

言われたことが信じられないという感じの風花。なんであんな音で撮られたと思ったのかな？そう思っていると、風花が尋ねてくる。

「…それ、本当？」

「うん。」

「はぁー…良かったぁ。私、これからどうしようって思って。ずっと、不安だったの。」

僕の言ったことで、不安がなくなり晴れやかな表情になる風花。この子、騙されやすいんだな。

「まぁ、悩みがなくなったなら良かったよ。」

「うん。ありがとう、湊君。あ、良かったら家によっていって。お

礼に、お茶でも御馳走するから。」

不安がなくなると、途端に明るく接してくる風花。まぁ、僕も暇だしお邪魔するかな。

「うん。じゃあ、少しだけ。」

そう言って、談笑しながら風花の家へ向かった。

――風花自宅

案内され家につくと結構大きな家だった。まぁ、育ち良さげだもんね。制服は改造してるけど。考えていると、風花から声がかかる。

「じゃあ、入って。《ガチャ》　ただいまー。」

風花について家にはいる。すると、風花の声に反応して、奥から母親らしき人が出てきた。

「おかえりなさっ!?　風花が、男の子を連れてきた!?　お父さん、風花が彼氏を連れてきましたよ!」

「なんだって!?」

母親がそう言うと、父親らしき人まで玄関にやってきた…カオス。

「風花、彼氏を連れてきたって本当かい!?」

「え、ちがっ「おぉー、カッコイイ彼氏じゃないか。さぁ、いつまでも玄関にいないであがりなさい。」待って、違うの!」

風花の言ってる事を完全にスルーしご両親は奥へ戻って行った。まぁ、ここにいてもあれだし、あがらせてもらうか。

「おじゃましまーす。」

そういって、あがっている間、風花は「本当に違うのにー」と言って泣いていた。

――リビング

とりあえず、案内されたリビングにいくと父親がソファーに座って待っていた。

「さぁ、こっちにきて座りなさい。」

「え？　あー、はい。」

言われて、父親の正面に座る。メンドクサイなぁ、完全にいろいろ聞かれるパターンだもん。そう考えていると、着替え終えた風花がリビングに入ってきた。すると、父親が口を開く。

「風花も彼氏さんの隣に座りなさい。」

「はい…って、彼氏じゃないの！」

「そんなに恥ずかしがらないでいいだろ。そうだ、キミはコーヒーと紅茶どっちがいい？」

誤解を解こうと赤くなっている風花を華麗にスルーして父親が尋ねてきた。なので、僕も答える。

「では、コーヒーで。」

「わかった。お母さん、彼氏さんにコーヒーを持ってきてくれ。」

父親がそう言うと、キッチンの方から「ハーイ。」という声が返ってきた。

「で、彼氏さんは何と言う名前なんだい？」

「彼氏ではありませんが、有里　湊といいます。」

聞かれたので、彼氏の部分を否定してあいさつをする。だが、この父親はそれもスルーして話を続けてくる。

「そうか、湊君か。私は風花の父です。今後とも、娘をよろしくお願いします。」

そういって、僕に頭を下げてくる…話聞けよ。そう思っていると、コーヒーが運ばれてきて、テーブルにそれを置くと母親も風花の正面に座る。

「お母さん。彼は有里湊君というそうだよ。」

「風花の母です。でも、本当にカッコいいわね。風花、どうやって彼をオトしたの？」

母親に聞かれて赤くなる風花。だが、赤くなりながらも必死に否定する。

「本当に彼氏じゃないの！　今日はちょっとしたお礼に、お茶を御

馳走するつもりで呼んだだけなの！」

あまりに必死に否定してくるので気付いたのか、父親が聞き返してくる。

「本当に彼氏じゃないのかい？」

「ええ。ってか、今日の夕方に会ったのが初めてですし。」

聞かれて僕が答えると、途端にガッカリする両親。普通は、娘が男連れてきたら不安になるものじゃないのか？そう思っていると、父親が再び口を開く。

「そうか…娘が初めて男子を連れてきたから、もしやと思ったが違ったのか。」

「お父さんたちが、勝手に勘違いしたんでしょ。」

そういって、少し怒り気味に話す風花。だが、父親は懲りてないみたいで、まだ言ってくる。

「本当に彼氏じゃないのかい？　今後、付き合ったりとかは？」

「お父さん、しつこい！」

今度は強く言われ、なにも言えなくなる父親…懲りろよ。そう考えていると、母親が話しかけてくる。

「湊君だったわね？」

「はい。」

「今日、この後時間ある？　よければ、ご飯食べていかない？」

食事の誘いを受けたので少し考える。まぁ別に、暇だし良いかと思い返事をする。

「あ、暇なんで大丈夫です。」

「そう。じゃあ、いまから作るから待っててね。」

そういって、母親はキッチンへと入って行った。それを目で追っていると、隣から風花が話しかけてきた。

「なんか、ゴメンね。いつもは静かなんだけど、湊君がきてハシャイじゃったみたいで。」

「いや、気にしてないよ。面白いお父さんとお母さんだね。」

笑顔で顔を見ながらそう言うと、風花は顔を赤くして「そ、そお？」ときいてきた。両親について言われると、テレるのかな？なんて考えていると、風花が声を尋ねてくる。

「でも、本当に時間大丈夫？　家とかでご飯用意してあったりするんじゃないの？」

「ああ、僕は寮暮らしなんだよ。しかも、分寮の方だからそこらへんは自由なんだ。」

「へぇー、そうなんだ。」

実家暮らしのため、寮については詳しく知らないのか話をきいて感心している風花。話していると、キッチンから声がかかる。

「風花ー、少し手伝ってちょうだーい。」

「あ、はーい！　呼ばれたから行ってくるね。ちょっと待ってて。」

「いや、僕も少し手伝うよ。運ぶくらいしか出来ないけどね。」

そういって風花と一緒にキッチンに向かった。

――キッチン

「あら、湊君もきたの？　もう少しで出来るから待っててね。じゃあ、風花はタルタルソースを作って欲しいの。まず、玉ねぎ切ってくれる。」

「はい。」

言われた風花は包丁を持って、まな板の上の玉ねぎを切りはじめる。

「えっと《ストン》　あれ？こうかな《ストン》」

慣れてないのか不器用なのか、とてもゆっくりだ。それに包丁の持ち方もおかしい。

「貸してくれる？」

「え？　ハイ。」

手を洗ってから、風花から包丁と切る場所を代わってもらい、切り始める。だが、玉ねぎなどすぐ切り終わるので、次の材料を取ってもらう。

「風花、きゅうりのピクルスとマヨネーズとってくれる？」

「あ、はい。」

風花が取りに行ってる間に、切り終わった玉ねぎをボウルに入れて水につける。そして、水で冷やしていたゆで卵を剥いて細かく切る。

「もってきたよ。」

「じゃあ、今度はお酢持ってきて。少しで良いから。」

「わかった。」

指示を出しながら、卵とピクルスを切り終え、水につけていた玉ねぎをしっかりしぼり、他の材料と一緒にボウルに入れてマヨネーズをかける。それをまぜていると、風花がやってきた。

「ハイ、お酢。」

「うん、ありがとう。」

もらったお酢を加えて再びまぜ始めると、隣に立っている風花が話しかけてくる。

「湊君って本当は料理できたんだね。」

「いや、朝食メニュー以外では2回目だよ。全部、見様見真似だしね。あ、塩と胡椒ってどれ？」

「はい、こっちが塩でこっちが胡椒ね。でも、見様見真似なんて言ってもだれも信じないと思うよ。なんか、手慣れてるし。」

言いながら、僕の作業をみて感心している風花。ま、褒めるならオリジナルの公子を褒めるべきだね。公子をみてて覚えたんだから。

「だいたいできたけど、パセリどうする？　最後に入れたりするんだけど。」

「そうなの？　聞いてみるね。お母さん、パセリどうするの？」

「パセリ？　入れて良いけど、最後にするのよ。できないんだから、良いとこ見せようとしないでゆっくりでいいから。」

母親にそう言われ少し赤くなる風花…手伝わせたのは、男子の前で料理作ってるとこを見させてあげようって母心だったのかな？

「もう、お母さんたら…はい、パセリ。」

「…それ、セロリね。」

「え？　あ、ゴメンなさい！　少しぼーっとして取ったから…」

間違って持ってきたのが恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてセロリをしまいパセリを持ってくる風花。

「フフッ。風花って、天然って言われるでしょ？」

「んー、たまにね。でも、天然じゃないと思うんだけどな。」

うむ、天然は天然と言われると、怒るか否定するのだ。ま、そこまで計算でやる人もいるけど、風花は天然だな。そう思いながら、パセリを少し刻んでソースに入れて完成させる。

「はい、完成っと。」

「もうできたの？　タルタルソースって簡単なんだね。」

「切って、入れて、まぜるだけって感じだしね。面倒なのはゆで卵ぐらいかな。」

説明すると、「へぇー」といって再び感心する風花。そうしていると、料理が出来たのか母親が声をかける。

「できたから運んでちょうだい。あ、湊君は先に座ってて。」

「いえ、テーブル拭いたりしますよ。布きんはどこですか？」

「ありがとう、布きんはその水きりの横よ。おねがいね。」

言われて、布きんを取ると洗ってテーブルを拭き、料理を運ぶのを手伝った。

――ダイニング

風花の家の今日の晩御飯はエビフライだ。実はハンバーグとか、エビフライみたいなお子様メニューが好きなので嬉しい。

「いただきます。」

「はい、召し上がれ。」

手を合わせてから、食べ始める。おお、この料理、

「とても美味しいです。」

「そう、良かった。たくさん食べてね。」

「はい、いただきます。」

本当に美味しかったのでパクパク食べていると、母親が問いかけてくる。

「風花、これあなた自分で作った？」

「ふぇ？　んぐ…ふぅ。それ、湊君が作ったんだよ。私は材料とか持っていっただけ。」

口に入ってる物を飲み込んでから風花がそう答えると、少し驚いた表情をする両親。そして、僕に話しかけてくる。

「湊君は料理ができたのかい？」

「いえ、朝ごはんみたいな簡単なもの以外だと今日で2度目です。」

「2回目でこんなのが作れるの？　へー、すごいわね。」

風花の両親は僕の言葉をきくと、感心しながら笑っている。この家

族は感心しまくりだなぁ。そう思っていると、父親が再び話しかけてくる。

「湊君は寮暮らしだと言っていたが、実家というかご両親はどこに住んでいるんだい？」

「あ、僕の両親はいないんです。１０年前に事故で死んで、いまは従姉の伯父さんと伯母さんたちの家が実家になってます。」

「悪い事をきいてしまったね。すまなかった。」

両親が死んでいることに気を遣ったのか、そう言って謝ってくる父親。まぁ、気にしてないんだけどね。そう考えていると、風花が話しかけてくる。

「そういえば、噂で聞いたんだけど。転校生が草摩さんの従弟って言われてたのって、湊君のこと？」

「うん。公子は僕の従姉だよ。」

「そうなんだぁ。すごいよね、草摩さん。可愛いし、運動できるし、今日発表だったテストでも２番だったし。」

風花はなにか憧れでもあるのか、公子の良い所をやたらあげている。そして、それを聞いてた母親が問いかける。

「すごいって言っても、桐条さんのとこの娘さんほどじゃないでしょ？」

「タイプが違うけど、同じぐらいすごいよ？　あ、でもテストで１

番だった人は桐条先輩と一緒で満点とってたっけ。」

食べ終わりお茶を飲みながら風花は質問に答える。すると、父親が風花に再び尋ねる。

「へぇ、そんな人が他にもいるんだね。なんて人だい?」

「えっと…あ、あり…有里…みな、と? え、ええっ!?」

こっちをみて驚く風花。まぁ、予想はしてたけどね。

「風花は、驚き過ぎ。落ち着きなよ。」

「だって、私しらなかったから。」

「まぁ、自慢して歩くことでもないしね。」

苦笑しながら答えると、同じく驚いていた父親が聞いてきた。

「そ、そう言えば、従姉が草摩さんと言ったが、それはあの草摩本家に縁のある人かい?」

「はい、草摩一族の人です。」

それを聞いて今度は両親とも驚いている。でも、分家の末端とかだと一般人と変わらないんだけど、他の人は知らないのかな?なんて考えていると、風花が尋ねてくる。

「湊君も、草摩さんもすごいんだね。どれぐらい、宗家だっけ?そこに近いの?」

「こら風花、失礼だろ。あ、湊君も別に言わなくていいからね。」

「いえ、別に気にしてませんので。で、近さだっけ？　近いっていうか、宗家なんだけどね。僕は宗家の弟筋の子なんだ。」

父親の気遣いを気にせず、答えた瞬間に《ガタガタ》と音をたてて椅子から落ちる両親。驚き過ぎて声が出ないみたいだ。横を見ると、風花もなにも言えないみたいなので、再起動を促す。

「まぁ、伯父さんも普段はどこにでもいる優しいオジサンって感じだから、４７代目とか言われてもピンとこないんだけどね。」

「そ、そうなんだ。湊君て「馬鹿っ！　気易く呼ぶんじゃない。すみません、娘が。」」

ここまで態度を変えられると、逆にやりづらいんだけど…

「いえ、さっきと同じように接してください。友達の御両親にそんな風に振舞われるのは、寂しいので。」

「よろ、いや、いいのかい？」

「はい。その方が嬉しいです。」

そう言ってほほ笑むと、少し落ち着いたのか椅子に座り直す両親。
そして口を開く。

「ふぅー。だが、驚いたよ。娘が初めてつれてきた男子が草摩宗家なんてね。これは気易く話せることじゃないな。」

「フフッ。僕は有里の姓を名乗っているので、問題ありませんよ。それに公子と違って、僕の存在を知っているのは草摩の宗家周辺、桐条の宗家、あとは個人的な付き合いのある旧家とかだけですから。」

言ってから、お茶に口をつける。すると、母親が話しかけてくる。

「けど、草摩のすごさが分かった気がするわ。桐条は娘さんしか知らないけど、草摩は風花の話じゃ宗家の娘さんもすごいのよね？それに湊君も勉強とかできるみたいだし、血のなせる技なのかしらね。」

「僕はここ数年しか宗家にいませんでしたけどね。」

そういうと、再び風花たちは感心していた。面白い人たちだと思いながら、その後遅くならないうちに帰ることにし、風花たちにあいさつをして家を出た。

夜――ラウンジ　{公子　Ｓｉｄｅ}

「帰ったぞ。」

みんなでラウンジで談笑してると、病院での検査結果を聞きに行った真田先輩が帰ってきた。真田先輩が、晴れやかな顔をしているってことは…

「先輩、全快したそうですね！」

「おめでとうッス。」

「すぐに戦線復帰ですか？」

ゆかり・順平・私の順で言葉をかける。

「いや、復帰メニューが山積みだ。まるひと月サボってたワケだからな。」

先輩は完治したのは嬉しいが、技術だけでなく戦いでの勘を以前の状態に戻すのに時間がかかりそうだと、困った顔をしている。すると、心配したゆかりが声をかける。

「急に無理すると、また折れちゃいません？」

「そうも言ってられない。新たなペルソナ使いも見つかったしな。」

それを聞いて驚きなにかを期待する順平。

「おおっ！？　新戦力って事スか！　もしかして女子とか…！？」

「女子だ。ウチの高等部2年のな。“山岸風花”…3人とも知ってるか？」

言いながら先輩は私たちの方を見回す。んー、あんま記憶にないなぁ。でも、もしかしたら湊君だったら…って、さすがに部活とかでもないのに他クラスの女子とは知り合ってないよね。なんて考えていると、ゆかりが答える。

「山岸…？　ああ、確かE組の…なんか、体が弱いとかで、学校ではあんま見ないような…」

「俺たちの居た病院へ来ていたらしい。それで“適性”が見つかった。しかし、素養があっても体がそれじゃ、戦いは無理かもな。召喚器も用意したんだがな…」

「ええっ、もう諦めちゃうんスか!?　せっかくオレが、手取り足取り、個人レッスンとか…」

せっかく見つかった戦力も戦えないのでは、と残念そうな顔をする先輩。そして、順平は新たな女子メンバーに浮かれて変なことまで言ってる。

「順平、発想がオッサンだね。」

「あははっ！　やだ、私もたまに思う～！」

私が言うと、ゆかりも同じことを思っていたらしく大笑いしている。

「うぉっ、ひでー！　ボクちん、ピチピチのティーンなの！　ナウなヤングなの!!」

「…さっむ。」

「すぐ、調子乗る…」

ちょっとウケると、それにノリ過ぎるのは順平の悪いくせだ。私とゆかりはそんな順平を憐れみの目で見る。

「ナニ？　そのかわいそうな動物を見るような目は……見んなよ…オレを見んなよ…」

順平の言う事を無視して憐れみの視線を送り続けていると、誰か帰ってきた。

「ただいまー。」

「お、湊。丁度いいときに帰ってきたな。ビッグニュースがあるんだ。」

「ふーん。順平に彼氏ができたんだ。え？　相手はボクシング部主将？　やったじゃん、おめでとう。」

帰ってきた湊君に順平がビッグニュースがあると伝えると、湊君は聞く前に話を捏造してる…湊君て順平と真田先輩には結構キツいこと言うよね。そう思っていると、言われた2人が怒る。

「んなわけ、あるか！　なんで、俺が順平なんかと付き合わねばならんのだ。」

「“なんか”とか言わないでくださいよ。こっちだって、真田サンと付き合いたくないッスよ。ってか、話しも聞かないでテキトー言うな湊！」

――ラウンジ　{湊　Ｓｉｄｅ}

僕がテキトーに相手をしたら怒ってくる順平。帰ってそうそう賑やかな人たちだなぁ。そう思っていると、ゆかりが話しかけてくる。

「おかえり、遅かったね。」

「うん、ご飯食べてきたから。」

「そっか。あ、順平が言ってたビッグニュースだけど、新しいペルソナ使いが見つかったんだって。」

そう言って、少し嬉しそうに笑うゆかり。嬉しそうってことは、女子なのかな?あ、でも子ども以外でもなれるのかも知れないしな…とりあえず、話を聞く事にする。

「ふーん。どんな人?」

「よろこべっ、なんと女子だ!」

質問すると、嬉しそうに答える順平。ってか、戦闘に女子を巻き込むって発想にはならないのか…。そう思っていると、真田先輩が補足で説明してくる。

「こいつらには既に話したが、ウチの高等部2年の女子だ。“山岸風花”…知ってるか?」

「え?　風花?」

僕が風花の名前を言った瞬間、ラウンジの空気がピシリと音をたてた気がした。なにやら、2年トリオが黒いオーラを纏っている。

「ははっ、またかよ。さすがにもう許せねぇだろ。」

「部活でもない他クラスの女子にまで、手を出してるとは思わなかったなぁ…」

「ねぇ…なんでそんなに女子とばっかり仲良くするの?」

順平・公子・ゆかりの順で僕に話しかけてくる。なんで、偶然会っただけなのに言われないといけないんだ。と、考えていると真田先輩が話しかけてくる。

「なんだ、有里。知り合いなのか？」

「え？　あ、はい。今日の夕方に会って、家でご飯食べてきました。」

真田先輩に聞かれたので、答えるとさっきよりも大きな音でピシリと聞こえた気がする…。

「アウトー。会ったその日に自宅にあがるのは、アウトだよ湊君。」

「最近、テストで全然戦ってなかったし、ストレスも溜まってたから丁度良かったよ。」

「久しぶりの戦いかぁ。全力で頑張っちゃうぜ、オレ！」

みんなが素晴らしい笑顔でそんなこと言ってる。まぁ、僕には関係ないし部屋にもどるか。

「じゃ、部屋にもどりま「「屋上行こうか（ぜ）」」」…だってさ、先輩。」

「お、俺じゃないだろ。」

「ほら、リハビリだと思って。」

「いきなり、キレた人間なんぞ相手できるか！」

先輩に頑張るようにいうけど、ヘタレなせいか戦う前から諦めている。まったく、とんだチキンがいたもんだ。

「おい、お前いま失礼なこと考えただろ。」

僕がやれやれといった表情をしていると真田先輩がそう言ってくる。心を読んだだと!?なんてね。小馬鹿にした顔で見てれば誰でも気付くだろう。

てか、公子が「はやく行こうよ♪」と腕を引っ張ってくるのが、鬱陶しい。行かないってば。そう思い、それを伝えることにする。

「行かないって。それに仮に戦ったとして、キミら明日から病院のベッドで過ごしたいの?」

「はっ、今のオレら相手にして無事で済むと思ったら大間違いだぜ?　こっちはカラオケで、呼んだ男子からオマエがどんな女子と一緒にいたかの目撃情報集めたんだ。聞いて驚いたぜ、片手じゃ足りねぇんだからよ。それもランキング上位ばっか狙いやがって、オマエは月高男子の敵だ!」

くだらないことを本気で言ってくる順平。ってか、月高の男子はアホしかいないのか…。そう考えていると、ゆかりも口を開く。

「そうよ、こっちはいろんな女子から『湊君に渡して』とか『友達になりたいから紹介して』って言われてウンザリなのよ。誰彼かまわず、優しくして心奪っておきながら『僕は誰とも付き合う気はない』ですって?　ふざけんなっつーの!」

「…しらんがな」

「私にもあるんだよ。」

ゆかりの言葉に呆れていると、公子がそう言って話しかけてくる。

「いままで他の男子が好きだった子から、『どうしよう、私○○が好きだったのに。他に好きな人できちゃったよ…』とかって相談されるんだよ？　毎週、毎週そんな相談ばっかり、湊君は私のだっての！　ふざけんじゃないわよ。」

言って、フンスと怒っている…ってか、公子のじゃないけどね。それに、僕のせいじゃないのばっかりじゃん。だが、みんなの勘を取り戻すためと思い、しょうがなく屋上に行って2年トリオ＋真田先輩を相手した。結果は完勝だったが、先輩が思ったより鈍っていて話しにならなかったことを最後に記しておく。

第二十二話（後書き）

ははっ、なんというグダり方。スマートに書けば６０００文字で済むだろうに。…湊にまた設定が付与されてますが、最初から考えていたものです。あとは、将来的に新武器や新魔法とか覚えていく感じです。

第二十三話（前書き）

湊君は純情です。（棒読み）

第二十三話

５／２９（金）
朝――校門
朝、学校へ向かっていると、大きな声で話している女子の声が聞えてきた。

「昨日さ、部活の後輩に聞いたんだけど…2年に、イジメられてる子いるらしいよ？」

イジメねぇ…くだらないな。他人を陥れたり蔑んだりして何が楽しいんだか。そんなくだらないことで自分を満たすやつの気が知れないな。そう考えていると、大きな声の女子の友達が聞き返している。

「…イジメ？　え、なんて子？」

「さあ、そこまでは…でも聞いた感じじゃ、結構シンドいっぽい。てかさ…ウチの学校、ヘーワそうだけど、やっぱそういうのあるんだね…」

そんな風に話を聞いていると予鈴が鳴ったので、少し急いで教室に向かい授業を寝て受けた。

放課後――渡り廊下　〜公子　Ｓｉｄｅ〜
部活を終え帰ろうとしたら、ちょうど弓道場からゆかりが出てきたので一緒に帰ることにした。

「はぁ、つっかれた…1年生にちゃんと片付け教えなきゃ。」

「あー、中途半端にやられると結局やり直すハメになるもんね。うちはソッチよりは片付ける物も少ないからそこまでじゃないけど。」

「おまけにこっちは男子までいるからね。荷物運びとかはやってくれるんだけど…はぁー。」

お疲れモードのゆかりと話しながら、部室棟を出て渡り廊下を歩いていると数人の女子が大声で話している。

「「キャハハハハ！」」

「で、ケータイでさ、写真撮ったっぽくアピールしたワケ。たらさー。あの子超ビビッてさ、半ベソとか通り越してんの。弱み握られちゃった、みたいな？　なんつの、マジ世界の終わりって顔？　だって声とか出なくなってんだもん。」

「わ、ダセー！」

「つか、ビビって泣いてる顔とか見んの、超ウケるよね。」

「「キャハハハハ！」」

内容を聞いてると、どうやら誰かをイジメてその反応を楽しんでいるらしい。私は湊君の過去のことがあるからイジメというものが大嫌いだ。イジメられている子が、昔の湊君みたいに心を壊してしまったら、あの子たちはどうするつもりなんだろう。

「ひどい内容だね…。」

「いわゆる、イジメ…？　ヒマねぇ…」

ゆかりも同じように気分を悪くしたようだ。まぁ、それも当然か。誰かを傷つけておきながらヘラヘラと笑っているんだから。そう思っていると、話を聞いていた方の派手めな女子の様子がなにやらおかしい。

「え、なに…この声…あたしを…呼んでる…？」

「は…声？　なんも聴こえないけど？」

最初に話していた方の子も相手の様子が変なことに気付いたらしい。だが、声をかけられても話を聞いてた子に反応はない。

「……。」

「ちょっ、マキ…どうしたワケ？　つか、聞いてる？　ねえ！　マキってば！」

「……えっ。」

大きな声で何度も呼ぶとやっと反応するようになった。様子がおかしかったけど、どうしたんだろう？

「アンタ、だいじょぶ！？」

「ゴ、ゴメン…えと、何だっけ？」

どうやらぼーっとしていたようだ。その子の様子が元に戻ると、女子たちは話しながら立ち去って行った。

「…行っちゃった。なぁんか、ヤな感じだな、ああいうの…」

「ま、あんなの聞いて楽しいのは、やってる身内だけでしょ。ほんとくだらない。」

そうやって話しながら私たちは寮へと帰った。

5／30（土）

午前――教室　〜湊　Side〜

朝、学校にきて教室に向かうと、なにやら教室が騒がしい。席に荷物を置くため席に着くと、近くの席の女子の会話が聞えてきた。

「知ってる？　E組の話…」

「なんか、スゴい噂じゃん。原因よく分かんないって…」

「らしいよね！　でさ…」

みんな何かの噂でもちきりのようだな。でも、E組って風花のクラスか。なにか知ってるかきいてみようかな？そう思ったとき、順平が僕に話しかけてきた。

「すげえな…もうこんな広まってんのか。どいつもヒマだな、まったく。オマエ、もう聞いた？」

「いや、聞いてない。何の話？」

「隣のE組の女子が、昨日の晩から夜通し“行方知れず”でさ。それが今朝んなって、校門の前でブッ倒れてたんだと！　事情は、目下ナゾで、噂じゃ、意識も戻ってねえらしい。」

ふーん。それって結構怖い事件だよね。事件・事故・違法薬物・自殺未遂に持病の発作と、いろいろ理由が考えられる。そんなことを考えていると、ゆかりと公子が教室に入ってきた。

「…おはよ。」「おはよう」

「よう、2人とも。今回の難事件…正直、このオレもお手上げ侍だワ。」

あいさつしてきた2人に順平がそう言う。…ってか、侍なら相手が手をあげても斬り捨てるんじゃないか?なんてくだらない事を考えていると、ゆかりが呆れた表情で順平をみる。

「お手上げ侍?　…バカじゃないの?　……。てか、バカじゃないの?」

「2回言うな!　って、そう言や朝から見なかったけど、どしたん?」

順平がそう尋ねると、公子が答える。

「職員室に行ってたんだよ。ちょっと、先生に話す事があってね。」

「話す事?」

公子の言ったことに僕が聞き返すと、ゆかりが口を開く。

「今朝倒れてたって子…実は私と公子が、きのう部活の帰りに見たのよ。その時は、別に普通だったんだけど…」

「へえ…サスペンスだな、それ…」

順平がそう言ったとこで、チャイムがなり僕たちはそれぞれの席に戻り授業を受けた。

夜――巌戸台分寮・2階

外でご飯を食べてから帰り、2階にあがると2年トリオが休憩所で話をしていて、僕に気付いたゆかりが出迎えてくれた。

「あっ、おかえりー。なんか、学校のウワサ聞いた？」

「いや、朝に聞いたのぐらいで、あとはなんにも。」

「怪談話で盛り上がってる人も多いみたいだけど、子供よね、みんな。さーてと、今日は体調もイマイチだし、テレビ見ながら早めに寝ちゃおうかな……。」

背伸びをしながら、そういうゆかり。僕はとりあえず着替えと荷物を置くため自分の部屋にもどった。

――自室

「フゥ…で、どう思う？」

『何がかしら？』

「学校でのウワサだよ。事故とか事件とかいろんな理由を考えたけど、シャドウに襲われて無気力症かそれに準ずるものになった可能性もあるからね。」

部屋に戻ってすぐ彼女にそう尋ねる。すると、彼女は悪戯っぽい笑顔を向けて僕に言う。

『言って欲しいの？　でも、こういう事件は自分で調べて、答えに辿り着くのが面白いと思うのだけれど。』

「一応、被害者が出てるんだしそういうのは不謹慎だと思うな。」

僕は彼女をジト目で見ながらそういう。けど、僕もそういうのは嫌いじゃないんだけどね。ま、結局は似た者同士なのだ。

『冗談はそれぐらいにして…正直に言うと、まだ分からないわ。ただ、何か裏がありそうね。』

表情を真剣な物にして彼女はそう話し、僕も聞き返す。

「裏ってのは、影時間関係？　それとも、複数の事件が絡んでるとか？」

『んー、影時間も絡んでるでしょうけど、後者の方が近いと思うわ。』

「そう…ありがとう、参考になったよ。じゃあ、ちょっと五月蝿いから行ってくるね。」

話が一区切りつくと、なにやら廊下の方が騒がしいので、着替えてそっちに向かう事にした。

――2階・休憩所

廊下に出ると案の定、2年トリオが大騒ぎしていた。…と、言うよ

りゆかりが1人でなにか叫んでいるように聞こえる。気になったので、歩いて行き話しかける。

「大きな声出して、どうしたの？」

僕がそう尋ねると、騒いでいたゆかりが一番に答える。

「順平ってマジでサイアク！」

…説明になってないよ、ゆかり。そんな風に思っていると、サイアクと言われた張本人が説明してくる。

「ゆかりッチは大騒ぎしてんけど、オレは別に大したコト言ってねーぞ。“部屋に誰か居るかも。ベッドの下とかクローゼットの中とか。”ってコレだけ。大したコトねーだろ？」

順平がそう言うと、公子も悪戯っぽい表情で口を開く。

「いやいや、実はカーテンの裏から…ってね。」

「おっ、公子ッチもそういう話とかイケるクチ？　でもあんまやりすぎると、ゆかりッチがマジで怒るぞー。」

そう言ってから2人は笑いあっている。どうやら、2人はゆかりが怖がりなのを知っていて、からかっていたみたいだね。状況から推測しながら、僕も口を開く。

「…充分に怖いよ。」

「そっかー？　そんなに怖いかー？　居たとしてもゴキブリくらい

だろ？　まあ、これはこれで怖いけど。」

僕の言葉をきき、順平が軽いノリで答える。すると、ゆかりがさらに怒りを込めて叫ぶ。

「これじゃ寝れないでしょーが！」

「それじゃあ責任を持って、今日はオレが一緒に寝るってコトで。」

怒ったゆかりに、くだらない軽口を叩く順平。それを聞いたゆかりは呆れた表情で口を開く。

「あんなコト言ってるし…警察呼ぼっか？　もしくは桐条先輩。」

「うわぁ…何かとっても笑えねェ…」

「いつまでも、順平が馬鹿なこと言ってるからだよ。自業自得ってやつだね。」

ゆかりの言葉にダメージを受けた順平に追撃を与える公子。でも、公子も順平と一緒に怖がらせてたよね…そう考えながら、ゆかりに話しかける。

「ねぇ、ゆかり。」

「ん、なに？」

「…怖いから、今日はゆかりの部屋で寝ていい？」

僕がそう言うと、さっきまで怖がらせてた2人の表情が驚きに染ま

り、すぐさま口を開く。

「てっめ、今オレが怒られたばっかで何言ってんだ！」

「そうだよ。それになんで、私じゃなくてゆかりなのよ！」

怖いのなら、自分のとこにくればいいという公子。だが、こっちにも勿論考えがあって、ゆかりの部屋を選んだのだ。

「…だって、公子も怖い話したじゃん。そんな人の部屋行きたくないよ。」

「はぅっ！？」

怖い話をしたから誰かの部屋にいきたいのに、怖い話をした張本人の部屋に行く訳がない。そんな当たり前のことを言われてショックを受ける公子…ざまぁ。

「で、いっても良い？」

「い、いいけど、布団は別よ？　私はベッドで寝るから、湊君は敷布団ね。」

「うん、ありがとう。じゃあ、寝る準備ができたら行くね。」

顔を少し赤くしながら答えるゆかり。そして、許可を貰ったので後で行くことを伝え、悔し涙を流している順平と公子を無視し、寝る準備をするため風呂や歯磨きなどを済ませにむかった。

――ゆかりの部屋

寝る準備と明日の学校の用意を済ませ、寝るためにゆかりの部屋まできた。一応、入る前にノックするのを忘れない。

《コンコン》

『はーい、どうぞー。』

中からゆかりの声が聞えたので、言われた通り入らせてもらう。

「無理言ってごめんね。」

「別にいいわよ。誰にだって苦手な物はあるんだから。」

言いながら入ると、ゆかりは僕の分の布団を用意しながら迎えてくれた。本当は居候する僕がやらないといけなんだけどね。前に公子の部屋で寝る時もゆかりがやってくれたっけ。甘えてばっかりだな、僕は。そう思ってると、ゆかりが話しかけてくる。

「でも、湊君にも苦手な物があるとは、意外だったわ。」

「そう？　別に完璧超人でもなんでもないよ。」

「見てる限りはハイスペックってレベルじゃないけどね。少し可愛く思えたな。」

そう言って、楽しそうに笑うゆかり。僕もつられて笑いながら話しをする。

「まぁ、たまにはゆかりと2人っきりで話したりもしたいしね。そう思うと、怖がりも悪くないよ。」

「ちょっ、なに恥ずかしいこと言ってんのよ。言っておくけど、向かいには桐条先輩がいるし、2つ隣には公子だっているんだからね。そういう、誤解されそうなこと言わないの。」

僕の言った事でテレたのか、顔を赤くしてゆかりがそう言う。テレてるなら少し悪ノリしてみるかなと考え口を開く。

「…でも、いまは2人しかいないよ?」

「こ、コラ！　言ったばっかりでしょうが。他の人が聞いたら、変な想像するでしょ。」

敷布団のシーツを整え、僕の方へ振り返りながら言ってくるゆかり。すでに顔は真っ赤だ。だが、構わず近付いていき、ゆかりを布団に押し倒しながら話しかける。

「え、きゃ！」

「…で、変な想像ってなに?」

「だ、ダメだってば。冗談でもこんなとこ見られたら、誤解されちゃう。」

なんとか起き上がり抜けだそうとするゆかり。だが、すでに人間の腕力を超えている僕を振りほどく事なんてできるわけがない。…まあでも、これ以上はやめておくかな。そう思い力を抜く。

「フフ、ごめんね。悪ふざけがすぎたよ。」

「ほ、ホントよ！　次、冗談でこんなことしたら一緒に寝てあげな

いわよ！」

これ以上ないってくらい、顔を赤くしてそう言ったゆかりを手を引っ張って起こす…軽いな。こんな華奢な女の子が命懸けで戦ってるんだもんな。

「…ねぇ、ゆかり。」

「な、なに？」

「あんまり無理しないでね。しょうがないのは分かるけど、やっぱり女の子なんだし怪我とかしちゃダメだよ。」

僕はゆかりの手を掴み、見ながらそう言う。すると、ゆかりは少しキョトンとした表情をしたあと、ジト目で僕を見てくる…なんで？

「心配してくれるのは嬉しいけど、湊君だけには言われたくないわよ。」

「なんでさ？」

「いつも一番無理するのは湊君じゃない。そりゃ、真田先輩より復帰は早いけど、先輩以上に重症になってるのよ？」

言って今度は逆に僕の右手を両手で掴み、撫でてくるゆかり。僕が黙って話を聞いていると続きを話し始める。

「最初はビビって動けなかった。でも、順平がきてタルタロスに行くようになってから、私もペルソナを召喚できるようになった。それからは、『私もこれで戦える。今度は私があなたを守ってやるん

だ』って頑張るようになったわ。」

確かに無事に召喚を成功させた後のゆかりは誰よりも頑張っていた。順平も必死になってやってるけど、ゆかりはそれ以上に影でも努力していたのを知っている。

「でもね…あなたが単独でエリアボスを倒した日に思ったの。『この人はなにも必要としてない。誰も近付けようとすらしていない。』って。今まで、一緒に戦う事を目標にしてたから急に目標を失ってどうしようかと思ったわ。」

そう言ってゆかりは、哀しそうな顔で苦笑してみせる。なにか言葉をかけようと思ったが、ゆかりはそのまま話を続ける。

「…でもね、その日から新たに決めたの。助けが必要ないなら、自分もあなたに守られる存在から抜け出そうって。無力な自分は嫌だから、もう自分を守って湊君が傷つくところをみたくないから。そう思うとね、無駄にしてる時間なんかないんだって思ったの。だって、湊君て非常識なんだもん。こっちが少し強くなっても、なんでもないことのように新しい力を見せてくる。どうやって追い付けばいいのよ、まったく。」

「フフッ、追い付く必要なんてないよ。それに戦闘スタイルも全然違うんだし、今は確実にスキルアップしていくしかないんじゃないかな。」

最近、強くなってきているせいか、僕と比較して自分が強くなっているのか不安になっているのだろう。そもそも比較する対象を間違えている気がしたが、笑ってそう伝える。

「それは分かってるんだけどねぇ。公子にも差をあけられてるし、真田先輩もすぐに勘を取り戻して私を抜いて行くんだろうなぁ…。」

自分がメンバー内で弱い方に入ることに拗ねながらゆかりがそう言う。ま、実力が付き始めたら他人の強さもわかるようになるしね。自分と他人の実力差が気になるのも無理ないかな。そう思ったので、あえてショックを与えてみる。

「他人の実力、気にするほど強くないでしょ。弱いんだから、黙って頑張ってればいいんだよ。」

「む、そんな言い方しなくて良いじゃん。こっちだって、弱いなりに頑張ってるんだしさ…。」

「だから、そのまま頑張れって言ってるの。確実に強くなってるよゆかりは。ただ、みんなも必死になってるから、それがわかりにくいだけ。分かりやすく言うなら、いまのゆかりなら最初の大型シャドウを1人で倒す事もできると思うよ。」

拗ねてるゆかりの頭を撫でながらそう言うと、少し驚いた表情をしてゆかりが聞き返してくる。

「え、それ本当？　冗談じゃない？」

「ホントだよ。楽勝とは言わないけど、冷静に対処していけば確実に倒せるだろうね。だから、焦らずにこのまま頑張っていけばいいんだよ。」

言ってぽんぽんと2回頭をしてから手を離す。だが、ゆかりは自分が確実に強くなっている事が嬉しいのか、気にしてないみたいだ。

ん？なんかウズウズしてる。そう思ったら急にゆかりが抱きついてきたので押し倒される。

「良かったぁ、ずっと不安だったの。こんなに頑張ってるのに、どうして全然強くなれないんだろうって。でも、最初あんなにビビった相手にも勝てるようになってるのかぁ…なんか不思議だな。いつの間にそんな力つけたんだろうって。」

「フフッ、頑張ってるのに強くなってない訳ないでしょ。ゆかりが影でも努力してんのは知ってんだから、ゆかりはゆかりのペースでいけば良いんだよ。それがいつかみんなを救う事になるんだから。」

抱きついてきたゆかりに押し倒される形になったが、指摘するのも面倒なので左手を腰にまわし、右手で再びゆかりの頭をなでながら話を続ける。

「それにね、ゆかりの本当にすごいのは癒しの力だと思うんだ。先輩も回復技が使えるけど、ゆかりほど強くないみたい。だから、敵が強くなってくればその力が絶対に必要になるから、心配しないで前だけ見て進みな。」

「うん！　ありがとう湊君、励ましてくれて。」

「いいよ、気にしないで。…じゃあ、時間も遅いしこのまま寝ようか。」

そう言って、抱きしめた状態で身体を横に向け右側にゆかりがくるようにしてリモコンで電気を消す。すると、いまの状況に気付いたゆかりが抜けだそうと再びもがく。

「ちょ、寝れないから！　こら、次したら一緒に寝てあげないって言ったでしょ。離しなさいってば！」

「ダーメ。今日はゆかりと一緒に寝るって決めたの。それにゆかりから抱きついてきたんだよ？　ならなんの問題もないよね。」

笑いながらさらに力を強めてゆかりを抱いていると、徐々に大人しくなってきて、声もさっきより元気がないみたいだ。

「ほんとにお願い。これじゃあ、恥ずかしくて寝れないから～」

「却下。じゃ、おやすみゆかり。」

そういって、ゆかりのおでこにキスしてから寝ることにした。ちなみに、された方は「なっ！？」と驚き戸惑っていたが無視して僕の意識は深く潜っていった。なお、ゆかりも途中で緊張しすぎて疲れたのかちゃんと眠っていたようだった。だが翌朝、僕らの間になにもなかったか心配になった公子が起こしにきて、抱き合って寝ているのをみられ騒ぎになったのは言うまでもない。

第二十三話（後書き）

そういえば今回は長さの都合で５／２９・３０の話でした。それに加え場面がコロコロ変わって読みづらかったと思います。すみません。

第二十四話（前書き）

どうも、こんばんは。伊織順平アワーのお時間です。…まぁ、作者的には昼なんですけどね。

第二十四話

6／1（月）
朝――校門
朝はゆかりと一緒に寝ているところを公子に見られ、大騒ぎになった。だが、2人は朝錬ということでなんとか解放され、1人で登校していると校門のとこで美鶴さんに会った。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。…急になんだが、どうも最近、学校が騒がしい気がしないか？」

美鶴さんはそう言ってまわりの生徒の様子をみながら僕に問いかけてくる。ふむ、まぁ言われてみれば…って言っても、事件の次の日だしなぁ。そう思いながら返事をする。

「確かにそうですね。」

「だろう？　シャドウと関係がなければいいのだがな。明彦の言っていた新たな戦力のこともあるが、…いつまたシャドウが襲ってくるかわからない。油断しないでおいてくれよ。」

言われて頷き、僕らは話ながら靴箱へ向かった。その後、朝のホームルームで鳥海先生にボーナスのお礼といってケーキをもらったので、まわりの生徒の視線を無視して食べながら授業を受けた。

夜――ラウンジ
今日は学校からそのまま帰り寮生のみんなと、食事を取りながら話

をした。すると、順平が何かを思い出したのか話し始めた。

「そう言や、ゆかりッチさ。学生用のネット板とか、見てる？　先週、E組の子が校門で倒れてんの見つかったっしょ？　あれ、怪談に出てくる“オンリョウ”の仕業じゃねーかってサ。」

ゆかりが怖がりなのを知りながら、脅かすようにそう言う順平。ったく、趣味悪いなぁ。そう思っていると、言われたゆかりが少し不安な表情で言い返す。

「オンリョウとか、マジやめてよ…ウソくさい！」

だが、順平の話に興味をもったのか美鶴さんが内容を尋ねる。

「その怪談というのは、どんな話だ？」

「ちょっ！？　どうせ、作り話に決まってるし、き、聞かなくていいと思いますが！」

「興味ある。話してみろ。」

「う…」

怖い話を聞きたくないのか、美鶴さんに聞かなくていいと言うが、真田先輩まで話をきくつもりになったので、何も言えなくなるゆかり。

そして言われた順平は、身を乗り出して語り始めた……いつの間に用意したのか、懐中電灯まで持ち出している。準備良いなぁ…

「どうも、こんばんは。伊織順平アワーのお時間です。…世の中には、どーも不思議なことって、あるようなんですよ…ご存知ですか？　遅くまで学校にいると…死んだはずの生徒が現れて、食われるよ、って怪談…」

照明を暗くし、下から自分の顔を懐中電灯で照らしながら語り始める順平。

「…私の知り合いに、まあ、仮にAとしておきましょうか。Aがね、言うんです。『伊織さあ、オレ、変なもの見ちゃった』って。あんまり真剣なもんだから、『なにが～？』って、私聞きました、彼に。彼、首かしげながらね、『実は例のE組の子なんだけどね……事件の前の晩、学校来てるとこ見たよ』って言うんです！」

話を聞きながら横に座るゆかりの服の裾をギュッとつかむと、ゆかりは話を聞きながら僕の手をとり握って撫でてくれる。そうしてると、順平は話を続ける。

「『うそだ～、そんなんあるかい、うそだ～』って、私、彼に言ってやりましたよ。E組の子、夜遊びするような人間じゃない。でも、彼、真っ青なんだ、顔。確かに見たって、ガタガタガタガタ震えてる……私、考えましたよ。そうなんだ、倒れていたE組の彼女ぉ？　…食われたんですよ、死んだはずの生徒に！　夜中に学校にいたから食われて、だから倒れていたんだ！　…って。私、ぞくーっとしました。ドゥーーっと、冷や汗が溢れ出ました…世の中には、どーも不思議なことって、あるようなんですよ……まあ、全部私の推測なんですがね。」

話を終えると懐中電灯を消し、照明を明るくしてから美鶴さんが話し始める。

「どう思う…明彦？」

「あら…？　オレが熱演した件はスルー…？」

「オンリョウかはともかく、調べる価値はありそうだな。」

美鶴さんだけでなく、真田先輩にも華麗にスルーされる順平。しかし、何か思いついたのかニカッと笑い口を開く。

「しっかし、ゆかりッチに湊もさ。お化けがニガテとは、チョイ情けないよな。」

余計なお世話だ。そう思っていると、ゆかりは順平の挑発に乗り言い返す。

「な！？　情けないって言った！？　い、いーわよ、順平。だったら、調べよーじゃないの。お互い、これから1週間、色んな人からテッテーテキに話を聞いて回るワケ。怪談なんて、ゼッタイ嘘に決まってるし！」

最後を特に強調して言うゆかり。だが、それを聞いて先輩たちは悪戯っぽい表情をしてお互いの視線を合わせると、美鶴さんが話し始める。

「それは助かる。気味の悪い話だからな。」

「えっ…」

それに驚くゆかり。だが、続いて真田先輩も似た事を言い始める。

「じゃ、宜しくな。あー怖い怖い。」

「えぇっ…。」

頼りの2人に任され、涙目になるゆかり。だが、僕もそれに関わる気はないので、公子に話しかける。

「お姉ちゃん。今日、一緒に寝よー？」

「っ！？　やん、湊君ったら可愛い～。良いわよ、お姉ちゃんが一緒に寝てあげますからね～♪」

「こらぁ、湊！　オマエ、絶対それワザとだろ！　真田サン貸してやるから、そっちで寝ろ！」

昨日に続けて女子の部屋へ逃げる僕に順平がそう言ってくる。だが、言われた真田サンと公子が怒って反論する。

「人を勝手に貸すな！　それにデカイ図体した男が怪談くらいで怖がるな！」

「ちょっと、ウチの湊君をイジメるのやめてくださいよ。こんなに怖がってるのに、可哀想じゃないですか！　ねー、お姉ちゃんが守ってあげますからねー♪」

言いながら僕の頭を胸に抱き撫でてくる公子。正直、首から下げてるイヤホンが当たって痛いんだけど…

そうされているのが羨ましいのか、見ている男子2人の方を見て馬

鹿にしたようにフッと笑う。すると、それを見て2人は怒っていろいろ言ってくるが、無視しておいた。そして、片づけをして寝る準備をすると公子と一緒に寝ることにした。

影時間――公子の部屋

夜に目が覚めた。どうやら影時間のようだが、外に気配を感じる。調べるため、公子を起こさないようにベッドを抜け出し、廊下に出た。

――3階・廊下

廊下に出ると、あの少年がいて話しかけてきた。

「こんばんは。約束通り、また会いに来たよ。調子はどう?」

「君か…ま、ぼちぼちかな?」

「フフ、そっか。それに覚えててくれて嬉しいよ。さて…あと1週間で、また月が満ちる。そしたら次の試練がやってくるよ…気をつけて。…また、会いにくるよ。」

そう言うと、少年は消えてしまった。…満月か、また大型シャドウが来るんだな。今度も守れればいいけど。そう思いながら、部屋にもどり公子のベッドで再び寝た。

第二十四話（後書き）

毎回、こんぐらいの長さならいいのにー。

第二十五話（前書き）

ジンって大阪弁なんですか？自分、関西弁はわかるけど大阪弁はわかりません。なので、違ってたり変だったりしたらごめんなさい。それと、関西弁も分からないって人は…頑張ってください。雰囲気で読めばいけるはず。

第二十五話

6／5（金）
朝――校門
伊織順平アワーから数日が過ぎ、今日がゆかりの言ってた調査結果の確認会の日だ。よければ調べてねと、ゆかりに言われたが僕は別にまだ何も調べていない。あとで、チドリに連絡してジンに少し調べてもらうかなと考えていると、ゆかりが話しかけてきた。

「ね、今日の約束、覚えてる？　今夜、例の怪談の“確認会”するからね！」

「楽しみだね。」

「うん、気になる話も聞いたし…じゃ、忘れないでよね。」

ゆかりは僕に念押しすると、そのまま雑談しながら教室に行き授業を受けた。一応言っておくと、最近は授業中も起きているときがある。その間は植物図鑑や料理本を眺めているのだが、不思議と注意されたことはない。むしろ、何人かの女性教師は「あ、私この花けっこう好きなのよねー」とか「この料理なら、〇〇って本のレシピの方が簡単だし美味しいぞ。」と言われたりしている。不思議…。

放課後――教室
今日の授業が終わり、放課後になるとゆかりが僕たちに話しかけてきた。

「…という訳で、約束の週末ね。どう？　３人とも、ちゃんと色んな人に話訊いた？」

「あれ、今日ってなんかの日だっけ？」

「はぁ！？」

順平がとぼけた様に言うと鋭い視線で睨むゆかり。すると、睨まれた順平は慌てて言う。

「じょ、冗談だって！　覚えてるっつの。すぐ、怒んだから…」

「とにかく。今日は寮に戻ったらラウンジに集合。忘れないでよ。」

「へーい。」「「はーい。」」

言われて返事をすると、僕は帰りながらチドリに連絡を取ることにした。

――チドリ自宅

《ピンポーン》

『…はい。』

「僕だけど。」

『いま開ける。』

インターフォンを鳴らすと、チドリが低いテンションで出たので自分が来た事を告げると、鍵をあけるといってきれる。少し待っていると、カチャンと鍵を開ける音が聞えドアがひらいた。

「…どうぞ。」

「おじゃましまーす。」

そう言って、中に入るとリビングに通された。

――リビング

リビングに通されると、とりあえず前に買っておいた紅茶を2人分いれて買ってきたお茶菓子と一緒にだす。用意が終わると、2人でソファーに座り話し始めた。

「で、なんの用?」

「チドリに会いたくなって。」

「なっ!?　馬鹿じゃないの、何言ってんのよ!」

ストレートに言ってみたら顔を赤くして怒ってくるチドリ…可愛いやつめ。

「…で、本当は?」

「まぁ、さっきのも半分ホントだけど、もう半分はジンに用があってきたんだ。」

「ジンに?」

僕がそういうと、紅茶を飲みながら不思議そうに聞き返してくるチドリ。僕も聞かれたので理由を説明する。

「うん。前にチドリがジンはパソコンに詳しいみたいに言ってたか

ら、ちょっと調べ物を頼まれてくれないかなって。」

「今日は帰ってくるの8時頃になるって言ってたけど。」

「お願いするんだし構わないよ。それに分かったら、電話とかで連絡してくれたら良いし。」

言って、僕も紅茶に口をつけてクッキーを食べる。

「わかった。で、なにを調べておけばいいの？」

「ああ、うちの学校…えっと、月光館学園なんだけど、そこで女子数名が失踪後に意識不明で発見されてるんだ。それで、その子たちの共通点とか普段の素行とかを分かれば教えて欲しいんだ。いま、学校じゃ怨霊の仕業なんて馬鹿なウワサまで出てるからね。」

「ふーん。あ、おいしい…」

話を聞きながらチドリもクッキーに手をのばすと、嬉しそうに食べた。なんとなくで、選んだけど当たりみたいだな。よかった、よかった。

その後、雑談したりして時間を過ごし、タカヤとジンが帰ってくる前に夕食にビーフシチューを作りチドリと一緒に食べてから、帰った。それと帰っている途中にタカヤからは夕食のお礼のメール、ジンからも同じく夕食のお礼と頼んだ事を調べて今日中に電話をくれるという内容のメールがきた。

夜――ラウンジ

寮に帰るとみんな既に夕食を終えているようで、確認会をするので荷物を置き、着替えてラウンジに向かった。ラウンジにつき、椅子に座るとゆかりが話始めた。

「ハイ、では月曜に約束した通り、集めた情報の確認会をしますッ。」

「おー、ノリ気じゃん。」

やる気満々のゆかりに順平がそう言う。と、フフンといった感じにゆかりが口を開く。

「当然。私的には、バッチリ色々掴んで来たから。」

言うと、表情を真剣な物にするとゆかりが語り出した。

「例の噂は、やっぱりオンリョウの仕業なんかじゃないよ。」

話し始めると、聞いていた順平が「あ、そこ重要なんだ…」とぼそっと言っていたが、ゆかりは構わず続ける。

「まず、この怪談騒ぎの、そもそもの発端からだけど…校門で倒れてた例の子の話は、確かにちょっと怪談の内容と似てる。でも、１人がそういう目に遭っただけでこんな騒ぎになったのは、何故でしょう？」

《ピンポーン！》

「ダイイングメッセージがあったから！」

公子が元気よくクイズのゲームの解答ボタンを押してそう答える。

すると、ゆかりがなんのこっちゃという、表情をする。

「ダイイングメッセージ？　つーか、被害者、死んでないから…それに何よそのボタン？」

「僕が買ってきたんだよ？」

そういうと、また余計な物を…と呆れた顔をしてからゆかりが続ける。

「て言うか、驚いたよ！　最初の事件のすぐ後に、実は2度も同じ事が連発してたんだから！　怪談と同じシチュエーションで、3人も病院送りじゃ、そりゃ騒がれる訳です。」

うんうんと、勝手に自分で言って納得するゆかり。少しして満足したのか、さらに話を続けてくる。

「えー、では次。被害にあった3人はクラスがバラバラで、一見、何の関係も無いみたいに思えます。でも実は、水面下に共通点があったの。その意外な共通点とは何でしょう？」

「何なんだよ、このノリ。誰のマネなんだよ？　被害にあった3人の共通点…？」

順平が呆れながらも真剣に考えているので、僕が先にボタンを押し解答権を得る。

《ピンポーン！》

「よく出家していた。」

「“出家”じゃねーよ。しかも“よく”って何よ…“出家”じゃなくて、“いえで”してたの！」

「惜しいね、湊君♪」

疲れたように言うゆかりを無視して、僕の健闘を称えてくれる公子。僕も「いやぁ、迷ったんだけどね。そっちだったかぁ。」と、笑顔で答える。

「もういい…で、話戻すけど。その子ら結構ちょくちょく出てたみたい。幾つかワルいグループと関わってて、路上オールとかしてる時に知り合ったみたい。３人とも同じ状況で見つかってんだから、この繋がりはゼッタイ何かあると思う。」

目に強い力を込めてそう言ってくる、ゆかり。そうやって、話を聞いていると電話がかかってきた。

《Ｂｕｒｎ　Ｍｙ　Ｄｒｅａｄ～♪》

「あ、ゴメン。ちょっと電話きたから出てくる。先に話しといて。」

「もう、ちゃんと切るかマナーモードにしておきなさいよ。わかったから、行ってきなさい。」

「うん、ゴメンね。」

そういって、僕はジンからの電話をとり話をするため自室に向かった。

――自室

部屋に戻るとすぐに電話をとる。

《ピッ！》
「遅くなってゴメン。」
『いや、かまわへん。で、いろいろわかったが、いま話してええか？』
「うん、大丈夫。」
言いながら部屋の中を進み、ベッドに腰掛けたとこでジンが話し始めた。
『オマエもなんぼか調べたらしいが、ガイシャらの共通点ちゅうのは、夜遊びしてたっちゅうことやな。』
「うん。なんか、遊んでて出会ったってきいた。」
さっきのゆかりの話を思い出しながら、ジンに相槌をうつ。
『おう、それでソイツラがよぉー入り浸ってた、溜まり場ってのがポートアイランドにあるらしい。駅前から外れの方行ったら雀荘とかあんの知っとるか？』
「映画館とかと逆側だっけ？　あっちにはあんまり行ったことないんだけど。」
言われて、駅前の地理を思い出しながら、そう返事をする。
『なら、あとで地図送るわ。んで、続けるが学生向け掲示板でみっけた情報で、信憑性は分からんが他にも共通点があったんや。』

「うん。」

『なんでも、ソイツラが同級生の女子に、いらんちょっかいかけてたのを何人も見とるらしいわ。で、その女子が事件になる少し前から学校きてへんみたいやな。』

ジンがそう言ったのをきくと、僕はなにか嫌な予感がした。だが、そのまま話をきく。

「それで？」

『ほんで、その女子がこーへんのはイジメを苦に自殺したって言われてるみたいや。やから、今回の事件はその子の怨霊がイジメとったやつらに復讐したんやないかってウワサが出たんが、オンリョウ騒動の原因みたいやな。』

自分の中で嫌な予感がどんどん大きくなっていくが、ジンはそのまま話を続ける。

『ま、情報ソースが掲示板やから、ほんまかどうか分からん。詳しく知りたいんやったら、直接行ってそこにいるチンピラに聞くしかないな。どや？　参考なったか？』

「うん、ありがとう。ねぇ、ジン……イジメられてた子の名前ってわかる？」

『ん？　ちょー待っとれよ……お、あったわ。えっとぉ、2年の山岸…風花やな。これでええか？』

…やっぱり。話を聞いてるうちに膨れ上がった嫌な予感が当たって

しまった。自分の中が怒りの感情で支配され他の感情が消えていくのがわかる。だが、表面上は普通に振舞い返事をする。

「わかった、ありがとう。」

『いや、飯の礼やし気にせんでええ。したら、後で地図送っとくわ。ほなな。』

「うん、じゃあ。」

《ピッ！》

電話を終えると、そのままラウンジに戻った。

――ラウンジ　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

湊君が電話で席を立ってから、気をとり直してゆかりが話し始める。

「では、改めまして。事件の更なる真相に近付くべく、現場取材を決行することにしたから。」

「は？　現場取材？」

自信満々に言ったゆかりに順平が聞き返す。

「被害者の３人が決まって夜明かししてた”溜まり場”ってのがあるらしいの。」

ゆかりがそう言うと順平の表情がみるみる青くなっていく。なにか知ってるのかな？そう思ったとき、順平が恐る恐るゆかりに尋ねる。

「お、おいそれ、もしかして、ポートアイランド駅前の、裏入った

とこの…」

「なんだ、知ってたの？」

「あそこヤバいって！　あそこ、駅のすぐ裏だけど、マジ超いろんなヤバい噂あんだぜ？」

ゆかりが言ってた場所が順平の知っている場所と同じだったらしく、順平が強く行くのを引きとめようとする。だけど、想像しただけで顔色が悪くなるほどの場所なのかな？そう思っていると、ゆかりが続ける。

「そーなの？　なら、尚更みんなで行かなきゃ。ね、楽しみだよね！？」

「ゆかりが行くなら、もちろん行くよ。」

「だよね。」

私たちが言ってると、順平が本気で嫌そうになにか言ってる。

「オレ、行きたくねーなー…あそこマジ、マンガみたいに荒れてんだよ。つか、そこまでする必要あんの、実際！？」

「だって、今まで私たち、先輩に言われたまんま動いてきたでしょ？　このままでいいのかなって、そういう風に思わない？」

急に真剣な表情でゆかりがそういう答えると、順平も思わずなにも反論できなくなる。

「や、そうかも知んないけどさぁ…そこで真顔かよ、ズリぃなー。えぇー、行かなきゃ駄目？」

「決まりね。明日の夜に出発だから、そのつもりで宜しく。」

ゆかりがそう言ったとこで、湊君が2階から降りてきた。それに気付いてゆかりが話しかける。

「あ、湊君。明日ね、ポートアイランドの溜まり場に行くことになったから。ねえ、一緒に来るでしょ？」

「……どうしよう、怖いし遠慮したいな。」

「ちょっと、そういう事言う？　だいじょぶだって。どうせ順平も大袈裟に言ってるだけだって。」

「ん、わかったよ。じゃあ、僕は先にやすむね。おやすみ。」

そういうと、湊君は自室へと戻っていった。だが、後ろで順平はまだ何か言っている…

「あそこってさ、月に何回か“集会”が開かれんだ…で、近隣のワルが一堂に会し、さながら監獄みたいな光景が…つーかあの集会って、話だとモロ明日だったような気が…うわ、ヤベェ…いやホント、マジでヤベェって…」

どんだけビビってんのよ…。そう思いながら、私たちも少し早めに休むことにした。

第二十五話（後書き）

湊は実はキレやすいです。

第二十六話（前書き）

荒垣さんは強いですよ。（遠い目）

第二十六話

6／6（土）
朝――自室
今日は、確か夜から用事がある。だから、僕は学校が終わったあと、風花が本当に行方不明になっているのか確かめるために、風花の家に行くことにした。

放課後――風花自宅前
学校が終わるとすぐに以前、1度きた風花の自宅に向かった。

《ピンポーン》
『…どなたですか？』

少し元気のない声で風花の母親がインターフォンにでたので、用件を伝える。

「すみません、有里です。風花が何日も休んでいると聞いてきました。」

そう言うと、少し時間をおいて母親が答える。

『わかりました。あがってください。』

いわれて僕は家にあがることにした。

――リビング
家にあがると、リビングに通されコーヒーを出された。コーヒーを置いたとこで母親が口を開く。

「あの…お見舞いにきてくれたとこ悪いんだけど、実は風花は今いないのよ。」

「……それはいつからですか？」

「え？」

僕が理由も聞かずにいつからこの家にいないのか、尋ねたことに驚く母親。だが、落ち着くと僕が少しは情報を、もってやってきたことに気付いたのか話し始める。

「一週間くらい前になるかしら。朝は普通に学校に行ったの。でも、何時になっても帰って来なくて、ケータイにも繋がらなくて…なんでも良いの。なにか知っていたら教えてくれないかしら？」

「…すみません。僕も風花がいなくなったのを昨日、知ったばかりでその確認のために今日きたんです。」

「そう…ゴメンなさいね。」

僕に謝ると暗い表情で俯く母親。だが、僕はもう1つ聞く事があったので、それを尋ねることにする。

「あの、風花が最近休んでいるのは病欠と聞いたんですが、何故失踪ということで、学校や警察に届けを出さないんですか？」

「ああ、最初は私たちもそうしようと思ったんだけど、担任の先生に相談したら『失踪されてから1週間も経っていません。お子さんも多感な時期ですしもう少し様子をみてはどうでしょうか？　失踪

だけでなく、それで警察にまでお世話になったとなれば、進学でも就職でも不利にとられます。お子さんの将来のためにもここはもう少し様子を見てからでも、遅くはないんではないでしょうか？』って言われたのよ。確かに相談した時は2日目だったから、様子をみようと思ったけど、もう8日経ってるし……」

そう言って母親は黙ってしまう。E組の担任は江古田か、今日はもう会えないだろうし週明けに話を聞きにいくか。そう決めると、今日はもう帰ることにし「僕も友達にきいてみます。絶対に見つけますから安心してください。」と言って、寮へともどった。

夜――自室

寮に帰るとゆかり達はすでに帰っており、荷物をおいて出かける準備もしていた。僕も部屋に荷物をおきに自室へきた。

『…湊。貴方、大丈夫？』

「…なにが？」

部屋に入るなり、心配するような表情で彼女が僕に話しかけてきた。

『なにがじゃないわよ。明らかに普段の冷静さを失ってるじゃない。そんな状態でチンピラのとこに行ったら、どうなるか分かってるんでしょ？』

「大丈夫だよ。ジンに教えてもらったことの確認にいくだけなんだから。」

『全然、大丈夫じゃないでしょう！　貴方が本気になったら、簡単に人を殺せるの。普段より大人しく見えてるけど、内心じゃ完全に

キレてること分かってるのよ？　体調が悪いとでも言って、行くのを止めなさい。情報ぐらいゆかり達だけでも、手に入れてくるわよ。』

必死に僕が行くのを止めようとしてくる。でも、僕は自分で風花に繋がる情報を手に入れたいんだ。だから、いくら彼女の頼みでもそれはきけない。

「ゴメンね。でも、他人を頼りになんてしてられないんだ。情報は自分で手に入れる。そして、絶対に風花を助ける。」

『1週間以上前よ、無事かどうかわからない…それでもいいの？』

母親に聞いた話では失踪からすでに8日経っている。事件に巻き込まれているいるなら、死んでいてもおかしくない。それを確かめる事になっても良いのかと彼女は聞いてくる。でも…

「…大丈夫。どこにいるかは分からないけど、気配はなくなってない。最近、この力も強くなってるみたいなんだ。」

苦笑しながらそう返すと彼女は驚いた表情をしている。

『湊、貴方…『湊君、準備できた？　ゆかりも順平も待ってるよ？』』

彼女がなにか言いかけたとき、外から公子に呼ばれた。僕は荷物を置くぐらいしか準備はなかったので、音楽プレーヤーをはずし机の上に置いていく。ついでに、引き出しから昔使っていた黒い皮のグローブを取り出し手にはめてから返事をする。

「わかった、いま行くよ。」
返事をしてすぐに公子とラウンジに降りて行った。
『……馬鹿。』
――ラウンジ　〈公子　Ｓｉｄｅ〉
湊君とラウンジにおりると、揃ったことを確認してゆかりが話し始める。
「…という訳で、昨日の約束通り、出かけるよ。」
「すげー、ノリ気だ…ヤベェと思うなぁ、のこのこ行くの。だって女の子2人よ？　エサ持ってくみたいなもんじゃんよー…なんでオンリョーは駄目でこういうのはアリなんだか…」
私たちのことを心配しながら順平がそう言う。こういうとこは良いヤツだよね。そう考えていると、ゆかりが話を続ける。
「駄目とか言わない。見えないモノは誰だって気味悪いでしょ。」
「見える方が怖いだろがっ！　バットとか、光りモンとかさ！」
「もう…フリョーの溜まり場くらい何よ？　ほらほら、急いだ。先手必勝なんだから。」
《ガチャ》
話を終えるとゆかりは先に寮を出ていき、湊君も黙ってついていった。でも、湊君のアレって…

「必勝…？」

「それはいいけど、順平。少し注意しといて、いざとなったらペルソナも召喚するかもしれないから。」

「あ？　なんだよ、不良相手だからってペルソナはマズイだろ。」

「そんな優しいもんならいいけどね…行くよ。」

そういって、私たちも2人の後を追った。

――辰巳ポートアイランド・裏路地

ゆかりの仕入れてきた情報にあった溜まり場にくると、何人もの男女がたむろしている…

「…んだ、あれ？」

「つか制服…あれ、ツキ高じゃん？」

私達が進んでいくとそれに気付いたオールバックの男と、連れの茶髪の男が私達をみて話している。順平はさっきから不良を見て「ヤベェ。想像してたよりずっとヤベェ。」とビビっている。すると、オールバックの男が話しかけてきた。

「ちっと、オマエらさ。遊ぶとこ間違えてんじゃねえの？」

「あ…いや、別に…」

それに順平がビビりながらオドオドと返事をする。

「フゥ…オマエらみたいの来っとシラけんだろ…帰れよ、ヒゲ男くん。」

「ヒ、ヒゲ男くん？　あ、あー、オレの事っスね…」

馬鹿にしながら帰れと言ってくる不良に、ビビりながらも相手を刺激しないよう注意して順平が相槌を打つ。だが、ゆかりが前にでて不良に対して口を開く。

「ここ来るのに、なんで、あんたの許可が要るワケ？」

それを聞いて順平は焦って、ゆかりを後ろに引き戻す。

「ちょっ、おまっ、バカかよ！　オマエあれか!?　空気詠み人知らずか!?」

「なにそれ…て言うか、こんな連中にビビんないでよっ！」

ゆかりの発言をきいて不良たちは「ああ？」と、明らかにこっちを見る目が変わった。そういえば、さっきから湊君は黙って下を向いている。順平のようにビビってるわけじゃないみたいだけど、様子がどうもおかしい。そう思っていると、不良の女子の1人が話し始めた。

「“こんな連中”っつったよ、そのコ。つか、後ろの子も一緒に写メとか撮って流しちゃおーか！　パパとかが気ぃ失うよーなセクスィーポーズなやつ！」

「「きゃはははっ!!　やべ、ちょーウケるっ!!」」

「こいつら、サイッテー…」

女子の1人がそういうと、他の女子たちも一緒になって笑っている。
それをきいてゆかりが表情を怒りに変えながら不良たちに向かって言うと、言われた不良の中の1人。最初に話しかけてきたオールバックの男が立ち上がりこっちに近付きながら話しかけてくる。

「あちゃー。彼女いま“サイテー”とか言ったよね。ヒゲ男くんも大変だ。こんなアグレッシブなコと一緒だと…サ！！」
《ドカ！》

言って男は順平に向かって蹴りを放った！

「ぐっ！　痛って。」
《どさっ》

そう。男が蹴りを放ったはずだった。だが、実際に攻撃をくらい後ろに倒れたのは男の方だった。よく見ると、後ろにいたはずの湊君が前に出て回し蹴りの体勢で止まっている。そして、足をおろすと不良たちに話しかけた。

「ねえ…ちょっと、訊きたい事があるんだけどさ。」

いつもよりどこか落ち着いた声で湊君が不良たちに話しかけ、1歩1歩近付いていくと、何が起こったか分からなかった不良たちも状況に気付き各々鉄パイプやバットを持って立ち上がった。そして、蹴られたオールバックの男もお腹を押さえながら立ち上がり湊君に向けて怒鳴る。

「上等じゃねぇか…テンメェ、いま三途の川、渡ったぞ！　ただで帰れると思ってんのか！？」

「いいから質問に答えてよ。ここに来てた子で事件にあった子らの話を聞きたいんだけど…」

湊君がそう言うと、男たちが一斉に湊君に襲いかかる。

「湊君！」

心配してゆかりが叫ぶが、状況への理解が追い付かない。中学時代に相手をしていた不良はてっきり1対1の状況を作り相手をしていると思っていた。だが、目の前で起こる“答え”は想像と全然違った。

――溜まり場　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

「おらぁ！」

キレたオールバックの男が殴りかかってくる。だが、遅い。その上、キレているからか力が入りすぎて大振りになっている。これではまるで話にならない。そう思いながら、拳を避けて鳩尾に膝を入れる。

《ドゴッ！》

「うっ…」

僕の膝をくらい身体をくの字にして倒れるオールバック男。それを一瞥もせず、そのまま前に進んで、鉄パイプを横なぎに振ってくる男の攻撃を跳んで避けながら、こめかみに蹴りをいれる。相手は攻撃をくらい鉄パイプを手から離し、そのまま転がり倒れる。ついでに後ろから殴りかかってきていた不良も、そのまま逆立ちしてから

手で跳び顎を蹴りあげる。

「がぁ！」「うあ！」

「ねぇ、話を訊きたいだけなんだって。こういうのやめようよ。」

蹴りあげたときに男は、蹴られた箇所から鈍い音をさせながら後ろに倒れて意識を失う。それを気にせず、残りの不良たちに僕がそう言っても相手は話を聞かず僕を攻撃してくる。

「一気にかこめ！　こいつ、化けもんだ！」

「死ね、オラァ！」

言って、何人もの男が武器を持って囲んでくる。そしてその中の１人が、金属バットを持って殴りかかってきた。だが…

「なあ？　本気でやめようぜ？　お前らじゃ、勝てないってわかるだろ？」

言いながら、殴りかかってきていたクズに裏拳をバットに当てて相手ごと吹き飛ばす。吹き飛ばされた相手は、どうやら裏拳を当てたバットがそのまま相手の顔面を襲ったようで、鼻血を出しながら喚いている。それをみたクズの仲間が驚いている。

「なっ、なんなんだよ、この化けもんは！？」

「あ？　人に向かって化けもんはねぇだろ。ほら、諦めて質問に答えろって。」

次々とやられていく仲間を見たクズが、ビビって失礼なことを言ってきたので頭を掴んで地面に叩きつけ意識を刈り取る。そうやってる間も、卑怯にも後ろから蹴りを放ってきたクズを回し蹴りを脇腹にあて、クズの骨から鈍い音をさせたまま蹴り飛ばす。

蹴り飛ばし相手が転がっていくのを見ていると、鉄パイプを両手で持ち頭めがけて振り降ろしながらでかい図体したヤツが向かってきた。その相手を一瞬だけみると、振り降ろしてきた武器を片手で掴み少し下に下げる。そして驚いてる馬鹿がバランスを崩したと同時に腹に膝をいれ行動できなくさせる。

「ヒッ、ヒィ!?　殺されるー!?」

仲間が次々とやられていく中、そう言って逃げようとするクズに向けて掴んでいた鉄パイプを槍のように投げて足の間を狙う。すると、進むために入れ替えてた足を突然飛んできた鉄パイプにとられ、男は叫び声をあげながら転ぶ。

「うわぁー!?」

転んで足を挫き上手く起き上がれないクズに近付き、逃げれないように男が押さえてる方の足を踏みながら尋ねる。

「ぐぁあああ!」

「うるせぇな、黙れよ。…でさ、ここに来てた女子で最近事件にあったヤツらが誰かイジメてたって本当か?」

「し、しらねぇー。お願いだから助けてくれー!」

言って腕を顔の方にあげて怯えるクズ。…なんだ、知らないのか。
そう思って踏んでたクズを蹴り壁際へと転がすと、後ろからまた1人襲いかかってきた。

「おらっ、もらったぁ！　死ねぇ！」

《ドゴン》

考え事をしていて攻撃を“避けなかった”ら、腰にジャラジャラと鎖をつけたそいつの金属バットが頭に直撃した。

金属バットで殴られたが怪我はない、ただし痛みはあるし考えているときに邪魔をされた怒りはある。怒りから目に殺意をこめて、殴ってきたゴミを睨みつけると、殴った俺にダメージが見られず戸惑っている。

「な、なんで倒れ「…いってぇな。そんなにぶち殺されてぇか！」…え？」

怒りのままに言いながら、攻撃してきたクズの頭を掴み地面に叩きつけ、バウンドしたところを壁まで蹴り飛ばす。

《ゴッ！》
「がぁ！」

相手は壁に衝突し声をあげるが、それを無視してそいつの近くの壁を駆け上がる。そしてある程度まで駆け上がると、跳んで回転しながら落ちていく。落下と回転の勢いを加えた踵落としをするためだ。

「望み通り死ねぇ！！」

《ガッ》

頭に向けて蹴りを振り降ろそうとしたとこで乱入者に蹴りを受け止められた。

「バッカ野郎が！　本気で殺す気か！」

――溜まり場　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

「おらっ、もらったぁ！　死ねぇ！」

《ドゴン》

そう言って不良の攻撃が後ろを向いてた湊君の頭に直撃した。

「「湊君っ！！」」「湊っ！！」

私達がそう叫ぶと、湊君の様子がさらに変わり、顔をあげて叫んだ。

「…いってぇな。そんなにぶち殺されてぇか！」

《ゴッ！》

「がぁ！」

言いながら攻撃してきた相手の頭を掴んで顔を地面に叩きつけると、叩きつけられた勢いで浮いた身体を強烈なキックで壁まで吹き飛ばす。すると、あまりの変わりように驚いた順平たちが話しかけてくる。

「お、おい。湊のやつどうしちまったんだよ！」

「これが言ってた中学時代の湊君なのっ！？」

「知らないわよ！　あんな口調の湊君だって見た事ないのに。」

そう、こんな湊君は一度だってみたことがない。それにあの口調だって…考えていると、壁に衝突しその場にうずくまる不良に向かって湊君が駆けだす。

湊君は相手の横の壁を駆け上がっていく。そしてある程度まで駆け上がると、跳んで回転しながら落ちていく…っ！？

「湊君、ダメェ！！」

「望み通り死ねぇ！！」

《ガッ》

そのまま相手の頭に向けて振り降ろされるかと思った蹴りは、顔をガードするよりも高い位置で腕をクロスした誰かに受け止められた。あれは…

「バッカ野郎が！　本気で殺す気か！」

「あ？　荒垣さん、なんでこんなとこにいるんですか？」

湊君の蹴りを受け止めたのは、いつかの病室でみた真田先輩の知り合い。荒垣さんだった。それに気付いた湊君も宙返りしながら距離をとって、尋ねる。

「んなこたぁ、どうでもいい。お前はなにやってんだ！　あのまま止めなきゃコイツは死んでたぞ！　人殺しになりてえのか！」

「……どうでもいいじゃないですか。ソイツ1人が死んだとこで、世界にはなんの影響もありませんよ。ってか、邪魔しないでください。俺はこいつらに話し聞きにきたんですから。」

「ちっ…言っても分からねえなら、力づくで止めるしかねぇみてえだな。オイ、お前らは倒れてるやつ連れてさっさと逃げろっ、殺されるぞ！」

言われても興味なさそうに返し、尚も不良たちを攻撃しようとする湊君。そして、その様子から説得を諦めた荒垣さんがそういうと、不良たちは一斉に仲間をつれて逃げ出した。でも、本当にどうしたの？あんなの湊君じゃないよ。いざとなったら…そう思い順平に話しかける。

「順平、いつでも召喚できるようにしといて。」

「えっ、でも…」

「いいから。言ったら、湊君に向けて攻撃して、じゃないと大変なことになる。」

真剣な表情で言うと、順平にもいまの湊君の危険さがわかったのか、「わかった」と言って召喚器を準備する。その間も、注意して向こうの2人を見てると、湊君が口を開く。

「あーあ、貴重な情報源を逃がしちゃって。どうしてくれるんです？」

「馬鹿がっ。逃がさなきゃ、お前が全員殺して喋れなくしてただろ

うが。」

「そんな事しませんよ、めんどくさい。ってか、逃がした罰ぐらい受けてくれますよね？」

「ああ。先輩として、殺人鬼の相手ぐらいしてやる。お灸据えてやるから、さっさとこい。」

そう言って荒垣さんが構えると、自然体で立っていた湊君が一気に荒垣さんに近付き腰で溜めた右拳を放つ。っ！？荒垣さんったらそのまま受けようとしてる！

「ダメ！避けて！」

私がそう叫ぶと、すんでのところで荒垣さんはその攻撃を上体を反らし後ろに逃げることで回避する。

「っ！？　うおっ！」

「ふーん…良い反射神経してますね。公子の言った通り避けてなきゃ、腕が使い物にならなくなってますよ。でも、その避けた体勢じゃ次は避けれないでしょっと！」

言いながら湊君は、後ろに避けて次の体重移動に移れない荒垣さんのお腹へ肘で攻撃する。

「がぁっ！」

攻撃をうけそのまま後ろに飛ばされ、なんとか受け身をとる荒垣さん。でも、湊君は構わず次の攻撃をするために迫る。

「お灸はどうしたんです？　先輩。」

「ああ…そんなに欲しけりゃ、くらっとけ！」

そういって今度は湊君の放った攻撃の拳を避け、頭突きをくらわす荒垣さん。だが、湊君はくらった瞬間に後ろに跳んでダメージを逃がした。それを見て荒垣さんは舌打ちをしながら口を開く。

「ちっ……随分と可愛くねえ後輩だ。なあ、殺人鬼？」

「やだなぁ、先輩が弱すぎるだけでしょ。もう少し頑張ってくださいよ。」

言い終わると湊君は、さっきよりも速いスピードで近付き、頭を狙って右足で蹴りを放つ。

「ほら！」

「ぐっ…オラァ！」

湊君の蹴りを左腕でガードしながら、お返しとばかりに荒垣さんは右手で殴りかかる。

「甘いって。」

「っな！？　がぁ！」

だがなんと湊君はガードされた足を起点にその場で回転し、荒垣さんの攻撃を避けた。そして、着地と同時に、拳を放ち隙だらけにな

っている右の脇腹に回し蹴りをあて荒垣さんを蹴り飛ばした。ノーガードで蹴られ飛ばされた荒垣さんは壁に激突し、地面に倒れこむ。しかし、それをみても湊君は尚も追撃する。

「はい、おわりっと。」

最初と同様に拳を腰で構えながら、そう言い放つ湊君…いましかない！

「順平っ！！」

「わかった！」

ずっと準備していた順平は私に言われるとすぐにペルソナを呼び出す。

「いけ、ヘルメス！」

「オルフェウス、いって！」

私たちの呼びだしたペルソナが、荒垣さんに止めを刺そうとしていた湊君に襲いかかる。どうかこれで止まって！

《《ドゴン》》

荒垣さんに届く前にペルソナが湊君に襲いかかったはずだった。だが、湊君はこっちを向き片手で1体ずつ攻撃を受け止めていた。

「…なにやってんだ？　言っただろ、次は容赦しないって！」

言いながら湊君は手を離し、2体にそれぞれの攻撃を受けていた手で抜き手を放ち消し去る。

「きゃあ！」「うわぁ！」

ペルソナの受けた攻撃が衝撃として私達を襲い、あまりの威力に声をあげてしまう。そして、その間に湊君はダメージで立てない荒垣さんに再び歩いて向かって行く。

「じゃあ、もう終わったんで死んじゃっ「ダメッ！　もういいから、他の方法さがすから、元に戻ってよ湊君！」…ゆかり？」

荒垣さんに向けて拳を振り降ろそうとした湊君に、いつの間にか駆け寄っていたゆかりが抱きつきひき止める。

「何があったのか分からないけど、そんな風にならないで！　そんな湊君、私イヤだよ！」

――溜まり場　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

荒垣さんに止めを刺そうとしたら、後ろからゆかりが抱きついてきた。

「何があったのか分からないけど、そんな風にならないで！　そんな湊君、私イヤだよ！」

いまの俺はイヤねえ…ま、これ以上やっても無駄だし、もういいか。そう思って、僕はゆかりに話しかける。

「わかった。泣かせてゴメンね、ゆかり。僕はもう大丈夫だから。」

「…本当？」

言いながら腕の力を弛めるゆかり。拘束が解かれるとゆかりの方を向き、抱きしめながら頭を撫でる。

「うん。今はいつもの僕だよ。だから、安心して？」

「馬鹿っ！　本当に心配したんだから…」

そう言ってゆかりは僕の胸に顔を埋めて静かに泣き始めた。…あ、荒垣さんにも謝らなきゃ。

「すみません、荒垣さん。ご迷惑おかけしました。」

「ちっ…人があんだけ苦労したのに、テメェの女の言う事なら聞きやがるのか。ったく、デタラメな野郎だなお前は。」

ダメージが抜けてきたのか、壁に手をつきながら立ち上がり呆れたように言ってくる荒垣さん。僕も、それに笑って返す。

「フフ、すみません。でも、彼女じゃないですよ？　僕の新しい家族になってくれるって言ってくれた人です。」

「あ？　その歳で結婚まで約束してんのか？」

「っ！？　ち、違います！　そういう、意味で言ったんじゃありません！」

荒垣さんに言われると、慌てて離れて誤解を解こうとするゆかり。そうして、話していると公子と順平がやってきた。

「…もう大丈夫なんか？」

「うん、ゴメンね。止めようとしてくれたのに。」

「いいけどよ…公子ッチにはちゃんと謝っておけ。」

順平がそう言って横に避けると、後ろからきた公子が僕の前にきた。表情は下を向いていて分からない。

《パンッ！》

顔をあげたかと思ったら急に頬を叩かれた。そして、顔をあげた公子は鋭い視線で僕をみながら口を開く。

「なんであんな事になったの？　今回は誰の命も危険になってないよね。なのに、なんであんな風になって人殺そうとまでしてんの？　答えなさいッ！！」

どういったものかと思いながら、とりあえずここに出入りしていた荒垣さんに尋ねてみる。

「…荒垣さん。ここによくきてた子で事件にあった被害者の話。“怪談”はご存知ですか？」

「…ああ、ウワサだがな。病院送りになった女どもが、その辺にタムロって毎日話してた。“山岸”って同級生を色々イジってるってな。」

荒垣さんの話をきいてジンの情報が正しかった事を知る。すると、

順平がそれをきいて口を開く。

「山岸って…E組の“山岸風花”？　あいつ、イジメに遭ってたのか…」

「ソイツだ。おかげで騒がれてるぜ…犯人は、その山岸の怨霊だ、とかな。」

「山岸さんの“怨霊”って…え!?　それ、どういう事ですか?」

なぜ生きてる学校の生徒が怨霊などと言われるのか、疑問に思ったゆかりが驚きながら聞き返す。だが、荒垣さんは聞かれたこと自体に驚きながら話し始める。

「お前ら…知らねえのか?　その山岸ってやつ、死んでるかもって。もう1週間かそこら、家にも戻ってねえって話だ。」

「どうなってんだ?　山岸って、確か、病気だって…つか、行方不明って事じゃねえか!」

説明をきき事態の重さを理解して順平がそう言う。そして、ゆかりも深刻な表情で口を開く。

「これ、もう“怪談”じゃないよ…E組の担任って“江古田”でしょ?　アイツ、この事知ってんのかな…」

「…ああ、知ってる。今日、風花の家に言って聞いて来たんだ。そしたら、江古田は今回の失踪が大ごとになったり、警察沙汰になったら本人の進路にも影響が出るから様子を見ようって言ったらしい。だから、俺は…」

「コラ！　また、戻ってる。気をつけなさい。そう何度も抱きついて止められるか、分かんないんだから。」

そう言って僕の顔を両手で掴み自分の方に向け、目を見ながら話すゆかり。フフ、ゆかりにはかなわないな。そう思いながら、公子に聞かれた理由を答える。

「僕は人に集めてもらった情報で今回のことを知ってたんだ。でも、風花のことはネット掲示板の情報だったから、その人に知るならここで直接聞くしかないって言われて…。」

「グローブ着けてるし、なんかおかしいと思ったらそういうこと。……でもね、だからって簡単に人殺そうとする理由にはならないのよッ！！」

話をきいて僕の様子がいつもと違った理由を理解した公子。だが、それは相手を殺そうとまでする理由にならないと、強い視線で睨みながら怒ってくる。だから、僕も素直に答える。

「知らないよ、そんな事。ヘラヘラ笑って誰かをイジメるようなヤツ、殺したところでどうも思わない。」

「っ！？　命をなんだと思ってるの！」

言いながら怒った公子が僕を再び叩いてくる。

《バシン！》

だが、そんなもの素直に受ける気はないので、腕を掴み話をする。

「逆に訊くけど、なんでそんなに怒ってるの？　毎日、世界では何人の人間が死んでるか知ってる？　寿命・病気・飢餓・事故・事件と理由はいろいろあるけど、１０万人じゃきかないんだよ。それをいちいち気にして涙を流すわけじゃないだろ？」

そう問いかけるも、全員が黙って僕の話を聞いている。なので、僕もさらに続ける。

「じゃあ、知り合いでもない不良が１人死んだとこで一緒じゃないか。ただ、世界よりは身近な場所で１人知らないやつが殺された…そんだけのことだよ。それが自分のしたことでもね。それなら毎日、人間の食料になるために殺される動物の方がまだ情がわくよ。」

言い終わると、掴まれていた腕を振りほどき僕の胸倉をつかみ公子が怒鳴ってくる。

「…そんな屁理屈ばっかこねてないで、命のことをもっと考えなさいよ！　知らない人なら死んでもいいなんてあるわけないでしょうがッ！」

「…公子がそれを言うの？　誰が僕を作ったと思ってるんだ。桐条が原因をつくり、草摩が僕を殺したんだろ？　確かに、公子に伯父さんと伯母さんは何もしてない。むしろ、再び命を与えてくれた。それには今も感謝してるさ。」

そこで、１度言葉を切り下を向く。そして、顔をあげて公子の目を見ながら言葉を続ける。

「……でもね、公子も僕を殺した草摩なんだよ。いまは桐条と草摩

の人間を怨んじゃいない。だがそれでも、命への執着を奪った草摩の人間がそれを言うのだけは許されないだろ？」

「っ！？　そ、それは…」

そう言って、そのまま鋭い視線で見返すと、戸惑い視線を逸らす公子。すると、そこで後ろから声がかかる。

「その辺でやめとけ。お前も別にソイツを責めたい訳じゃねえだろ？　知りたい事もわかったなら、さっさと帰れ。」

「わかりました、帰ります。話を聞かせてくださり、ありがとうございました。」

「…もう来んな。」

そう言うと、荒垣さんは去っていった。僕たちも寮に帰るためみんなの再起動を促す。

「じゃあ、帰ろうか。…公子、ゴメンね。」

「…うん。ねえ、今日は一緒に寝ても良い？」

「公子の部屋ならね。」

「じゃあ、薄いネグリジェ着て待ってるから、風邪ひく前にきてね。」

言って笑顔を公子が向けてくると、ゆかりと順平も動き出す。

「ちょっと、この前は姉弟とか言っておいてなんでそんな格好するのよ！」

「ってか、湊。オマエ、最近ずっと公子ッチかゆかりッチの部屋で寝てんだろ！　いい加減にしろ！」

そんな風に騒ぎながら僕たちは帰り、先輩たちに今日の事を伝えると、

「しかし山岸が行方不明だとは…ただの怪談騒ぎだと思って蓋を開けてみたら、とんだ大事じゃないか。これは何とかしないとまずいな…」

と、美鶴さんが言い。真田先輩からは、

「まったく、あんな場所に行くなんて無茶にも程があるぞ。情報の収穫は認めるが、今後はもう少し節度を持って行動してくれ。」

という言葉をいただいた。まあ、これからは気をつけようと思う。順平も「オレもう二度とあそこには行かねえからな！」と言ってたしね。

余談だが、公子の部屋に行くと、本当に薄いネグリジェを着ていた。まあ、下着も着てたけどね。そして、しつこく感想を聞いてきてウザかったので、「ゆかりの方がすごい」とテキトーなことを言ったら、「まだ成長途中だもん」と泣いていた…。

第二十六話（後書き）

実は戦闘シーンは何度か書きなおしてます。描写を細かく書いてみたりとかね。それと、湊は快楽殺人ってわけじゃなく、人も虫みたいに簡単に殺そうとしてしまうだけです。じゅうぶんヤバイですが、クズや邪魔をする者しか狙いません。

第二十七話　前編（前書き）

鳥海先生が良い人っぽくなっていますが、そんなことはありません。
最初から良い人ですから。

第二十七話　前編

6／8（月）
朝――自室
おとといの夜、溜まり場で聞いた話でジンの情報が正しかったことが分かった。今日は、行方不明になっている風花について、教師に聞きに行かなくては。…大丈夫、今日はおととといよりは落ち着いてる。そう、確認しながら荷物をもって学校へ向かった。

――職員室　〈公子　Ｓｉｄｅ〉
学校に着き教室に荷物をおくと、山岸さんが行方不明になっている件を江古田先生に訊きに来た。…？江古田先生の席には、先客がいて桐条先輩と、前に廊下で見た女子生徒だ…。考えてると、ゆかりが口を開く。

「あれ、桐条先輩、どうしてここに？」

「君らと同じさ。先生、事情を伺いに参りました。“山岸風花”という生徒について…」

「違うのっ！！　違うのよ…こんな…こんな事になるなんて、思わなかった…風花…」

桐条先輩が山岸さんの話題を出すと、茶髪の女子生徒はそういって明らかに冷静さを失っている。そして、それを見てゆかりも見覚えがあったのか、「あれ…あなた、確か、前に…」とこぼした。続いて桐条先輩も女子生徒に尋ねる。

「山岸をどうしたんだ？」

「おいおい、桐条君、そんな言い方ないだろう？　【森山（もりやま）】も困ってるじゃないかね。なぁ、森山。話したくなければいいんだぞ。お前が余計なことを言って山岸が変に思われてもいかんよ。」

桐条先輩が尋ねると、江古田先生がそう言って口をはさんできた。だが、森山と呼ばれた女子生徒はそのまま語り出す。

「風花ってさ…ちょっと突っついただけで、いつも世界の終わりみたいな顔すんだ…すぐ分かったよ…コイツ優等生のクセに、根っこ、アタシらと同じだって。どこ踏んづけときゃ立てないか…アタシには丸分かりだった。…だから！　あの日もほんの遊びのつもりだったの！　5月29日…風花を体育館に連れてって…外から鍵かけて…」

「ちょっ、おまっ、閉じ込めたっつー事かよ!?」

話を聞き、順平が思わず驚きの声をあげる。そして、森山さんは話を続ける。

「夜中んなって、自殺とかされるとマズいからって、マキが1人で学校行ったんだ…でも、マキ帰ってこなくて、翌朝…」

「校門で倒れてるのが見つかった、か…」

「風花を出さなきゃって体育館行ったら、まだ鍵が掛かったまんまで…ヤバいって、すぐ開けたんだけど、そしたら風花、消えちゃってて…アタシら、みんなビビって、次の晩から夜な夜なあの子を探しに行ったの…でもその度、行った子が帰ってこなくて…みんな次々、マキみたいに…！」

途中、公子が言葉を引き継ぎ、再び女子生徒が語り出すが1度はもどった冷静さを徐々に失い目に涙を溜める。話が終わると桐条先輩が江古田先生に問いかけた。

「なるほどな…ところで、連日の山岸風花の欠席を、先生は”病欠”と届けていらっしゃる。だが実際は行方不明で、先生はそれをご存知だった筈だ。…どういうおつもりです？」

「何を言ってる。生徒のためにした事だよ。みんな色々、将来の為に都合があるんだ。子供の君らには分からんだろうがね。」

江古田先生はそんな風にいう。だが、私達はそれを聞いて表情を険しくする。湊君が黙って下を向いてるのが気になるが、桐条先輩が再び先生に尋ねる。

「失踪して警察ざたになる問題児など、ご自分の組には居ないという事ですか。」

「ほ、本人のためだ。こんな事で学歴に傷がついてはいかんだろ？親御さんも、そういう話で納得してんだよ！」

自分の世間体を守るためにこんなこと言う人間が教師をしてるのか！他の人も同じように思ったようで怒りの表情を浮かべている。そして、聞くに堪えかね先輩も教師に対する言葉使いを捨て、江古田に言い放つ。

「保身の為には教職の本分すらも捨てるか。下衆め…！」

「ゲっ…いや…そんなふうに……言わなくたってさぁ…」

言われた江古田がそうやってしどろもどろしていると、色が変わるほど強く拳を握りしめた湊君が近付いていく…っ！？

「……お前、もう黙れ。」

「湊君、ダ「机ッ！！」」

《ドゴンッ！！》

「「「「……。」」」」

拳を握りしめ、それを振り降ろそうとする湊君を止めようとしたとき、突如女性の声が聞えてきたと思ったら、その直後に職員室中に響き渡る大きな音がした。

そして、舞った埃がおさまると、そこには机に拳を振り降ろした湊君と、真ん中から割れるように変形し、脚まで歪んでしまった江古田の机があった。

その光景をみて、職員室中の人間が言葉を失っていると、先ほどの声の主に話しかけられた。

「ふぅ……よく我慢したわね。でも、手は大丈夫？」

「鳥海先生……大丈夫です。」

鳥海先生が湊君に怪我はないか尋ねると、先生の方を向き手を何度か握って大丈夫だと返す湊君。それを聞くと笑顔で湊君の頭を撫でてから、厳しい表情を江古田に向ける。

「江古田先生、先ほどの話は聞かせて頂きました。最初は、国語科や学年内の話に留めようと思いましたが、内容や報告を遅らせた理由があれですので、この件は学園全体の職員会議にまわさせて頂きます。よろしいですね？」

先生がそう言うと、江古田は目の前で起こった事のショックから立ち直れてないのか、「は、はい…」とだけ返していた…憐れだなぁ。

「こっちはこれで良いとして…湊くん。一応、保険室で手をみてから教室にいきましょうか。そういう訳だから、あなたたちは先に行って、1限目は先生が行くまで自習って言っておいてくれる？」

「はい、わかりました。」

先生に言われて返事をすると、私達は教室へ行くことにした。余談だが、壊れた机は新しいのを持ってきて、請求は桐条にまわせと先輩が教頭先生に言っていた。

――玄関ホール

職員室を出た後、私達は教室に戻る前に森山さんに、なにか知っていることがないか尋ねることにした。

「病院へ運ばれた君の友人について、なにか、気付いた事は無いか？　どんな細かな事でもいい。」

先輩がそういうと、なにかなかったか必死に考える森山さん。そして、何か思い出したのかハッとした表情になる。

「……”声”だ…自分を呼ぶ”声”…そうだ…みんな病院送りになる前の晩…そういえば同じ事言ってた…気味のワルい”呼び声”を

聞いたって…」

「声…？」

聞いて順平がなんの事だと、不思議そうにしている。だが、私たちはそれで気付いた。ゆかりも気付いたらしく、驚いた表情で先輩に話しかける。

「先輩…もしかして、今回の事件って！？」

「間違いない…ヤツらの仕業だ。誰が影時間に落ちるかを事前に知る方法は無いとされてきたが…なるほど、”声”か。つまり影時間へは”落ちる”のではなく、ヤツらによって”落とされる”という事だな。実際の被害を目の前にすると思い知る…ヤツらは確かに、人間を”狙っている”んだ。シャドウ…紛れも無く人類の敵だ。」

衝撃の事実をきいて感心すると、先輩は目に力をこめてそう言い切った。そして、情報提供者の森山さんは次のターゲットになる可能性があるので、先輩が寮に泊まるように言う。

「今夜は、私達の寮に泊まるがいい。それが一番安全なはずだ。もしも”声”を聞いてしまったら、直ぐに教えるんだ。何かに呼ばれたように感じても、決して部屋から出るな。これさえ守れば、君は助かるだろう。…そして、おそらくは”山岸風花”もな。」

そう聞くと森山さんは「風花…」と心配するように呟いた。森山さんに言い終わると、先輩は私たちの方を向き口を開いた。

「草摩。それから伊織、岳羽。放課後、生徒会室に集合だ。そこで今夜の作戦について説明する。」

「こ、今夜ッスか！？」

「今夜、山岸風花を救出する。おそらく、彼女はまだ、この学園から出ていない。それから、湊にもこの事を伝えておいてくれ。」

「わ…分かりましたっ！」

話を終えると、私たちはそれぞれの教室に向かった。

――保健室　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

江古田の机を破壊したあと、鳥海先生に連れられて保健室にきた。

「失礼しまーす。…あら？　江戸川先生いないのかしら。まあ、いいか。とりあえず、座ってくれる？」

「…はい。」

先生にいわれ、長椅子に腰かける。少し待っていると、先生が湿布やら包帯やらいろいろ持ってきた。ってか、勝手に持ってきていいのか？そう思っていると、先生は持ってきたものをテーブルに置き、隣に腰掛けてきた。

「じゃ、手をみせてくれる？」

「どうぞ…」

そういって、右手をみせると触ったりおしたりして調べてきた。すると、調べ終わったのか持っていた手を離し、袋から湿布を取り出し半分の大きさに切りながら話しかけてきた。

「みた感じじゃ、異常はなさそうだけど一応、湿布貼っておくわね。」

「ありがとうございます。」

「いいのよ別に。……それにしても湊くんって力強いのね。先生、驚いちゃった。」

湿布を貼りその上から包帯を巻きながら、そう言って先生は笑いかけてくる。

「けど、手を出そうとしたのはマズかったわね。もしあのまま手を出していたら、相手は重症になっていたわ。あなたは普通の人よりかなり強い力を持ってる。それに身体も丈夫みたいね。」

巻き終えても僕の手を両手で包むように握ったまま、先生は続ける。

「でもね、普通の人はそこまで頑丈にできてないの。別にあなたがおかしいって言ってるんじゃないのよ？」

「はい、わかってます。」

「うん。でね、怒ったからあれだけの力が出たわけじゃないでしょ？　あなたは自分の力の強さを知っていた。なら、それをコントロールしないと駄目。人でもなんでも簡単に壊せてしまうの。だから、ちゃんとコントロールしてセーブすること。わかった？」

そうやって僕の目を真っすぐみて、先生は言ってくる。…先生の言う事はわかるけど。

「……僕はアイツや風花をイジメてたやつを許せません。自分勝手な理由で他人の心をきずつけるようなやつは。」

「…そうね。湊くんがやってなきゃ、私が叩いてたかも知れないわ。でもね、その人にだって友達や家族がいるの。だから、たとえ自業自得でもあなたが大怪我を負わせて、憎まれるようなことをしてはいけないの。」

小さい子に良い事と悪い事の区別を教えるように、優しく先生は僕にいってくる。だから、僕はさらに聞き返す。

「じゃあ、誰がそいつらを裁くんですか?」

「難しい質問ね。けど、それは大人の仕事よ。あなたは力も強く、頭も良いわ。でも、まだ子供なの。だから、そういうのは信頼できる大人に相談してみなさい。真剣に話せば相手もきっと力を貸してくれるわ。」

そう言われたので「…先生も?」と聞くと、「当たり前でしょ。」と笑顔で言われ、頭を撫でられた。今日の先生はお母さんみたいでありお姉ちゃんのようでもあって、撫でられて安心したし嬉しかった。

僕たちはそのあと、教室へ戻り授業を受けた。そして、午後の授業に江古田の授業が入っていたが体調が悪くなったとかで、代わりに江戸川先生のオカルトを習った。今度、江古田に呪いをかけてみようかな…

放課後——生徒会室

授業が終わり放課後になると、公子たちから生徒会室で風花救出の作戦会議するからと言われ、生徒会室にやってきた。集まったみんなは、それぞれ思いつめた顔をしている。すると、美鶴さんが口を開いた。

「今夜、この学園への潜入作戦を行う。目的は”山岸風花”の救出だ。」

「あの、イマイチ分かんないんスけど、山岸って、ガッコの中に居るんスか？」

「しかも、なんで夜に？　０時になっちゃったら、学園は…」

順平とゆかりが思わず聞き返す。ってか、ゆかりはそこまで理解してんならなんで分からないんだろ。そう思っていると、美鶴さんが答える。

「その通り。山岸もそうやって、タルタロスに迷い込んだんだ。」

「じゃ、まさか山岸さんって、体育館に閉じ込められてからずっと…」

驚きながら恐る恐るゆかりが言うと、美鶴さんが暗い表情で「…そうだ。」と答えた。だが、それをきくと順平はさらに驚きの声をあげる。

「そんな！　１０日も前の話じゃないッスか！　それ…どう考えても…」

「そんなことないよ。タルタロスにいるなら影時間に取り込まれて

るってことだもん。時計が止まってるから正確には分からないけど、向こうでは時間的にこっちの1日にも満たないくらいしか経ってないんじゃない？」

驚いて冷静さを失っている順平を落ち着かせるため、公子が普段通りの喋り方でそう説明する。ゆかりも「言われてみれば…」と納得しているみたいだ。そして、真田先輩も少し明るい表情で話を始める。

「草摩の説明にもあったが、恐らく山岸はあの時からずっと影時間に居るんだ。つまり１０日と言っても、山岸にとっては影時間を足し合わせた分しか時が過ぎてない。生存の可能性はある。」

そう言って、獰猛な笑みをしながら拳をギュッと握る。救出できるかも知れないとわかって喜んでいるのだろう。それにつられるように順平も嬉しそうに言う。

「おおっ、マジっスか！？　あ…でも影時間って、慣れたオレらでも、居るだけで結構バテるじゃないスか。あれを１０日分ぶっ通しってのは…」

「そう言えば、そうね…それに、たとえ見つかっても、場所によっては辿り着けるかどうか…」

最初は嬉しそうにしていたが、それでも生存の可能性が低いことにトーンダウンしていく順平。同じく、冷静に考えてしまい悪い事しか思い浮かばないゆかり。だが、真田先輩は声をあげる。

「なら、このまま見殺しにするのかっ！　…方法はある。山岸と全く同じ方法で中に入るんだ。同じ場所は行って０時を待つ。そうすれば短時間で辿り着ける。」

「その方法、大丈夫なんですか…？」

真田先輩の言った案が大丈夫なのか、心配そうにゆかりが尋ねる。

「正直に言えば、私はこの作戦には諸手を上げて賛成はできない。最悪、二重遭難という可能性もある。しかし…」

「助かる可能性があるのに、放っておくなんて俺には出来ない……後悔したくないんだ。お前らが行かないなら、俺1人で行く。」

美鶴さんも安全かどうか不明な作戦にあまり乗り気ではないようだ。だが、真田先輩は自分1人でも行くと言い始めた……ウゼェなコイツ。

「死体が1つ出来上がりってね。んで、僕たちはその先輩の死体を回収すれば良いんですか？」

「な、何を言ってるんだ？」

質問の意味がわからず真田先輩が聞き返してくる。なので、僕も話を続ける。

「え？　だって、どこにいるのかも分からないのに単身助けに向かうんでしょ？　下手したら、上層部のエリアボスのフロアに行くかも知れないのに、無事で済む訳ないでしょう。」

僕がそう言うと、みんなも思わず黙ってしまう。だが、それでも諦めきれないのか先輩は下を向いて拳を震わしている。…ふぅ、まあ少しは頭が冷えたかな？そう思い口を開く。

「人には勝手な行動するなと言っておいて、自分もやってちゃ説得力ないんですよ。まぁ、どうやっても助けたいって気持ちは買いますけどね。」

「湊君…。」

「じゃあ、こっちの話に移ります。まず、風花はまだ生きてます。」

そう言うと暗くなっていたメンバーが驚いた顔をしてこっちを見てくる。そして、美鶴さんがもたらされた情報に困惑しながら尋ねてくる。

「湊、どうしてそんなことがわかる?」

「簡単です。どこにいるかは分かりませんが、風花の気配が消えてないからです。いまの僕は記憶した気配が影時間のような他空間にいようと感知する事ができます。」

あまりの事に言葉が出ないと言った感じのメンバーを無視して話を続ける。

「ただ、タルタロスに入れば正確な場所もわかるでしょう。しかし、その場所に辿り着けるかはわかりません。なので、真田先輩の言った方法で僕が行きます。他にも行きたいという方がいれば2人までは許可します。これは後で決めますけどね。」

「…分かった。危険は承知だが、このまま放置するわけにもいかないからな。」

僕が言った事で真田先輩の案を許可する美鶴さん。まぁ、なにかしたいなら能力や信頼で相手を納得させなきゃね。「助けたいから俺が行く！」なんて言われても、安全か分からないから許可できないのに、余計に許可できないよ。そう考えてると、2年トリオがやる気をだす。

「そうですね。生きてるんなら助けてあげないと。」

「姉として、湊君のお友達にあいさつしないといけないしね。」

「おし…夜の学校に侵入か！　へへッ。そうと決まれば”アレ”だな…」

順平がなにやら企んでいるみたいだ。ゆかりも不審に思い「…アレ？」と聞き返すが夜になってからのお楽しみらしく順平は話さなかった。そして、僕たちは寮へと帰った。

夜――作戦室

風花救出のため、メンバーらは全員、出撃の準備を済ませている。だが、さっきから誰かに電話をかけている美鶴さんが諦めた表情でソファーに戻ってきた。

「困ったな…理事長に連絡が取れない。」

「まあ、いいんじゃないですか？」

「一つだけ面倒がな。理事長の口添えがないとなると、夜の学校にどう入ったものか…」

ゆかりの言ったことに美鶴さんがそう返すと、待ってましたとばか

りに順平が笑顔で口を開く。

「それ、ご心配なく。その事なら”仕込み”が済んでマス。」

「仕込み…？　爆薬か？　フフ、いいだろう。今回は任せよう。」

「時間が惜しい。出るぞ。」

順平の言った“仕込み”を爆薬とよくわからない予想をし、美鶴さんと真田先輩は先に出ていった。そして、残された2年トリオがポカンとした表情でそれを見送り思わず口を開く。

「…爆薬？」

「…い、いや……。鍵開けといたってだけなんだけど…」

「先輩って天然？」

そんな事言いながら、僕たちも後を追った。

――月光館学園・1F

《ガチャ》

そうやって音をたてて教室棟一階の非常扉が開いた。そして、外から順平たちが入ってくる。

「すんなり入れたっしょ？　オレって、なんつーか天才？」

「自慢するほどの事？」

「昼間のうちに鍵を…ブリリアント！」

「グッジョブ。」

みんなも続いて入ってきてゆかり以外が順平を褒めている。だが、先に入ってきた順平が僕に気付いたみたいだ。

「え？　な、なんでオマエら先に中にいるんだよ！？」

「いや、生徒玄関から普通に入ったからだけど。」

「私は湊君について行っただけ。」

僕らのセリフを聞いて、ゆかりが尋ねてくる。

「こんな時間に開いてたの？」

「外の見回りに行く人が戻って来れるように、端の1枚扉のとこはこの時間だけ開けるんだよ。」

「君は、なんでそんなことを知っているんだ？」

なんでもないことのように僕が言ったのが気になったのか、美鶴さんも尋ねてくる。

「本当の下準備ってのは他人の動きを利用するものなんです。だから、そういうのも把握してあるんですよ。」

僕がそう言うと美鶴さんは「マーベラス！」と言っていた…ってか、

話が進まないと思っていると真田先輩が口を開いた。

「時間が惜しい。行くぞ。」

《タッタッタ》

そういうと、先輩に続き美鶴さんも2階へと向かって行った。

「あの人…なんなの？」

「ブリブリとかマーベって、なに？　どういう意味？　日本人は日本語使って欲しいよナ…ってか、湊のせいでオレの仕込みが…」

「いいから行くよ。」

落ち込んでる順平を無視して公子が先輩たちを追って行ったので、僕らも後に続いた。

――2－F教室

とりあえず、あそこにいるわけにもいかないので、僕たちの教室にきて作戦会議をすることにした。だが、明かりをつけず暗いままなのでゆかりが怖がっている。だが、僕はせっかくなので『夜の学校に侵入なう』とチドリにメールしてみる。

「電気つけましょうよ…」

「怖がっちゃってまー。」

順平がそんな風にからかうので、ムッっと怒ったゆかりが言い返す。

「怖くないっつの！　…アホか。」

「ア、アホはないっしょ？」

「騒ぐな。この時間は、主電源が落ちてる。それに暗いままの方が、都合がいい。」

五月蝿くしている2人に向かって真田先輩がそういう。だが、それを聞いてゆかりは「なんか、コソコソしてて、ヤだなぁ…」とそわそわしながら言った。

そして、みんなが静かになると美鶴さんが指示を出す。

「まずは、体育館の鍵を手に入れるぞ。”職員室”か”校務員室”にあるはずだ。2年の君らは“職員室”をあたれ。私達は“校務員室”を回ろう。その後で、1階の玄関ホールに集合だ。いいな？」

「”職員室”のガサ入れか…テストの問題とかあるかも？　ウヒヒ…」

「俺も“職員室”にするかな…“校務員室”より面白そうだ。」

美鶴さんの指示をきくと順平と真田先輩がそんなことを言った…黙ってやればいいものを。そう思っていると、美鶴さんが2人を睨んで口を開く。

「私の目の前で不正の算段か？　事実なら”処刑”だな…」

「う、嘘に決まってるじゃないスか。嫌だなー、もー。」

「誤解するな、“面白い”と言ったのは、可能性が高そうだという

…」

「言い訳はいい。それより”校務員室”へ向かうぞ。…伊織、君も私と来い。草摩も一緒にきて伊織を見張ってくれ。」

美鶴さんに言われ「えー」と文句を言いながらも、公子は美鶴さん達について行った。すると、残ったゆかりが僕に話しかけてくる。

「じゃ、私たちも行こっか。」

言われて返事をすると、僕らは職員室を目指した。

――玄関ホール

職員室に向かうため階段を下りて、玄関ホールにくるとゆかりが急に立ち止まる。

「なんか、聞こえない？」

足音が近づいて来る。まぁ、警備員の巡回だと思うけどね。だが、僕たち以外にだれもいないと思っているゆかりは怖がっている。

「な、なに…？　わ、私たちの他に…誰か居るの…？　とととにかく、隠れよう！」

言われて、柱の陰に2人で隠れた…。少しして懐中電灯の光が辺りを照らすとそのまま去っていった。足音が遠ざかってゆくと、ゆかりも安心したの「ハァー」と溜め息を吐きながら口を開く。

「警備の人か…おどかさないでよ…」

「それぐらいしかないでしょ。ってか、幽霊でも信じてるの？」

「そ、そんな訳ないでしょ。犯人はユーレイなんかじゃないって、もう突き止めたしね。それにね、ユーレイなんてね、言うほど怖いって訳じゃ…」

《風の声、光の粒♪》

ゆかりが話していると急に僕の携帯がなった。だが、ゆかりは相当驚いたのか「ウギャ！」と大きな声を出して驚く…正直、すまんかった。

「ケ、ケータイ！？　私の！？」

「いや、僕の。あ、メールだ。『なうって何？』…ああ、そういやさっきメールしたっけ。『「ｎｏｗ」でいまやってますよって意味だよ』っと。」

僕がチドリからきたメールに返事を打ち終わると、ゆかりが怒ってきた。

「マナーか電源切るかしときなさいよ！　ってか、こんなときにイチャついてんじゃないわよ馬鹿！　ハァ…でもさ、普通ビックリするでしょ？　いきなり鳴るんだから！」

涙目になりながら怒ってくるゆかり。そして、言い訳っぽく自分が驚いたのは普通の反応だと言ってくる。だが、僕はあえて言う。

「怖がりすぎじゃない？」

「……もはや、ビビリでいいけど。ってか、怖がって一緒に寝て欲

しいとか言ってくる人に言われたくないし。」

「…あんなの、冗談に決まってるでしょ。学校来てから、1回もそんな素振りみせてないのに気付いてなかったの？」

そう言ってから歩きだすと、暗闇でも分かるほど顔を赤くしながらゆかりは怒ってきた。「変態、スケベ、詐欺師」といろいろ言ってきたが、無視してすたすた歩くと「待ってよ～」と言いながらゆかりはついてくるようになった。

――職員室

職員室には誰もいないようだ。確認して中に入ると鍵置き場を2人で探した。まぁ、この暗さでも僕にはハッキリ見えてるんだけど…そう思っていると、ゆかりが探しながら尋ねてくる。

「体育館、体育館…もう…暗くて字がよく見えないな。この鍵、なんて書いてある？」

「惨殺死体置き場。その左手のは水死体・検視前保管庫だね。」

僕が笑顔でそういうと、ゆかりは顔を引き攣らせながら言い返してくる。

「何言ってんの？　それって怖がらそうとしてんの？　…あのね、覚えとくよ？　いつか、復讐は果たされるんだから。いくら友達でもダメなんだからね！」

ところどころで声が裏返ってたけど、そう言い切るゆかり。可愛いやつめ。そう思いながら、頭を撫でる。

「僕たちは家族なんでしょ？　じゃあ、友達じゃないから安心だね。帰ったら、今日も一緒に寝ようね。」

「ちょ、馬鹿…ってか、嘘吐いてたからダメです！　もう、湊君ったら、まったく…って、よく見たら“体育館”の鍵じゃん！」

やっと気付いたかと思いつつも、僕らは“体育館の鍵”を手に入れた。

「さ、戻りましょ。待ち合わせ場所は“玄関ホール”だよ。」

手に入れると僕らは漁った痕跡を消してから玄関ホールに向かった。

――玄関ホール

玄関ホールには、既に美鶴さんたちが待っていた。向こうも気付いたのか、話しかけてきた。

「鍵はあったか？」

「ゲットしてます。」

ゆかりが返事をすると、また順平がなにか思いついたのかニヤニヤしながら口を開く。

「途中、なーんか聞き覚えのある声で“ギャア”とか聞こえたけどなー。」

「ちょっ…「ああ、僕が怖がって抱きついちゃってね。そんときに胸を触ってしまったんだよ。」」

「えっ、テキトー言ったのに…って、なんだと!?」

僕が笑顔でデタラメを言うと信じて喰いつく順平。なぜか、公子がその後ろでとても良い笑顔になっている…目以外。

「…この前言っての本当だったんだぁ、『ゆかりの方がすごい』ってやつ。ねぇ、そんなに胸が好きなの？　ってか、別に私も標準ぐらいなんだけどさ。普乳じゃ満足できないと？」

…は？また、なんかスイッチ入ったのか？そう思っていると、公子が僕の前にやってくる。

「いやね、桐条先輩ぐらいを求めるなら分かるけど、ゆかりと私って微々たる差じゃん。そんな微妙な差でゆかりしか選ばないの？」

「何を言ってるのか僕にはわからないよ。」

「純情ぶってんじゃねぇぞ、湊！　オマエ、ボケっとしておきながら、2人っきりになった途端になにしてんだ！」

順平もかい…テキトー言っただけなのに、ややこしくなったなぁ。そう思いながら、黙らせるためにキレたときの口調を真似して口を開く。

「うるせぇ、黙ってろ。コイツらは俺の物なんだよ。どう可愛がろうが、俺の勝手だ。」

そう言って、ゆかりと公子をそれぞれ左右の手で抱き寄せると、2人は顔を赤くして黙ってしまう。そして、言われた順平も膝を折って男泣きした。

そんな風に遊んでいると真田先輩が「騒ぐな。」と口を開く。みんなが静かになると、美鶴さんが話し始めた。

「よし、改めてチームを2つに分ける。湊率いる最大3人が、このままタルタロスへ突入。そして、私と残りのメンバーが外でスタンバイだ。影時間に入ったら、私が位置を割り出す。」

「俺は突入組に入る。それと、お前も来い、草摩。もしものときはお前に仕切り役をやってもらう。」

先輩がそういうと、順平が慌てて先輩の元へ行く。

「タイム、タイム、真田サン。ほら、オレ、前にモノレールん時、実力出せなくてメーワクかけちったでしょ？　恩返しっつーかさ。汚名バンカイさしてくださいよ、ね？」

そういうと、僕と一緒と喜んでた公子が不機嫌になりながら言う。

「えぇー、ヘンな見栄張んなくていいよ。　それと、汚名は”返上”ね。」

「そういうことなら、汚名返上させてやる。突入は男3人でやろう。」

公子の言う事を無視して真田先輩がそういうと、順平は嬉しそうに「よろしくっス！」とやる気満々になった。逆に公子は「えー…」とげんなりしてる。それを見て真田先輩が口を開く。

「なんだ、草摩。そんなに女子だけはイヤか？」

「いや、邪魔者を排除して湊君とキャッキャウフフする予定だったんですよ…。」

それを聞いて、真田先輩はなんだそれはという顔をしていた。だが、そろそろ0時をまわるということで美鶴さんが口を開く。

「…そろそろ時間だ。」

「行くぞ！」

真田先輩の号令で僕たち男子は体育倉庫へ向かった。

影時間――寮内・空き部屋　〔Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〕

一方その頃、寮内の空き部屋。美鶴に言われ寮に泊まっている森山が1人で部屋にいる。

「アタシ…そっか、アタシ……。結局、独りなんだ……風花…」

今の自分をみて、自分は孤独だと思ってしまう。だが突然、何者かの声が聞えてくる。

「え…これ…イヤだッ…イヤだよッ！！」

必死に呼び声に抵抗しようとするが、長くは続かなかった。そして、虚ろな瞳で立ちあがる。

「呼んでる…そうだ…学校…学校、行かなきゃ…謝らなきゃ……風花…」

そういうと、彼女は部屋を出ていき学校へ向かった…。

第二十七話　前編（後書き）

後編に続きます。

第二十七話　後編（前書き）

前編の続きです。

第二十七話　後編

――タルタロス・エントランス　{公子　Ｓｉｄｅ}

０時になる前に１度学校を出て、タルタロスになってから学校内へ戻ってきた。今、エントランスには、私とゆかりと桐条先輩が待機している。すると、ゆかりが先輩に話しかけた。

「あの…」

「なかなか連絡が無いな…通信の感度は最大なんだが…」

ゆかりが先輩に話しかけるも、ただでさえ通信がしづらい状況で集中している先輩には聞えていないみたいだ。だが、ゆかりはめげずに話しかける。

「……そ、そう言えば、あの森山って子…寮に１人きりで、大丈夫ですかね」

「正直を言えば、影時間に絶対安全な場所など無い。だが、ここに連れて来る訳にも、彼女の為だけに少ない人数を割く訳にもいかないだろ」

「そうなんですか…」

ゆかりがそういうと、桐条先輩は再び黙ってしまう。だが、まだ聞きたい事があるのか再びゆかりが口を開く。

「…でも、山岸さんの救出には、こうして全員で…『美鶴、聞こえるか？』」

「私だ。いま、そちらの位置を確認した。思ったより上だな…通信がギリギリだ。それより、3人とも無事か？」

ゆかりが話していると、途中で真田先輩からの通信が入った。そして、桐条先輩も通信から相手の場所の特定に入り、把握すると3人の状況を尋ねる。

『…だ、わ…らな…』

「明彦！　おい！」

何度も呼びかけるがあまり変わらない。どうやら先輩の能力では範囲ギリギリすぎてまともに通信できないようだ。

「…通信圏外とかですか？　なんか、心配ですね…」

「湊君たち大丈夫かなぁ…」

そう言うと、私たちは再び連絡が来るのを待つことにした。

――タルタロス内部・階層不明　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

3人とも別の場所に飛ばされたのか、順平が彷徨っていると拓けた場所に真田がいた。

「おー、真田サン！　オレ、心配したんスよ。とにかく無事で良かったッス」

「お互いにな。…だが、今後はこういう入り方は無理だな」

そういう理由は、別々に飛ばされ通信も届かないのではあまりに危険だからだ。順平も同じように思ったのか頷くと、真田に尋ねる。

「あ、つーか！　真田サン、ここ来る途中に〝声〟聞かなかったスか？　えーと、なんつったらいいか…」

順平がそういうと、突然どこからか声が聞えてきた。

「誰…？　人…なの？」

「わ、わ、こ、この声！　つか、後ろからか…？」

そう言って振り返ると、ひとりの少女が、陰から順平らの様子を伺っている。声の主を見つけると、真田が少女に尋ねる。

「〝山岸風花〟か？」

「は、はいっ…！」

「おおっ、生きてたー！！　すげー！！　もう大丈夫だぜ！　オレら、救助隊だからサ！」

真田が尋ねると、少女は行方不明になっていた山岸風花だった。それを確認すると、順平も大喜びする。そして、真田も同じように安心すると風花に声をかける。

「よかったな…俺たちと一緒に来い」

「ありがとうございます…私…」

「フッ…オレの判断は正しかったな。美鶴に連絡を入れておくか」

言って、真田は美鶴に通信を試みる。その間に風花は現状を理解するため順平に話しかけた。

「ここ、一体どこなんですか？　私、学校にいた筈なのに、なんでこんな…」

「んー…その話は、ちっと長くなんな。戻ってから説明するっス」

順平がそう答えると、連絡をしようとしていた真田の通信機からはノイズばかりが、返ってきた。

《ザー、ザ、ザー》

「美鶴、聴こえるか？　……やっぱり駄目か。ノイズが酷いな」

合流前にもやっていたらしく、今やってみても結果は同じだったようだ。だが、とりあえず合流できた風花に体調を確認するため順平が声をかける。

「あ、ケガとか、だいじょぶか？　つーかここ、化けモン出るだろ？」

「じゃあ、やっぱり…ここ、何か居るんですね…今のところ、何とか見つからずに済んでますけど…」

「見つからずにって、一度もか？　どうやって！？」

風花の言葉をきき、通信を諦めた真田が驚き聞き返す。きかれた、風花も自分でも上手く説明できないのか、感覚で答える。

「ええと、何て言ったらいいか…居場所が、何となく分かるっていうか…」

「分かるって…なんだそりゃ？　オンナのカンってやつ？」

「あいつとは違う。むしろ、美鶴と同じ力か…いや、それ以上かも知れない。あいつのペルソナは本来は戦闘タイプだからな」

最初、湊の力を想像したが彼はペルソナの特性ではない。あれは個人の気配を読む力の延長なので、むしろ、適性者候補の風花ならば美鶴の能力に近いものだろうと思われる。真田がそう予想すると、聞きなれない言葉に風花が反応する。

「ペルソナ…？」

「これを持っていてくれ」

そういうと、真田は風花に召喚器を手渡した。だが、受け取った風花はそれをみて驚く。

「エッ！？　こ、これって、ピストル！？」

「お守りのようなものだ。弾は出ない」

真田が説明すると、風花も半信半疑ながら「お守り…」といって納得することにしたようだ。それを確認すると真田はみんなの行動を促す。

「よし。では、あいつの命令通り山岸を発見したので俺たち先に

いく。急いで戻るぞ！」

そういって、３人は脱出ポイントを目指した。

――タルタロス内・見晴らしの良い通路

３人がいくつかのフロアを移動し歩いていると、外が見える通路のようなところへきた。そして、外の様子をみた順平がその光景に驚く。

「月、デカッ！！　明るッ！！　…ってか、こんなギラギラしてたっけかぁ？」

「月の満ち欠けは、シャドウの調子に影響するって説がある。もっとも、人間も同じだがな。」

真田がそう説明すると、順平は「へぇー」と頷きながら話を聞いた。だが、聞き終わるとなにか思いだしたらしく、軽いノリで口を開く。

「ゆかりッチがプリプリしてたのも、お月さんの影響スかねぇ？モノレールの時も丸かったし」

「ん？　…前も丸かった？」

「な、なんスか！？」

順平の言葉をきくと、なにか気になったのか真剣な表情になる真田。それをみて順平はどうしたのか聞き返す。だが、真田はそれを無視して順平に尋ねた。

「おい、４月にコンビニでお前を保護した日の月の形を覚えてい

るか？」

「あんま覚えてねぇっスけど…丸っこかった気が…」

それを聞くと、真田はさらに考え始める。

「今日が6月8日…モノレールで戦ったのが5月9日…寮の襲撃は4月9日だ！　…全て“満月”だ！　美鶴、聞こえるか！？」

大型シャドウの襲撃が全て満月であったことに気付き、急いで美鶴に通信するが反応は先ほどと変わらない。

『…明彦か…シャ…ウが…』

「おい、聞こえているのか？　返事をしろ、美鶴！」

『…気をつけ…』

《プツ…》

美鶴がなにかを伝えようとしていたが、通信は切れてしまった。

「美鶴！？　おいッ！」

「…なに…これ…今までのより…ずっと大きい…しかも…人を…襲ってる…」

感知タイプの能力を持っているらしい風花には何か分かるのかそう言うと、真田は美鶴の伝えようとしていたことが理解できたのか「くそッ！！」と悪態をつく。それをみて状況が理解できない順平が尋ねる。

「な、な、なんスかっ！？　分かるように説明して下さいよっ！」

「出たんだ！　おそらく…ヤツらは満月に来るんだ！　…急ぐぞっ！！」

「ちょ、ちょっとーッ！！」

美鶴たちが大型シャドウに襲われていることを知ると、真田はエントランスへ行くため脱出ポイントへ急いだ。それを追うように順平と風花も走った。

――エントランス　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

通信が上手く入らず、大人しく待っていると、突然現れた大きなシャドウが2体現れ攻撃してきた。私たち3人はなんとか倒そうと必死になるが、むしろ敵の攻撃にあい自分たちがボロボロになっていた。そしていまも、敵の魔法をくらい左足にダメージを受けてしまう。

「うっくっ…」

「コイツッ！　攻撃がっ…効かない！！」

そう、ゆかりの言うように何故かこいつらには何をやっても攻撃が効かないのだ。だが、このままではみんなやられる。そう思い、痛む足を無視して立ち上がり敵に攻撃をする。

「つぅ…オルフェウス！」

そういって、召喚器で頭を撃つとオルフェウスが現れる。現れると、

私は召喚器をしまい薙刀を構える。

「オルフェウス、でかい方にアギラオ！」

命令すると、オルフェウスの手には大きな炎が出現しそれを敵に向けて放った。だが、

「…くぅ、やっぱり効かない！」

直撃したはずなのに相手はまったくダメージを負った様子がない。それを見てどうするか考えていると、桐条先輩から声がかかる。

「草摩、後ろだ！」

「え？　きゃあっ！！」

急いで後ろをみると、もう1体のシャドウが杖を振って魔法を放ってきていた。足の怪我もあり咄嗟に動く事ができず、相手の風の攻撃をくらってしまう。そのまま吹き飛ばされると、剣を持った方がゆかりと先輩に迫っていた。

「逃げて！！」

そう叫ぶが2人が逃げられないことは、私もよく分かっている。2人も今の私と同じぐらいの怪我を負っているのだ。だが、それでも叫ばずにはいられなかった。そう考えていると、転送装置が光り出した…もしかして！？

《シュイン》

「美鶴！」

「これは…！？」

「真田サン！　シャドウの気ぃ逸らさないと！」

なんと、ギリギリのタイミングで真田先輩と順平が山岸さんと思われる女子をつれて戻ってきたのだ。そして、順平に言われた先輩が走り出す。

「分かってる！　…貴様らの相手はこっちだ！」

「明彦、気をつけろ…こいつら…普通の攻撃が効かない」

桐条先輩にそう言われるも、真田先輩と順平は怪我をしている私たちから敵を離すため、攻撃を繰り返している。

《ガコン》

…！？誰かがこんな時にタルタロスの外から入ってきた…！誰かを確認すると、なんと寮にいるはずの森山さんだった。彼女はなにかを呟いている。

「ふ…風花…」

「バカなっ、何故…来た！？」

桐条先輩も気付き驚いている。気付いた先輩は、彼女をここから離れさせようとするも、痛みで動けないようだ。そして、同じく気付いた山岸さんが彼女に向かって叫ぶ。

「まさか…森山さん!?　逃げてっ!!　ここは危ないからっ!!」

「わ…私、あ、あんたに、謝らなきゃって…」

言いながら森山さんは、フラフラと山岸さんに向かって行く。だが、それにシャドウも気付いたのか彼女に向け杖を構える…危ない!?

「おい!　危ねえ!!」

順平も叫ぶが、間に合わない!そう思ったとき、山岸さんが召喚器を手に取った。

「森山さんッ!　私が…守らなきゃ!」

そう言って山岸さんは、自らのこめかみに銃をあてがい撃った

《バンッ!》

「山岸さん…!?」

「ペルソナ…?」

思わず山岸さんの方を見るゆかり。そして、そこには自分のペルソナに包まれるようにして、山岸さんが立っていた。祈るように立っていた山岸さんが目をあけると、口を開く。

「私…見える…私…あの怪物たちの弱い所…なんとなくだけど、見えます…」

「…思った通りだ。美鶴。バックアップは、彼女が代わる」

「こいつらは俺たちで片付ける！！」

そう言って、順平と真田先輩は敵の前に立った。そして、山岸さんが敵を解析を始める。

「指示してください。私が敵の弱点を調べてみます」

「剣を持つ方を！」

「分かりました。少し時間を下さい」

先輩が叫ぶと、山岸さんはすぐに解析する。

「わかりました、あの敵はエンペラー。今は、鋭くて直線的な…斬る攻撃が効きそうです」

「斬撃だな！　おっしゃ、こいヘルメス。スラッシュだ！」

斬撃が弱点だと分かると、順平はヘルメスを呼び出しスラッシュを指示する。召喚されるとヘルメスは敵に向かって羽による斬撃をくりだす。

『ヴァアアア！！』

それが効いたのか、エンペラーは聞き取れない叫び声をあげる。それを確認しつつ真田先輩は次の指示を出す。

「次、もう1体だ！　その間に順平はエンペラーを！」

「わかりました」「了解ッス！」

言われて大剣で敵に斬りかかる順平だが、相手が両手で剣を持つと順平の攻撃は当たったにも関わらず、弾かれた。

「うわっ！？　ちぃ…」

「どうやら、弱点が変わったようですね。解析完了、エンプレス。今は、光と熱の狭間の力…電気が効きそうです」

「わかった、順平は牽制しといてくれ。その間に山岸はもう1度あっちを」

先輩はそう言うと山岸さんは「わかりました。」と返事をして、聞いた先輩はエンプレスに向かって走り出す。

「こい、ポリデュークス！　ジオ！」

先輩がそういって、長髪で右腕が注射器のようになっている男性型ペルソナ“ポリデュークス”を呼び出し敵にジオを放つ。だが、敵は杖を両手で構えると、直撃した電撃も効いていないようだった。

「こいつも弱点を変えれるのか！？」

先輩が驚いていると、エンプレスはもう1体を相手にしている順平に向け魔法を放った。

「よけろっ、順平！」

「なっ！？　うわぁ！！」

先輩が叫ぶもエンペラーを相手していたため、反応が遅れた順平は攻撃をモロに受けてしまい壁際へと飛ばされる。

「がっ…」

「大丈夫か！」

「先輩、うしろ！」

壁に衝突した順平の方に気を取られ、先輩は自分の相手していたエンプレスから目を離してしまう。その間にエンプレスは真田先輩へと迫っていた。

「っ！？　っく！」

ギリギリで回避するがわずかに当たったのか、左腕を押さえている。一応は大丈夫みたいだが、これではまともな戦闘は無理だろう。さっき魔法を受けた順平もダメージが抜けず、すぐに立てないことから弱点の風属性をくらってしまったのだろう。そう思っていると、叫び声が聞えた。

「きゃあッ！！」

「ゆかり！」「岳羽！！」

相手がいなくなったエンペラーが近くにいた動けないゆかりを左腕で掴んでいた。

「ぐ…ああっ！！」

「オルフェっつ…精神力が！？」

召喚しようとするも、順平たちがくるまでの戦闘で精神力を消耗していたらしく、頭に激痛がはしり召喚できない。無理をしてあと1回召喚すれば気を失ってしまう。そう思っていると、桐条先輩も同じらしく、召喚器を持ってどうすればいいか考えているようだ。

「岳羽！？　クソっ、相手が1体なら…順平まだか！」

真田先輩が救出に行こうにも、エンプレスがそれを阻む。そして、言われた順平も剣を支えに立ちあがるがまともに動くには時間がかかりそうだ。それを待っていれば限界がきているゆかりはやられてしまう…もう、なにやってんのよ！

「きゃああ！！」

「っ！？　ゆかりがピンチなのよ！　早くきて、湊君！」

『ガァアアアアア！！』

そう叫ぶと、外から剣が飛んできてエンペラーを襲った。叫んでおいて言うのもなんだが、

「ナイスタイミング。でも、ちょっと遅いよ、まったく」

「ゴメン、いま助ける」

そう返事をした相手は、見た事のない弓を持って入り口に立ってい

た。

――タルタロス内部・階層不明　〈湊　Ｓｉｄｅ〉

…どうやら、意識を失っていたようだ。ここは、タルタロスの中のようだが真田先輩も順平も、見当たらない。それに通信機から美鶴さんの声も聞こえない。そう思っていると突然声をかけられた。

「目が覚めた？　君の部屋の外で会うのは、初めてだね」

声がした方を見ると、影時間でたまに会う謎の少年がいた。とりあえず、なぜここにいるのか尋ねる。

「なぜ君がここにいるの？」

「フフ、言ったでしょ。僕はいつでも、君の傍に居るってね。でも今は、ゆっくり話していられない。今夜、君にやってくる試練は、どうも１つじゃないみたいだ。とにかく、急いだ方がいいよ…すでに試練は始まっているから。じゃ、また会えるといいね」

少年は消えてしまった…だが、言われて気配を探ってみる……っ！？

「全員エントランスに。だけど、大型シャドウも２体いる！」

クソッ…そう心の中で悪態をついて走り出す。このフロアには脱出ポイントがないらしく、急いで階段に向かいフロアを移動する。

――タルタロス内部・階層不明

ノイズの混じった通信が入ってきた。

『よけ…順……わぁ！……』

それだけが聞えると、通信が途切れてしまった…。

「真田先輩と、悲鳴は順平か？　クソ、まだ脱出ポイントのあるフロアに出ないのか！」

そう思いながら走っていると、またノイズの混じった通信が入ってきた。

『ああ！……ゆか…岳…』

「ゆかりに何かあったのか！？」

走りながら時折聞こえる通信から、ゆかりの身に何かあったことを知る。

『湊、急いで次のフロアへ行きなさい。そこからなら外へ行けるわ』

「っ！？　わかった！」

彼女に言われ、僕は次のフロアへ急いだ。

――タルタロス内・見晴らしの良い通路

『早くしなさい。間に合わなくなるわ！』

彼女に案内され、フロアを進むと外がよく見える通路にきた。って事は…

「ここから行けってことだね。生存率は？」

『…いつもの貴方なら、よくて２０％。』

よくて２０か…なら！

「俺ならいけるって事だろ！！」

そう言って心の中でスイッチを切り替え、飛び下りる。少し降下すると、でかい槍のように突起が出ている。このまま行けばぶつかるだろう。

「なら、砕けちまいな！」

言いながら拳に魔力を纏わせ、タイミングを計り振り抜く。すると、突起は簡単に砕けともに落下していく。空中でそれを掴みながら尋ねる。

「おい、着地ポイントを割り出せ！」

『簡単に言って…もう少し右よ。そうすれば、花壇があるわ』

「ＯＫ！！」

言われて移動するため、左手に魔石を出現させる。着地ポイントを確認し、込める魔力を調整する。いまだ！

「マハガル！」

発動すると風が起こり、軌道が右にずれていく。ここだ、と思ったとこでちょうど魔石が消えると着地に備えるため掴んでいた突起を

先端を下に向け、足の下に用意する。地面まであと、１０・９・８……

「４・３・２・１！　おっらぁあ！」

地面にぶつかり刺さっていく突起が止まる直前に跳んで逃げる。そのままいれば止まった時に自分にも同じ衝撃がくるからだ。直前に逃げたおかげで逃げる時のＧの負担だけでどうにかすんだ。

「よし…いくよ」

再び、スイッチを切り替え入り口へと向かった。

――エントランス入り口

「…順平まだか！」

エントランスの入口へ急ぐと開いたドアからそんな声が聞えてくる。そして、さらに剣を持ったシャドウにゆかりが掴まれているのが見えるッ。

「こい、黒紅！！」

走りながら、黒紅を取り出す。そして、腰からゆかりにもらった片手剣をとり黒紅で構えシャドウをねらいおもいきり弓をひく。

「きゃああ！！」

「っ！？　ゆかりがピンチなのよ！　早くきて、湊君！」

ゆかりの叫びと公子の声が聞えた瞬間に剣を放つ！

「いけぇえええええ！！」

『ガァアアアアアア！！』

そう叫ぶと、放たれた剣は飛んでいきシャドウにあたった。それで相手が止まったのか、なんとか間に合い中へ入る。

「ナイスタイミング。でも、ちょっと遅いよ、まったく」

「ゴメン、いま助ける」

言いながら黒紅を消し中を見渡すと、公子と美鶴さんは怪我をして倒れ、順平も剣で身体を支えるのがやっとだ。もう1体を相手にしている真田先輩も左腕を庇って避けるので精一杯か。なぜか、ペルソナを発動している風花とその後ろに森山とかいう女子がいるが気にしないで話しかける。

「風花、無事でよかったよ。すぐ、終わらせるから待ってて」

「え！？　湊君、どうして！？　それに気配がわからないなんて…」

そんな風に言ってるが無視してゆかりを掴んでいる敵に走って接近する。相手も気付いて剣を振り降ろしてくるが、

「そんなの効くか！！」

振り降ろされた剣を回避し、剣を持ってる手に踵落としをくらわす。ダメージはわからないが、バランスを崩すことに成功すると、腰の

ナイフを抜き魔力を込める。そのまま狙うは左腕！

「ゆかりを、離せぇえええ！！」

《バシュン！》

魔力を通したことにより、威力があがったのか左腕を切り落とすことに成功する。そして開かれた手からゆかりが落下する。

「きゃあ！」

「ゆかり！」

《バシッ》

落下するゆかりが床に落ちる前に受け止めた。だいぶ、ダメージを負っているがどうやら大丈夫みたいだ。

「ゴメン、遅れて」

「ううん、ありがとう。助けてくれて」

「じゃあ、一気に終わらせるね」

そう言って、再びシャドウの剣をゆかりを抱いたまま避けると、公子と美鶴さんのいることまで後退しゆかりを下ろす。そして、魔石を取り出しみんなを回復する。

「カデンツァ！」

ゆかりたちと自分を回復させると、今度はカードを2枚引く。

「ゆかり、召喚器借りるよ」

言って、床に寝かせたゆかりの足から召喚器を抜き、カードを構える。狙いをつけると順平と真田先輩に向けてカードを投げ、すぐさま自分の召喚器とゆかりの召喚器で撃ち抜く。

「Ｃａｌｌ！　ディアラマ×２」

《《ダン！》》

新たなカード“ディアラマ”を撃ち抜くと、光が狙った２人を包みダメージを回復させる。

「っ！？　すまない！」

「っ！？　これで、いけるぜ！」

「なら、こっちへこい！　一気に攻める！」

ダメージが抜け動きがよくなると、回避に余裕がでた先輩に１体を任せ、もう１体を僕らで狙う。

「湊君、そいつはエンペラー。今は、熱を奪い取る…氷や冷気が有効のようです」

「っ！？　ＯＫ、順平。アイツを凍らせるから、凍ったらそこを叩き切れ！」

「了解！」

風花から弱点を教えてもらい、指示を出すと射線を塞がぬよう気を

つけながら敵に向かう順平。エンペラーはそれに気を取られ僕を注意から外す。その隙をついて、カードを引いて投げる！

「Ｃａｌｌ！　ブフーラ！」

撃ち抜くと、氷塊が飛んでいきエンペラーの右脇腹を直撃する。

『ヴァアアアア！』

当たった場所から凍っていくシャドウ。足と残っていた右腕も凍り動く事ができなくなる。そこへ、走り込んだ順平が全力で大剣を振り抜く。

「くらいやがれっ！！」

《ガシャーン！》

「もう1発だ。Ｃａｌｌ！　タルカジャ！」

凍った部分ごと敵の身体を大剣で砕く順平。そして僕は言いながら、新たなスキルを発動させ順平の攻撃力をあげる。

「ありがとよ、湊！　これで決めるぜえ！！」

《ズザンッ！》

『ガァアアア……』

攻撃力が上がった順平は大剣を強く握りしめ、渾身の一撃を振り下ろした。その前の1撃で身体を半分近く破壊されたエンペラーが、その攻撃に耐えられるわけもなく、最後の雄たけびをあげながら消えていった。

それを見届け、真田先輩の方へ向かう。

「風花っ！」

「ハイ！あれはエンプレス。今は、無形の刃…風の力が効きそうです」

「了解…真田先輩、ギアをあげてください！　Ｃａｌｌ！　スクカジャ！」

先輩にさらに相手を翻弄してもらうため、スクカジャで回避力をあげる。

「そのまま翻弄してください。隙をつきます！」

「まかせろ！」

いうと、相手の懐に潜り込んだり、後ろにまわり相手の背を蹴って跳んだりと、敵に狙いをつけさせない先輩。これだけ隙があれば。

「Ｃａｌｌ！　ガルーラ！　先輩、離脱を！」

「わかった！」

唱えて、風の刃が敵に迫る前に先輩に離脱を指示し、先輩が離れると無防備なエンプレスを風の刃が襲い、身体に亀裂が出来る。そこを狙えばっ。

「先輩！」

「わかっている！　ポリデュークス、ソニックパンチだ！」

腹部にできた亀裂めがけ、先輩のペルソナが拳を振り抜く。それを受け、亀裂はさらに大きくなるが、敵も最後の悪あがきにゆかりたちに向け魔法を放つ。

『ギュラアアアアア！』

「残念だが、こっちは回復しているっ。ペンテシレア、ブフーラ！」

言いながら立ち上がりペルソナを召喚する美鶴さん。そのペルソナの放ったブフーラはエンプレスの魔法と衝突し、相殺しあう。そうして無事だとわかると、僕らはフィニッシュをかける。

「Ｃａｌｌ！　ラクンダ！」

エンプレスに向け、防御力低下のスキル“ラクンダ”をかける。そして、ラストの指示を先輩に出す。

「先輩、フィニッシュ！」

「うぉおおお！　はぁあああああ！」

先輩は上がっている自身の最高速で近付き、その勢いを乗せた全力の拳を亀裂に叩きこみエンプレスを打ち抜いた。

『ギュラアアアア……』

打ち抜かれたエンプレスも最後に咆哮をあげ消えていった。

「ふぅ…」

《バタン》

「「湊っ！」」「「「湊君っ！」」」「有里っ！」

僕が倒れると、みんな心配して駆け寄ってくる。

「いや、疲れただけです」

そういうと安心したのか、怪我をしていた女子たちと順平もその場に座り込む。そして、風花が口を開く。

「皆さん、すごいです…あんな怪物を…」

「もう心配ない」

急な戦闘に巻き込まれたのか、戦闘が終わり風花を安心させるため真田先輩が声をかける。すると、後ろから森山という女子が歩いてきた。

「風…花…あんた…」

「け、怪我は、無い…？」

「う…うん…」

「良かった…」

相手の無事を確認すると風花は倒れこんだ…ま、疲れたんだろう。
そう思っていると、森山が倒れた風花に駆け寄り声をかける。

「風花！？」

「心配ない、疲れが祟っただけだ」

それをみて美鶴さんが事情を説明すると、森山は「風花…風花…あたし…」といって抱きついた。それを見ながら、真田先輩は美鶴さんに話しかける。

「あの2体のシャドウは、何処から…？」

「外からだ。寮やモノレールに出た時と同じだ…」

美鶴さんがそういうと、真田先輩は「そうか…」と暗い表情で返事をした。それを聞き終わると、ゆかりも先輩らに尋ねる。

「て言うか森山さん、影時間とかシャドウとか、全部見ちゃって、これから…」

「いや、彼女は俺たちとは違う。影時間の嫌な思い出は、記憶に残らない。それに、シャドウの声を聞いた筈が、結局こうして無事でいる。再び”落ちる”事は、もう無いだろう」

「でも、それ…山岸さんが恩人だった事も忘れちゃうって事ですよね。そんなのって…」

言って俯くゆかり。たしかに、イジメていた相手に助けられたのに、それを忘れてしまえば再び同じことになるかもしれない。そう考え

ていると、美鶴さんが風花たちを指差し口を開く。

「いや…そうなっても、案外、大丈夫かも知れない。自分がどうすべきだったのか…彼女はもう、分かってるようだ」

「ごめん…ごめんね…風花、ごめんね…ごめんなさい…ううっ…わああぁぁ…」

そう言って、森山さんは風花を抱きしめ謝りながら泣き続けた。ま、反省してるなら風花さえ許せば良いんだけどね。そう思っていると、公子が話しかけてきた。

「ってか、湊君は何で外から来たの？」

「ああ、なんか廊下みたいなとこからショートカットで飛び下りたんだよ。通信でみんながやばいのは分かったからね」

僕が倒れたままそう言うと、驚いたのか真田先輩と順平が声をあげる。

「廊下って、あの外がよく見えるあそこからか！？」

「あんな高いとこから、飛び下りるなんて無謀すぎんだろ！？」

2人がそう言うと、美鶴さんが2人に尋ねる。

「湊の飛び下りた場所はそんなに高いのか？」

「正確にはわからないが、少なくともここらの建物よりは遥かに上だ…」

げんなりしながら答える真田先輩…また、余計なこというから僕が怒られる。そう思っていたら、案の定、公子とゆかりがこっちにきて怒り始めた。

「馬鹿じゃないの！　また無茶して、死んだらどうすんのよ！」

「本当よ！　助けにきてくれたのは嬉しいけど、それで死ぬようなことされるんなら助けて欲しくないっての！」

むぅ…なんでみんな無事なのにこんなに怒るんだろう。別に、死んでないんだし良いじゃないか。そう考えていることがわかったのか、さらに2人は怒ってくる。

「みんな無事だからいいじゃないか、とか思ってんじゃないわよ！　結果論より過程の話をしてるの！」

「毎回、命懸けで助けられたらこっちも罪悪感でいっぱいになるでしょうが。助けたいのか、困らせたいのかハッキリしろ！」

「友達に死なれたくないから頑張ってんだよ。だから、こっちとしてはたとえ相手が困ろうが、生きてさえいればいいの」

「「ハァーー…」」

僕がそういうと、2人は揃って大きな溜め息を吐いた。なにさ…。そう思ったが、とりあえず、借りた召喚器を返す事にする。

「ゆかり、これありがとう」

「ん？　ああ、はいはい。ってか、急に借りるとか言って取らないでよ。足に着けてんだから少しは考えてよね」

「いや、すべすべして気持ち良かったよ。ありがとう」

お礼を言いながら渡すと、ゆかりは顔を赤くした。ついでに言うと、公子となぜか順平も怒った顔をしている。まぁ、この後のことは予想できるので、座っているゆかりをお姫様抱っこしてエントランスの入口に向かう。そして、呆気にとらわれているみんなに言う。

「先輩たちあとはよろしく。それと、落下するときに花壇にタルタロスの外装刺したんでそっちもお願いします。じゃあ、僕は疲れたんでゆかりと寝る約束もしてるので帰ります。おやすみなさい」

そう言って、エントランスを走って出ると、再起動した公子たちが追ってきた。

「ちょ、止まりなさい！　怪我した姉をほって他の女を連れていくってどういうことよ！」

「人抱えて、逃げれると思ってんのか！　待て、湊！　って、公子ッチはや！？　置いてかないで～」

「うっさい、ハゲ！　こっちも真剣なの。トロいやつなんて待ってられないのよ！」

そう言って、順平を置き去りにしてさらに加速してくる。そこで気付いたゆかりも再起動を始めた。

「え？　あ、あれ？　なんで、お姫様抱っこしてんの！？」

「いや、職員室で言った通り、今日もゆかりのとこで寝ようと思ってね。で、僕は疲れたから先にあがらせてもらうために、家主？だけ連れてきたってわけ」

「あれ、本気だったの！？　ってか、恥ずかしいからおろしてよ！」

「寮に着いたらね。ってか、恐いお姉さんが追い付いてきたから加速するよ」

ゆかりにそう伝えると、胸に押し付けるようにしっかりと抱きスピードをあげる。それをみた公子はかなり驚いてるようだ。

「はぁっ！？　なんで人抱えてそんなスピード出んのよ！？　影時間のおかげでこっちは時速４０キロくらい出てんのに！」

「ばーか、こっちは標準でそんくらい出るんだよ。チートありでも走行中の列車に追い付いたの忘れたの？　諦めて事後処理やっときな、じゃあね」

そうして僕は、なにか言ってた公子を置いて寮へと走って帰った。余談だが、胸に抱えられているだけのゆかりは、生身の人間の限界を超えたスピードはそうとう怖かったらしく。再起動に時間がかかった。まあ、その間に抱きしめて寝たからその後のことは知らないんだけどね。そんな感じで今回の試練は過ぎ去ったのだった。

第二十七話　後編（後書き）

以上で、第三章の本編は終わりです。どうだったでしょうか？誤字脱字などを見つけたら教えていただければなと思います。

これから、第三章の設定も書くのでしばらくお待ちください。それでは、ありがとうございました。

第三章　設定（前書き）

三章の設定ができたので投稿します。今回は『人物設定』『オリジナル設定・道具』『オマケ』の構成になります。

人物設定は今回もテンプレを新たにしまして、影時間関係者は

名前（よみ）　所属
【アルカナ】
【一人称】一人称（よみ）
【設定】
【装備】
【スキル】

になります。今まであった【番外設定】はエピソード的なのがないので、【設定】に吸収されました。そして、新たに【アルカナ】と【スキル】を作ったので、いまのキャラの強さが少しわかると良いです。

次に一般人とその他は

名前（よみ）　所属
【一人称】一人称（よみ）
【見た目】
【設定】

になります。それと、影時間関係者もですが、主要キャラ以外は書きませんし以前に書いたキャラも新しい情報があれば書いてるので、三章に登場したのにいないってキャラは新情報なしって思ってくだ

さい。

次に、オリジナル設定・道具は

名前―（読み）

【設定】

という書き方になります。この項目では『Ｒｅ：Ｃａｌｌ』のオリジナル設定や原作にもあるけど違う解釈をしているものを説明しています。書いた中で『弱点・無効・耐性』が分かりづらい書き方になってしまっているのですが、上手く説明できないので理解できなければ飛ばして読んでください。戦闘で理論的なモノを書くつもりもないので、設定の理解は本文の状況理解に影響しませんので。

で、最後のオマケはただのオマケです。別に設定でもなんでもありません。そんな感じで読んでください。では、どうぞ。

第三章　設定

―人物設定―

《影時間・関係者》

有里　湊（ありさと　みなと）

【アルカナ】なし

【設定】次代の草摩家当主候補筆頭。だが、宗家筋が湊と公子の２人しかいないので、筆頭以外の序列はあまり関係ない。ちなみに後を継げば４８代目になり、名前も【草摩　湊】に変わる。その場合、養子ではなく死んだ両親の父親側の姓を名乗るというだけなので、公子と結婚することは一応可能。

お化けなどが苦手と思われたが、実際は全て演技。ゆかりを気遣って一緒に寝たり、１人だけがいじられないようにしていたのである。ゆかりを気遣っていたわけだが、順平アワーの後にゆかりではなく公子の方へ行ったのは、真相解明は負けず嫌いのゆかりの自業自得だったのと、公子の機嫌もたまには取るかという気まぐれのためである。

月光館学園には特待生制度を利用して転校してきた。別に一般でも転校生の受け入れをしているが、公子の両親宛てにきた学校からのお知らせで募集を知ったので応募した。試験内容は一般教養と体力テストがメイン。だが、内容が既に高校の教育課程を超えていたため、在校生や狙っていた学生たちが諦めることになった。それを「逆にこれをクリアしたら面白そう」という理由で、公子の両親が海外の大学で扱うようなことまで教え、湊は楽々クリアすることができた。体力テストに関しては言うまでもない。

【装備／喪失】
ゆかりに貰った片手剣↓ロスト
・ゆかりを助けるため、エンペラーに向けて射出した際に砕けた。

【戦闘スキル】
突き穿つ死翔の槍（ゲイボルク）
・剣を腕力にまかせ槍投げのように投げる技。名前の由来は『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』のランサーの技から。別に剣以外にも槍や薙刀など長ければ大抵のものでできる。

偽・螺旋剣（カラドボルグ？）
・黒紅で剣を放つ技。名前の由来は『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』のアーチャーの技から。実は、もともとこれがしたくて黒紅を作らせた。エンペラーに放ったのがこの技だが、流石に状況をみて技名を叫ぶことはできなかった。

魔力による強化
・魔力によって力や防御力をあげる技。だが、厳密に言えば湊の技は別物である。湊の場合、魔力を身体に纏わせているだけで、力などは変えていない。なので、正しく言えば後に説明する『魔力外装』になる。また、エンペラーに対して見せたナイフに魔力を纏わせたのはその応用である。本来の強化もやろうと思えばできるが、すでに力と防御力は十分にあるので、わざわざ魔力消費を増やすことはしないのである。

【使用可能スキル】
・６属性初級（アギ、ブフ、ガル、ジオ、ハマ、ムド）
・４属性全体系初級（マハ〇〇など）
・４属性中級（アギラオ、ブフーラ、ガルーラ、ジオンガ）

・回復初級、中級（ディア、ディアラマ）
・回復全体系初級（メディア）
・敵能力低下初級（タルンダ、スクンダ、ラクンダ）
・補助初級（タルカジャ、スクカジャ、ラクカジャ）
・４属性全体系初級ジェム
・４属性中級ジェム
・カデンツァ

裏・有里　湊（うら・ありさと　みなと）
【一人称】俺（おれ）

【設定】キレたときの湊。裏という呼び名に意味はなく、別に誰が呼んでいるというわけでもない。通常時との差別化を図るための呼び名である。心のリミッターが外れたことにより、普段よりも攻撃に容赦がなくなっている。よって、戦闘能力が上がっているわけではない。攻撃を躊躇するつもりがないため、守るべき相手でも攻撃してくれれば容赦なく痛めつける。ただし、他人と違い殺すつもりはない。

溜まり場での喧嘩では話しかけていたが、状態が進むと会話をしなくなる。そのときは力のリミッターも外すので、自身の最大の威力で攻撃するようになる。名付けるなら状態2・バーサーカーといった感じか。江古田の机を破壊したときがその状態に近い。ちなみに、魔力外装はペルソナ相手にしかしない。

【装備】
黒い革のグローブ―両手
・手が汚れないために着けている

草摩　公子（そうま　きみこ）
【アルカナ】［０］愚者
【設定】草摩宗家の実子にして、次代の草摩家当主候補の序列二位。ゆかりや他のライバルが多数出現したため、湊への感情が完全に異性に対するものに変化したが、姉でもありたいと思っている。スポーツも勉強も学年トップだったが、湊の出現によりその座を奪われることになる。まぁ、それでも優秀は優秀なので男女問わず憧れている人間は多い。本人らは知らないが、美鶴クラスの人間（湊）が学年に出現したため公子は一般人サイドにカウントされるようになり、親しみやすいということで人気は上がっている。寮内の女子で一番胸が小さいのを少し気にしているが、ゆかりとそこまで差はない。

【ペルソナスキル】
・突撃
・アギ
・タルンダ
・パトラ
・マハラギ
・タルカジャ
・アギラオ
・スクカジャ

岳羽　ゆかり（たけば　ゆかり）
【アルカナ】［ＶＩ］恋愛
【設定】キスの待ち受けを見てから自分の湊への思いを自覚し始めた。だが、そのとき感じたショックが、嫉妬なのか支えを失うかもという恐怖なのかハッキリしないため、湊への思いが依存なのか異

性への愛情なのかは現在考えている最中である。スポーツはかなりできるが、勉強はそれほどできない。一応、平均よりは上だがそれでも平均ラインである。実はテストで負けた日の夜、湊を相手に公子らと共に戦ってストレス発散しようと思ったが負け。むしろ、ストレスを溜めることになった。そのうえ、寝るときに病院で湊が言った「冗談だよ。それに溶けてもみんなよりは、幾分まともだから安心して良いよ。」というセリフを思い出し、事実であったため悔し泣きした。

【ペルソナスキル】
・ディア
・パトラ
・ガル
・チャームディ
・マハガル
・メディア
・ディアラマ
・リカーム
・ガルーラ

伊織　順平（いおり　じゅんぺい）
【アルカナ】［I］魔術師
【設定】運動神経は悪くないがバカ。ただし、悪知恵はよく働く。

【ペルソナスキル】
・スラッシュ
・アギ
・リパトラ
・アサルトダイブ

・二連牙
・キルラッシュ
・アギラオ

桐条　美鶴（きりじょう　みつる）
【アルカナ】［ＩＩＩ］女帝
【設定】運動神経もよく、頭脳も1年の時点で高校の教育課程は習得済みという完璧超人と畏れられる人。最近、無茶したり自由奔放な行動をとる湊を気にかけている。他の者と同じく湊が学内でいろんな女子といるとこを目撃していて、過去にいろいろあったことを知っていたため、友達ができたんだなと喜んでいた。だがそれは最初だけで、日に日に別の女子といるとこを見るようになり、最近では女教師や学外の女子とも仲が良いのを知り、それはあまり良くない事だと教えようか悩んでいる。

【ペルソナスキル】
・ブフ
・マハブフ
・ディア
・マリンカリン
・ブフーラ
・ディアラマ
・吸魔
・テンタラフー

真田　明彦（さなだ　あきひこ）
【アルカナ】［Ⅳ］皇帝
【設定】運動神経は学内トップクラス。勉強も成績上位ということ

で女子の人気だけでなく、男子で憧れている生徒も多い。完治してから徐々に復帰メニューをこなす予定だったが、初日から公子らと一緒に湊を相手にしたため、強制的に戦闘の勘を思い出さざるを得なかった。しかし、身体は鈍っていたためボロクソにやられるという結果に。

【ペルソナスキル】
ソニックパンチ
ディア
ジオ
タルンダ
マハジオ
ラクンダ
ジオンガ
スクンダ

荒垣　真次郎（あらがき　しんじろう）
【アルカナ】［V］法王
【設定】溜まり場の集会で不良たちがくだらない話をしているのを聞いていると、湊たちがきたのを見て驚いた。その後、絡まれ始めたので助けるタイミングを見ていたら乱闘に突入したため、事態が呑み込めなくなり成り行きを見守ることに。だが、湊の攻撃が相手を殺すものと分かると、止めるため乱闘に介入した。正直に言えば、湊を見た目で見くびっていたところがあり、一方的な展開で負けるとは思っていなかった。だが、今回の事で湊への認識を改め、以前言った「並んで歩けない」がもう1つの意味である湊と同じ方だと思うようになった。ちなみに、湊とゆかりを恋人同士だと思っている。

山岸　風花（やまぎし　ふうか）　２－Ｅ
【アルカナ】［ＩＩ］女教皇
【一人称】私（わたし）
【設定】同じクラスの女子やその友達にイジメられていた女子。湊のことをすごい人と思っているが、同時に初めてこんなに仲良くなった友達として特別に思っている。だからと言って、別に友達がいないわけではない。普通にクラスや部活で話す程度の友人はいる。森山らに体育倉庫に閉じ込められ、現実世界にして１０日間タルタロスを彷徨っていたが、ルキアの能力で敵に見つからないよう逃げていた。召喚後はさらにはっきりと気配や弱点をしることができるようになった。だが美鶴同様、湊の気配は感知できない。これは力不足ではなく湊の特殊な体質のせいである。

【装備】
・ペルソナ―女教皇“ルキア”

タカヤ　本名：榊貴　隆也（さかき　たかや）　ストレガ
【アルカナ】［Ｘ］運命
【一人称】私（わたし）
【設定】ストレガのリーダー的存在。公子たちのようにペルソナを所持しているが、適性者ではなく桐条によって作られた人工ペルソナ使い。１０年前の爆発事故で研究所に集められていた被験者たちを率いて脱走したが、過酷な環境にいたためほとんどの者は途中で死んだ。そして、生き残ったジンとチドリと共に生きていくことになる。始めは盗みや強盗で生きていたが、復讐代行の依頼を受けて金を稼ぐようになり、いまに至る。

湊の話を聞き、同じ桐条の被害者であることがわかったが、復讐ど

ころか世界に対しても執着を持っていないとわかり、自分と似た存在だと思っている。ちなみに、タカヤは自分の本名を覚えている。

【装備】
・ペルソナ―運命“ヒュプノス”

ジン　本名：白戸　陣（しらと　じん）　ストレガ
【アルカナ】［ＩＸ］隠者
【一人称】わし
【設定】ストレガのブレーン的存在。タカヤたちと同じ人工ペルソナ使い。１０年前の事故の際、このまま死ぬんだと諦めていたがタカヤによって助けられ脱走した。それにより、自分を救ってくれた相手としてタカヤを尊敬を超え崇拝している。同じく助けられとともに暮らしているチドリのことは、手間のかかる妹のように思っている。

普段はパソコンを使って情報を集めたり、どうやってかお金を稼いでいるよう。ブレーン的存在でパソコンをよくいじっているが、運動神経は良い方でその場でバク転したりもできる。ジンもタカヤと同じく自分の本名は覚えている。

湊のことは最初、「大事な妹にキスしたやつ」として嫌っていた。だが、会ってみると料理も上手い好青年で、自分たちと同じく桐条によって人生を狂わされた仲間だという事を知った。それにより、タカヤやチドリ同様信頼して接している。だが、湊とチドリが交際することに関しては話が別で反対している。

【装備】

・ペルソナ―隠者“モロス”

チドリ　本名：吉野　千鳥（よしの　ちどり）　ストレガ
【アルカナ】［ＸＩＩ］刑死者
【一人称】私（わたし）
【設定】ストレガでは探査や索敵担当の少女。人工ペルソナ使いでは幼い方で、辛い記憶から自分を守るため過去のことをあまり覚えていない。

日中はヒマなのでポートアイランド駅前などで絵を描いている。だが、その絵は普通の人には真っ赤にしか見えず、タカヤたちにも理解できない。その内容は、生への執着がないため視えるようになった、他人や他の動植物が燃やして生きる命そのものを描いている。チドリはそれを“命の炎”と呼んでいる。これは死んだ者には見えず、枯れ木などでは弱弱しく視えるなど、生命力が関係しているよう。だが、自分と湊には何故か視えない。同じく生への執着がないタカヤには視えるし、自分だから己のは視えないのだろうと納得しているが、なぜ湊には視えないのか疑問に思っている。

湊の事は自分でもよくわかっていない。一緒にいるのは楽しいが、好きという感情はない。一緒にいる事で自分が捨てたと思っていた執着の心が芽生えてきていることに、困惑している。だが、湊と遊んだりメールしたりすることを止めようとは思っていない。実は待ち受けはそのままになっている。

【装備】
・ペルソナ―刑死者“メーディア”

《一般人》

鳥海　いさ子（とりうみ　いさこ）

【設定】以前より湊と仲良くなり、最近では『湊くん』と呼ぶようになっている。中間テストで担任している生徒が学年１・２位になったため、ボーナスが１５万でた。

テキトーな性格をしているが、生徒想いの良い先生で江古田の話を聞いていて本当に殴ろうかと思っていた。だが、湊が拳を握って近付くのが見えたため、咄嗟に「机ッ！！」という指示を出し殴ることを回避させた。その件で、湊の怪力と丈夫さに驚いたが別に気にしていない。むしろ、湊の純粋さ・他人の心に対する優しさを知り、同時にそれゆえの危なさを持っていることがわかったため、湊をしっかりと見守っていくことを決意した。鳥海自体は湊を弟のように思っていたが、江古田のこと以降は頭脳と心のアンバランスさから小さい子供として母親的な接し方もするようになる。

大橋　舞子（おおはし　まいこ）

【設定】両親の離婚ことで深く悩み傷ついていた。だが、湊が家に行った日に両親から理由を説明され、最初は納得できなかったが今後も両親と会える事を知り、一応納得することにした。離婚後は母親について隣町に引っ越したが、恩人である湊に好意をよせ結婚の約束をした。しかし、湊がぶっとんで良いお兄さんっぷりを発揮しプレゼントも魔法にしか見えない方法で出すなどしたため、本気で好かれることに。そして、二十話の最後らへんでの湊と謎の声の女の会話はほぼ現実になる。湊につり合う女性になるため、運動も勉強も頑張るようになり小学校高学年ですでに告白されるようになり始める。中学・高校ではさらに人気になりゆかりや公子状態になる

が、告白は全て断った。断るときは「心に決めている人がいるの。次に会うまでに、その人とつり合う女にならないといけないんだ。だから、ゴメンね。」とのこと。

森山　夏紀（もりやま　なつき）　２－Ｅ所属
【一人称】アタシ
【見た目】茶髪のガングロギャル
【設定】風花をイジメていた女子。本人的にはイジメの自覚はあまりなかった。そのため、事件が起こり風花が行方不明になったときに本気で心配し、自分の行いを振り返り反省した。影時間で行動しタルタロスのエントランスにも入ったが、シャドウに影時間に落とされただけなので、今回の記憶も消え今後は普通に象徴化する。

《その他》

エリザベス
【設定】外のことに対して憧れでもあったのか、いろいろ知っている。しかし、どこか解釈が独特なため湊もツッコまないようにしている。お財布はカエルのがま口で５００円玉が２０００枚も入るのに、外からはデカイおにぎりぐらいの大きさにしか見えないという不思議な財布。湊の白金の腕輪と同じ効果を持つ『白金の栞』を持っている。買ったばかりの服でも着ていれば魔力が通るらしい。ついでに、白金の腕輪・栞で服をしまえば一緒に下着も入ってしまうらしい。湊のことが異性として好き。

テオドア

【設定】エリザベスと同じく外への強い憧れがあった。だが、姉と違いあまり調べたりはしていないので知識は姉に教えられたものぐらいしかない。本当は初めて見たポロニアンモールに目を輝かせていたが、指摘されるとテレて否定するあたり素直じゃないよう。水に触れて温度を測ることができるが、仕事着・ベルベットルーム以外で測ったことがないため、微妙に間違えた。現在では、服装や環境に関係なく正しく測れるようになっている。道具に魔力を通すのが得意。

謎の少年

【設定】湊が公子の部屋で一緒に寝ているときは、勝手に部屋に入らないで廊下で待っているという紳士的な少年。風花救出時にはタルタロスにも出現するなど、謎は深まるばかり。

謎の声の女

【設定】湊とは頻繁に話をしているが、姿は湊にしか見えない。幽霊のように透明な感じにみえるが、魔力を纏っても触れることはできない。湊をからかうのが好き。

―オリジナル設定・道具―

草摩家（そうまけ）

【設定】湊や公子の実家で、世間では『草摩・草摩家・草摩本家』などと呼ばれているこの日本で最も強い力を持つ家。海外でも『日本で生きたきゃ草摩は敵にまわすな』と言われるほどで、実際に草摩を怒らせて日本から撤退を余儀なくされた企業がいくつもある。桐条ほどの力を持っていても本気で相手にすれば1年も抵抗できずに潰すことができる。

宗家の弟筋でしかも有里の家に婿養子になった父親の子である湊が次代の草摩家当主候補筆頭ということになっている。本来なら後継者の資格すらないはずだが、宗家の血を残すため、兄弟筋で他家の養子になった者でも資格は残る。そして、実質宗家筋の子は湊と公子しかいないので、どちらかが次代当主になることになっている。だが、なぜ現当主の実子である公子が序列2位かというと、性別で序列が優先されることはないが、見た目・頭脳・体術・話術・芸能などあらゆる物に秀でた者が序列で上になるようになっているためである。

魔力による強化（まりょくによるきょうか）

【設定】魔力をオーラのように身体に纏い、肉体の活性化や魔力自体からもたらされる効果によって身体能力の強化や物理的・魔法的な防御力を上げることができる。だが、これには集中力が必要であり、魔力の質的に得手不得手があるので魔力を持っているからといって、誰でも出来るわけではない。ちなみに他の言い方だと『魔力武装』と呼ぶ。

魔力外装（まりょくがいそう）

【設定】魔力による強化の前段階で、ただ身体に魔力を纏わせているだけの状態。外装といっているが魔力武装と違い鎧としての効果もない。纏わせただけのため得られる効果はないと思われたが、湊はこれでペルソナに物理的接触をすることが出来ていた。それによりベルベットルームの住人もその効果を知ることになった。纏わせているだけのため、武装と違い魔力消費が少ない。こういった理由もあり、十分な力と防御力を持っている湊はこちらを使用している。

武器魔装（ぶきまそう）
【設定】湊がエンペラーの腕を斬る際に使った、ナイフに魔力を纏わせるというもの。別に、ナイフに限らず盾や風船にだって纏わせることはできる。それをした場合、纏わせた物の強度が上がり風船をナイフで刺しても簡単には割れなくなるくらいの効果がある。しかし、強度が上がっただけなので限度を超えれば壊れるし、刃物なら切れ味が上がるなどの付加効果もない。よって、エンペラーの腕が斬れたのは腕力と魔力を纏っているため、ペルソナと近い存在のシャドウに性質的接触しやすくなっていたからである。本来、魔力は消費するもので留めて使うものではないため、魔力外装の時点でかなりの魔力コントロールを必要とするのだが、自身の肉体以外のものに魔力を纏わせ留めるとなると一級の術師並みの魔力コントロールが必要となる。よって、これは術者タイプでないエリザベスとテオドアには使用できない。

魔力を通す（まりょくをとおす）
【設定】物質に魔力を通すことで、物質その物に魔力に近い性質を付加させることである。この作業には物質自体の魔力浸透率と術者の魔力の質が関係してくるため、同じ物でも人によって通すのにかかる時間が違う。誰の魔力でも関係なく通した後は、同じように使用や収納ができる。テオドアはエリザベスよりもこの作業に向いているため、エリザベスはテオドアにやらせた。この作業には魔力コントロールは必要ないが、相性が悪かったりコントロールが下手だと漏れ出して無駄に魔力を消費することになる。漏れ出した魔力はすぐに消えるので、武器魔装モドキになったりはしない。

命の炎（いのちのほのお）
【設定】チドリと湊にのみ視えているものだが、意識しなければ視

えなくなる。現在、炎がないのは同じくチドリと湊だけだが、命への執着の無いタカヤにも炎はあるので、命への執着は炎があるのとは無関係であることがわかった。そして、チドリが自分に炎が視えないのは「自身のものは視れない」ということだと推測している。なので、逆に湊の炎が視えない事に疑問を持っている。炎は基本的に全ての生物に視えるが、死体には視えないし枯れ木やもうすぐ死にそうなものの炎は弱くなるため、実際は生物の持つ生命力を有視化したものだと思われる。チドリには赤に視えているが、湊も赤に視えているかは不明。そして、湊にはチドリの炎が視えているかも不明のため、実際にチドリにも炎が存在するかは不明となっている。

ペルソナ

【設定】ペルソナ自体の説明は幾月やイゴールの発言の通りのため省くが、この作品では人はペルソナに触れることは出来ない。だが、ペルソナからは瞬間的な物理的接触ならば人や動物に対しすることが出来る。なぜ、そうなのかは解明されていないが、存在する（住んでいる）世界が違うからではないかと思われている。しかし、湊によって魔力を纏えば継続的な物理的接触が可能と分かった。

ペルソナが受けたダメージは物理・魔法に関係なく使用者に衝撃として返る。衝撃を受けて痛みや吹き飛んだりすることはあるが、傷ができたり血が出たりすることはない。しかし、ショック死や意識を失う危険は存在するので安心はできない。ペルソナの怪我などは、1度消えて再び召喚すれば元の状態に戻る。そのため、湊が破壊したオルフェウスの竪琴はすでに復活している。

ペルソナに意思や自身の心が存在するかは不明。しかし、使用者の心の震えには反応するらしく絶好調なら、ペルソナも同じく強くなる。逆に不調の場合は攻撃の威力が落ち、精神力の消費も多くなる。

シャドウ

【設定】ペルソナに近いが異なる性質をもつ存在。大きな違いは、人とシャドウのどちらからも継続的な物理的接触が可能なこと。そして、個体としての意思を持っている点である。意思を持っているといっても、共通の言語を持っていないので会話はできないし、強さによって知能も違うようで弱いシャドウは野生動物のような本能的な行動しかしない。だが、強いシャドウはかなりの知能を持っているようで、エンペラーとエンプレスなどは相手に合わせて自身の弱点を変化させたりした。

弱点・耐性・無効（じゃくてん・たいせい・むこう）

【設定】ペルソナやシャドウの弱点と耐性だが物理と魔法によって状態が違ってくる。まず、ペルソナにもシャドウにも属性的な性質が存在する。そして、物理攻撃の場合はその性質に如何に触れることが出来るかがダメージに繋がる。全く触れることができない場合は、物理的には触れているのに攻撃は通らないためダメージを与えられない。これが物理における『無効』状態になる。そして、性質にわずかに触れることができるのが、物理の『耐性』状態だ。耐性ならダメージだけでなく、物理的な傷を相手に与えることが出来る。

次に魔法だが、魔法の場合は性質に吸収されるかされないか、という点で耐性や弱点が決まる。相手の魔法を受ける際に性質が同じなら魔法の力を吸収しダメージを受けなくなる。これが魔法の『無効』で、性質は同じでも吸収しきれずダメージを受けるのが魔法の『耐性』になる。よって、魔法では無効の受け損なったものが耐性になるが、それぞれ1度に吸収できるキャパシティがあるのでこれは頑張っても変化したりはしない。

これら攻撃と防御側の性質にまったく関係ないのが、耐性でも弱点でもない『普通』状態である。そして、物理では完全に触れることが出来るのが、魔法では全く吸収できないのが『弱点』というものになる。なお、いくら弱点だとしても本体自体の防御力や耐久性が存在するので、弱点攻撃でごり押ししたからと言って簡単に倒せるわけではない。

探査・索敵能力

【設定】美鶴・風花・チドリのペルソナ能力。気配を読んでいるのではなく、レーダーのような感覚でソナーを飛ばし人やシャドウと地形を把握できる。しかし、ステルス的な特性を持っている相手の場合は他のものよりも知覚し辛く、その偽装の強さによっては完全に知覚できなかったりする。それらを応用して自身の姿は隠し、相手の場所は相手の飛ばしているソナーから逆探知し、美鶴が使っていたような連絡機器をジャックすることも可能だと思われる。ちなみに風花のとこでも説明したように湊は体質的に知覚されないため、美鶴は通信機で場所を特定していた。そのため、通信機の電源を切っていたエリアボス戦や、通信機が壊れた前回の大型シャドウ戦では湊の場所や状況を把握できなかった。

気配探査

【設定】湊の能力。最初は野生動物のように生き物の気配に敏感に反応していただけだったが、途中からは地形なども理解できるようになり「あの曲がり角の壁に1人待ち伏せしてる」と具体的に分かるようになった。これはシャドウにも有効で、タルタロスでは目を閉じてても移動や戦闘をすることが可能。最近では、魔力回路が開いた影響か身体だけでなく気配探査の力も強くなってきている。そ

のため、影時間という異なる空間にいる風花の気配も感知出来ていた。これは能力のようだがペルソナの特性からくるスキルと異なるため、ステルスなどの力を持っていても効果がない。この能力から逃れるには、死んだようにジッとして気配を消すぐらいしか対策はない。だが、異空間にいても感知するほどの力なので、実際はかなり距離を取るしか逃れることは出来ないと思われる。

―オマケ―

《ペルソナ使いアルカナ表》

【アルカナ無し】　旅人―湊
【０】　愚者―公子
【Ⅰ】　魔術師―順平
【Ⅱ】　女教皇―風花
【Ⅲ】　女帝―美鶴
【Ⅳ】　皇帝―真田
【Ⅴ】　法王―荒垣
【Ⅵ】　恋愛―ゆかり
【Ⅶ】　戦車―『対象者無し』
【Ⅷ】　正義―『対象者無し』
【Ⅸ】　隠者―ジン
【Ⅹ】　運命―タカヤ
【ⅩⅠ】　剛毅―『対象者無し』
【ⅩⅡ】　刑死者―チドリ

《湊の交友関係リスト》

テストで湊が勝利したため書かれる事のなかった交友関係リストを湊と出会った順に書いていきます。カウント条件は名前があるキャ

ラ・湊と会話した・友好な関係を築いてることです。あと、以前からの知り合いですが公子も再会ってことでカウントしています。

【男性】

1. 謎の少年
2. 伊織順平
3. 幾月修司
4. イゴール
5. テオドア
6. 真田明彦
7. 友近健二
8. 黒沢
9. 高木
10. 宮本一志
11. コロ丸
12. 荒垣真次郎
13. 小田桐秀利
14. ジン
15. タカヤ
16. 風花の父親

【女性】

1. 岳羽ゆかり
2. 桐条美鶴
3. 鳥海いさ子
4. 草摩公子
5. エリザベス
6. 岩崎理緒
7. 西脇結子
8. 秋名

9．伏見千尋
10．大橋舞子
11．チドリ
12．山岸風花
13．風花の母親
14．大西先生

以上になります。大西先生はどこに出てきたって思われるかも知れませんが、三章の第二十五話冒頭で湊が授業中の話をしてますよね？　その中の「この料理なら、〇〇って本のレシピの方が簡単だし美味しいぞ。」ってのが、大西先生の発言になります。登場どころか名前も出てないですが、会話しているのでカウントします。

しかし、見てみると男性の方が多いという結果になりましたね。今後も増えるのは男性の登場人物ばかりなので、『湊は男性の知り合いの方が多い』という結論になりそうです。しかし、湊の女子との交友関係を気にしているメンバーから見れば「なんで同性と異性の知り合いの人数が大差ないんだ」という話になります。加えて、独身・フリーの女子で見れば…って言っても風花の母親以外ですが、基本的にみんな美人・可愛い顔の部類に入ります。なので、「顔で選んでないなら、この知り合いの平均ルックスの高さは異常」と見られます。よって、どっちにしろアウトになってたので湊はテストで勝てて安心したと思います。

第三章　設定（後書き）

以上が三章の設定でした。風花の両親や江古田を書こうか悩みましたが、彼らは今後はモブなので書きませんでした。ってか、書くこともとくにないですしね。

そんな感じで、三章は終りです。ありがとうございました。

第二十八話（前書き）

お久しぶりです。本当にかなり久しぶりですね。充電期間と申しましょうか、ペルソナ３への熱が再燃焼するまでにかなりかかりました。その勢いのままゲームを起動して書いてみたんですが、久しぶり過ぎて感覚が戻りません。文章の雰囲気とか変わってるかもしれませんが、ご容赦を。

第二十八話

6／12（金）
朝――校門
前の大型シャドウ戦から数日が経ち、意識不明に陥っていた女生徒たちも意識を取り戻した。そのこともあってか、すでに世間や被害者の通っている学校の生徒ですらその話題から関心を失いつつある。学校に向かっている今もまわりの人間が話している内容は昨日のドラマがどうとか、誰々と誰々が付き合っているという噂話だ。

「飽きっぽいというか、事件に対して無関心というか」

「まぁ、結局は他人事だからねぇ。私達は影時間関係ってことで知ってるけど、他の人にとっては誰かが自転車で事故ったってのと大差ないもの」

そう言いながら学校に向かって僕の隣を歩く公子。まぁ、確かにそうだとは思うけど、仮にも同じ学校の生徒が意識不明の状態で見つかったなんて事件だ。人間の犯人は居なかった訳だが、事件概要の公式発表もないままでそんな状態になるのは危機感が薄すぎるような。そんな風に考えていると、後ろから駆け足で誰かが近付いてきた。

「おはよう2人とも」

「ん、おはよう」

「おはよう、ゆかり。ゆかりも私達と同じ電車だったんだね」

そんな風に公子が話しかけると、それに返事をしながらゆかりも僕の隣に並ぶ。僕を挟むように2人が隣に並んで歩くようになって、どれくらい経ったかな。まぁ、登下校が一緒のときだけだし、ここ1ヶ月くらいの話だけど。まわりの男子の視線にも慣れてきた。いまでは完全に無視して会話を楽しむこともできるぐらいだ。そう思っていると、ゆかりが僕に話しかけてきた。

「そういえば、湊君。風花のこと…どう思う？」

「んー…かわいいと思うよ」

「いや、そういう事じゃなくて…風花って、なんか…成り行きで って言うか、流されて仲間になった感じしない？　これから、大丈夫かな…」

言いながら昨日の夜の事を思い出しているのか、少し暗い表情になるゆかり。公子も似たような気持ちなのか、少し考えているようで「うーん」と唸っている。なので、僕も昨日の会話を思い出すことにした――――

6／11（木）
放課後――教室
授業が終わり教室で帰る準備をしていると真田先輩からメールが着た。公子やゆかりもケータイを取り出して見ていることから、影時間関係者に一斉送信しているのだろう。ならば、一応目を通しておくかとケータイのメールフォルダから新着メールを開く。

『山岸風花が、今日にも退院できる見通しだ。彼女を交えて話がある。今日は寮に戻り次第、作戦室に集合してくれ』

メールを読み終わるとケータイを閉じて上着の内ポケットにしまう。風花が倒れた後、僕は何回かお見舞いに行った。そのときには目を覚ましてたから、疲労回復のためにしっかりとした休養をとればすぐに退院できるということだったけど予想より早かったな。なんて考えていると順平が話しかけてくる。

「やったじゃん。ついに、風花ちゃんとご対面かぁ。あんときは挨拶もろくにできなかったし、今日の話でいっちょ好印象与えときますかっ！」

「なら、順平は欠席だね。私たちの方でちゃんと補欠要員ってことで紹介しておいてあげる」

「ヒデェっ、公子ッチ！　オレは挨拶しない方が好印象ってか！？　つか、補欠でもねぇよ！」

公子に言われてわりと本気で傷ついたのか、男泣きしながら反論する順平。まぁ、確かにみんなは数がいればそれだけ戦い易いし、助っ人の僕以外は全員レギュラーといえばレギュラーだな。そう考えながら順平の様子をみて笑っている公子とゆかりと寮へと帰った。あ、順平も「おいてかないで～」といって途中で合流してきたことも一応伝えておく。

夜――寮の作戦室

学校から帰って寮でグダグダしていると、先輩たちが風花を連れて帰ってきた。そして、お茶を用意すると全員が４階の作戦室に集まった。今日はメンバーの他に、理事長と風花が座っている…。病院で見たときに比べると顔色は、ずっと良くなっているみたいだ。そう思っていると、理事長が口を開いた。

「話は聞いているよ。“山岸風花”君だね」

「は、はい」

「ハハ、そんな緊張しなくていいから。ま、掛けて」

理事長がそう言うと、名前を言われて立ち上がり礼をした風花は「あ、はい…」と言ってソファーに腰を下ろす。風花は三人掛けのソファーの右端に座り、その横に美鶴さんでさらに横が真田先輩。そして、テーブルを挟んで風花の正面に理事長が座り、その横に順平で更に横がゆかり。んで、ゆかりと真田先輩が座ってる側の上座に公子が座っているという席順だ。一方、僕はどこに座っているかというと機械の前の椅子でグルグル回って遊んでいる。そうして、遊ぶのに飽きて足が疲れていたので、機械の何もないところに足をあげたところで理事長が話し始めた。

「みんなも本当にご苦労だったね。山岸君の件、よく突き止めてくれた。あ、そうそう、それとね。例の、意識不明で見つかった女生徒たちは、みんな意識を取り戻したらしい」

「よかった…」

心からそう思っているようで、胸に手を当ててホッと息を吐く風花。まぁ、僕は別にどっちでも良かったんだけどね。僕がそんな事を考えているとは知らず、理事長は風花の様子を見て笑顔になると続きを話し始めた。

「彼女たちは3人とも、警備員が帰る夜中の0時近くを待って学校に来てたんだ。そして門の前で0時を迎え、影時間に落ち、シャ

ドウに襲われた…。ただ、昔からある怪談と状況が似てたとかで変な騒ぎになっちゃったようだけどね」

「まったく…“怨霊”なんて、実際ありっこ無いですから」

理事長の話を聞きながらそう言って、フフンと何故か勝ち誇るゆかり。そんなに真相究明で怨霊じゃなかったのが嬉しかったのかな？しかし、そういって少し明るい雰囲気になったところで暗い表情をして風花が口を開いた。

「私が…悪いんです」

「…って、なんでそうなるのよ。あなた、被害者でしょ？」

「でも…何日か休んだくらいで、死んでるとか変な噂になっちゃってたのは、私のせいだし…」

そんな風にネガティブというか、あくまで自分が悪いという風花にゆかりも「いや、あのねえ…」と困った表情をしている。順平や公子の表情を見ても同じように少し困った顔だが、そこで美鶴さんが優しい雰囲気で風花に話しかけた。

「君が居なければ、私達は勝てなかったかも知れない。君は、私達の命の恩人だ。だからもっと、自身を持っていい。君には、人の支えになれる特別な力があるんだからな」

「特別な、力…」

「私達は“ペルソナ”と呼んでいる。君の能力は、今の私達に必要なものだ。ぜひ、力を貸して欲しい」

そういって、優しい雰囲気から今度は相手を惹きつける力強いカリスマの顔になる美鶴さん。僕を誘ったときも同じような顔をしていたけど、「君の力が必要なんだ」なんて言われたら普通の学生はひっかかるよね。案の定、風花も先輩の方から視線を外さず聞き返す。

「それって…私が、先輩たちの仲間に…？」

「そうだ」

「桐条先輩…」

「俺からも、頼む」

「真田先輩…」

風花はそうやって、隣に座る先輩たちの方を見て嬉しそうな表情をしている。んー、順平の勧誘の時を知らないから自分のときが比較対象になるけど。いっつもこんな感じにしてるのかな？君は特別な力を持っている→君の力が必要→さらに真田先輩からの駄目押し…学校でも有名な先輩たちに言われれば、イヤな気分じゃないだろうし単純な人間ならコロっといくわけだ。

先輩らの誘い方に呆れながら見ていると、僕の時と同じようにゆかりが風花に話しかけた。

「あのさ、別に強制じゃないから、無理して今決めなくても…」

「私、やります。…やらせて下さい！」

「え、即答？　いいの？　一緒に戦うなら、この寮に入ってもらう事になるけど…」

「それは、たぶん大丈夫。どうせ家には、私の居場所は無いし…」

暗い表情になってそう呟く風花。僕が家に行ってみた感じそんな事はなかったと思うけどな。まぁ、普段の様子を知らないからなんとも言えないか。そして、風花の入部が決まると美鶴さんが笑顔になり口を開いた。

「ありがとう。協力、心から感謝する。ただ、こういう特別な事情だ。ご両親への説明は、学園がうまく計らおう」

「はい、ありがとうございます」

「…いいんですか？　こんな簡単に人を巻き込んで…」

「あの、大丈夫ですから、私……。それに、同じ学年の女の子が2人もいるし、湊君もいるから、その…嬉しいっていうか…」

言いながらこっちに視線を送ってくる風花。まぁ、入寮自体は僕も反対じゃないからね。そう思いながら、足を降ろしてソファーのところへ近付いていく。

「んじゃ、みんな自己紹介しておけば？」

「そうだね、私は草摩公子。湊君の従姉になります、よろしくね」

「オレっちは、伊織順平。この部活のエースアタッカーだ。よろしくな」

「あ、はい！　よろしくお願いします！」

僕に言われて公子と順平が挨拶をすると、再び嬉しそうに風花も挨拶をし返した。残ってるゆかりに「しなくていいの？」という視線を送ると、急な入部に色々と思う所がある様子のゆかりも挨拶をした。

「こ、こっちこそ、よろしく。私は岳羽ゆかり。ゆかりでいいから」

「うん、よろしくね。ゆかりちゃん」

そうしてみんなの挨拶が済み、少しの間雑談していると。理事長がコーヒーに口をつけてから何かを思い出したのか口を開いた。

「ところで、また今月も、例の“普通じゃないシャドウ”が出たね…。何処から現れるのか、とか謎は残るけど、真田君の予測は、恐らく当たりだ。ヤツらは“満月”にやって来る。今後の指針にしてくれていいと思うよ」

「来月からは、満月が近付いたら、ご注意って事っスね…」

「敵の来訪周期が掴めたというのは、大きなアドバンテージだ。対戦の日取りが決まれば、トレーニングのメニューが組める。だが、そのことについて有里に訊いておきたいことがある」

理事長や順平の話を聞きながらお茶菓子のクッキーを食べていると、そういって真田先輩が僕の方を見てきた。なので口に入っているクッキーを呑み込み、公子の紅茶で口の中を空にすると返事をするこ

とにした。

「なんですか？」

「お前はモノレールの大型シャドウが出る前日に『明日、敵がくる』と言っていたな？　ということは、大型シャドウの出現条件や出現周期を知っていたんじゃないか？」

言いながら鋭い視線で見てくる先輩。そして、他の2年生メンバーは僕がそういったことを知らなかったのか驚きの表情をしている。

「まぁ、答えは“ＹＥＳ”ですよ。といっても、確信が持てたのは今回の件ですが」

「…それを伝えなかったのは、確信が持てなかったからということで不問にする。だが、なぜそうだと分かったんだ？」

「フフッ、なんででしょうね。虫の知らせか偶然か、それとも僕の能力の効果かも知れません。まぁ、周期がわかったんだから良いじゃないですか。話が終わったんなら僕はもう寝ますね」

ニコっと笑うとみんなにそう言って僕は部屋に戻ることにした。真田先輩は「おい待て、話をはぐらかすなっ」と後ろで言っていたが、美鶴さんにこういう時の僕には言うだけ無駄だから落ち着けと窘められていた。

――――昨日のことを思い出したけど、もしかして真田先輩まだ怒ってるかな？まぁ、友達を戦場に連れ出されることになって少し怒ってたからあんな態度とったんだけどね。

「まぁ、風花は戦闘員じゃないから、その点は少し安心かな」

「そうだね。私もこれ以上戦闘員が増えて湊君が余計に無茶するようになったら困るし」

「いや、２人ともそういう事じゃないんだけど……」

僕と公子が笑いながらいうと疲れたように言うゆかり。僕らもゆかりの言いたい事はわかるけど、言ったところで決めたのは風花だ。僕らがここでなにか言ったところで意味はない。それが分かっているから、あえてそれに対しては返さずに教室へ向かった。

午前――２年Ｅ組教室　｛Ｎｏ　Ｓｉｄｅ｝

朝のホームルームが始まるまで２０分あるが、教室にはほとんどの生徒が既に登校していた。

「ねーねー、聞いた？　エコダさ、あいつ“処分”とか受けたらしいよ！」

「マジぃ！？　なんかやったの？」

「知らないけど、イキナリだって。…セクハラとか？」

「ハハハ、それ、イテー！」

そんな風に耳の早い女子とウワサ好きの女子が大声で会話をしていると、教室のドアが開き誰かが入ってきた。

《ガラ》

「あ、あの…お、おはようござ……」

教室に入ってきたのは2週間ぶりに登校してきた風花だった。もともと積極的に人と関わる性格ではない風花は、久しぶりに登校してきたことでクラスメイトに注目され上手く挨拶ができなくなる。

加えて「…あ、ユーレイの子だ」「やめなって、ヤバいよ！」という会話まで聞えてきた。言われるかなと少し思っていたが、実際に言われると中々に辛いものがあった。だが、そう思っていると風花の入ってきたドアが開き誰かが声をかけながら教室へと入ってきた。

《ガラ》

「風花いる？」

「森山さん…」

入ってきた人物は風花をいじめていた森山という生徒だった。丁度、ドアの近くにおり呼ばれた風花は森山の方を見ながら返事をした。

そして、風花の姿を確認した相手も話しかけた。

「風花、あんた…寮に、入ったんだって？」

「う、うん…」

「相変わらず、くっらいの……でも、何かあったら相談しなよ。いつでも…さ。どうせ頼れる相手も、いないんでしょ？」

そう言われた風花は少し驚いた。確かにクラスではわりと話す方だが、それは森山らが風花をいじるためだった。そんな相手が自分のことを気遣ってくるとは思わなかったが、心配して言われたことが

風花は嬉しかった。

「森山さん…」

「カッタいなー、その呼び方。…ナツキでいいから。」

「……ありがと…」

風花はそう言うと森山と共に自分の席へと向かった。

午後――グラウンド　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

お昼休みが終わり今は午後の授業をしている。今日の午後の授業は体育だが、体育は人数の関係で２クラス合同で行っている。なので、隣のＥ組と一緒なため、この授業だけは風花も僕たちと一緒に受けている。

「んじゃ、勝負ね。勝ったら何か特典つけようか」

「待ってよ、それじゃあ男子の湊君が有利じゃない。ってか、普段から公子の方が体育も成績良いし。私が一番不利よ」

そういって準備体操をする公子とゆかり。僕もその横で１８０度開脚してストレッチをしているが、もう少しで僕たちが走る番なのだ。ちなみに種目は１００メートル走。

「じゃあ、僕はハンデとしてスターティングブロック無しで、ビーチフラッグみたいなスタートにしようか」

「それだけじゃ足りない気がするから、湊君は1秒で公子は０.５秒以内の差だったら私の勝ちにしてよ」

「いいよ。んじゃ、湊君の1秒差ってのは私の方も適応でヨロシク！」

笑顔で言いながら呼ばれたので3人でトラックへと向かう。わざわざ、スターティングブロックを外すのは面倒なので少し横に寝そべると、目が合ったので見学のためスタートの合図を任された風花に手を振る。すると、風花が話しかけてきた。

「え、湊君それでスタートするの？」

「勝負するから公平にするためのハンデだよ」

「ふーん、そっか。あ、先生が旗あげたから始めるね」

言われてみんな真剣な表情になると、風花のピストルが鳴るのを待った。別に勝った特典を何にするかも決めていないのに、公子もゆかりもかなり本気らしくビシビシと気迫が伝わってくる。そして、ついに合図がなる。

「位置について、よーい《パンッ！》」

合図がなると同時にすぐに身体を反転させ走り始める、普通にスタートした2人はかなり良いスタートが切れたみたいだ。

「（魔力で強化したら余裕だけど、ズルはいけないからなぁ）」

そう思いながら足に力を込めてスピードを上げると、まずはゆかりに追い付く。チラッとしか見えなかったが、分かっていても追い付かれたことはショックらしく悔しそうな表情になっていた。そして、

後半に入りスピードが乗ってくると公子も追い抜き、余裕の1位でゴールした。

「はい、いっちばーん」

「悔しいっ、何であんなスタートで追い付けるのよ！」

「ってか、私のこと抜いた時、少し笑ったでしょ！」

ゴールして急に止まっては心臓に負担があるためテクテク歩いていると、公子とゆかりもゴールして話しかけてきた。ってか、別に公子を笑った覚えはないんだけど…。そうして、3人で話しながらも先生にタイムを聞く事にした。

「先生、タイムどうでした？」

「えっ？　あ、ああ、タイムね。岳羽さん11秒01、草摩さん10秒68よ」

「うわぁ、負けたー…って、あれ？　湊君のタイムは？」

僕が先生にタイムを聞くと、やや顔を引き攣らせながら答える先生。しかし、僕のタイムが言われなかったため、公子が先生に訊き返した。

「あ、有里くんのタイムね…9秒49よ」

「はっやっ！？　なんでハンデありでそんなに速いのよ！」

「フフン、僕の靴のメインカラーは赤色だからね。つまり、3倍

速いのさ」

なんじゃそりゃという表情でこっちを見てくるゆかり。しかし、これで勝負の結果が出たね。そう思い口を開く。

「んじゃ、ハンデ込みの結果、僕・ゆかり・公子の順だね」

「悔しいー、ゆかりとのハンデを０．３にしておけば良かった」

「はいはい、結果が出てからそんなこと言わないの。んで、特典どうする？」

僕に負けたことは悔しいが、勝負の結果的に公子に勝てたのが嬉しいのかゆかりが笑顔で尋ねてくる。うーん、そうだなぁ…と、考え始めたところで先生に声をかけられた。

「ね、ねえあなた達？　なんで、陸上部入らないの？」

「どういう意味ですか？」

先生の質問の意図が掴めず聞き返す公子。すると、先生は少し興奮した様子で僕たちに近付いて話し始めた。

「良い？　岳羽さんの１１秒０１っていうのは２０歳未満のジュニア大会なら女子世界３位に入れるタイム。草摩さんの１０秒６８は成人も含めた女子の世界４位に入るタイムなのよ？　そしてなにより、有里君の９秒４９は世界トップに０．０９秒の大差で勝利してるのよ」

「へぇー、２人とも足速いんだね」

「「あんたが言うなっ」」

先生の話をきいて公子とゆかりに笑いかけると、揃って突っ込みを入れてきた。そう言われても、すでに僕の肉体は人外と言っていい。それと通常の人間を比較するのはどうだろうか？なので、２人の突っ込みと先生の話は軽く流すことにした。

「まぁ、気にしたところで無駄じゃん」

「いや、そうだけど……まぁ、そうよね。んで、結局勝ったけど湊君は私達にしてほしいことある？」

「うーん…別に「コラー！　湊はいつまで女子の方に参加してんだっ、お前はこっちだろうが！」…やれやれ」

別になにもないよと言おうとすると、遠くの方から順平が大声で呼んできた。確かに体育は２クラス合同だけど男女は分かれてるんだよね。まぁ、僕は暇だからよく女子の方で遊んだりしているので、女子の方は先生も含めて別に気にしなくなっている。

「男子は今日は走り高跳びだっけ」

「っぽいね。けど、湊君って別にやる意味なくない？」

「さぁ？　まぁ、向こうで五月蝿いのがいるから参加してくるよ」

公子に尋ねられ答えると、そういって女子のいるトラックからグラウンドの真ん中の男子のいる方へと向かう。男子の方を担当している先生はいまさら気にしてないみたいだが、他の男子は順平を筆頭

に僕に対して怒っているようだ。

「やぁやぁ、みんなお疲れー」

「お疲れじゃねっつの！　なんでお前は普通に女子の方に馴染んで記録まで測ってんだよッ」

「なんでって走ったからだけど？　まぁ、余裕で勝ったけどね」

言いながらフンスと勝ち誇ると、さらに順平や宮本が怒ってきた。

「女子に勝って勝ち誇ってんじゃねえよ！」

「お前こっちでは本気でやらないくせに、女子の方では本気出すのやめろ！」

「いや、向こうでも本気は出してないけど…ってか、順平。対戦相手が誰だと思ってるの？　女子だからとか言ってるけど、この中で2人に勝てる人は僕以外いないと思うな」

記録も知らずに“女子に勝った”という点だけで文句をつけてくる相手に言い返すと、他の者も一度女子の方へ視線をずらした。そして、再び僕の方を向いて緊張した様子で尋ねてくる。

「じゃ、じゃあ、ゆかりッチと公子ッチの記録言ってみろよ」

「ゆかりは１１秒０１で、公子は１０秒６８。ゆかりのは２０歳未満のジュニア大会なら女子世界3位に入れるタイムで、公子は成人も含めた女子の世界４位に入るタイムなんだってさ」

「「「はぁっ！？」」」

タイムを言った瞬間に驚く男子たち。まぁ、世界レベルがこんなところにいるなんて驚きだよね。そして、案の定2人に勝てる人間はいないのか運動部も含めてズーンと暗くなっている。

「さて、この前１００メートル走ったときの記録を教えてくれるかな？　順平、宮本、ついでに友近」

「ついでって言うな！　…１２秒８０だよ」

「俺は１１秒４４だ」

「ちくしょう…１１秒３２だよっ！」

友近・宮本・順平の順に答える。宮本にとっては順平がかなり運動出来るのが驚きだったようで、そのときはかなり悔しがっていた。けど、クラス最速だった順平でもゆかりとかなり差がある。これで勝ち誇るなとはよく言えたものだ。

「え？　ゴメン、全然聞えなかった。もう1回言ってくれるかな？」

「ぐっ、ちくしょう。走りでは勝てなくてもジャンプ力ならオレっちの方が上なはずだ！」

「それなら俺も勝負するぜっ。まぁ、身長差があるからハンデが欲しいなら少しくらいやるぜ？」

言いながらニヤリと笑いかけてくる順平と宮本。まぁ、確かに2人

とも僕よりも5センチ以上背が高いからね。けど、必要なのは身長ではなく、筋肉の質だと思うな。そう思っていると、トラックの方から大声が聞えてきた。

『頑張ってねー湊君！　一番だったら、デートしてあげるからねー！』

「のーさんきゅー！！」

声の主は公子だった。別にまだ跳ぶ番ではないのだが、応援してくるのはいい。しかし、大声でデートしてやると言ってくるのはどうだろうか？ってか、それで喜ぶのは向こうだけじゃないか？そう思っていると、さっきまで沈んでいた男子たちが立ち上がりプルプルと震えていた。

「みんなどうしたの？」

「お前への怒りで震えてんだよっ。なんで体育の授業で一番になった程度で公子ッチとデートできるんだってな！」

「いや、向こうが勝手に……」

そう言って相手をするのに疲れていると、順平が女子の方へ向いて歩き始めた。そして、少しして止まると大声で向こうに向かって話しかける。

「公子ッチー！　湊だけ不公平だぞー！」

『はぁ？　他の男子が湊君に勝てるわけないじゃーん！』

「そんなに自信あるなら、勝てたやつにはデートする権利を与えるってのはどうだー！」

『いいよー！　なら、私とゆかりと風花の中から選ばせてあげるー！』

公子がそういった瞬間に『よっしゃー！！』と沸き上がる男子たち。女子の方でもゆかりと風花が公子に対して抗議しているようだ。ってか、これぐらいで盛り上がる男子って…。そう思っていると、順平がかなりのやる気を出して話しかけてきた。

「つーわけだ。悪いが今回は負けられねえぜ」

「いや、どうでもいいけど」

「んじゃ、センセー。湊のやつはみんなが跳び終わったら跳ぶってことで、ヨロシクっス」

順平に言われた先生は呆れたように「わかった、わかった」と言って、計測を始めた。そのまわりでは男子たちが念入りにストレッチを始めている…はぁ。

そうして男子たちの決死の覚悟の成果か、全員がいままでで一番の記録を出していた。あ、友近は普段と一緒だったっけ。そして、いまは最後まで残った順平が頑張って跳んでいる。これは授業だから2回失敗すればアウトだ。

《カシャン》

「2回失敗、伊織の記録は187センチだな」

「くっそー、もう少しだったのに」

「けどまぁ、俺もお前もかなり良い記録出たじゃねえか」

「そだな。んじゃあ、湊君。跳んでみようか」

順平には一歩及ばなかった記録185センチの宮本。そして、自身の身長よりも高い記録を跳びクラス1位になった順平が自信満々に言ってきた。ってか、この自信はどこからくるのだろう?

「よーし、全員終わったな。有里、お前の番だがどこから飛ぶ?」

「あー…面倒なんでそのままで良いです」

「そうか。じゃあ、好きなタイミングで跳んでくれ」

先生に言われて立ち上がると軽くストレッチをして身体を解す。公子は自分で決めたからいいけど、巻き込まれたゆかりと風花が可哀想だからね。少しは真面目に跳ぶとしよう。

「ほら、いつでもいいぜ。湊」

「やかましい…じゃあ、いきます」

そういってバーのところにいる先生に向けて手をあげると先生もOKサインを出してきた。それを確認して一気にスタートを切る。まぁ、これは助走にスピードを乗せ過ぎても駄目だから調節はしてるけどね。なんて考えている間にすでにバーは迫っているので、踏み

切ってジャンプする。

「……っ八艘飛び！！」

なんて冗談を言いながら正面から両足で踏み切って跳ぶと、軽くバーを越えてしまった。ってか、２メートルあるスタンドも越えてしまったぞ。そうして空中で一回転して着地すると、先生に記録を尋ねる。

「先生、これって記録どうするんですか？」

「……お前、陸上用のスタンド使って跳んでみるか？」

「いえ、授業用のので十分です」

「わかった。なら、有里の記録は２メートル１０だ」

言われて記録が紙に書き込まれたので、心配そうにこっちを見ている女子の方へ笑顔で手を振る。

「２０センチ以上勝ったよー！」

『おめでとー！　それで誰を指名するのー？』

「じゃあ、明日３人ともデートしよー」

『わかったー！』

嬉しそうに手をブンブン振る公子にそう伝えると、隣でゆかりと風花が安心して深く息を吐いている。そりゃ、勝手に景品にされたら

驚くよね。しかも、男子はノリノリだし。そういうことで、ポカンとしている男子諸君の元へと向かう。

「さて、負け犬諸君は片付けよろしくね。僕は明日のデートの打ち合わせしてくるから」

とても爽やかな笑顔でそう言うと、僕が跳ぶ前まで自信満々だった者たちは膝から崩れ落ちてグラウンドに手を打ち始めた。中には本気で泣いている者もいる。そんなにデートしたかったのかな?そう考えながらも、授業が終わるので女子たちと一緒に上へあがって更衣室のところで別れ、男子の中で1人早々と終わりのホームルームの始まりを待った。そして、帰ってからは美鶴さんも含めた女子3人と一緒に風花の部屋になるところを掃除した。

影時間——自室

寝ていると何かの気配を感じたので目を開けると、案の定いつもの少年が笑顔で立っていた。なので一応、挨拶をしておく。

「やぁ、また会ったね」

「フフッ、正確には僕が会いに来てるんだけどね」

そういって少年は楽しそうに笑う。僕もそれに笑顔で返すと相手が話し始めた。

「また一つ試練を乗り越えたね。覚えてるかな…前に僕が言ったこと。“全てが終わる”っていう話。あれからまた、少し思い出したんだ。たぶん“終わり”は…避けて通れない。でもね、不思議なんだ。君を見てると、そんな事とは反対の大きな可能性を感じる。

現に君の“力”…前とは変わってきてるみたいだしね。」

「守るための力だからね。敵が強くなるなら僕も強くなるさ」

力について言われたのでそう返す僕。相手の少年もそれを聞いて「フフッ、確かに」といって楽しそうにしている。そして、さらに相手は続けて口を開いた。

「ねえ、よかったら、僕とトモダチになってよ。君に、スゴく興味があるんだ…どうかな?」

「いいよ、僕は有里湊。よろしく」

「うん、じゃあ今からトモダチだね。僕の名前は…“ファルロス”。よろしくね」

そういって相手は右手を差し出してきたので、僕も右手をのばしてファルロスとしっかりと握手する。不思議な少年だと思っていたけど、触れた感じも不思議だ。温かいようで冷たい気もする。そして、しっかりと握っているのに何も触れていない気もする。

「今日はもう遅いから、帰るよ。次に会える日が、今から楽しみだ。ばいばい」

「うん、またね」

挨拶を返すとファルロスは消えてしまった。やはり彼もペルソナか何かなのかな?そう思いながらも結局答えは出ないだろうと思い、僕は寝直す事にした。

第二十八話（後書き）

今回は久しぶりの執筆ということで、リハビリしながらになります。
そのため、今回の章は書き終わったら随時投稿という形にさせていただきます。まぁ、今回の章のうちに感覚が戻れば良いんですけどね…。

学校は休みですが、バイトがあるため時間がなかなかとれません。
しかし、ちゃんと完結はさせるので、他作者様の素晴らしい作品を読みながら超亀更新をお待ちください。

第二十九話（前書き）

今回はオリキャラというか新キャラっぽいのを登場させます。姿というわけじゃありませんが、その髪型のイメージと声のイメージを先に書いておきます。

金髪↓Ｐ４のミス？八高コンテスト時のクマ（ＣＶ．『うみねこのなく頃に』のフレデリカ・ベルンカステル時の田村ゆかりさん）
茶髪直毛↓Ｓｔｅｉｎｓ；Ｇａｔｅの牧瀬紅莉栖（ＣＶ．今井麻美さん）
銀髪↓ローゼンメイデンの水銀燈（ＣＶ．水銀燈や『ハヤテのごとく！』のマリア時の田中理恵さん）
茶髪癖毛↓髪をおろした公子（ＣＶ．井上麻里奈さん）

ぶっちゃけると、茶髪ストレートは服装も紅莉栖みたいな感じをイメージして書いたので、姿が想像できなかったら画像検索したらわかりやすいと思います。

第二十九話

6／13（土）
朝――校門
朝、学校に1人で向かいながら、今日は放課後に公子・ゆかり・風花の3人とデートだなぁ。なにして遊ぼう？そう思っていると、今日も誰かが後ろから話しかけてきた。

「おはよう、湊」

「おはようございます、美鶴さん」

笑顔で挨拶をしながら僕の名前を呼んだ相手は美鶴さんだった。僕もそれに挨拶を返すと美鶴さんが話し始めた。

「山岸の事だが、今日から寮に住むことになる。今晩からでも、バックアップとして共にタルタロスに出られるだろう。これで私も、前線に復帰できるよ」

「フフッ、頼もしいです」

「ああ、期待してくれ。少し腕がなまってはいるが、すぐに取り戻す」

そういって笑いかけてくる美鶴さん。これで戦力は僕が抜けても問題ないくらいにはそろったかな？そう思いながら僕は美鶴さんと雑談をすると、靴箱のところで別れ自分の教室へ向かい授業を寝て受けた。

放課後――教室

今日の授業が終わった。午前中は基本的に寝てたけど、午後は化学の大西先生と英語の寺内先生の授業なので起きていたのだ。今日も先生たちとのお喋りは楽しかった。だが、そのお喋りについていけなかった人間が横から話しかけてくる。

「……なぁ、湊。お前さっきの授業、寺内先生と何話してたんだよ？」

「なにって普通に雑談だけど？　この前食べたパンが美味しかった～とか」

「あのなぁ…普通の高校生はネイティブ並みの英語で英語教師と雑談なんてしねぇんだよ！」

言いながら立ち上がりウガー！と怒ってくる順平。けど、普通に話してたらいつの間にか英語になってたんだから、しょうがないじゃないか。ってか、多分だけど公子も「へぇー」とか言ってたから理解してたと思うし。

「そんな事言ってもね。てか、公子も普通に話し聞いてたでしょ？」

「普通にってわけじゃないけど、大体は理解できたよ。てか、先生が言ってたポートアイランド駅の近くのイタリアン私も行ってみたいなぁ。今度、一緒にいこうよ」

「いいよ。ってか、僕は1回行ったことあるから案内するよ」

そういって遊びに行く約束をしながら帰る準備をして、前後の席の

2人に声をかけてから風花を迎えに行くことにする。

「んじゃ、風花呼んでから行くから生徒玄関で2人は待っててよ」

「はいはーい。んじゃ、いこっかゆかり」

「うん。じゃあ、先行ってるから後で来てね」

2人はそういうと先に教室を出ていった。そして、今日のデートには参加しない者にも一応声をかけてから帰ることにする。

「じゃあ、順平またね」

「ちくしょうー、薄情者ー」

「はいはい。それじゃあ」

言いながら教室を出ると後ろの方で「男子集合！　今日の妨害工作について話し合うぞ！」という順平の声が聞こえた気がしたが無視してE組の教室へと向かった。

――2年E組教室　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

午後の授業が終わり、江古田のホームルームも終わったので生徒は少しずつだが教室から帰り始めていた。そして、風花も皆と同じように帰る準備をしている。

「風花、あんた今日から寮だっけ？」

「そうだよ。荷物は明日の午後に届くから、寮には着替えと学校の用意しかまだないけど」

そういって話しかけてきた森山に笑顔で返す風花。相手の言った通り風花は本来日曜の午後からだった入寮の予定を早めて、今日から分寮の方に住む事になっている。なので、細々とした必要なものを今日買いに行くつもりなのだ。

「大変なんだろうけど、1人暮らしって憧れるよねー」

「ふふっ、そうだね。私も結構楽しみなの」

「私も早く1人暮らししたいなー」

友達の風花が寮とは言え、1人暮らしを始めることになり自分も1人暮らししたくなる森山。いままで自分も同じ立場だった風花はその気持ちが分かるのか苦笑している。そして、風花が口を開こうとしたとき教室のドアを開きながら誰かが入ってきた。

「風花ー、約束通りデート行くよー」

「えっ!?　ちょ、湊君声大きいっ。それにデートじゃなくて、ゆかりちゃんたちもいるから買い物だってば」

「ん?　ああ、デートはまた今度2人きりでってこと?」

「そ、そうじゃなくって!」

いろんな意味で学校で有名な少年・有里湊。その少年が急に現れデートしようなどと大声で言えば、イヤでも言われた方は注目される。どちらかと言えば人見知りするタイプである風花も勿論注目される

ことになり、誰から見てもわかるくらい顔を赤くしていた。だが、相手はそれに構わず席までやってきて笑顔で口を開く。

「帰る準備できてる？」

「で、できてるけど…」

「んじゃ、行こっか。あ、風花もらっていくね」

「あー、はいはい。どうぞご自由に」

湊がくる直前まで風花と会話をしていた森山がそう告げると、湊は席に座っている風花にカバンを抱かせたままお姫様抱っこして持ちあげた。

「え、えぇっ！？　ちょっと待ってっ、私、自分で歩けるからっ」

「ショートカットするから掴まっててね」

「ふぇ？　ちょ、ちょっと、そっちは窓ってっ…キャーーッ！！」

湊は風花をお姫様抱っこで抱きかかえると、胸に抱き寄せ窓から跳んで降りていってしまった。クラスに残っていた生徒はその光景にポカンとした表情を浮かべている。

「はぁー…風花も大変だねぇ」

風花と湊が去った窓の方を見ながら、森山は楽しそうにそう呟いた。

放課後――ポロニアンモール　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

風花を回収してから生徒玄関まで行き、公子とゆかりと合流すると僕たち４人はポロニアンモールまでやってきた。

「まだ怒ってるの？」

「あ、当たり前でしょっ。別に普通に降りても良かったのに、わざわざ恐い降り方したんだから」

表情はいつもと変わらないが、どことなく強めの言い方で僕に言ってくる風花。どうやら、教室から去ったときの窓からダイブがお気に召さなかったようだ。僕は結構楽しかったんだけどなぁ。そう考えながら皆に向かって口を開く。

「まぁ、それは良いけど今日は何買うの？」

「全然よくないよっ……もう、湊君っていつもこんな自由なの？」

「いつもって言うか、自由じゃないときの方が少ないと思うよ？」

風花に尋ねられて笑顔で答える公子。まぁ、この命では自分のために生きるって決めてるからね。なんでも、やりたいようにさせてもらってるってわけだ。そして、公子の言葉を聞いて少し暗くなっている風花にゆかりが話しかける。

「風花はマシな方よ。私なんて、風花が倒れた日にタルタロスから寮まで車並みのスピードで運ばれたのよ？　抱きかかえられてるだけだから、本気で死ぬかと思ったわよ」

「そっか、ゆかりちゃんも苦労してるんだね…」

言いながら何か伝わるモノがあったのか、ゆかりの背中を撫でる風花。そして公子はそんな様子を楽しそうに見て笑っている。さっそく仲が良くなったみたいで良かったよ。だが、このままでは話が進まないので、もう一度風花に問いかける。

「んで、本当になにを見る予定なの？」

「あ、ゴメンね。えっと、特別すぐに必要なものはないんだ。だから、今後の模様替えのためにカーテンとかカーペットでも見ようと思うの」

「そうなんだ。じゃあ、ゆかりにも教えたあの店行かない？」

「ああ、あそこね。うん、あそこなら可愛いのもあるし良いと思う」

そういって頷きあう公子とゆかり。僕にはその“あそこ”というのがどの店をさしているのか分からないが、たぶん前にゆかりが言ってた可愛いものを置いている店のことだろうと思う。

「そこってここから近いの？」

「うん。少し奥の方にあるけどわりと大きめの雑貨屋だから分かりやすいよ」

「そうなんだ。じゃあ、案内お願いしてもいい？」

「勿論。じゃあ、いきましょ」

風花に案内を頼まれ目的の店まで先導していくゆかり。僕たちもそ

の後ろを歩いて追った。

――雑貨屋

ゆかりに案内されてついていくと、言ってた通り大きめの雑貨屋があった。店の外観はドールハウスを人間のサイズに合わせたといった感じで、とてもお洒落だと思う。そして、みんなの後ろについて中に入ると。中はファンシーな物から大人の女性にも似合いそうな小物まで様々な商品が置かれていた。

「うわぁ、私こんなとこ初めてきた…」

「結構、穴場だからねぇ。私もゆかりに教える少し前に偶然発見しただけだし」

目を輝かせながら店内を見渡す風花に笑いながら言う公子。ゆかりもその様子を見ながら新規入荷商品の棚を見ている。そして、キョロキョロと色んな商品に目移りしている風花に公子が話しかけた。

「カーテンとかカーペットはあっちの方だよ。入口付近は新しく仕入れた商品が並べてあるの」

「そうなんだ。じゃあ、私向こうの方見てくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

言いながら家具や内装用品を置いてある売り場へ向かう風花。それを見送ると公子が嬉しそうな顔をしてこっちによってくる。その笑顔の理由はなんとなく想像できるが、一応聞いてみることにした。

「どうしてそんなに嬉しそうなの？」

「えへへ、実は前からここに湊君を案内したかったんだよ」

「それはテストの時の話かな？」

「せーかい！　可愛いアクセサリーが売っててねぇ。自分でも買えるけど、やっぱりプレゼントの方が嬉しいでしょ？」

言いながら腕を組んで目的の場所まで誘導してくる公子。はぁ…約束してたからプレゼントするのは良いけど、わざわざ店内で腕を組まなくてもいいのに。そう思っていると、可愛らしいものから上品なものまで色んなアクセサリーを置いているケースまでやってきた。どれもそんなに高くはないけど、造りはしっかりしているみたい。

「でね、私が欲しいのはこれなんだぁ」

「これは…月のネックレス？」

公子が指をさしたところを見ると、ガラスケースの中に三日月の形をしたネックレスが飾ってあった。三日月の金属の中に青いサファイアがワンポイントとしてはめこまれている。

「いいよ。なら、店員さんに言って包んでもらおうか」

「やったー！　ありがとう湊君♪」

その場でジャンプして喜ぶと公子はすぐに店員を呼びに行った。その間、僕もまわりの商品を見ていると１つのモノが目に付いたので手に取る。

「（リボン付きの金髪のカツラ？）」

手に取ったのはリボンというかカチューシャのようなもの付きの金髪カツラだ。まぁ、雑貨屋なのでこういった物が置いてあっても不思議ではない。そして手に取ったので暇だし被ってから近くの鏡で姿をみるとそこには知らない人間がいた。

「（へぇー…誰だこいつ？）」

「湊くーん、店員さん呼んできたよぉって…ブフゥッ！！」

呼ばれたので振り返ると、公子が僕の姿をみて吹き出していた。その後ろをついてきていた若い女性の店員さんも、吹き出した公子とカツラを被ってぼーっとしている僕にどう反応したものかと困っている。なので、裏声を使って先に話しかける事にした。

「あ、すみません。このネックレスをお願いします」

「は、はい。かしこまりました……どうぞ」

「ありがとうございます。あの、これプレゼント用に包んでください」

「わ、わかりました。お贈りする相手は女性で宜しいですか？」

「ええ、よろしくお願いします」

ニコっと笑いながらそう言うと、店員さんは少し顔を赤くしながら包装のため去っていった。そして、吹き出してから未だに回復していない公子に近付くと再起動を促す。

「どうしたんですか、お姉様？」

「うぇっ！？　え、えーと…っていうか誰っ！？　いや、湊君なのは分かるんだけど、本気で誰って感じなんだけど！」

「落ち着いてください、お姉様。こんなのカツラを被って、裏声で話しているだけではないですか」

そう言ってからフフッと微笑むと、混乱しているのか公子は顔を赤くする。ってか、自分が誰だよって思うのは分かるけど。他の人にとったらそこまでじゃないと思うんだけどな？そう思っていると、公子が僕に話しかけてくる。

「裏声ってレベル超えてない？　普通に女の人の声に聞こえるよ。それにカツラ似合いすぎ…」

「目に付いたから被ってみたんだよ。他にも色々あるから公子も試す？」

「私はいいよ、湊君に勝てそうにないから」

普段通りの声と話し方に戻ってから公子に尋ねると、首を振って遠慮してきた。別に楽しむためのモノなんだから、勝ち負けとか気にする必要ないのになぁ。そう思いながらも、他のカツラを色々とみていく。

「ねぇ、それ買うの？」

「ん？　まぁ、何個か買ってもいいかな。反応見るの面白いし」

「ふーん、じゃあ私にも1つ選ばせて」

公子がそういって僕の横でカツラを見始めたので、「いいよ」と返事をするとやる気を出してかなり本気で選び始めた。なので、近くにあったカゴに被っていた金髪カツラを入れて公子が選んだやつを被っていく。

「うーん、やっぱりセミロング以上の長さの方が良いね」

「別にこだわりはしないけど、その方がインパクトは強いだろうね」

「じゃあ、この銀髪ロングか緩い癖がかった茶髪が「2人はなにしてんのよ…」」

急に声をかけられ後ろを見ると、呆れたような表情のゆかりが立っていた。だが、公子は選ぶのに集中しているのか気付いていないようである。しょうがないでゆかりには僕が答えることにした。

「えっとね、僕が被るカツラを選んでるんだよ」

「カツラ？　どこでそんなの使うのよ…」

「ネタだからいつでも良いけど？」

そういって公子が悩んでいる内の1つを手に取ると、自分の髪が全て納まるよう注意して被る。被った後は微調整をしてゆかりに感想を聞く事にする。もちろん、裏声で。

「どうでしょうか？」

「ブフゥッ！！　ゲホっゲホっ、ちょっとなんて声出してんのよ！」

「変ですか？」

「変じゃないから驚いてるの！」

ゆかりはそんな風に怒ってくるが、さっきの公子のリアクションですでに耐性ができていたのでクスクス笑って返す。すると、ゆかりはどう反応すればいいのか分からないのか「むー！！」と腕を曲げて手をバタバタしている。その様子を笑ってみていると、選んでいた公子が話しかけてきた。

「駄目だー。最終候補までは選んだんだけど、どっちも甲乙つけ難くて選べないよ」

「候補ってどれ？」

「いま湊君が被ってるやつとこれ」

そう言いながら公子が見せてきたのは茶髪でやや癖のかかっているカツラだ。雰囲気的には髪を降ろしているときの公子っぽいタイプなのでこれも面白そう。そして、僕がいま被っているのは銀髪の正統派ストレート。腰よりやや上の長さの茶髪に対し、こっちはお尻くらいまでの長さがある。

まぁ、金髪と初期に自分で選んだ腰まである茶髪ストレートを含めた４つを買っても、１万五千円もしないので許可するか。そう思い

カツラを外してカゴに入れながら口を開く。

「じゃあ、両方買うよ。何個もあった方がバリエーション増えて面白いし」

「ホント？　じゃあ、服とかも買う？」

「良いのがあれば買おうかな。けど、スカートは流石にマズイからハーフパンツとかね」

僕がそういうと「じゃあ、探してくる～」といって公子は去っていった。その後ろ姿を苦笑しながら見ていると、ゆかりが横から服を引っ張ってくる。

「ん？　どうしたの？」

「えっと、その…湊君て女装の趣味とかあるの？」

「いや、無いけど。別に抵抗感もないかな。なんか他の人の反応見てると楽しくてさ」

「そ、そうなんだ。まぁ、カツラと服装くらいならセーフかな」

ゆかりはそう言ってうんうんと1人で納得している。別に女装癖があると言われても気にしないけどね。言われた所で無視するだけだし。

「ところでゆかりは欲しいものあった？　テストのときの話で公子はネックレスを選んだんだけど」

「あぁ、そんな話もあったっけ。うーん、良いかなって思うのは何個かあるんだけどね」

言いながらアクセサリーの売り場までいくゆかり。僕もカゴを持ちながらその後ろをついていくと、ピアスのコーナーで立ち止まった。

「えっと、このピンクの石のやつと、やや赤い石のやつで悩んでるのよ」

「綺麗だね。ピンクダイヤとルビーか」

「そうなのよ、どっちも綺麗だから悩んじゃってねぇ。どうせなら、湊君が選んでくれない？」

ゆかりはピアスを指差しながら僕にそう言ってくる。まぁ、確かに綺麗さではどちらも同じくらい綺麗だから悩むな。けど、ゆかりに選べと言われたら僕が選ぶのは決まっている。

「じゃあ、ピンクダイヤの方をプレゼントさせてもらうよ」

「フフッ、なんとなくそっちを選ぶ気がしてた」

「だって、ピンクはゆかりのイメージカラーだし。んじゃ、店員さん呼んで包んでもらおうか」

笑いながらゆかりにそう言うと、「それも言うと思ってた」と笑いながら言われた。そうして、近くにいた店員さんにケースを開けて取り出してもらうと、包装を依頼して風花の元へ向かった。

――雑貨屋店内

風花のことを探すとインテリアのエリアから移動していたようで、少し探すと食器や調理器具のコーナーにいた。

「良いのあった？」

「え？　ああ、色々あって悩んじゃって」

「あ、そのマグカップ可愛い」

良いのがあったか聞くと苦笑しながら答える風花。そして、風花が手に持っていた物をみるとゆかりがそう言って風花の隣にしゃがんだ。

「うん、可愛いから買おうかなって思ってたの。そう言えば、寮って食器とかはどうなってるの？」

「僕は公子・ゆかり・美鶴さんのをテキトーに借りて使ってるけど？」

「それホント湊君だけだから…。普通は個人個人のを持ってて使ってるの。まぁ、お皿とかコップ類は共用のがあるけど、カップはわりと自前かな」

「そっか、じゃあこれ買っていこっと」

風花はそう言うと立ちあがり自分のカゴにカップを入れた。中には新しいパジャマやエプロンなどが入っている。１人暮らしになったから料理を作るつもりなのだろう。そして、風花が立ちあがったのでゆかりも同じく立ちあがると、公子が笑顔でやってきた。

「湊君、安くていいの見つけてきたよ！」

「ずっと選んでたんだ…」

「けど、それ女性物じゃ？」

良い笑顔で持ってきたものを見せてくる公子に対し、ゆかりと風花がそれぞれそう反応する。僕もやや苦笑しながら持ってきた服を見ると中には何枚かスカートが混ざっていた。…これを僕に着ろと？

「いや、なんでスカートも選んでるのさ？」

「だって似合うと思ったんだもん。サイズはちゃんと選んできたから大丈夫だよ♪」

「流石にいきなりスカートはハードル高いよ…」

「まぁ騙されたと思って着てみてよ。あ、すみません試着室借りまーす」

公子は店員さんにそう言うと、服とカゴを持って僕を試着室まで引っ張っていった。そして、靴を脱いで中に入ると僕が選んだ茶髪ストレートのカツラと上着とスカートを渡してきた。シャツ系がないってことは、上は制服のシャツでいろってことか？

「ねぇ、上って上着だけ？」

「うん、半袖シャツにネクタイつけてから上着着てくれたらいいから」

言われて確認してみると確かに赤色のネクタイが入っていた。しょうがないので、第二ボタンまで外したままネクタイをしめることにする。そして、スカートをどうするか悩んだ末に先にカツラを装備してから穿く事にした。

カツラを被り終え覚悟決め、ズボンを脱いでスカートを穿き始めようと思ったらよく見るとミニに見える短パンだった。くそぅ騙された。そう思いながら黒の短パンをさっさと穿くとゆったりした上着を羽織って着替えが完了した。

「着替え終わったよー」

「はいはーい。じゃあ、お披露目でーす」

《シャー》

「「「うわぁ…」」」

試着室のカーテンを開いた瞬間にそう言ってくる女性陣。てか、見た感想がいきなりの「うわぁ…」とはどういう事だ。相手の反応に少し傷つきながらも、一応話しかけることにした。

「どうですか？」

「いやぁ、予想以上に洒落になってないわ」

「てか、湊君って男子なのに足すべすべよね」

「女の子にしか見えない……」

そんな風にそれぞれのリアクションを見せる女性陣。まぁ、風花の

感想を聞く限りでは問題なさそうだ。じゃあ、これ着て帰ろうかな。なぜかポロニアンモールの中央付近に順平たちクラスの男子の気配を感じるし。

「問題ないならこれ着て帰ろうと思うんだけど。どうやらクラスの男子たちがデートの邪魔しにきたのかポロニアンモールにいるみたいだし」

「そうなんだ。じゃあ、黒ニーソ履いて完成ってことで店員さんにタグ切ってもらおうか」

「わかった。じゃあ、レジ行こうか」

渡された黒のニーソックスを履いてから、ハイのスニーカーの履き口を外側に折って普通のスニーカー風にする。そして、靴も履き終えると自分の着ていた物をゆかりに持ってもらい、レジで会計とタグを外してもらった。

そのとき入寮祝いということで、風花の物も一緒に買ってプレゼントするととても喜んでくれた。他2人も包装を依頼していたアクセサリーを受け取ると僕にお礼を言ってきた。そうして僕たちは雑貨屋での買い物を終えると、最後に理事長に言われていた骨董屋に向かうことにした。

――古美術眞宵堂

雑貨屋から出た後は順平たちのいない方を通って骨董屋までやってきた。この店はついこの前リニューアルオープンしたばかりのため、置いてある商品に対して内装は新しさが残っているように感じる。だが、商品に合わせるように壁の色や落ち着いた色の照明を使って

いるので、それほど気にならない。

「…いらっしゃい」

「あ、こんにちは」

いらっしゃいと言われたので、店の中へ進んで行くと鳥海先生より少し年上くらいの女性が椅子に座っていた。この人が店主なのだろうか？そう思っていると、店主さんが口を開いた。

「黒沢から話は聞いてるよ、戦っているんだってね。しかし、あいつの話じゃ女の子は桐条の娘さんを入れて3人って聞いてたんだが？」

「あ、昨日新しく1人入ったんです」

「はじめまして、山岸風花って言います」

公子に言われて風花は前に出ると、店主さんに挨拶をした。だが、まだ1人多いと思っているのか僕たちの方をジッと見る店主さん。なので、一応説明しておく。

「一応言っておきますと、私は男ですよ？」

「っ！？　そう言いながら自分の事を“私”なんて呼んで、あんたそれワザとやってるだろう。まぁいい、ここは骨董屋だよ…表向きはね。裏じゃ、武器を扱ってる」

裏声を使ってニコっと微笑むと面喰ったような表情になったが、店主さんは気を取り直して説明を始めた。そして、僕たちもそれを聞

いていると、店主さんが言葉を続ける。

「って言っても、ただの武器じゃない。ペルソナと合体させるんだ。武器の素材…“無の剣”や“無の薙刀”みたいな素体を持ってくればね。特別にひとつあげとこうじゃないか。ほら、それは“無の剣”だよ」

そういって剣のような形をした金属を僕に渡してくる店主さん。ゆかりに貰った剣はこの前のシャドウ戦で失ったので、丁度いいやと思いながら受け取った。

「へぇ、素体って言われましたけど、これでも十分戦えますね」

「…そんな見た目で軽々と剣を扱うのってシュールだね」

「お姉様ったら酷いです。私だって色々言われれば傷つくんですよ？」

渡された無の剣の調子を確かめていると、苦笑してくる公子にそう返す僕。それを見てゆかりは頭に手をあて、溜め息を吐きながら首を横に振っている。そんなゆかりをスルーしながら店主さんに話しかけようとすると、突然無の剣が光り始めた。

「っ！？　剣の形が！？」

「湊君なんかしたの！？」

「ただ握ってただけですよっ」

驚く風花、そして形状を変化しはじめた理由を尋ねてくるゆかり。

だが、理由を聞かれても僕にもわからない。そして、光が治まると無の剣の形状が完全に変わっていた。

「それ……刀？」

「というより、どちらかと言えば太刀ですね」

「……ちょっと貸してみな」

公子に尋ねられて答えると、そういって刀を渡すよう言ってきた店主さん。言われた通り素直に刀を手渡すと、鍔や柄を外し始めた。そっか、刀の銘ってそこに刻んであるんだっけ。そう思っている間に全て外し終えると店主さんが口を開いた。

「全長約１３０センチ、刃渡り約１０８．３センチ、柄約２１．７センチ……この刀の銘は『フツノミタマ』だね」

「フツノミタマ？」

「『フツノミタマノツルギ』っていって“布都御魂剣”とも“？霊剣”とも書かれるが、神話上の霊剣の一種さ。まぁ、同じ名前で国宝指定されてるモノもあるけどね」

僕らにそう言いながら刀を元の状態に戻していく店主さん。ゆかり達は知らなかったみたいだが、僕は一応聞いた事あるけどね。確か神を退けられるとかなんとかって話だった気がする。そうして、元に戻し終わり店主さんから刀を受け取ると、しっかりと確認する。

「さっきよりも長くなったのに、質量はそんなに変わらないですね」

「いや、かなり重い部類に入ると思うんだが、あんたは片手で扱えるんだね。まぁ、それよりも合成すらせずに変化したことに驚いたよ。あんたもしかしてペルソナとかじゃないのかい？」

「いえ、むしろ私だけペルソナが使えないんですよ。その分、他の方には使えない力があるのですが」

言いながら？霊剣へと魔力を通していく。さすがに抜き身の刀を持ち歩くのは危険だからね。魔力を通して白金の腕輪に仕舞っておくことにした。そうして、テオドアがやっていたのを思い出してやっていると、無事に魔力が通し終わったので腕輪にしまう。

「っ！？　どうなってんのか分からないけど、あんたが有里湊ってやつなのはわかったよ。黒沢が言ってた通り規格外だね……」

「フフッ、あまり褒めないでください。そんなに褒められると恥ずかしいです」

「…まぁいいが、次からはちゃんと自分で取っておいでよ。金ぴかのシャドウが持ってるらしいからね。それと…まだ研究中だからハッキリとは言えないがペルソナによって、あんたが持った時みたいに特定の武器になる場合があるみたいだね。ま、色々試してみなよ。…ああそれとね、宝石を持ってくればウチの物と換えてあげるよ」

「わかりました。それじゃあ、今日は帰りますね」

「ああ、またきな」

そういって挨拶をすると僕たち４人は店を出た。その後、クラスメイトの男子たち数人に僕たちの姿を見られたが今の僕を有里湊だと気付くものはおらず普通に帰ることができたのだった。

夜――ラウンジ

ポロニアンモールで順平たちクラスの男子からばれないようにすると、無事に帰ることができた。そして、みんなよりも多く荷物をもっているため、ゆかり達に先に行ってドアを開けてもらい寮にはいると、ラウンジには美鶴さんと真田先輩がいてお茶を飲んでいた。

「…君たちか、おかえり。いや、山岸にはようこそと言った方が正しいかな」

「あ、これからよろしくお願いします」

美鶴さんに言われて頭をさげて挨拶する風花。その様子をみて笑顔で先輩たちは返事をした。そして、一通りの挨拶を終えると真田先輩が口を開く。

「…さっきから気になっていたんだが、後ろの女子はクラスメイトか？　今日はてっきり有里と一緒だと思っていたんだが」

「なんで私達と湊君が一緒だと思ったんですか？」

「ああ、昨日の午後の授業のグラウンドの会話は校舎まで聴こえていたからな。それに夜に順平の部屋から電話の話し声が聞こえていたんだ。なんでもクラスの男子と結託して有里を女子から引き離してハーレムデート阻止しようとかなんとか。まぁ、その様子じゃ今回は順平たちに軍配が上がったようだな」

公子の質問に答え僕と公子たちが一緒だと思った理由を言ってから、「やるな順平たちも」と言って笑う真田先輩。だが、本当の軍配がどちらに上がったのかを知る者たちは僕の方を向いて苦笑いしている。なので、僕も先輩たちの前言ってキチンと挨拶することにした。

「はじめまして、【奏（かなで）　有理（ゆり）】と申します」

「ああ、はじめまして。俺は3年の真田だ」

「……ちょっと待て、明彦。うちの学校には奏という名字の生徒はいないぞ」

そういって美鶴さんは呑気に挨拶する真田先輩を止めると、僕の方をジッと見てきた。まぁ、全校生徒の名前を覚えていることには驚いたけど、すぐにばらすつもりだったので早速ネタばらしをすることにした。

「フフッ、よく分かりましたね。【有里（ありさと）　奏（かなで）】とどっちにしようか悩んだのですが、名字も名前も変えた方が分かりづらいと思い先ほどの名前にしたのです」

「…ということは、君は湊か？」

「そうです。ですが、女子の姿をしているときは、私の事は【奏（カナデ）】か【有理（ユリ）】と呼んでください」

言いながらニコっと微笑むと美鶴さんは頭に片手を当てて「やれやれ」と首を振っている。その後ろでは信じられないという表情で真田先輩が固まっているが、気にしないでおこうと思う。

「それで……なぜそんな格好を？」

「最初は面白いかなという事だったのですが、順平やクラスの男子が来ていること分かったので変装したんです。その甲斐もあって見事にばれませんでした」

「そりゃ、ネタばらしされた俺が未だに信じられないんだ。なんの情報もない人間では分かるはずもない…」

真田先輩はそういって疲れた表情をしている。ま、こんなにみんなを騙せるとは思ってなかったんだけどね。そう思いながら笑って返すと、僕たちは荷物を置きに行くことにした。

「じゃあ、荷物をおいてきますね」

「ああ、女子2人は山岸を案内してやってくれ」

「「「はーい」」」

「ちょっと待て、有里お前いま密かに返事しただろ」

「先輩、名字で呼ぶなら女子の姿のときは奏と呼んでくださいって言ってるじゃないですか。次に間違えたら寝ている間に私のカツラ被せますよ？」

上に上がろうとしたら真田先輩に呼び止められたので、そういって笑顔で言い返すと「くっ…わかった」といって先輩も渋々了承した。僕はその様子に満足すると買ってきた物をもって自室へと向かった。

――自室

自室に戻るとまずは制服をカバンから出してハンガーにかけた。そして、公子が選んだ服のタグを切ってからクローゼットに仕舞っていく。そして、いまの服から着替えるのが面倒なので上着だけ脱いでハンガーにかけておくことにした。

『……貴方、やけに馴染んでるわね』

「まぁ、楽しいですからね。それに貴女の髪型に似ているカツラを見つけたのが発端ですし」

『ああ、あれね。確かに似ていたけど……なんで声まで真似できるのよ』

そういって少し呆れた表情をする彼女。まぁ、なぜか出来たんだからしょうがないよね。そう思いながら笑いかけると、彼女は再び口を開く。

『髪型によって声を変えれるってことは、本気出せば寮生全員の真似ができるんじゃない？』

「たぶん出来ると思います。というより、もう1つの茶髪のときは公子の声を真似しようと思っていますから」

『従姉だけあって顔の造りもどことなく似ているし、声まで真似出来たら本当の姉妹のように見えるでしょうね』

「フフッ、いまから楽しみです」

笑いながら言うと、僕を見て相手は溜め息を吐く。なんでみんな同じようなリアクションをとるんだろう？そんな疑問を持ったが夕食

まで暇なので、立ちあがって上着を着ると女子のフロアへ遊びに行くことにした。

――風花の部屋

《コンコン》

『どうぞー』

まだ荷物が届いていないので、暇をしているのではないかと思い。風花の部屋に遊びにきた。そしてドアをノックすると入室を許可されたので中へ入ることにした。

「失礼します」

「あ、湊君。えっと、有理ちゃんだっけ？　まだ、有理ちゃんの格好してたんだ」

「ええ、着替えるのが面倒だったものですから」

まだ女装したままの理由を答えると、風花は「確かにそうだね」と笑っている。部屋の中に行くと今日買ったばかりのクッションを渡されたので、それを床に置いて上に座った。

「家具の配置とかは考えましたか？」

「うん。まぁ、実家の部屋と大体は同じなんだけどね。やっぱり、場所は変わっても慣れた配置の方が落ち着くから」

「フフッ、そうですね。けど、こっちの生活に慣れてきて模様替えがしたくなったら呼んでくださいね。そのときはお手伝いしますから」

「ありがとう、そのときはお願いするね」

そう言って笑いながら今日買ってきた物からタグを切りとる風花。このクッションもだけど、エプロンやマグカップも大人しめなデザインだ。なんとなく、絵本のような温かみを感じるが、風花はこういうものが好きなのだろうか？

「風花は、ゆかりや公子が持っているような、今どきの女子向けのデザインは嫌いなんですか？」

「んー、嫌いってわけじゃないけど。どちらかと言えば、こういう大人しいデザインの方が好きかな。でも、雑誌とかは読むから最新の物にも興味あるよ」

「そうなんですか。じゃあ、今度また一緒にお買いものに行きましょうね」

僕がそういって微笑むと風花も優しい笑顔で「うん、いいよ」と返してきた。その後ろでは僕しか見えない彼女が、『いつまでやってるつもりよ…』と呆れている。僕はそれをあえて見ないようにしていると、笑っていた風花が突然不思議そうな顔をした。一体どうしたんだろう？

「……あれ？　それって湊君として？　それとも有理ちゃん？」

「別にお好きな方を選んでくださって構わないですよ。それとは別口で湊としてもデートするつもりですから」

そんな風にニコっと笑っていう僕。だが、相手は対照的に顔が驚き

の表情へと変わっていく。

「え？　えぇっ！？　学校で言ってた事って本気だったの！？」

「当たり前じゃないですか。せっかく仲良くなったんですから、2人で遊んでもおかしくないでしょう？」

「そ、それはそうだけど…ゆかりちゃんと公子ちゃんが怒るんじゃない？」

「あぁ、付き合ってるとかそういうのを気になさってるなら、それは全てデマですので大丈夫です。なので、普通に買い物や映画でも楽しみましょう？」

僕がそういうと相手も「まぁ、普通に遊ぶくらいなら…」といって了承した。その後も僕たちは雑談していると、公子にご飯が出来たと呼ばれたので。風花も一緒に降りてデートした4人で食事をした。

すでに食事を終えていた先輩たちはまだ着替えていない僕をみて溜め息を吐いていたが、こういうのって気にしたら負けだと思うんだよね。その後、お風呂に入って普段の僕に戻ってから順平が帰ってきたので、結局順平やクラスの男子には最後までばれなかった。これならまた変装しても大丈夫そうだなと思いながら僕は休むことにした。

第二十九話（後書き）

というわけで、前書きの話は女装時の湊のことでした。声も見た目も別人って感じになりますが、右目の眼帯はそのままなのである意味分かりやすいです。

黒紅に続いてのオリジナル武器”フツノミタマノツルギ”のイメージは『灼眼のシャナ』に出てくる『贄殿遮那』です。まぁ、その作品を知らない方は飾り気のない業物の大太刀と思ってください。普通の物に比べると柄が２０センチちょいと結構短めです。なので、重量を考えるとまともに扱えるの片手で持てる湊だけになります。

第三十話（前書き）

今回も湊のチート能力が出てきますが、一応理由があります。なので、それは後書きに書いておきますね。暇だったら読んでください。
では、お願いします。

第三十話

6／18（木）
朝――自室
『貴方、本気でそれで行くの？』
「え、駄目かな？」
朝、学校に行く前に制服に着替えていると、半透明な状態でベッドに腰掛けている彼女にそう言われた。この数日間でちゃんと準備したし、なんの問題もないと思うんだけどな。そう思いながら、髪の毛を手で少し整える。
「うん、準備完了」
『……もうどこから突っ込めばいいかわからないわ』
「フフッ、じゃあ行ってきますね」
僕はそういうとカバンを持って自分の部屋を出た。
――職員室
《コンコン》
「失礼しまーす」
僕は学校に着くと、まず職員室に向かった。その理由は朝のホームルームが始まる前に鳥海先生に会うためだ。ノックしてから職員室に入り部屋の中を見渡すと、机のところでホームルームの準備らしきことをしている先生を見つけたので声をかけることにした。

「鳥海先生、きましたよー」

「……ん？　え？　湊くんよね？　あなた、すごいわね」

僕が声をかけるとそんな風に驚いた顔をする先生。まぁ、普通に登校してても僕だって事がばれなかったしね。先生のこの反応はある意味予想通りだ。なので、それに対し笑顔で返すことにする。

「フフッ、寮の皆さんも同じようなことを言ってました」

「喋ってもばれないってすごいわね。誰かに頼んで入れ換わってるとかないわよね？」

「先生酷いですよ、僕のこと疑うんですか？」

「ああ、その声だとまだ湊くんかなってわかるわ。でも、普通の声でもあんまり違和感ないのね」

普段通りの声で先生に話しかけるとやっと信じてもらえた。まぁ、最初から疑ってはなかったみたいだけどね。そう思っていると、予鈴が鳴り先生は出席簿などを持って立ち上がった。

「じゃあ、奏　有理さんだったわね？」

「ええ、それであってます」

「まぁ、女装自体は草摩さんたちも一度見たみたいだけど。まさか女子の制服を改造して着てくるとは思わないでしょうね」

「短パンに、腰からマントみたいな感じで。前面部をカットして足より後ろ部分だけのスカート装備ですからね。ちょっとステージ衣装っぽいです」

先生と一緒に教室に向かいながら、そう言って自分の改造制服のスカートをヒラリとめくる。実は今日は、先生に事前に説明して茶髪ストレートの女装で転校生風に学校に来たのだ。勿論、制服は女子の物を買って改造して着ている。女装はよくてもスカートはまだ抵抗感があるからね。

「フフッ、まあ似合ってるし良いと思うわ。それにうちの学校は制服さえ着用してれば、華美じゃない限りはそこまで注意もされないし」

「というより、生徒手帳の校則を見る限りでは。男子が女子の制服を着たり、女子が男子の制服を着たりしても問題ないみたいですしね」

「まぁ、スカートが嫌いな女子もいるからね。片方だけ認めてって訳にもいかないのよ。おっと、じゃあ少し教室の前で待っててね。すぐに呼ぶから」

「はい、わかりました」

先生は僕に待っているように言うと、頭を撫でてから教室のドアを開けて中へと入って行った。さて、クラスメイトはどんな反応をみせるかな?

――教室

「みんな、おはよう。ホームルーム始めるわよ」

鳥海先生が挨拶しながら教室に入ると、雑談していた生徒たちは自分の席へと座った。そして、全員が座ったことを確認すると先生は口を開く。

「委員長、号令」

「起立、気をつけ、礼」

「「「おはようございます」」」

「着席」

クラスの委員長が号令をして挨拶を終えると、先生は名簿を取り出し出席を取り始めた。勿論、僕の名前を呼ばれても返事をすることはできないが、学校にきていることは知っているのでちゃんと出席につけてくれている。そうして、出席を取り終わると先生が連絡事項を伝え始めた。

「突然だけど、みんなに新しいお友だちを紹介するわ。入って頂戴」

『はい』

《ガラガラー》

先生に呼ばれたので、キチンと返事をしてドアを開けると一斉に生徒の視線がこっちに集まってきた。なるべく、そっちを見ないように注意しながら進むと先生の横に立つ。先生は僕が教室に入る間に黒板に名前を書いてくれたようだ。

「じゃあ、みんなに挨拶して」

「はい、奏　有理と申します。皆さん、よろしくお願いします♪」

「「「美少女キターーーッ！！」」」

ニコっと愛想よく挨拶するとクラスの男子数名がそう叫んだ。それにつられるように他の者もなにやら興奮気味のテンションになっている。だが、よく知っている人たちの方を見ると、ゆかりも公子もガクンとなって机に額を打っている。チドリもやってたけど、2人も座りながらずっこけるとか器用だな。そう思っていると、順平が立ちあがり椅子の上に片足をあげて口を開いた。

「せんせー！　奏さんの席はどこになるんですか！　丁度、僕の隣の席空いてるんですけど！」

「あっ？　順平てめぇ、汚えぞ！　つか、そこ有里の席だろうが！」

「うっせえ、この世は椅子取りゲームなんだよ！」

順平が僕を隣の席…といっても、普段も隣の席だけど。まぁ、女装姿の僕を自分の隣の席へ座らせようと必死になっている。他の男子はそれを阻止するためだろうが、僕の席だと主張しているっていうのに。その席の元の持ち主である本人にその行動がばれるとは順平もついてないね。そう思っていると、先生が僕に笑いかけてから皆に告げた。

「じゃあ、奏さんの席はそこでいいわ。隣だからといって伊織君はちょっかい出さないでよ。それと、草摩さんと岳羽さんは彼女の

ことよろしくね」

「「……はい」」

先生に僕をよろしくと言われた公子とゆかりは疲れた様子で返事をし、その隣では「ええー、なんで俺だけそんな危険人物みたいに言うんスか！？」と順平が抗議している。まぁ、さっきの必死さを見ていれば普通の女子はドン引きだと思うけどね。そんな風に考えながらいつも通りの席に座ると前後の人間が話しかけてきた。

「ちょっと、それどういうことよ？」

「私もまるで聞いてないんだけど？」

「なんの事ですか？　それよりお2人とも、呼び方は有理でお願いしますね」

たぶん、服装と転校生キャラのことを言っているのだろう2人の質問をスルーすると、ネタばれを防ぐために先に呼び方を注意しておく。2人はそれだけで諦めたのか、「はぁ…わかった」とだけ答えた。そうして、ノートや教科書類を机に入れていると順平が話しかけてきた。

「よう、オレは伊織順平。よろしくなっ」

「先ほども言いましたが、奏有理と申します。こちらこそよろしくお願いしますね。順平さん」

僕がそう言ってニコっと微笑むと、順平はなぜか嬉しそうにして「よっしゃー！」と叫んだ。鳥海先生はそんな馬鹿の様子をスルーし

ながら連絡事項を告げると朝のホームルームが終わった。

昼休み――教室

朝の偽装転校から無事に授業をこなして午前中を過ごした。普段はつまらないかた寝てたり他のことをしていただけなので、別に意識しておけば普通に授業を受けることはできる。普段、僕が寝ている授業の先生は僕の席にいつもと違う人物を見つけ名簿を確認すると、授業をいつも通り始めた。そして、僕が真面目に授業を受けて丁寧に受け答えするとほとんどの先生が満足げに帰って行った。

「なぜ先生方はご機嫌で帰って行ったのでしょうか？」

「多分だけど、湊君は真面目に授業受けないけど、有理ちゃんは授業ちゃんと受けてるからじゃないかな」

僕が質問するとお弁当を取り出しながら答える公子。まぁ、言われてみれば確かにそれぐらいしか理由はないか。そう考えて公子の答えに納得すると、自分もカバンからお弁当を取り出す。ちなみに自分で作ってきたサンドイッチだ。

「さて、いただきます」

「…？　それ自分で作ったの？」

「そうですけど、何か変ですか？」

僕がいただきますと言ってサンドイッチを1つ手に取ると、僕の方を見ながらそう尋ねてくるゆかり。僕も聞かれたから素直に答えたんだけど、なぜか相手は不思議そうな表情のままだ。なので、信じさせるために手に持っていたサンドイッチを相手の口の方へと持っ

ていく。

「はい、あーん」

「えっ!?　ちょ、いいってばっ」

「遠慮しないでいいですよ。今朝作ってきたものなので、大丈夫ですから。ほら、あーん」

「う、わかった…あーん……美味しい」

「フフッ、ありがとうございます」

相手が一口食べてそう答えたので、これでちゃんと信じてくれただろうと思い。自分もそのサンドイッチを口に運ぼうとすると、後ろから伸ばされた手によって止められた。一体どうしたんだ?

「あの、これでは食べられないのですが。どうしたんですか?」

「駄目よ、それはゆかりが一口食べたやつでしょ?　それはまるごとゆかりにあげて、他のやつにしなさい」

「でもそうすると、私のお昼が「駄目です」…はい」

公子が腕の力を強めながら僕に言ってきたので、しょうがなく言う事を聞く事にしてゆかりにサンドイッチを渡した。けど、ただでさえ少ないのにこれじゃあお腹空くよ…。そう思い少しテンションをさげていると前の席からずいっと何かが差し出された。

「はい、サンドイッチのお返し。って、言ってもこっちはおかず

だけどね」

「いえ、とても嬉しいです。ありがとうございます」

お礼を言いながらゆかりの箸を受け取ると、おかずの唐揚げと卵焼きを1つずつ貰った。まぁ、サンドイッチを全て食べたとしてもお腹はいっぱいにならなかったんだし。こうやって、エネルギーになるものを貰えると嬉しいよね。そんな風にニコニコしているとまわりの男子の声が聞こえてきた。

（「あの空間すげーな…」）

（「ああ、いつもの有里のポジが美少女に変わるだけで、こんなにも違うとは」）

（「放課後は早速ファンクラブ結成だな！」）

（「じゃあ、隣のクラスの山岸も入れてユニット風にするか」）

なんてみんな好き放題言ってる。まぁ、別にいいけど中身が僕だってわかったらあの人たちどうするんだろう。そう考え少し呆れていると、公子が僕に話しかけてきた。

「ねえ、出席とかはどうなってるの？」

「どうって私は私としてつけてますけど？　というより、そもそも特待生は結果を残せばいいので原則として出欠の有無は問われませんし」

「へぇ、そうだったんだ。あれ？　でも、授業中寝るくらいならたっぷり寝て、午後だけ授業受ければ良いんじゃないの？」

今まで寝てても特に怒られなかった理由がやっと分かってスッキリ

したのか、納得の表情を浮かべるゆかり。だが相手は、出欠がカウントされないのならちゃんと寝て、受ける授業だけキッチリと受ければよいのではと更に尋ねて返してくる

「まぁ、私はそれでも良いんですけどね。でも、ちゃんと学校には行っておかないと姉が五月蝿いですから」

「え、なになに。有理ッチってお姉さんいんの？」

僕が授業中寝てまでちゃんと朝から学校に来ている理由を説明すると、隣で話を聞いていたのか順平が話しに入ってきた。本人は楽しそうな表情をしているが、僕の前後の席の２人は呆れたような嫌そうな話をしている。

「…あのさぁ順平、隣の席だから話が聞こえるのはわかるけど。女子だけの会話に入ってくるのってマナー違反だと思わない？」

「なんだよ、固いこと言うなよ。んで、お姉さんってどんな人？」

「そうですね…まぁ、姉と言っても従姉なんですが。顔の造りは私に似てますね」

「ああ、確かに言われてみれば」

公子に諌められてもそれをスルーして僕に話しかけてきた順平。本当なら僕も諌める側にまわるけど、いまは奏有理になっているので我慢して答えた。すると、ゆかりが僕の顔をマジマジと見てその答えに同意する。だが、順平はさらにそれを聞いて驚きながら口を開いた。

「え？　なに、ゆかりッチは有理ッチのお姉さんのこと知ってんの？」

「まぁ、一応ね。てか、これいつまで続けるの？」

「別に、いつばらしても結構ですよ？」

「あ、そうなんだ。じゃあ、順平に紹介しておくね。この子の姉の草摩公子さんよ」

そういって僕の後ろに座ってお弁当を食べている公子に手を向けるゆかり。その言葉を聞き順平は顔を公子の方へ向け固まった。まぁ、真田先輩に近いリアクションだな…と思っていると、顔を引き攣らせながら順平が再起動した。

「き、公子ッチが姉？　そ、そうか、湊とは父親側の従姉だったが、有理ッチとは母親側の従姉ってことだな？　いやぁ、公子ッチとそのまわりは美形揃いで羨ましいなぁ！」

「現実見ようよ順平。てか、なんで勝手に僕の席を転校生にあげようとしてんの？」

「ぐあぁっ！！　やめろっ、その姿で素の口調に戻るなっ！」

「はいはい。ってことで、奏有理の正体は湊君でしたっと」

そういって驚いているまわりの人間に決定的な事実を突き付ける公子。順平だけでなく、他の男子もどうやら言葉を失っているようだ。まぁ、どうでもいいけどね。そう思いながら残りのサンドイッチを食べる作業に移る。

「はぁ…みんな固まってるわよ？」

「フフッ、どうでもいいじゃないですか。私は別に気にしてませんし」

「ああ、ばらしても口調は続けるのね…」

ゆかりは再び有理としての声と口調に戻った僕を見ると少し呆れていた。そして、その後は微妙に復活できていないクラスメイトたちを放っておいて午後の授業を受けたのだった。

放課後――音楽室

授業が終わりみんなが帰った後、僕は風花を迎えに来ていた。今日は、みんなが揃ったら軽くミーティングをしてタルタロスに挑むつもりらしい。もちろん、僕にも参加してくれと言われた。なので、部活で遅くなるメンバーの中で1人だけ文化部に所属している風花と帰ろうと思ったのだ。

「失礼しまーす」

「…え？」

僕が音楽室に入ると僕に気付いた風花が驚いた表情をしている。そして、迎えに来たと声をかけようと思ったら。眼鏡をかけた上級生らしき男子に話しかけられた。

「あぁと…君、うちの部員じゃない、よね…。山岸さんの知り合い？」

「え、ていうかどうして有理ちゃんなの？」

「大丈夫ですよ、ちゃんと担任の先生にも話してありますから」

眼鏡の男子の言葉をスルーしながら僕に尋ねてきた風花に答えると、眼鏡の男子は少し落ち込んでいる。まぁ、このままでは可哀想なので挨拶することにした。

「はじめまして、奏有理といいます。今日は風花を迎えにここまできました」

「奏さんだね。山岸さんのお友達かぁ」

僕がきちんと挨拶をすると嬉しそうにニコニコとする眼鏡の男子。その後ろでは風花がなぜか困ったような顔をしている。どうしたんだ？

「新入部員の当てにって、なんとなく湊君の名前を出したとこなの。来てくれたのはすごく嬉しい誤算なんだけど、なんで有理ちゃんなの？」

「なぜ…と言われても朝からこの姿でしたから、聞かれても困るのですが。私ではいけなかったですか？」

「そ、そんなことないよっ。迎えにきてくれたのはすごく嬉しいし！　……でも、有理ちゃんだとこの部活に誘えないから」

風花はそういって困った表情をする。というか、誘うって僕に管弦学部に入って欲しいってことか？けど、生徒会や弓道部の方すらまともに行ってないのに、これ以上幽霊部員の部活作るのもなぁ。そ

う考えていると、眼鏡の男子が話しかけてきた。

「山岸さんは誘い辛そうにしてるけど、君はなにか部活はしてるのかい？」

「一応、弓道部に入っていますが、遊びに来てくれるだけでいいと言われたので。まともに参加してませんよ」

「そうなんだ。じゃあ、うちもそんな感じでいいから試しに入ってみないかい？　山岸さんも友達がいた方が嬉しいと思うし。僕たちも仲間が増えると嬉しいからさ」

そういって相手はニコニコ笑顔のまま僕に話しかけてくる。うーん…別に名前だけってレベルでいいなら別にいいけど、今の姿は本人じゃないしなぁ。ま、どうでもいっか。

「名前だけ程度で良いならいいですよ。よろしくお願いしますね」

「あ、そうだ。あの僕、【平賀（ひらが）　慶介（けいすけ）】。よ、よろしく…お願いします」

「ケイスケ先輩、しっかりして下さいよ。お願い“される”方なんだから。部長でしょう？」

僕が入ると行ったら平賀部長はとても緊張した様子で挨拶を返し、それを他の部員は笑って指摘している。どうやらわりと仲が良い部活みたいだな。言われた部長も「そ、そうだよね」とまだ少しテンパった感じだが笑顔で返しているし。

「フフッ、先輩は相変わらずですね」

「山岸さんも復帰して新入部員も増えたか…。僕も、もう少し部活やろう、かな…」

平賀部長はそういって少し哀しそうな顔をしていると、それに気付いた風花が「あっ」といって口を開いた。

「あっ…平賀先輩、3年生だから…。今年受験ですよね？」

「いや、あの…。そ、そんな事よりもさ！　奏さんて管弦できる人？」

「んー、やり方とかは見た事あるんで出来ると思いますけど。ちょっと、楽器借りて良いですか？」

僕が自分の実力がわからないので、試しにやらせてもらおうと申し出ると許可が出た。そして、どの楽器が良いかを聞かれたのでとりあえずピアノでいくことにする。

「よーし、じゃあちょっと指の運動からさせてもらいますね」

「いいよ、運動曲なんて人によって違うからね。楽しみだよ」

「フフッ、まぁ初めて弾くんですけどね。じゃあ、いきます」

僕が初めて弾く事を告げると部長や他の部員も驚いていたが、無視して鍵盤を叩き始める。すると、他の人たちがなにやら言い始めた。

「（…はっ？　これ動画サイトで聴いた事あるぞ？）」

「（俺もある。なんて曲だっけ？）」

「（あ、あれだ。東方とかいうゲームの『ナイト・オブ・ナイツ』って曲）」

「（それだっ！　つか、指の動きやべえっ！？）」

フフッ、僕も動画サイトで見たんだよね。いやぁ、最初みたときは驚いたけど、意外とやればできるもんなんだな。そう思いながらポカンとするまわりを無視して最後まで弾き続けた。

「よし、準備完了。さて、なにを弾きましょうか…あ、あれが良いですね」

「ゆ、有理ちゃん？　次は何を弾くの？」

「クスクス、聴いてからのお楽しみです。じゃあ、いきます」

若干、顔の引き攣った風花にそう告げると、僕はパッヘルベルのカノンを弾き始めた。それを聴いている部員たちは、今度は普通だと安心しているみたいだ。

「上手いねぇ、奏さん。何歳くらいからやってるんだろうね？」

「そうですね…さっき言ってましたし。たぶん、生まれて2曲目に弾いてるんだと思います」

部長に聞かれてそう答える風花。うん、それ正解。なぜか料理でもなんでも見たら覚えれるからね。手先は器用な方だから、楽器の演奏も特に問題はない。なんて考えながら、みんなの方を見ると風花と目が合った。未だに顔が少し引き攣ってるね。んじゃ、これはどうかな？そうして、僕は途中で弾く曲を変えた。

「あれ？　曲が変わったみたいだ」

「ホントだ…これなんて曲でしょう？」

みんなが僕の弾き始めた曲名を思い出そうとしているが、演奏はそのまま続く。すると、何人かが再び驚いた顔をして声をあげた。

「思い出した…これ、ラ・カンパネラだ」

「ラ・カンパネラ？　どんな曲なんですか？」

「せ、世界でも有名な高難易度の曲だよ。パガニーニによる超絶技巧練習曲とかパガニーニによる大練習曲とか言われてるけど、まともに弾ける人なんてほとんどいない難曲なんだ……」

気付いた人もいるようだけど、その通り。いま弾いているのは『ラ・カンパネッラ』という曲だ。これは公子と伯父さん達に連れられていったコンサートで聴いた曲だ。演奏してた人もかなり本気でやっていたからね。特に印象が強かったんだ。ま、いまの名字が奏だから何でも演奏してやろうと思って弾いてるけど、ホントに難しいなこれ…。

そのまま僕は数分間でいろんな曲を弾いて軽くミニコンサートのような状態になった。だが、元々は風花を迎えにきたことを思い出しいま弾いてる曲で終わることにした。そうして弾き終わってからニコっと笑うと、途端に音楽室内に拍手が巻き起こる。

《パチパチパチッ》

「いやぁ、すごいね奏さん。音楽の先生でも弾けないような曲まで弾けるんだねぇ」

「伯父さん家族に連れられて、いろんなコンサートを観てましたから。その間にいろいろと覚えてしまったんですよ」

「そうかぁ。これなら、僕らの方が教わる機会の方が多そうだね。ここでこうして会えたのも何かの縁だと思うし…。籍をおいてくれるだけでも嬉しいよ、奏さん」

平賀部長はそういってとても嬉しそうにしている。この人は優しい人だし、誰に対してもこんな風に裏表なく接しているんだろうな。僕も相手の笑顔をみながらつられて笑顔になると、部長が部活の説明を始めた。

「一応、ここの出入りは部員関係者のみって事になってるから。入部届けだけは出してね。うちの部の活動日は、火・水・木曜日だよ。テスト前の何日かは活動停止になっちゃうけど。おとなしく家で勉強しろってことだね。基本、自由参加だけど、たまには顔を出してよ」

「はい、わかりました。これからよろしくお願いします」

「はぁ…今でもビックリしてるけど、まさか同じ部活になるなんてね。よろしくね、有理ちゃん」

笑顔でそういってきた風花に僕も笑顔で答えると、その日は入部手続きを終えて風花と一緒に寮に帰った。

影時間――エントランス

部活のあと風花と一緒に寮へと帰った僕は、荷物を置いてから晩御飯を食べるとミーティングに参加した。そこでの話しあいで今日は

とりあえず風花を守りつつも全員でタルタロスをのぼって行くことになった。

そして、影時間になり当初の予定通りにタルタロスにやってくると、美鶴さんが口を開いた。

「承知の通り、これからは山岸がサポートに回り、私は探索メンバーに加わることになる。人数は増えたが、今日は山岸のことも守りながら進む。その点を注意してくれ。面倒を掛けてすまないがよろしく頼むぞ」

「わかりました。って言っても、そろそろ敵も強くなってきたので今回は特別に指導をメインにしたいと思います。その時々で名前を呼びますから、呼ばれた方は私の動きをよく見て模倣してください。そして、他の方は風花の護衛と敵への牽制をしつつ指導されてる仲間の動きをみて、そのときの自分の動きをイメージして下さい」

「了解した。皆もわかったな？」

僕の言葉を聞いてそれを了承した美鶴さんが他のメンバーに尋ねると、全員がちゃんと「了解」と返事をした。さて、じゃあ誰から行こうかな？そう考えていると、風花がいそいそと近付いてきた。

「あの…私もしっかりサポートするから、有理ちゃんも気をつけてね」

「フフッ、ありがとうございます。でも、見た目と口調が違うだけで、戦闘力は変わっていないので大丈夫ですよ。靴も学校用のスニーカーからちゃんと履き替えてきましたし」

「それでも心配だから気をつけてほしいの。だから、弱点がわかるまではあんまり攻めないようにして」

「わかりました。なるべく気をつけますね」

言いながら僕のことを心配してくれる風花を抱きしめて頭を撫でると、風花は「はわわ…」と言って顔を赤くした。公子や順平はそれを怒ったような表情で見てくるが風花から身体を離すと無視してゲートへと向かった。

――タルタロス・４１階

ゲートをくぐり前回まで柵が次へいけなったフロアに向かい。柵が無いことを確認すると、次のフロアへときた。ここでもまた内部の見た目が変わっているが、とりあえず風花に先を調べてもらうことにした。

「先の階層を探ります……！？　５０階付近に強い反応があるようです。慎重に進んでください」

「了解です。じゃあ、最初は順平から行きましょう」

「うっし、いっちょやるか！　って、言いたいけど。なんで女装のままなんだよ、オマエは……」

「見た目は気にしたら負けですよ。それに皆さんにも言っておきますが、今日の私の動きは皆さんのスタイルに合わせます。なので、私の力ではなく、皆さん自身が辿り着かなければならない目標と捉えてください」

声は女声のままだが、真剣な表情でみんなのことを見て言うと。他

の人はやや緊張した様子で頷いた。うん、じゃあ始めようかな。

「では、進みましょう」

「「「「「了解」」」」」

返事を聞くと僕たちは先を目指し進み始めた。

そうして進んでいると最初の敵が出てきた。なので、みんなが武器を構えるのを見て僕も動く。

「最初は見ていてください――――出ろ、フツノミタマ」

僕は皆に下がっているように言うと、右手に?霊剣を出現させる。この刀の初陣だし少し頑張っちゃおうかな。そんな風に考えていると、風花が出現した黒い蛇型のシャドウの分析をする。

「あれは“情欲の蛇”、強敵です。気をつけてくださいっ」

「じゃあ、順平。ちゃんと見ていてくださいね」

僕はそういうと?霊剣を両手持ちに変えて、3体のシャドウへと駆け足で向かっていく。普通の太刀に比べると柄が短いため、安定は悪いかもしれない。しかし、それは並みの力の人間ならばだ。すでに人外の力を有している僕にはなんの問題もない。

《シャッァアアア!!》

「その程度のスピードで捉えられるとでも?」

迫ってきた敵の1体を右に跳んでかわすと、自分の左側に構えていた太刀で裏拳のように遠心力をつけて敵を斬り伏せる。そして、そのまま更にもう一回転して、太刀の側面で斬れた敵の胴体を叩く。それを残りの敵の方へと飛ばし動きを牽制して、僕は残りのシャドウへと駆ける。

「良いですか？　武器とは自分の身体の一部です。拳で攻撃するときと同じように、武器の間合いを完全に把握しなさい。そして、手のように様々な使い方をすれば、どんな敵に対応できます」

みんなに説明するように言いながら、迫ってくる2体の動きを読んでかわしていく。そんな状態が続いて痺れを切らしたのか敵は正面から突っ込んできた。僕はそれを見ると順平が普段やっているような野球のバット持ちに太刀を構え、少し横にずれてから一気に振り抜く。

《ザシュンッ》

「これが順平の決め技ですよね？　確かに上手くいくと気分が良いです」

迫っていた敵は僕の攻撃を受け、開いた口からそのまま胴体の方まで斬れて消えていく。これで2体。次で最後だ。今度は今の順平の実力の数段上の動きをイメージして戦う事にする。そう、いままでのは今の順平でも練習すればすぐにできる芸当。だから、次はさらに先にある目標を見せておくのだ。

「ご覧の通り」

僕が駆け寄ると尻尾で攻撃してきたので、地面に太刀を刺して相手の攻撃の勢いでそれを切断する。そして、斬れたのが分かるとその

まま太刀を引き抜き斬りあげる。相手はそれから逃れようと動くが無駄だ。

「貴方が挑むのは」

その高速の斬りあげで更に胴体の一部が斬れると、途中で最初にやった裏拳のような動きに切り替えて敵の身体を切断する。相手は次々と繰り出される斬撃のせいで動けないみたいだ。

「無限の剣」

敵の身体は既に半分近くなくなっているが、それでも攻撃は続ける。回転の攻撃をやめると肩のところで力を溜めて一気に振り降ろす。そうすると動いていた敵は、僕によって身体に対して斜めに斬りつけられた。

「剣戟の極地」

身体の半分を失っていた敵は、それでさらに身体を半分にされた。こうなったらもう何も出来ないだろう。そう思いながら宙に投げ出された状態の敵の頭部を柄頭で更に上へと弾く。上に弾いた理由は簡単。次でフィニッシュだからだ。そうして敵が落下してくるのを待って口を開く。

「恐れずしてかかって来なさい……なーんちゃって♪」

最後にそういって落ちてきた敵の頭部を斬りあげで切断して消滅させた。バーサーカー戦のアーチャーの口上を述べ始めてから消滅まで全部で7秒かからなかった。敵を倒し終わってみんなの方を見ると、何故だか驚いた顔をしている。どうしたんだ?

「皆さん、どうかしました？」

「い、いや…私は君が戦う所を観客のように見るのが初めてだったのでな。少しばかり驚いていただけだ」

「それより、有ｓ…奏がこんな風に戦うこと自体が初めてじゃないか？　いつもサポートか単独突破のような形だからな。動きは順平のものだったが、俺達が見ても間合いの取り方や攻撃のタイミングなど学べる物が非常に多い」

そう言いながら真田先輩は楽しそうに笑っている。そして、同じように思ったのかその横で頷く美鶴さん。この２人は復帰組だから僕との共闘回数は少ないからね。余計にインパクトが強かったのだろう。

「フフッ、どうせ他の方の分はあとでやるので。いまは見ていても風花の護衛と、一緒に戦う時に自分がどう動けばいいかをイメージして下さい。じゃあ、順平。次は一緒にいきますよ。戦闘中にもアドバイスはしますが。基本は私の動きを見て自分の動きに取りこむことです」

「わかった。こんなチャンスは滅多にないからな。悪ぃが今日はマジでいくぜ」

順平は帽子を被り直して真剣な表情でいうと、剣をしっかりと握った。他の者はそのいつもと違う順平の様子を茶化すことなく見守っている。それを確認すると僕と順平を先頭に全員でタルタロスの上を目指した。

――64階

それぞれの指導をしながら上がってくると、ついに行き止まりまできた。みんなはそれを見ると途端に腰をおろして床に座り込む。まぁ、結構疲れてるみたいだからね。そう思っていると、僕以外で唯一立ったままの風花が口を開いた。

「ここで行き止まりみたいだね。皆さん、おつかれさまでした」

「風花もお疲れ様です。ナイスアシストでしたよ」

「そ、そうかな？　役に立てたなら良かったぁ」

僕に言われると嬉しそうに笑う風花。僕もそれを見て笑っていると、床に座っている公子が話しかけてきた。

「バックアップの風花が元気なのはまだ分かるけど、なんで有理ちゃんの格好で戦い続けてた湊君まで元気なの？」

「なんでと言われても、別にそこまで激しい運動をしていないからですよ？」

「はぁ？　オマエ、オレたちが疲れてたからって途中から1人で戦って。エリアボスまでやっちゃってただろ？」

公子の質問に何でもないように僕が答えると、順平が荒くなっている息を整えながらそう聞いてきた。そう言われてもねえ？

「そもそも私と貴方達では動きの無駄が違ったんです。貴方達は今日初めてやる動きも多くありましたし、ばれない程度に少しずつギアを引き上げてましたからね。いまなら皆さんの指導ごとの最初

に見せた動きくらい簡単にできるはずですよ？」

「それが本当なら、今回の探索でどれだけのレベルアップが出来たんだろうな」

「私の見立てでは明彦は復帰前よりかなり強くなっていると思うぞ」

美鶴さんが真田先輩そう言うと。疲れてはいるが、強くなっている実感が湧いてきたのか嬉しそうにするメンバーたち。やっぱり前回みたいなことになっちゃ困るからね。敵に攻撃が効かなくても、そもそも攻撃に当たらなければいいんだし、持久戦にも耐えれる体力をつければいいのだ。今回はそう思い、ギリギリこなせるハードなトレーニングで一気にタルタロスを上ったというわけだ。

「じゃあ、少し休んだのでもう歩けるでしょう？　今日は帰ってしっかり休みましょう」

「うー…湊君、おんぶ～」

「今は有理ですよ。というより、ちゃんと自分で歩いてください。そんな事だからこの程度で体力が尽きるんです」

「いや、みな…有理がおかしいのよ。私たちの中で一番強い公子と体力のある真田先輩でさえ疲れてるのよ？」

おんぶしてくれと頼んできた公子を言葉でばっさり斬り捨てると、ゆかりはそんな風に呆れながら反論してきた。今の僕はすでに人の枠から外れてるけど、力に目覚める前でもこれぐらいはこなせた。なので、影時間で身体能力が上がってるくせに、こんな簡単にへば

るメンバーの方がおかしいと思う。そう考え倒れてる公子を引っ張って立ち上がらせつつ口を開く。

「なら、これぐらい大丈夫なほど体力をつけるか、基本動作の無駄を徹底的に削れば良いんです。基本の動きに無駄がなければ新しい動きの無駄もすぐになくせますから」

「いや、簡単に言うけどよぉ。すぐには無理だろー…」

「無理とか言わない、どうせやるしかないんですから。それにそこら辺の弱点のせいで、前回の大型シャドウ戦みたいなピンチになったんですよ？　私みたいなイレギュラーがいなければ全滅してたところです」

僕はこういう戦闘の時の運が良かっただけという話は、普通にすることにしている。そうじゃないと、実力を勘違いして自分は勿論のこと、他の人にまで危険が及ぶからだ。そして、メンバーたちは僕がいま言ったことが事実だと自覚していたのか少し辛そうな表情をしている。まぁ、自覚してるなら良いけどさ。

「大丈夫ですよ、今回の鍛錬を通じて貴方達はまた強くなりました。いまは疲労感で分からないでしょうが、ちゃんと疲れをとってからまたここに来てみれば、実力の違いが分かるはずです」

「フッ…君がそう言うのなら、実際にそうなのだろうな。では、皆も言われた通り帰るとしよう。有理、今日はありがとう。とても疲れたが、非常に有意義な鍛錬となった。もし良ければ、またこのような事をして皆の実力向上に手を貸して欲しい」

「どっちの状態かはわかりませんが、気が向けばいいですよ。私

も友人には死んでほしくありませんから。まぁ、実技指導はたまにですが、教えてほしいことがあれば答えられることには答えますので、質問しに来てください」

立ち上がり始めたメンバーらにそう伝えると、みんなも分かったという表情で頷いた。まぁホントは、初見のエリアボスでも1人で倒せるくらい強くなって欲しいんだけどね。今はまだ地道に力をつけさせようと思う。

「じゃあ、帰りましょうか」

「「「「了解」」」」

そうして僕たちは今日の探索を終えて、寮へと帰ったのだった。

第三十話（後書き）

湊のチート能力ですが、実は大型シャドウを倒すたびに強さが上がったり特殊能力が目覚めるようになっています。というのも、公式の方で倒したシャドウはファルロスが吸収していくって設定があるのですが。それと組み合わせて新たに設定を作っているからです。

初期の方のベルベットルームの会話で湊の能力は何かに抑えられているって書きましたよね？ファルロスの力が強くなると、その封印も弱まると思ってください。なので、見ただけでそれを真似できる能力や、圧倒的な身体能力を有しているってのは、封印が解けてきている証拠になります。

本当は章終りの設定で書くつもりだったのですが、あまりにチートが増えすぎるとわかりづらくなると思ったので書くことにしました。今後も変な能力が出てくると思いますが、設定のところで改めて誰を倒してどの能力を得たのかというのを書きたいと思いますので、それまでお待ちください。

第三十一話（前書き）

今回は他のキャラを多く出してみようと思ったので、湊メインの視点だけありません。基本は公子視点、たまに第三者視点、最後にチドリ視点って感じです。

第三十一話

6／23（火）
朝――校門　{公子　Side}
「フンフンフーン♪」
「やけに機嫌良いけど、どうしたの？」
言われた通り、私がややテンション高く学校へ向かっていると。そういって隣を歩く湊君が尋ねてくる。なので、私も口を開きその理由を説明する。
「いやぁ、湊君と2人で登校するの久しぶりだからさ。なんか嬉しくってね♪」
「そう？　先週も1回くらいしたし、昨日だって2人だったじゃん」
湊君は私の言葉を聞くと、そんなことないだろうという顔をして言い返してきた。確かに昨日も一緒に登校したし、先週も1回だけ登校できた。だが、それは……
「片方は有理ちゃんだったし。もう片方は、結局真田先輩が途中から一緒だったもん。“湊君”と2人だけっていうのは、本当に久しぶりなの」
「あぁ、そういう事か。でも別に、寮ではよく一緒にいるんだし登校ぐらい…」

「甘いよ、湊君。学校は勿論のこと、最近では寮でも湊君を狙う不届き者がいるんだから。姉としても女としても、こういう小さな所からマークしておかなきゃいけないのよ」

「その不届き者って、もしかして私のこと言ってる？」

そんな風に言いながら登場する不届き者こと、いま最も注意しなければならない人物である岳羽ゆかり。なぜか少しムスッとした表情だが、怒りたいのはこっちである。

「ほらー、こうやってすぐ人の至福の時間を壊してくるー」

「別に狙ってやってる訳じゃないわよ！」

「そう言うなら、スルーして行くぐらいの気遣いを見せてほしいんだけど？　何度も言うけど、家の湊君をあげるつもりはないから」

「べ、別に貰うとかそういうの考えた事ないしっ。ていうか、仮にそうだとしても選ぶのは本人だもん。公子が何と言おうが選ばれたもん勝ちよ」

ゆかりは少し顔を赤くして動揺しながらも、それを隠して私に言い返してくる。本人はちゃんとした自覚はまだないのだろうが、私から見れば湊君へ恋心を抱いているのは確実である。自覚すればゆかりはきっと攻勢に出るだろう。なので、先に手を回してそれを防いでいるのだが、なぜかいつも向こうが得する展開になりやすい。神様は私に恨みでもあるのだろうか？

「選ばれたもん勝ちねぇ…じゃあ、ゆかりは誰かが選ばれたら潔く身を引くってことだね。それは良かったよ、私はそれでも諦めな

いから友達と争う必要なくなるしね」

「なっ！？　そ、そんなこと言ってないでしょ！　別に湊君のことはなんとも思ってないけど、そうなったときは私だって最後まで諦めないわよ」

「ふーん……万が一にも無いと思うけど、言っておくと。湊君と付き合ったり結婚したりしたら、私が姉になるんだからね？」

「うわぁ…それは嫌だわ。なんか新婚の暮らす家に頻繁に来そうな気がするもの」

私が相手を牽制しておくために放った一言を聞くと、ゆかりは言葉通りに嫌そうな顔をしている。てか、それ失礼すぎない？確かに湊君に会いに頻繁に行くとは思うけど、それは可愛い弟が恐妻にイジメられていないか心配してのことだ。別に妻になった人間に嫉妬しての行動ではない、断じてない。

「別にいいじゃん。可愛い弟に会いに行くことの何がいけないの？」

「いや、新婚だったら二人っきりで過ごしたいと思うから。それを邪魔するのは駄目でしょ」

「湊君は私を拒否したりしないもん。むしろ、結婚しても今みたいに『一緒に寝よ～』って言えば寝てくれるはず」

「……ありそうだけど、それって問題じゃない？　だって、湊君って私のとこでも寝たりするでしょ。それに最近では桐条先輩のところにもお泊りしたりしてるしさ。結局、姉に限らず誰かと一緒に

いられたら良いんじゃないの？」

「なっ！？」

少し考えた素振りを見せたあとに、私に向かってそう言ってくるゆかり。だが、確かにそうかも知れない。湊君はいつの間にか桐条先輩のとこにもお泊りと言って自分のタオルを持って寝に行っていた。この情報は本人らを除けば私とゆかりしかまだ知らない。

それはどうでも良いのだが。確かに色んな行動を見ていると、湊君は特定の誰かと共にいることよりも“誰かと共にいること”を選んでいる気がする。……え？もしかして、私っていらない子？それを確かめるため、本人に聞こうと振り返って口を開いた。

「湊君っ、私って……アレ？　湊君は？」

「いつの間にか、あっちにいるわよ」

言われて、呆れた表情のゆかりが指差した方向を見ると確かに少し離れた場所を歩いていた。それも2人でっ！！

「コラー、風花！！　人の男取ってんじゃないわよ！！」

「えぇっ！？　ち、違う。私そんな事してないよっ。それに話しかけてきたの、湊君からだし」

「なんだとー！　私というものがありながら、湊君が浮気したっていうのかっ！」

「そ、そんな事言ってないよ。て言うか、今度はゆかりちゃんの

方に移動したみたいだけど良いの？」

「ふぇ？」

私とゆかりが話しているうちに、湊君とこっそり2人っきりになっていた風花に私が問い詰めると。風花はそう言って、私がもと居た方を指差した。風花が言った通り湊君は確かにゆかりの隣へと移動していた。てか、一瞬で移動してない？

「な、なんで湊くんは私以外の女のところにばっかり行くのよっ！」

そう怒りながら、風花の腕を引っ張って2人の元へ近付くと。ゆかりと談笑していた湊君が話を中断し、こっちを向いた。

「馬鹿だな。僕が色んな場所へ行くのは、帰る場所がちゃんとあるからに決まってるでしょ？」

「そ、それって…」

朝の陽ざしのせいか、いつもよりキラキラと輝いてみえる湊君の笑顔。それを見て頬が少し熱くなるのを感じながら、私が尋ねると湊君はニコッっと笑って口を開いた。

「うん、もちろん自ｓ「ようっ、お前らも同じ電車だったんだな！」」

「おりゃーっ！　死ね、筋肉馬鹿ー！！」

「うわっ！　やめろ、草摩っ。急になんだっ！？」

湊君が私への愛（脳内補正）を告げる場面で登場した筋肉馬鹿。それに殴りかかると相手はそれを避けた。なので、続けて攻撃を繰り出すと真田先輩はそれも避けながら、私に問いただしてくる。その返答として私はさらに拳をおみまいすることにした。

「いっつも良いとこで邪魔してんじゃないわよ！」

「な、なんの話だ!?　俺は普通に挨拶しただけだろうがっ」

「それが、駄目なんですよ！　いっつも、私が湊君と一緒にいると邪魔しにきてっ。今度したら後ろからアギラオで焼き払ってやる！」

「訳がわからんわっ！　というか、有里っ。お前の姉だろうが、草摩を止めろ！」

本当に焦りながらそう叫ぶ真田先輩。言われた湊君はやや面倒そうにしているが、先輩の頼みだからか一応動きを見せた。

「おいで、公子。そんなのと遊んでると、脳にまで筋肉がつくよ」

「っ!?　はーい」

湊君に呼ばれたので、筋肉馬鹿から離れ湊君の腕に抱きつく。それを見て、湊君と一緒に歩いていたゆかりは呆れた表情をして、風花は苦笑している。だが、直前まで私と遊んでいた相手は何やら疲れているみたいだ。

「……一応、助かったが。お前ら2人は先輩を敬う気持ちがない

のか」

「先に生まれたくらいで偉さが決まるなら、世界は最も老人に住みやすいものになっているでしょうね」

「くっ…先輩だからと偉ぶるつもりはないが、お前らはもう少し年上へ敬意を払え。そんなんじゃ、この先苦労するぞ？」

「私も湊君も、他の人にはちゃんとしてますよ」

「はぁ……もういい。遅れるから、さっさと行くぞ」

湊君と私が答えると、先輩は一気に疲れた表情から諦めた表情になり学校へ向かい始めた。なので、私たちも遅れないよう、その後を続いて教室へと向かった。

放課後――教室

今日の授業が終わり、帰る用意をしていると桐条先輩が教室に入ってきた。そして、私たちの元までくると口を開き話し始める。

「ちょっといいか。今夜、急に理事長が見えることになった。帰り次第、４階の部屋に集合してくれ」

「あ、はい…分かりました」

ゆかりがそう返事をすると、桐条先輩は「じゃあ、伝えたぞ」と言って教室を出ていった。一体何の話だろう？そう思い、気になったので。私はゆかりと風花を連れて、すぐに寮に帰ることにした。

――鍋島ラーメン“はがくれ”　｛Ｎｏ　Ｓｉｄｅ｝

《ガラ…》と音を立てて店のドアが開いた。その客は1人の少年で、客が来たことに気付いた店員が声をかける。

「へーイ、お客さん、1名様で？」

店員の言葉に「ああ」と短く答えると。やって来た客は、ある少年の隣に腰を下ろした。そして、左手の親指で隣の少年の方を指差して店員に注文する。

「こいつと同じのを」

「へイまいどっ！　特製1丁～！」

注文を受けた店員が元気よくオーダーをいうと、渡された水に口を付けながら来店した客・真田が口を開いた。

「またそれか。…よくも飽きもせず同じ物を食えるな」

「うるせえ。メシとプロテインを並べて食う野郎に言われたくねぇぜ」

真田に言われた少年・荒垣が、人のことは放っておけとばかりにそう言い返すと。真田は自分は別におかしくないと思っているのか「フン…」と短く言った。そんな風に話をしていると、店員がドンブリをカウンター越しに持ってきた。

「へイ“特製”お待ちっ！　あ、ドンブリ熱いから気をつけてっ！」

「きたか。じゃあ、食うとするか。フー、フー…熱っ」

店員に言われ注意はしていたものの、出来たてのラーメンが熱かったのか口をつけるとそう言って顔をしかめる真田。だが、二度目は注意して口をつけたので問題なかった。そうして食べ始めると、真田は荒垣に話しかける。

「…まだ迷ってるのか」

「…そういう話かよ」

真田の話を聞いて、また戻って来いという勧誘の話だとわかった荒垣は嫌そうな顔をする。だが、真田はそれに構わず話しを続ける。

「今年になって、新人が一気に5人加わった。俺たちの活動は、お前が居た頃とは様変わりしている。それも有里の存在がデカいがな」

「有里……あいつか。つーか、そんだけいるなら、問題ねえだろ。興味ねえな」

「人数の問題じゃない。戻って来い、シンジ。その“力”…無駄にするな」

食べるのを中断し、真剣な声と表情で荒垣に話す真田。だが、対照的に荒垣は普段通りのまま食事を続け、返事をする。

「こんな力…無駄でいいんだ」

「シンジ！」

荒垣の言葉を聞いて声を荒げる真田。立ち上がりはしなかったものの、他の客は何事だと2人の方をみている。

「俺は、もう“力”を捨てたんだ。戻る気はない」

「またそれか。いつまで縛られている。いいかげん忘れろ、過ぎた事だ」

「フン…過去に縛られてんのはテメェも同じだろ」

食事を終え、水を飲み干すと荒垣はそう返した。その言葉の意味が分からず、真田が「なに?」と聞き返すと荒垣は財布を出して勘定の用意をしながら口を開く。

「同類なんだよ。俺も…テメェもな」

《コツコツコツ…ガラガラ…》

「あっ…おい、シンジ！　すまん、金はここにおいていくぞっ」

「へい、丁度いただきます。ありがとうございました～」

真田は店員の声を後ろに聞きながら店を出て、荒垣を追った。

――巌戸台駅前商店街

店から出て、急いで階段を下りると荒垣は駅の方へ歩き始めていた。それを見つけた真田は後ろから大声で呼ぶ。

「待て、シンジ！」

「……アキ。忠告しといてやるが、俺なんかよりも有里の方に注意しておけ。あいつは自分でも言ってたが、テメェらの仲間にはなれねえ。絶対にな」

「なっ、なんのことを言ってるんだ？」

振り返らずに湊について告げてきた荒垣。その言葉の意味が分からず、真田が聞き返すと荒垣はゆっくりと振り返り口を開いた。

「今以上に近付けば、テメェらを容易く引き裂くぞ。あれからは昔見た死神…“刈り取る者“つったか？　あれと似たような圧倒的な負の気配と狂気のような嫌な感じがした。だから、お前らもあいつが望む以上には近付くな」

「そんなものをいつ感じたんだ？」

「お前の寮の後輩が、ポートアイランドの裏路地に来た日があったろ。あん時、キレて不良の1人を殺しそうになってたあいつを止めたが。ピンクの服を着たあいつの女が止めてなきゃ、俺ももう少しで殺されるとこだったぜ」

「なっ、まさか！？」

荒垣の言ったことが信じられない真田は、その話の内容に思わず驚きの声をあげた。湊達が裏路地でいろいろあったことは聞いていた。だが、それが危なく殺人事件になるほどの事だとは知らなかったのだ。

それだけではない。荒垣の強さは真田が一番知っている。彼は前線を離れて不良のようになってしまったが、強さはいまでも変わらな

い。むしろ、一緒に戦っていたときよりも身体も成長し強くなっている。そして、それを現在の部活メンバーと比較すると、湊を除けば公子より上なのだ。それを容易く殺そうとできる程の強さだとは到底信じられない。

「わかったら、あいつには必要以上に近付いてやるな。お前も仲間のやつらもあいつにテメェらを殺させたくねえだろ」

「そ、そんな話が信じられるかっ。お前の強さは俺が一番よく知っている。そして、最近のあいつの強さを再確認する機会があったが、そこまでの差はなかったっ」

「……ほんとにそうか？　俺はあいつには絶対に勝てないと思ったぜ、力を使ったとしてもな」

荒垣に言われて動揺しながらも、真田はいままでの湊の戦いを思い出す。確かに、いまの自分たちでは絶対に勝てないだろう。だがそれでも…いや、荒垣の言っている事に覚えがない訳ではない。

「……」

「身に覚えがあるんだな。まぁ、そういう事だ。忠告はしたぜ、じゃあな」

真田にそう告げると荒垣は、駅の方へと去って行った。それを見送ると真田も複雑な心のまま寮へと帰って行った。

――学生寮の前　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

私とゆかりと風花の３人は桐条先輩に言われて、他の人よりやや早く寮へと帰ってきていた。そして、寮の前について帰ってきていた

道の方にふと視線を向けると、湊君がこっちに歩いてきている。なぜか、一匹の白い犬と一緒に…。

「ワフッ」

「へぇ。まぁ、あの人は優しいからね。僕もこの前ラーメン奢ってもらったよ」

「ワンッ！」

「そうそう、あの商店街のところね」

……あれ？なんで2人っていうか、1人と1匹は会話してるの？ゆかりと風花もそれに気付いたのか不思議そうな顔をしている。でもこのままじゃ話がわからないので、とりあえず声をかけることにした。

「おーい、湊くーん」

「ん？　やぁ、そっちも早かったんだね」

「そ、それは良いんだけど。湊君、いまコロちゃんと話してなかった？」

声をかけたことでこっちに気付いた湊君が挨拶してくると、風花が少し顔を引き攣らせながら質問した。まぁ、確かに犬と会話してたとか少し危険だもんね…。

「え？　ああ、途中で一緒になってね。散歩コースと帰り道が一緒だったから、雑談しながら歩いてたんだよ」

「ワンッ」

「そ、そうなんだ……ねえ、湊君。なにか悩みごとない？　私なんかで良ければ、相談に乗るからいつでも言ってね？」

湊君の話を聞くと、風花はそんな風に笑顔で話しかけた。いや、気持ちはわかるけど。いきなりそんなこと言ったら、流石に失礼じゃないかな？一方、言われた湊君は何の話だという表情をしている。

「別にそこまで悩みっていうものもないけど？」

「そう？　対人関係とかで悩んでたら遠慮なく、本当に遠慮なく言ってくれていいからねっ」

「……風花。気持ちはわかるけど、それは流石に湊君も困ると思うわよ」

「だ、だって、湊君がこんな状態だって私知らなかったから…」

ゆかりに窘められ、そう言い返す風花。なぜか目には涙が潤んでいる。そんな泣かなくても良いのに…。てか、こんな状態って家の湊君になんて事言うんだ。

「こんな状態って、家の湊君を可哀想な人みたいに言わないでよ」

「可哀想な人……ああ、そういう事か。別に僕だって、ちゃんと理解して会話してた訳じゃないよ。なんていうか、概念的なものが伝わってくる感じなんだ。疑うなら、虎狼丸に伝言頼んでみなよ。それを聞いてなにを伝えたか正解すれば本当だってわかるでしょ？」

湊君はコロマルと会話していたことで、自分が頭の可哀想な人と思われていると気付いた。そして、それを否定するためにこちらに提案をしてくる。うん、それなら事の真偽がわかるね。そう思った私たちはそれを受け入れることにした。

「じゃあ、湊君はそっち向いて耳塞いでおいて」

「了解」

湊君がこちらに背を向けイヤホンをつけて更に耳に手を当てた事を確認すると、私たちはコロマルに何を伝えるかを考え始める。

「うーん、なにを伝えようか？」

「簡単に今日の晩御飯とかで良いんじゃない？」

「じゃあ、コロちゃん。湊君に今日の晩御飯はなにがいいか聞いてくれる？」

「ワンッ」

コロマルは元気に鳴くと後ろを向いている湊君の前に回りこんだ。それに気付いた湊君はイヤホンを外し、コロマルの話を聞こうとする。さて、ちゃんと伝わるのかな？

「ワフッ、ワン！」

「晩御飯？　んー、別になんでもいいけど。今日はお肉が食べたいな」

「「「うそぉっ!?」」」

あまりのことに驚く私たち。えっ、てかなんで動物の言葉理解出来るの?ペルソナ能力なんかよりよっぽど珍しいと思うんだけど…。同じように思ったのか、晩御飯のことを考えている湊君にゆかりが近付き問いかけた。

「な、なんで理解できるの?　てか、そんな特技あったの?」

「なんでって別になんとなくだけど?　別に特技じゃないしね。なんか、風花を助けた後くらいから相手がこっちに伝えようとすれば、概念的に理解できるようになってきたんだよ。って言っても、虎狼丸くらいしか今のところ話しかけてこないけど」

「ワン!」

「ハハッ、それなら良かったよ」

今の「ワン!」で何が伝わったのか分からないけど、本当に会話が成立しているみたいだ。それが分かったからか、風花が「いいなぁ〜」と羨ましそうに1人と1匹を見ている。ん?そういえば、なんでコロマルは散歩していたんだろう?そう思ったので、コロマルに聞いてみることにした。

「ねえねえ、なんで1人で散歩してたの?」

「ワフッ、クゥーン、ワン!」

「いや、私たちには伝わらないから…」

私の質問に答えてくれているのだろう、嬉しそうに鳴くコロマル。
しかし、ゆかりが言ったように、どんなに嬉しそうに鳴いてきても私たち3人にはそれは理解できない。そう、この場にいるイレギュラーを除いては。

「へぇ、そうなんだ」

「あのぉ、1人で感心してないで通訳してよ」

「え？　ああ。飼い主だった神主さんが死んだから、それ以来その思い出の道を見回ってるんだってさ。まぁ、普段は実家の神社の見回りをしてるから、外の見回りは散歩してた時間に散歩してたコースだけらしいけど」

通訳によって散歩の理由が分かると、風花とゆかりはしゃがんでコロマルを撫で始め。笑顔で話しかけた。

「お前、忠犬なんだ！　泣かせるじゃない、この！」

「本当に偉いよね。私も自分のペットには、これぐらい思われたいなぁ」

ゆかりと一緒にコロマルを撫でながら、その神主さんとコロマルの関係を羨む風花。でも、私もなんとなくわかるなぁ。心が通じ合ってたみたいだし、相手が人でも他の動物でも羨ましい限りだよ。そう思いながら、2人とコロマルの様子を見ていると、風花がなにかに気付いたのか小さく呟いた。

「…あれ？　このコ」

「どうかしたの？」

「…ううん、ごめん。気のせいだったみたい。あ、それより今日って、確か、理事長が来るみたいだし。私たちも、そろそろ中に入ろう？」

「そだね。コロちゃん、またねー」

「ワンッ！」

そうして私たち４人はコロマルと別れると、寮へ入って理事長たちがくるのを待った。

夜――作戦室

桐条先輩に言われて早めに帰ってきたが、結局先輩たちや理事長が寮に到着したのは８時を過ぎた頃だった。そうして先輩たちも部屋に荷物を置くなどの準備を終え。既に、仲間全員と理事長が４階の作戦室に集まっている。

みんなが集まっているのを確認すると理事長は軽く咳払いをしてから話し始めた。

「や、どうもどうも。調べ物に答えが出そうなんで、いち早く伝えようと思ってね。例の“満月に出るシャドウ”の件だよ。ちょっと、面倒なんだが、良く聞いて欲しいんだ」

そう言って一度言葉を区切るとみんなの事を見回す理事長。そんなに伝えたかったのだろうか？桐条先輩の膝枕で寝ている湊君を除くメンバーが、理事長の方を見ていることを確認すると。理事長は真

剣な口調で話の続きをし始める。

「…実はシャドウは、その性質によって１２のカテゴリに分けられる。この事は、だいぶ前から分かってね。生物学の“何科”や“何目”みたいなもんだ。…で、これまで出現したシャドウを、これに分類してみると…実に興味深い！　これまでのシャドウ４体は、現れた順に、カテゴリのⅠからⅣだと分かったんだよ！　見た目はたいそう特別だったが、連中にもこの分類は当てはまるらしい」

嬉しそうにそこまで言う理事長。元々は桐条の研究員だったらしいから、こういう研究結果を発表できるのが楽しいんだろうな。そんな風に考えていると、少し話を理解できていない感じの順平が口を開いた。

「それって、なんか凄いことなんスか？」

「そうか…つまり、大きなシャドウは、全部で１２体いて…残りが、あと８体ってことですね」

「さすが、山岸君！　飲み込みがはやいんだから」

理事長が答える前に風花が伝えたい事を読み取ると、これまた嬉しそうにする理事長。なんか今日の理事長テンション高いなぁ。他の人はそこまでじゃないみたいだけど、純粋に話しの内容に関心している順平がまた口を開く。

「…へえ、そうなんスか？　実際、シャドウって何がしたいんスかね」

「…いい質問だね。実は“目的”が、よく分かってないんだよ。

連中は獲物を殺さずに“精神を喰らう”。“捕食”には違いないが…生き物のようにただ繁殖するのが目的なら、遠回りすぎる。シャドウは“総体”としては何を目指す存在なのか…その辺は研究中なんだ」

「…面白いですね。ただ、シャドウが何であっても、残りも、全部倒すだけのことです」

「…そうだな。連中の目的が何であれ、全て倒すしか、今は対処のしようが無い」

理事長の話を聞いて改めて決意を固める真田先輩と桐条先輩。確かに相手の目的がなんであれ人を襲うなら倒さないといけないもんね。私も湊君に教わったこと練習して強くならなきゃ。そんな風に決意を固めると、ゆかりと風花は心配そうな表情をしている。

「あと、8体か…。相当だな、それ…」

「データでは、来るたびに強くなってます。こちらも力をつけないと…」

「なんとかするさ。…時間は充分ある」

心配そうにする2人にそう言って、励ます真田先輩。だが、ゆかりの気持ちはそれだけでは晴れないようで、小さく呟いた。

「…タルタロスか。何で、あんなものがあるんだろ…」

その呟きを聞いて先輩たちと理事長が少し考えるような表情になった。それを見てゆかりはどうしたんだという表情になっている。私

はゆかりよりも少しだけ教えてもらってるけど、タルタロスが存在する理由やいつからあるのかって話はきいてない。だが、どうやら先輩たちは何か知っているみたいだ。これはもしかしたら何かあるのかもしれない。そう考えながら今日のミーティングが終了したので皆は解散したのだった。

影時間――辰巳ポートアイランド・裏路地　〜チドリ　Ｓｉｄｅ〜

今日はタカヤとジンに言われて一緒に仕事をしにきた。最近はやけに仕事が多いらしい。まぁ、仕事が多ければその分お金がもらえるから良いんだけど。そんな事を考えながら路地裏を歩くとターゲットを見つけた。そして能力を使い相手の象徴化を解いてやる。

「あ…れ…。なんだ…？　俺、何して…」

「こんばんは…」

「…！？」

ターゲットはタカヤに話しかけられ、やや意識がはっきりすると周りの光景に驚いてるみたい。確かに最初は少し驚くかもね。空の色も違うし、何もなかったはずの壁や地面には血みたいなのがついてたりするから。

「驚きましたか？　しかしここは、本当は誰もが毎晩訪れている世界なのですよ」

「な…何言ってんだ？　アンタ達、誰だよ？」

「……」

この男は駄目。状況が理解できないのは普通だけど、こんなときは冷静になって唯一情報を知ってそうな相手から如何に情報を引き出すかが重要。なのに人をジロジロ見て、偉そうな話し方をすれば情報はまるで得られない。それどころか、相手を不快にさせ破滅するよう誤った情報を渡されるだろう。

そんな風に考えていると、私ほどでないにしろ相手に不快感を持ったのか。面倒そうな表情をしながら、ジンが1枚の紙を取り出して相手にそれを見せた。

「自分で名乗ってからが筋やろ。コレ見てみぃ。住所、氏名、年齢、職業、もろもろ…オマエで間違いないか？」

「な…なんだよこの紙？　どっから持ってきたんだよ！？」

「お前を恨んどるヤツがおんねや。でもって“復讐”を頼まれとる」

「は…復讐！？　なんだそりゃ！？　恨んでるって…誰だよ！？」

相手はそんな風に動揺して話が上手く理解できないみたいだ。もう面倒だしさっさと殺せばいいのに。早く家に帰ってメールの続きがしたい。影時間だからケータイの電源もつかないし、わざわざ遠くまでこなきゃいけないから、今日の仕事は本当に面倒だ。

「そら言わん約束や。わしら“代理人”やさかいな」

「“代理人”…？　ま、まさか…ネットで、妙な噂んなってる…。そんな…あんなもんが、マ、マジに…？」

《カチャ》

「もう、よろしいですか？」

動揺した相手が同じようなリアクションしかとらなくなり、そろそろ飽きてきたのかタカヤがそう言って銃を構えた。すると相手は、銃を見たことで自分が殺される事をリアルに理解してしまったのだろう。さらに動揺が広がる。

「ま…待てよ…。お、俺、何もしてねーよ！？　つか、何の復讐だよ！！　何したってんだよ！！」

「さて…それは私たちには分かりません。あなたが自覚している悪意と、相手が感じている悪意とは無関係…。人はみな、聞きたいように聞き、信じたい事だけ信じるものです」

「い、いやだ…来るな…来るなぁぁぁ！！」

《タッタッタ》

ターゲットの男はそう叫ぶと走って逃げだした。けど、この裏路地は1本道。走って逃げたとしても、まっすぐしか走らないならそれはただの的だ。だが、相手の行動が気に入ったのかタカヤは楽しそうに口を開いた。

「素晴らしいですよ、その声！　その感情こそが重要なのです！」

《ダンッ！》

《……ドサ》

タカヤが銃を撃つとそれはターゲットに命中した。相手はそれを受けて倒れたけど、まだ少し動いてるみたい。なので、私は2人にそ

れを伝える。

「まだ死んでない…」

「どうでもええて…。わしら別に、復讐が果たせればそれでええんや。それに、どうせ何や他の事件に置き換わって記憶される」

「…予定がないのなら、帰りましょう。少し、疲れました…」

タカヤがそう言ったので私たちは、来た道を帰ることにした。その帰り道にジンが話しかけてきた。

「依頼料の6割は生活費で、交通費と殺すのに使った弾の代金を引くと……チドリの今日の取り分は6千円やな。無駄遣いしたらアカンぞ」

「そんなことしないけど、子供扱いされてるみたいで何かムカつく…」

「そうやな。チドリは男と遊ぶのにこの金を使うんやから、大人《ドゴッ！》ぐほっ！」

余計な事を言ってきたジンのお腹に肘を叩きこむと、変な声をあげて相手は倒れこんだ。お腹を押さえながらこっちを見ているが、その前にこっちから言っておく事がある。

「湊が言ってた。そういうのってセクハラだから遠慮なく黙らせて良いんだって」

「なっ…くそっ、あいつ余計なこと教えよって。今度おうたら、

見とれよ…」

「湊に何かするなら気をつけた方がいいよ。この前、体力測定で握力測るときに蛇咬(スネークバイト)とかってふざけたら握力計を握りつぶしちゃったって言ってたから」

「ほぉ…それはすごいですね。ジンも遊んでいただくなら最初に手加減して貰った方がいいですよ」

私の言ったことに感心するタカヤ。そして話を聞いて驚いていたところに、手加減してもらえと言われショックを受けるジン。今回は悔し泣きはしていないみたいだけど、ショックは大きかったみたいで立ちあがりやや動揺した感じで口を開いた。

「そ、それがどうしてん。ポロニアンモールのゲーセンでやったときのわしのパンチ力は２０２キロやぞ。返り討にしたるわい」

「…それゲームでしょ？　ってか、湊にパンチ受け止められたら終わりじゃない」

「う、うっさいわ！　そんなに自分の男の自慢がしたいんかっ。そりゃ、あいつは面も頭もええし、料理もごっつ上手い。おまけに強さもかなりのもんみたいや。けどな、わしは会って数ヶ月で付き合うなんて絶対に認めんからなっ」

「……タカヤ、その銃貸して。ちょっと、個人的な復讐をしなきゃいけないから」

「これは女性に扱える銃ではありませんよ。それならメーディアにでもやらせた方が、怪我もなく済むと思います」

私がジンへ攻撃するため銃をしてほしいと言うと、そう答えるタカヤ。でも、３人の中で一番腕力あるのって確か私なんだけど…。腕力以外になにか必要なものがあるのだろうか？そう考えたが、結局わからないので諦めた。そうしてその後は、斧の刃じゃない方でジンに攻撃をして、ノックアウトさせてから家へと帰った。

第三十一話（後書き）

今回はゲーム時間にして3日分のイベントを1日にまとめてみました。ちなみに、湊が言おうとしていた帰る場所とは『自室』です。
それと、今回の湊の能力はアイギスのあれと一緒です。

第三十二話（前書き）

祝・ＰＳ　Ｖｉｔａ版ペルソナ４『ペルソナ４　ザ・ゴールデン』、プレイステーション３／Ｘｂｏｘ３６０用・格闘ゲーム『ペルソナ４　ジ・アルティメット　イン　マヨナカアリーナ』発売決定！

いや、やったことないんですが、携帯ゲーム機で発売したら買おうと思っていたので。マリーとかいう新キャラやムービーも増えるみたいで嬉しいですね。格ゲーの方は先行してアーケード版も出すらしいですよ。ペルソナ３からもアイギスなど何体か参戦するらしいです。

第三十二話

6／26（金）
朝――自室
いま僕は学校に行く準備をして部屋にいる。その理由は放課後にある人たちと遊ぶためだ。僕はケータイを取り出すと登録しておいた番号へと電話する。

『《ガチャ》はい、どなた様ですか？』

「あ、エリザベス？　僕だけど」

『み、湊様っ！？』

僕が電話をすると相手はとても驚いたようで、声が若干裏返っている。まぁ、寮を出るまで時間もないし、伝えたいことだけ伝えておこうと思う。

「あのさぁ、今日の放課後に前に言ってた巌戸台の案内をしようと思うんだけど。君もテオも予定大丈夫？」

『は、はい。大丈夫でございます。しかし、なぜこの番号がわかったのですか？』

「ん？　前にテオに聞いたからだけど？」

エリザベスの質問に素直に答えると、電話の向こうで『クッ…テオ』と小さく聞こえた気がした。前はイゴールの机を投げたらしいから、今回も似たような目に遭うのかもしれない。ドンマイ、テオ。そん

な風に心の中で考えていると、エリザベスが僕に話しかけてきた。

『で、では、放課後にどこに行けば良いのでしょうか？』

「えっと、そっちはポロニアンモールからだよね？　なら、巌戸台の駅で待ち合わせしようか。その時は前に買った服を着て来てね」

『承知しました。では、テオにも伝えて参りますので、また後ほど』

「うん。じゃあ、放課後に会おうね《ピッ！》」

そういって僕は電話を切ると、カバンを持って学校へ行き授業を受けた。２人をからかうために、有理になってるけど。たぶん、気付くよね？そう思いながら放課後になるのを待った。

放課後――巌戸台駅前

学校が終わり、駅の改札を出たところで待っていると２人の気配が近付いてくるのがわかった。そして、２人が乗っている電車が駅に着くと改札を出てくるのを待つ。おっ、ちゃんと私服で来てくれたんだ。テオドアは青いジーンズと上は白のカットソーにグレーの薄いシャツを羽織っている。そして、エリザベスはアイボリーのチュニックに下は黒のレギンスを穿いている。

こうしてみると、目や髪の色が違っていたら美男美女のカップルに見えるな。そう思いながら待っていると相手もこっちに気付いたようなので、手を振ると改札を出た２人が近付いてきた。

「お待たせ致しました」

「本日はお願い致します。…ところで、今日はまたどうしてそのような格好を？」

到着するなり不思議そうな表情で尋ねてくるテオドア。姉のエリザベスは別に気にしてないみたいだけど、一応答えてあげようかな。

「フフッ、なんとなくですよ。それと、この格好のときは奏有理と名乗っているので、そっちの呼び名でお願いします」

「お声も変えることが出来るのですね。今度テオにも…」

「姉上、私はしませんよ。というよりも、できません」

「そうですか……」

僕の女装をみて、今度テオにもやらせてみようと言い始めるエリザベス。しかし、言われた方は嫌そうな顔をして拒否した。まぁ、テオぐらいの男性だと流石にネタでもしたくないだろうしね。そう思いながら、笑っていたがとりあえず駅から出て案内を始めることにした。

「では、とりあえず出ましょうか」

「「はい」」

2人は返事をすると歩き始めたので、僕はその後ろをついていく。まわりをキョロキョロしているあたり、駅の中でさえ物珍しいんだろうな。その様子に思わず笑顔になっているとエスカレーターにさしかかったときに、エリザベスが駆け下りていった……そっち、上りのエスカレーターなんだけど。

『よいこの皆さん。エスカレーターの逆乗りは、大変危険です。』

ほら、注意までされてしまった。けど、エリザベスは気付いていないようだ。なにやら良い笑顔で汗もかいてないのに、額を手で拭ってるし。そして反対にテオドアは下りの方だが、エスカレーターの前で立ち止まっている。どうしたんだろう？

「階段が、動いていますね…。…し、知っていますよ。エスカレーター…と言うのでしょう。……このぐらい、乗れますよ？」

と言いつつ、テオは動かない。タイミングが掴めないみたいだ。ていうか、それなら普通に階段を使えばいいのに。そう思ったので、提案することにした。

「階段もあるので、慣れていないならそちらにしませんか？」

「そ…そうですね。ではこちらの階段から降りるとしましょう。お手をどうぞ」

そう言われ。なぜか、手を引かれながら階段を降りた。いや、外見は女子だけど中身は普通に男だぞ？そんな風に行動に疑問を持ちながらも一緒に下りると、先に下に行っていたエリザベスが合流して話しかけてきた。

「ふう…。行く手に刃向かい、流れてくる階段…。これが“エスカレーター”…。シンプルでありながら、見た目以上の消耗を強いられる試練…」

「それは貴女が逆走していただけですよ」

「そして…これは!?　足元にお気をつけ下さい！　…この先に“落とし穴”がございます」

そういってエリザベスは僕の話をスルーして、落とし穴に対する注意を喚起してくる。だが、落とし穴なんてないぞ?

「…どこにあるんですか?」

「こちらでございます」

「ほぉ…確かに見事なトラップですね」

エリザベスに言われてそっちの方をみると、テオドアもなにやら感心している。けどこれってどう見ても…。

「柵で囲まれた、この中心にでございます。目を引く看板で囲んだうえ、“立ち入り禁止”の文字…。ですが、人は往々に、禁じられたものほど触れてみたくなる…。落とし穴は隠すものという常識を逆手に取った、高度なトラップでございます…」

「…ただの蓋の外れたマンホールですよ」

「流れる足場に加えて、心理トラップを組み合わせた落とし穴…。街の治安を守るとは、かくも大変な事なのでございますね…。私、胸を打たれております。この街を愛する、見知らぬどなたかの思いを噛みしめつつ…それでは参りましょう」

「私の話を聞いてください、エリザベスさん」

人の話しをスルーしまくるエリザベスに文句を言うが、それもスルーされた。そろそろ武力行使も考えようかな。そんな風に思いながら、商店街の方へ向かうエリザベスとテオドアのあとを追った。

――巌戸台駅前商店街

駅を出て商店街の入り口あたりに立つと、エリザベスとテオドアはポロニアンモールを案内したときのように目を輝かせている。そして、テオドアが感心した様子で口を開いた。

「ここが“商店街”ですか…。随分、賑やかですね」

「ファッションや遊戯施設を扱っているポロニアンモールに対し。こちらは、食品関係や本屋といった、日常生活に使うものを主に扱っている店が集まっているところですからね。夕食の買い物をする人がたくさんいるので、この時間だとこれぐらいの賑わいは普通ですよ」

「そうなのですか…っ!?　これは…この、かぐわしい香りは、まさか…！」

「どうしたんです姉上…っ!?　この匂い、まさか…」

《タッタッタ》

2人は何かに気付くとそのまま走って行ってしまった。はぁ…なんか今回は疲れるな。そう思いながらも、後を追わない訳にもいかず。2人の行った方へ歩いていくとたこ焼き屋の前に立っているのを見つけた。何をしているのだろうと、近付くとたこ焼き屋の女性店主の声が聞こえてきた。

「はあ、驚いたわ…。この具のヒミツ、匂いだけで分かるんか？

姉ちゃんら、外国の人みたいやのにやるなぁ。ま、たこ焼き屋はタコ以外焼いたらあかんなんて法律はあらへん。どや、ちいと買うたってや。ほっぺた落っこちてまうでぇー？」

中身のあのタコモドキの正体を当てたのだろう、店主は楽しそうにそう言うと笑顔で普段よりも沢山入れたたこ焼きのパックを見せてきた。だが、テオドアとエリザベスは別のところに反応している。

「「“ほっぺたが落ちる”料理…？！」」

「それは…非常事態じゃないか…！」

「ええ、私も現実には非常事態のような気も致しますが、ぜひとも体験してみたく存じます」

言いながらビビるテオドアと、好奇心が勝るのか目を輝かせているエリザベス。てか、前に買っていったたこ焼きはこの店のだぞ？ここで時間を費やしてもしょうがないし、エリザベスは買う気のようなのでテオドアにもどうするか聞いてみることにした。

「テオは食べますか？」

「…どうやら貴女は、随分と私を見くびっているようだ。いいですよ。その挑戦、受けて立ちましょう」

「いえ、別にそんなつもりは…。というか、エリザベスもそんなに買う気ですか？」

僕のことを完全に女扱いし始めたテオドアに悩みながらそう尋ねる僕の横では。エリザベスが、パンパンに膨れたカエルの財布を取り

出していた。いや、前に両替したんだから、今回も前のお札持ってきなよ。どうみたって今回も５００円玉でパンパンにしてきてるでしょ。それ。表情には出さないが、心の中で呆れていると、聞かれたことにエリザベスが答える。

「私、実際にほっぺたを落としている方をお見かけした事がございません。恐らく、市井の者には易々と手出し出来ない価格…。あ…良く見ましたら、１パック４００円…？　……そ、それでは、人数分の３パックほどお願い致します」

「ハイ、おおきに！　また来てや～！」

店主からたこ焼きを受け取ると、とりあえず、店の前に置いてある長椅子に３人で座り食べることにした。テオとエリザベスの間に座っているが、この席落ち着かないな…。そうして、食べ始めるとたこ焼きを口に運んだテオが何やら呟いた。

「９７度…。そして、この食感は間違いなく……」

「そうですね、このプリプリした表皮に覆われた独特の食感は…間違いなく“アレ”…。よもや再び食材として出会う時が来るとは…驚きでございます」

そんな２人だけで理解されても、こっちとしてはかなり気になるんだけど。そう思い今回も聞いてみることにした。

「今回も教えてくれないのですか？」

「“知らない方がよい事もある”。そう、教えられていますので……しかし、アレを食材にするなど…。そうか、だから“ほっぺた

が落ちる”……ッ！！」

何を思ったのかテオは1人で何かの考えに辿り着き、頬をつねっている。

「……」

「…っ！？」

自分の頬をつねっていたかと思うと。テオドアは何故か、僕の頬もつねってきた。この人は何がしたいんだ？そう思っていると、「フゥ…」と安心したような溜め息を吐きテオドアが口を開いた。

「貴女も、変わりないようですね。よかった…」

「いや、痛いのですが。それに食べてるときにやめてください」

「あっ、申し訳ありません。…そんなに、痛くないでしょう？」

テオは少しスネているようだ。だが、残りのたこ焼きを食べると再び先ほどの嬉しそうな表情に戻った。それを見てこっちは大丈夫だと思ったので、今度はもう1人の連れに話かけることにする。

「ほっぺたは落ちました？」

「いえ、特には何も…。ですが私、食べてみたいものは他にもまだまだございます。考えてみれば、それらを食し終えるまで、ほっぺたを失う訳には参りません」

「まぁ、それは物の例えなので現実には起きませんからね。美味

しい物は沢山食べたくなるでしょう？　そのように、沢山頬張りパンパンになって頬が落ちてしまいそうだ…という気持ち的なものを表しているのです」

「へぇー…っ！？　し、失礼しました。有理様は随分と博識なのでございますね。私、敬服いたしました」

僕の説明を聞くと素で感心したのか、呆けたような返事をするエリザベス。直後に顔を赤くしながら、いつもの雰囲気に戻ったけど、この人でも隙をみせることがあるんだな。レアな物が見れたと思い笑っていると、エリザベスはさらに恥ずかしそうにしている。

そんな風にサービスで増量してもらったたこ焼きを食べ終えると、外に出てきた店主さんがエリザベスに何をくれた。…“たこ焼きストラップ”らしい。人数分あることから、僕も含めて気に入られたのだろうか。

「…美味しそうですね」

「いえ、姉上。ここは可愛らしいですね…と言うべきでは？　まぁ、なんにせよ。ここで過ごした記念品…ということになるのでしょうか。さっそく、大切なものができてしまいました」

そう言いながらテオは笑っている。同じようにエリザベスもストラップをみて笑顔になっているが、どことなく口をつけそうな雰囲気だ。そうなっては危険なので、僕は話題を振って意識を逸らすことにした。

「さて、次はどこへ向かいますか？」

「そ、そうですね。この近辺には、まだまだ飲食の場がある様子…。“ハシゴ”というのをしても宜しいでしょうか。まずは“マンガ喫茶”と呼ばれる場所にある“ドリンクバー”なる食材から参りましょう。混合比によって無限の味が生み出せるという“ドリンクバー”…。想像しただけで、心持ちが高ぶるのを感じます」

僕に話しかけられ、意識がこっちへ戻ってきたエリザベスがそう答える。テオドアも「無限の味…無限の……無限の味製(アンリミテッドフレーバーワークス)？」とよく分からない事を言っている。まぁ、別に嫌そうではないので、エリザベスの希望通り僕たちはいろんな店をハシゴすることにした。

――ワック前

エリザベスの希望通り商店街中の飲食店をまわった。テオドアは途中から満腹になり僕たちが食べているのをみているだけだったが、気になるメニューがあれば一口だけ貰って食べていたので楽しめたみたいである。そうしてほとんどの店を制覇しワックから出たところでエリザベスが口を開いた。

「これでこの辺りの料理は全て食べ尽くしたようでございますね。思えばテオは7食め辺りから、あまりお箸が進んでいませんでしたが…」

「私はお2人と違い、普通の量しか食べられませんので。ですが、気になった物は少し頂きましたので、ベルベットルームに戻ってからまた調理してみたいと思います」

「そうですか。ともあれ、本日は文字通りの“美味しい”体験をありがとうございました。宜しければまたいつか…ご一緒させて頂きたく存じます」

そう言いながら僕に礼をしてくるエリザベス。テオドアもそれに合わせて僕に深々と礼をしてきた。そして顔をあげたテオドアが話しかけてくる。

「本日も、楽しい時間をありがとうございました。…時の流れは、常に一定に保たれているものですが…。こうも早く過ぎ去ることが、あるのですね」

「フフッ、2人が楽しんでくれたのなら良かったです。次もこんな風に遊びましょうね」

「ええ、是非。では、ベルベットルームまで御足労願えますか？そこで報告をして依頼達成となりますので」

僕はそう言ってきたエリザベスに「わかりました」と答えると、2人と一緒にベルベットルームへと向かった。

――ベルベットルーム

《ギィ》と音を立ててドアを開き中に入ると、前回と同じく2人は着替えのために自室の方へと引っ込んだ。そうして待つこと数分。普段の仕事着であるエレベーターガールとベルボーイの格好になった2人が現れた。

「お待たせしました。それでは早速…巌戸台へのご案内、ありがとうございました。エスカレーターというのは、なかなか…興味深い乗り物でした。ぜひ、このベルベットルームの中にエスカレーターを設置してみたいのですが…。やはり、主から即答で却下を出されてしまいました…残念です」

言いながら本当に残念そうな表情になるテオドア。いや、断られた

君よりも頼まれたイゴールの方が僕には可哀想に思えるよ。心の中でだけそう突っ込みをいれ話を聞いていると、今度はエリザベスが話しかけてくる。

「それだけではなく、危険なトラップ…。そして魅力的な料理の数々。先日のポロニアンモールとはまた違った市井の生活が繰り広げられておりましたね。その思い出を忘れないためにも、頂いた料理を再現してみたいと存じます。まずは狩猟から…ふふ、楽しみでございます」

「ああ、姉上は狩猟ですか。私もあの思い出を忘れないためにも、頂いた料理を再現してみたいと思うのですが…。あの“ほぼタコ”は、どのように精製されているのか解析が困難で悩んでいたのですよ…。…おっと、申し訳ございません。今のは聞かなかったことに」

「いえ、聞いていても2人の言ってることが理解できないので大丈夫ですよ」

僕は満面の笑みでそう2人返すと、2人とも嬉しそうに「フフッ、そうですか」と笑っている。一体どこが嬉しかったり面白かったりしたのだろうか…。そんなことに悩みながらも依頼を達成すると、僕は挨拶をして寮へと帰ったのだった。

――???　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

湊達がそうやって依頼の報告をしている頃、とある場所で2人の人物がお茶を飲みながらそれを見ていた。その場所はどこかの庭園だろうか、色とりどりのバラやその他の見事に手入れされた植物が周囲に存在している。

「ふむ、実に楽しそうだな」

「それはそうよ。湊と一緒に遊んでいたのですから」

そんな風に話をしながらお茶を飲んでいるのは、金色の髪をした１人の少女と顔の四分の三を仮面で覆っている男だ。男の仮面は部分的に蝶のようなデザインとなっている。その男は少女の言葉を聞くと楽しそうな表情で口を開いた。

「しかし、君のマスターはとんだ変わり種だな。１つの肉体に一体いくつの魂を入れているのだ」

「いくつと言っても、実際は本人を除けば私と彼だけよ。他のは湊ではなく彼”ファルロス”に宿っているのだから」

「確かにそうだが、ファルロスと同じように彼も力を吸収しているぞ。いやむしろ、アルカナシャドウだけでなく君とファルロスの力も吸収している分、彼の方が異常と言えるな。デスの欠片を集め終えた時には、どこまで強大になっているか分かったものではない」

男はそういうと紅茶に口をつける。一方、それを言われた少女はなにやら辛そうな表情をしている。だが、少女は冷静な口調のまま男に向け口を開いた。

「湊も本来は無限の器ですから、公子のいるこの世界でもそれは同じ。まぁ、宿っている私たちはともかく。アルカナシャドウの力も吸収しているのは、私も予想外だったけど。きっと、ペルソナの力に目覚めていないから器を満たそうとしているのでしょうね」

「なにを呑気に言っている。元はと言えば君が力を封じているからだろう」

「これだけの力を子どもだった湊が制御出来たと思う？　封じておかなければ、湊は死んでいたわ」

男が湊の能力の変質は少女のせいだと言うが、少女はそれは湊を守るためだったと答える。男もそれは理解できていたのか否定はしない。だが、少女の言った子どもの頃の湊を思い出し話し始めた。

「……10年か。正確には少年が生まれた時点で歪みは始まっていた。だが、その歪みが決定的となったのは、あの事故に遭遇しデスの器になったことからだ」

「そうね。確かに湊も公子と同じ存在だったから、器としての資質はあったわ。でも、この世界で『愚者』の座に就いたのは公子だった。その時点でこの世界は公子に託されたと思ったのに……」

「フッ、まさか同じ存在である湊まで生まれるとは思わなかったか？　だが、それなら君がここにいる理由にならないな。君は少年を救うためにいるのだから」

やや暗い表情になりながら少女が言うと、男はそう言い返した。少女の方はその返しが分かっていたのか気にした様子もなく言葉を返す。

「世界を渡るときに分かっていたのは、その世界では誰が世界の子の道を歩むか…ということだけよ。まさか蓋を開けてみれば、世界の子は公子なのにその道は湊が歩まされるなんて事になってるとは思わないじゃない」

「確かに…。だがこれで世界の子の生存は決まったじゃないか。

代行体が無事に世界を救えたならの話だが」

「あの子を代行体なんて呼ばないで。本人は知らないでしょうけど、湊の敵はその運命を歪ませた“世界”そのものなの。勝手に別の人間に力が渡るようにしておいて、修正力なんてふざけた物であの子を殺そうとしたのよ？　文字通り世界を敵に回したにも関わらず、それでも生きてるのが既に奇跡よ。あの子はもう自分の人生を歩むべきだわ」

「わざわざ世界の子の道を代わりに歩む必要はないと？　まぁ、彼は他者よりも可能性に溢れているだけの普通の少年だからな。特別な訓練も受けていないただの少年が世界を救うだなんて、そんな物は創作物（フィクション）の世界にしか存在しない」

嘲笑気味に言った男に相手の少女も「そうよ」と同調する。しかし、男の言葉はまだ続く。

「だが世界はまだ少年に試練を与えるつもりだぞ？」

「１２のシャドウのこと？　あんな物で倒せるほど湊は弱くないわ」

男の言葉を何を馬鹿なといった感じに斬って捨てる少女。確かに少女の言う通り、湊の力は人外の域に達しているためなんの問題もない。更に言うなら、今後現れる大型シャドウを倒せば今以上に力は上がるのだ。だが、男の言っている意味はそれとは違っていた。

「あんな物は試練ではなく課題だ。私が言っているのはもっと強大な力の訪れ、世界もいよいよ後がなくなっているらしいな。殺せば余計に崩壊を早めるというのに…いや、それが狙いか。世界は湊

に対し微塵も可能性を感じていないらしい。だからこそ“Ｒｅａｐｅｒ”を……」

「リーパー？　……っ！！　そんな馬鹿なことがっ、自分のミスを消すために死神を送るですって！　どこまであの子を苦しめれば気が済むのよッ」

「私に言われてもね。しかし、答えるとすれば、それこそ“死ぬまで”だろう？」

男の言葉を聞き“世界”に対し激昂する少女。その“世界”という存在は、誤って生まれ、さらに誤って世界を救う者の人生を歩んでしまっている湊を殺すつもりらしい。自分がそれを認めたくせに、そんな勝手な話があるかと怒りを覚えるが、少女にはなにもすることができない。

「悪いが私は力を貸せないぞ。彼はこれだけ異常な状態にあっても、世界にとっては一般人のカテゴリーだからな。如何に、孫のような者たちと仲良くしていようと干渉できない。むしろ、契約者になれるようイゴールに取り計らったのだから十分なくらいだろう？」

「ええ、貴方にはとても感謝しているわ。でもどうして…なぜ世界はこんなにも湊を…」

「それは分からない。いや、すでに答えは出ているか。世界は“ただの人間には救えない”ということだろう。どうせ救われれば生存を認めるくせにな」

男はつまらなさそうな表情を作ると、そんな風に吐き捨てた。彼も湊に対する世界の対応が気に入らないらしい。それも当然で、自分

のミスを帳消しにするためだけに最凶の刺客を使い相手を殺すなど、いつの時代の無能王だというのだと感じているのだ。

「……封印は解くのか？」

「それを選ぶのは湊よ。けど、選んでも選ばなくてもあの子にとって辛い道なのは変わらないわ」

「確かに。どちらにせよ彼「そこまでよ」…ふむ」

何かを男が言おうとすると、少女はそれを止めた。男もその理由が分かったのか口を噤む。

「それ以上は言わないで。まだ死神がくると決まった訳じゃないんだから。仮にくるとしても、それまでに倒せるほど強くなっていれば良いのよ」

「そうだな。だが、時間はあまりないようだ。せめて、次のシャドウを吸収してから来るといいな」

「ええ、その間にみんなを強化するよう伝えておくわ」

「それがいい。…では、私はそろそろ行くとしよう。この世界は不安定なため、もう来れないかもしれないな。それでは、またどこかで」

「さようなら、フィレモン。いろいろとありがとう」

少女がそう言うと、フィレモンと呼ばれた男は光りの蝶になりその場から消えていった。あとには少女だけが残る。

「……絶対に死なせない。あの子だけは、あの人だけは今度こそ守ってみせる」

小さく呟いた少女のその声を聞いた者はいなかった……。

第三十二話（後書き）

フィレモンとか出してみましたけど、ネットで情報を調べただけなので口調とか知らないんですよね。まぁ、それでもおいしい設定だなと思ったので出しました。

会話してる少女は『謎の声の女』って普段呼んでいるキャラと同一人物です。今度は実体なので『』ではなく普通の「」でセリフを囲みました。そんな感じでこの章は徐々に湊に関わる設定など出していきます。やけにオリジナルに走っているので、原作に近い話を読みたい方は「なんじゃこりゃ？」状態かと思いますが、湊はこのままＲｅ：Ｃａｌｌ視点・公子は原作視点でいくのでご理解ください。

第三十三話　前編（前書き）

この章はなるべくコミカルというか、湊が日常をエンジョイするように書いています。じゃないと、この後原作でも徐々に暗いイベントが増えていきますから。まぁ、自分が書くと原作のシリアスなシーンも台無しになったりするんですけどね。

第三十三話　前編

6／30（火）
朝――校門
今日の朝、僕は1人で学校へ向かっていると後ろから声をかけられた。

「おはよ…。…あと、一週間で作戦だね」

「おはよう、ゆかり。満月の日だから…そうだね」

挨拶してきたゆかりに僕も挨拶を返し、作戦と言われたので次の満月の日を確認して返事をする。

「今度はどんなヤツなんだろ……。このまま、残り8体のシャドウを倒すまで、作戦って続くのかな…。で、こうして言われた通りに、タルタロスで力付けて、シャドウを倒して…？　…前から気になってたんだけど、桐条先輩、何か隠しているんじゃないかな…」

「隠してるというより、必要が無いと思ったことは伝えてないだけだと思うよ。まぁ、君らにしてみれば隠してるのと変わらないだろうけど」

不安と疑念を抱いているといった感じでそう言ってくるゆかり。確かに美鶴さんは何も教えてないからね。気になるとは思うけど、知ったところでやることは変わらないのだ。気にするだけ無駄だと思う。しかし、ゆかりは気になっているのか僕の方を向いて尋ねてきた。

「その言い方…何か知ってるの？」

「何かって何を？　独自に知ってることもあると思うけど、そっちが訊きたいことが分からないと答えれないよ」

「何よそれ。じゃあ、タルタロスがある理由や、シャドウが生まれた理由でも知ってるっていうの？」

「……タルタロスはともかく、シャドウが生まれた理由は簡単。人間がいたからだよ」

僕の言い方に引っかかるものを感じたのか、多少気分を害したような表情をしたゆかり。そして、ゆかりがタルタロスとシャドウについて質問してきたので、真面目に答えると相手は何やら怒ったような顔をしている。

「もうっ、人が真面目に悩んでるのにふざけないでよ！」

「僕は真面目に言ったつもりだけどね。ペルソナとシャドウは本質的に同じものなんだよ。意志に従い形作られたものがペルソナ、人の無自覚の思いが形となって現れたものがシャドウ。だから、２つの存在にはアルカナや使えるスキルみたいな共通点が多く見られるんだ」

「っ！？　な、なんでそんな事知ってるの？」

「さぁ？　いつの間にか知ってたから……。なんか力に目覚めてから、そういうの多いんだ。知ってるのにどこで知ったか分からない。初めてのはずなのに体験したことがあるみたいな感覚」

そう、僕は力に目覚めてから、自分の知らない知識や既視感を感じることが多くなった。別にそれがあるから不都合があるとか、気持ち悪いってことはない。だけどなんだろう…僕は前にもこんな戦いをしていたような気が…。そんな風に思考の海に潜りかけて気がつくと、心配そうな表情でゆかりが僕の顔を覗き込んでいた。

「調子悪いんだったら、1回病院とかで検査してもらった方がいいんじゃない？　私も一緒にいってあげるからさ」

「そうだね、その時はお願いするよ。あ、そろそろ予鈴鳴りそうだね。少し急ごうか」

僕はゆかりにそう告げると、先ほどのまでの話を終わらせ教室まで急いで向かった。そしてその後の授業はいつも通り寝たり図鑑を眺めて過ごした。

放課後――2F廊下

授業が終わり、放課後になるとゆかりと公子は部活へと向かった。僕も部活に行かないで良いのか聞かれたが、そもそも名前だけでいいと言ったのは向こうだ。なので、今日も気分がのらないのでそのまま帰ることにした。

そうして、教室を出て下へ降りる階段の方へ向かうと、風花がいた。なので、一応声をかけることにする。

「やぁ、風花。そんなところでどうしたの？」

「あ、湊君。えっと…湊君を待ってたんだけど。今、時間あるかな…？　あと、お腹もちょっぴり減ってたりすると嬉しいんだけど…」

そう言いながら何か恥ずかしそうにする風花。なんの用か分からないけど、待たせてしまったとは悪い事をしたな。なので、そのことを謝りつつ、特に用事がないと返事をした。

「あ、ゴメンね、出るの遅くて。僕だったら、特に用事もないし大丈夫だよ」

「よかった！　じゃあ、ちょっとお願いしてもいいかな。あのね、お弁当を味見してもらおうかと思って。実はね…正直に言うと、この前までは、人に出せない味だったの…。でも、今日のは大丈夫だから！」

風花は僕の用事がない事を知ると、嬉しそうに笑ってそう言ってきた。でも、風花って前に実家で料理をするのを見た感じだとだいぶ……まぁ、手料理を食べれるのが嬉しいからいいけどね。そう考えていると、目の前にいる風花が少し心配そうな表情をしながら上目使いで尋ねてきた。

「食べて…もらえるかな？」

「フフッ、可愛い《ギュッ》」

「み、湊君っ！？　は、恥ずかしいって。ていうか、何で抱きつくのっ！？」

上目使いで尋ねてきた風花があまりにも可愛かったので、思わず抱きしめると風花は困ったような声をあげた。身長差から僕の胸に顔をうずめているため、表情は見えないがきっと顔を赤くしているのだろう。そんな様子を想像しながら笑うと僕は風花に答える。

「なんでって風花が可愛かったからだよ。で、お弁当だっけ？喜んでいただくよ」

「そ、それは良かったけど。い、移動するから離してくれない？」

「ん、了解」

「ふぅ…じゃあ、ついて来て」

予想通り解放した風花は耳まで真っ赤になっていた。だが、数回深呼吸して落ち着きを取り戻すと、風花はとても嬉しそうにして僕を案内した。

――月光館学園・屋上

風花に案内され着いた場所は屋上。昼や授業中などはここにも休憩やさぼっている生徒の姿があるが、放課後にもなると1人の姿もなかった。そして、お弁当を食べるということで見晴らしの良いベンチに腰掛けると、風花がカバンの中をさぐりつつ話しかけてきた。

「あのね、これを食べてみてほしいの。おなか減ってるといいんだけど…」

そう言いながら風花は、僕に小さめのお弁当箱を渡してきた。「ありがとう」といってそれを受け取ると、さっそく蓋を開けてみる。

……？ちょっと混ざっちゃってるな。階段を上ったときにでも揺れたんだろうか、食材が混沌と混じり合っている。僕がそうやってお弁当を見ていると、隣に座っている風花が期待を込めた表情で話しかけてきた。

「み、見た目はあんまりだけど、ちゃんと食べれると思うから。いっぱい食べてね！」

「うん。じゃあ、いただきます」

《…パクッ》

隣でキラキラした目で見つめてくる風花にそう言うと、僕はお箸を手にとって食べてみた。少々かたいなぁ…、まぁ問題ないけども。そんな事を考えながら租借していると、風花が不安げに口を開き尋ねてくる。

「ど…どうかな？」

「んー、まぁ普通かな。作り始めたぐらいなら、こんなもんじゃない？」

「そ…そうかな。でも、気になった所は遠慮なく言ってね。意見とか、参考にしたいから…」

そう言いながらも僕の言葉を聞いて、ホッとした表情になる風花。でも、僕って味見係に向いてないと思うんだよね。味覚は伯父さん達のおかげで発達してるけど、その前の生活で人の食事とは思えないものを出されたりした。それ以降、他の人が不味いというものでも、“美味しくはない”で済むようになったのだ。

なので、僕の“普通”は他の人とは評価レベルが異なっている。まぁ、それでも改良点はわかるから、自分の好みを教えがてら風花にアドバイスをしてみる。

「えっとね、お弁当作るときは、アルミホイルでも良いから仕切り付けた方が良いよ。じゃないと、汁が出るおかずの味が他のにまでついちゃうからね」

「そ、そうなんだ。あ、待ってメモするから」

風花はそう言うと、可愛らしい花の絵が描いてあるメモ帳を取り出すと、ペンで僕が言った事を書いていく。そして、顔をあげてきたので続きを話す。

「で、僕はわりと薄味が好きなんだ。別に濃い味が嫌いとか食べれないってわけじゃないけど、今度作ってくれるときの参考に覚えておいてくれると嬉しいな」

「薄味だね……よしっと。他になにかない？」

「そうだな…ああ、そうだ。お弁当って基本冷めてから食べるでしょ？　だから、作るときは冷めたときの味を想像するか、実際に冷めてから味見してみるといいよ」

「そうだね、単純なことなのに気がつかなかったな」

メモを取りながらそう言って苦笑する風花。彼女がそうしてる間も僕はお弁当を食べているが、元々小さいお弁当箱だったためすぐに食べ終わってしまった。食べ終わったお弁当箱をしまって風花に返すと風花が苦笑しながら話しかけてくる。

「ごめんね、急に。実は…ふふっ、何と“料理部”を立ち上げたの。って言っても私一人で、同好会なんだけどね。管弦楽部もだけど、これから頑張るから湊君も時々食べに来て。…ううん、欲を言

えば…入って欲しいんだ。本を読んでも、よく分からなくって…。自分で作って食べるだけより、湊君のために作る方が…ずっとやる気が出るから。ど、どうかな？　迷惑…かな？」

「いいよ。っていっても、僕も料理は初心者だけど」

「初心者でも全然良いよ！　ありがとう！　あっ、えっとね、活動曜日は、月・木・土ってことにしてるんだけど。どうせ2人だし、寮の方でたまにご飯とかお菓子作るってのでも良いよね。私、頑張るからね！　これからも宜しくお願いします！」

言って座りながら僕に礼をしてくる風花。僕もそれに「こちらこそよろしく」と返し、2人だけの料理部が誕生した。たぶん、ゆかりと風花も寮でたまに活動すると言えば参加してくれると思う。

でもま、これで僕の所属は『特別課外活動部・生徒会・弓道部・管弦学部・料理部・ファッション同好会・委員会』と7つ掛け持ちになったな。どうせ名前だけだし、今後もメインは特別課外活動部と料理部になると思うけど。

「じゃあ、今日は帰ろうか。あ、そうだ。今日さっそくなんか作ってみない？　帰りに食材買っていってさ」

「私は別に良いけど、いいの？　入ってもらったばっかりなのに」

「僕が言いだしたんだから、良いんだって。じゃあ、メニュー決めながら買い物して帰ろうか」

そうして僕と風花は商店街で食材を買ってから、寮へと帰った。

夜――ラウンジ

屋上で2人料理部を結成した後、買い物をして帰った僕たちは今ラウンジに居た。もちろん、荷物をおいて既に着替えは済ませてある。

「じゃあ、作り始めようか」

「うん。それじゃあ、よろしくお願いします」

言いながら丁寧に頭を下げる風花。僕はそれをみて笑いながら頭を撫でると、風花は恥ずかしそうにしながらも不思議そうに首をかしげた。

「フフッ、可愛かったから撫でただけ。とりあえず、最初にご飯炊こうか。他の人も食べるかもしれないから、7号くらい炊いちゃって。そのカップ1杯が1号になってるから」

「わかった。1、2、3……7っとこれで7号だね。普通にお水で洗えば良いんだよね？」

「そうそう。ゆっくりでいいから、3・4回水を交換したらセットして炊き始めちゃって」

「はーい」

僕に言われ返事してから、流し台でお米を洗い始める風花。ゆっくりでいいと言ったので、お米をこぼさずに水の交換も出来ている。それを横目で確認しながら僕も料理の準備を始めることにした。今日のメニューは僕が決めたハンバーグ。それにレタス・トマト・キュウリを適当に切っただけのサラダ。そして、お味噌汁を作る予定だ。ご飯が炊けるまで時間がかかるから、先に生地を作っておこう。

「最初はタマネギをみじん切りにしてっと」

1人でそう呟きながら、皮をむいて洗ったタマネギをみじん切りにしていく。そして、それが終わると火にかけて油をひいておいたフライパンで、よく炒める。だが、この作業は風花にやってもらおう。

「風花、ご飯できたなら、タマネギ炒めてくれる？」

「うん、どれくらい炒めればいいの？」

「水分がとんで、色がつくまでだよ。よかったらいいって言うから、そしたらボウルに移してね」

「はい」

返事をした風花に炒める作業を代わって貰うと、僕は別の作業に移る。買ってきた合挽き肉をボウルに移し、それに塩を加える。ここで素早く混ぜないと、塩のタンパク質分解効果があまり得られなくなるので、さっさとやってしまう。

「肉はこれぐらいかな。次はパン粉だから、これも風花にやってもらおう。風花、タマネギはＯＫだから、次はパン粉に水入れてふやかしてー」

「わかった。移しちゃうから、ちょっと待ってね」

続いての指示を出すと、風花は火を止めフライパンの中身を丁寧にボウルへと移す。そして、それを終えると僕からパン粉の入ったボウルを受け取り、流し台まで歩いていく。

「水は適当でいいのかな？」

「うん、水はあとで捨てるから。ふやけたら、水捨ててパン粉をよく絞ってね」

「了解です。でも、家でソース作ったときも思ったけど。湊君って手際良いよね」

「まぁ、作業手順は頭に入ってるからね。それが分かってるなら、これをやってる間にこれをやって…みたいに考えられるでしょ」

「私は手順を覚えるのも一苦労だから羨ましいよ」

そう言って笑いながら水切り作業をする風花。僕は鍋で水を入れ火にかけると、風花の横で味噌汁の具材を切りながら答える。まぁ、言った通り、やる事が決まってるなら動線もわかる。なら、それをロスが少ないよう組み合わせれば良いだけだ。

「それが出来たら、お肉のところに材料全部入れて混ぜちゃって。卵は殻が入らないように注意してね」

「う、うん……《パカッ》…ふぅ。私、まだこれ慣れないんだぁ」

「そうなの？　んじゃ、少し教えるよ」

卵の殻割りが苦手と風花が言ってきたので作業を止めると。僕は風花の後ろからそれぞれの手を持つように補助をしながら、卵の割り方を教える。なぜか一瞬「ビクッ！」っとなったが、まあ気にしないでおこう。

「まず、卵持つでしょ。んで、凹凸がある場所の方がヒビをいれやすいけど、割る時を考えると平面なとこでヒビをいれた方がいいんだ」

「う、うん（ううー、教えてもらってるんだけど恥ずかしいよぉ）」

「それで、できたヒビに指を添えて左右に開くと…《パカッ》って感じで上手くいくよ」

「ほ、本当だね。教えてくれてありがとう」

補助しながら上手く卵が割れると、お礼を言いながらもどこか焦っている様子の風花。その様子を不思議に思いながらも、風花から離れて手を洗って自分の作業にもどる。だが、初心者向けの割り方があったっけ。そう思いだし、風花に話しかける。

「そういえば、手間は増えるけど他にも割り方があるよ」

「え？　どんな方法？」

「割りたい場所の反対側に小さいヒビを作ってから、割りたい場所にメインのヒビを作るんだ。そうしたら、先に作った小さい方のヒビを支点にして割れば、簡単にできるってわけ」

「本当だ。少し時間かかるけど、慣れるまでこっちでやろうかな。やっぱり、キレイに割れた方がいいし」

「そうだね。そっちでコツが掴めたら徐々に普通の方法でやって

みるといいよ」

風花はキレイに割れることが嬉しいのか、笑いながら言ってきたので。返事をしながら沸いたお湯から出汁を取り出し、切っていたネギを投入する。するとそこで、寮のドアが開く音がする。誰かが帰ってきたみたいだ。

帰ってきた人物はラウンジのキッチンが使われていることに気付いたのか、挨拶をしながらこっちへとやってきた。

「いま、帰った。ん？　誰が料理をしてるかと思えば、有里と山岸か。珍しいな、お前らが料理するなんて」

「2人とも、ただいま。私も君たちが料理をするところを見るのは初めてだな。いや、湊は休日に軽食を作っていたか」

そういって挨拶をしながら帰ってきたのは、美鶴さんと真田先輩だった。2人は僕たちが料理をしている事が本当に珍しく思えるようで、どんな作業をしているのか見ている。そして、2人が帰ってきたことに気付いた風花も挨拶を返し、返事をする。

「あ、お帰りなさい。そうですね、私はこっちに来てから始めたので、まだ練習中ですから」

「そうか。なら、怪我だけはするなよ。ところでメニューは何にしたんだ？」

料理初心者であることがわかると、風花を気遣う真田先輩。こういうところは面倒見の良い先輩って感じだよね。そう思いながら、僕は先輩の質問に答えるため鍋に切ったあげとワカメをいれてから口

を開く。

「みんな大好き、チキンカレー♪」

「嘘をつくなっ！　ワカメと油揚げをいれるチキンカレーがどこにあるっ」

「えっ？　ダメなんですか？」

「いや、ダメというわけではないが。……山岸、ちゃんと湊に作り方を教えなかったのか？」

僕が鍋に具材を投入しながら笑顔で答えると、怒ってくる先輩。しかし、だれがカレーにワカメや油揚げを入れないと決めたんだと聞き返すと、困ったような表情で風花に尋ねる美鶴さん。だが、聞かれた風花も少し困っているようだ。

「え？　えっと、あの。本当の今日のメニューはハンバーグとお味噌汁なんです。で、いま湊君が作ってるのが、お味噌汁で…」

「…おい、有里。メニューぐらい正直に言えんのか、お前は」

「え？　だって僕、なに作ってても基本的にそう答えてますよ？」

僕がチキンカレーと答えた理由を教えると「わけがわからん……」と言って、二階へ上がって行く真田先輩。その様子に苦笑しながら美鶴さんも上へと向かおうとするので、一応声をかけておく。

「あ、ご飯まだなら、人数分の量は準備してますから降りて来てください」

「わかった。では、明彦にも伝えておく。それじゃあ、また後でな」

「はい、お待ちしてます」

美鶴さんの言葉に風花が答えると、作業を再開する。生地を混ぜている風花の様子を確認しつつ、冷蔵庫から味噌を取り出すと。使ってないお玉ですくって、鍋でとかしていく。

「風花、味噌汁はこうやって少しずつ味噌をとかすんだよ」

「へぇ、でもそんな少なめでいいの？」

「出汁をちゃんととってるからね。てか、少ないなら味見してから足せばいいんだよ。多くてしょっぱいのは戻せないけど、少ない分にはあとで足せるんだからさ」

「あー、そうだね。ダメだな、私。そういう単純な事に気付けないから失敗するんだ…」

そういって生地を混ぜながら、1人で落ち込む風花。まぁ、気持ちは分からないでもない。しかし、風花は初心者なのだ。気付けたのなら、今後改善すればいいし。失敗するならそこから学べばいい。その程度の事で落ち込む必要はないのだ。

「初心者なんだから失敗ぐらいするって。大切なのは失敗から学んで同じ失敗を繰り返さないことだよ」

「湊君……うん、ありがとう。私、がんばるねっ」

「フフッ。うん、応援してるね。じゃあ、ちょっとそれ貸してくれる？」

「はい。ちゃんと混ぜれてる？」

「うん、イイ感じ。んじゃ、空気を抜いて形をつくっていこうか」

風花を励まし、彼女もやる気をみせると生地の状態を確認する。多少、甘い部分もあったが、それは手の大きさの問題だろう。食べざかりの男子3人に女子が4人の計7人分だ。只でさえ小柄な風花では大量の生地を混ぜるのも一苦労だろう。そう思いながら生地の状態を確認しつつ混ぜていると、再び誰かが帰ってきた音がした。

「ただいまーっと。お、湊に風花じゃん。晩飯作ってンのか？2人が料理って珍しいな」

「ただいま、湊君、風花。確かに珍しいわね。ってか、風花はきたばっかりだから分かるけど、湊君が晩御飯とか作ってるの初めてみたかも」

「ただいま。そういえば、私も初めてみた。実家にいたときも軽食しか作ってなかったし。ちゃんとレシピ見て作った？」

帰ってきた元祖2年トリオは挨拶をすると、僕らをみてそう言ってきた。先輩たちもだけど、みんな言う事は一緒だな。そんな風に考えながら、とりあえず挨拶をして返事もしておく。

「みんな、おかえり。で、レシピだけど見てないよ。なんとなくで作ってるし」

「ちょ、おまっ、そんなアバウトで大丈夫かよっ！？」

「大丈夫だって、みんなの分もあるから。今から焼くから着替えたら先輩たちにも声かけてきてよ」

「「「えぇー……」」」

僕に言われると3人はそん風に嫌そうな顔をする。まったく失礼な人たちだな。レシピくらい見なくても頭に入ってるっての。僕がそう考えていると3人は渋々了承したといった感じで上に上がっていった。その光景に風花はなぜか苦笑しているが、焼くのは全て風花に任せるので話しかけることにする。

「じゃあ、最初の1つは作り方見せるから、残りは風花がやってね」

「うん、どうすればいいの？」

「大体これぐらい手にとって、空気を抜きつつ形を平べったくするんだ。それで、真ん中はへこましてね。じゃないと生焼けになるかもしれないから。で、厚さもあんまり厚くしないで、こんな感じすれば完成」

「空気を抜きつつ、真ん中はへこましてだね」

「うん。そしたら、中火でよく熱したフライパンに置いて蓋をして待つ。で、焼けたら裏返してって感じね。多少焦げてもいいから、火だけは中までよく通すこと。わかった？」

「わかった。じゃあ、頑張るね」

風花はそういうとバットの上に置かれた僕の見本を見ながら、生地をハンバーグの形にし始めた。空気もちゃんと抜いているようだし、大きさも見本と同じくらいだ。これなら大丈夫だろう。

そう思うと、僕は新しいボウルを2つ出して片方に卵を割っていく。それを泡だて器で混ぜながらグラニュー糖をいれていき、よく混ぜれたらもう1つボウルにバニラエッセンスと生クリームをいれこちらも混ぜる。2つともよく混ぜれると、今度は2つをよく混ぜてから大きい容器に移し、冷凍庫に入れた。これで食後のデザートも完成っと。

「湊君。これぐらいの焼き加減でいい？」

「どれ？　うん、それぐらいでいいよ。じゃあ、サラダとかは僕が準備するから、そのまま焼いておいてね」

「フフッ、まかせて」

教えられながらとはいえメインの作業は全て風花に任せた。そして、仕上げの焼成も上手くいっているのが嬉しいのだろう。風花はとても楽しそうな顔をしている。お弁当を見る限りではあまり上手くいっていなかったみたいだし、今回のこれが自信に繋がるといいなと考えながら野菜を適当に切って盛り付けた。そこに風花が焼いたハンバーグの乗せれば完成だ。

「湊くーん、先輩たちも呼んできたよー。なにか手伝うことある？」

「じゃあ、テーブル拭いて運ぶの手伝ってくれる？」

「了解。他の人も手伝ってね～」

「うぃーっス」「「わかった」」「はーい」

公子が降りてきて手伝いを聞いてきたので指示を出すと、なんと先輩たちも手伝い始めた。伝えた公子も少し驚いているみたいだが、これならすぐに終わりそうだなと思い。テーブル拭きを美鶴さん、運搬を男、ご飯と味噌汁の配膳を公子とゆかりに任せ、僕は洗い物を片付けてしまった。

第三十三話　前編（後書き）

後編に続きます。

第三十三話　後編（前書き）

前編の続きになります。

第三十三話　後編

――ラウンジ・テーブル

みんなが皿やコップを運んでいる間に、片付けを終えてしまうと。全てのハンバーグを焼き終えた風花がフライパンをどうするのか聞いてきたので、その脂を使ってソースも作った。それを器に移してテーブルに持っていくと席についた。

「そういえば、揃って晩メシってのも初めてッスね」

「そういえばそうだな。事情が事情だけに入寮しても歓迎会も開いていなかったしな」

「じゃあ、一週間後の戦闘に向け、英気を養うってことで食べますか。風花、湊君食べていい？」

「「フフッ、どうぞ」」

公子に聞かれて僕たちは笑って許可すると、みんなは揃って「いただきます」と言って食べ始めた。味噌汁とかは味見をしたが、ハンバーグは味見するわけにもいかず実際の食事のときにしか美味しいかどうか分からない。風花もそこが気になるのか、みんなが食べるところを見ている。すると、最初に口をつけた順平が口を開いた。

「っ！？　うっめー、なんだこれ！？」

「確かに美味しい。風花も湊君も料理出来たんだねー」

「ふむ、この味噌汁も出汁がきちんととれているな。濃さも丁度

いいし、私好みだ」

ハンバーグを食べるなりいきなり驚いた表情で、美味しいというとがつがつ食べ始める順平。一口サイズに箸で切って食べると、同じく美味しいといってくれたゆかり。そして、舌が肥えている美鶴さんも僕の作った味噌汁を美味しいと言ってくれた。それを聞いた風花は安心した表情をしたあと、すぐに笑顔になり自分も食べ始める。

「ホントだ…美味しい」

「なんだ山岸。作った本人なのに味を知らなかったのか？」

「あ、はい。私は湊君に教えてもらって作っていたので、食べるのは初めてなんです」

「え？　風花じゃなくて、湊君がメインで作ってたの？」

自分も食事に手をつけると美味しいと呟いた風花に、真田先輩が尋ね答えると。今度はその答えに驚いた公子が尋ねてきた。そして、風花は食べていた物を飲み込むと、それに答えるため口を開く。

「えっと、そうだよ。私1人だったら、卵焼きもまともに作れないし」

「なんだと？　これらの料理を作ってチキンカレーなどとほざいた有里だぞ？」

「あぁ、普通の料理作ってるときも言ったんだ、アレ……」

真田先輩の言葉を聞いて、いつも軽食を作っているときに言ってい

るフレーズを思い出したのか、苦笑いするゆかり。まぁ、あれはお決まりのフレーズだからね。てか、なんで料理を作ったのが風花だと理解され、僕だったら驚かれるんだろう？そう思い訊いてみることにした。

「なんでみんな驚いてんの？　たまにだけど、軽食作ったりしてるじゃん」

「いや、軽食と一緒にすんなよ。普段、ほとんど料理しないやつが、こんだけのもん作れるって聞いたら普通驚くだろ」

「そうそう。実家でも作ってなかったし、いつ練習したの？」

「いつって別に。ハンバーグは今日、初めて作ったけど？」

食事をしながらそう答えると、風花以外が驚いた表情をしている。うん……なんか、予想できてた。なので、無視して食事を続けていると、風花が口を開きみんなに話し始めた。

「あの、最近知ったんですけど。湊君って1度見た物は器用さとか筋力が足りていれば、コピーできるみたいなんです。この前も管弦学部に来て初めてなのにピアノ弾いてましたから」

「それ本当？　え、じゃあ湊君って練習とかしなくてもプロと同じことできるの？　なによそのチート。ふざけ過ぎでしょ」

「しかし、そう言われると納得できるものがあるな。この前のタルタロスでメンバーらの動きをしていたが、それがあまりに酷似していたから驚いていたんだ」

風花の説明を聞くと、なぜか怒ってきたゆかり。別に僕だって好きでチート能力を得た訳じゃないのに…。そして、そう考えると美鶴さんがやっと理解できたといった表情で、食事を続ける。どうやら他の人もどっちかと同じ感想みたいだなと、お茶を飲みながら思っていると公子が話しかけてきた。

「ねぇ、それって昔から？」

「いや、知識を吸収するのとか、ある程度のことは少し練習すればできたけど。練習しなくてもできるようになったのは、こっちに来てからかな」

「……他言語理解が風花救出後ってことは、もしかして大型シャドウが関係してるのかな？」

「ん？　どういう事だ？」

公子は僕のコピー能力の所持していた時期を聞くと。『他言語理解』という多分、虎狼丸と会話した能力だと思われるものの入手時期と似た物を感じたのか、大型シャドウとの関係性をあげてきた。だが、他言語理解の時点で何も知らない美鶴さんは、状況がわからず尋ねてくる。うーん、僕もよくわからないから説明しようがないんだよね。そう思っていると、聞かれた本人である公子が説明を始めた。

「えっと、この前のことなんですけど、湊君があの長鳴神社のコロマルって犬と会話してたんです。勿論、相手は犬語で湊君は日本語なんですが、犬が人間の言葉を理解するのはわかるけど逆はおかしいと思うじゃないですか？」

「まぁ、普通はそうだな」

「で、説明してもらうと、風花救出後くらいからなぜか分かるようになったって言うんです。まぁ、ペルソナでもスキルが目覚めるとかありますから、急に特殊能力に目覚めてもおかしくないんですが。湊君の場合、私たちと根本的に能力が違うので、別の理由を疑ってみると。その目覚めた時期から大型シャドウと関係してるのかなって思ったんです」

僕についての説明が終わると、先輩らや他のみんなも何か考えている。確かに公子の言う通り、大型シャドウが関係しているとすれば、きっかけや時期的には合っていると思う。でも、それでどうして…と思わなくもない部分もあるのだ。一体どういうことなのだろうか？

「ふむ。すまないが、湊。食事が終わっているなら、こっちに来てから出来るようになった事を紙に書いてみてくれないか？」

「え？　んー、面倒ですが良いですよ。ちょっと待ってくださいね」

僕は美鶴さんに言われると、コップ以外の食器を流し台に持っていってから、玄関横のカウンターにあるペンとメモ用紙を持って席に戻る。さて、どんな能力があったっけ。

【こっちきて出来るようになったこと一覧】

・魔力関係
・コピー能力
・身体能力の上昇
・肉体耐久力の上昇
・回復力の上昇
・気配探査の精度、範囲上昇

・動物の言葉の概念的理解
・覚えのない記憶、知識

こんなもんかな？まぁ、他にもあると思うが。一通り書き終えると、その紙を美鶴さんに渡す。すると、紙をみた美鶴さんが質問してきた。

「ん？　影時間についての項目がないが、君はいつ適性を得たんだ？」

「適性ですか？　初めて影時間を体験したのは、１０年前ですね。てか、僕の両親が死んだのってシャドウの戦いに巻き込まれたのが原因ですし」

「「「「「「なっ！？」」」」」」

僕の言葉を聞くと言葉を失い驚くメンバーたち。何をそんなに驚く事があるのだろう？そう思って皆の方をみていると、公子が口を開いた。

「ま、待ってよ。伯父さんたちは車の事故で死んだんでしょ？そ、それに１０年前に影時間を体験してたなんて…」

「いや、間違いないよ。その後も僕は毎日影時間を体験してたから。てか、その事故の報道しらないの？『ムーンライトブリッジで深夜に謎の爆発。幸いにも怪我人はいなかった』だよ？　まぁ、どんな報道でも死んだって結果は変わらないんだし良いけどね。真相を隠したかったどっかの誰かは、僕が騒がなくて安心したんじゃないかな」

苦笑しながら答える僕を見て、みんなは何故か少し俯いている。別にこれ暗くなる話じゃないんだけど？そう思っていると、美鶴さんが何かを呟きながら立ち上がった。

「１０年前…では、彼が最初の？　いや……済まない湊。私は少し調べることができたので、先に失礼させてもらう」

「あ、はい。洗い物はあとでやりますから、流しに置いておいてください」

「わかった。山岸、湊。とても美味しかった、ごちそうさま」

「あ、いえ。お粗末さまです」

片付けについて聞くと、美鶴さんは僕と風花にお礼を言ってきた。それに風花が返事をすると、食器を片づけ美鶴さんは上へと上がっていってしまった。それがキッカケとなり、すでに全員が食事を終えていたので片付けることになった。

最後はなんか暗い雰囲気になっちゃったけど、まぁそれなりに皆喜んでくれたなら良かったと思う。デザートのアイスはもう少し冷やす必要があるので、あとで出すことにして僕と風花は片付けを始めた。

――作戦室　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

食事の片づけが終わると、私と風花はゆかりに呼ばれて４階の作戦室までやってきた。ちょっと話があるのということだったが、一体なんのことだろう？そう思いながら、部屋につきドアを閉めるとゆかりが話し始めた。

「あのっ…ゴメンね、２人とも。片付け終わったばっかで、いきなり呼び出しちゃって…」

「ううん、気にしないで。…で、話ってなに？」

「そうそう。やけに真剣な雰囲気だったけど」

謝って来たゆかりに風花と私が気にするなというと、一体何の用だと尋ねる。呼ばれたときの雰囲気から察すると、それなりに重要な話なのだろう。

「あの…あのね。公子にも知っておいてもらおうって思ったので、本題は風花のスキルを見込んでね、ちょっと頼みたい事あるんだけど…」

ゆかりそんな風に言い辛そうにしながらも話し始めた。

「前、学校のこと調べた時に分かったんだけどさ…。１０年前、結構な数の生徒が、一度に理由なく不登校になった事があってね。しかもそれ、よく調べるとホントに不登校だったのか怪しくてさ。風花、知ってた？」

「え、あまり詳しくは…」

「公子は？」

「私も知らないなぁ。なんとなく１０年前になにかあったとは聞いてるけど」

１０年前の出来ごとについてなにか知っているかを聞かれ、私も風

花も知らないと答えるとゆかりは更に言葉を続ける。

「今更だけど…気になんない？　シャドウが現れたのって…昨日今日の話じゃないって言うし…。湊君の話が本当なら１０年前には存在してたんでしょ？」

「え、それって、つまり…」

「分かんない。けど、どうもひっかかるの。それに、言いたくはないけど…。桐条先輩って、タルタロスの話になると、ちょっと様子おかしいし」

ゆかりはそう言いながら少し俯く。それに対し風花は「そうかな…？」と答えるが、確かに湊君がくる前から活動している私たちは疑念を持たざるを得ないことが多々あった。しかし、さっきも一緒に食事をした仲間を疑うのはゆかりも辛いのだろう。つまりは信用したいから、真実が知りたいのだ。

「事件のこと、詳しく知りたいの。関係ないなら、無いでいいし」

「そうだね。私も真実が知りたいし、私からも頼めないかな？」

「…うん、そうね。分かった、調べてみるね」

「「ありがとう、風花」」

ゆかりの話を聞き、真実が知りたくなった私からもお願いすると。風花は笑顔でそれを了承してくれた。先輩は湊君のご両親の死んだ理由がシャドウだと聞いたとき、他の人とは少し違う反応を見せていた。彼女が何かを知っているかは分からないが、情報の欠片を持

っているのは確実だ。今回のことからそれに通じる情報を得られれば……。

そんな風に考え事をしていると、急に作戦室のドアが開いた。私たち3人はそのことに驚きながら、ドアの方を見ているとその人物が部屋に入ってくる。

《ガチャ》

「あ、3人ともここに居たんだ」

そう言いながら笑顔で入って来たのは湊君だ。それを確認すると、思わずホッと息を吐く私たち。

「はぁ……湊君か。ビックリした、順平かと思っちゃった。アイツ、女の子同士の会話にすぐ割り込んでこようとするからさ」

「順平は真田先輩と下でアイス食べてるよ。僕は3人も食べるか聞きにきたんだ」

湊君はゆかりの言葉に苦笑しながらも答えると、私たちのところまで来て用件を伝える。けど、なんでアイス？買って来たのかな？そう思った私は尋ねてみた。

「アイスってなんのアイス？」

「普通のバニラアイスだよ、風花がハンバーグを焼いてるときに作っておいたんだ。一応、チョコとかベリー系のソースとチョコスプレーも買ってあるよ。コーンフレークとかウエハースもあるし」

「え？　湊君、そんなのまで作ってたの？　私、気付かなかった

…」

アイスが湊君がこっそり作っておいたデザートだとわかると。風花が感心したような、すぐ近くにいて気付かなかったことが恥ずかしいような…といった表情で頬を赤くしている。それを見た湊君は何故か風花の頭を撫でながら話しかけてきた。

「3人はなにしてたの？」

「別にぃ？　世間話してただけだよ。あ、その眼…もしかして怪しいとか思ってる？」

「クスクス……君らは正式な部活メンバーなんだから隠し事はほどほどにね。美鶴さんが何も教えないのは、詳しく知らないからってのと知ったところでやることに違いは無いからだよ」

「「「っ！？」」」

ゆかりの言葉に苦笑しながら答える湊君に驚く私たち。湊君に隠し事はできないと思っていたが、正直にいうとここまでとは思っていなかった。いや、最近のゆかりの様子が少し変なのには順平も気付いていた。ならば、そっちの方から予測したのだろうと考え冷静さを取り戻す。

「湊君は何か知ってるの？」

「ん？　公子もゆかりと同じことを聞くんだね。そうだな…うん、まあ君たちが知らないことや美鶴さんも知らないようなことを知っていると思うよ」

「それを教えるつもりは？」

「聞きたい事を整理してからなら、別に教えてあげてもいいかな。ま、とりあえず今日は教えないけどさ」

ゆかりの質問にそう答えながら再び笑う湊君に、ゆかりと風花は複雑な表情を向けている。きっと、他人が見れば私も同じ表情をしているだろう。目の前にいる湊君が何者か分からない。いや、湊君が私たちの知っている本人であるのは間違いない。

だが、なぜ彼はそんな情報を知っているのか？また、食後に書いた能力はなぜ目覚めたのかなど湊君にはあまりに不明な点が多い。そのせいか目の前にいるのに、どこか別の場所にいるような錯覚すら感じてしまう。そんな風に思考の海に潜りかけた私は湊君の声で意識を戻した。

「で、アイスはどうするの？」

「え？　う、うん、もらおうかな。２人も食べるでしょ？」

「うん、せっかくだから」

「家で作る手作りアイスなんて初めてだなぁ」

そんな風に私たちはそれぞれ答えると、湊君のあとに続いてラウンジへ向かった。下に降りると順平と真田先輩が自分の器にアイスを入れトッピングを楽しんでいた。私たちもアイスだけ食べたりトッピングをしてみたりとして、手作りアイスを楽しんだのだった。

影時間――屋上　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

デザートに作ったアイスをみんなで食べ、お風呂や歯磨きをしたあと僕は1人で屋上にいた。なんとなく、外の風に当たりたくなったからだ。そして、縁に座ってタルタロスを眺めていると、後ろに気配を感じた。

「やあ。…何を伝えに来たか分かる？」

「ファルロスがくるのは時期が限られてるからね。分かってるよ」

僕が振り返らずに答えると、笑いながら隣に座るファルロス。すると彼も、タルタロスの方に視線を向けながら口を開いた。

「フフ、そろそろ慣れてきたのかな。…あと1週間で、次の満月だね。準備は出来てるかい…？」

「他の人はまだ教えたことを自分のものに出来ていないみたいだけどね。まぁ、1人でも負けないから大丈夫さ」

「そっか。でも、気をつけてね。また、会いに来るよ」

そう言うと、ファルロスは消えてしまった。けど、あと1週間で敵がくるのか。そいつを倒せばまた何かの力に目覚めるのかな？

「僕って一体何なんだろう…」

『それは哲学？　それとも思春期特有のあれかしら？』

「君か…」

考え事をしてぽつりと呟くと彼女が出てきて僕に尋ねてきた。てか、

思春期特有のあれって厨二病とかいうやつか？そう考えながらも、彼女の質問に答える。

「そういう訳じゃないさ、ただ純粋に自分の正体が気になってね。ペルソナも封じられてるだけで使えるらしいけど、他の人は魔力とか影時間外でも身体能力が上がるとかってないみたいだしさ」

『同じ力を有してるだけに、異なる部分が気になるの？』

「ま、そういう事。それに最近いろんな事に既視感を覚えるんだ。加えて知るはずもない知識を持ってたりね。知ってる？　影時間生まれることになった事の発端は、美鶴さんのお爺さんに関係あるんだよ？」

『…貴方、それをどこで知ったの？』

僕が試しに彼女に話してみると、彼女は僅かに驚いたようだがそれを隠しつつ僕に聞き返してきた。ってことは、これは本当のことなんだね…。

「……君は知ってるんだね。この情報が本当だってこと」

『っ！？　…趣味が悪いわね、鎌をかけるなんて』

「まぁ、そう言わないでよ。もともと今の僕はそういうやつだって知ってるだろ？　この命では自分の好きなように生きるんだ。そのためなら、他人を利用したりもするさ」

鎌をかけられたことが癪なのか拗ねたように言う彼女。それに苦笑しながら答えると、彼女は『しょうがない子』と呆れている。僕は

それに短く謝罪すると彼女が真面目な表情をして話し始めた。

『メンバーの強化は進んでる？』

「ぼちぼちかな。って言っても、どの程度まで強くしたらいいか分からないし、満月までに出来そうな感じで強化は進めてるよ」

『なら、今後もなるべく早いペースで強くしていきなさい。なんだか嫌な予感がするのよ…』

彼女は、そう言いながら暗い表情をして俯く。嫌な予感ねぇ…僕にはそれがなにか分からない。だけど、こうしてる今も少しだけ感じるものがある。それは…

「…世界のざわめきを感じるよ。これが君の言う嫌な予感と関係してるかは分からないけど。何かの強い意志が世界をどこかの方向へ持っていこうとしてる」

『……関係してるかも知れないわね。その意志を発しているのが誰かというのは分かる？』

「ううん、そこまでは分からない。けど、悪意とか殺意といった負の感情に近い。いや…これは…“拒絶”？」

そのざわめきの正体を知ろうと、感覚を研ぎ澄ますとそんな感覚を感じ取った。相手が誰かは分からないし、これが本当なのかはわからない。しかし、確実に強い意志の存在だけは感じ取ることができる。

『その気配に注意しておきなさい。それが私の予感の正体なら、

咄嗟に動かなければいけない場合もあるでしょうから』

「わかった。じゃあ、僕もそろそろ寝るね」

『ええ、おやすみなさい湊』

「うん、おやすみ」

《ガチャン》

そんな風に挨拶をすると僕は扉を開けて、自室へと戻り休んだ。

第三十三話　後編（後書き）

ゆかりたちの秘密の会話の日付をずらしてみました。まぁ、ファルロスが来る日は大概他のイベントとくっつけてますけどね。

湊が意味深な発言をしたり、『謎の声の女』が色々と知っている風に書いてますが。皆さんも結構予想されたりしてるんですかね？そういう予想は小説を読むときの醍醐味ですよね。自分も他作者様の作品を読むときはよくしてます。

『謎の声の女』の名前や正体がわかるのは次の章ですが、そのときは予想が正解したかどうかこっそり教えてください。正解率で自分の作品の展開の予想しやすさが分かりますので。

第三十四話　前編（前書き）

今回の大型シャドウ戦は湊をいろいろと動かしていたら、やけに長くなりました…。まぁ、この辺りはイベントっぽいイベントが少ないので章自体の話数が他に比べ少なくなっていたのでちょうどよかったかもしれません。

あと、今回はこの設定を使っているので、もう一回書いておきますね。

銀髪↓見た目：ローゼンメイデンの水銀燈（ＣＶ．水銀燈や『ハヤテのごとく！』のマリア時の田中理恵さん）

第三十四話　前編

7／7（火）
朝――校門
今日はいよいよ満月だな。そう思いながら学校へ向かっていると、後ろから声をかけられる。

「おはよう、湊君。体調は万全？」

「おはよう、風花。そうだね、割とバッチリかな」

「さすがだね。今日は、たぶんシャドウ討伐の召集をかけることになると思うの。学校が終わったら、直ぐに寮に帰って待機をしててね」

笑顔でそういってくる風花に、短く「了解」と答えると。僕たちは話をしながら学校へと向かった。そして放課後になると、早めに帰って待機することにした。

影時間――作戦室
学校から帰ると着替えをしたり、早めに晩御飯を食べたりして準備をした。その時、周囲から謎の視線を送られたが、今は風花がペルソナ“ルキア”を召喚して周囲の様子を探っている。すると、真田先輩が口を開いた。

「どうだ、反応はあるか？」

「待ってください……見つけました！　市街地に、大型のシャドウ反応！」

「ほんとにキタッ！」

「フンフン。満月の件、どうやら確実と見ていいね」

風花が反応をキャッチすると驚く順平、そして理事長も仮説が証明されたことが嬉しいらしくどこか満足げだ。そして、風花はさらに反応の場所を特定しようとする。まぁ、僕も場所は分かるんだけどね。地名を知らないんだ。

「場所は巌戸台の、ええと…白河通り沿いのビルです」

「白河通りか…。ここ数日、影人間がよく2人1組で見つかるって聞いてたけど…なるほどねぇ」

「2人1組か……そういう事か」

理事長と美鶴さんは敵の居場所を知るとなぜか納得している。どうして納得しているんだろう?そう思っていると、風花はルキアを帰還させ口を開いた。

「白河通りって、どんな所でしたっけ。私、あの辺あまり行かないもので…」

「聞いた事はあるけど…」

「あ、そっか、ホテルんとこか。だから、2人1組なわけね。風花も知ってんだろ？　ホテル街だよ、ホテル街！」

風花が質問すると、答えづらそうにするゆかり。対照的に順平が嬉

しそうに説明するが、風花は「え、えぇっ…」と顔を赤くし、ゆかりは「あんたねぇ…」と呆れている。けど、ホテルかぁ…こっちに来てからは行ってないなぁ。そう思いながら僕も会話に加わる。

「ホテルって言えば、こっちに来てからは行ってないわねぇ。前に行ったのって公子が実家に戻ってきたときかしら？」

「うーんと…そうだね。去年の夏に行ったのが最後かな」

僕が公子に尋ねると、思い出しながら答える公子。ちなみに僕は今、銀髪ストレート＋ヘッドドレスに黒に近い深い青のゴスロリスカート、ドロワーズにブーツという出で立ちだ。そのため、名前は有理のままだが声と口調を舌足らずの猫撫で声系に変えている。話は戻るが、そうして公子が返事をすると何故かまわりの人間が驚いた表情をしている。どうしたんだろう？

「オ、オマエら、普段は姉弟って言っておきながらホテル行ったことあんのかっ！？」

「てか、みんながいる前でなんてカミングアウトしてんのよっ！！」

「？？　なんでこの子達は怒っているの？」

「え？　さぁ？」

僕たちの話を聞いて驚いたり怒ったりしてくるメンバーら。その理由がわからず、公子に尋ねると公子も原因がよく分かっていないようだ。まぁ、よく分からないが放っておくか。

「まぁ、よく分からないけど、ここらへんのホテルって評判はどうなの？　入試のときは日帰りだから知らないのよ」

「んー、私も寮生活だし利用したことないからなぁ。あ、ゆかり達は知ってるんだよね？　どうなの？」

「ど、どうなのってホテルなんて行ったことないのに知る訳ないでしょっ！」

ホテルについて知っているみたいなので公子が尋ねると、ゆかりは顔を赤くして怒ったようにいってくる。そんなホテルを利用したことがないくらいで、恥ずかしがることないのに。そう思いながら再び僕は口を開く。

「別にホテルに行ったことないくらいで、恥ずかしがる必要ないじゃない。じゃあ、美鶴さんと真田先輩は知ってます？」

「し、知るかそんなもんっ」

「き、君は私がそんな場所を利用したことがあると思っているのか？」

「無いんですか？　あ、旅館派なのねぇ。私も温泉旅館の方が好きですよ」

やや怒ったような雰囲気を纏いながら尋ねてきた美鶴さんに、そう言って返すと相手はキョトンとした表情をしている。まわりを見ると公子と理事長以外も同じような表情になっているが、どうしたんだ？そんな風に不思議に思っていると、再起動したゆかりが話しかけてきた。

「え？　有理と公子って今なんの話ししてる？」

「だから、ホテルの話でしょう？　前に行ったのは公子が帰ってきたときに伯父さん達と行った旅行のときが最後なのよ。で、私は温泉にゆっくり浸かるのが好きだから、ホテルより旅館の方が好みって話よ」

「私は布団よりベッドが好きだから、最近は有名な温泉のあるホテルに泊まるって感じなんだけどね。あ、今日行く場所がホテルなら試しに泊まってみる？　私たち寮だから泊まる機会ないしさ」

「それ良いわね。じゃあ、着替えとお泊りセット準備しなきゃ」

「「「「ちょっと待てっ（待って）！！」」」」

話が盛り上がり。一緒に泊まってみようという事でまとまりかけると、理事長を除くメンバーたちからストップがかかった。声をかけられた僕たちが、そっちに顔を向けるとみんなが疲れた表情をして口を開いた。

「驚いて損したぜ。つか、根本的に話しずれてたのな…」

「勘違いしたのは俺たちだが、この場合はこいつらの無知を責めるべきか、純粋と褒めるべきか…」

「草摩はともかく有理は4月にきたばかりだからな、知らなくても無理は無い。私たちの説明不足だ」

「けど、普段の行動とか見てると、2人ならもしかしてって思っ

てもしょうがないですよ」

「そ、そうだね。はぁ…驚いたぁ」

僕たちの事を置いてきぼりに話すメンバーたち。なにを驚く事があったのかは不明だが、さっきの話に戻るとしよう。

「で、泊まる話だけどぉ」

「「「「だから、ちょっと待て（待って）」」」」

「なぁに？　別に学校にはそのまま行くし、1泊しかしないから大丈夫よ？」

「そっちじゃなくて、場所が問題なのよ…」

話を再開すると再びストップをかけてきたメンバーらに、問題ないことを説明すると。呆れた表情をしてゆかりが話してきた。けど、ホテルでしょ？なんか曰くつきなのかな？

「ただのホテルでしょう？　それとも曰くつきとか？」

「え、私そういう話し聞いた事ないよ？　それとも、私が知らないだけで、なんかあるんですか？」

僕が質問すると、そういった話は聞いた事がないという公子。だが、公子もこっちに来て1年ちょっとだ。中学時代からこっちにいるようなメンバーらに比べると情報は少ない方だろう。そのため何かあるのか尋ねると、全員が答え辛そうにしている。だが、急に順平が大声をあげながら話してきた。

「あーもーっ！！　ラブホだよ、ラブホ！　ラ・ブ・ホ・テ・ルっ」

「「ラブホテル？」」

順平の言った言葉に聞き覚えがなく、揃って聞き返す僕と公子。しかし、他の人は僕らが知らないことに驚いているようだ。

「お前ら、聞いた事がないのか？」

「あ、はい。なんですか、ラブホテルって？」

「その言葉は、あまり口に出さない方がいい。上品なものではないのでな」

真田先輩の質問に答えた公子に冷静に伝える美鶴さん。まだ、少し顔が赤いがなんとか落ち着いたようだ。だが、なんで上品なものじゃないんだ？

「で、それはどんな場所なの？」

「どんな場所ってなぁ……ゆかりッチ、パス」

「はぁっ！？　なんでそんなの女子に説明させようとすんのよっ。ばっかじゃないの！」

「えっと、なんて言うか。現代の連れ込み宿のことをそう言うの」

「「へぇー」」

なんと説明すればいいのか分からないのか、ゆかりに説明を任せる順平。だが、ゆかりはそれに対しかなり怒っている。そんな状態に見ておけなくなったのか風花が説明してくれたが、やっと言い辛そうにしていた理由がわかったよ。

「ふーん。それで顔を赤くしたり言い辛そうにしてたのねぇ…。けど、妄想しすぎじゃない？　私たちがそういう関係だって想像したんでしょう？　まったく、最近の学生は男女関係なく変態が多いのねぇ」

「ちょっ、私まで順平や真田先輩と一緒にしないでよっ！」

「なっ！？　今のは聞き捨てならんぞ岳羽っ。お前は俺を順平なんかと同列に見ているのかっ！」

「えっ？　あ、べ、別にそう言うわけじゃないです。こ、言葉の綾ってやつですよ」

僕が呆れたように言うと、それを聞いて怒るゆかり。だが、密かに真田先輩のことを貶していたため、言われた本人は怒っている。まぁ、一番ショック受けてるのは2人から貶されてる順平だと思うんだけどね。そう思いながら、公子と並んでそれらを見ていると、理事長が会話に参加してきた。

「おいおい、何を妄想してるんだ？　白河通りにあるのは、内装が凝ってるだけの単なるホテルだから。言ってみれば、そう…アミューズメント・ホテル？」

「アレ、そうなんスか？」

「じゃあ、泊まっても大丈夫ねぇ♪」

「「「「（……どれだけ泊まりたいんだ）」」」」

「あ、いまどんだけ泊まりたいんだって思ったでしょう。別に冗談だから本気にしなくていいわよ」

理事長の言葉から泊まっても問題ないなと判断し発言すると、みんなの表情が呆れに変わった。なので、考えてることを推測し冗談だと伝えると、みんなは驚いた顔をしていた。ほんとに分かりやすい人たちだな…。そう思っていると、気を取り直したゆかりが口を開いた。

「なーんか、今回はヤな予感する…。行くのヤメよっかな…」

「まーた、ゆかりッチ。意外なトコ子供なんだから…」

「ちょっ、子供はどっちよ！　オッケー、行こうじゃん。私、今日の作戦は、前線で戦うの予約します！」

順平のからかいに反応しムキになったゆかりは、そう言って右手を軽くあげて皆に宣言する。それを見た順平は「よ、予約制なの？」と戸惑っているが、ゆかりはやる気満々のようだ。

「さぁ、現場の指揮は誰がやるんですか？」

「有理。今まで同様、今回も君だ。それとバックアップは、今回から作戦時も山岸に頼む」

「ん、了解」

「はい、がんばります！」

ゆかりがリーダーを聞くと、案の定、美鶴さんは僕を指名してきた。最近はみんなのスキルアップを図ってたんだから、公子にやらせればいいのに。そう思いながら返事をすると、前線組と風花護衛組にわけることになった。まぁ、前回みたいなことになったら困るからね。

「よし、なら前線に出るメンバーを決めてくれ。人選は任せる」

「そうねぇ…別に誰でもいいんだけど」

「私は絶対行くからね！」

真田先輩に言われメンバーを決めようとすると、絶対に譲らないと視線で語りながら口でも実際に言ってくるゆかり。面白いからからかってみようかな。

「なら、あえてゆかりはパーティから外そうかしら」

「ヤだ。ダメって言われても絶対行くからね！」

「クスクス……そんなに私とホテルに行きたいの？　なら、湊に戻ったら日を改めて連れて行ってあげるわぁ」

「なっ、ち、違うわよ！　なに言ってんのよ、変態っ！」

「はいはい」

そんな風にからかいつつも最後はスルーすると、きちんとメンバー選びに移る。今回はビルなどが並ぶ言わば市街地だ。なら、風花が狙われるとすれば、タルタロスのエントランスよりも乱戦が予想される。じゃあ、実力や属性被りを避けるとオーダーは限られてくるな。

「それじゃあ、前線は私とゆかりと変態2人。風花の護衛は公子と美鶴さんでお願い」

「しゃあっ！　オレ、言ったことないからさ。あーやべぇ、すっげードキドキしてきた！」

「……順平は外そうかしら。なんかすごい不安になって来たわ」

「じゃあ、私と順平トレードで」

「なぁっ!?　いやいや、オレっち頑張るから。公子ッチは風花の方頑張れって！」

変態2人と言ったのに、前線でホテル内へ行けることが嬉しいのか喜ぶ順平。その様子を僕を含めた女性陣がジト目で見ながら、前線から外そうか考えると。公子のトレード志願を必死に阻止しようとしている。まぁ、本気で変えようとは思わないけど、もう少し考えて発言しなよ…。

「はぁ…まぁ、いいわ。とりあえず向かいましょう」

「君たちならきっとやれる。頑張ってきてくれたまえ」

「「「「「「「「「はいっ」」」」」」」」」「はぁーい」

理事長の言葉に返事をすると、僕たちは各自で最後の準備をすると目的地へと向かった。

――ホテル・シャン・ド・フルール１Ｆ客室通路

敵シャドウの反応のある場所までくると確かに反応がある。どうやら今回も2体みたいだな。そんな風に思いながら、前線組とバックアップ＋護衛組に分かれて作戦に移る。

「じゃあ、行きますか。そっちも気を付けて」

「うん。有理ちゃんたちも頑張ってね」

そう言って風花たちはホテル入口で待機し、僕たち４人は中に入り奥を目指す。隊列は先頭が僕、２列目右が順平で左が真田先輩。そして3列目にゆかりというひし形陣形だ。そのまま入口を通過すると変な部屋みたいなのを見つけた。

「ここなんの部屋かしら？」

「さぁ？　喫煙室…じゃないか。３つも並んでるし」

僕が訊くと分からないなりに予想してみるゆかり。しかし、自分でも否定していたが喫煙室ではなさそうだ。じゃあ、一体…。

「待合室かなんかだろう。ここにはロビーの休息所のようなものがないからな」

「へぇ、真田サン詳しいっスね。実は利用したことがあったり？」

「そうか、順平はここでリタイアしたいらしいな」

「や、ヤダなぁ。冗談じゃないっスか…ハ、ハハ」

僕とゆかりが疑問に思っていると、真田先輩が答えてくれた。それを聞いた順平が軽いノリで冗談を言うと、真田先輩は本気の目になってシャドーボクシングを始めた。順平って怒られるのが分かってなんで言うんだろう…。そう思っていると、通信機から連絡が入った。

『3階に大きな反応があります。至急向かってください』

「りょーかい。じゃあ、向かうわよ。まわりに注意してね」

「「「了解」」」

風花からの連絡を受け、本格的に探索を始めることにする。みんなは言われた通り周囲を警戒しているが、別に1階に敵の反応はない。なので、気になったものにはとりあえず近付いてみることにした。

「あ、エレベーターあるわね。前に棺桶あるけど」

「一応、象徴化しているだけで相手は人間だ。あまりモノみたいに言うな」

「どうでもいいわぁ。これ動かないかしら?」

真田先輩の言葉をスルーしながら邪魔な棺桶をどかし、エレベーターのボタンを押してみる。だが、予想通り反応はないみたいだ。機

械が動けば楽に上へ到着できたのになぁ。

「ダメみたいだね。諦めて階段でいこ？」

「そうね。けど、その前にっと」

エレベーターが動かない事が分かると、階段で行こうというゆかり。他に方法もないのでそれに同意すると、上に行く前に近くの部屋のドアを開けてみた。

「お邪魔するわぁ…なんか悪趣味な内装ね。あんまり泊まりたいとは思わないわ」

「いや、オマエ作戦中なんだからもうちょい緊張感持てよ…」

「じゃあ、1階はここしか部屋がないみたいだし上に行きましょう」

順平が呆れたような口調で言ってくるが、どうせ上の敵の実力はおよそ分かっている。この程度なら3人だけでも余裕だろうし、別に中を見て回っても問題ないという判断だ。それを説明するのは面倒だからしないけど、とりあえず言った通り2階へと上がった。

――2F客室通路

2階にあがってすぐくらいの場所に傲慢のマーヤが3体いた。みんなはそれを見て構えたがこんなのに時間を使う暇はないので、走って近付くとブーツのつま先や踵を仮面に叩きこみ蹴り殺した。そんな風に最後の1体が声をあげて消えていくのを確認しながら、みんなの方へ振り返る。

『グララ……』

「はい、終了っと。さ、いきましょう？」

「……これ、オレ達いるんスか？」

「……あれは雑魚だ。大型シャドウのときは俺たちの力が必要になると思え」

「はぁ……了解です」

簡単に敵を倒すのをみて順平が自分たちの必要性に疑問を感じたようだが、先輩がそれを振り払い自分にも言い聞かせながら最後には必要だと言った。先輩も自信がないのが伝わったのかゆかりは溜め息を吐きながらも、返事をする。まぁ、大型シャドウはまかせるので、上に到着するまでは休んでおけばいい。

「先輩の言う通り雑魚なんて相手する必要ないの。出てきたら私が殺っちゃうから、あなた達は体力を温存しておきなさい」

「そ、そうか。じゃあ、本命ではオレっちがばっちり決めるから雑魚は任せるぜっ」

「軽いウォーミングアップぐらいしても良かったが、お前が言うなら仕方ないな」

「じゃあ、進もうか」

僕の言葉を聞いてやや安心した表情になるパーティメンバーたち。それを確認すると、ゆかりに言われた通り進んで行くことにする。

《ガチャ》
「2階は部屋数が多いのね」
「言いながら開けんなよ」
《ガチャ》
「だって気になるんですもの」
部屋の前を通るたびにドアを開けて確認していると、順平がそんな風に突っ込みを入れてくる。だが、気になるんだからしょうがないじゃないか。そう思ってまたドアを開けると、通信が入ってきた。
『標的は3階です！　宿泊客はまだ無事ですが、急いでください！』
「りょーかい」
《ガチャ》
風花からの通信を聞きつつ探索を進めていると、次に開けたドアの部屋にはベッドに乗る2つの棺桶があった。
「うわぁ、ベッドに2つ並んで棺桶が乗ってるのってシュールね」
「そうねぇ。まぁ、先輩はあれを人間だと思ってるらしいから、きっと違う光景に見えてるんでしょうけど」
「そ、そんな訳あるかっ！」
それを見るとゆかりはシュールだと言って複雑そうな顔をしている

ので、さっきの発言を利用して先輩をからかう。この人ってかなり単純だよね。

「そんなに怒らないでいいじゃない。先輩が言ったことよ？」

「俺にも棺桶にしか見えんが、物扱いするなと言っただけだ」

「別に誰も傷つかないし、事実いまはモノ言わぬ棺桶なんだから気にする必要ないじゃない。それを言うなら、シャドウも害獣なり生き物扱いするべきだわ…《ガチャ》…あっ、この部屋は広いのね」

僕が先輩の言ったことに適当に返すと、先輩は「ぐっ…」と言って黙ってしまう。別にそんな真面目に考えなくても…。そう思いながらも探索を続けると今度は嫉妬のクビドが3体出てきた。相手はこちらに気付くとすぐに矢を放ってくる。

「みんなは下がってて…フッ！」

敵が矢を放ってくると、みんなに指示を出し下がらせる。そして、迫ってくる矢の軌道を予測し、全てを掴み取ってやった。これには敵も予想外だったらしく、動揺している。ならば、その隙をついてやる。

「お返しするわ《ヒュッ》」

《《《ズシャッ》》》

『ギュラッ…』『ギャゥ…』『ギュギュ…』

「投げ返して全部が眉間直撃とか……」

「お前、曲芸師になったらどうだ？」

キャッチした矢をそのまま敵に投げ返し眉間を貫くと、敵は変な声をあげながら消えていった。だが他のメンバーは倒したことよりも、倒した方法の方が気になったらしくいろいろ言っている。別にナイフを投げたりもしてるんだから、これぐらい出来るさ。

「馬鹿なこと言ってないで進むわよ」

「「了解…」」

――3F客室通路

2階でクビドを倒すとあらかたの部屋を確認し終えたので、3階へと上がってきた。さっきよりもドアの数が少ないことから、このフロアの部屋は広めの設定らしい。

《ガチャ》

「部屋数が少ないとやっぱり広めねぇ」

『その部屋じゃなさそうです。そのフロアに大きな部屋はありますか？　標的はそこに居るようです』

「あぁ、場所は寮に居る時点で分かってるから大丈夫よ」

『え？　えぇっ！？』

僕が部屋の内装をチェックしていると風花が連絡してきたので、最初から分かってることを伝えると何故か驚いている。その理由を考えていると、さらに通信してきた。

『わかってるなら、なんで行かないのっ。ていうか、私ずっと有理ちゃんに3階だって言ってるのに違うフロアの探索してるし！』

「え？　だって気になるでしょう？　ていうか、風花は私が気配探査できること知らなかったの？」

『き、聞いてないよう！』

「そうね、別に言った覚えもないし。まぁ、最近だと風花のアナライズで感覚を覚えたから、敵の弱点も分かるようになってきたわよ」

風花が僕に対し怒ってくるが、風花や美鶴さんと似た能力を持っていることを教えると何やら戸惑っている。そこにさらに新能力の情報を与えると、通信機からは『わ、私の存在意義って…』という呟きが聞こえてくる。別に僕以外のメンバーには必要な存在だと思うんだけど。そう思っていると、通信機から別の声が聞こえてきた。

『有理ちゃーん。風花が落ち込んで暗黒面に堕ちかけてるんだけどー』

「…知らないわよ。他のメンバーにとっては必要な存在なんだからそれで良いじゃない」

『うぅ…私って有理ちゃんには必要ないの？』

「能力は別に必要ないけど、友達なんだから風花自体は必要よ」

『っ！？　そ、そう？　えへへ、そっか友達だもんね♪』

公子からの通信で風花が落ち込んでいることを知らされるが、前線の人間にバックアップの人間のメンタルケアを依頼するのはどうだろうか？だがまぁ、必要だと答えると風花はなにやら嬉しそうにしている。立ち直ったなら良かったが、それならちゃんと作戦に取り組んでくれ…。

『けど、通信でそっちの会話聞いてると、銀髪の有理ちゃんは湊君よりもSだよね』

「というか、寮生だと私以外はMしかいないじゃない。まぁ、女子はSっぽさも持ってるけど」

「いや、オマエがドSだから他がMに見えんだよ。オレたちはいたってノーマルだ」

公子の言葉に僕が言い返すと、呆れたように言ってくる順平。他の者も同じように思ったのか、前線組だけでなく通信機からも「うんうん」と言う同意の声が聞こえてくる。僕もだけど緊張感ないなぁ。

「くだらないこと言ってんじゃないわよ。そろそろ本命との戦いよ」

『そうですね。その扉の向こうに巨大なシャドウ反応を感じます！　準備はいいですか？』

「ああ、大丈夫だ」

「いつでもオッケーだよ」

「いっちょ気合いれるかっ！」

すぐに大型シャドウとの戦いになることを告げると、風花から確認の言葉がかかる。メンバーたちはその言葉で切り変えたのか、戦う時の表情で返事をした。それを確認すると僕たちは敵の部屋へと突入した。

――法皇の間

ホテル・シャン・ド・フルールの最奥の部屋“法皇の間”。そこへ突入すると、今回の大型シャドウがいた。太った男が椅子に座り女性のような身体をしたものに頭や首を撫でられ、その椅子の前に式神に使う式札のようなものが2体いる。

「こいつがボス？　…何よ、結構マトモじゃない」

敵をみたゆかりがそう言うが、これが今回のシャドウか？けど、目の前の敵からは1体の反応しか感じない。つまり、後ろの女性の部分も2体の式札もあいつの一部ということだろう。もう1体は……いた、鏡の中に潜んでる。けど、鏡を割ったところで倒せなさそうだ。なら、まずは目の前の敵を片付ける。

『皆さん、準備を！　来ます！！』

『ギュラァアアア！！』

風花がそう言うと敵は雄叫びをあげた。向こうもやる気ということだろう。

『敵“法皇”タイプです。気を付けて』

「構えてっ。先輩は撹乱しつつ接近、ゆかりと私でフォローする

から、順平はそれに合わせて接近して攻撃しなさい」

「「「了解ッ！」」」

僕が指示をすると、最初に近接の二人が左右に別れた。ゆかりはそれを見つつ、敵に向け矢を放ち注意を向ける。

「はぁっ！」

「ゆかりはそのまま続けて、ただし壁との距離に注意。逃げ場は常に意識してっ。Ｃａｌｌ！　マハスクカジャ！《ダン！》」

矢を放っているゆかりに更に指示を出すと、今度は僕が補助をするためカードを腕輪から取り出し上へと投げる。そして、それをそのまま撃ち抜くと発生した光が僕たち４人へと分かれてそれぞれを包む。マハスクカジャの効果は味方の回避・命中を一定時間あげることだ。その効果を受けると、近接２人は速度をあげて近付く。

「くらえっ！　どっりゃあ！」

「後ろがガラ空きだっ！」

《ザシュン！》《ドンッ！》

『ギュラァアアア！！』

椅子に座ったまま特に反応を見せない敵に順平と真田先輩が攻撃すると、敵はダメージが効いているのか、叫んでいる。そのまま順平は次の攻撃を喰らわせようと剣を振りかぶるが、敵が動きを見せた。

『ギャァアアアス！！』

「っ！？　魔法がくるわっ。攻撃中止、回避に専念！」

《ザザーンッ！》

「がぁっ！！」

「「順平っ！？」」

敵の攻撃の余波を察知し回避命令を出すが。攻撃モーションに移っていた順平は回避が間に合わず、近距離で敵の雷魔法を受けてしまった。こちらにも雷がきていることと威力から予測するにマハジオンガだろう。攻撃を受けた事で壁際まで飛ばされたことがせめてもの救いか、順平の救出と回復は場所の近いゆかりに任せることにする。

「ゆかり、順平の回復をお願い。私は先輩のバックアップに回るわ」

「了解ッ」

ゆかりは短く返事をすると、雷が治まるのを待って順平の元へと向かった。あっちはこれで良いとして、今度はこっちだな…。

「出なさい、黒紅《シュン》…ハァッ！！」

順平の救出を指示し終わると、今度は1人で敵の注意を引いている真田先輩のフォローにはいる。丁度いいことに敵は先輩の方を向いていたので、横っ腹目がけて魔力の矢を放った。

《ズシュンッ》
『ギュラァアアア！！』
「先輩、敵腹部に亀裂を入れたからそこを狙って！」
「わかったっ。出ろ、ポリデュークス！　ソニックパンチだ！」
結構な魔力を籠めて作った魔力の矢を放つと、それはシャドウの横っ腹に直撃し亀裂を作った。そこが狙い目だと先輩に指示を出すと、先輩は召喚器をこめかみにあてペルソナを召喚した。そして召喚されたポリデュークスはそのまま相手に渾身の右ストレートを放つ。
『フッ！』
『ギャァアオ！』
《《ドゴンッ！！》》
ポリデュークスが攻撃しようとすると、敵もそれに気付き椅子のままペルソナの方へ突進した。そしてポリデュークスの拳とシャドウの頭突きがぶつかり合い、部屋内に衝突の衝撃が伝わる。先輩はそれを見て悔しそうな顔をしているが何をしているんだ。
「馬鹿っ、ボディがガラ空きでしょうが！」
「っ！？　そのまま止めておけ、ポリデュークスっ。はぁあああああっ！！」
《ダダダダッ！》
アホのように突っ立っている先輩に攻撃の指示を出すと、先輩はペ

ルソナに敵を押さえさせたままラッシュのように拳を繰り出した。

『ギュラァアアア！！』

「フィニッシュだッ！！　ハァアッ！！」

《ドゴンッ！！》

『ギュウウウ……』

そして、出来ていた亀裂はそのラッシュに耐えきれず、まわりごとひび割れていった。そのあまりのダメージに敵は暴れようとするが、メンバーのペルソナ内でも力の強いポリデュークスが押さえていては動く事ができない。そして、先輩が強く踏み込み渾身のストレートを放つとそれは敵の身体を貫き、シャドウはもやのようになって消えた。

『おつかれさまでした。今回も無事、倒すことができて本当に良かったです。こちらで待ってます。帰還してください』

「ふぅ、今回のはあっさりしてたな…」

「アホみたいに突っ立ってたくせに何言ってるのよ」

「くっ……だが、ちゃんと倒したんだ。結果オーライだ」

風花からの通信が入り、先輩が安心したように言っていたので注意する。だが相手は少し悔しそうな表情をするとすぐに開き直った。こやつめ…そう思っていると、治療が完了したのかゆかりと順平が歩いてきた。

「お疲れ様です」

「まぁ、なんとかな。順平は大丈夫か？」

「はい。ゆかりッチに治療してもらったんで大丈夫っス…」

やってきたゆかりが労いの言葉をかけると、アホは苦笑しながら返事をし順平の調子を聞いた。それに順平も返事をするが、少々気落ちしているようだ。

「じゃ、帰ろっか？」

「え？　ちょっと」

今回の作戦が終了したと思ったのか、ゆかりはそう言うと僕の制止を聞かずに扉へと向かった。他の者もそれに続いて帰ろうとしている。だが…

「あれ？　扉が開かない」

『…！　そんな…なぜ？　部屋にまだシャドウの反応があります！　さっき倒したのとは別のシャドウです！　どこ…どこにいるの？』

「え、マジ、どこにいるの？」

「あ？　どこにもいねえぞ…」

「どこだ、探せ！」

ゆかりが扉が開かないと言うと、通信機に連絡が入りもう1体の反応があると言ってくる風花。他のメンバーはそれに驚いているが、どこにいるか分からないようだ。しょうがないので、僕が鏡の方へ近付くと、他の者もみてきてゆかりが何かに気付き呟いた。

「あれ…この鏡、何か変じゃない？」

《パァア……》

ゆかりがそう呟くと僕たちは光りに包まれ意識を失った……。

第三十四話　前編（後書き）

後編に続きます。

第三十四話　後編（前書き）

前編の続きになります。一応、この章のメインイベントのシャワーシーンとかを頑張って書いてみたんですが、どうにも上手く書けませんでした……。

第三十四話　後編

――とあるホテルの一室　{Ｎｏ　Ｓｉｄｅ}

《シャー…》

「フンフンフーン♪」

とあるホテルの一室でその人物はシャワーを浴びていた。それはこの後のため身を清めているのである。鼻歌を歌いながら髪を洗い、身体を清めていく。その身体は日ごろから部活で運動をしているためか、とても引き締まってる。だが、筋肉質というわけではなく、無駄のない身体と言った方が正しいだろう。

《キュッキュ》

「よし」

そう言いながらシャワーを止めると、身体の水を多少きって洗面所へと出ていく。そしてすぐ横にかかっているタオルを取ると丹念に身体拭き始める。そうして拭いていると、目の前にある大きな鏡が目に入った。

「変なとこないかな？」

鏡に映った自分の身体をみて思わずそう呟いてしまう。いままで共同浴場などで友達に身体を見られたことはあった。しかし、この後のことは違う。友達ではなく恋人に自分の身体を見せるのだ。おかしいところがないか注意してみていく。

本人は気付いていないが。その引きしまった身体は、異性は勿論、同性であっても思わず見てしまうような見事なものだ。だが、この

ような事は初めてのため、自信がなくなるのも無理は無い。とはいえ、いつまでもベッドにいる相手を待たせている訳にもいかない。髪を乾かすと、バスローブを羽織り意を決してベッドルームへと入る。

《ガチャ》

「お、お待たせ…」

恥ずかしさから顔を赤くし、そう言いながらベッドルームに向かうと。相手は毛布を胸の下までかけてベッドに寝ころがっていた。毛布の下は分からないが、上半身はすでに服を脱いでいる。いつも一緒に戦っているが、生身の身体を見るのは初めてなため思わず頬が熱くなる。

まわりが見ればその容姿から同性のように見えるだろうが、恥ずかしさを覚えつつもベッドに向かい相手の銀髪を指で梳いてみる。

「サラサラしてる…っわ!?」

その髪の感触を楽しんでいると、急に相手がその腕をとり組み伏せてきた。突然のことで驚くが、下はベッドなため痛みや怪我はとくにない。そんな風に思いながらも驚いていると、相手が口を開いた。

「もう、我慢できない…」

「えっ…うん」

普段はあまり見ない相手の真剣な表情でそんな事を言われ驚いてしまうが、その人物はその相手の気持ちを肯定し受け入れる返事をする。相手はそれを聞くと笑顔になってから目を瞑り顔を近づけてき

た。それを見ると自分も同じく目を瞑り顔を近づけていく。そうしてもうすぐ2人の距離がゼロになりそうなとき、それは起きた。

《パキュンッ》

「ん……？　うわっ！　な、な、なな何だこれは!?　どういうことだ!?」

「へ……？　え、ちょ、何っ!?　オレ、え、何脱いじゃってんの!?」

突然、謎の音が聞こえ光りに包まれたかと思うと。その2人、真田と順平は意識を取り戻し自分たちの状況に混乱する。

「ちょ、真田サンなんで裸でオレのこと押し倒してんスかっ！」

「し、知らんっ！　俺だって何がなんだかっ」

改めて自分と相手の状態を見てみると、自分が裸の真田に押し倒されていることに気付き声をあげる順平。真田も言われて気付き離れるが、自分は服を脱いだ覚えも順平を押し倒した覚えもない。というより、お互いに自分はノーマルだと思っているため、そもそもこんな状態になる理由がわからないのである。だが、さらに悲劇は続く。

《ガチャンッ！》

「2人とも、大丈夫か！」

「先輩、順平、大丈夫っ!?」

「「…は?」」

「「…え？」」

「「キャーーー！！」」「「うわぁーーー！！」」

真田と順平が現状を把握しようとしていると、突如部屋のドアが開き美鶴と公子が入ってきた。入ってきた2人は心配して現れたみたいだが、バスローブの前をはだけている順平と毛布で下半身は見えないが床に上着とズボンが落ちていることから、下着1枚と思われる真田を見て硬直する。一方、混乱しているときに突然の来訪者がきた2人もそちらを見て固まっていると、お互いの状況がわかり大声をあげてしまった。

「き、貴様らは作戦行動中に何をしているんだっ！　そ、そ、そ、それも男同士で！」

「ご、誤解だっ！　気が付いたらこんな状況でッ」

「とりあえず、服を着てくださいっ！！」

「あ、ああ、そうだな、そうだな！！」

《ガチャン》

真田たちに服を着ろと言うと、美鶴と公子は部屋を出ていった。そして、言われた2人もとりあえず急いで服を着ることにした…。

――101号室　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

鏡を見た後、光りに包まれると知らない場所にいた。いや、ここはどうやらホテル内の一室のようだ。内装から判断すると101号室

であることがわかる。各部屋をチェックしといて良かった。

「さて、どうなったのかしら？」

《シャアー……》

…？現状を把握しようとすると、バスルームから水音が聞こえた。シャワーの流れる音だけでなく、時折バシャバシャという水を弾く音も聞こえることから誰かが利用している最中なのだろう。そう思っていると、突然頭に不思議な声が聞こえてきた。

『享楽せよ…』

「享楽？」

『我、汝が心の声なり…。今を享楽せよ…。見えざるものは幻…形ある“今”だけが真実…』

その声が誰の者かは分からないが、どうやら僕をシャワーの相手とどうかさせたいみたいだ。まぁ、シャワーを浴びてるのは気配からゆかりって分かってるけどね。

『未来など幻想、記憶など虚構…。欲するまま、束縛から解き放たれよ…汝、それを望む者なり…』

「欲するままねぇ…」

『汝、真に求むるは快楽なり。汝、今まさに快楽の扉の前にあり。本心に耳を傾けよ…汝、享楽せよ…』

「今はいいわぁ」

声の主はなにやら必死に言ってくるが。いまはそんな気分じゃないし、なによりそんな事でゆかりを傷つけたくない。なので拒否すると相手はまだ話しかけてくる。

『なぜに抗う…真実から目を背けてはならない…』

「はぁ…しつこいわね。言っておくと私にそんな事言っても無駄よ。他の子と違って私は状態異常にかからない体質だから」

『う……あ……』

「はいはい、さようなら」

混乱か悩殺か分からないが、状態異常を仕掛けている相手にそういうと相手の気配が消えていった。ま、相手が悪かったね。そう思いながら、とりあえず他のメンバーの位置を確認する。っ!?順平と真田先輩がかなり危険な状態だ。そう思い白金の腕輪からカードを1枚取り出し召喚器で撃ち抜く。

「Ｃａｌｌ…アムリタ《ダン！》」

《パキュンッ》

アムリタのカードを召喚器で撃ち抜き発動すると、光が周囲に拡がっていった。これで味方全体の状態異常は回復する。さっきのが何の効果かわからないけど、きっと大丈夫だろう。そう思いながら、悪戯を思いつき通信機に呼びかける。

「風花、聞こえるっ!?」

『有理ちゃん！　やっと通じた、そんなに慌ててどうしたの？　なにかあったの？』

「公子、美鶴さんっ。先輩と順平が危ないわ、急いで２０２号室へ向かって頂戴！」

『『分かった！　任せて！（任せろ！）』』

僕が急いで連絡するとすぐに２人は２０２号室へ向かってくれたみたいだ。フフッ、あとでどうなったか聞いてみよっと。そう思っていると、シャワーを止める音が聞こえた。

《キュッキュッ……ガラガラ》

そうして、こちらのバスルームが見えるガラスからゆかりの姿が消えると、脱衣所兼洗面所の方から物音がする。どうやら身体を拭いたりしてるみたいだな。すぐに出てこられても困るし、ドアをノックして湊として向こうに話しかける。

「ゆかり、聞こえる？」

『え？　湊君？　ちょっ、いまダメ！　絶対ダメ！　開けたら本気で怒るから！』

「いや、開けないけど…。じゃあ、準備できたら出てきてね」

『わ、わかったっ。なるべく急ぐから、ちょっと待ってて！』

ノックして話しかけると、ゆかりはかなり焦ったように入室を拒否

してきた。どうやら男の声で言って正解だったみたいだな。ドアから離れベッドに腰掛けながらそう思っていると、ドライヤーの音が止みドアが開いた。

《ガチャン》

「お、お待たせっ」

「クスクス…正気は取り戻してるみたいね。どう？　戦闘後のシャワーは気持ち良かった？」

「なっ…すぐそういう意地悪いう。別に自分の意思でシャワー浴びたわけじゃないわよ」

出てきたゆかりをからかうと拗ねたように言いながら、ゆかりも僕に近付いてくる。なので、一応フォロー（？）を入れておく。

「でも、ドライヤーも動いて良かったわね」

「まぁね。そこはシャドウに感謝かな」

「フフッ、お風呂上がりだから石鹸の匂いがするわ」

「ちょ、変な事言わないでよっ！」

そんな風にゆかりの反応を楽しみながら周囲の気配を探っていると、通信機に連絡が入った。

『2人とも、聞こえますか？』

「うん、聞こえるよ」

『フォローが遅れてごめんなさい…。シャドウの精神攻撃のせいで、呼びかけが届かなくて…。飛ばされたのもシャドウの仕業です。おかげで、みんな分断されてて…。敵の位置は、さっきと同じ部屋です。急いでもう1度集合してください』

風花からの通信にゆかりが答えると、風花がいまの状況を伝えてくる。確かに分断されてるままだと、上の2人が心配だな。そう思っていると、通信機から大きな声が聞こえてきた。

『ちょっと、湊君ひどいじゃん！　なんてモノ見せてんのよ！』

『そうだぞ、湊！　いかに君と言えど、今回の事は悪戯が過ぎるっ。寮に戻ったら、罰を与えるからそのつもりでいろ！』

『え…何かあったの？』

『『風花（君）は気にしなくていい！』』

『は、はい！』

どうやら上に行かせた公子と美鶴さんは、とてもおぞましい光景を見たらしく僕に怒ってくる。けど、色んな意味で危険だったんだから間違いじゃないと思うんだけどな…。そう思っていると、ゆかりが呆れた表情で僕を見ていたので、近付き足を払ってベッドに寝かせる。

「きゃっ！？」

「ねぇ、ゆかり。貴女、シャワーを浴びて何をするつもりだった

の？」

「な、なにって別にっ。ていうか、敵がいるのに何してんのっ！」

「静かに…ちょっとした悪戯だから」

僕はそう言いながら仰向けに寝るゆかりに覆いかぶさるようにして首のチョーカーを外す。相手はそれに焦って抜けだそうとするが、以前似たような状況になったときですら抜け出せなかったのだ。あの頃よりもさらに力が上がっているのに抜けだせるはずがない。

「綺麗ね…《チュッ》」

「やっ…なん…で、首に…キ、キス……してるの？」

「《チュ…》だから、ちょっとした悪戯って言ってるでしょう？気になるなら鏡で見てきたら？」

「？？」

行動の意味がわからず混乱しているゆかりを開放すると、そう言って洗面所の方へ案内する。ゆかりも気になるのか、チョーカーを回収せずに入っていった。なので、戻ってくる前に魔力を通しておく。それが完了すると同時にゆかりが大声を出しながら戻ってきた。

「なななな、なんて事してくれてんのよ！　思いっきりキスマーク付いてるじゃない！」

「だから悪戯って言ったでしょう？　別に普段はチョーカーでギリギリ隠れる場所だから大丈夫よ」

「なら、チョーカー返し《シュンッ》はぁ!?　ちょ、いま何したの!?　てか、人の物どこにやったのよ!」

「腕輪に仕舞っただけよ、後で返すから安心して。じゃあ、順平たちと合流しましょうか」

僕はタイミングを計ってゆかりのチョーカーを腕輪に入れると、相手は驚きながら怒ってくる。けど、殴られたところで痛くないので、ギャーギャー騒ぐゆかりを無視して部屋を出た。

――1F客室通路

いつまでも騒いで五月蝿いのでチョーカーを出して返してやると、怒りながらもいそいそと首に巻くゆかり。まぁ、手をかざして念じれば付けたままで収納可能なんだけどね。そう思いながら部屋出て歩き始めると、再び通信機に連絡が入った。

『すみません、もう1体いるなんて…予想してなかったです。シャドウの力はこの建物全体に及んでいるようです。本体はさっきの部屋にあるんですが…入口に結界が張られており、今のままでは手出しできません。こっちは結界を解除する方法を探ってみます。そちらは他のメンバーと合流してください。他のみんなは上の階にいるはずです』

「了解。ホラ!　さっさと行くよ!　次やったら…ゼッコーだからね」

「そうなったら引き籠るから良いわよ。飲食せずにゆかり以外の誰も部屋にいれなくして、自分の死を待つから」

「あっ、それズルイ。それじゃあ、私が悪いみたいじゃない」

「家族って言ったくせに口きかないなんて言うから悪いのよ。言っておくけど、私が状態異常解除しなかったら、貴女は裸同然で私の前に出てきてたのよ？　そうなったら傷つくだろうと思って急いで解除したのにお礼も無しなんて」

風花の通信が切れるやいなや、僕に向かって怒りながら『次はゼッコー』宣言してくるゆかり。それに対して僕にも考えがあると言うと、どっちが悪いと思っているんだという目で見てきた。なので、こちらの頑張りを伝える事で相手の罪悪感を煽る作戦に切り替える。その効果は覿面らしくゆかりはしょぼんとしながら口を開いた。

「あー…それは本当にありがとう。でもさ、ああいうのって普通は恋人同士が愛し合ってるうちに出来るものでしょ？　なのに、悪戯で付けるなんてひどいじゃん」

「じゃあ、私が恋人になれば許すの？」

「え？　えぇっ!?　ち、ちがっ。そういう意味じゃっ」

「ゆーかーりーッ!!　とりゃー!!」

「うわっ!?」

「きゃーっ《ゴカンッ》」

感謝はしてるがそっちも悪いでしょ？と言ってくるゆかりに、ならば前提条件を今から合わせれば良いのか尋ねる。すると、それを言われたゆかりはかなり動揺するが、なんと入口にいるはずの公子が

走って飛び蹴りを放ってきた。狙いはゆかりのようなので、抱き寄せ軽く身体を捻ってかわすと公子は着地に失敗し転がり壁に激突する。

「はぁ…カデンツァ《パァ…》」

「痛たた…ありがとう、有理ちゃん」

その音からかなりダメージを負ったようなので、カデンツァの魔石を取り出して発動してやると公子は痛がりながらも復活してきた。なので、狙われた本人が公子に向かって尋ねる。

「なんで公子は私に向かって蹴りかましてきたの？」

「そうそれだよ！　なんで湊君と恋人になるとかって話ししてんの！」

「物の例えで言ってただけよ。ていうか、よく入口にいて聞こえたわね…」

「まぁ、それだけ私の愛がゆかりより強いってことだね！」

「「違うでしょ…」」

そんな風に僕たちは公子に呆れながら階段まで行くと、公子と別れ順平たちと合流するため上へ向かった。

――２Ｆ客室通路

２階に上がり少し進むと疲れた表情で２人が立っていた。相手もこちらに気付き近付いてきたので、出会いがしらにお決まりのセリフ

を言っておく。

「クスクス…昨夜はお楽しみでしたね」

「「んなわけあるかっ！」」

僕が2人に向かって某ＲＰＧの伝説のセリフを言うと、揃って否定してきた。だがまぁ、こっちは気配を読んだときに、2人がヤバいとこまでいきかけていたのを知ってるんだけどね。そのことは後でからかうネタにしようと密かに思っていると、順平が気を取り直して話しかけてきた。

「ったく、もう1体いるなんて聞いてねえぞ…。…っつうか、オマエら、大丈夫だったか？」

「だ、大丈夫よ。特になにも何にもありませんでしたから！」

「で、そっちは？」

「あ？　何もある訳ないだろ！」

心配してきた順平にゆかりが焦りながら答え、今度は僕が聞き返すと真田先輩が怒って返してきた。ふーん……僕のおかげで色々と無事だったのにそんな態度とるんだ。そう思い、後ろからゆかりに抱きつき、耳元で話しかける。

「ねぇ、ゆかり…」

「えっ！？　ちょ、なんで抱きついてんの？」

「いいからいいから。でね、先輩と順平ったらあと数センチで「うわぁー！！」」……キスしてたのよ」

「うわぁ……」

僕の言葉をかき消すように2人は慌てて大声を出したが、僕はそれが途切れるタイミング狙ってばらしてやった。すると、ゆかりは目の前に立っている2人に汚いものを見るような視線を送り、僕の方へ体重をかけて離れようとする。

「ま、待て岳羽っ、そんな目で見るなっ！　それは敵に操られていた上に、未遂だっ。俺はこんなやつとキスしていないっ」

「はぁ！？　こんなやつ呼ばわりとか、裸で人のこと押し倒してたくせに、ふざけないでくださいよ！」

「お前は余計な事をいうなっ！　さらに冷たい目になっただろうがっ」

「自分が言ってきたくせに人のせいにしてくるとか、後輩に対して先輩のすることじゃねぇっスよ！」

目の前でそんな言い合いを始めた2人が本当に気持ち悪いらしく、ゆかりはどんどん僕に体重をかけて距離を取ろうとしている。そんなゆかりを可哀想に思い頭を撫でていると、順平がこっちに話題を飛ばしてきた。

「つか、そっちも本当はどうだったんだよ？　オレらと一緒で結構危険なとこまでいったんじゃねえのか？　それなら人のことばっか責められねえだろ」

「別に何もないわよ。有理が解除魔法使ってくれたもの……っ！？」

「ていうか、2人がギリギリで意識取り戻したのは私のおかげよ？　危険と判断して急いで解除してあげたんだから」

ゆかりは順平の言葉にアホかといった感じで返すので、キスした場所をチョーカー越しに撫でながら2人に言う。撫でられている間、ゆかりは身体をピンとさせ動けないでいる。そんな様子を楽しんでいると、少し怒った口調の通信が入った。

『分かりました“鏡”です！　このホテルにある鏡から本体と同じ反応が感じられます！　たぶん、この鏡を壊せば結界が解けるはずですよ』

「そういえばあの時、鏡が変だった気が…あれ、何でそう思ったんだっけ？　確か、鏡の前に立った時に変に感じた記憶はあるんだけど…」

「それはいいけど、なんで風花は怒ってるの？」

『別に怒ってないよっ。人が頑張って調べてるのに、呑気に話してる人になんて怒ったりしないもんっ』

風花の口調の原因をきくと、怒っていないと言いながら自分で説明する風花。みんなも言われて気付いたのか、ばつの悪そうな顔をしている。さて、話も終わったし言われた通り探しますか。

「じゃあ、とりあえず探しましょうか。まずは一番近い部屋から

…」

「待てっ！　そこはなにもないぞ」

「そうだぜ、湊。絶対にその部屋だけはないから別のところにしようぜ！」

「なんで2人はそんな事わかるの？」

目標の鏡を探すため一番近い部屋である２０２号室へ入ろうとすると、先輩と順平に肩を掴まれた。すると、ゆかりが2人にその部屋がシロだとわかる理由を尋ねた。２人は答え辛そうにしているが、まぁ自分たちがいた部屋だしね。もう入りたくないのだろう。なら、別の部屋にするか…。

「じゃあ、下からにしましょう」

「え？　ちょ、ま「「了解ッ」」えぇ…」

こういうのは下からやるものだよね、という事で1階か調べる事を提案するとゆかりが嫌がったが、先輩と順平はすぐに返事をした。なので、ゆかりの意志を無視しつつ僕たちがいた部屋へと戻ることにした。

――１０１号室

部屋に入ると先輩と順平は辺りをキョロキョロと見まわした。何か異変がないかを確かめているのだろう、安全だとわかると普通に部屋内へと入っていく。

「とくになにもねえよな？」

「だな、鏡も普通の物と変わらん」

「はぁ…調べたなら次行きましょうよ」

部屋の大きな鏡を調べ終えると、この部屋が嫌なのか早く出たがるゆかり。なので、ちょっとしたサプライズを用意して元気を出させてやる。

『ゆかり〜』

「ん？　あれ？　有理なんでそっちに……っ！？」

ベッドルームにいるゆかりへガラス越しにバスルームから手を振ると、ゆかりは僕がこっちにいる理由が気になったようだ。だが、少し間をおくと途端に表情を驚き恥じらい怒りと豹変させていく。まぁ、予想通りだけどね。そう思いながらバスルームを出て部屋の入口に向かうと怒りに身体を震わせたゆかりが口を開いた。

「あ、あ、あ、あ、あ、あんた人がシャワー浴びてるの見たのね！」

「なんの事かしら？　じゃあ、私は鏡壊してくるから皆はボスの部屋の前に行っといて。それじゃあね《ガチャン》」

「待てゴラァー！！《ガチャン》」

そんな風に僕が部屋から逃走すると、ゆかりは矢を乱射しながら追って来た。部屋には2人の変態が残される。

「湊のやつ…くそっ、オレは男が相手だったってのに」

「黙れ。お前だけがそう思っていると思うなよ？」

「ああ、真田サンもやっぱ羨ましくはあるんスね…」

「う、五月蝿い。男なら誰でもそう思うだろうがっ。いいからさっさと3階に行っておくぞ」

「了解っス」

順平と先輩はそんな風に会話すると、僕に言われた通り法皇の間の前へと向かった…。

――3F客室通路

鏡を壊し終え、ドアの前にいる2人と合流した僕たちは、風花からの通信を待っている。けど、軽く視線を後ろにいるゆかりに向けると、凄い形相でこちらを睨んでいる…。軽いジョークなのにそんな怒る事ないじゃないか。

『本体のいる部屋の扉を閉ざしている結界の力が消えました！これで本体と戦えるはずです』

「これでようやくメインイベントだ」

「今度こそバシッっと決めてやる！」

『この先に本体がいます！　準備はいいですか？』

「大丈夫よ。じゃあ、いくわ」

風花の通信に答えると僕たちは部屋へと侵入した。

――法皇の間

ホテル・シャン・ド・フルールの最奥にある法皇の間に入ると、先ほどまで鏡に潜んでいた気配の主が部屋の中央に現れていた。その姿は羽根の生えたハートの器といった感じか。その器の中には金星と火星を表すマークが浮いている…いや、金星と火星っていうより、雌と雄か。とりあえず、なんでもいいが♀と♂が浮いている。

「ったく、コイツ！！　乙女の心を弄んだ罪は重いんだから！」

「おかしな真似しやがって…死ぬ準備は出来てるだろうな！？」

「ハズカシー真似させんじゃねーよ！　今からぶっ飛ばしてやっからな！！」

僕が指示を出す前にすでに3人はやる気満々らしい。はぁ…じゃあ、今回は好きにやらせるか。そう思い、補助カードを用意し始めると通信が入る。

『このシャドウが、精神攻撃の元凶です！　今度こそ、いけます！　皆さん、頑張ってください！』

「ＯＫ。じゃあ、超攻撃型でいくわ。補助は全部私がやるから好きにやっちゃって」

「「「おうっ！！」」」

「了解でしょ……Ｃａｌｌ！　マハタルカジャ《ダン！》」

もはや、作戦すらまともに聞いているか怪しい3人に指示をすると、好きにやれという部分だけ聞こえたのか返事をした。だが、ゆかりまで漢らしく返事しなくても…。そう思いながらも、マハタルカジャを発動し全員の攻撃力をあげてやる。

全員に魔法の光が届き効果が付加されると、敵が動く前に全員が動き出した。

「イオ！　ガルーラでふっ飛ばしなさい！」

「ぶち抜け、ポリデュークス！　ソニックパンチ！」

「やっちまえヘルメス！　キルラッシュ！」

『『『ラァーッ！！』』』

3人は攻撃力が上がると同時にペルソナを召喚し、敵に突っ込ませた。最初にゆかりのガルーラで敵が体勢を崩すと、先輩のソニックパンチという名のアッパーで敵は天井にぶつかる。さらに落ちてきたところを順平のキルラッシュでボコボコに殴った。

これもはや戦闘じゃないよ…。そう思ったが、敵は攻撃から解放されると再び浮き上がり、こっちに向かって攻撃してくる。どうやら魔法のようだな。

『ルゥアアアア！！』

「Ｃａｌｌ！　マハブフーラッ《ダン！》」

《《シューッ！！》》

敵の放つ攻撃を先読みし、マハブフーラのカードを撃ち抜き放つと。僅かに遅れて敵が放ったマハラギオンと衝突し蒸気を出しながら相殺し合う。その間に3人は迂回して、敵に接近していた。

「死になさい！《シュンッ》」

「滅びろッ《ドゴン！》」

「うらぁあっ！《ザシュンッ》」

『ルゥラアアアア！！』

僕と魔法合戦をしていた敵は、魔法を放ち終えた隙に貫通・打撃・斬撃の総攻撃を受けた。敵に視界が存在するかは分からないが、蒸気で視界も悪いし避けられるはずもなく直撃し落下する。そして、キレているメンバーらがそんなチャンスを見逃すはずがない。

「いくぞっ、総攻撃だっ！」

「「了解ッ」」

「「「はぁあああああっ！！」」」

《ドカッ》《バキッ》《ドゴッ》《ズシャッ》

僕が指揮のはずなのに先輩が声をかけると、3人は突っ込み総攻撃をしかけた。先輩はわかるが、ゆかりと順平は武器を放り出して拳と蹴りで攻撃している。どんだけ恨みがあるんだよ…。途中に「死ね、おらぁ！」「調子乗ってんじゃねえぞ！」「さっさと消えろっ」

と聞こえてくるが気のせいだと信じたい。特に最初のセリフがどう聞いても女子の声だったあたり。

『ウラァアア……』

「あ、終わりねぇ……」

そんな風にかなり一方的な展開で攻めていると、いかに大型シャドウと言えど耐えきれる訳もなく消えていった。攻撃していた3人はそれを確認しつつ武器などを拾ってこっちに戻ってくると、つまらなそうな顔をしている。きっとやり足りなかったんだろうな…。

「3人ともお疲れぇ」

「フンッ、今回のは雑魚だったな。この程度では全く気が治まらん」

「ホントですよ。てか、湊君は寮に帰ったらちょっとお話ししようね。有理じゃなくて、湊君に用があるから」

「あ、はい…」

「んじゃ、こんなとこからさっさと出ようぜ」

やけに不満げなメンバーたちに声をかけると、案の定やり足りなかったみたいだ。もう1体いくかっ！といえば、喜んで参加してきそうである。そんなくだらない事を考えながらも順平の言った通り外へ出ることにした。

――ホテル・シャン・ド・フルール　玄関

「皆さん、お疲れ様でした」

敵を倒してホテルの外に出ると、そういって風花が出迎えてくれた。
僕らもそれぞれ挨拶を返すと美鶴さんが口を開いた。

「上出来だ。トリッキーな敵だったが、助かった」

「ありがとうございますっ」

1体目はともかく2体目の結界などの見破り、解決法を見つけた風花を褒める美鶴さん。それが嬉しいのか、風花はとても良い笑顔になっている。

「それと君もな、有理。よく惑わされず、立て直した」

「まぁ、私は状態異常になりませんし」

「よし、なら解散だな」

「そうだな。君たちも遅くなる前に帰れよ。それじゃあ」

そういうと真田先輩と美鶴さんは去って行った…。残された僕たちも帰ろうとすると、風花が公子とゆかりに何か話している。

「そうだ、2人とも。あの…この前、頼まれた事だけど…」

「どうだった?」

「うまくいった?」

「う、うん」

「分かった、後で聞かせて」

どうやらこの前の作戦室での内緒話のことらしい。まぁ、別に干渉するつもりはないので、放っておこう。そう思っていると、背伸びをしてからゆかりがみんなに声をかけた。

「よーし、私たちも戻りましょ？　今日は風花も大活躍だし、大勝利って感じだね！　ほら順平、何してんの、行くわよ。」

「…またオマエばっか褒められたな」

「まぁ、美鶴さんは私に甘いからねぇ」

「あー…そう…。まーいいんだけどサ…」

みんなが帰ろうとしたとき、やや不機嫌に順平が声をかけてきた。別に褒められたところでって感じだが、一応返事をすると順平はやる気をなくしたように歩き始めた。しかし、その様子が気になったのかゆかりが声をかける。

「ちょっと、どしたの？　まーた、湊君ばっかり～ってフテ腐れてんの？」

「うっせえなっ！！」

「な、なんなの、もう…」

「まぁ、そっとしておこうよ。じゃあ、今度こそ帰ろうか」

順平の態度が変なことをゆかりがからかうと、順平はゆかりに怒鳴って足早に帰ってしまった。その様子に言われたゆかりも驚いているようだが、いますぐどうこう出来るものではないようだと公子が判断する。そして、もうちょっとしたら影時間も明けるため帰ろうと言ってきたので、言われた通り帰ることにした。

第三十四話　後編（後書き）

次が今章の本編ではラストになります。

第三十四話　ａｆｔｅｒ（前書き）

この話が４章本編ではラストになります。

第三十四話　ａｆｔｅｒ

――ビルの屋上　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

全員が立ち去った後、ホテルの向かいのビルの屋上では……。

《パチパチパチパチ》

「想像よりも、早い解決でしたね」

「……」

そんな風に楽しそうに拍手をしているのは、ストレガの１人・タカヤ。その後ろではチドリがつまらなそうにしている。それはそうだ。自分たちの居場所がばれないようジャミングをして戦闘を感覚的に捉えていただけなのだから。

ペルソナ・シャドウ・ペルソナ使いの動きを把握できるが、それは実際の戦闘を映像としてみている訳ではない。なので、ラジオを聞きながら突っ立っていたのと変わらないのだ。

「大した見世物です。彼らはここしばらく、毎月こういった活躍をしていますね。最近では、頭数も増えているようですし、戦い方も、ユニークだ…。あの“塔”にも、頻繁に出入りしているようですしね…。どうでしょう、ジン。彼らは敵でしょうか？」

「もうすぐ、“ヤツ”に会う頃合やし、訊いてみたら、ええんとちゃいますか？」

チドリのレーダーで得た感覚を共有していたため、同じように戦闘の様子を把握できていたタカヤはそんな風に楽しそうに尋ねた。そ

れに対し、そこまで相手に興味のないジンは必要な分の情報を返すだけで済ます。

「なるほど…それはいい。彼は今や、私たちと同じ運命を背負う者…すぐにも会って、話してみましょう。私たちには、あまり時間が無いですからね…」

「ほんなら、帰りましょう。見てるだけってのも、偉い疲れましたわ」

ジンの答えに満足したのか、名案とばかりに頷くタカヤ。その様子からもうこの場に居る必要がないと感じたジンは帰宅を促し、下へ降りるため非常階段に向かい始めた。他の者もそれに続くが、ジンはチドリがずっと黙っていることが気になり声をかけることにした。

「ん？　ずっと黙ってどうしたんや、チドリ？」

「……あの銀髪の女。あいつだけレーダーで捉えられなかった。それどころか、一切の反応も把握できなかったの」

「ん？　どういう事ですか？」

ジンが声をかけると、ポツポツと話し始めるチドリ。チドリは相手のメンバーの1人だけ、メーディアの包囲網に引っかからなかったという。だが、索敵能力に詳しくないタカヤはその意味が分からず思わず聞き返した。

「理由はわかんないけど、あいつのいる場所にはなにも感じないの。別に気配がぽっかり空いてる訳じゃなくて、ジャミングしてばれないようにしてる感じに近い。でも、あまりに自然過ぎて私の能

力じゃジャミングの気配すら把握できない」

「なんやそれ。お前よりも上の能力持ってるってことか？　前線で戦ってるくせに、そないな能力まで持ってるとは1人だけ偉い化けもんやな……」

チドリの能力以上の力を持った相手に、呆れたような表情になるジン。だが、その表情は突然の来訪者によって驚きに変わる。

「あら、人に向かって化け物は失礼じゃなくて？」

「「「っ！？」」」

「フフッ…こんばんわぁ」

急に後ろから声をかけられ、3人が振り返るとそこには銀髪の女が立っていた。このビルの屋上にくるには3人が向かっている非常階段を上るしかない。だが、相手は後ろ、それもビルの縁と言っていい場所に月をバックに立っている。

相手がどうやってこの場に現れたのか、どうして自分たちの居場所がわかったのか。そういった疑問が浮かんだが、タカヤはとりあえず挨拶を返すことにした。

「ええ、こんばんわ。いきなりですが、貴女はどうやってここに？」

「簡単よぉ。貴方達が見るのをやめて帰ろうとしたから、驚かせるために跳んで後ろに立ったってわけ。ああ、他の子たちは気付いてないから安心して。今日は個人的に観客へ挨拶しにきただけだか

ら」

挨拶をキチンと返したことに気分を良くしたのか、タカヤの質問にちゃんと答えてやる有理。本来は知り合いだが、有理は自分の正体をばらす気はないようだ。

「跳んだやって？　アホ、ここ何階や思てんねん。無理に決まっとるやろ」

「……言葉に気をつけなさい。今回は戦う気はないけど、あまり調子に乗ってるとオシオキするわよ？」

「ほんなら、やってみろや！　モロスッ、マハラギオン！」

《ゴォオオオ！！》

事実を言ったのにそれを嘘だと決めつけるジン。その態度と発言に多少気分を害した有理は相手に注意するが、突然の来訪者をよく思っていなかったジンはペルソナを召喚し相手に攻撃を仕掛けた。その広範囲に広がる炎は有理を襲いその身体を包みこむ。

「はっ、偉そうに言っといてその程度かい。前線いうてもサポートメンバーやったみたいやな」

「まぁ、間違いじゃないけどねぇ」

「なっ！？」

たった1発の攻撃で終わってしまったことにジンは拍子抜けすると、先ほど化け物と言っていた自分に対して笑ってしまう。だが、相手はそれだけで終わるほど弱くはなかった。

「氷の中に自分を閉じ込めて炎をやり過ごしたのですか？」

「大体あってるわ。風で吹き飛ばしてもいいけど、他の２人に攻撃が当たってはいけないから喰らってあげるのことにしたの」

「……術の発動も、ペルソナの召喚も分からなかった」

「あぁ、私は術の発動に召喚する必要ないのよ。分からなくても無理ないわ」

タカヤの言った通り、自身のまわりにブフーラの氷を張って炎を凌いだ有理。だが、その術の発動が分からなかった感知タイプのチドリが悔しそうにしながら言うと、有理はそれにも丁寧に答えた。どうやら、普通に対応する分には同じように返すらしい。そのため、攻撃してきたジンへの対応も決まっていた。

「じゃあ、構えときなさい。１発は１発だから《タッ》」

《ドゴン！》

『グラァアア……』「がぁっ！！」

有理は相手に声をかけると、無動作からの跳躍だけでビルの反対側に立っていたモロスに近付き拳を当てた。だが、その威力は普通の人間のレベルを超えており、一撃でモロスを消滅させ。その反動が返ってきたジンは数メートル吹き飛ばされる。

すでに非常階段近くにいた状態で、数メートル吹き飛ばされればどうなるだろうか？答えは簡単。吹き飛ばされた身体はそのままビルの縁を越え、屋上である６階分の高さから落下していく。

「「ジンッ」」

「はいはい」

衝撃で吹き飛び落下していく仲間を心配する2人。だが、2人には落下するジンを助ける方法がない。そんな風に焦りながら見ていると、後ろから走ってきた有理がそのまま飛び下りた。そして、飛び下りた有理はジンに追い付き足を掴んで相手が地面に衝突するのを防いでから着地する。

《ドサッ》

「がはっ」

「ジン、大丈夫？」

「ジン、大丈夫ですか？」

「はぁ…はぁ…。ええ、まぁなんとか」

落下したジンを有理が助けるのを確認するとタカヤとチドリはすぐに降りてきた。そのまま容体を尋ねると、疲れながらも無事だと返すジン。有理はそんな様子をみて軽く笑っていた。

「助けてもらってお礼も言えないの？」

「ぐっ…もともと落ちる原因つくったんもお前やろうが」

「なにもしてない人間に最初に攻撃したのはどっちよ。私はやり返しただけだわ」

「ちっ…助けてもろうて、ありがとうございましたっ。これでええんやろ」

本来、死んでてもおかしくない状況を助けたことへの礼はないのかと有理が言うと。有理の攻撃がそもそもの原因だとジンはいう。だが、その攻撃をする理由を作ったのはお前だと言い返されると、言い返すことができず結局礼を言った。それをみて「クスクス」と有理が笑っていると、タカヤが口を開いた。

「仲間が突然攻撃してすみません。それに助けていただき、ありがとうございました」

「気にする必要ないわ。そっちの子のために助けただけだから。その子が心配していなければ、飛び下りたりしなかったもの」

「チドリの？　理由を伺っても？」

「別に、ただ服装が似てたからよ」

「「「服？」」」

助けた理由はチドリのためだと答える有理。だが、なぜチドリのためなのかの理由がわからず、タカヤが聞き返すと。有理は何でもない事のように服装が似ているからだと言った。その答えを聞いた３人は思わず聞き返してしまう。

「そうよ。趣味か戦闘服か知らないけど、ゴスロリでしょう？だから、ちょっとだけ優遇してあげようかなって思っただけよ」

「別にこの服装に思い入れは無い…」

「そうなの。じゃあ、男の子と遊ぶ時は別の服を着てみるといいわ。普段とのギャップできっと喜ぶから……カデンツァ《パァ…》」

有理が今日の服装が同じゴスロリのためだと説明すると、自分と相手の服を見比べながら淡々と話すチドリ。それを聞いても特に気にした様子のない有理は、湊に戻ったときの自分のためにちょっとしたアドバイスをした。そして、いつの間にか取りだした魔石に魔力を籠めジンにミックスレイドをかけて回復してやる。

「ん？　おぉっ、痛みが…いまの回復魔法か？」

「似たようなものよ。痛みはなくなったでしょう？　それじゃあ、私も帰るわ。また会いましょう」

回復したことに驚くジンにそう答えと、有理は3人に背を向けて歩き始めようとした。だが、まだ何も知っていないタカヤは有理を引きとめる。

「待ってください。貴女は何者です？　どうやら他の方とは力の質もレベルも異なっているようだ。そんな貴女が他の方に知らせずに接触してきた。その理由は？　貴女は敵なんですか？」

「…何者と言われてもね。一応、普段は高校に通う学生よ？　といっても、名前以外は髪色も口調も気分で変えてるから分からないでしょうけど」

「が、学生？　お前、そのなりで学校いっとんか？　どんだけ見た目自由やねん…」

「ちゃんと制服で行ってるわよ。改造してるけど」

タカヤの質問に答えた事で、その内容に驚くジン。だが、有理としては制服を着ているので別に何の問題もないと答えた。そして、タカヤの質問への答えを続ける。

「接触した理由は最初に言ったでしょう？　観客に会うためよ。私たちがホテルに到着する前から出待ちしてるんだもの。最後に少しくらい会わないと可哀想でしょう」

「私のジャミング効いてなかった？」

「効いてたと思うわ、こっちの感知タイプの子にはばれてないから。ただ、私のこれは生身の能力だからジャミングとか関係ないのよ。ほら、野生動物は気配に敏感でしょう？　あんな感じと思ってもらって構わないわ」

発動していたはずの自身の能力が有理に効いていないとわかると、その能力自体に不安をおぼえるチドリ。だが有理は能力自体は効いていたと答えた。その証拠に湊を除くメンバー内最強の感知タイプである風花すら気付いていなかった。チドリはその答えに安心するが、直後の発言によってチドリを含めた3人は驚いてしまう。いま目の前の女はなんと言ったのだと。

「では、貴女の感知能力はペルソナの力ではないと？」

「ええ、力に目覚める前から使えているもの」

「なにそれ…ずるい」

「フフッ、なんとでも言いなさいな。で、最後の質問だけど…別にどっちでもないわ。そもそも向こうのメンバーとだって友達ではあるけど、この活動はお金で雇われてやってるだけだしぃ」

聞き間違いではないのかと思い、聞き返し確認をとるタカヤ。しかし、それは最初に聞こえていた言葉が聞き間違いではなく、相手が人間離れした存在であることを改めて確認させられる結果に終わる。さらにチドリも同じようなことを思い相手に文句を言うが、言われた有理はそれを聞き流して最後の質問に答えた。

「それじゃあ、質問にも答えたし本当に帰るわぁ」

「ちょ、待てや。話はまだ「しつこい」」

「帰るって言ってるでしょう、あなた達もさっさと帰りなさい。そんな格好して、この辺で女の子を連れ歩いてると通報されるわよ？　それが嫌なら、影時間のうちに離れなさい。それじゃあ…≪タッ≫」

質問に答え終えたことで帰ろうとする有理をジンが引き止めようとするが、それは途中で有理に遮られる。その言葉の雰囲気からは拒絶の意志がはっきりと伝わり、3人は声をかけるのを躊躇ってしまう。それで話が終わったと感じた有理は挨拶をすると、ビルの上へと跳び上がり去っていった。

「本当に跳んで上っていったね…」

「なんやねんアイツ。金であの強さが味方になるとか反則やろ…」

「確かに驚きましたが、いまはあの方が敵ではないことが分かっただけでも良しとしましょう。では、我々も帰りますよ」

有理が去っていくとチドリとジンは呆れたように去っていった方を見ていたが、タカヤが2人に声をかけ帰宅することになった。そうして、ストレガにとっての満月の日は終わっていった。

深夜――作戦室　{Ｎｏ　Ｓｉｄｅ}

特別課外活動部のメンバーから討伐を終えたとの連絡が入り、それを聞いた幾月は影時間が明けたあと1人機械の前に座り作業をしていた。

「ふむ、今回も無事に倒せたか。まぁ、有里君がいる時点でそれ自体は心配していないがね」

そう呟きながら幾月は自分のノートパソコンに、今回のシャドウに関する情報を入力していく。

「とはいえ、彼の力は異常だな。計画の障害になりかねんほどに…」

パソコンの打ち込みの手を止め、そう呟く幾月。そして、彼は操作してる画面に別のタブを開き表示する。そこにはつい最近、美鶴によって報告された湊の異常体質や特殊能力が書かれている。

「影時間への適性はあったみたいだが、ペルソナを召喚できないとはね。召喚できるのであれば封印されているデスの力の片鱗を見られると思っていたのだが」

言いながら画面に次々と他のメンバーの能力が表示される。そこに

はペルソナの能力や平時と影時間での身体能力の違い。また、どういった戦い方が得意でどんな相手との戦闘は苦手かなど戦闘に関する様々なデータが載っている。

「やはり比較するには草摩君が最も適任だな。桐条君も他のメンバーよりは平均数値が上だが、草摩の血筋には遠く及ばない」

そういった幾月のパソコンには公子と湊のデータが表示される。男女の違いはあるが、公子は男性だった場合はどのような性能になるかというシミュレーションをデータにかけてある。そうすると、驚く事に公子の身長や体重など基本的な身体データは、全て湊に近いものに変換されていた。

「ふむ、どんなに能力が上がっても身体データは有里君に似たものが表示されるね。ということは、有里君の力は全て封印されているデスの恩恵か……」

変換された公子のデータから新たにどんな戦闘力が生み出されるかを計算し、その最大値と比較しても湊の力は遥かに勝っている。その差は、もはや子供と大人というレベルではなく、それは同じ生物として比較する事ができないレベルとなっている。

湊の肉体から生み出される戦闘力に影時間の恩恵をプラスし、その最大の戦闘力を他のメンバーの予測最大値と比較してみる。その場合でも、仮想・湊と公子のデータはずば抜けている。そして、その2人を比べると性別と体格の差か仮想・湊の方が頭2つほど抜けていた。

「仮想データだが、これでも十分すぎるほどの力だ。生身で勝てる人間などまずいない。しかし、その人類最強のデータが生まれた

ての赤子かと思えるほど、実際の彼の強さは規格外。こんなデータが得られたこと…失敗したアイギスに感謝すべきかな？」

そう言いながら幾月は楽しそうに笑う。そのアイギスとは桐条によって開発された対シャドウ特別制圧兵装の機械の少女である。幾月もその開発に関わり、アイギスがある場面になったときに、ある行動をとるように密かにプログラムを組み込んでおいたのだ。そのプログラムとは…。

「デスの討伐を命令される可能性は考えていたからね。当時の私ではその計画自体を阻止する事は出来なかった。そこでアイギスにはデスを追い詰めた場合、封印するようプログラムを仕込んでいたのだが。まさかパピヨンハートではなく偶然居合わせた有里君に封印するとはね」

幾月はそんな風に苦笑しながらも、当時の事故現場の写真を開いてスライドショーのようにして見ていく。そこには湊の乗っていた車が炎上している光景や、ボロボロの状態で湊を抱きしめたまま機能停止しているアイギスの画像が映っていた。

「デスの封印されたパピヨンハートが回収できれば研究できると思っていたが。思わぬ形で臨床実験できたな。ペルソナも扱えない出来損ないの草摩であれほどの力。ならば、完全体となり抜け出たデスを、僕が手にいれれば……フフフ、フハハ、フハハハハハッ」

嬉しそうに高笑いする幾月の目には野望に燃えるような強い意志も、狂信者のようななにかを求めるような歪んだ信仰心も感じられない。そう、彼はまったくの正常な状態で目的に向け動いているのである。

「フフッ。では、目的に向けそろそろアイギスを回収しておく必

要があるな。屋久島にある桐条の別荘近くの研究所だったか。丁度連休もあるし、寮生の休息とでも言って回収してこよう」

言いながら、事故後のアイギスの行方を当時の資料を読んで見つける幾月。どうやら、いまでもたまにメンテナンスがされているようだが、起動自体は出来ないらしい。というのも、それは幾月が他の人間にパピヨンハートを奪われないようにつけたロックのせいだ。

現在のアイギスは、近くにペルソナ使いがいなければ再起動できないようになっている。パピヨンハートの納まっている部分は、一度起動しなければ開かない構造のため、このようなロックをしかけたのだ。

「アイギスはいいとして生贄はどうしようか？　イレギュラーな器にはデス復活後は早々に辞退して頂きたい。適性しか持たぬあれは生贄に相応しくない。デスの封印が解けて抜け出た後は、影時間に動けるだけの普通の少年だ。簡単に始末できるな……あとは荒垣君や、他の候補者を引きこむとしよう」

そういうと幾月は自分の計画のための生贄を選び始めたのだった……。

第三十四話　ａｆｔｅｒ（後書き）

今回は黒幕等の原作ネタバレ要素が多かったですね。けど、アイギスにプログラム組み込んでおいたとか、オリジナルで入れてみたんですがどうでしょうか？

先代桐条の思想に共感してたなら、もしもの時のためにそれぐらいの保険かけてそうだなって思ったんです。

そんな感じでこの章は次の設定でラストです。本編しか読まない派の方は五章が掲載されるまで少々お待ちください。

第四章　設定（前書き）

第四章で出てきた設定になります。荒垣先輩やストレガの３人が今回はいませんが、新しい設定が出ていないためです。他の章でもいいましたが、新しい情報がなければその章で登場してても設定にはでません。

さて、今回のテンプレは前回とほぼ一緒です。ただし、スキル等は今回はないのでそこらへんは違っています。

《影時間関係者》
名前（よみ）　所属
【アルカナ】
【一人称】一人称（よみ）
【設定】
【装備】

次に一般人とその他は

名前（よみ）　所属
【一人称】一人称（よみ）
【見た目】
【設定】

そして、オリジナル設定と道具は

名前一（読み）
【設定】

というテンプレでいきます。

第四章　設定

《影時間関係者》

有里　湊（ありさと　みなと）　料理部

【アルカナ】なし

【設定】風花を救出したエンペラー＆エンプレス戦から更に力が上がっていて、それは魔力を使わずとも握力計を握り潰してしまうほど。本人はその危険性を理解しているため、咄嗟でも力の加減を誤ったりはしない。揃って食事をしているときに公子が気付いた大型シャドウが湊の能力の目覚めに関係しているという推測は正しく、謎の声の女改め金髪の少女とフィレモンもそれを認める会話をしていた。

本人と周辺人物は知らないが、その身体にはデスという存在が封印されており。能力が次々と目覚めているのは、倒された大型シャドウがデスに戻る時に湊自身が無自覚にその戻った力を吸収しているため。また、デスの力が戻ると金髪の少女が施した封印が弱まるため、湊本来の力とその封印場所にいる金髪の少女の力も一緒に吸収しているもよう。といっても、デスと金髪の少女の力が弱まる訳ではなく、その2人の力をコピーしてインストールしているような感じである。

大型シャドウ戦後は、ホテルに近付いてる途中に気配に気付いていたのでストレガの3人に会いに行った。しかし、相手の目的も不明なためあえて正体をばらすことはしなかった。ジンを助けたのは自分の意思でチドリのためと言ったのは、銀髪時の性格上の演出だった。その後、寮に帰ってから湊に戻った際、ゆかりに部屋へ連れ込まれ正座で説教された。そして、それから解放された後に公子と美

鶴から悪戯の罰として説教をくらい。それから解放されると、さらに今度は作戦中に話を聞かなかった事について風花の愚痴を聞かされた。

【装備】
・フツノミタマ（無の剣）――白金の腕輪に収納

【大型シャドウ戦後に目覚めた能力】
・魔力関係
・コピー能力
・身体能力の上昇
・肉体耐久力の上昇
・回復力の上昇
・気配探査の精度、範囲上昇
・動物の言葉の概念的理解
・覚えのない記憶、知識
・状態異常無効
・アナライズ

奏　有理（かなで　ゆり）　管弦学部
【一人称】私（わたし）
【見た目】
金髪→Ｐ４のミス？八高コンテスト時のクマ（ＣＶ．『うみねこのなく頃に』のフレデリカ・ベルンカステル時の田村ゆかり）
茶髪直毛→Ｓｔｅｉｎｓ；Ｇａｔｅの牧瀬紅莉栖（ＣＶ．今井麻美）
銀髪→ローゼンメイデンの水銀燈（ＣＶ．水銀燈や『ハヤテのごとく！』のマリア時の田中理恵）
茶髪癖毛→髪をおろした公子（ＣＶ．井上麻里奈）

【設定】

湊がネタのつもりでやってみた女装姿。しかし、声も含めて完全に女性にしか見えないため、正体をばらされた後も他の人間は信じられないといった感じ。当然ながら胸はないし、化粧もしていない。中身は変わらないので湊と同じ戦闘スタイル…と思いきや、本人がノリノリのためどちらかと言えば湊の身体能力をした公子に近い動き。動きのキレとその軽やかさで舞っているようにも見える。しかし、髪型によってキャラを決めているようで、銀髪ではSっぽい性格になりブーツで敵を蹴り殺すなど容赦のない攻撃をしたりしている。ちなみに、右目の眼帯はそのまま。

【装備】
・ブーツ――両脚（銀髪時）

草摩　公子（そうま　きみこ）
【アルカナ】［0］愚者
【設定】湊への異性としての愛を自覚し、尚且つそれを自重しないヒロインの1人。現在、最大の危険人物はゆかりだと思っているため、間接キスとて絶対にさせないようにしている。とはいえ、普段は親友の1人だと思っているので、決して関係は険悪になったりはしていない。

湊の悪戯で順平と真田のおぞましいシーンを見せられ軽くトラウマになりかけた。その後、疲れた表情でゆかりの部屋から出てきた湊を発見し拘束。そのままラウンジのソファーへ連行し、美鶴と一緒に説教をした。その主な内容は『やっていい事と悪い事の区別・女性との節度ある付き合い方』である。

岳羽　ゆかり（たけば　ゆかり）
【アルカナ】［Ⅵ］恋愛

【設定】湊への愛を自覚し始めているが、未だに素直に受け入れられていないヒロインの1人。湊と2人で話しているときはまだいいが。湊が抱きついたり手を繋いでくるなどのスキンシップをとってきたとき、公子が文句や攻撃してくるのが最近の悩み。そのとき、「湊君をあげるつもりはないから」や「絶対に認めないから」と度々言ってくることへ反論しているのが、ゆかりが湊への想いを自覚するのを妨げている原因だったりする。なので、公子の牽制は地味に効果を発揮している。

大型シャドウ戦後、寮に帰ってからお風呂上がりの湊と遭遇。帰宅途中でいなくなった理由を尋ねたが、はぐらかされたのでとりあえず拘束し部屋へ連行した。部屋に連れて行って床に正座させた湊にはまず拳骨を喰らわせた。その後、『シャワーのときはどの程度見えていたのか、どれくらいの間見ていたのか、明日は朝から部活があるのにキスマークなんて付けてどうしてくれるのか、そももっと節度ある女性との付き合い方ができないのか』といった内容を話した。

伊織　順平（いおり　じゅんぺい）
【アルカナ】［I］魔術師
【設定】有理が転校生としてやってきたとき、久しぶりに湊の毒牙にかかっていない美少女に出会ったとテンションをあげた男。他の男子も同じくらいテンションを上げていたが、他のやつらよりも有利になるにはどうすればいいかを一瞬で考え。偶然にも空いていた隣の席にくることを提案するが、他の男子に湊の席であることを指摘され初めて気付いたというマヌケっぷり。しかし、それがばれてはいけないと思い、必死に言い返すことで誤魔化した。

シャドウからの精神攻撃で正気を失っていたが断片的には覚えてい

る。よって、操られている間に真田を恋人と認識していたことが、死にたくなるほど恥ずかしいエピソードランキングで堂々の1位となった。だが、あれだけ訓練したにも関わらず敵にやられたことと、湊がいなければ結局敵の術を破れず勝てなかったということが無力感を感じる原因となり。直前の嫌な記憶を忘れるくらいの怒りが嫉妬のような形で湊に向いた。

桐条　美鶴（きりじょう　みつる）
【アルカナ】［ＩＩＩ］女帝
【設定】最近になって湊に懐かれ、自身も湊を弟のように可愛がり始めたヒロインの1人。次期草摩のトップということで、自分以上に立場というものに縛られるはずの湊が誰よりも自由に生きている事を素直に尊敬している。普段はまわりが桐条や完璧超人と思っているためか、どうしても付き合いに壁を感じるのだが。湊は真田と同じようにそんな物を感じさせずに接したり甘えてくるため、美鶴自身もそれが嬉しくどうしても甘くなってしまうよう。

甘い事は甘いのだが、どこか世間知らずの湊の将来を心配している。だが、どこからちゃんと教えればいいのか考えている間に次の問題を起すので、いままで教育や躾が実現されることはなかった。しかし、そんな甘さが今回の悪戯を引き起こしたのだと考えを改め、今後は度々注意することに決めた。

ちなみに、湊が美鶴の部屋へお泊りしに行っている時は同じベッドで寝ている。だが、湊はなぜか足元らへんで丸まって寝ているため、美鶴も湊にタオルをかけた後に普段通りの位置で寝ている。さらに言っておくと、美鶴のベッドは天蓋付きのキングベッドロングサイズである。なので、湊が足元で寝ていても美鶴は余裕で足を伸ばして寝られる。

真田　明彦（さなだ　あきひこ）
【アルカナ】［ＩＶ］皇帝
【設定】ホモ疑惑や我慢弱い男の称号を密かに得ている人物。もっとも、その発信源は湊でそれを拡散しているのは主に公子とゆかり。公子は日ごろの湊との時間を妨害されていることへの怒りと、おぞましい光景を見せてきたことへの腹いせで拡散させ。ゆかりは男が男にキスを迫ったとか生理的に無理…ということで愚痴るように拡散している。

とはいえ、戦闘では頼りになる先輩ポジションのため、別に嫌われているわけではない。ただし、先輩として尊敬の念を抱いているのはもはや風花のみで、最初は尊敬の念に近いものを抱いていた公子とゆかりは、湊に毒されいつの間にか尊敬しないようになっている。

山岸　風花（やまぎし　ふうか）　特別課外活動部、管弦学部、料理部部長
【アルカナ】［ＩＩ］女教皇
【設定】柔らかい雰囲気でまわりに癒しを提供するキャラだったのだが、湊と関わるようになってからは驚くのが仕事のようになっているヒロインの１人。いままではイジメを苦に不登校気味だったが、最近では森山や寮生が学校でも仲良くしてくれるのでキチンと通っている。

一般家庭だが、どちらかというとお嬢様系の育ち方をしているため変なとこで常識が無い。とはいえ、それ以上の非常識が集まる寮では常識を持っている側でカウントされている。そのため、いろんな部屋へお泊りに行っている湊もまだ風花の部屋ではお昼寝しか許さ

れていない。だが湊が、近々お菓子持参でパジャマパーティー＋お泊りをしようと思っている事を風花は知らない。

幾月　修司（いくつき　しゅうじ）

【設定】特別課外活動部をサポートする裏で自身の目的を達成しようとしている人物。湊にデスが封印される原因の1つを作ったわけだが、本人にとっては誤算でしかなく全くの計算外の出来事だった。後の章で語られる先代桐条の意思に賛同し、世界に滅びをもたらそうと考えていた。だが、それを阻止しようとしている人物がいることを察知し、デスを確実に手に入れておく計画へ変更した。

その中で最も力を注いだのが、7式アイギスのロック構築と最終的にデスを討伐ではなく封印するというプログラムを仕込んでおく事だった。予定では追い詰められたアイギスが自身のパピヨンハートにデスを封印し、そのパピヨンハートを自分が回収するというものだった。だが、その場には偶然にも適性を持った生きた子供がいたため、アイギスは自分よりもそちらの方が器に適していると判断し湊へ封印することになったのである。

その事に酷く動揺し、自分のプランが一気に崩れたと感じたが、とりあえず湊を監視しておくことにした。それを続けているうちに、散らばったデスの欠片を集めればデスが復活することを突き止め。湊をなんとか呼び寄せようとした。それは偶然にも公子がいたために叶う事になり、さらにデスを手に入れた場合の実験的データが湊によって手に入ったので本人的には結果オーライと思って計画を進めている。

《一般人》

古美術眞宵堂の店主（こびじゅつまよいどうのてんしゅ）
【一人称】私（わたし）
【見た目】眼鏡をかけた女性、若く見えるが実は結構いい歳
【設定】ポロニアンモールにある古美術眞宵堂の店主さん。元々は桐条の研究所で働いていたが、色々あって現在は特殊な武器や道具を扱うサポートをしてくれる。湊がタルタロスで手に入れた謎の記憶媒体は店主が書いた研究日誌のようなもので、それには当時の実験などについて書かれている。ちなみに、その記憶媒体は湊がフロアに着くと先に回収しているため、他のメンバーは存在すら知らない。

平賀　慶介（ひらが　けいすけ）　月光館学園3年、管弦学部部長
【一人称】僕（ぼく）
【見た目】眼鏡をかけた天然パーマの男子
【設定】男主人公の運命コミュの相手で、女主人公の場合は魔術師コミュを進めていくと写真部部長として出てくる相手。家が医者でお金持ちのため、学校へは車で送迎されている。医者の子どものためか自身もそれなりの知識を持っており、具合が悪そうな人間がいるとすぐに助けようとする。実は2年で生徒会に所属している小田桐とは幼馴染

《その他》

ファルロス
【設定】元・謎の少年。金髪の少女とフィレモンによると、湊に封印されている存在。その正体は幾月が組み込んでいた封印プログラムによって誤って湊に封印されたデス。しかし、本人の力は１２の

シャドウへと分かれているため、記憶を含め力を失っている状態である。湊たちが12のアルカナシャドウを倒すたびに、その力は湊に封印されているデスの中へ戻るため、徐々にだが記憶も取り戻している。

金髪の少女

【設定】元・謎の声の女。ファルロスと同じように湊の中に封印されている存在。といっても、誰かが封印したわけではなく、湊の強過ぎる力を抑えるため自分ごと封印したのである。普段は力の封印されている場所“心象世界の庭園”に1人でいる。湊や世界に関わることなど様々なことについて深く知っているようで、フィレモンともお茶をするような仲。

フィレモン

【一人称】私（わたし）

【見た目】顔の四分の三を覆う一部が蝶のデザインになっている仮面を被る男

【設定】イゴールの主で、普段は様々な世界の人間たちを観測している。しかし、イゴール達と同じく現世側の存在ではないため、普通の人間の前に姿を現す事は少ない。世界を渡るときや現世に姿を現すときは金色の光の蝶になる。彼もイゴールのように力を与えたり、力を貸したりする存在だが。それは選ばれた者にのみ行う事が出来る。よって、“世界”にとっては一般人扱いの湊には力を貸す事ができなかった。ちなみに、フィレモンの言っていた孫のような者たちとはエリザベスたちのこと。

―オリジナル設定・道具―

フツノミタマ

【設定】全長約１３０センチ、刃渡り約１０８．３センチ、柄約２１．７センチ。正しくは『フツノミタマノツルギ』といって“布都御魂剣”とも“？霊剣”とも書かれる、神話上の霊剣の一種にあたる。湊が『無の剣』を持った際に変化した大太刀。湊は軽々と揮っているが作りがかなりしっかりしている上に未知の金属でできているため、その重量は３５キロとその細さにしてはかなりのもの。その超重量に加えて通常の太刀や刀に比べると柄の長さがかなり短めになっているため、まともに使えるのは今のところ湊だけである。

世界（せかい）

【設定】フィレモンたちの話していた世界とは、地球という意味ではなく湊たちが存在する次元そのもののことである。生命のような明確な意志は存在しないが、大まかな意志のようなものは存在する。世界の目的は生物が長きに亘り繁栄していきそれを観測する事。そのため、危機の際にはそれを打破できる可能性を持った者が生まれ、その危機に立ち向かっていくよう少しだけ因果律を操作する。だが、生物が滅んだとしてもまた1からリスタートするので、世界自体がなくなることはない。

世界の子（せかいのこ）

【設定】世界が危機に陥る際に生まれる、危機を打破する可能性を持った者。他の者と比べると才能に溢れていたりするが、それは世界が与えた力ではなく本人が持って生まれたもの。世界は別に力を与えたりはせず、危機に立ち向かうよう因果律つまりは運命の方向を少しずつ曲げていくだけである。そのため、途中で死ぬ事もあれば最後の最後で打破できなかったりもする。

湊・公子

【設定】本来は同じ存在である者たち。他の世界では湊か公子のどちらが生まれ、世界の子として危機に立ち向かっていくことになっている。だが、この次元では世界が湊が生まれることを認めたため2人が同時に存在することになった。

この次元で世界の子として選ばれたのは先に生まれた公子で、そのためアルカナも“愚者”を得ている。しかし、因果律の操作を怠ったのかデス封印の際に現場に居合わせたのは湊になってしまった。湊自身は他の次元では公子と同じように世界の子になっているため、素質は十分に備わっている。しかし、“世界を救えるのは世界の子だけ”という考えがあるのか、一般人として生を受けた湊は世界に狙われるようになる。狙う理由は、代理を含めた世界の子が危機に立ち向かっている間は世界をリセットすることができない。なので、さっさと殺して次の世界を始めるためである。

よって、湊が過酷な幼少時代を生きたのは、世界が湊を殺そうとしたのがほとんどの原因である。しかし、元々は世界の子と同じ素体である湊はなかなか死なず、今もなお世界の子の道を代理で歩んでいる。ちなみに、過酷な幼少時代を生きる原因となったその他の要因は『草摩家』、『幾月』、『公子』の存在があったため。それらについては他の章の設定にて記述する。

第四章　設定（後書き）

今回の設定は今までに比べると少ない文字数で済みました。まぁ、項目が少ないのが理由なんですが。

さて、話は変わりますが、次の章は『終章』って名前にしようと思っています。まぁ、『第五章』とどっちにしようか迷ったのですが、次の章で一部は終りなので『終章』でいいかと決めました。もう少ししたら投稿するので少々お待ちください。

第三十五話（前書き）

ついに個人的に早く書きたかった第五章めになります。この章ではアイギスも登場しますし、金髪の少女も名前と姿を明かす予定なので早めに更新できるよう頑張りたいと思います。

第三十五話

7／8（水）
朝――校門
大型シャドウを倒した次の日。1人で学校へ向かっていると話し声が聞こえてきた。

「もうすぐ夏休みだねー。どっか遊びに行こうよー！」

「行きたい行きたい！　海も山も全部行きたい！　…っつっても、その前に期末テストだよ。火曜からだっけ…」

「うわ、思い出しちゃった。…でもさ、今回は試験休みもあるし。何より夏休みが待ってると思えば！」

別に休みがあろうがなかろうが、モチベーションに関わらずやることは一緒だろうに…。そんな風に心の中で呆れていると、予鈴が鳴ったので少し急いで教室へ向かい。今日の授業を受けた。

放課後――ポートアイランド駅
今日の授業が終わると僕は1人、ポートアイランド駅までやってきた。というのも、昨日の夜にチドリたちがペルソナ使いって分かったからなんだけどね。それについて話す気はないけど、少し様子を見たくなってチドリを探しつつ駅からの階段を下りていると友近がいるのを発見した。

「やぁ、友近。駅前でナンパ？　捕まらないように気をつけてね」

「ちげぇよ！　つか、有里か。なーなー、やっぱプレゼントする

なら、花かな？　エミリのタイプから言うと、盆栽とかより、バラかな…。プレゼントして喜ばれたら、グッと仲が深まりそうだよな！」

そう言いながら友近は花屋に行こうか悩んでいるのか、花屋“ラフレシ屋”の方をチラチラと気にしている。んー、人によるからなんとも言えないけど。

「花ってある程度関係が親密になってからじゃない？　手入れとかも必要だし、普段のプレゼントには向かないと思うな」

「え？　そ、そうなのか？」

「まぁ、僕の個人的なイメージかも知れないけど、一理あると思ったんでしょ？　なら、今回は他のにしておいて、次回までにこっそりと相手の好みをリサーチしておく。そして、ある日それとなく『綺麗なんでつい買っちゃった』的なノリで持ってきてそれを渡すんだ。相手に気を遣わせずに済むし、サプライズにもちゃんとなってるだろ？」

僕の話を聞いて少し驚いていた友近に、さらに説明を続けると相手は「フムフム…」と納得している。そして、最後に言い終わると友近はプルプルと震えていたかと思うと、僕の手を握ろうとしてきた。

「有里、お前すげえなっ！　っ！？　…なんで避けるんだよ」

「だって男と手を繋いでも楽しくないもん」

「あー…草摩さんに岳羽さん。他にもいろいろな女子とやたら仲良いもんな、お前。つか、正直なところ誰と付き合ってんだ？　も

しくは、誰と付き合いたいでもいいけどさ」

「誰って、みんな友達だけど？　ほら、僕ってピュアじゃん。女の子とお話しするのも恥ずかしいのに、付き合うだなんてそんな…」

僕がいろんな女子と仲が良い事を思い出した友近は、呆れたような表情をしながらも誰かと付き合ったりしないのかと聞いてきた。それに対して僕も素直な気持ちで返すと、友近は呆れを越え疲れた表情になり口を開いた。

「どの口が言ってんだよ。たまにクラスの男子で遊びにいくときに順平が愚痴ってるぞ。『あいつ、公子ッチやゆかりッチの部屋によく泊まりに行ってんだ。桐条先輩公認でな』って。そんな野郎が、ピュアな訳ないだろ」

「みんなが考えてるような事は一切ないけどね。女子に抱きついたり、頬とか額にキスしたりはするけど、それは挨拶みたいなもんだし」

「馬鹿、ここは日本だ。そんな親愛の気持ちを籠めた挨拶にキスなんてしねぇーの」

「え？　でも、公子は昔アメリカに住んでたんだよ？　なら、キスぐらい普通じゃないの？」

友近に僕流の挨拶を説明すると、僕の挨拶がおかしいようなことを言ってきた。しかし、公子はキスを挨拶に用いる国であるアメリカに住んでいた事を告げると、友近は少し難しそうな顔をして何かを考え始めた。

「その話は初めて聞いたが……やっぱ、普通ではないだろ。草摩さんがお前以外にべったりしてるとこ見た事ないし。そういう文化もある土地に住んでいただけで、草摩さんだって挨拶じゃキスしないと思うぜ？」

「そうなの？　まぁ、こっちが勝手にしてるだけだしね。けどま、別に怒られないってことは相手も挨拶として容認してるってことでしょ？　無問題、無問題」

そう言いながら僕が笑うと、友近は「いや、それは……」となにか言いたそうにしている。何が言いたいか分からないけど、僕らにとってはそういうモノだから別に良いと思う。気にするだけ無駄ってやつだ。僕のそんな考えが伝わったのか、友近は溜め息を吐きながら再び口を開く。

「はぁ…もうなんでもいいや。まぁアドバイス、サンキューな。ところで、お前はなんでこっちに来たんだ？」

「え？　ああ、ちょっと知り合いの子と遊ぼうと思って。まぁ、アポ無しなんだけど」

「アポ無しって大丈夫なのか？　てか、また女子？」

「んー、そこらへんは大丈夫だと思う。それと“また”の意味はわからないけど女子だよ。僕のカップル契約の相手。えぇっと……あ、いた。あの絵描いてる子」

友近にそう説明しながら気配を読んで位置を特定し、今度は肉眼でチドリを探す。すると、いつもと大体同じ場所に座っていつも通り絵を描いていた。せっかく昨日、遊ぶ時は違う服を着てみればとア

ドバイスしたのに。チドリはいつも通りの白のゴスロリを着ている。

「絵を描いてる子……うわっ、目立つ格好だな。お前ってああいうのが趣味な訳？　てか、カップル契約ってなに？」

「絵を見せてくれたお礼に携帯を買ってあげたんだ。んで、色々あってカップル契約ってわけ。あと、別にフェチ的なものはないけど、似合ってて可愛ければＯＫだよ」

「なーんか、お前って改めて普通じゃないなって思ったわ。そういう事なら俺はもう帰るし、とっとと会ってこいよ。んじゃ、またな」

「うん、ばいばい」

そんな風に友近は挨拶をすると、駅の方へと帰って行った。それじゃあ、僕も当初の目的を済ませるかな。そう思いながら、ベンチに座るチドリへと近付いて行った。

――駅前ベンチ

「チードリ♪」

「っ！？」

気配を消しつつ背後から近付き、名前を呼びながらベンチに座るチドリに抱きつくと。相手は身体をビクッとさせ、直後に絵描き道具をベンチにおいて後ろからまわしている僕の腕を掴んできた。それもかなりの握力で。

「離せ変態」

「直接会うのは久しぶりだね。元気にしてた？」

「人の話聞きなさいよ。いいから離して」

そんな風にチドリが怒り気味に言ってくるので、しょうがなく僕は抱きつくのをやめる。抱きつかないのであれば、後ろにいる意味はない。そう考えると、軽く足に力を入れチドリの頭上を跳んで目の前に着地する。

「よっと。でさ、今日はなんとなく会いたくなってきたんだけど、暇してる？」

「……本当は暇だったけど、急に抱きついてくる変態と遊ぶ時間はない」

「ふーん。ジンも変わった事してるんだね」

「あなたの……もういい。で、何の用？」

チドリに今日きた理由を話すと、よく分からない返事をされたので適当に返す。すると、チドリは僕を睨みながら何かを言いかけたがニコッと笑うと、頭に手を当てて首を振ってそれを中断した。どうしたんだろうと思ったが、とりあえず聞かれた事に答えることにしよう。

「何の用ってチドリに会いたかっただけだよ？」

「それだけ？　ならもう目的は達成したでしょ。今日は帰ったら」

「まぁ、会って話なり遊ぶなりするとこまでが目的なんだけどね。ってことで、遊ぼう？」

僕はチドリの目を見ながら笑いかけ、そう話しかける。まぁ、話しかけるっていっても、さっき自分で暇って言ってたし、遊ぶ気満々なんだけどね。そんな考えが伝わったのか、チドリは諦めたような表情で荷物を片付け始めた。

「ねぇ、返事は？」

「どうせ言っても聞かないくせに。片付けるから少し待って」

「わかった。あ、脚降ろしてくれた靴履かせるよ？」

「……お願い」

チドリが返事をせずに片づけを始めたので答えを再度求めると、暗に遊んでやるから待っておけと答えるチドリ。しかし、そのまま待つのは暇なため、いつも通り靴を履かせようかと聞くと。チドリは少し間をおいてベンチの上においていた脚を下ろし頼んできた。

なので僕は、厚底の靴を履かせてその、リボンを上の方へと巻いて結んだりしながら、片づけをして荷物をまとめているチドリに話しかける。

「チドリの脚って綺麗だね。白いしすべすべしてるし」

「なっ！？　本当に変態なんじゃないの？　変な事考えながら脚触るなら、やめてくれる？」

「客観的な事実を告げてるだけで、そこに下心はないよ」

「どーだか……終わった？」

「うん、いいよ」

靴を履かせ終えたか聞いてきたチドリにそう答えると、短く「ありがと」と答え立ち上がるチドリ。そうして、荷物を持って立ち上がるとチドリが話しかけてきた。

「で、どこ行くの？」

「別に考えてないよ。帰ってお茶でもしながら話をするっていうなら、買い物してからチドリの家に行ってもいいし」

「そう、ならそれでいいわ。行くなら早くいきましょ」

「了解」

僕が適当に出した案にチドリが賛成すると、僕たちは買い物をしてチドリの家へ行くことになった。買い物してる途中に公子とゆかりの気配を近くに感じたけど、いま出会うとチドリが警戒すると思いお菓子売り場で時間を潰す事で2人が帰るのを待って僕たちは買い物を終えた。

――チドリ自宅

「おじゃましまーす」

「…ただいま」

買い物を終えてチドリの家に着くと、そういって玄関に入る僕たち。
手に持っていた荷物を玄関の方にとりあえず置くと、いつも通りチドリの靴を脱がせてやる。

「いいよ」

「ありがとう。荷物はいつも通り適当にしまってくれていいから」

「わかった」

そんな風に返事をすると、チドリは自分の荷物を持って部屋へと入っていった。なので、僕は言われた通り食材などを冷蔵庫に仕舞う作業に移った。

――チドリ自室　〜チドリ　Ｓｉｄｅ〜

今日は、絵を描いていると湊が急に現れて驚いた。といっても、いつも急に現れるんだけど、今日は抱きついてきたので余計に驚く事になった。

「ふぅ…」

そんな風に私は溜め息を吐きながら画材道具を片付け、ヘッドドレスやリボンを外していく。

「…そういえば、あの女が言ってたっけ」

特に部屋着というものがないため、基本的に同じようなデザインの服ばかりきている私。いまもリボンなどを外して片付けていると、他の服が目に入ったので昨日の女が言ってたことを思い出してしまったのだ。

「別に服なんてなんでもいいじゃない。というか、楽だからこれ着てるんだし」

『――男の子と遊ぶ時は別の服を着てみるといいわ。普段とのギャップできっと喜ぶから』

「別に喜んでもらおうなんて思って無い。大きなお世話」

再び頭の中に浮かんできたあの女の言葉にそう言い返し、私はヘッドアクセサリー類の片づけを終える。そう、別に誰かに喜んでもらおうと思ってないし、そんな相手も私にはいない。

「そんなことは表の人間たちのすること。私には関係ない…」

その考えは事実であり、真実。私や他の2人は桐条によって生み出された人工ペルソナ使い。ペルソナの制御のために劇薬を飲む必要があるため、その余命はあと数年といったところだろう。そんな私達、いや正確に言えばタカヤの目的は平等な滅びを世界に齎す事。余命も少ない人間がそんな大それたことを為そうというのだ。銀髪の女の言っていたような余計な事をしてる暇はない。

「くだらないこと、私には関係ない事。……でも、あのペルソナ使いたちは楽しんでるのかな?」

自分には関係ない事だと割り切っているが。昨日見た桐条側のペルソナ使いたちの事を思い出し、そんなことを考えた。見た感じでは歳は自分と同じくらいだろう。実際にあの女も高校生だと言っていた。あれだけの力を持っている人間が、普通の日常を過ごしていることが想像できないが。他の人間は感覚で捉えただけでもそこまで

強くないことがわかる。

まぁ、外で待機していた内の1人は、他のメンバーよりも頭1つか2つ跳び抜けた強さを持っていたが。あのレベルならジンはともかく、タカヤやたまに抑制剤を渡す関係で会っている荒垣という男の方が強い。私だってそこそこは渡り合えるだろう。抑制剤も必要ないし、力を特別持っているわけでもない。そんな状態の彼らはきっと年頃の若者らしく生きているに違いない。

「……湊も同じはずなのに」

向こうのペルソナ使いたちの事を考えていると、今度は湊のことを考えてしまう。湊は桐条の事故に巻き込まれているため完全とは言い切れないが、生きる世界は完璧に日常側だ。普段も年頃の青年といった感じに振舞っている。たまに人に変な事をしてくるが、それも含めて日常を満喫していると言えるだろう。

しかし、桐条によって齎された不幸な事故とその後の生活のせいで、彼は時折私達と同じような雰囲気を見せる。非日常に生きる彼らでさえ日常側で生きているのに、なんで日常に生きる湊がコッチ側の表情を…。そんな事を考えていると、つい暗い気持ちになってしまう。

「湊はどうも思わないって言ったけど。私は湊にあんな顔をさせる桐条が許せない…」

自分のことでは一切感じなかった桐条に対する怒り。他人のためにそんな感情が湧くとは思っていなかったが、別に悪い事だとはいまは思わない。他人のために湧いた感情だが、結局は私が勝手にやって勝手に仇をとった気分になるという自己満足の世界だ。ペルソナ

は心の力に反応して強くなる。だから、私もきっと少しだけ強くなっているはず。なら、湊のおかげで手に入った力で、私が桐条に復讐をしよう。

「だから、そのときは……力を貸して、メーディア」

『ルルゥ……』

「うん、ありがとう」

そんな風に自分のペルソナ“メーディア”に話しかけ礼を言うと、私は湊を待たせていることを思い出し。自分の部屋を出て、リビングの方へと向かった。

――リビング　{湊　Ｓｉｄｅ}

僕が食材の片づけを終え、料理を始めていると完成する少し前にチドリが戻ってきた。なので、そのまま2人で食事をし、食べ終えたあとの片づけまでを済ませ今は休んでいる。

「ねえ、湊。本当に自分の事故を引き起こした相手が憎くないの？」

「え？　フフッ、また突然だね。まぁ、前にも言ったけど憎くないよ」

「でも、それがなかったら、湊は辛い思いをしないで済んだんだよ？」

チドリはソファーで僕の隣に座り、そんな風に言いながら僕の事をみて尋ねてくる。まぁ、確かにチドリの言う事は分かるし、いま彼

女が僕のために思ってくれていることもおおよそ理解できる。けど、どんなに言われても感情が湧いてこないんだよね。そう考えながら、僕は返事をする。

「まぁ、そうは言っても10年も前だし。僕は途中で感情を失ってるからね。記憶としては当時の事を覚えているけど、それは他人の家のホームビデオを見ているようなもんなんだよ。どうしても自分の事とは思えないんだ」

「他人のことでも、見てて嫌な気持ちになったりはするでしょ？」

「思っても一時の感情だよ。人は自分に無関係なら時と共に自身の記憶で上書きして、それに対して感じた感情すらも忘れる。だから、他人のために怒りや恨みを抱き続けるには、その相手が自分にとって自分かそれ以上に大切な存在である必要があるんだ」

そう答えながら僕はチドリの頭を撫でる。タカヤやジンが言っていたが、チドリは元々感情を表に出すどころか持ち合わせていない“人形のような少女”だったらしい。それが僕と会うようになって徐々に人間らしい感情を見せ始めているらしく、今も普通の少女のように僕の事を心配してくれている。それが嬉しくて頭を撫でているわけだが、本人は真剣に話を聞いていないと判断したみたいだ。

「……なんで話してるのに頭を撫でるの？」

「なんでって、チドリが僕のことを心配してくれてるのが嬉しくてだよ」

「べ、別に湊のことなんて心配してないわよ。ただ、他人に迷惑かけたやつが普通に生きてるのが許せないって思っただけ」

「フフッ、はいはい」

典型的なツンデレ的リアクションをとるチドリにそうやって適当な返事をすると、相手はそれに怒ったようで頭を撫でている僕の手を払おうとしてくる。

「もしかして怒ったの？」

「別に怒ってない。ただ、鬱陶しいとおもっただけ……なに笑ってんのよ」

「別に。ツンデレとかそっちっぽいリアクションばっかりとるなぁって思って」

手を払ってきたチドリを見てニコニコと笑っていると、笑顔の理由を尋ねられたので素直に答える。だが、チドリは何の話だという表情で口を開いた。

「ツンデレ？　ああ、なんかジンが見てるアニメにそんな言葉が出てたっけ。それってどういう意味？」

「普段は照れ隠しとかでツンツンしてるけど、心の中やたまに優しくつまりデレデレする人をそう呼ぶんだ」

「なっ！？　だ、誰がデレデレしたって言うのよ！　勝手な妄想しないでくれる？！」

「別に恥ずかしがらなくていいじゃん。大丈夫、チドリの愛はちゃんと伝わったから」

言葉の意味を説明すると途端に怒って来るチドリ。だが、直前にツンデレの話をしていた僕には照れ隠しにしか見えず、微笑ましく思ってしまう。そうして笑って言い返すと、チドリが急に立ち上がった。

「くっ、勝手な事ばっかり言って！」

《バシンッ》

「まったく、危ないだろ？」

「何で普通に受け止めてんのよっ」

「いや、叩かれたら痛いじゃん…」

恥ずかしさか素の怒りか分からないが、チドリは立ちあがると僕に向けて拳を放ってきた。それが顔面コースだったこともあり、当たりたくなかった僕は受け止める。だが、チドリはそれが気に入らなかったようで、さらに怒って来た。そんな理不尽な……。

そんな風に僕を殴ろうとするチドリの腕を掴んでいることも飽きたので、座ったまま足払いをかけてから腕を引っ張りチドリを倒すことにした。

「え？　うわっ！？《バスンッ》」

「はいはい、ちゃんと座ってようね」

「ちょ、離してっ。なに膝の上に座らせてんのよっ」

「あーあー、聞こえなーい」

そんな風に相手の言葉を無視して、膝の上で暴れるチドリを抱きかかえるようにしてホールドする。風花よりは重いけど、チドリも軽いなぁ。てか、公子もゆかりも軽いし、最近の子はこれぐらいが普通なのかね？

《ガチャ》

「ただいま帰りました。どうやら湊も来ているようで…おや」

「いま、帰ったでー。2人やからって変な事してへ…ん……」

「あ、おかえり。お邪魔してるよ。おっと、あんまり暴れないでよチドリ」

「馬鹿っ、またなんか言われるじゃない！　早くおろしてっ」

僕の膝の上に座っているのを見られたのが、恥ずかしいのかチドリはさらに暴れ始めた。本当なら、暴れる事も出来ないくらいガッチリとホールドすることも出来るけど、まぁ今日はそこまでするつもりはないので解放してあげることにした。

「ほら、森へおかえり」

「何の話よっ。てか、馬鹿じゃないの、なんで2人が帰ってきても抱いてんのよっ」

「ああ、別に私達のことは気にしなくて結構ですよ。仲良くしてても特別気にしたりしませんから」

そんな風に僕に怒ってくるチドリを笑ってみているタカヤ。後ろにいるジンは全く笑っていないが、彼的にはさっきみたいなのは全然OKらしい。

「ほら、タカヤもああ言ってるし、気にしないでいいじゃん」

「タカヤは気にしなくても、私と五月蝿いのが気にするのっ」

「おい待て、五月蝿いのってわしか？　別にわしかて、五月蝿く言いたくて言っとんちゃうぞ。チドリが湊と必要以上に親密になって危険な関係にならんようにやな」

「ほら、早速言われた。だから、嫌がってたのに」

チドリはそう言ってジンの事を無視しながら僕に文句を言ってくるが。別にチドリの方が力はあるんだから、五月蝿ければ実力行使で黙らせればいいのに。そんな風に思っていると、無視されていたジンが近寄って来た。チドリはそれを見て嫌そうな顔をしている。

「いいか、チドリ。何度も言っとるが、付き合うのはまだ早いからな。……お互い過去に色々あったようやし、お前は勿論、湊の事も弟みたいなもんや思うとる。けど、付き合うとなったら話は別やからな」

「だから違うって言ってるのに…」

「まぁ、良いじゃありませんか。私も湊のことは同志として認めています。ジンがそこまで言わずとも、2人もちゃんとした考えを持って行動しますよ」

タカヤはジンとチドリの話を聞くとそんな風に笑いながら言った。それを聞いてジンも渋々「それやったら、ええですけど…」と言っている。まぁ、心配しなくても今のところ誰とも付き合う気はないんだけどね。なんて、心の中で考えつつ今なにかに気付いたかのようにジンに話しかける。

「あれ？　ジン最近なにかあった？」

「あん？　何かってなにがや？」

「えっと、なんて言ったらいいんだろ。なんか“負け犬”みたいな雰囲気って言えばいいのかな？」

「なっ！？」「「クスッ」」

本当は事情を知っているんだけど、なにか雰囲気がいつもと違うことに気付いたかのように言うと。ジンは驚いたように声をあげ、チドリとタカヤは話しを聞いて小さく笑った。すると、ジンよりも早くチドリが口を開き説明してくる。

「えっとね、ジンったらこの前会った女と喧嘩して負けたの」

「まぁ、ジンから手を出してやり返されたので、文句も言えないのですがね」

「あ、あれは別に…そ、そうや。湊が来たらやらせよう思って用意したもんがあんねん。ホレっ」

そんな風にジンは強引に話題を変えると、僕に向かってボールのようなものを投げてきた。一体なんだろう?デジタル時計のような数

字を表示させる部分があるけど。そう思って、見ているとジンが説明を始めた。

「それは特殊な握力計や。かなり丈夫に出来とってな、握力計握りつぶしたなんて信じられんから実際にやらせよう思たんや。まぁ、蛇咬言うたからには２００は出してもらわんとな」

「ふーん。じゃあ、先にやってみてくれない？　見た方がやり方分かりやすいし」

そういって僕はジンに握力計を投げ返す。ジンもそれを受け取ると「まぁ、ええやろ。見とれよ？」といって。数字を表示させる部分のすぐ横にあるボタンを押して電源をいれた。そして、今度は腕まくりをして、呼吸を整え始める。…どんだけ本気なんだよ。

「いくでっ。ふんぬぅぅらっしゃあっ！！　……５６キロや」

「…私もやるから貸して」

「おん？　なら、もういっぺんボタン押したらリセットされるから、押してからやってみぃ」

「わかった…っ！！」

ジンがやっているのを見てやりたくなったのだろうか、チドリは貸してといってジンから受け取ると真剣な表情で握力計を見つめる。そうして、ゆっくりと息を吐くと思い切り握力計を握った。

「ふぅ…６１キロ、私の勝ち」

「なんやて！？」

「ほう、やはり私達の中で一番腕力があるだけありますね。では、私もやってみます。貸してください」

「わかった、はい」

チドリに握力で負けている事が分かると、ジンは驚いて表情が固まった。それを面白いと思ってみていたが、２人には普通のことらしくスルーしている。そして今度はタカヤが測るらしい。声的に蛇咬って言ってくれないかな。

「では…っ！！　さて…６５キロですか。いやはや、体格や性別に違いがあるのにこれくらいしか差がないとは、チドリはすごいですね」

「２人よりも握力使ったりする事してるからね。じゃあ、最後は湊だよ」

「了解。あ、ジン。これ本気でやってもいいの？」

「な、なんや、そりゃそうやろ。本気でやったってどうせ壊れんから安心せい」

「そっか。じゃあ、壊したらゴメンね……」

先に持ち主に本気でやる許可をとると、ジンもそれを了承してくれた。まぁ、本気と言っても魔力は使わないけど、いまの僕がどれだけ人間離れしてるか知るチャンスだからね。生身で出せる本気を測らせてもらおう。

「じゃあ、いきます……蛇殺（スネークジェノサイド）オオッ！！《バンッ》……あ」

「……壊れたね」

「ですね。言ってた割に簡単に壊れましたね」

「ちょー待ていっ！？　お前どんな力しとんねんっ、それ３００は測れるやつやぞ！？」

つい力を試したくなって本気で握ってみると、ボール型握力計は簡単に壊れてしまった。チドリとタカヤはそれを冷静に見ているが、ジンはかなり驚いているようだ。というか、壊れたボールを返すと直らないか調べているし、きっと高かったんだろうな。悪い事をした。そんな風に思いながら見ていると、ジンの言葉にチドリが返した。

「じゃあ、目的達成じゃない。湊は嘘ついてなかったって」

「アホかっ、どこに３００超える握力持ってるやつがおんねん。普通こんなんなると思わんやろ……あかん、完全に死んどる。お前そない力強いなら言っとけや」

「だから本気でやっていいのか聞いたんだけど。てか、壊したらゴメンとも言ったし」

僕がそう言うと、確かに尋ねられていたし許可を出していたため何も言い返せなくなるジン。てか、正直に言えば僕だってそこまで握力があると思っていなかったのだ。済まないとは思うが、分からなかったんだからしょうがないと思う。

「さて、じゃあご飯は作ってあるから温めて食べてね。僕はそろそろ帰るから」

「ありがとうございます。気を付けて帰ってくださいね」

「今日も下まで送る…」

「ありがとう。じゃあ、2人ともまたね」

そうして僕は挨拶をすると、自分の荷物を持ってチドリたちの家を出た。

――マンション前

上の2人に挨拶をすると、チドリが見送りをしてくれるということで一緒に下りてきた。

「今日はありがとう。いろいろ楽しかったよ」

「私も楽しかった……かどうか微妙なのも多いけど、ご飯とか作ってくれてありがとう」

「フフッ、なにそれ」

変な言い方でお礼をしてくるチドリに思わず笑ってしまうと、相手は少し恥ずかしそうにして顔を背けた。だったら、素直にお礼を言うか気に入らなかったことを注意していいのに。

「……湊、もし貴方の代わりに誰かが貴方のための復讐をしたらどう思う？」

「ん？　そうだね、どうでもいいかな。きっと相手も感謝して欲しいわけじゃないだろうし。まぁ強いて言うなら、そんな事をする時間があるなら僕と遊んで欲しいって思うな」

「…そう。なら、そういう人がいたらそう言ってあげればいいと思う」

チドリはそう言うと、やや俯いて暗い表情になった。うーん、多分だけど美鶴さんやメンバーらに復讐っていうか、桐条側と判断して攻撃するつもりなんだろうな。そのときは姿を明かすか女装したまま双方と敵対して止めるとしようか。そんな風に考えをまとめると、帰るためチドリの頭を撫でておく。

「そんな顔しないで、別に僕は大丈夫だから。それに誰かが代わりにしなくてもやるだけの力は持ってるつもりだし」

「そうね、蛇殺だっけ？　ジンも壊れると思ってなかったみたいだし、あんなことができるなら湊は大丈夫そう」

「うん、もしものときはチドリたちの事も守ってあげる」

そういってニコっと笑うと、つられる様にチドリも笑って口を開いた。

「フフッ、こうみえて私も結構強いから大丈夫」

「それでも守ってあげたいんだよ……じゃあ、そろそろ帰るね。おやすみ」

「うん、お休みなさい」

僕らはそうやって挨拶をすると分かれ、それぞれの住んでいる場所へと帰って行った。

第三十五話（後書き）

そういえば、たまにどんな風に書いてるのか聞かれるので。自分の書き方を紹介します。自分はまずゲームをプレイして原作でのセリフをＷｏｒｄに打ち込みます。今回の話ですと、こんな感じです←

７／８（水）
朝――校門
話し声が聞こえる。

話好き「もうすぐ夏休みだねー。どっか遊びに行こうよー！」

声の大きい「行きたい行きたい！　海も山も全部行きたい！　…っつっても、その前に期末テストだよ。火曜からだっけ…」

話好き「うわ、思い出しちゃった。…でもさ、今回は試験休みもあるし。何より夏休みが待ってると思えば！」

予鈴が鳴った。

午前――教室
鳥海「えーっと、来週の火曜から期末試験ね。こないだやったばかりなのに面倒ねー。あ、やだ、面倒っていうのは言葉のアヤよ。日本語って難しいわねー。じゃ、次、次。夏目漱石の“倫敦塔”か。“倫敦”で“ロンドン”って読むの。何となく読めるでしょ？　この時代、外国語をこうして文章に書いたのね。当て字だけど、結構センス問われる翻訳よね。じゃあここで、湊君！　はい問題！　ジャカジャン！　“ニューヨーク”、漢字で書くと？」

・紐育

鳥海「おっ！　見かけによらず、やるねー！　“ニューヨークへ行きたいかー！？”ってね……シーンとしないでよ。ジェネレーションギャップなんて、認めないわよ！？」

放課後――教室
今日の授業が終わった。

――ポートアイランド駅
友近「あ、有里か。なーなー、やっぱプレゼントするなら、花かな？　エミリのタイプから言うと、盆栽とかより、バラかな…。プレゼントして喜ばれたら、グッと仲が深まりそうだよな！」

夜――ラウンジ
ゆかり「…あ、お帰りー。私、これからちょっと風花たちと話があるから、上に行ってるね。」

・話って？

ゆかり「…あ、うん。ちょっと気になってることがあってね…」

風花「…さすがに作戦の直後ですから、みんなに疲労が伺えます。今日はゆっくり休んでくださいね…」

――作戦室
ゆかり「ああ、そうだ…！　昨日は殴ったりしてゴメン…！　本当はもっと早く言いたかったんだけど、みんなが居る時じゃマズいでしょ？　とにかく、ゴメンね。」

以上です。こんな感じでストーリー以外は使えるかなって思ったやつだけ打ち込んでます。そこからストーリーを起こし使えない部分はボツにして今回の話を書きました。よって、あえて言うなら「小ネタを拾ってあとは妄想」って感じですね。参考にはならなかったと思いますが、今後書き始めてみようかなって方は試しにやってご自分に合う書き方を探してみてください。

第三十六話（前書き）

そういえばコロマルって一人称は公式で『俺』ってなってますけど、口調はどんな感じなんでしょうね。湊というか犬語が分かる人視点のときは翻訳されたものも載せるつもりなので、色々と考えなければ…。まぁ、人間にしてみれば結構な歳で性格も義理堅く男らしいようなので、若干古めかしい口調にしましょうかね。

第三十六話

7／11（土）
朝――校門
最近、寮にいる2年生の女子たちがなにやら内緒で色々と調べているらしい。他の人間にばれないように作戦室や、学校の図書館で勉強しながらなど気を付けているようだ。他のメンバーは気付いてないから、上手くいってるっちゃいってると言えるけどね。そんな風に考えていると、最近では僕を避けていたはずの順平が声をかけてきた。

「おっす……。あー、そういや、もうすぐ試験か…勉強してる？」

「してないよ。最近は1人でタルタロスで鍛えてばっかり」

「…ふうん。まぁ、オレにはカンケーないけど…。じゃあ、オレ先行くわ」

「うん、僕はゆっくり行くから。じゃあね」

そういって順平と別れると、僕は言った通りゆっくり歩く。まぁ、僕を避ける理由はわかるけど、それは僕がケアするようなことじゃないからね。僕を嫌いになってもう部活もやめると言いだしたって止めるつもりはない。

（『ホントにそれでいいと思ってるの？』）

（「ん？　しょうがないじゃん。例えどんなに望んでも順平じゃ

僕の強さには届かないんだから。それが分かってて、気休めのための言葉をかける方が残酷じゃないかな？」）

（『そういう考えもあるだろうけど、順平だって部活に必要な存在でしょ。相手の自由を尊重するようで、自分がサボるための口実にするのはダメよ』）

（「はいはい。てか、みんなを強化してると僕が強くなれないから、テスト勉強してる間は別に自分の時間にあてて良いでしょ」）

順平と別れ1人考えながら歩いていると、彼女が話しかけてきた。なので、まわりにばれないよう、僕もそんな風に彼女と会話をする。頭の中で考えた事を話すような感覚ですれば相手に伝わるのだが、それなりの集中力がいる上に別に話すことの内容は大した事ないっていうね。

（「てか、これ疲れるんだけど。もう止めていい？」）

（『はぁ…どうなっても知らないから』）

僕が面倒だと言うと彼女はそれ以降なにも言ってこなかった。そうして会話をやめた僕は自分の教室へと行き、授業を受けたのだった。

放課後――教室

放課後になって帰る準備をしていると、ケータイにメールが着た。また真田先輩からのようだ。そう思いながらケータイを取り出し、メールを開く。

『今夜、幾月さんが来る。何か話があるらしい。戻り次第、４階

の部屋に集合だ』

ふーん。てか、いつも思うんだけど。あの人が来るからって絶対参加しないといけないのって、おかしいと思うんだよね。この前はミーティングが終わってから美鶴さんに起されて内容を聞いたけど。そんな風に掻い摘んで要点だけ教えてくれたらいいんだ。

「ふぅ…面倒だな。今日も1人でタルタロス行っておこうかな」

「まーた、そんな事言って。前だって最後まで先輩の膝を枕に寝てたくせに、今回はちゃんと起きて聞きなさいよ」

そんな風に僕の言ったことが聞こえたのか、ゆかりは後ろに振り返って話しかけてきた。けど、そうは言ってもね。……あ、そういう事か。

「チャンス到来ってこと？」

「っ！？　湊君の勘の鋭さはちょっと恐いくらいだね。まぁ、私はそう思ったから湊君にも居て欲しいな。だって、湊君が遭った事故にも関係あるかもしれないし」

「……じゃあ、君ら3人の頑張りを聞くために参加だけはしておこうかな。期待しても良いよね？」

「もっちろん、風花と公子も手伝ってくれたし。絶対に隠してた真実を話してもらうわ」

そんな風に今までこっそり何かを調べていた公子とゆかりが自信満々に言ってきたので。今日のミーティングは僕も真面目に参加する

ことにした。そうして、僕は何かの準備をするという3人と一緒に早めに寮へと帰った。

夜――作戦室

話があるということで、僕と部活メンバーと理事長が作戦室へと集まった。真面目に話を聞くと言ったが、客観的というか中立の立場に立つため僕は1人だけ機械の前の席に座って話を聞いている。そうして、全員が揃ったので、美鶴さんからこの前のホテルでの戦いの報告があった。

「……以上が、7日に行った作戦のあらましです。やはり、個体によっては一筋縄ではいかないようです」

「なるほど…敵も徐々に手強くなっているね。だけど、悪い話ばっかりじゃない。実は、今日みんなに集まってもらったのは…「待ってください。この際なんで…桐条先輩に訊きたい事があります」…？」

理事長が話をしていると、立ち上がりそう言って口を挟むゆかり。言われた美鶴さんは「私に…？」と言って不思議そうにしている。3人掛けのソファーの左に座るゆかりと、右に座る公子が真剣な表情なのに対し、真ん中に座っている風花は心配そうだな。そう思っていると、ゆかりが口を開き話し始めた。

「私だけじゃないと思いますけど、ここに来てから、ビックリの連続で…。私…少し流されて来た気がするし、だから、この際はっきりさせたいんです」

そういって先輩たちと理事長に視線を送るゆかり。その後、公子の方を見て公子が頷いて返すと、ゆかりは本題を話し始めた。

「ズバリ訊きますけど…。先輩、私たちにまだ何か大事なこと言ってないんじゃないですか？　例えば“影時間”や“タルタロス”の事、分かんないみたいに言ってましたけど…。あれって、１０年前の“事故”と関係あるんじゃないですか？」

「１０年前のジコ…？」

「ゆ、ゆかりちゃん…」

ゆかりが言い切ると、順平は何の話か知らないようで不思議そうに聞き返し。風花は若干泣きそうな顔でゆかりを少し落ち着かせようとしている。だが、今度は公子が立ちあがり話し始めた。

「学園の周りで爆発があって、たくさん人が死んだ話…。当時すごいニュースになった筈ですし、先輩は知ってますよね？」

「…ああ」

「幸い生徒は無事だったみたいですけど、でも、何かおかしい。なぜかちょうど同じ頃、一度に何十人も不登校になってるんです。…コレは偶然でしょうか」

公子は落ち着いた様子でそう言うと、美鶴さんの目をしっかりと見ている。あれって相手が嘘をついているだとか、隠し事をしていないかを知るための洞察眼だったと思う。普段もそれで常に相手の位置を把握したり、攻撃を予測したりで戦いを有利に進めてるけど。それを１人相手にかなりの集中力で使うって本気過ぎるでしょ…。

そんな風に公子やゆかりに呆れていると、美鶴さんが２人に尋ね返

した。

「…どういう意味だ」

「私たち、実は学園に残ってる昔の書類とか調べたんです。そしたら、不登校なんてのは記録だけ。ホントはみんな、急に倒れて入院したって…。似てると思いませんか…？　風花をイジメてた子が…入院した時と」

「……」

そう言われた美鶴さんは真剣な表情のまま黙っている。だが、２人にはそれが納得できないのか、やや感情的に問いただす。

「ちゃんと説明して下さい！　１０年前の事故…あの日、本当は何があったんですか？　学園は桐条グループが建てたんだから、桐条先輩は知ってるはずでしょ！　私、ホントの事が知りたいんです！」

「その事故の真相は、もしかしたら湊君の件にも関わってるかもしれないんですよ！　黙ってないで答えてください！」

「…隠してる訳じゃない。必要の無い事は告げてないというだけだ。しかし…」

「…仕方ないさ。君のせいじゃない」

「…分かった。全て話そう…」

興奮した様子で美鶴さんに向かって大声で問いただす２人に対し、

美鶴さんはとても答え辛そうにしている。だが、理事長が声をかけると、覚悟の決めたような表情になり真相を話すと告げた。それを聞いた2人が席に座り直すのを確認すると、美鶴さんは話し始めた。

「シャドウには幾つも不思議な能力がある。研究によれば、それは時間や空間にさえ干渉するものらしい。私達は敵と思ってるからあまり意識しないが、もしそれを利用出来るとしたら…どうだ？何か大きな力になるかも知れないと思わないか？」

「え…？」

「今から14年前、そう考えて実践に移した人物がいたんだ…桐条グループの先代、【桐条（きりじょう）　鴻悦（こうえつ）】……私の祖父だ」

美鶴さんはそこまで話すと暗い表情になり、視線を僅かに落とした。けど、これって前に知った記憶にあったことだな。彼女も肯定するような発言をしていたし、本当だったんだ。そう考えていると、美鶴さんは視線を上げて続きを話す。

「祖父はシャドウの力にいたく魅せられ…それを利用して、何か途方も無い物を作ろうとしていたようだ」

「途方も無いもの…？」

美鶴さんの言ったことに首をかしげながら聞き返す風花。それに頷き返すと、美鶴さんはさらに続きを話す。

「実現のために、研究者を集い。シャドウを大量に集めさせた」

「シャドウを集めたぁ？　うえっ……正気かよっ」

話を聞いて、呆れたような表情でそう呟く順平。まぁ、気持ちは分からなくもないが、逆に考えれば一網打尽にすることもできるんだ。別に全てを否定する事は無いと思う。

「しかし、１０年前…計画の最終段階で暴走事故が起き、実験は失敗…。制御を失ったシャドウの力で、後には忌まわしい痕跡が残る事になってしまった」

「それって、まさか…」

「そう…影時間と、タルタロスだ」

「「……」」

美鶴さんの言葉から“忌まわしい痕跡”を予測できた風花は驚いた表情で言葉を洩らす。そして、美鶴さんはそれに頷くとゆっくりと答えた。知りたがっていたタルタロスが出来た理由を聞いたにも関わらず、２人は黙っているが説明はさらに続く。

「記録では、集められていたシャドウは分かれて飛び散り“消失”したとある。満月の度にやって来るのは、この時のシャドウだ」

「“消失”…それでいつも、予想できない場所に…」

そう言って風花は説明に納得しているが、個人的にはちょっと疑問に思う。だって、分かれて飛び散ったんでしょ？なら、なんで２体が同じ場所に出たりするのさ？いや、その２体はかたまって飛び散ったのかも知れないけど。消失ポイントを確認して記録に残したりしてないのか？それがあれば出現ポイントとの因果関係を探れるの

に。と、そんな風に1人で思考の海に潜りかけると、黙っていたゆかりが口を開いた。

「ちょっと、いいですか？　今の話がホントなら、なんで学校がタルタロスに？　まさか…実験をやった場所って…！？」

「…そうだ」

「じゃあ…ウチの生徒が何十人も入院したっていう、あれも…」

「全て、君の考えている通りだ。傘下にあって、人も集まり、最も“好きなように出来る”場所…恐らく、ポートアイランドは最適だったんだ。実験の場所は、紛れもなく、１０年前の月光館学園だ」

そんな風にゆかりの言葉に淡々と返していく美鶴さん。きっと心の中ではとても辛く想っているのだろうが。桐条として振舞う彼女を他人が見れば、不祥事を起こした社長が形だけの謝罪をしているかのような一切の申し訳なさや感情といったものを感じない印象なんだろうな。

「それ…どういう事ですか…それじゃ、この部の活動って…。無関係の私たちを使って、その時の後始末ってこと？　…騙したんですか？」

「……」

ゆかりはそう言って美鶴さんに尋ねるが、美鶴さんはなにも答えない。その態度にさらに怒りが増したのか、ゆかりは再び立ち上がり。今度は真田先輩へと標的をかえる。

「真田先輩だって知ってたんでしょ？　これじゃ私たち、都合よく利用されてるだけじゃない！？　それとも先輩は、戦う理由なんて、どうでもいいって事なんですか？」

「そんな風に言った覚えはない！　理由なら…あるさ…」

「どう取ってくれてもいい…黙っていたのは、確かに私の意思だ。…済まなかった。隠す気など無かった。だが筋道よりも、君らを確実に引き入れる事の方が、私には大切に思えた。理不尽だろうと、戦えるのはペルソナ使いだけ…世界で私達だけだからだ」

ゆかりに言われ、答え辛そうにする真田先輩。そして、謝りながら美鶴さんは今まで黙っていた訳を話す。すでに桐条としての仮面は外れかかって感情が表に出てきているが、ゆかりはその辛そうな表情に気付かず「今さら…！」と斬って捨てる。

「それに、私には…力を得るかどうか、選ぶ余地など無かった。私は…」

「美鶴…もういい」

そういって、辛そうになにかを言いかける美鶴さんの肩に手をおき、これ以上の懺悔のような告白を止める真田先輩。そうして美鶴さんが話すのをやめると、今度は理事長が口を開いた。

「岳羽君、それに草摩君も。…罪は“過去の大人たち”にある。そして彼らは、みんな自らの行いによって命を落とした…。今はもう、当事者は居ないんだ。謂われの無い後始末なのは、みんな同じなのさ」

「でも……」

「事故から１０年…シャドウ達がどうして今になって目覚めたかは、本当に分からない。でも目覚めたって事は、見つけて倒せるって事でもある…。これ、どういう事か分かるかい？」

そういってメンバーらの顔を見回す理事長。しかし、他のメンバーはよく分からないのか、何も答えない。なので、理事長は少し笑ってヒントを出す。

「あの１２体こそ、全ての始まりなんだ。…と言ったら、分かるかな？」

「ヤツらを全部倒せば…“影時間”や“タルタロス”も消える…？」

理事長のヒントを聞いて真田先輩はそう答えると、途端にとても嬉しそうな表情になって理事長が再び口を開いた。

「その通り！　さっきは話の腰を折られちゃったけど、どうだい、朗報だろ？」

「本当なんですか！？」

「確証となる記録もある。ここからが、本当の戦いの始まりだね」

風花がその情報に驚き聞き返すが、理事長は情報ソースもばっちりだと答える。ゆかりはそれを聞き「ホントの、戦い…」と呟くが、理事長はそれに構わず話を続ける。

「事情はどうあれ、人を守る為なのは変わらない。シャドウ達は、だんだん力を付けてる。待っているだけじゃ勝てない」

「…はい」

「それに、タルタロス自体にも謎は多いからね。何故あんな巨大なものが現れたのか…僕らの知らない“答え”が、きっとある筈だ」

理事長はみんなを見ながらそうやって言う。言われたみんなも何か思う事があるのか、それぞれに何かを思う表情をしている。だが、そこで公子が再び口を開いた。

「……でも、湊君のご両親が死んだのはそんな実験をした桐条のせいじゃないですか」

「き、公子ちゃん」

「桐条がそんな無謀な実験をしなければ、せめて成功させてシャドウが飛び散ったりしなければ湊君のご両親は死ななかったのにっ」

「そ、それは…」

呟きながら怒りの表情を美鶴さんに向けた公子は、風花の声も聞こえていないようで立ち上がり相手を責める。言われた美鶴さんも自分がしたことではないとはいえ、桐条に責のあることに対して言われては何も言い返せない。けど公子、それって……。

「先輩のお父さんでも誰でもいい、周囲の人間がそれを否定し止めようと思えばできたはずなのにっ。どうして、そんな事になるまで止めなかったのよ！　当事者がいなくたって、それで桐条の罪が

「五月蝿いぞ、公子」っ！？」

あまりに一方的な言い方で美鶴さんを責める公子をそう言って黙らせると、席を立ち近付きながら口を開く。

「お前には関係のないことだ。それで桐条を責めるな」

「で、でもっ」

「フン、お前はいつから口応え出来るほど偉くなった？　私がやめろと言ったら素直に従え。私の言葉に刃向うな」

「も、申し訳ありません…」

こういう時は草摩として対応すると一番簡単に済むので草摩次期当主として振舞うと。公子は大人しくなり、僕の言葉に従う。その光景に他のメンバーは驚いているが、もう少しこのまま続ける。

「桐条よ」

「……はい」

「公子の言葉は気にするな、私は別にお前らを恨んでなどいない。不快な想いをさせて済まなかったな」

「いえ、私共の犯した「私が気にするなと言っているのだ」…わかりました。ありがとうございます」

美鶴さんはそう言うと、立ちあがって僕に礼をしてくる。いや、別にそこまでしなくていいんだけどね。そう思って心の中で苦笑する

と、もう一度公子の方を向いて話しかける。

「公子、ちゃんと美鶴さんに謝らないと駄目だよ。さっきも話してた通り、当時小さな子供だった美鶴さんには何もできることは無かったんだ。だけど、それを自分の罪のように背負って今は戦ってる。それなのに公子は“桐条”だからってだけで責めた。それが悪い事だってちゃんと分かるだろ？」

「……うん。先輩、八つ当たりのような怒りで責めてすみませんでした」

「いや、君の気持ちは分かる。私も君の立場なら同じように相手を責めたはずだ。私も気にしないから、君もさっきのことは気にするな」

「はい、ありがとうございます」

僕に言われ公子が美鶴さんに謝ると、美鶴さんはそれを優しい表情で許した。本当はいまも僕に対して罪悪感を感じてるんだろうけどね。まったく、公子も余計な…いや、僕のために怒ってくれたこと自体はありがたいかな。昔はそんな事してくれる人はいなかったしね。

けど正直、なんでも背負い過ぎてしまう美鶴さんにこれ以上背負わせることはして欲しくなかったな。そう思いながら、苦笑して公子の頭にポンポンと手をおく。

「ありがとうね、公子」

「ううん。嫌がってた草摩になって止めさせちゃったし、お礼言

われる資格なんてないよ」

「気にしないで。まわりの大人の態度が豹変するのが面倒だっただけだから」

「そうなんだ…」

僕がお礼をいうと公子は落ち込んだ顔をして返してきた。なので、草摩としての振る舞いが嫌だった理由をちゃんと説明すると、先ほどよりかはマシな表情になった。あとは勝手に気持ちの折り合いをつけるだろう。さて、んじゃ解散の流れで良いかな。

「理事長、話は終わりですか？」

「え？　ああ、そうだね。話はそれだけだ、解散してもらって構わないよ。みんなも部屋に戻ってくれたまえ」

「「「「「「「「「はい」」」」」」」」」

理事長が解散を告げると、みんなは席を立って自分の部屋に戻る準備をし始めた。なら、僕もすぐに下りていけるし部屋から出るかな。そう思って、ドアを開けたところで後ろから声をかけられた。

「さっきの含めてこっちは驚いてるってのに、オマエは相変わらず落ち着いてんな。ま、実力十分のリーダーさんだからな。どんなコトがあっても、取り敢えずテメーの身は守れるってワケだ。あーあ、ヨユーですな。オレみたいなザコには羨ましいこって」

「ちょっと順平くん」

そんな風に僕に声をかけてきた相手は順平だ。その後ろで風花が心配そうな顔をしているけど、さっきのゆかりと公子を含め誰も冷静にはならないみたいだな。まぁ、今回は他の人も後ろで心配そうな顔をしてこっちを見てるから、ちょっと状況が違うけど。そんな風に考えながら、僕は声をかけてきた相手に返事をする。

「まぁ、みんなは隠し事されてたって気持ちかもしれないけど、僕は知ってて傭兵として戦ってたからね。知ってる事をもう1回聞いたところで驚いたりしないでしょ。てか、冷静さと実力って関係あんの？」

「「「「「「なっ！？」」」」」」

僕が順平に冷静な理由を説明すると、なぜか他のメンバーらも驚いた表情をしている。どこか驚くところがあっただろうか？そう思っていると、美鶴さんが話しかけてきた。

「湊。き、君は自分のご両親の事故の原因を起した相手も知っていたのか？」

「まぁ、知ってたっていうか、思い出したって言った方が正しいですけどね。切欠を思い出して、シャドウの研究をしていたのは桐条だけって分かったらあとは簡単にわかりますよ」

「な、ならどうして力を貸してくれるんだ。いつから知っていたか分からないが、分かったなら契約を破棄したって…」

「まぁ、美鶴さんのことは好きですし、信頼もしてますから。そんな小さい理由で守りたい相手を裏切ったりしませんよ」

そう言いながら笑いかけるが、美鶴さんはまだ動揺したままのようだ。まぁ、別に今度のはケアする必要ないし。そのまま帰るとしよう。

「話は終わり？　なら、僕はいくね。ちょっと試したいことがあるから、今日もタルタロスに行ってくる。用があったらメールして。急ぎなら上の方のフロアに直接来てくれてもいいし。それじゃあ≪ガチャン≫」

僕は作戦室にいるみんなにそう言って寮を出た。さて、今日も特訓頑張ろうかな。

影時間――タルタロス・現段階上層フロア

作戦室でみんなに伝えた通り僕は1人でタルタロスへとやってきた。別に敵と戦う為じゃなくて、スキルとかを使っても大丈夫な場所がタルタロスくらいしかないから来たのだ。

『で、試したいことって？』

「魔力の応用実験だよ。部分的だけじゃなく全身に張り巡らして強化に使ったり、武器に纏わすことはできるようになったけど。他にも使い方があるんじゃないかってね」

『まぁ、貴方の挙げた使い方は初歩の発展とその次くらいのレベルだものね。魔力には能力者のタイプによって特化した使用方法があるわ』

彼女に訊かれて僕が答えると、そういって彼女は説明してきた。…ん？待てよ。そう言うの知ってるってことは、先に僕のタイプを知っていれば無駄な事せずに済むぞ。そう考えると、僕は彼女に尋ね

ることにした。

「ねえ、そのタイプってどんなのがあるの？　自分のタイプが分かればそれ用の技を練習するんだけど」

『そうねぇ。大きく分けると、３つくらいかしら。術者タイプ・火力タイプ・特質タイプって感じね。まず、術者について説明するけど。術者って言うのは魔力コントロールに優れていているの。他の媒体や術式を使って特定の事象を起したりもできるのよ。ちなみにこれの素質がなければ物質に魔力を纏わせるなんてできないわ。あれはかなり魔力コントロールが難しいのよ』

そう言いながら僕がエンペラーに対して使った武器魔装についても説明してくる彼女。けど、それなら僕は術者タイプなのかな？そう思いながらも更に続く説明を聞く事にする。

『次に火力タイプだけど、これは特に特徴がないわね。言ってしまえば持って生まれた魔力量の多さで決まるもの。魔力が多いから強化も半端じゃないレベルで使えるし。術者タイプみたいに色んな魔法は放てないけど、初級魔法でも馬鹿みたいに魔力を籠めて中級以上の威力で使えるっていう力でゴリ押しするタイプなの』

「へぇ、それってどの程度の魔力が必要なの？」

『そうね…まぁ、貴方なら十分よ。一級とは言わないけどかなり多い方だから』

「そ、そうなんだ」

にっこり笑いながら僕に彼女は話してくるが、正直に言うと少し難

しくなってきたぞ。素質はいろいろあるけど、一級じゃないってことは器用貧乏になる可能性があるってことだ。そんな中途半端は嫌だと思いながら最後の説明を聞く。

『で、特質タイプね。これは自分の魔力の質を変化させることができるっていう先の2つに比べると地味な効果ね。けどまぁ、攻撃なら使う術と魔力の相性を合わせてロスを減らしたり、身体強化に纏わせてる魔力を相手の魔力ガードをすり抜ける性質に変えれば普通に攻撃できるし。逆に防御なら相手の攻撃に強い性質に変化させれば完封できるから、これはこれで重要ね』

「……それの素質は？」

『…これは地味だけど3つの中で一番レアなタイプなのよ。人によって魔力の質っていうのは違っているのだけど、それは基本的に固定されているの。その質を変えるのは生まれた時点で特質タイプでもない限り修行しても緩やかに変化する程度だわ。だから、流石の貴方もこれの素質はないみたい』

彼女はそういって残念そうな顔をする。だが、個人的には魔力が多い術者タイプって感じかなと方向性が決まったので、むしろ嬉しいくらいである。なんでもできるのは無個性への一歩だからね。そんな風にくだらない事を考えていると、彼女が再び話しかけてきた。

『あ、でもある意味大丈夫よ。貴方の魔力って他の人よりも純度が高いの。だから、変化させないでも大概のモノに対応できるわ』

「えー…なにそれ。結局、僕のタイプわからないじゃん」

『そんな事言うもんじゃないわ。普通はタイプが決まってもそこ

まで強く効果を出せないんだから。全タイプをほどほど強く出せるなんて十分チートよ。むしろ新たに万能タイプって名付けて良いぐらいだわ』

「ふーん、そういうもんかねぇ」

そんな風に軽い感じに答えると彼女はムッとした表情をするが、軽く無視して腕輪に手をかざしジェムを取り出す。とりだしたのはマハガルジェムだ。彼女はそれを見て不思議そうな顔をしているが、僕はそれに魔力を通しながらジェムを持つ自分の腕にも魔力を纏わせる。

「いくぞ、マハガルっ《ブォオオッ》…くっ」

『…魔法を纏おうとしてるの？』

「ぐ……だあっ《ブワァ…》やっぱコントロールが難しいな」

『当たり前でしょ、すでに放った術を魔力で抑え込んでるだけだもの。けど、よく数秒もったわね。それが出来れば、魔法と物理の両方の特性を持って戦えるわ』

マハガルを抑えておく事ができず拡散させてしまう僕のやろうとした事を理解した彼女はそう言って笑顔を向けてくる。まぁ、彼女も言っていたが確かにそうだ。自分の魔力を使って発動した術なら、発動後も自分の魔力と同じ性質を持っているはずだ。

なら、それに魔力をコントロールして融合させれたら、普段使っている魔力外装やいざとなったら使おうと思っている魔力武装を魔法強化できることになる。それが出来ればモノレールの時のように加

速に魔法を使わないで、脚にマハガルを集めて超長距離の加速しながらの跳躍も可能だろう。完成すれば自分の戦闘型と言ってもいいくらいだ。

「まぁね、前々から少し考えてたんだよ。どうしても魔法だと広範囲に広がってしまうから、高威力の魔法を使おうとすればするほど友達と一緒に戦うのは難しいなって」

『なるほどね。まぁ、前例がないわけじゃないわ。初級魔法程度なら完全に抑えて拳に纏わせるくらいはできる者もいるから。でも、それには欠点があるのよ』

「欠点？」

そういって僕は彼女に訊き返す。すると、すぐに彼女は話し始めた。

『実際にやってみてわかったでしょうけど、それは魔力コントロールの関係で術者タイプしかまともに使えないのよ。他のタイプでは武器魔装すらできないんだから、当然よね』

「なら僕はクリアじゃないの？」

『そこはね。説明を続けるけど、それは常時放出と常時制御で本来の倍以上の魔力を消費するの。魔力を高いレベルでコントロールしてる間も魔力をどんどん消費する。そんな状態で動き回れると思う？』

僕の目を見ながら彼女は問いかけてくると、答える前に続きを話す。

『世界最高の術者タイプである魔女ですら初級魔法でそれを試し

て、出来たのは1歩踏み込むことだけ。それ以上はゆっくり歩いても上手く抑え込めず拡散していたわ。おまけに魔力がすぐに尽きてしまって、戦闘ではまず使い物にならないという結論に至ったの』

「その魔女ってだれ？」

『エリザベスたちの姉よ。1歩踏み込むしか出来ないとわかったうえで、それを用意したサンドバッグに叩きこむと魔力コーティングしていたのに本体にダメージをかなりの与えれたのだけれどね。確かに使えれば究極の戦闘特化型・魔法体術と言っていいけど。言った通り世界最高の術者タイプでも動けないのに、やや素質がある程度の貴方の魔力コントロールじゃ多分無理ね』

「…そっかぁ。結構良い案だと思ったんだけどね。ま、飽きるまでやってみるよ」

『ほどほどにしなさいよ』

そんな風に僕たちは喋ると、影時間が終わる前までタルタロスで練習を続けたのだった。

第三十六話（後書き）

マーガレットが魔女と呼ばれているとかってのは、オリジナル設定です。公式の方はキャラ含めよく知らないので、記憶の部屋みたいなの作ってたし魔女みたいな設定で良いかなって感じで決めました。

第三十七話（前書き）

三人称視点が多いと疲れますね…。

第三十七話

7／12（日）
昼――自室
今日は学校が休みだ。昨日は影時間終了ギリギリまで練習していたから、起きるのが遅くなってしまった。他の人はもう起きてるだろうな。そう思いながら気配を探ってみる。

「起きてると思ったけど、女子は部屋に篭ってるのか。なにをそんなに悩んでいるのやら」

『まぁ、風花はそこまで悩んでいないようだけれどね』

「風花は順平と同じで適性があって入っただけだからね。関係者の親族たちと比べるとマシなんだよ」

そんな風にベッドから起きあがり洗面台に向かいながら呟くと、彼女が話しかけてくる。言った通り風花がそこまで悩んでいないとすれば、それは目的意識の差だ。風花は自分が必要とされたい、自分だけの居場所が欲しいといった気持ちでここにいる。

その点、美鶴さんとゆかりは親が関係して巻き込まれたパターンだ。自分以外のことも絡んでいるために悩みも大きいのだろう。ま、公子は本来風花や順平側なんだけど。僕の事故が関係してるとわかって、ゆかりたち側になってしまったみたいだね。

『こんな状態じゃテスト前とか関係なく探索は無理ね。貴方も大人しくしてるか、お友だちのフォローやケアくらいすれば？』

「いいよ、面倒だし。悩みたいなら好きなだけ悩めばいいんだ。知らず知らせずここまで来たのは自分たちだ。大人だ子どもだなんて関係ない世界にいるんだし、自分の行動には自分で責任持たないと」

『フフッ、貴方はそれを契約で定められているものね。でもあの子達はまだ高校生、十分子供よ。流石に厳し過ぎるんじゃないかしら』

「無駄だって。僕が言ったってそれはまた誰かに流されたことになる。自分でどこか落とし所を見つけなきゃいけないんだ。僕の出番があるとすれば、そうなった後さ」

言いながら顔を洗い終え、着替える。彼女は僕の行動にやや不満のようだが、考えを変えるつもりはない。こんな事で躓いて立てないようじゃ、どの道戦っていく先で命を落とすことになる。なら、早めに手を引かせた方がいいんだ。

「よしっと…じゃあ、僕はちょっと出てくるね」

『はいはい。出かけるなら、メンバーになるべく会わないようにね』

「わかってる。それじゃあ、行ってきます」

『いってらっしゃい』

僕はそうやって挨拶をすると、部屋を出て寮からも出掛けることにした。

昼――辰巳ポートアイランド・路地裏　{Ｎｏ　Ｓｉｄｅ}

湊が寮から出た頃。真田は1人、辰巳ポートアイランドの路地裏へとやってきていた。昼間という時間帯もあり、いまは人の姿もまばらである。そうして、路地裏を進んでいると、シャッターの下りた店先の階段に座っている目的の人物を見つけた。

「暇そうだな、相変わらず」

「ん…？　テメェか…何しに来た。また連れ戻そうってんなら、話す事はねえ」

そういって声をかけられた荒垣は、真田の方へと顔を向けて面倒そうな顔をする。その様子に話しかけた真田はやや苦笑するが、構わず話し始めた。

「…そんなんじゃない。腐れ縁の相手でも、たまには心配になる事もある」

真田は突然柄にもないことを言い始め、言われた荒垣も「ああ？」といってその様子を怪訝に思う。だが、そんな荒垣の様子に気付かず真田は言葉を続ける。

「お前とも長いな…孤児院で顔を合わせてから、もうすぐ１４年か…。よく美紀とお前と3人で、まだ新地（さらち）だったこの辺を夜まで走り回ったな。フ…影時間どころか、”時間”なんてものに目が行く事さえ無かった」

「ったく、変わらねぇな……弱音なら、仲間に吐きやがれ」

「ッ…なんだと？」

真田が昔のことを懐かしがりながら話すことで、相手の状態を理解した荒垣。しかし、よく知る腐れ縁の幼馴染だからこそ荒垣はあえて突放すことした。言われた真田は怒ったように言い返すが、荒垣はそれに構わず続ける。

「普段のテメェは馬鹿みてぇに前しか見てねえ。昔の話なんかしねえ。分かり易すぎんだよ」

「……思い出話くらいするさ…俺だってな……」

図星をつかれた真田はややばつの悪そうな表情をしてそう返し暗い表情になる。荒垣はそんな相手に心の中では「馬鹿野郎が」と思うが、それを口に出す事はしない。そうして、少しの間が空き荒垣が帰ろうかと思ったところで真田が口を開いた。

「実はな…影時間やタルタロスを消す方法が、ついに明らかになった」

「本当なのか…？」

真田のいったことが驚きのあまり信じられず聞き返す荒垣。そして、聞かれた真田は「ああ…」と短く答えてから、再び話し始めた。

「…今まで俺は、強くなる事さえ出来れば、正直、他は二の次だった。だが昨日、目的も無く戦ってるのかと正面から言われて、とっさに返せなくてな…」

「戦う理由か…そんなもん、それぞれだ。桐条みてえに自分の義務だと思って戦うやつ。有里みてえに友達だったか？　それを死な

せたくねえって戦う野郎とかな。別に正義の味方やってるわけじゃねえんだ。理由がねえなら、いっそ手を引きゃいい…俺みてえにな」

そんな風に最後は吐き捨てるように話す荒垣。聞いていた真田は不器用ながらも自分を心配してくれている荒垣に思わず苦笑し、きた時よりもふっきれた表情で顔を上げた。

「お前とは…違うさ。と言うか、お前に説教をくうとはな…ヤキが回ったもんだ」

「……」

「邪魔したな」

真田はそういうと片手を上げて挨拶し、路地裏を去って行った。その後ろ姿を見ながら残った荒垣は呆れたように呟く。

「ったく、ガキが。ちっとも変わってねぇ…だが、あいつが参るたぁ他はどうなってんだ？　……まあ、俺にはもう関係ねえか」

最後に小さく呟くと荒垣は真田とは逆の方へと去って行った。

――風花自室

真田と荒垣が会話をしている頃、風花は寮の自室でパソコンをいじっていた。そうして、ひと息ついて紅茶のカップに手を伸ばそうとすると、部屋のドアがノックされた。

《コンコン》

「はい」

『ちょっと…いいか？』

「先輩…珍しいですね。あ、どうぞ」

風花はノックしてきた相手が美鶴だと分かると、かるく驚きながらも入室を許可する。そして、許可された美鶴はゆっくりとドアを開けると部屋の中へと入ってきた。

《ガチャ…バタン》

「戦いのバックアップだけじゃなく、色々な調べ物も得意みたいだな」

「あ、す、済みませんっ、皆さんに無断で、私…」

美鶴に声をかけられた風花は怒られると思い、少しビクビクとしてしまう。まぁ、仮にも上級生であり作戦時とは別に寮内ではリーダー的な立場にある、美鶴や真田に隠れて色々と調べていたのだ。多少、危ない方法で得た情報もあるだろうし、そんな事をすれば怒られると思っても無理はない。だが、対照的に美鶴の表情は柔らかいものだった。

「いや、君にああいうスキルがあるなら、折り入って頼みがある。10年前の事件…あれの真相を、分かる限り調べて欲しい」

「でも、あの事件の事は、一般にはたぶん…」

「調べて欲しいのは、桐条が保有してるサーバーだ」

柔らかい表情から一転真剣な表情になると、そういって1枚の紙を風花に渡す美鶴。そこにはサーバーへの行き方と美鶴のＩＤとパスワードが書かれていた。渡されたので思わず受け取ってしまったが、風花は心配そうな表情で美鶴に尋ねた。

「それって、侵入…宜しいんですか？」

「私のＩＤとパスワードを預ける。君が罪に問われるような事は決してない。詳しい事実が知りたいんだ」

そういった美鶴の表情からは、純粋に真実を知りたいという感情のみが伝わって来る。それが分かった風花は「先輩…」と小さくこぼすが、美鶴は風花を気遣ってか言葉を続ける。

「勿論、無理強いする気はない」

「分かりました。私に出来る事なら、協力します」

「そうか……済まない」

無理強いはしないと言った美鶴に対し、風花は了承という形で答えた。そこには自分で役に立てるならという善意しか見られない。その事に安心しながら美鶴は風花に礼を言った。

そうして、パスワードなどを渡し終え美鶴は部屋に戻ろうとするが、少し気になったことがあるので風花に尋ねてみることにした。

「山岸、君は…不満は無いのか？　事情はどうあれ、私は隠し事をしたまま、君たちを戦いに巻き込んだ。恨み言の1つも、言いたい筈じゃないのか？」

「それは違います。私の家って…親族がみんな医者ばかりで、ウチだけが医者をしてなくて…両親が私の事にすごく熱心なのは、そういうコンプレックスを見返す為なんです。だから、家に居るの、正直つらくて…でも、ここには私にしか出来ない事があって、それを必要としてくれる人がいる…。恨み言なんて、無いです」

そういってニコッと笑った顔を美鶴に向ける風花。その表情は昨日作戦室から出る前に湊が美鶴に向けた笑顔にそっくりの親愛の気持ちを籠めた無邪気なものだ。それに気付いた美鶴は少し自分の心が軽くなるのを感じながら口を開いた。

「君はここに必要な人間だ。代わりは誰にも務まらない」

「そ、そんな…」

「恩にきるよ…邪魔をしたな」

美鶴はそういって風花に挨拶をすると、静かに部屋を出ていき。残った風花は早速調べ物を始めることにしたのだった。

――辰巳ポートアイランド駅前

他の者がそうやっているのと同じ頃。順平は1人気晴らしに辰巳ポートアイランドへとやってきていた。なにか映画でも見るかと映画館の上映ラインナップをみるが、とくに興味を引かれるものもなく何もしないまま順平は映画館を出た。

「タルタロスも影時間も消える、か……チッ！　消えていいじゃんか…そういう為に戦ってんじゃんか…なのに、なんでオレ…クソ

ッ！　なんでこんなモヤモヤすんだッ！」

そういって順平は昨日告げられた話を思い出し、１人でイライラとした感情のやり場に困り。それがまた新たなイライラを募らせるという悪循環に陥っていた。

順平も昨日告げられた話が朗報だと言うのはわかっている。自分たちはシャドウから人々を守り、シャドウを全て倒す事が目的だ。ならば、その方法が分かった事はとても素晴らしいことだと思う。だが、それとは別に感情の面ではそれを上手く受け入れられていなかった。

そんな風に１人で、イライラとして駅前を歩いていると、風花をいじめていた者に似た格好をした女子が２人話しながら歩いているのが目に入った。そして、２人の会話も聞こえてくる。

「…アッツー。まだ7月なのに…」

「つーか、ウチらもう3年じゃん？　こうやって制服で寄り道とかすんの、ナニゲにもう人生ラストっぽいよね」

「いーよ別にぃ。早く大学とか行って遊びたいジャン」

２人の女子はそんな風に会話をすると、そのまま順平の前を通り遠くへと去って行った。そして、２人の会話を聞いていた順平は何かを理解したのか、自嘲気味に口を開いた。

「はは、そっか…なんか、分かっちった…。戦うの、使命とか思って夢中んなってたけど、考えてみりゃオレ…そればっかじゃん。それ無くなったらオレ…それ無くなったらオレ…他になんもねえじ

ゃん」

言いながら過去の自分を思い出す順平。そして、それはさらに続く。

「ハハ、正義の為とか…ウソじゃん。しかも、戦うのだって…アイツどころか全員に水空けられたまんまじゃんか…。あーっ、クソッ！　全部ハンパじゃんよ、オレ！　ハァァ…なんでこんな弱いんだ、オレ…」

小さくそんな弱気なことを呟いた順平は、そのままどこかへと去って行った。

――ゆかり自室

順平が1人そんなことをしていた少し後、ゆかりは1人で自室にこもっていた。ベッドに座っているゆかりの手には少しに日に焼けたような色になった手紙が握られていた。

「……悪い予感だけ、どんどん当たってく…形の無いものを信じてたって、そんなの無駄なのかな…。父さん…春先に届いたこの手紙…読み返すの、もう何度目かな…」

そういってゆかりは握っていた封筒から手紙を取り出し、1枚目の手紙に目を通し始めた。

《ペラ》

『”１０年後の家族へ。”

明日、ムーンライトブリッジの開通式の会場から、この手紙を出すつもりです。

手紙はタイムカプセルに入れられて、届くのは１０年後です。

１０年経ったら…ゆかりは１６歳か。こんなにちっちゃい君が、

もう高校生なんだね。』

「……」

1枚目の手紙を読み終えたゆかりは、無言のまま手紙をめくり2枚目の手紙を読み始める。

《ペラ》

『僕は、仕事でいつも、君を寂しがらせてるけど、君はいつも笑顔をくれる。

今、お父さんは、仕事にやり甲斐を感じてる。”桐条”さんから主任研究員を任されたんだ。

すぐに、大きな仕事も待ってる。ここまで認めてもらえたのは、素直に嬉しい事だ。

でも、誓って言おう…君や母さんの未来より大事な物なんて、僕には1つも無いんだ。』

「父さん…」

すでに死んでしまっている父が自分たちのことを一番に考えてくれていた。そんな風に愛されていたことが分かると、気分が落ち込んでいる事に加え余計に父がいないことの辛さが襲ってくる。だが、ゆかりはさらに手紙をめくり続きを読むことにした。

《ペラ》

『ゆかり…毎日は楽しいかい。希望をもって、前に進んでいるかい。

いま隣に居る小さな君のように、明日を待ち遠しいって、感じてるかい。

これから10年、たとえどんなことがあっても、君は幸せであり

ますように。
…それじゃあ、となりに居る母さんとこの心配性な手紙を大いに笑ってください。
２０００年・３月６日。岳羽　詠一朗。』

手紙を読み終えたゆかりは少し泣きそうになりながらも、「フゥ…」と息を吐き呼吸を整え気持ちを落ち着かせる。そして、気分を落ち着かせたゆかりは目を開けた。

「どんなことがあっても…か……。信じるしかないよね……。私は逃げない。母さんみたいにはならない。絶対…」

そういってゆかりは手紙をおくと決意の籠めた瞳で立ちあがった。

――公子自室　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

昨日の作戦室のミーティングのあと、お風呂に入ったり軽く勉強したりとしてみたが気分は晴れなかった。考えないようにしてもどうしても、湊君の事故の事を考えてしまう。

「ふぅ…ダメだな、私…」

そんな状態では寝ようとしてもなかなか寝付けず、寝れたと思えばすぐに目が覚める始末。そのため今日は寝不足だ。だけど、別に頭がぼーっとするとかいう事はない。まぁ、普段はちゃんと睡眠をとっているから１日くらい寝不足でもどうということないのだ。

「先輩や桐条のことはあの時しか怒ってないけど、やっぱり事故を起こした人たちのことは許せないな。怒りの対象が特定の人物ってわけじゃないからスッキリしないんだよね…」

そんな風に言いながら自分のベッドにゴロンと横になる私。湊君は自分で言ってたしきっと誰の事も恨んではいないのだろう。それはきっと草摩の人間に対してもだ。どこまでも客観的に自分に起こった出来事をとらえているように思う。

「でも最近の湊君は…」

呟きながら最近の湊君の様子を思い出してみる。というより、前に単独でタルタロスを進もうとしたときから既に兆候は出ていた。そして、最近になって余計にその雰囲気を感じる事が多くなっている。

「なんで湊君は昔の湊君に戻りかけてるの？　ふとした時に目から光が消えてどこかを見てる。たぶんだけど、女子メンバーもそんな湊君の変化に気付いてる」

何度考えても原因がわからない。最近の湊君は以前にも増して学校や寮での生活を楽しんでいると思う。それだけでなく影時間でも冗談のようなことをかまして楽しんでいるほどだ。心が壊れていたときとは正反対の状況の筈なのに……。

そんな風に湊君の退行の理由を一晩中考えてみるが、結局その原因はいまになってもわからなかった。もしかしたら知らない記憶とやらが関係しているのだろうか？

「けど、そうなってくるとお手上げかな。どんな悩みがあったとしても湊君は話してくれないから…」

自分で言ったことだが、それを聞くとやはり哀しくなってくる。私は湊君を家族だと思ってるし、弟と思いながらも最近では異性とし

ても惹かれている。いや、既に弟よりも異性として意識してる部分の方が多いだろう。

だが、自分が彼の事をどんなに心配しても彼は笑っているだけで、自身の悩みを相談してくれはしない。むしろ、私を含めたメンバーたちのために裏で色々と動いてくれているくらいだ。順平はそんな湊君に嫉妬してあたっていたが、それも湊君に依存し彼が怒ったり嫌ったりしないと分かっているからこそ出来る甘えだ。既にこの寮生の誰にとっても湊君は居なくてはならない存在になっていると思う。

「はぁー……モテモテだね、湊君は。お姉さんは心配ですよ、いつかどこかに行っちゃうんじゃないかって」

そう呟いて思わず苦笑する。みんなに言われ続けていたが、やはり自分も湊君に依存しきってしまっているらしい。『どこかに行ってしまうんじゃないか』…この不安は常にあった。心を無くしてしまっていたときは、ある日突然消えてしまうんじゃないかと思うような存在の希薄さからの物だった。だがなぜかそれは今でも時折感じる事がある。きっと退行しかけていることが原因なんだろう。やはり、どうにかして退行の原因を取り除くほかないようだ。

「やっぱり私も頑張らないといけないみたいだね。大丈夫、絶対に湊君を昔の湊君に戻らせたりしないから。湊君が話してくれなくても、勝手に調べて勝手に悩みを取り除いてあげるんだから」

私はそういうと『何者からか湊君の心を守る』という決意を固め、ベッドから起き上がった。そう、いまはこんなところでウジウジとしてる暇はないのだから。

――ムーンライトブリッジ　{湊　Ｓｉｄｅ}

僕は寮を出ると1人歩いてムーンライトブリッジへとやってきていた。今までも何回か見たりはしていたけど、歩いてきた事は無かった。

「……ここが事故現場か、綺麗なもんだな。まぁ、すでに１０年も経ってるしね」

そんな風に呟く僕の傍には誰もいない。ちょっと1人になりたいと言ったため、彼女はどこかへ行っているのだ。寮で別れたからもしかしたら僕のベッドで寝てるのかもしれないけどね。

「……やっぱり何も感じないな。親の死になんの感情も湧きあがらないとは、やっぱり僕の心はどこか壊れているみたいだ」

自分の今の状態を確認するが、それもどこか他人ごとのような雰囲気だ。そして、自分の心が壊れているのに苦笑してしまえる自分にはやっぱりなと思ってしまう。公子や伯父さんたちに再び心という命を貰った。けど、壊れた心が完全に元通りになる訳なんてなかったんだ。

「命への執着の欠落。自分だろうと他人だろうと、相手に関係なく命に価値を見出せない。生物の中で最も『生と死』または『命』というものに意味付けや価値を見出している“人間”にとっては致命的な欠陥だ」

そんな風に自分の壊れ具合を実際に言葉にしてみて、再び自嘲気味に笑ってしまう。まぁ、壊れているからどうしたって程度の感想しかないんだけどね。別に命を大切に思っていようが、どうでもいいと思ってようが結局は死ぬ。生前のその思想の違いによって寿命が

延びるなんて話もないのだから。

だが、人はそれを頭で理解してても結局は道徳や感情が働き勝るらしい。路地裏では荒垣さんも公子も僕に向かって怒っていた。大型シャドウ戦の日に無茶をすれば、ゆかりや他のメンバーも怒っていたっけ。フフッ、考えてみると僕はとても恵まれている。自分のためを想い涙を流したり怒ってくれる人たちがこんなにもいるなんて。

「けど……やっぱり理解できないんだよね。僕のためを想ってくれるのは嬉しいけど、なんでそこまで感情の揺れを起せるのかがさ。そんなに嫌なら幸せな記憶だけにすがっていればいいのに」

そうだ、嫌な事からは目を背けるのが賢い生き方だ。辛いのならば記憶に蓋をして、楽しかった記憶だけを壊れたオーディオのように延々と繰り返していればいい。

「僕なんて結局は1度死んでる……いや、あの人があの時助けてくれなければ肉体も死んでたかな？　なら、2度の死を越えた存在だ。そんな普通でないモノのために人間がわざわざ感情を……やっぱり分からないな」

僕はそんな事を思いながら、事故現場を後にした。

夜――ラウンジ

寮に帰ると、みんなはまだ部屋にいるようでラウンジには風花の姿しかなかった。

「あ、お帰りなさい」

「うん、ただいま」

そういって僕が帰って来たことに気付いた風花に挨拶を返すと、僕はパソコンで何かを調べている風花の元へ歩いていく。

「今日はタルタロスは無理だね。みんな部屋で勉強してるみたいだし。うん、勉強…誰も顔を見せようとしないのは、勉強してるからだよね？」

「そう思いたいけど…ま、みんな気持ちの整理が必要なんでしょ」

「そうだよね…部屋にこもってるのは、勉強のためだけじゃない…」

きっと風花は僕に「そうだよ、テスト前だからね」と肯定して欲しかったのだろう。だが、僕はそんな無駄な慰めをする気はないので普通に返した。それを言われた風花はどこか辛そうにしながらも、メンバーらの現状をちゃんと受けとめようとしている。ふぅ…、なんでそんなに悩むのやら。

「風花♪」

「っ！？　え？　な、なんで抱きしめるの？」

「風花が暗い顔してるからだよ。大丈夫、みんな自分なりに答えを出すから。それまでは見守ってあげよう？」

椅子に座っている風花に後ろから首に手を回すように抱きしめると、そうやって励ましてみる。なんとなくでやってみたが、風花はそれが少し嬉しかったみたいでやや柔らかい表情で笑顔を作った。

「そう…だね。うん、なら私も自分ができることをして待ってるよ」

「そうそう、それが良いと思うよ《チュッ》じゃあ、僕は屋上にいるから。用があったら呼ぶかくるかしてね。バイバイ」

「ちょ、ちょっと、湊君っ!?　い、いま私のほっぺにチュッって!?」

「アハハ、お別れするときの挨拶だよ。じゃあね」

僕は風花にそういうと、屋上へ行くために階段をあがっていった。あとには僕にキスをされて驚いている風花だけが残る。

「もう…湊君ってば。けど、元気づけようとしてだよね？　やっぱり優しいな、湊君は。ありがとう、湊君…」

影時間――屋上

風花と別れ今日も1人で屋上にいると、背後に気配を感じた。なので、今日も振り返らずに挨拶をする。

「やあ、ファルロス」

「フフッ、こんばんは。また会ったね。僕ら、初めて会ってからどのくらいかな…時が経つのは、あっという間だね。ペルソナ使いとしての日常はどう?」

そういってファルロスは寮の縁に座ってタルタロスを見ている僕の隣に腰掛ける。どうって言われてもね。

「僕は正確にはペルソナ使いじゃないけどね。でも、何かが欠けているような気がするよ。いや、そもそも自分の居場所はここじゃないような感覚かな」

「誰がなにを言ったとしても“ここ”が君の居場所さ。はやく、そう思えるといいね」

「フフッ、そうだね。ありがとうファルロス」

ここが僕の居場所だと言ってくれたファルロスにお礼を言いながら笑いかけると、ファルロスも笑顔で「いえいえ」と返してきた。あってから数ヶ月、だが回数にしてみれば指の数で足りるほどだ。しかしそれでも、僕は不思議と昔から一緒にいる親友のような気持ちを相手に抱いていた。

そんな風にファルロスを見て思っていると、少し真剣な表情になって相手が話し始めた。

「やって来る“終わり”について、また少し思い出したんだ。“終わり”が来ちゃう原因は、たぶん、ずっと前の出来事にある。そう、確か…１０年前だ…ねえ。君が両親を亡くしたのも、確か…１０年前だったよね」

言われてまた昔のことを思い出す。といっても、大きなシャドウと僕を助けてくれた人の姿だけだ。意識が朦朧としてたせいで自分が乗ってた車のことなんてあまり記憶に残っていないから。僕がそうして過去のことを思いだしている間もファルロスの話は続く。

「ペルソナはね、使う人の“鏡”なんだ。だからペルソナ使いは、

自分自身の本当からは逃げられない。でも僕は、それでも君と共にあるよ。友達…だからね。」

「…なら、力を使えない僕は本当の自分も封じられてるのかな？だったら、その本当の自分とやらを知ってみたいよ」

「…すでに運命は動きだしてる。近いうちにその本当の自分というのにも会えるかもしれないね。それじゃあ、おやすみ…」

「うん、おやすみ」

ファルロスはそんな風に僕の挨拶を聞くと消えてしまった。じゃあ、僕も寝るとするかな。そう思い立ちあがると、僕は部屋へ戻り休むことにした。

第三十七話（後書き）

Ｐ４Ｇは本体発売日に発売らしいですね。本体はいつ買うか分かりませんが、ソフトはとりあえず予約購入しようと思います。

第三十八話（前書き）

今回はコロマルが喋ります。いろんな本とかで口調（アイギスの翻訳）を調べたんですが、男らしいってくらいしか分かりませんでした。なので、勝手に口調を作ってます。しかし、一人称の『俺』っていうのは作中でアイギスが言ってたので正しいはずです。

第三十八話

7／13（月）
朝――校門
今日も1人で学校へ向かっていると、近くを歩いている女子生徒の話し声が聞こえてきた。

「あーあ、明日から試験だよ…こないだ終わったばっかな気がする…」

「どーしよ、今回も赤点だったら…。つーか、名前貼り出すのカンベンして欲しい…」

「あれさ、成績悪いとバレるじゃない？　周りから温かい目で見られるんだよね…」

そう言えば順平も後輩の女子からそんな目で見られたとか言ってたっけ。そんな風にくだらないことを考えていると、予鈴が鳴ったので急いで教室へ向かい授業を受けた。

放課後――長鳴神社
今日の授業が終わって別にやる事もないが、そのまま帰るのはあれなので少しばかり寄り道して帰ることにした。まぁ、他のメンバーも同じような考えで寄り道するかもしれないから、誰もこないと思われるここに来たんだけどね。

「ワフ！（おぉ、久方ぶりだな）」

「うん、久しぶりだね。元気にしてた？」

「ワンワン！（ああ、至って健康だ）」

「そっか、なら良かったよ」

そんな風に神社に着くと虎狼丸が僕を迎えてくれたので、神社の境内へと入っていく。今日はとくに何も買ってきてないから、純粋にお喋りしにきただけだ。そう考えながら公園スペースのベンチに座ると、虎狼丸と話を始める。

「最近はどう？　弱いシャドウ程度なら問題ないだろうけど、前みたいな少し大きめの敵がきたら君じゃキツイだろ？」

「クゥーン…ワフッ（それはわかっているが、やつらにこの場所を傷つけさせる訳にはいかないのだ）」

「まぁね。どうしようもなくても、守るために戦うことは必要だと僕も思うよ。けど、この前は僕がこなかったら危なかっただろ？　だから、勝てない相手とは戦っちゃダメだよ。そういう時は動きで攪乱して影時間が明けるのを待つんだ」

以前、1人でタルタロスに行こうとしたとき偶然シャドウの反応を捉え僕が現場に行くと、そこには大きめのシャドウ相手に牙だけで立ち向かっている虎狼丸がいた。虎狼丸が適性を持っているのは知っていたが、まさかイレギュラーシャドウと戦っているとは思わず驚いた。だがとりあえずシャドウを拳で消滅させると、傷ついていた虎狼丸を回復させ危機を救ったのだ。

そんな事もあって僕は虎狼丸から感謝されるようなり、今ではたまに話す仲になっている。そんな僕が虎狼丸の目を見て真剣にいうと、

相手も反論できず静かに頷いた。

「ワンワン！（君にそこまで心配されては頷くしかないな。わかった、出来るだけ戦闘は避けるとしよう）」

「フフッ、それなら安心かな。でも、呼んでくれたら急いで向かうよ？」

「ワフッ（いや、そこまで甘えるつもりはない。君には既に救われているからな。気にかけて貰えるだけでもありがたいというものだ）」

虎狼丸はそう鳴いて首を横に振る。本当に犬とは思えない程の義理堅さと誠実さだな。おまけに相手の事を考えた遠慮深さも持ってるときてる。冗談抜きで虎狼丸の方が順平よりも人間ができてるよ。順平は犬に負けて悔しくないのかと、そんなくだらないことを考えつつ、返事をする。

「別に気にしなくていいよ。僕だって暇でやってることだし、いつも来られる訳じゃないからね。てか、友達なんだから遠慮なく手を貸せって言って良いのに」

「クゥーン（そうは言っても、俺と君では種族が違う。人には人の、犬には犬の領分があるのだ。ならば、こちらの事情で人間である君の生活を脅かす事はできんよ）」

「ふーん、そういうもんかな？　ま、それでも僕は君が望むなら助けに行くよ。友達だからね」

「ワンワン！（ハハハッ、犬である俺を友達とは君は変わってい

るな。だが、その心遣い感謝する。俺も君を友人だと思っているぞ）」

僕が虎狼丸を友達だというと、虎狼丸は嬉しそうに尻尾をパタパタ振りながらそう鳴いて笑った。フフッ、最近はこんな風に明るくお喋りができないから楽しいな。みんなも早く立ち直るか吹っ切るかしたらいいのに。

「はぁ…寮でもこんな風に話せたらいいのにな」

「ワフ？（うん？　寮というのは前に会ったあの娘たちのいるところか？　そういえば、散歩で少しばかり見かけたが。なにやら暗い表情をしていたな）」

「その場所であってるよ。最近ちょっとトラブルっていうのかな？　まぁ、影時間関係で隠し事やらをしてたってのでもめてね。みんな少し暗くなってるんだよ」

「ワンワン（仲間に隠し事は良くないと思うが、あれは人間の世界でも特殊なのだろう？　ならば、全てを話す事が出来ないのも無理はないと思うがな）」

僕が事情を軽く説明すると、真面目な顔でそんな風に鳴いてくる虎狼丸。うん、僕もそれに同意なんだよね。まぁ、仲間だと思ってるからこそ許せないこともあるんだろうけど、それならいっそ僕みたいに仲間を作らなければいいのに。

「みんなまだ子供だからね。頭で分かってもそんな風に割り切れないんだと思うよ」

「クゥーン（それはまた難儀だな。俺が小さい頃は…といっても人では勝手が違うか。仲間というのは付き合うのは難しくとも、掛け替えのないものだ。共に戦ってきたのならそれを分かっているはず。きっとすぐに元通りなるだろう）」

「……うん、そうだね。みんなは仲間なんだから仲良くして欲しいもんだよ」

「ワン！（それでは君は仲間ではないように聞こえるぞ？　君もあの者たちの仲間なのだろう？）」

僕の言い回しが気になったのかそう鳴いて、首をかしげる虎狼丸。こんなちょっとした言葉のニュアンスの違いでも気付くなんてやっぱりすごいな虎狼丸は。まぁ人間の年齢にしたら僕の倍以上なのは伊達じゃないってことか。

「実際、僕は仲間じゃないんだよ。彼らとは友達だけど、影時間に関してはただの傭兵なんだ。仲間になりたくなくて僕が頼んだんだけど、相手もそれを受け入れてる。だから、僕は友達であって仲間じゃないんだ」

「ワン！　ワフ！（ふむ、よく分からないが事情があるのだな。ならば、俺も深くは聞かないでおこう。だが、あの者たちは君を仲間だと思っているぞ？　そんな状態では君だけが仲間ではないと言っても、向こうの対応は他の仲間に対するものと変わらないだろう）」

「うん、わかってる。でも、一緒にいるには今の距離でいるのが一番だと思うから。僕はみんなの仲間にはならないんだ」

そう説明すると、虎狼丸も自分が思っている以上に事情があるのだろうといった感じで、それ以上言ってくることはなかった。その後も少しの間雑談をしていると、虎狼丸の散歩ルートの巡回の時間になったので僕らは寮まで一緒に歩き別れたのだった。

夜――ラウンジ

虎狼丸との雑談を終えて寮に帰り、着替えを済ませて1人で晩御飯を食べていると偶然なのかラウンジにみんなが集まっていた。しかし、その雰囲気はまるでお通夜のようである。ってか、あっちいってよ。そんな雰囲気でいられたらご飯が不味くなる…不味いなんて感覚持ってないけど。

「……」

《パクパク》

「……」

《ゴキュゴキュ》

ゆかりや美鶴さんもたまに顔を上げたりして、他の人の表情を見たりしているが会話は一切ない。そのため、ラウンジには時計の針が動く音と僕の食事の音ばかりが聞こえる。そんな雰囲気が気になったのか、ソファーでグローブの手入れをしていた真田先輩が顔を上げて口を開いた。

「どうした、みんな。腹でも減っているのか?」

「べ、別にそんな事はないです…」

「ってか、僕は食事中です」

先輩に聞かれて公子と僕が答えるが、どことなく空気が重い…。だが、そんな空気に耐えられなくなったのか、それとも気を遣ったのか風花がみんなに向かって話を振った。

「え、ええと…も、もうすぐ夏休みですね。皆さん、何しようとか、考えてますか？」

「僕は、色んな子とデー《ダンッ！》…食事中なんですけど？てか、公子もゆかりも手痛くないの？」

そうやって僕が話している途中でテーブルを叩いた2人に尋ねるが、2人は答えずに僕の事を睨んでいる。別に冗談なのに…。そう思っていると、再び空気が悪くなるのを危惧してか順平が慌てて風花の話題にのった。

「そ、そらまあ、夏と言えば海っしょ。ビーチに、水着に、ひと夏の思い出。ああーっ、気晴らしにどっか海とか行きてぇー！　なんかこう、南の方の、メチャクチャ透き通ってるっぽいトコ！　つか、明日から期末だよ…あー、マジだりぃぃー…」

「まあまあ。けど、キレイな海っていうと、沖縄とか、1度行ってみたいな。」

海ねぇ…泳いだ事ないや。てか、僕って過去を思い出してみると泳いだ記憶が無いんだよね。伯父さん達と暮らすようになってからは、プールとか海に連れて行ってもらったりしたけど。公子が僕を胸に抱いたまま泳いでたから、自分はただ浮いてただけなんだ。

回想――2年前・夏　{Ｎｏ　Ｓｉｄｅ}

2人が家族となり最初に泳ぎに行ったのはリゾート開発された場所にある、ホテルのプライベートビーチだった。それなりに高級なホテルだったため、そこの宿泊客しか利用できないビーチは落ち着いて遊ぶのに最適だった。

そして、伯父夫婦はホテルでゆっくり過ごすということで、湊と公子だけがホテルから水着やレジャーグッズをもって海岸へとやってきた。

「んー……っはぁ、風もあって気持ち良いね。湊君は海はいつ以来？」

「……両親がいたとき」

「そっかぁ。じゃあ、今日はゆっくり遊んで海がどんなものか覚えていこうね」

「……わかった…」

湊がそう答えると、公子は嬉しそうに湊の手を引いてパラソルの元へと向かい荷物を置いた。ここはプライベートビーチのため客が快適に過ごせるよう、ホテル側がチェアとパラソルだけでなく、ブルーシートも配備してある。それを広げつつ公子はぼーっとしている湊に話しかけた。

「湊君も日焼け止め塗る？　海に入ったら多少落ちちゃうけど、防水にはなってるから効果はあるよ？」

「……どうでもいい」

「じゃあ、塗ってあげるね。そこの椅子に座って」

そういった公子が指をさしている方へ少し顔を向けると、湊は言われた通りチェアに腰を下ろす。公子もポーチから日焼け止めを出しつつそれを確認すると、手に日焼け止めの液を出して湊へ塗り始めた。湊はいまも何もない空中へと視線を向け黙っているので、公子は話しかける。

「肌ヒリヒリしたりしてない？　気持ち悪かったら洗い流してあげるから言ってね？」

「大丈夫…公子の手、気持ち良い」

「フフッ、そう？　身体はこれでよしっと。今度は顔に塗るから、えっと…眼帯どうする？　塗る間は外す？」

言われた湊はゆっくりと手を自分の顔に持っていくと、右目に付けている眼帯を触った。その様子を公子は黙ってみていると、湊は頭の後ろへと手を持っていき。眼帯の紐をほどいて口を開いた。

「……これでいい？」

「うん。じゃあ、塗ったら結んであげるから待っててね」

湊に尋ねられた公子はそう答えると、湊の顔へ丁寧に日焼け止めを塗っていく。今は目に入らないよう両目を閉じているが、彼の右目はどちらにせよ開かない。８年前のあの事故以来、湊は右目が開かなくなったのだ。手で瞼を開こうとしても、閉じた目が開く事はな

く医者もメンタルか外傷かは判断できないと言っていた。

しかし、公子はそれを気にした様子もなく丁寧に塗り終えると。湊が持っている眼帯を受け取ってきちんと湊の右目の位置に合わせて結んでやる。それが終わると、先ほどまで目を閉じていた湊は唯一開く方の目を開けて公子の方を向いた。

「……終わり？」

「うん。でも、私も塗るから少し待っててね」

「……わかった…手伝う？」

「フフッ、塗ってくれるの？　じゃあ、お願いしようかな。私が塗ってないところとか、上手く塗れてないところに塗ってくれる？」

「…わかった……」

そう言うと公子は湊の手に日焼け止めの液を出してから、自身も自らの肌へと液を塗り始めた。湊は手伝うと言ったものの、どう塗れば良いか分からず。とりあえず塗りやすいように自分の両手にペチャペチャとひろげた。そうして公子に言われた通り塗ってないところや、上手く塗れていない場所を確認すると手を伸ばしてみる。

《ペチャ》

「ひゃうっ！？　ちょ、ちょっと湊君。急に太もも触ったら驚くでしょ？」

「……？？」

「そ、そこは自分で出来るから。あんまり内股の方まで丁寧にやらなくていいって」

「……よくわからない…」

そんな風に湊は公子の言っていることを理解できないまま、相手の制止を聞かずに日焼け止めを塗り続け。くすぐったさと恥ずかしさに耐えられなかった公子に最後は頭を叩かれた。

――海

日焼け止めを塗り終えると、2人は荷物を置いたまま海へと入る事にした。そもそもそれなりの富裕層しか来れないため、わざわざ盗むような人間もおらず。ライフセーバーも信頼できるホテルの従業員のため荷物を放置してても安心なのだ。

そのため荷物を気にせず遊べる公子は湊の手を引きながら、ゆっくりと海へと入り湊に話しかけた。

「どう？　気持ち良い？」

「…わかんない……冷たい…」

「うん、海ってそういうもんなんだよ。まぁ、ここは綺麗な場所だから一般的な海水浴場とはちょっと違うけどね」

そういって公子は湊に笑いかけると、少し沖の方まで行ってみようと考えた。なので、手を引かれ後ろを歩いている湊へと向き直り、公子は口を開く。

「じゃあ、ちょっと泳ごうか。湊君は泳げ…るかわかんないか。

よし、それならお姉ちゃんが抱っこしてあげよう！」

「……抱っこ？」

「そうだよ。もう少し深いとこに行ったら、抱っこしてあげるね。それじゃあ、レッツ・ゴー♪」

嬉しそうに公子はそう言うと、よく分かっていない湊の手を引き深めの場所へとドンドン進んで行く。そうして、胸らへんの高さまで水に浸かると、公子は自分の胸に湊の後頭部がくるようにし。湊の脇の下から腕を前に通すと、湊の胸のところで自身の両手をぎゅっと繋ぐ形で湊を固定した。

「それじゃあ、私が泳ぐから湊君はリラックスして力抜いといて。浮いてるだけってのも結構楽しいから」

「…うん」

湊は言われるとよく分からないまま返事をして、公子に抱かれるまま海の感触を味わった。途中で公子は周辺の地理や、海鳥についての説明。一般的な海水浴場の話などを湊にしたが特にリアクションは返ってこなかった。そのため、寝ているのかな？と心配になった公子は、湊に感想を尋ねてみる。

「湊君、どうかな？　気持ち良い？」

「……少しかたい《ボチャンッ》」

湊に感想を尋ねると、自分がまったく予想していなかった感想を言

われた公子。しかし、いくら湊に甘い自分でも、許せることと許せないことがある。湊がいま言った事は後者であり、自分のコンプレックスを直撃する発言だ。そのため、思わず沈めてしまったのもしょうがないだろう…と、誰かに言い訳をして自分の行動を正当化すると。公子は湊を引きあげ先ほどと同じ位置に固定した。

《ザパァ…》

「…湊君、私は海の感想を聞いたの。誰も人の胸の感想を言えとは言ってないの。わかる？」

「…しょっぱい……」

「湊君、ちゃんとお姉ちゃんの話は聞こうね。いい？　私は海の感想を聞いただけで、胸の感触はどうだなんて聞いてないのよ？」

声と口調は優しいが、何ともいえぬ迫力を周囲に撒き散らせながら公子がそう尋ねると。湊はぼんやりとしたまま口を開いた。

「…海は…冷たくてしょっぱい……」

「そうだね、海はそういうとこだからね。ちゃんと思い出として覚えておこうね」

「…うん…でも、少しかたい……」

《ブチッ》

「…疲れたしそろそろ部屋に戻ろっか。あ、部屋に戻って着替えたらお姉ちゃんと少しお話ししようね。お姉ちゃん、湊君に色々と教えることが出来たから」

「…？？　……わかった…」

そうして海からあがり、２人はシャワーを浴びて部屋に戻ることにした。その後、部屋に戻り楽な格好に着替えると。公子は湊をベッドの上で正座させ、女性に胸の話を振ってはいけないことや。あそこは嘘でも褒めて嬉しそうにするべきだったなどと、夕食の時間になるまで説教を続けたのだった。

現実――ラウンジ　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

そんな風に過去のエピソードを思い出しつつ自分が泳げるのかどうかを考えていると、ずっと寮の前で待機していた不審者が寮内へと侵入し話しに入ってきた。

「沖縄じゃあないけど、「モルディブ」って選択肢なら……いや、有里君。狙いすましたように言葉を被せないでくれないか？　確かにモルディブの海は世界でもトップクラスに美しく素晴らしいそうだが。モルディブじゃなくて、“屋久島”ね。や・く・し・ま」

「理事長…いらしてたんですか」

美鶴さんはそういって急に現れた理事長に驚きながら尋ねた。尋ねられた理事長は右手を頭の後ろに持っていって少し笑うと、テーブルのところまでやってきて口を開く。

「いや、前を通りかかったんで、来週の予定をちょっと知らせにね。桐条君、お父上は今年の休暇を、屋久島で取られるつもりらしい」

「え…お父様が？」

「試験が明ければ、君らは休みだろ？　どうだい、ここらで気分転換でも？」

理事長がそういってニカッと笑うと、話を聞いていた順平が急にテンション高く立ちあがった。

「マジッ！？　それ、旅行って事っスよね！？　キタァー！！　海！　海！　水着！　水着！」

「水着、水着って…こいつ…」

「流石に引くかな…」

「ふふっ」

順平のあまりの下心丸出しの発言に2年女子がそれぞれリアクションをとると、理事長はそれを見て笑っている。どうやら自分の提案が喜んで貰えていることが嬉しいみたいだ。そんな風に食事をしながら考察していると、再び理事長が口を開いた。

「どうだい、桐条君」

「しかし…お父様もお忙しい方ですし、せっかくのご休暇をかき回すわけには…」

「ハハ、珍しく弱気じゃないか。ご息女が顔を見せに来るというのに、お父上は迷惑がると？　君らは本当に、よくやってる。たまには息抜きも必要だよ。次の作戦日も分かっている訳だし…私はいいと思うけどね」

理事長はそういって気にする必要はないといった感じで美鶴さんを見るが、言われた本人は「…ですが…」とあまり乗り気ではないようだ。しかし、とある馬鹿はすでに行く気満々のようで美鶴さんに向かって直角に腰を曲げて礼をし始めた。

「センパァイ！　おねがいしやっすぅぅ！」

「……分かった。気分転換は必須事項のようだ。行こうじゃないか」

美鶴さんは、あまりに気持ち悪いテンションで頼みこんできた順平に一瞬ポカンとするが。復活すると苦笑しつつも、それを許可した。それを聞いた途端、順平は「オッシャァー！！」と飛び跳ねて喜んでいる、人がまだ食事しているってのに…。

そんな風に軽くイラッとしながらも、３枚目のＬサイズのピザを箱から取り出し。タバスコをかけて食べ始めると、ソファーにいる真田先輩も少し嬉しそうに呟き、順平は何度も喜びの声をあげる。

「海か……特別メニューが組めそうだな」

「やっべ、楽しみぃー！！」

「あ、私、水着とか買わないと…」

「あんだよ、オレの貸してやるって！」

「馬鹿だろ…」

順平らの反応を見ていると、突然思いだし水着の準備の話をした風花。それを聞いた順平はテンションが上がり過ぎて意味不明なことを言うが、呆れた表情の真田先輩が冷静に突っ込みを入れた。そして、先輩とは対照的に言われた風花は華麗に順平をスルーして理事長に話しかける。

「理事長も泳ぐんですか？」

「僕は泳ぐのはちょっとね。夏の太陽を浴びると、身体が灰になるから」

「エー、マジ！？」

「馬鹿だろ…」

そんな風に理事長の普段のギャグよりは面白い冗談に順平が反応すると、真田先輩は再び突っ込みを入れる。うん、まぁ僕も馬鹿だろとは思うけどね。それよりも問題なのは試験休みの方だ。確かに旅行もいいけど、僕はこっちでトレーニングをしたりチドリたちの目的を警戒しつつ過ごす予定だったのだ。

「はぁ…旅行は強制かな」

「湊君は屋久島イヤなの？」

「いや、単純にトレーニングとかデートして過ごそうと思ってただけだよ」

僕が小さく呟いた声が聞こえていたのか、公子は少し心配そうな表情で僕に旅行について尋ねてきた。しかし、旅行自体は別にイヤで

はないことを伝えると、なぜか公子の視線が鋭くなっている。なんで旅行は別にイヤじゃないって答えたのにこんな表情を向けてくるんだ？

「……デートって誰と？」

「え？　誰って別に…。まぁ、暇な人と遊ぼうかなって思ってたんだよ」

「ふーん…この前、お説教で言ったことちゃんと理解してなかったんだね」

「いや、別に「お姉ちゃんはとっても哀しいです」あ、はい…」

誰かと遊ぶ事をデートと言ったつもりなのに、どうやら誰とでもデートするといった意味でとったらしい公子。そして、食事をしている僕の右肩に手をおいたと思ったら、公子はかなりの力で握ってくる。今の僕にはこの程度なら痛くないが、一般人にやったらかなりの激痛のはずだ。それをこんな静かなテンションで行ってくるとは…。

「湊君とはキッチリお話ししないといけないみたいだから、寝る用意したら今日は私の部屋に来てね」

「勉強は？」

「そんな些細な事よりも、弟を正しき人の道に戻す方が大切です」

「そーですか…」

呆れたように僕が言うと、公子は本当に勉強よりも僕の更生を重要視しているようだ。なぜなら、どこから取り出したのかメモ帳と一冊の本をテーブルの上に出して、何かを確認しているからだ。その本のタイトルは『浮気男の躾け方』……なんだよそれ。

そんな風に公子や他のメンバーのハシャギ具合にやや呆れていると、美鶴さんはひとり、部屋に戻っていくため立ち上がり階段へと向かった。

――1F階段前

美鶴さんが他のメンバーの様子をみてから自室へと戻ろうとすると、去っていく美鶴さんの様子が気になったのかゆかりが後を追ってきた。

「あっ…ま、待ってください、桐条先輩！　あ、ええと…この前は、スイマセンでした…。その…言い過ぎたかもって…」

「…構わないさ。屋久島に行くことになったのも、ある意味、必然かも知れない。あの事故の当事者は、もう全て居ないと、理事長は私を庇ってはくれたがな…実は1人だけ、生き証人がいるんだ」

ゆかりに話しかけられ、普段よりもまだ暗い雰囲気の美鶴さんは立ち止まり振り返ってゆかりに答える。だが、言われたゆかりは不思議そうな表情で聞き返した。

「え、生き証人…？」

「私の父さ」

小さくそう言って去っていく美鶴さんの背中を、ゆかりは呆然と見

送り呟く。

「そう、だったんだ…」

「まぁ、言っちゃえば理事長や骨董屋の店主さんも元・研究員だから、生き証人って言えばそうなんだけどね」

「っ!?　い、いたの？　てか、脅かさないでよ…」

僕が後ろで話しに相槌をうつと、肩をビクッとさせて僕の方を振り返るゆかり。確かに驚かせたなら悪いけど最初からいたのにな。そう思いながら口を開く。

「いたのって最初から後ろにいたけど？　神出鬼没スキルはデフォでしょ」

「そんなスキル持ってるの湊君だけよ。ってか、なによそのスキル？」

「予測不能に突如現れるってスキルだよ。ほら、例えば朝起きたら上半身裸の僕がゆかりを腕枕してたとか」

「……心臓に悪いからしないでよ？」

そういってゆかりは心配そうに僕を上目使いに見てくるが、ちょっと疲れ気味かな？どことなく顔色が悪い気がする。なので、回復魔法が効果あるか分からないが、疲労回復を狙ってミックスレイドを発動する。

「カデンツァ…《パァァ…》」

「え？　急にどうしたの？」

「なんかゆかり疲れてるみたいだからさ。効果あるか分かんないけど疲労回復狙いってやつ？」

カデンツァをゆかりに使い回復させてみると、相手は急になんだと驚いている。それに対し自分がミックスレイドを使った理由を説明すると、ゆかりはちょっと驚いた表情をしてからやや俯いた。それを見て僕はなにか失敗したかな？と、そう思い始めたところでゆかりが顔をあげた。

「…ありがとう。最近は個人で動いてるから、暗い雰囲気のメンバーらに呆れてると思ってた。でもちゃんと、みんなの事見たりしてるんだね」

「まぁ、なにをそんな難しく考えてるんだって呆れてるってのはあったけどね。けど、自分たちで答えを出さなきゃまた同じ事で悩むだろ？　だから今回は答えを出すまでは放っておこうって決めたんだ」

「そうだね、メンバーはみんな別の目的を持って戦ってる。私みたいにお父さんの死の真相を知るためだったり、湊君みたいに私たちを死なせないためだったり……。でも、結局みんなは湊君に甘えてるんだよね。影時間は毎日あるのに私達は部屋から出ないでさ」

ゆかりはそう言って苦笑する。別にそれを僕に甘えてるとは考えてなかったけど、どういう事だろう？そう思い、ちゃんと話すために僕は階段を指差して移動することにした。

――ゆかり自室

すでに席を立った時点で食事を終えてゴミ類は処理しておいた。なので、場所を変えようという提案にゆかりが同意すると、すぐに移動することができた。そして、暗い雰囲気のままのゆかりがベッドに腰掛けたので僕もその隣に座り口を開く。

「で、なんで甘えてるの？」

「え？　んー、そっか。湊君はこういう性格だから負担ですらないのね。えっと、さっきも言ったけど最近は誰もタルタロスに行こうとしてないでしょ？　それどころか他のメンバーと積極的に話そうともしてない。敵がいるのになんでそんな事してられるか分かる？」

「うーん……わかんない。別に人が襲われても大型シャドウを片付けたら治ると思ってるから？」

「そういう考え方もあるけど、うちのメンバーだとありえないわね。分かってもそこまで割り切って考えられるのはリーダーの湊君だけだもの。他の人は頭でどれだけ分かってても感情でどうしても動いてしまうのよ」

ゆかりはそんな風に言って「分かる？」と僕がちゃんと理解しているか、確認しながら話してくる。まぁ、そういえばそうだな。確かに感情で動くべき場面もある。でも大勢の人間を守るためって言うならどこかで妥協して大局的に判断しなくてはならない。１００を救うために１を犠牲にしなくてはならないのならば、そこではどんなに心苦しくても表情を変えずにその１を切り捨てるんだ。

そんな考え方で動く人間を他の人は冷たい人間だと罵ってくる。け

ど、その1を切り捨てなかったから100も一緒に死んだなんてことになったら責任をとれるのか?その指示を出す人だって本当は1を切り捨てたくはないだろう。でも、一番多く生き残る方法を考えて出た結果がそれなのだ。誰よりも悩み苦渋の決断を下した人間に、そういった事も分からないやつが何か言う資格なんて無いと思う。ま、僕は気にしないから言ってきてもらって構わないけど。

「じゃあ、わかんない」

「あのね、みんなは湊君に甘えてるの。1人で鍛錬してくるとかってタルタロスに行くでしょ? その時、たまにだけどイレギュラーの反応があるんだけど、先輩たちが反応を確認してすぐに消失なんてこともあったの。あれって湊君でしょ? 先輩らも反応の早さに驚いてたわ」

「あー…まぁ、夜道の散歩的なことしてて発見したらスナイプしてるけど。上空に跳びあがって弓で攻撃してるだけだよ?」

ゆかりに尋ねられ、虎狼丸のときとかの事だと思い答えると。相手は少し驚いた表情になったが、そのまま話を続けてくる。

「上空からってのが気になるけどまぁいいわ。でね、本来なら準警戒態勢なのにみんな好き勝手に部屋に篭ったりしてられるのは、そういう事もあって湊君がいれば自分がいなくても大丈夫って考えが少なからずあるからなのよ」

「いや、まぁ仕事だから良いけどさ。それって僕が体調不良で倒れてたりしたら危険じゃない?」

「…うん。戦力的には正規メンバーだけでも今のところやってい

けるとは思う。けど、精神的な話になれば、1人に頼り切ってるこの部活はかなり危険かな。まぁ、湊君を心の支えにしてる私が言えた事じゃないけど」

苦笑しながらそう言ってやや顔を赤らめるゆかり。肉体的な疲労はさっきのカデンツァで回復したみたいだけど、これは精神的にも結構きてるのかな？そう思った僕は隣に座っているゆかりをサッとお姫様抱っこしてからベッドに寝かせると、自分も横になり腕枕をしながら頭を撫でてやる。

「えっ、ちょっ！？」

「落ち着いてよ、別になにもしないから」

「そういう事じゃなくってっ、前にもこんな風にしてて大変なことになったのに」

「その時は僕が怒られるよ。だから、いまはこうさせて？　ゆかりが辛いのに無理してるのは見たくないんだ」

そういって頭を撫でながら逆の腕枕してる手で抱き寄せると、顔を赤らめながら視線を逸らすゆかり。なんで視線を逸らすんだと思い、撫でている手を止めて顎に手をかけてこちらに向かせる。

「ゆかり？　どうかした？」

「べ、別にどうもしてないよ。は、恥ずかしいから手離して…」

「手？　あぁ、うん……」

言われてこっちへ向かせるため顎にかけていた手を離す。すると、再びゆかりは顔を背け、2人とも黙ってしまう。……なんか急に変な空気になっちゃったぞ。てか、なんでだろう。今日のゆかりはいつもより可愛く思える。そんな風に思ってしまうと、僕の胸のところで恥ずかしそうにしているゆかりをいつもより意識してしまう。

明るめ茶色をした肩より少し長いくらいの髪の毛。指で梳くと手入れがよくされているためか、さらさらとして気持ちが良い。今はやや朱色に染まっているがキメの細かい肌は色も白く、高校生という若さもあってはりがある。他校にまで知られるほどのルックスは伊達じゃなく、顔の造形は整っていてとても綺麗だ。

（『ユカリハ、ボクノ大切ダッタ人…』）

…そう、ゆかりはボクの大切だった人だ。でも今は触れる事ができる。ゆかりは目の前にいる。だからボクは再びゆかりの顎に手をかけてこちらへ向かせ声をかける。

「ユカリ…」

「み、湊君？」

ゆかりは再び顔を向かされ驚いているが、構わずボクは顎にかけている手で相手の顔をやや上に向ける。すると、ゆかりはさらに恥ずかしそうに顔を赤くして、身体も緊張しているのか動けないでいるが関係ない。ボクはそのまま薄いピンクのグリスの塗られた唇へ自分の唇を近づけていく。

「だ、ダメだよ…湊君…」

「ユカリ…好『俺の身体を返せっ！！』っ、がぁああ！？」

ゆかりへキスしようとすると突然強い頭痛にボクは襲われた。そしてボクは、その痛みによって気を失った…。

――ゆかり自室　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

「ユカリ…」

「み、湊君？」

湊はゆかりの顔を自分の方へ向けると、そのまま顎にかけている手で相手の顔をやや上に向ける。すると、その後の行動が分かってしまったのか、ゆかりは恥ずかしそうに顔を赤くする。そして、本当は抵抗したいのだが突然の事で緊張してしまい動けないでいると。湊はそのまま薄いピンクのグリスの塗られた唇へ自分の唇を近づけていく。

「だ、ダメだよ…湊君…」

「ユカリ…好っ、がぁああ！？」

あと少しで唇が触れあいそうになると、湊は突如声をあげて苦しみだした。その光景にゆかりが驚いていると、湊は意識を失ったのかベッドから転げ落ちて動かなくなった。

「み、湊君？　みな…っ！？」

ゆかりはベッドから突然どうしたのだと混乱しながらも、落ちた湊へ近付き声をかける。しかし、反応がなかったので横を向いていた身体を仰向けにすると言葉を失った。なぜなら、湊の眼帯が真っ赤

に染まり、今もなお眼帯が吸いきれない分の血が流れていたからだ。

それを見た瞬間に頭が真っ白になりかけるが、そんな事をしていては湊の身が危険だと判断するとすぐに仲間を呼ぶために部屋を出た。

――ラウンジ　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

理事長の話を聞いて未だに喜んでいる順平や、その話を笑顔で聞いている風花を見ながらお茶を飲んでいると。桐条先輩を追って席を立っていったゆかりが凄い勢いで階段を下りてきた。他のメンバーもどうしたんだと思って顔を向けると、あることに気付きギョッとする。

「ゆ、ゆかりどうしたのっ！？　シャツ真っ赤になってるじゃないっ」

「私の血じゃないのっ、湊君が急に苦しみ出したと思ったら眼帯の下から出血しだしてっ」

「なんだとっ！？　有里はいまどこにいるっ」

私が驚きながら声をかけると、シャツの血は湊君のものだというゆかり。それを聞いていた真田先輩は磨いていたグローブをソファーの上へと投げだすと、席を立ちゆかりの方へ駆けより尋ねた。ゆかりは未だに少し焦った様子だが、深く呼吸をして無理矢理落ち着くと話し始めた。

「私の部屋です。桐条先輩が病院に連絡しながら様子を見てるんですが、出血してる右目の瞼が開かなくて。公子は何か知らない？」

「てか、それが眼帯をしてる理由だよ。湊君の右目は事故以降、

無理矢理でも全く開かなくなったの。でも、出血なんて一度も…」

「分かった。とりあえず、救急車呼んだから公子は湊君の荷物とか準備してくれる？　先輩は意識失ってて女子ではちょっと難しいので、上へ来て湊君を下まで運んでください」

「わかった」

「了解だ」

私達はそういって短く答えるとすぐに動き出した。ある程度の着替えと保険証などを用意して下に下りると、真田先輩によってラウンジに運ばれた湊君がいた。そして出血しないよう頭を高くしたり、スキルで回復技を使ってみるがまるで効果が無い。

そんな風に焦りながらも救急車の到着を待っていると、サイレンの音をさせながらやってきた救急車が寮の前へ到着した。そうして、救急車で病院へ運ばれた湊君は、数日の間意識を取り戻す事はなかったのだった。

第三十八話（後書き）

初めてですかね？　昔の湊が登場するのって。まぁ、とりあえず昔の湊はあんな感じで、公子は今よりもお姉ちゃんって感じでした。昔の２人は今後も回想として登場するかもしれませんし、もしくは外伝的なノリで中学生時代でエピソード作って書くのも良いかもしれませんね。

第三十九話（前書き）

屋久島の話を書いているんですが、原作テキストが多いのでオリジナル成分がはさみ辛いですね。てか、途中の「視線を感じる…」みたいなのってアイギスですよね？　だとしたら、この湊なら気配で場所特定して魔力で脚力強化すれば相手が逃げる前に捕獲可能っていう…。

第三十九話

――？？？

ゆかりと会話している途中、突然僕は意識を失った。といっても、それは肉体も機能停止する少し前の話だ。つまり、僕は突然肉体の支配権を失って他の何かが僕の肉体を使って行動していたことになる。その相手はいま僕の目の前にいる。

「一応は初めましてになるのかな？」

「そうだね、初めまして。ボクは有里湊…といっても君も同じ名前だよね」

「まぁ、姿も眼帯を除けば一緒だからね」

そういって今いる自分たち以外はまったく見えない闇の中で自己紹介をする。言った通り相手は、眼帯をしていないだけの僕だ。服装も月高の制服だしね。お互いに同じ事を思っているのか笑い合うと僕の方から口を開く。

「さて、君は僕と違う僕のようだけど、何を考えているのかな？あのゆかりは君の知っているゆかりとは別人だ。それは立派な浮気になると思うんだけど」

「フフッ、そこから話し始めるの？　まぁ、そうだね。なんかすごく久しぶりに会えた気がして、思わず嬉しくなっちゃったんだ。君にも彼女にも悪い事をした、ごめんね」

「謝ってもらってもね。現実だとたぶん5日近く経ってるかな？

テストも受け損なったし、あのときの事を説明するにも難しいし。何よりまたみんなに心配かけてって怒られるのは僕なんだよ？　公子になんて言われるか……」

謝って来た相手に対し、やれやれと言った感じで返すと向こうは「ごめんごめん」と苦笑している。まぁ、そこまで怒ってないけど面倒なのは本当だ。それに恋人でもない相手に勝手にキスしようとするとは何事だ。そんな風に少しばかり不機嫌になっていると、苦笑していた相手が急に真剣な表情になった。

「……そういえば、その公子ちゃんだっけ？　ボクはその子の事を知らないんだけど、君らは昔から一緒にいたの？」

「まぁ、会ったのはかなり子供のころが最初かな。その後は中学になって再会して、伯父さん夫婦に引き取られてから一緒に暮らすようになったよ」

「そうなんだ…。ボクは伯父さん夫婦なんていなくて、母方の祖母の姉夫婦に引き取られて暮らしてたから、結構違うんだね」

そんな風に僕らの違いを興味深いと言った感じに考える相手。確かに興味深いけど、こっちとしては相手から得られる情報で最近の自分の状態を把握する必要がある。なので、考え事をしている相手に話しかけることにした。

「まぁ、何となく予想してたけど最近見てたのは君の記憶や知識だね？　ってことは、君は僕の中にいるのかな？」

「いや、ボク自体は自分の世界にいるさ。けど、魂の欠片が混ざっちゃったのかもしれないね。不便な事はある？」

「今のところは特に。けどま、それなら近いうちに君とは統合しておいた方がいいね。また人の友達を襲われちゃ敵わないし」

「うーん、それは難しいね。なんだか分からないけど、いまは偶然で表層意識に出てきてるだけみたいだから」

皮肉というかまだ根に持っている事を示しつつ相手に話しかけると、相手はそれを現状不可能だと言ってきた。偶然で出てきてるってことは、一応は彼にも核みたいなものが存在するのだろう。それを見つけなければ統合は不可能というわけだ。これは結構面倒だぞ。

「じゃあ、それらの条件がクリアできたら統合して良いんだね？」

「ああ、うん。てか、ボクは君に混ざってるだけで本体は別にあるから。統合が嫌なら消し去ってくれて構わないよ」

「いや、君の記憶や知識は使えるからね。浮気して人の友達を襲おうとした慰謝料として貰っていくよ」

「ふぅ……ばれたら殺されるかな？　いや、こっちでは会えない状態なんだけどさ。てか、そんなに根に持ってるの？　ボクに比べると君はずいぶんと黒い性格をしてるみたいだね」

彼の世界では僕は……っていうか、彼はでいいか。彼はゆかりと恋人関係にあるらしい。いつ以来になるかはわからないが、顔を見ただけでキスを迫るぐらいだ。かなりの長期間会えていないのだろう。それならさっさと統合して自我を無くしてやった方がいいな。そんな事を密かに考えつつ僕は覚醒するため、彼に別れを告げる。

「じゃあ、そろそろ起きるからまたね。てか、入院してるのに屋久島行けるのかな？」

「あー、そっちはその時期なのか。悪い事したな…でも、行けるなら行った方がいいと思うよ。新しい出会いっていうか、ある人と再会することになるから」

「そうなの？　まぁ、それじゃあ楽しみにしておくかな。んじゃ、今度こそまたね」

「うん、大変だと思うけど頑張って。それじゃあ」

そうして僕らは別れの挨拶をすると、意識を覚醒するためその場から消えた…。

7／18（土）
朝――辰巳記念病院
謎の空間から意識を覚醒させると自分は案の定、病院のベッドに寝ていた。まわりを見渡すと個室らしく自分の着替えなどの荷物以外はなにも無い。さて、とりあえず顔を洗うかな。そう思いベッドから出て病室内にある洗面所で顔を洗って自分の顔を鏡で見てみた。

「んー…眼帯がなくなってる事以外は特に変わってないか」

『やっと起きたのね。あんまり心配させないでちょうだい』

「ん？　ああ、ゴメンね。なんか別の僕がゆかりに発情したみたいでさ。それを阻止するためにコントロールを奪い返したら、この様ってわけ。心配かけてゴメンね」

顔を洗い終え、タオルで拭いていると彼女が話しかけてきたのでそう返す。すると、聞いていた彼女は一瞬だが確かに驚いていた。まぁ、そんな事が起こってたとは知らなかったなら驚いても無理はない。しかし、珍しいものが見れたと喜びながら制服に着替えていると再び彼女が話しかけてきた。

『…ちょっと、貴方はなんで制服に着替えているの？』

「なんでって学校に行くからだけど？　今日はテスト最終日だし、一週間分の全教科をやらないといけないから大変だ。もう9時回ってるし、向こうについてテスト始めてってやってたら。だいたい、みんなと同じ頃に終わることになるな」

『どんな速度で解くつもりよ…。というか、勝手に退院して良いわけないでしょう』

「ああ、そこらへんは草摩を使うから大丈夫。力ってのはこういう時に使わないとね」

僕の退院に反対してくる彼女にそういって笑顔で答えると、彼女は頭を手で押さえて溜め息を吐きながら首を振っている。フフッ、僕より年下の見た目なのに雰囲気は年下に見えないのが不思議だな。そんなくだらない事を考えながら荷物を全てまとめ終え、病室を出る事にする。

「忘れ物なしっと。じゃあ、下で眼帯もらってから行こうか」

『はぁ……勝手にしなさい』

「フフッ、そうやって僕の意思を尊重してくれるから大好きなんだ」

『私も貴方を愛してるけど、尊重じゃなくて諦めてるから言わないだけよ。それはいいから少し急ぎなさい』

「うん、了解」

彼女に急かされ返事をすると下で新しい眼帯を1つもらい、半ば無理矢理に退院の許可を出させてから僕は学校に向かった。学校について職員室に行くと中にいた先生は驚いていたが、全教科やるから問題用紙と解答用紙と空き教室を貸してくれと頼んだ。

最初はどの先生も渋っていたが偶然入って来た大西先生に話をすると、何かがツボに入ったのか笑って許可してくれ無事僕はテストを受けることが出来たのだった。

放課後――教室　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

全てのテストを終了し、終わりのホームルームをしていると順平が口を開いた。

「終わったーッ！！　ようやく終わったぜ、暗黒のテストデイズ！　ああ…シャバの太陽が目に染みるぜ…」

「んで、どうだったの？」

「聞いて驚け！　“保体は”バッチリだ！」

「ああ…なんか、色々分かった」

先生が前で話しているにもかかわらず、大きな声でテンション高く声をあげた順平。それが聞こえたゆかりは小さめの声だが、テストの出来を尋ねると順平はアホな答えを返した。思わずそれに私達が呆れていると、順平は更に話を続ける。

「フッ、男は済んだ事をくよくよ振り返らないのさ…。オレの心はもう、遥か遠く屋久島のスカイブルーな空の下だぜ！」

「あ、そっか、もうすぐだっけ…。なんか、準備とかした？」

「いや、色々あったし。流石にまだだよ」

ゆかりに聞かれそんな風に答えると、ゆかりも湊君のことが気になるのか表情は暗いままだ。だが、本人はそれを分かっているのか自嘲気味に笑いながら口を開く。

「はは、そっか…。ゴメン、私、なんか暗いよね。どっか気晴らしに、寄り道して帰ろっかな。今日は部活無いし。どう、公子？」

「おっ、いいっスね！　どこ寄ってく？　水着とか買うんなら、オレが、アドバイスしてやろっか？」

「要らないっつーの。てか、終わったらちょっと待ってて。部室から荷物取って来るから。…あ、ついでに風花にも声かけよ」

ゆかりがそう言い終わると、突然教室の前のドアが開いた。それに気付いた鳥海先生は立ち上がるとドアのとこまで行くと誰かと話している。チラッと見えたが化学の大西先生のようだ。少し話すのか先生は廊下に出てドアを閉めた。

先生がそんな風に出て行ってから2・3分ほど経っただろうか。みんなが放課後の予定を話していると《ガララ…》という音をたて先生が戻ってきた。しかし、その後ろをついて教室に入ってきた生徒に皆が驚いた。

――教室　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

全ての教科の問題を解き終え、さて帰るかと思っていると。一応不正しないようにという事で監督をしていた大西先生に教室へ行くように言われた。どうやら本当にみんなが帰るくらいの時間に解き終われたみたいだ。

そうして、教室まで一緒にいくと大西先生はホームルームをしていた鳥海先生に事情を説明した。なぜだか、鳥海先生も大西先生のように笑っていたが、分かりましたといって僕を引き受けると大西先生は職員室に戻り。僕は教室でホームルームを受けることになった。なので、僕は先生の後ろについて教室入る。

《ガララ…》

「遅くなってごめんね。ちょっと大西先生から湊君を預かってたのよ。それじゃあ、湊君は席についてね。最後の連絡事項だけしたら終わりだから」

「はい、わかりました」

鳥海先生に言われて返事をすると、僕は自分の席へと向かう。若干、急に現れた僕にクラスの生徒たちは驚きポカンとしているみたいだが、構わず席についた。そうして言われた通り連絡事項だけ聞き終わると、すぐにホームルームは終わり先生が去って行ったあとは生徒たちも次々と教室を出て行き始める。だが、周りの人間は僕に話があるらしくこっちを向くと口を開いた。

「ちょっと、なんで学校にいるの？」

「なんでってテスト受けにきたんだよ」

「じゃあ、いつ退院したの？」

「今日の9時過ぎに起きてその後だから、9時半ごろかな？　んで、学校来てさっきまで一週間分のテスト受けてて、それから教室にきたんだよ」

ゆかりの質問にちゃんと答えると、途端にゆかりは怒ったような表情になる。最近なんかこういうパターン多いな。そう思ってると、今度は後ろから話しかけられた。

「なんで起きてすぐに退院してるのよっ、原因も分かってないのにまた倒れたらどうするの！」

「いや、原因は分かってるから大丈夫だよ。奪われた肉体のコントロールを無理矢理に奪い返した反動だから」

「コントロール？　反動？　なにそれ？」

僕の言ったことが理解できないのかそう聞き返してくる公子。なので、素直に教えようと思ったのだが……たぶん、女子2人はそれぞれ別の理由で怒ってくるだろうな。そうは言っても説明しないわけにもいかず、若干心の中で嫌がりながらも説明し始める事にした。

「えっと、まず昨日ゆかりに…って昨日じゃないか。まぁ、倒れた日にゆかりにキスしようとしたじゃん？　あれ僕じゃないんだよ

ね《《バシンッ》》イタっ」

「なんでそんな事してんのよ！」

「口へのキスを迫っといて自分じゃないとか、フザケてんじゃないわよ！」

あの日のことを説明し始め、一度言葉を区切ると途端に前後から頭を引っ叩かれた。別に嘘は言ってないのになんで怒るんだよ。そう心の中で文句を言いつつもさらに説明を続ける。

「えっと、あの時ちょっと変な空気になったでしょ？　そのとき、ゆかりを普段より異性として意識しちゃったんだよ。で、それがトリガーになって僕じゃない僕。これは別人格って意味ね。別に性欲に負けて狼になったって訳じゃないから。んで、そいつがキスを迫って危なかったから無理矢理コントロールを奪い返したの。けど、本来は見てるだけの所でそんなことをしたからか、意識を失ったりしたってわけ。理解できた？」

「「全然っ！」」

「どこが理解できないのさ？」

最初の部分からちゃんと説明したにもかかわらず、理解できないと怒ってくるゆかりと公子。いまの説明が全てなのになんで分からないんだろう。そんな風に困っていると、公子が口を開いた。

「どこがって最初からだよ。なんでゆかりを異性として意識してんのよ？　その時点でおかしいじゃん」

「はぁ？　そこは何もおかしくないでしょ。それより別人格とかって部分が意味分かんないのよ」

「それこそどうでも良いよ。私にとっては湊君がゆかりを異性として意識したってとこが理解できないんだもん。体調悪いなら病院行こうか？　ちょっと頭の調子悪いみたいだし」

「なっ…自分が異性として見られてないからって僻まないでくれる？　ていうか、そういうとこで私と差が出たんじゃないの？」

「なーっ！？　もう許せない、表出なさいっ！　一回けりつけなきゃと思ってたから丁度良いわっ」

公子がそう言うとゆかりも同意して2人は教室を出て行った。直後、隣の教室が騒がしくなり風花の声らしきものが聞こえ。3人の気配が固まって移動していることから、きっと審判を任されたのだろう。けど、なにで勝負するんだろうか…。そんな風に思いながら出て行った2人の荷物も一緒に持って立ち上がると、隣から順平が声をかけてきた。

「あの、さ…なんつーか…。ここんとこ、悪かったな…。変に突っかかってたっつーか、感じ悪ィっつーか…。その…大人げなかったよな…」

「あー…そんな事もあったね。まぁ、君らは子供だからね。気にしてないよ」

「あのな、こっちはマジメに言ってんの…」

順平は僕の返事を聞くとそういって脱力している。まぁ、真面目に

言ってるのはわかるけど、本当に気にしてなかったんだからしょうがない。そう心の中で思いつつ苦笑していると、順平が荷物を持って立ち上がる。

「ま、いいけどサ。また…元通り、仲良くやろうな。んじゃ、なんか出ていっちまったし行こうぜ」

そういって順平は教室を出ようとするので、僕もそのあとに続き教室を出た。

――校門

靴を履き替え、外に出てみるとゆかりと公子が何で勝負をするのか話しあっていて。その隣では風花が喧嘩にならないよう見守りおろおろとしていた。しかし、そんなとこで言い合いをしていたら邪魔なため、不意打ちであわや唇に触れそうな場所にキスする事で2人を静かにさせた。

それを見て風花は驚いていたが、直後に僕が学校になぜいるかという事に驚いていた。風花はよく驚くなぁ。そう思いつつ帰ろうかと声をかけたところで、後ろから真田先輩が現れたので先輩とも一緒に帰ることになった。そして、今は校門の方へとみんなで歩いている。

「ッシャァー！　んーっ、この解放感！　なーにすっかなー！」

「順平くん、切り替え上手だよね」

「まあなっ！　…てか、あれ、そう言や真田サン一緒なの、珍しっスね？」

「幾月さんに呼ばれてる。なんでも“新たな戦力”について話があるらしい」

「戦力って、また新人ですか？」

一緒に帰る事になった先輩に順平が声をかけると、理由を話し始めた先輩。それをきいたゆかりは内容が気になったのか真田先輩に尋ねるが、先輩は「さあな…」と短く答えた。どうやら先輩もまだ知らないようだな。そう考えていると、順平がニカっと笑い口を開いた。

「またまた、女の子っスかね！？」

「…知らん」

先輩は順平の邪な考えたっぷりの質問に答えるのも面倒といった感じに返す。だが順平は先輩の様子に気付かずにまだやらしい顔で笑っている。それをみた僕と女子がドン引きしていると、後ろの方から誰かが走って来た。

「風花ーっ！」

「あれ、夏紀ちゃん。どうしたの？」

「風花さ、補習付き合ってくんない？　知ってる顔、無くてさ…あ、つーか…今日はアレか……実家帰るとこ？　じゃあ…いいや」

「待って。いいよ、大丈夫。一緒に行こう。済みません、先に戻っててください」

走って来た相手は隣のクラスの森山さんだった。風花に頼みごとをしに来たようだが、僕らと一緒に帰ろうとしているのをみると諦め教室帰ろうとした。だが、風花は別に良いと快く引き受けると、僕らに謝ってから森山さんと連れ立って校内に戻って行った。その様子を見て順平も驚きつつ呟く。

「なんか、変わったよなぁ…ビックリだぜ、マジ」

「仲良き事は美しきかな。いや～、結構。青春って素晴らしいよね！　なんか、キラキラしてる」

急にそんな事を言って校門の方から誰かがやってきた。といっても、姿は完全に見えているので誰かは分かっているが。そんな風に考えつつ近付いてくる人物をみていると、ゆかりが相手に向かって話しかける。

「理事長…？」

「人を迎えに来て、近くを通りかかったもんでね。ちょうどいい、紹介しとこう」

理事長がそういうと後ろから男の子が現れ、「どうも」と僕らにあいさつをしてきた。他のメンバーは少し驚いていることから、きっと知り合いなのだろうと推測する。そう思いながらみていると、ゆかりが相手を見て口を開いた。

「あれ、天田君じゃん。どしたの？」

「知り合いだったのか…」

「彼は、事情があって、休み中も帰らないんだよ」

「あ、少し聞いてます…確か、ご両親…」

どうやら2年トリオとは別口の知り合いだった真田先輩は、ゆかりが少年の名前を知っていたことに驚いているようだ。そして理事長が少年について話をし始めると公子が言い辛そうにしている。その様子を見ていた少年は、一歩前に出ると自分から話し始めた。

「もともと母さんと2人だけだったんですけど、その母さんも、事故に遭ってしまって。一昨年の事です」

「まあ…そういう事なんだ。今は遠縁からの学費の保証だけで通ってる。でも、だからって1人ぼっちで初等科寮に居たんじゃ寂しいだろ？　そこで、彼を夏の間だけ、君らの寮へ転居させることにしたんだ」

そういって笑顔になる理事長。別に夏休みに1人でいようが寂しいとは思わないと思うけど、まぁ世間一般ではそう思うのかな？公子らと暮らすまでは基本的に僕だけだったからよく分かんないや。そんな風に1人で思考の海に潜り始めると、理事長の言葉をきいたゆかりが驚きながら聞き返した。

「転居って…えっ！？　いいんですか！？」

「もちろん、招くからには、彼にも“見込みがある”という事だよ」

「それじゃ、俺が聞いてた、“新たな戦力”というのは…」

「うん、まぁね。でも、ご覧の通り彼は初等科だし。あくまで、可能性の話しだけど」

理事長がやや声を抑えてそういうと、聞いた真田先輩は黙ってしまう。同じく他のメンバーも黙っていると、少年…天田だっけ?まぁ、天田少年は先輩に近付き声をかけた。

「真田明彦せんぱい…ですよね」

「あ…ああ」

「ウワサ、初頭部にも届いてます。ボクシング…負け無しだって。よろしくお願いします!」

「ああ…よろしくな……」

挨拶をされた真田先輩はややぎこちなくも笑顔になると、天田少年に挨拶を返した。先輩のそんな態度と対照的に天田少年は笑顔だけど、どうやら真田先輩に憧れているらしい。子供は最強とかヒーローってのが好きだからねぇ。ま、高校でも人気あるししょうがないかな。そう思っていると、急に公子が天田少年に近付き話しかけた。

「天田君、その情報は少し古いよ」

「え?　その情報ってどれですか?」

「先輩の肩書きは『公式戦無敗』なの。他にも勘違いしてる人がいたら教えてあげてね」

天田少年の目を見ながら力強く言うと《ポン》と肩に手をおく公子。言われた天田少年は意味がよく分かっていないようだが、メンバーらは言いたい事がわかったらしい。しかし、それは少年の憧れを壊す行為だ。誰か止めろ。

「き、公子ッチ…話は終わったんだし。もう行こ「それってどういう意味ですか？」…おい」

「フフン、よくぞ聞いてくれたわ。何を隠そう真田先輩は我が月光館学園最強の座をすでに失っているのよ」

「なっ！？　ほ、本当ですか？　でも、ボクシング無敗の先輩より強いなんて…もしかして、生徒会長の桐条先輩ですか？」

公子の言葉に驚きつつも考え、聞き返してくる天田少年。まぁ、確かに力関係で言えば美鶴さんの方が上かもね。けど、タイマンで戦えばやや真田先輩の方が強いと思う。っていっても、魔法を使えば氷が弱点の真田先輩が不利だろうけど。

「確かにそれも間違いじゃないよ。先輩は桐条先輩の尻に敷かれてるから」

「なっ、俺は別に美鶴の尻になんか！」

「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！　今は私が話してるんです。弱者は黙ってて下さい」

「くっ…」

公子は僕と似たことを思っていたらしく、天田少年の問いに答える

と。それを聞いた真田先輩が聞き捨てならんと反論する。しかし、それは公子のネイティブな発音の『黙れ』で遮られる。ああ、ちなみにカタカナで書くと『シャラップ』ね。

「でね、桐条先輩じゃないとすれば誰だと思う？」

「生徒会長でもない……わかりません。誰なんですか？」

「フフッ、それはね……なんと、この私よ！」

「な、なんだってー！！　……って、言って欲しかったのか、公子ッチ？」

ナイスリアクションだ順平。ふざけたノリの公子についていけるのは君だけだと思っていた。言われた公子も順平のリアクションに満足したのか良い笑顔でこっちに戻ってくる。てか、天田少年は放置か。そう心の中で呆れていると、少年の方から話しかけてきた。

「え？　いまのって冗談だったんですか？」

「半分は冗談で半分は本当かな。公子が言ってたのも一応、間違ってはないのよ。うちの寮に住んでる人間てそれなりに強いんだけど、それぞれの得意な物があるの。真田先輩はボクシングだから拳だし、桐条先輩だったらフェンシング部だから突剣って感じでね。で、そんな感じに得意な戦い方でやれば公子の方が先輩より強いってわけ」

少年が尋ねてくるとそういって答えるゆかり。天田少年は本当かといった具合に先輩の方を見るが、先輩は悔しそうにしながらもそれに頷き答える。話が本当だとわかると憧れを崩された少年は落ち込

むかと思ったが、なにか考えたのか普通の表情で再び口を開いた。

「得意な物って公子さんは薙刀ですよね？　拳で相手するなら普通に勝てないんじゃないですか？」

「まぁ、普通はな。けどそれでも勝てる人間もいるっつーわけだ」

「いや順平さん、僕が子供だからって騙そうとしないでくださいよ。全国トップの強さの武器持った人間に、素手で勝てる人なんているわけないじゃないですか」

そういって少年は順平の言った事を何を馬鹿なと斬り捨てた。言い返された順平は1人だけ信じてもらえなかったのかショックなのか落ち込んでいる。しかし、全員がそれをスルーすると公子が順平に代わり少年に話しかけた。

「そんな人間もいるのよ。というか、真田先輩とボクシングしてワンパンチでガードごと吹き飛ばして勝ったのよ？」

「ほ、本当ですか？　一体誰なんですか、真田先輩に勝ったという人はっ」

「それでは紹介しよう。我が月光館学園において文武共に最強であり、学年問わず数多の女子の心を掴んで離さない美少年。それがここにいる“私の”湊君なのだ！」

「あんたのじゃないわよ……」

バババーン！という効果音が聞こえてきそうなノリで公子が僕を紹介すると、ゆかりは間髪いれずに突っ込んできた。若干、呆れたよう

な表情だがそれでも突っ込むあたり流石はプロといったところか。
そんな風にくだらないことを考えつつも、紹介されたので一応自分でも自己紹介をすることにする。

「やぁ、初めまして。――――世界の女は俺のもの、有里湊です《バシン！》イタっ」

「なんで湊君もノリノリで自己紹介してんのよ！　てか、いつから軟派なキャラになったっ」

「いつからって……さっきかな？　ほら、2人にキスしたからさ」

「「ちょっ、子供の前で何言ってんの！！」」

僕が質問に答えると、途端に顔を赤くしながら2人は同じ言葉で返してくる。いや、すごいね。こんなに息ぴったりとか。そう思いながら顔を赤くしている2人の頭を撫でていると、天田少年がやや驚きながらも声をかけてきた。

「えと、【天田　乾（あまだ　けん）】です。湊さん…で良いですか？　湊さんは、お2人と同時に付き合ってるんですか？」

「良い質問だね。湊君は私と結婚する予定なの。でも、どこぞのピンクカーディガンがあとから人の旦那を奪おうとしてきて困ってるのよ」

「人聞き悪い事言うなっ！　別に私はなにもしてないわよっ。キスだってスキンシップだって全部、湊君からでしょっ」

「いや、ゆかりから抱きついてきたりもしたよ？」

「余計な事言わんでいいっ」

天田少年の質問に勝手に答え1人でやれやれといったリアクションをとる公子に対し、またも突っ込み職人が反応する。だが、少し間違いがあったので訂正すると、今度は僕の方を向いて怒って来た。いや、僕が変態と思われちゃ困るだろ?そう考えつつも目の前の状況についていけてない天田少年へ、向き直ると僕は話しかける。

「で、公子の話は冗談として、僕は誰とも付き合ってないよ。外国だと挨拶でキスしたりするだろ?　そんな感じでハグしたり、頬や額にキスしてるだけで、口にはしたりしてないんだ。ちなみにさっきの話しに出てきた生徒会長は美鶴さんって言うんだけど。その人ともう1人寮に住んでる女子にも同様の挨拶をしてるから。てか、最近だと理緒とか結子にもしてるし」

「そ、そうなんですか?　なんていうか、湊さんってその…国際的な感性をお持ちなんですね。僕にはちょっと真似できそうにもありません」

「真似しなくていいの、天田君はこんなダメな大人になっちゃダメだよ。ってか、結子にもしてるってどういう事?　湊君との繋がりが分かんないんだけど?」

「え?　だって僕、一応は弓道部だよ?」

「はぁっ!?」

僕の言葉を聞くと急に驚いた声をあげるゆかり。てか、ダメな大人って言うなし。そう思っていると、ゆかりは僕の襟を掴んで詰め寄

ってきた。

「ちょ、ちょっと、弓道部ってどういうこと!?　私そんな事、1回もきいてないんだけど!」

「まぁ、伝えてないし。最初の見学の日しか行ってないしね。でもまぁ、弓道部なのだよ」

「見学？　…っ!?　期待の新人て湊君のことだったの？　なによそれ、先輩たちも勿体ぶらずに教えてくれたら良かったのに…。てか、それならちゃんと部活来なさいよ。男子部の部長が結構気にしてたわよ」

「遊びでも良いっていうから入ったんだよ。ていうか、普通に考えて『特別課外活動部・生徒会・弓道部・管弦学部・料理部・ファッション同好会・委員会』なんて数の組織に所属して、まともに行けるわけないでしょ。先生も美鶴さんもそういうの考慮せずに任せてくるんだから困ったもんだ」

ゆかりに向かって部活に参加しない理由を説明すると、他のメンバーたちもやや納得したようで。順平も指で数を確認して「あー…確かに無理だな。曜日と同じ数だもんな」と同情してくれている。まぁ、最初から行く気が無いだけなんだが、他の人が納得しているなら放っておこう。

「という訳で、部活には行かないのさ。どうしても袴姿が見て欲しかったら今日部屋に行くから見せてよ。僕も結子に貰ったから着てみせるし」

「いや、コスプレ衣装じゃないから…。てか、結子と割と仲良か

ったのね。知らなかったわ」

「荷物運んだりしてあげてるしね。廊下で会えば普通に会話するし、寮生を除く学校の知り合いならかなり仲が良い方だよ。あ、さっき話した理緒ってのは、薙刀部の人ね。そっちも結子と同じくらい仲が良いかな。まぁ、ちょっと前に後ろから抱きついて挨拶したら、驚いて背負い投げで2階の窓から落とされたけど」

フフッっと笑いながら理緒とのエピソードを話すと、男性陣はなぜか暗い表情をしている。特に順平と真田先輩が酷い顔だが、何があったのだろうか?注意して聞いていると、小さく何か呟いている。

「羨ましく思ってたけど、どんだけハードなんだよ。てか、普通の女子が背負い投げで窓から落としてくるなんてあり得ないだろ」

「普通はそんな事されたら即病院行きだからな。しかし、有里のことだ。きっとそのまま着地して、跳びあがって戻ったに違いない」

「ああ、余裕でその場面が想像できますね。つか、そんなのに慣れちまってるってこえーな」

「「はぁー…」」

そんな風に男2人は揃って溜め息を吐いた。確かに僕は2人が言った通り着地して、そのままジャンプで2階にもどった。けど、その後は大変だったんだぞ?咄嗟とはいえ危うく殺人事件になるとこだったのだ。それを気にして理緒が僕に土下座する勢いで謝って来たことは容易に想像できるだろう。

しかし、僕は土下座なんてして欲しくないし、気にしてないといっ

ても泣きながら理緒は謝ってきた。それをなだめるために授業をさぼって屋上で理緒をあやし、泣き過ぎて目が腫れたのを冷やして治療し。そんな状態で部活に行けるわけもなく家まで送って…ってな具合に一日を使ってしまったのだ。自分の行動には責任を持つということができないのであれば、僕の真似をすることはやめておいた方が良いだろう。

「ま、そんな感じで僕はいろんな女子と仲が良いけど。別にそれは友達って関係だから気にしなくていいよ」

「そうなんですか。分かりました、覚えておきます」

天田少年はそういうと笑顔を僕に向けてきた。うんうん、これぐらいの子供は素直に笑った方がいいよね。年齢的には舞子ちゃんより少し上っぽいから五年か六年ってところだろう。丁度成長期に入るところだし、運動するなら今から始めた方がいいな。僕が相手をみてそんな風に考えていると、ずっと会話が終わるのを待っていたのか、理事長が口を開いた。

「話は終わったかい？　いまの様子を見る限りじゃ大丈夫そうだが、みんな天田君と仲良くしてやってくれたまえ。では、少し手続きがあるから。天田君、行こうか」

「はい。それじゃあ、みなさん夏休みの間よろしくお願いします」

そういって別れの挨拶をした天田少年に僕らも挨拶を返すと。理事長と天田少年の2人は車に乗って去って行った。その後僕たちは当初の予定通り細々とした旅行の準備と、テストのストレスを発散するためポロニアンモールで遊びまくったのだった。

第三十九話（後書き）

本編にはほとんど登場してませんが、理緒や結子と仲が良い設定です。コミュランクで言えば7か8くらいにはなっています。あと、一応委員会に入っている設定ですが、保険と図書のどっちにしようかは決めていません。なので、長谷川さんとは知り合いですが、所属委員は話が練れた方でいきます。

第四十話　前編（前書き）

今回から屋久島編になります。ここら辺からゆかりがヒロインから抜けていくと言われたりしてますよね。まぁ、物語の焦点がアイギスに移っていくからしょうがないとは思いますが。この作品ではそこまで冷遇するつもりはないので安心してください。

第四十話　前編

7／20（月）
朝――自室
今日から、3泊4日で屋久島旅行だ。荷物とかの準備は公子がしてくれたので、僕はそれを持つとみんなと一緒に寮を出て車に乗った。

昼――屋久島行きフェリー船内　〜公子　Side〜
寮を出てから車で数時間。さらにフェリーに揺られること数時間でもう間もなく、屋久島に到着する。外に出れば既に島が見えているようで順平がはしゃいでいる。

「おー、ようやくハッキリ見えてきた、すげー！　ヤ・ク・シ・マー！」

「わ、わー、珍しい木がいっぱい！　見て、あれなんて…」

「……」

「えへへ、湊くーん♪」

順平は素のようだが、風花はちょっと頑張って楽しそうな雰囲気を出そうとしている。しかし、船内の仲間たちの間に漂う空気は相変わらず重いままだ。まぁ、私は膝枕で寝ている湊君を可愛がるのに忙しいからリアクションを返さないだけだけど。それを見た風花はどうしようと困っている。

「えっと…」

「す、すげーよなー？　おー、すげー。まじヤベェ」

「順平くん…」

「ハァ…せめて、湊が起きてたらなぁ」

風花と同じようにこの空気をどうにかしようと順平が頑張ると、風花はそれを見て仲間がいたからか嬉しそうだ。まぁ、順平も最後には諦めて湊君に頼ろうとしてるけど、みんなのために頑張ろうとするのは悪いことじゃないよね。

そう思いながらも助けを出さずに湊君を撫でながら外を見ていると、足になにやら違和感を感じた。

「冷たっ、え？　なに、水飛んできてるの？」

「ん？　そんな事はないと思うが、どうかしたか？」

「ああ、桐条先輩。なんか足に冷たい水が……あぁっ！　ちょっと、湊君よだれたらさないでよ！？」

足に冷たい水がかかったので、外の水が飛んできたのかと思ったが。桐条先輩に聞かれて水のかかった場所に目をやると、寝ている湊君が私の足によだれをたらしていた。相手は湊君なので別に汚いとは思わないが、足が濡れていて気持ち良いわけではない。なので、声をかけると湊君がぼんやりと起きた。

「ふぇ…？　うん…ごめんね《ズズゥ…》」

「ひゃうっ！？　ちょ、吸わなくていいからっ。1回退いてくれ

たら拭くからっ」

「ん？　わかったぁ…。ゆかりぃ、まくらぁ…」

寝ぼけているのか湊君は起きると、自分がたらしたよだれをそのまま吸った。しかし、素足に対してそんな事をされると恥ずかしいし、くすぐったい。そのため、その行為を止めさせたのだが、なんと今度はフラフラと起き上がるとゆかりの元へと行ってしまった。しかも、ゆかりが答える前に膝を枕にして再びスヤスヤと寝始めるとは、なんというスピード…。

「いや、私まだ許可してないんだけど…。ま、良いけどさ。キミはいつでも自由だね」

「んん……」

寝始めた湊君に対し、ゆかりはやや呆れているが。最後には呆れつつも優しい表情で湊君の頭を撫でている。拭き終われば寝て良かったのに、すぐに移動するなんて湊君の薄情者！

「フフッ…髪の毛さらさらだね…」

「可愛くてもキスしちゃダメだよ」

「し、しないわよっ。てか、こんなとこでキスするとか変態か！」

すぐにでもキスするのではないかという表情で湊君の頭を撫でているゆかり。それを見て私が釘をさしておくと、ゆかりは顔を赤くして言い返してきた。うん、これで大丈夫だね。そう安心していると、近くに座っていた真田先輩が口を開いた。

「こんな場所というが、生徒玄関前も大差ないぞ。有里の話では口にはしないらしいが、外に出たらお前らが普通にキスしているようにしか見えなかったから驚いたぞ」

「あ、あれは口の横ですっ！」

「というか、あれは湊君が不意打ちで！」

「…小田桐の言っていた風紀を乱しまくる生徒会役員とは、やはり湊のことだったか。本人が挨拶としか思っていないので、なんと注意すればいいのか悩むな」

真田先輩に言われてゆかりと私が慌てて反論するが、それを聞いていた桐条先輩が複雑そうな表情でそういった。んー、湊君のキスやハグは女子にしか行われていないけど、確かに本人は挨拶以上の意味をこめてないみたいなんだよね。それによって一部の女子はわかってても勘違いしたり気持ちが加速するという事態になっている。

「けど、難しくてもちゃんと教えないと不味いですね。欧米風挨拶をするようになってから、挨拶と分かってても勘違い起しちゃう女子が大量発生しているので」

「そもそも、なんでそんな挨拶をするようになったんだ？　有里が寮に入ったころは普通だっただろ」

うん、確かに真田先輩の言う通りなんだよね。以前は普通の挨拶をしていたし、キスなんて頬にも殆どしてくれたことはなかった。それが最近になって急にハグだけでなく頬や額にキスするようになった。一体何があったんだろう。そう思っていると、向かいに座って

いるゆかりも考え始めた。

「なんでだろう……あ」

「ん？　ゆかりなんか気付いたの？」

「えっ、いや全然！　なんでもないよっ、は、はは…」

ゆかりが小さく何かに気付いたような声をあげたので、分かった事があったのか尋ねる私。だが、ゆかりはなんでもないと、明らかに誤魔化している。これは絶対に何か気付いたな…。そう思っていると、外にいた順平が話しながら中に戻ってきた。

「あれじゃねえの。ほら、ホテルのとき。あんときは女装してたけど、やけにゆかりッチにベッタリだったじゃん。それ以前も抱きついたりはたまにしてたっぽいけど、顕著にし始めたのはそれ以降だろ」

「なっー！？　なんで言うのよ、この馬鹿！」

「「そういうことか…」」

「ち、違いますっ。別にこれといって切欠になるような出来事はありませんでしたから！」

「《ゴトン》いたっ」

そういって立ち上がり顔を真っ赤に先輩らの想像を否定するゆかり。しかし、誤解を解く事に必死になったせいで、膝枕されていた湊君は床に落とされてしまった。可哀想に…。いま、お姉ちゃんが慰め

てあげますからね♪そう思い近付こうとすると、先に湊君に声をかけた者がいた。

「湊君大丈夫？」

「風花…うん、大丈夫だよ。それより、膝貸してくれない？」

「膝？　ああ、枕ね。いいよ、私のストールも使う？　タオル代わりには小さいけど、お昼寝くらいには使えると思うから」

「ありがとう。でも、相手の体温で十分あったかいから大丈夫だよ。それじゃあ、おやすみ…」

湊君はそういうと中に戻ってきた風花の膝を枕に、これまたすごい早さで寝始めた。どんどん枕を変えてるのにスヤスヤ眠れるってことは湊君て枕気にしないタイプなのかな？そんな事を考えつつ、風花の膝で眠る湊君を見ながら私達は屋久島へと到着するのを待った…。

――桐条家・屋久島別邸　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

フェリーが到着したということで起されると、僕らは乗り場の駐車場にきていた迎えの車に乗って美鶴さんの別荘までやってきた。着いた場所は屋敷と呼ぶにふさわしい建物だが、別に草摩の方で見慣れているので珍しくは無い。とはいえ、風花たちには充分すごいらしく驚いている。

「すごい…」

「リアルに“世界の豪邸訪問”だな…」

風花と順平のそんな様子に僕らは笑いながら進んでいくと、玄関の近くに使用人達が整列していた。どうやら美鶴さんとその一行である僕らの出迎えらしいな。

「「「「お帰りなさいませ、お嬢さま」」」」

「今日から短い間だが、宜しく頼む」

美鶴さんが使用人たちに声をかけている間、ゆかりは呆気にとられた表情で「メイド…さん…？」と呟いた。まぁ、こんな広さを自分たちだけで掃除できるわけもないのだから、いてもおかしくはないだろう。そんな風に考えていると、1人の使用人が一歩前に出て声をかけてきた。

「そちらは、ご学友の皆様ですね。ようこそいらっしゃいました。どうぞこちらへ」

「“ごがくゆう”って…」

「メイドって、実在してんだな…」

「やっぱり先輩、スゴい人なんだ…改めて実感…」

使用人に先導されて屋敷の玄関へ向かう間も、そんな風に話す2年一般家庭トリオ。そんなキョロキョロしなくてもいいのに。その落ち着きの無さに苦笑しながら進んでいると、奥の扉から1人の男性が歩いてきた。確かあの人って…そう思いだしてる間に、距離が近くなり美鶴さんが挨拶をした。

「お久しぶりです」

「……」

《コツコツコツ》

しかし、その男性【桐条（きりじょう）　武治（たけはる）】は、挨拶をした美鶴さんの前を素通りした。そういうのって良くないよね。そう思いながら見ていると、相手は僕に気付いたのか一度立ち止まると、頭を下げてからすぐに立ち去って行った。それの後ろ姿が見えなくなると風花が口を開く。

「あ、行っちゃった…。い、今の人って、もしかして…」

「先輩の…お父さん？」

「怖ッ！　南の島だけに…海賊ルック？」

「そんなわけがあるか…」

そういって、順平のくだらない言葉に呆れながら突っ込む真田先輩。確かに海賊と言えなくもない雰囲気だが、そんなお茶目な人ではない。てか、実の娘が目の前にいるのに怖いとか言っちゃダメだろう。僕がそう思ったように同じ事を思ったのか、公子が順平に話しかけた。

「順平、旅行中お世話になる人なんだから、あんまり失礼なこと言っちゃダメだよ」

「ん？　悪ぃ悪ぃ、気を付けるよ。けど、なんで先輩の親父さんはさっき立ち止まったんだ？」

「ああ、それは湊に挨拶をしたのだろう。桐条宗家当主とグループ総帥。そのどちらとしても、挨拶の1つもせずに去っていくことは出来んさ」

美鶴さんは簡単な事だと言った感じで順平の質問に答える。しかし、言われると余計に訳が分からないという表情になっている。

「え？　なんで、そんな偉い人が湊に挨拶するんスか？　先輩の婿候補とか？」

「んな訳あるか。それなら、有里の方から挨拶するだろうが」

「ああ、そっか。けど、真田サンは理由知ってるんですか？」

「……知らん」

順平に偉そうに言うわりに聞かれると、ちょっと落ち込みながら知らないという真田先輩。知らないならなんで偉そうにしたんだろう…。そう思っていると、ゆかりが順平らに説明を始めた。

「あのね、湊君は次期草摩家当主の候補筆頭なのよ。で、公子は序列2位ね。日本一の力を持った一族の現段階でナンバー2・3…いや、後のこと考えたら湊君は重要度ナンバー1なのかな？　まぁ、そんな相手だしいくら桐条のトップでも立場を考えれば自分から挨拶するわよ」

「「……は？　はぁあああああっ！？」」

「フフ…まぁ、そういうことだ。理解できたなら滅多な事はしない方が身のためだぞ。では、短い休暇だが、まあ存分にくつろいで

くれ」

美鶴さんは驚く順平と真田先輩を見て笑うと、そういって屋敷の中へと案内してくれた。中に入ると使用人から部屋の鍵を受け取り、場所を聞く。この人数だし2人で1部屋とかになると思ったらちゃんと1人1部屋らしい。

そうして部屋についての説明が終わるころになると、先ほどの状態から復活した順平が元気に声をあげた。

「おし！　楽しませてもらうッスよ！！　となりゃ、すぐそこだし、まずは海だな。やっべ、テンション上がってきた！　早速、ビーチに突撃！？」

「ちょっ…もう海？　てか、行くのはいいけど、そんなすぐ支度なんて無理だよ？」

「ならオレたち、先行ってるぜ。つか、1秒もムダに出来ねーからなッ！！」

順平はそういうと自分に割り当てられた部屋へと走って行った。その様子にメンバーはポカンとなるが、再起動すると他のメンバーも準備をするために移動を開始したのだった。

――屋久島・海岸

服を着替えてやってくると、順平と真田が砂浜で話しているのが見えた。どうやら、女性陣はまだ来ていないみたいだな。そう思っていながら近付く、順平の声が聞こえてきた。

「んー、この、ビーサンに、足の指の付け根が食い込む感じ…。

ようやく“夏”実感だぜ！」

「沖に目印になるような物は無いな…泳ごうかと思ってたが」

「ちょ、なんスかその水着！！」

順平はそういって真田先輩をみて驚いている。というのも、無理は無い。なぜなら、先輩は紺色の小さいブーメランパンツだからだ。間違ってはいないけど、遊びに来て性能重視とかちょっとね。ちなみに順平は赤いトランクスタイプで、僕は半袖Tシャツに下は普通のハーフパンツ。ここらへんが無難でいいよね。そう思っていると、順平が驚いている理由が分からない先輩が聞き返した。

「何がだ？」

「ブーメランって…んなピッチピチの、エグいっすよ！」

「泳ぎやすいだろ」

「ああ…出ました、遊びに海来たのに“黙々と泳ぐ”タイプ」

先輩の言葉をきいて呆れた表情になりながらそういう順平。しかし、言われた先輩は少しムッとした表情で返す。

「悪いか。お前こそ、何して過ごす気だ」

「そりゃあ、夏で海と言ったら、お楽しみは決まりっしょ！　ほら…来た来た！」

「え…なに？」

順平が大はしゃぎしていると思ってみていると、途中で嬉しそうな顔をして僕の後ろの方をみた。そしてやってきた人物であるゆかりは状況が呑み込めず不思議そうな顔をしている。しかし、それには答えず真田先輩はやってきた女子に声をかけた。

「よう、来たか。…？　何だ、岳羽」

「…随分、小さい水着ですよね」

「何だ、知らないのか？　水の中での抵抗を少なくするため…」

「いえ、いいです…」

ゆかりはそう言って若干苦笑いしている。うーん…確かに年頃の女の子には先輩の水着はちょっときついかな。そんな風に考えると、こういった事態を予想して準備しておいた物を取り出し先輩に渡す。

「先輩、これどうぞ」

「ん？　なんだ、水着じゃないか。俺はこれがあるからいらんぞ。それにさっきから言っているだろう。これは水の抵抗が少ないため非常に泳ぎやすいんだ」

「フッ…甘いですよ、先輩」

「…なに？」

僕が先輩に緑色のオーソドックスなトランクスタイプの水着を渡すと先輩はそれを拒否した。そして、自身の水着の性能の素晴らしさ

まで説明してくる。うん、まあそれも予想してたよ。だからこそ、勿体ぶって言うと案の定先輩は食いついてきた。ここで勝負を決めこの水着を穿かせるッ。

「いいですか？　確かにその水着は競泳用として使えるほど素晴らしいかもしれません。しかし、今回の海は早く泳ぐ事を目的とはしてないんです。先輩はトレーニング目的なんでしょう？」

「…そうだ」

「なら、考えてみてください。この水着とその水着。泳いだ場合の怪我の可能性はほぼ一緒です。しかし、水の抵抗があるのは僕が用意した水着だ。なら、同じリスクでより効果的に負荷をかけたトレーニングが出来るのはどちらだと思います？」

「っ！？　…そこまで考えていたとはな。感謝するぞ、有里。喜んで着させてもらう」

僕の言葉をきいた先輩はいい笑顔で僕の水着を受け取り、自分の着ていた水着の上からそれを穿いた。それを見ていた順平・ゆかり・公子は「おぉー」といって拍手をしている。そんなに嫌だったのか…。そんな風に思っていると、気を取り直したゆかりが順平の方を向いて口を開いた。

「…てか、どしたの？　順平。鼻の下やばいよ？」

「いっや～、目の保養ですな～、ナハハ。ゆかり選手、想像よりけっこう強気なデザインですな！　やっぱ、部活でシボれてるって自信が、大胆さに繋がってるんでしょうか！？」

やらしい顔をしてそう言った順平に、言われた方であるゆかりは「はぁ！？」と嫌そうな顔をして驚いている。しかし、順平の謎のファッションチェックまだ続く。

「そして公子選手も、これまたキュートな人魚ですな～！　普段は見えないラインが、もう、ね！　たっまりませんね～！！」

「キモッ！」

「いんや～、いーんでない？　いーんでなーい？」

もう訳が分かんないよ順平。せっかく僕が真田先輩の問題を取り除いたのに、順平のせいで女性陣が不快感を感じているじゃないか。そう思っていると、さらに順平の悪ノリを増長させるための新たな燃料が投下される。

《ザッザ》

「パラソル…空いてるとこ、勝手に使っていいのかな？」

「おっとー、続いては風花選手ですなー。つーか…風花オマエ…メッチャ着痩せするタイプ…！？」

言われた風花は顔を赤くして、腕で胸やお腹らへんを隠しつつ「え…ええっ？」と驚いている。そりゃ、水着が似合ってるとかじゃなくていきなり胸の話題を出されたら驚くしドン引きだよ。しかし、いまの順平にはそんな考え欠片もないのか、やらしい顔のまま言葉を続ける。

「んだよー、そんなハズかしがんなくても、いいじゃんよぉー。ムフフ」

「ムフフって、変態かっつの！」

いえ、完全に変態です。本当に（ｒｙ…と、そんな風に心の中でゆかりの言葉に便乗する僕。まぁ、可愛いしキレイだと思うからテンション上げるなとは言わないけど、これはないよね。そうしてメイドさんに借りた園芸用のスコップで砂を山にしながらそんな様子を眺めていると、順平がいままでより顔を輝かせて口を開いた。

「そんで、トリを務めますのは…」

《ザッザッザ》

「ん…どうした？」

「うわー、桐条先輩、キレイ…」

「ホントすっごい、白くて、キレイ！　日焼け止め、もう塗りました？」

「い、いや…」

そんな風にみんなに褒められ照れながら現れたのは美鶴さんだ。褒められると照れるとか可愛いな…。僕はみんなをみてそう微笑ましく思っていると、順平が近付いてきた。

「湊…湊！」

「ん？　なに？」

「おい、オマエって、どのタイプがイチオシよ？」

どのタイプ？ああ、水着のことか。僕は順平に言われると、もう一度確認するために女性陣の水着姿を見ることにする。順平がチェックした順にいうと、ピンクのビキニにボトムは青のショートパンツのゆかり。ピンクのチェックで胸元にリボンのワンポイントのついたビキニの公子。ホルターネックのトップとボトムはスカートの緑のセパレートタイプの水着の風花。そして最後は白のビキニに腰にはパレオ、それに大きなハイビスカスのアクセサリのついた水着を着る美鶴さんだ。

月高の生徒だけでなく、きっと殆どの男性が目を奪われるあろう女性陣の姿を確認しつつ。僕は順平に言われた好みについて考えた。

「…選ぶのは難しいね。みんな綺麗だし可愛いからさ」

「ハハッ、まぁな。んじゃ、真田先輩。ぶっちゃけ、誰が好みっスか？」

僕の意見を聞くと今度は先輩に聞きに行った順平。答えないかなと思ったが、意外にもちゃんと答えているようで、チラチラを2人は女性陣の方を見ている。

「え、そーなんスか！？」

「こ、声が大きい！」

「いっやー、へー、そうスかー」

順平は真田先輩の答えが意外なのかそんな風に感心している。たぶん、先輩は公子を選んだな。そんな風に根拠のない勘を働かせて笑

っていながら石垣を作っていると、かたまって話す男性陣2人に気付いたゆかりが声をかける。

「どしたの、2人してニヤニヤしちゃって」

「べっつに～」

「…ふうん」

順平の態度に少しイラっとしながらも、さして興味がないのかそう返事をするゆかり。それで話が終わったのか、順平は背伸びやストレッチを始めながら口を開いた。

「いいなぁ、こういうの。ホント、来てよかったよなぁ。よっしゃ、そいじゃ、そろそろ、水に浸かるとしますか！　行くぜっ！！」

「待てっ、一位は譲らん！」

「……秘剣・地走り《サクッ》」

《ダーン！》

「「うわぁああっ！？《ボチャーン！》」」

順平と真田先輩が嬉しそうに海へ向かって走り始めると、僕はスコップに魔力を纏わせ地面に突き刺した。そして、今度は地中に魔力を送り2人を追尾させ爆発させると、走っていた2人は吹き飛ばされ海へと落下する。他のみんなはそれをポカンと見ているが、僕はスコップを地面から引き抜くとお城作り再会した。

「……ねえ、湊君は何してるの？」

「ん？　お城作ってるんだよ」

「お、お城？　その…なんていうか、独創的なお城だね」

「僕がデザインしたわけじゃないけどね。烏城っていうんだ」

ゆかりに尋ねられ答えると、今度は風花が僕のお城を褒めてくれた。それに対し笑顔で答えると今度は美鶴さんが口を開く。

「烏城？　というと、松本城のことか。確かに似ているな、上手いものだ」

「いや、砂のお城って普通は西洋風じゃ…」

「湊君はあんまり海に来た事ないからしょうがないよ。ご両親がなくなった後は中学二年のときまで行ってなかったらしいから」

公子がそういって説明すると、ゆかりたちはハッとした表情になるが別に気にしなくていいのに。確かに両親が死んでからは預け先の家族が海や旅行に行ってるときは1人で家の掃除を任されていた。しかし、それは住まわせてもらっているのだから当然と言えば当然の仕事だ。感謝こそすれ恨むのはあまりに自分勝手だろう。そんな風に1人考え城をだいたい完成させると、ゆかりがまた話しかけてきた。

「ところで、湊君は水着は？」

「ちゃんと、下に着てるよ。流石に先輩の分持ってきて自分の分無しじゃおかしいからね」

「あれはナイスプレーだったわ、思わず拍手しちゃったし。けど、お城もいいけど泳がないの？」

ゆかりは僕の横にしゃがむとそう尋ねてくる。うーん…別に海に入るのはいいけど僕、泳げるか分かんないんだよね。

「僕さぁ、泳げるか分かんないんだよね。いままで泳いだことなくてさ」

「なに？　では、水泳の授業はどうしてたんだ？」

「隻眼じゃ危ないってんで、免除されてましたよ。プライベートだと公子がいつも抱っこしてきたので浮いてただけですし」

「「「……え？」」」

「……テへ♪」

なにが「テへ♪」だよ、他3人が呆れてるじゃないか。他の人はなんで泳ぎに行って泳がせずにそんな事をしていたんだと思ったのだろう。呆れたような表情で公子を見ている。対して見られた公子はいい笑顔で笑って誤魔化した。まぁ、僕は別に嫌じゃないから良かったんだけどね。

「じゃあ、湊君。泳ぎ教えてあげようか？　運動は苦手だけど、基本的なことくらいは教えられると思うし」

「んー…まぁ、なんとかやってみてから考えるよ。お城はこれで完成したし、みんなも行こ？」

そういって僕は立ち上がり服を脱ぎながらみんなを誘うと、日焼け止めを塗り終わった女性陣も一緒に立ちあがり海へと向かい始める。すると、途中で隣を歩いていた公子が話しかけてきた。

「そういえばさっきの『秘剣・地走り』ってなに？」

「ああ、あれは魔力を地中に通して爆発させただけ。名前はそれっぽくつけただけだよ。別に地龍とかでもいいし」

「ま、魔力って便利だね。でも、先輩と順平くん大丈夫だったのかな？　いまは疲れた表情で座り込んでるけど…」

風花の言った通り波打ち際の方を見てみると、真田先輩と順平が沈んだ様子で座っていた。なにをそんなに落ち込んでいるんだと思ったがスルーして横を通ると、取り敢えず海に入っていく。

「うわっ、冷たーい」

「海の色がとっても綺麗…」

「フフッ、泳げるかわからないのなら気を付けるんだぞ」

「よーし、お姉ちゃんがまた抱っこしてあげよう！」

女性陣は海に入るとそんな風に各々の感想やら、僕を気遣う言葉をかけてきた。言われた通り気をつけつつ少しずつ深い場所を目指して歩いていると、急に男子2人が復活して走ってきた。

「有里、貴様ぁあああっ！！」

「湊、テメェぇえええっ！！」

「ん？　２人とも楽しんでる？」

「「あんなことされて楽しめるかっ！！」」

おおっ、なんというシンクロ率。２人はそろって僕の傍まで走ってくると、さきほど吹き飛ばされたことを怒っているのか叫んできた。しかし、いまの僕は泳げるかどうかの方が重要なので軽く言相手をするとさらに深い場所を目指す。

そうして進んでいると途中で背中に負担が増えた。何だろうと後ろを見ると、公子が嬉しそうな顔をして僕におぶさっていた。……なにしてんだ？

「公子、どうしたの？」

「んー？　泳げなかったら直ぐに救助できるようにね。泳ぎ始めるときには離れるから大丈夫だよ」

「そっか。けど、後ろの方で変な人が嫉妬の視線を送ってる気がするから、次からは気をつけてね」

「えへへ、別に見せつけるからいいもん♪」

「はいはい」

そんな風に返事をしつつ十分な深さに達したので軽く泳ぎ始めると、特に問題なく泳げた。というか、公子を降ろすのを忘れてたけど別

に泳げてるからいいよね。そう考えつつ顔を常に水上に出したままスイスイ移動していると、ゆかりたちがやってきた。

「…なんで公子をおぶったまま泳いでるの？　いや、泳げたなら良いけどさ」

「降ろすの忘れてたんだよ」

「はぁ…君は本当になんでも出来るのだな。世間から私も同じように言われているのは知っているが。実際、私はそのための訓練をして本番でできているに過ぎない。その点、訓練なしで出来ている君を見ていると、才能の違いというのを思い知らされるよ」

「えへへ。まぁ、私の湊君ですから。てか、湊君の背中良いねぇ。細身のわりに筋肉もついてるし、意外と男らしくて広い背中だし。安心感と包容力ＭＡＸのこれを知ったら大概の女性は……おちるね」

シュピンと効果音をつけたくなるような表情と視線で公子がそういうと、女性陣はなぜか緊張した様子で僕をみている。もしかして、みんなも楽に泳いでみたいのかな？そう考えると、一度泳ぐのをやめて立ち上がる。

「他の人も乗りたいの？」

「「「えっ！？　いや、別にっ」」」

「みんな揃い過ぎ…。まぁ、いっぺんには無理だから交代でなら乗せて泳ぐけど？」

「えー、私ずっとここがいいー」

「遊びに来たんだから自分でも泳ぎなよ…」

そう言いながら拒否する公子を腕をほどき降ろす。…？何処からか視線を感じる。誰かに見られている気がする。まぁ、敵意はないみたいだから放っておくか。僕は急に感じた森の中からこちらを見ている存在をそんな風に無視すると、風花・美鶴さん・ゆかりの順に乗せて泳いだのだった。

第四十話　前編（後書き）

後編に続きます。

第四十話　後編（前書き）

前編の続きです。

第四十話　後編

夜――桐条別邸・エントランス　{Ｎｏ　Ｓｉｄｅ}

海での遊びを終え、シャワーや夕食を済ませたあと。桐条別邸エントランスに美鶴はやってきた。そこには美鶴の父である桐条武治が立っている。美鶴は父親へと近付くと話しかけた。

「ご無沙汰していました、お元気そうでなによりです…」

「彼らは、寮にいる者達か？」

「済みません、ご休暇を大人数で騒がせてしまって…」

声をかけてきた美鶴の方へと向き直ると、武治は静かに尋ねた。聞かれた美鶴は「はい」と短く答えると、貴重な休暇に騒々しくしていることを謝る。しかし、武治はそれを気にした様子もなく、口を開いた。

「彼らに…明かしたそうだな。なぜ、今まで隠していた」

「別に、隠したわけでは…」

「言ってある筈だ。元々、お前が負うべき罪ではない」

武治は真剣な表情で言うが、言われた美鶴は「ですが…」といって辛そうにも見える表情を作る。それを見た武治は少し間を置きゆっくりと話し始めた。

「“調和する2つは、完全なる1つに勝る”。“南条”と分かれ

た折より、我ら“桐条”に伝わる言葉だ」

「……」

「美鶴、人を信じてみろ。どれだけ己を殺しても、所詮は個の力。この世には、1人では成せない事がある」

「…はい」

美鶴は父に言われると素直に頷いた。そして、武治はさらに言葉を続ける。

「宗家のデータベースに入り込んだのは、お前だな？　それも然りだ…旅行などにかこつけず、なぜ初めから、じかに私に問わない」

「申し訳…ありません」

「彼らを全員、ここへ集めろ。元より隠す意図などない。全てを伝えるため、準備をしてある」

「全てを…？」

自分の知らぬ事がまだあるとは思っていたが、まさか父が直々に真相を語るとは思っていたなかったため驚く美鶴。武治はそれには答えず、やや俯きながら呟いた。

「連れてきた中に、“岳羽”という少女が居るだろう。彼女が力に目覚めるとは…もはや、運命なのだ…」

「お父様…？」

父のその様子を美鶴は不思議に思ったが、言われた通り屋敷に戻ると使用人たちに皆を呼ぶように頼み、父と一緒に応接室へと向かった。

――桐条家・屋久島別邸・応接室　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

部屋のベッドでゴロゴロしながら休んでいると、使用人の人に美鶴さん達が集まるよう言ってきたことを聞き。下へと下りて応接室へと向かった。そこには既にメンバーらと美鶴さんのお父さんである武治氏が集まっていた。僕が部屋に入ると武治氏は急に立ち上がり挨拶をしてきた。

「ご無沙汰しております」

「ええ、お久しぶりです。けど、いまはこっちもオフなんでみんなと同じように接してもらっていいですか？　そういった対応は、草摩としての顔を見せているときだけで十分なので」

「……わかりました。じゃあ、湊君。君も座ってくれ、席に着けば話を始めさせてもらおう」

武治氏が空いているソファーの方に手を向けると、僕は言われた通りそこに座る。座った僕に使用人が飲み物を聞いてきたが、いらないと答えると使用人は部屋を出て行った。これで準備が完了したのか、武治氏は静かに口を開いた。

「美鶴から、大体は聞いているな」

「あ、はい…」

「左様、全ては大人の…我々の罪だ。私の命ひとつであがなえるのなら、とうにそうしていたところだが…。今や、君らを頼る他はない。父“鴻悦”が怪物の力を利用してまで造り出そうとしたもの…。それは“時を操る神器”だ」

「時を、操る…？」

武治氏の話をきくと不思議そうな表情で呟く美鶴さん。まぁ、急にそんなものを言われても訳が分からないよね。そう思っていながら黙っていると、武治氏が続きを話し始めた。

「言葉の通りさ…時の流れを操作し、障害も、例外も、全て起こる前に除ける。未来を意のままにする道具と言ってもいい」

「す、すげぇ…野望のサイズがデカい…」

「だが研究は、父の指示によっておかしな方向へ進んでいった。…晩年の父は、何か深い虚無感を胸の奥に持っていたようだ。今にして思えば、父の乱心は、それを打ち破るために始まったのかも知れん…。君らが全てを知りたいと望むのは当然の事だ。私にも、伝える義務がある」

途中、順平が創作物の中のことのような話しに、驚き呆けていたが。武治氏が話を一度区切ると《ガチャン》と音がして、部屋の電気が消えてプロジェクターが出てきた。メンバーらはその先のモニターを見ていると、古い映像が映し出された。そして、それが何か分からない真田先輩が武治氏へ尋ねた。

「これは…？」

「現場に居た、科学者によって残された、事故の様子を伝える唯一の映像だ」

「…映像？」

どこかの事故現場のようだ。映像は荒く、大きく映っている男性の顔も判別できない。だが、静かに見ていると音声が聞こえ始めた。

『この記録が…心ある人の目に触れる事を…願います』

「この声…！？」

ゆかりは何かに気付いたのか驚くと、先ほどよりも真剣な表情で映像を見始めた。そうしている間も映像は続く。

『ご当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。この実験は…行われるべきじゃなかった！　もう未曾有の被害が残るのは避けられないだろう…。でも、こうしなければ…世界の全てが破滅したかも知れない！』

「世界の…破滅？」

『この記録を見ている者よ、誰でもいい、よく聞いて欲しい！！集めてシャドウは大半が爆発と共に近隣へと飛び散った。悪夢を終わらせるには、それらを全て消し去るしかない！　全て…僕の責任だ。全てを知っていたのに、成功に目が眩み、結局はご当主に従う道を選んでしまった…。全て、僕の…責任だ…』

《ドゴーン！ガシャーン！……》

一瞬、声の主が映ったが、大きな爆発音を最後に映像は終わった。

そうして見終わり部屋が明るくなり始めると、暗い表情になっていたゆかりが小さく呟いた。

「お父さん…」

「お父さんって…今の人が…？」

「……」

風花に尋ねられるも、ゆかりは俯いて黙ってしまって答えない。しかし、その様子がその問いの答えを物語っている。なぜ、ゆかりの父がこんな映像を残していたかは不明だが、それをこの場で唯一知るであろう人物へと美鶴さんが尋ねた。

「お父様、これは…」

「彼は【岳羽（たけば）　詠一朗（えいいちろう）】…当時の主任研究員だ。実に有能な人物だった。その彼を見出して利用し、こんな事件にまで追いやってしまったのは、我々グループだ。詠一朗は…桐条に取り殺されたも同然だ」

武治氏の言葉に美鶴さんは「ま、まさか…」と驚いているが、公子を除くメンバーは似たような反応だ。それを見ながらゆかりの様子を確認していると、ゆかりはゆっくりと顔をあげて口を開いた。

「つまり…私のお父さんが、やったって事…？　影時間も…タルタロスも…たくさんの人が犠牲になったのも…。みんな…父さんのせいって事…？」

「お…おい…」

「じゃ…色々、隠してたのって……ホントはこれが理由？　私に気遣って、隠してたってこと？　そういう事なの…！？」

段々と感情的になりながら先輩らの方を向いて話すゆかり。だが、これは美鶴さん達は知らなかった情報のはずだ。そのため、美鶴さんはそれを否定しようとゆかりに声をかける。

「岳羽、それは違う、私は…」

「かわいそうとか、やめてよッ！！」

《ガチャ…バタン》

「岳羽ッ！」

美鶴さんが言い終わる前に、ゆかりは叫ぶと駆け出して行った。ゆかりの突然の行動に美鶴さんもみんなも驚いているが、さてどうしようかな…。そう思っていると風花がおずおずと「あの…誰か…行った方が…」と声をかける。うん、まぁそうだね。でも、その前に…。

「みな「僕が行ってきます」…済まない」

「……桐条、先ほどの映像のデータのコピーを用意しておけ。それが出来次第、私か公子に届けさせろ」

「…？　わかりました、すぐに準備させます」

「ああ、頼んだ」

僕は武治氏にそういうとゆかりを追うため部屋をでて、海岸へと向かった。

――海岸

「ずっと信じてたのに…こんなの、キツいよ…」

海岸へと向かうと、砂浜にぽつんと立っているゆかりを見つけた。近付いていくと《ザッザッザ》と砂によって自分が近付く音が聞こえたのか、ゆかりが振り返り話しかけてきた。

「湊君…覚えてる？　前に、病院で言ったこと…私のお父さん、子供の頃に死んだって…。さっきの話で分かったでしょ…あの事故が原因なんだ。普通の人は真相なんて知らないから、当時は根も葉もない噂が立ってさ…。父さん主任だったから、世間から目の敵にされてね…。いろんな場所を転々と引っ越したの」

「そうだったんだ…大変だね」

「…まあね。でも私、ずっと信じてた。父さんは悪くない筈だって。小さい頃から大好きだったし、絶対悪い事するような人じゃないって」

弱弱しくもそう言いながら笑顔を見せるゆかり。その正面に移動しながら聞いていると、ゆかりは一度俯いてから顔をあげて話し始めた。

「実は…春頃ね、手紙が届いたの。１０年前の父さんから…“家族へ”って。笑っちゃった。殆ど私の事しか書いてないんだもん…。だから信じようって思ってたのに…。だから、自分に力があるって分かった時は、偶然じゃないって思った。怖かったけど、桐条グル

ープの傍に居れば、父さんの事…なにか分かるかもって。だからペルソナ使いになって、戦いも続けてきた。でもさ…なんて言うか…そんなの無駄だったんだよね…」

「無駄じゃないよ」

「フフ、気休めだよそれ。ハハ、現実ってキツいよね…」

僕の言葉にそう返すゆかり。すでに笑い声は、弱弱しく口で笑い声の音を出している程度になっている。それだけでかなり精神的にまいっている事が分かるが、僕はゆかりの話を黙ってきく。

「怖いの我慢して戦ってるのに、どうにもなんないよね、これじゃ…。それに、私…もしかしたら、嫉妬してたのかも。あんな事があったのに、なんで桐条先輩にはまだお父さんがちゃんと居るのかって…。ハハ、みっともないね、私」

「同じ状況なら、皆そんなもんだよ」

「ハハ、すごいよね、キミ。いつもそうだよね。1人だけ冷静で、余裕あって。そうやって、私のこと慰めて、支えてくれるってワケ…？」

僕の言葉が気に触ったのかどこか棘のある言い方をしてくるゆかり。それに僕がリアクションを返さないでいると、ゆかりは視線を鋭くして叫んできた。

「分かったような顔しないでよっ！　あなた、私のこと、何も…。ゴメン…私、余裕無くて、ワケ分かんない…。なんか、怖くて…。もう、全然、分かんない…。教えてよ…私…これから、どうし

たらいいのかな…」

「分かんないなら、お父さんを信じてればいいんじゃない？」

「信じ続けろ…って事？」

泣きながら僕の胸に頭をポスンと当ててきたゆかりに返事をすると、ゆかりは涙を手で拭いながら尋ねてきた。僕はそれに笑顔で頷いて返すと、ゆかりはさきほどよりちゃんと笑って口を開いた。

「すごいよね、キミ。…ゴメンね、私の事ばっかり。あなたも両親、無くしてるのにね…。辛いのには慣れてるから、私は大丈夫。でも、あなたと話せて良かった。連れて来いって、先輩に言われたんでしょ？」

「言われかけた所で自分で行くって言っちゃった」

「ハハ、かっこいいじゃん…ありがと」

ニコッと笑って答えると、ゆかりは泣き腫らした目で笑っている。精神的にはまだ全然立ち直れていない事が分かると、僕はゆかりを抱きしめた。抱きしめるとゆかりの震えがゆっくりと静まっていった。どうやら少しは落ち着いたみたいだな。そう思うと、僕もゆかりへ話しかけた。

「ゆかりは僕を冷静だって言ってたけど、僕は冷静なんかじゃないよ」

「……え？」

「前に病院でも言ったけど、僕だって怖いよ。まぁ、ゆかり達の言う恐いと僕の怖いは違うみたいだけどね」

不思議そうに僕を見ているゆかりに、僕は自分自身に苦笑しながら話を続ける。

「僕はね、みんなが傷付いたり死んだりする事が怖いんだ。だから、最初の満月の日にゆかりが殺されるんじゃないかって必死だった」

「そんな素振り一度も…」

「そのあともそう。公子は部活じゃ先輩だけど、順平も新たに加わって戦力が増えた安心感より自分がみんなを守っていけるかって不安感の方が強かった」

「皆、あなただけに守ってもらおうなんて思ってないよ」

ゆかりは悲しそうな表情をしながら僕に言ってくる。うん、僕もそれはわかってるんだけどね。心の中でそう思い小さく笑いながらそれを伝える。

「うん、わかってる。でも、大切な人を誰も失いたくないから…」

「わかってないよ！　モノレールのときも、風花を助けに行ったときも無茶して！　運良く無事だったから良かったけど、一歩間違えたら死んでたかも知れないんだよ！？」

「…ゴメンね」

僕は怒ってくるゆかりに謝るが、ゆかりは僕のシャツの胸元をギュッと握ると。抱きついたままさらに言ってくる。

「謝って欲しいんじゃない！　もっと仲間を、私を頼ってよ！　守られてるだけのメンバーなんて仲間じゃないよ！」

「……そうだね。でも、僕には仲間なんていないし。他になにもないから」

「え？　それって「うぉぉーい！」」

ゆかりが何か言いかけると、そのとき遠くから順平が走って来た。話も終わったし丁度いいと思ってゆかりから身体を話すと、屋敷に戻るため声をかけることにした。

「じゃあ、順平も呼びにきたみたいだし、影時間になる前に戻ろうか」

「あ、ちょっと。話はまだっ」

そんな風にまだ僕に何かを言いたいらしいゆかりをスルーしつつ屋敷に向かって歩き出すと、僕とゆかりは走って来た順平と一緒に歩いて戻って行った。影からこちらを見ていた公子をおいて…。

「……湊君」

深夜――桐条別邸　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

湊やゆかりが屋敷に戻ると、武治からの話は終わり。最後に湊にコピーデータの入ったディスクが渡され全員が解散した。その後は自分に割り当てられた部屋に戻る者や、他の者と共に雑談をして過ご

す者など各々が好きに行動していた。その中で湊を除く男2人は順平の部屋で話をしていた。

「しっかし、真田サンの趣味は公子ッチとはねぇ…オレはてっきり桐条先輩が好みかと思ってましたよ」

「なっ、誤解を招くような言い方をするなっ！　俺は草摩ではなく、草摩の水着が好みだと…」

「はいはい、別に恋愛方面の話にいくとは思ってないから大丈夫っスよ。つか、公子ッチは既に攻略不可能ですし」

やや動揺しながらムキになって言い返す真田に、順平は苦笑しながらもそれを宥める。なぜなら、仮に真田が公子を異性として愛していたとして希望は全くのゼロだからだ。それが分かっていてわざわざ恋愛の話に持っていこうとは誰も思わない。

「しかし、あれだな。有里がくる以前はもっと冷めた性格だったのだが、やつが転校してきてからは良くも悪くも明るくなった」

「そうっスね。まぁ、それを言うなら寮の女子は全員同じ事が言えますけど」

「…そうだな。美鶴は自他共に締めるところは締め、厳しく接するタイプだとずっと思っていた。しかし、最近になってからはどうだ？　草摩程ではないが、有里に対しては弟に甘い姉のような状態だぞ」

「それが一部の生徒には人気らしいですけどねぇ。『お姉様の寵愛を一身に受ける弟君』とか『唯一の安らぎを得た女帝』とかって」

そんな風に学校での最近の美鶴に対する話題を話す順平。だが、それを聞いた真田は「なんだそれは…」と呆れている。2人は長い間そのように話していた訳だが、常に話題に絡んでくる人物である湊も話しに入れようと考えた。

「結構長い事話してましたね。けど、こういうシチュでしか話せないことってあるでしょ？　そろそろ、湊も呼びにいきましょうよ」

「それは良いが、あいつは起きているのか？　普段は寝ているとこばかり見ているから、起きているか分からんぞ」

「なーに言ってんスか。そんときは寝起きドッキリに変更するから良いんスよ。んじゃ、ちょっくら向かうとしますか！」

順平がそういって立ち上がると真田も同じように立ち上がり部屋を出た。

――二階廊下

2人は部屋を出て湊の部屋へ向かうため暗い廊下を歩いていると、前から人が歩いてきた。近くまで行くとその相手は少々ラフな部屋着の女子たちだった。相手も順平達に気付いたのか近寄ってくると、口を開いた。

「あ、先輩に順平くん。あの、公子ちゃん知らない？」

「草摩か？　いや、俺達はずっと順平の部屋にいたから知らないが。何かあったのか？」

少し心配そうな表情の風花に尋ねられると、今までの自分達の行動

を教えつつ答える真田。そして、相手の状態から何かあったのか気になり聞き返すと今度は美鶴が口を開いた。

「ああ、岳羽と山岸が部屋に行ったらいなかったそうだ。言われて私も風呂や他の場所を探したんだが、見つからなくてな」

「んじゃ、湊の部屋じゃないんスか？」

「そこは公子の部屋の次に探しにいったわよ。でも、湊君もいなかったからこうして探してるの」

ゆかりはとっくの昔に探していると答えると、他にどこかあったかなと考え始めた。しかし、湊も共にいないと知った順平はある1つの事を思いつく。

「なぁ、それって2人でどっかに行ってなんかしてんじゃねえのか？」

「何かとはなんだ？　有里はこんな時間にわざわざ女子を連れ歩いたりせんだろう」

「甘いっスよ、真田サン。夏に海に若い男女とくれば開放的になってもしょうがないですって。つまり、2人は今頃…≪≪≪バキッ≫≫≫いてぇ!?」

順平の言ったことに不思議そうな表情で真田が言い返すと、得意げな顔をする順平。そして次にはやらしい顔をして変な事を言い始めたので、美鶴・ゆかり・真田の3人は前後から順平の頭を殴った。前後から攻撃されたため痛みを逃がす事が出来なかった順平がしゃがみこんで痛がっていると、それを無視した美鶴が口を開いた。

「くだらないことを言ってないで2人を探しに行くぞ。大丈夫だとは思うが召喚器くらい持っていくとしよう」

「わかった。俺達も行くから準備が出来たら玄関前に集合しよう」

真田がそういうと全員が頷き各自の召喚器を持って玄関に集合した。集合が終わると、風花のルキアで公子の居場所が海岸だとわかり、海岸まで探しに行くことにした。

――砂浜　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

深夜になって私は1人海岸に行くと、そこには湊君がチェアに座り1人でポツンとしていた。その後ろ姿を確認し近付いていくと、振り返らずに湊君が話しかけて来た。

「話したいことがあるんでしょ？」

「…うん」

「隣、座りなよ」

湊君はそういって自分の座っているチェアの空いている部分を指差した。私はそれに「うん」と、短く答え座る。そして私が座った事を確認すると、湊君が私の方を見て話しかけてきた。

「なんで分かったのか聞かないんだ？」

「だって湊君には隠し事できないって分かってるもん」

「そんなに鋭いつもりは無いんだけどね」

暗い海の方を見ながら苦笑すると、そう返してくる湊君。確かに湊君にはそれが普通の感覚かもしれないけど、私や他の人にとっては充分過ぎる鋭さだろう。

「十分過ぎるよ。さっきだって私に気付いてたでしょ？」

「…まぁね。バレてると分かった上で隠れて聞いてるのは関心しないな」

「大切なことを伝えてるみたいだから空気読んだだけだよ」

「フフッ、それはありがとうございました」

そういって私も湊君もおかしくなって笑いだす。別に何でもない事なのにこんな風に話すのが楽しい。出来れば今後もこんな風に話していければと思う。しかし、それは無理だろう。なぜなら私がそれを壊すから。

今日この場で私は湊君が触れられたくないであろうことを言うつもりだ。きっと彼は怒る。もしかしたら私を憎むかもしれない。自分の家族であり、異性として愛している相手に憎まれる。それが途轍もなく怖い。しかし、いまの一線を引いた関係を壊すにはこれしか方法がないから……。

そんな風に考えていると、湊君の方から用件を尋ねてきた。覚悟を決めなきゃ。

「で、話したいことって？」

「…うん。あのね、私いつも湊君が頑張ってるって思ってた。でも、大型シャドウとか強敵が出たときいつも湊君が頑張り過ぎて潰れちゃうんじゃって心配だった…。なにをそんなに頑張ってるんだろう、もっと仲間を頼ったら良いのにってずっとそう思ってた」

隣の湊君が黙って聞いている事を確認しつつ、私は自分の勇気を全て使い覚悟を決める。彼を傷つける罪悪感はある。自分が嫌われる恐怖感もある。そして理性がここで止めておけと言ってくる。しかし、エゴだと分かってても私は覚悟を決め口を開いた。

「…でも、ゆかりとの話で分かった。湊君は仲間を守りたいんじゃない。自分の物や居場所を奪われないようにしてるだけ」

「…違うよ」

「自分にはそれしかないって、あるものだけを必死に抱えて」

「違う」

最初は笑って否定していた湊君の顔から笑顔が消えた。いまの湊君から感じる雰囲気は、これ以上踏み込んでくるなという拒絶。でも、ついに知った湊君の心の核となる部分。次に同じ話をしてもそれは巧みに隠され、本当の想いを引き出す事はできなくなっているだろう。だから、私は言葉を続ける。

「空っぽな自分は不安？　戦うたびに自分は傷ついても、無事な居場所をみて安心してるの？」

「違うっ！！」

湊君はそういうと立ち上がり私の方を見てきた。怒りを感じていることはあっても、こんな風に感情的になって叫ぶ事なんて今までなかった。ここまできたらもう戻れない。私も同じように立ち上がり数歩進むと湊君の方へ向き直り。最後の言葉を湊君へぶつける。

「なにが違うの？　そうやって自分の中に抱え込んで皆に誤解されても何も言い返さない。そんなに昔の自分に戻るのが怖いの？」

「ッ、お前に何がわかるっ！！　当たり前だった日常はある日突然奪われ、助けを求めた手は最後まで誰にも取ってもらえなかったッ。理不尽な理由で蔑まれ、子供にはどうしようもない理由で虐げられる。どこに行っても同じだった。日に日に自分が生きてるのか死んでるのかも分からなくなっていった！」

私にそう叫んだ湊君の目には籠もる感情は完全なる敵意。いままで静かに怒るときや、路地裏のときですら籠められていなかった感情だ。その視線を向けられ心が折れそうになるが、なんとかギリギリのところで耐えると湊君はさらに続けた。

「居場所を奪われないようにしてる？　それの何が悪い！　ゆかりには悪いが、彼女の父親を含め事故で死んだ研究者はしょうがない。利用されてたとはいえ、自分の行っていた研究の失敗で起きた事故だ。被害者になろうと納得はできなくても理解はできる。だが、俺たち家族が何をした！ただの事故じゃない、戦いに巻き込まれたんだ！　俺は覚えてる。あの日、橋の上での戦いを！」

私に怒りの感情をぶつけながらそう叫ぶ湊君。みんなは冷静だとか完璧な人間のように思っている。事実、私もそんな風に思っていた。しかし、それは間違いだった。湊君も私たちのように悩みや不満を感じていたのだ。

「俺は抱え込んでるわけじゃない、誰に言ったって変わらないから言わないだけだ」

「どうして変わらないって決めつけるの？」

「決めつけてるんじゃない。それが俺の過ごしてきた中で学んだことだ。この世界に偶然や奇跡なんてない。あるのは“必然”と“残酷な現実”だけだ」

そういった湊君の瞳には諦めの感情しか感じられない。この年齢で未来への希望を抱かず、あそこまで冷めきった諦めの表情を作るなんていったいどれだけの地獄を見てきたのだろう。“知らなかった”、“子供だったからどうせ自分に出来る事はなかった”、そんな言い訳すら今の湊君を目の前にしては考える事ができない。

「だからもう助けを求めないの？」

「ああ。俺はもうあんな気持ちは味わいたくない。それなら孤独の方がマシだ」

ついに湊君の最後の気持ちが吐き出された。湊君は仲間を必要としていなかったんじゃない。自分の助けを求めた手をとってもらえない恐怖が、仲間を作る事を躊躇わせていたのだ。しかし、そうだとしても私や仲間を見くびってもらっては困る。

「そんな「ふざけんなっ！！」」

その事を告げようとした時、後ろから怒りに満ちた声が聞こえてきた。それに驚き私達が振り返るとみんなが揃っていた。

「順平？　それにみんなも…」

「さっきから聞いてりゃふざけたこと言いやがって！　お前はいったい何様だ！」

先ほどの声の主である順平がそう怒鳴ると、真田先輩が湊君の方へ向いて口を開いた。

「俺だって聖人君子じゃないから誰彼構わず救ってみせるとは言えん。だがな、例えこの身が危険にさらされようとも、お前たち仲間は死んでも助けてみせる！」

そういって強い視線を湊君に送りながら先輩は右の拳を左手へ《パシン！》と打ちつける。それを聞いた湊君の瞳が僅かに揺らぐと、今度は風花が口を開いた。

「湊君は苦しんでいた私の心を救ってくれた。だから今度はたとえ他の誰もが見逃しても、私が湊君の伸ばした手を絶対見つけるよ」

優しい笑顔でそういうと風花は自分の右手を湊君の方へと差し出した。それを見た湊君の瞳の揺らぎは先ほどよりも大きくなる。そして、続いて桐条先輩も一歩踏み出すと口を開いた。

「思えば、君は最初から自分が桐条の被害者だと知っていながら手を貸してくれていたな。そんな桐条である上に隠し事をしていた私を信頼していると言ってくれたとき、私の心がどれだけ救われたことか…もし、君が助けを求めるなら今度は桐条ではなく私自身が君を助けに行くと約束しよう」

桐条先輩は決意の籠った表情でそういって頷く。先輩のその表情を見た湊君はもはや瞳の揺らぎは誰にでも分かる程になり、首を横に振りながら僅かに後ずさった。しかし、仲間の言葉はまだ続く。次は悔しそうにしながらも怒った表情の順平だ。

「オレは活躍してるお前に嫉妬とかして当たったりしたけどよ。バカだから言ってくれなきゃわっかんねぇんだよ！　悩みがあんなら言えよ。いつもボロボロになっても平然としてるのみてっと、お前がオレたちと同じ悩みもありゃ傷つきもする普通の人間だってつい忘れちまうんだよ。言ってくれりゃあ、いくらでも助けになるし一緒に悩んだりもしてやる。一人で抱え込んでんじゃねぇよ！」

そんな風に自身の想いをなんの飾りけもなくぶつける順平。しかし、だからこそ今の湊君には強く届いたのだろう。湊君は顔を俯かせて首を横に振り、拳を強く握りしめる。その様子に苦笑しながらゆかりは湊君に近付くと彼を抱きしめた。

「私も言いたい事はみんなとほとんど一緒かな。自分が、空っぽなんて悲しいこと言わないでよ。逃げ出した私を追いかけてきてくれたときすごく嬉しかった。抱きしめてくれたときは安心した。空っぽな人にそんな事はできないよ？　湊君が逃げ出したいときや、助けて欲しいときがあったら言って。今度は私がこうやって抱きしめて安心させてあげるから」

「みん、な…」

ゆかりに抱きしめられ顔をあげた湊君がそういうとゆかりは離れた。まだ心の中は乱れたままだろうけど、今ならきっと届くだろう。私達の純粋な気持ちが。

「分かった？　たとえ、湊君が救われること諦めても、ここにいる皆は誰も諦めないよ？　普段、守ってくれてる姿を知ってるからね。ボロボロになったって駆けつけるよ♪」

そうやって私が笑って言うと湊君は自分の顔を掴むに右手を目のところへ持っていき、ぽつぽつと口を開いた。

「……諦めたつもりだった。この世界に救いなんてない、それを知って世界に見切りをつけた。幼い俺の救いを求める手は、誰にも掴んでもらえなかったんだ……」

湊君が話し始めると全員が真剣な表情で聞いている。私も実際に本人から聞くのは初めてだ。

「迷惑をかけないよう引き取ってくれた家では手伝いだって嫌な顔せずした。でも、その家の子供にはそれが褒められようとやっていると映ったんだろう。それからは嫌がらせの毎日だ。家だろうが学校だろうが暴力を振るわれ、食事には異物を混ぜられて……。親達はそれを知っても注意どころか俺が悪いと言ってきた。そいつらは俺の親の遺産を食いつぶし、宗家から貰った養育費は全て自分達のために使っていた。俺が与えられた物はその家の子供のボロボロになったお古。それに残飯のような食事」

「そんなっ…」

風花が湊君の話をきいて口に手を当てそんな風に驚く。他の人もそこまでは知らなかったためかなり驚いているようだ。

「そんな状態を知って可哀想にと言ってくれる者もいた。子供だった俺にはそれが希望に見えた。もしかしたら救ってくれるかもし

れない…そんな淡い希望を抱いては諦める日々。結局、言葉をかけるだけで何かをしてくれる者はいなかった。俺は同情されたかった訳じゃない。言葉なんていらない、あの地獄のような場所から俺を救って欲しかったんだ」

そう言ってから自分の顔から手を離した湊君の表情は嘲笑。まるで、希望に縋っていた頃の自分を笑っているかのようだ。

「そして10歳のときだ、俺の心はついに壊れた。自分でもよく持った方だと思うよ。その後も引き取られた家の者たちからの暴力や嫌がらせは続いたが、心が壊れたせいか何も感じなかった。そして中学生になって、公子と伯父さん達のおかげで今のように自我が再び芽生えた。だから今度は最初から期待しない。俺の大切なモノを奪うならそいつを殺す……そんな風に考えていた」

「じゃあ、ずっと1人で戦ってたのも…」

「ああ、みんなはとっくに大切なモノなんだ。1人でも失えば俺はもう立っていられない。だから、例えみんなに何を思われようと俺は1人でみんなを守るつもりだ。俺の願いは叶わないから、救いを求めてもそれは無駄だから自分で全部やろうって…」

ゆかりの言葉に諦めた表情のまま淡々と答える湊君。それを聞いたみんなは悲しそうな表情をすると思った。だが、全員の表情は全くの別物。それは怒り。私も含めて全員が目の前の勘違いしているお馬鹿さんに怒っていた。

「お前が勝手に決めるんじゃないっ、俺は仲間に守られるだけの存在なんて御免だ」

「私だってそうだ、君には力を貸してくれと言った。だが、私たちをただ守ってくれと頼んだ覚えはない」

先輩2人がそういうと言われた湊君は驚いた表情になる。そして今度はゆかりが湊君の前まで進んだかと思うと口を開いた。

「さっきも言ったけど、守られるだけなんて誰も望んじゃいないの。湊君の大切なモノにとってその行動がどれだけ酷いことか分かってる？　自分で自分の大切なモノを傷つけてるのよ？」

「そうだよ。私には戦う力はないけど、みんなが無事でいられるように全力でサポートしてる。湊君にとっては力の一部かもしれないけど、私にも似たようなことくらいできるもの」

「だな。風花が湊の知覚と似た力を持ってるってんなら、オレらは戦う力の一部を持ってるぜ。湊相手なら全員でかかっても負けちまう程度の力だが、他の敵からはなんとか生き延びることが出来る程度の力だ」

「フフッ、てことは私たちは湊君に守ってもらう必要ないってことだね。けど、私達には“湊君”が必要なの。だから、仲間として一緒にいてよ。湊君が私たちを守るって言うなら、私たちも湊君の心を守るから。伸ばした手を今度こそ掴んでみせるから」

ゆかりと同じように近付いてそんな風にいう私達。湊君は最後に言って湊君の方へ差し出した右手を見ている。お互いに助け合う仲間になって欲しい。だから、かつて差し出される事のなかったこの手を取ってと。

「お、俺は……みんなの事を信じたい。で、でも、まだ……」

「歩み寄ってくれるなら今すぐじゃなくていいさ」

「湊君のペースでいいよ。私達は待ってるから」

桐条先輩と風花が優しくそういうと、湊君は俯いて小さく「ありがとう」と言った。フフッ、でもこれでやっと湊君も揃ったね。みんなもきっと同じ事を思っているのだろう。その顔は嬉しそうな笑顔になっている。それから少し経ってから湊君が顔を上げるといつもの雰囲気に戻っていた。そして湊君は小さく笑うと私たちに話しかけてきた。

「馬鹿だよ、みんな」

「一番の大馬鹿が言うなっつの」

「一番はあんたでしょ？　旅行終わったら結果発表なんだからね？」

「ひでぇ、ゆかりッチ！　オレがせっかく和ませようとしてんのに」

湊君の言葉を聞いて笑いながら順平が言い返すと、即座にゆかりが突っ込みを入れた。それを聞いてみんなは笑うが言われた本人は少しショックを受けているようだ。そして、そんな様子を笑いながら真田先輩が屋敷の方へ歩き出しみんなに声をかけた。

「ほら、話が終わったんなら戻るぞ大馬鹿その1、その2」

「ひっで！　筋肉馬鹿に言われたくないっすよ！」

「誰が筋肉馬鹿だ！　俺は動きやすくするためにだな…」

みんなも帰り始めると順平と真田先輩がなにやら言い合いを始めた。まわりでそれを聞いている女子たちはどっちもどっちだという顔をしている。そして、そんなみんなの様子を一番後ろで見ている湊君に私は話しかけた。

「で？」

「ん？」

「悩みは少しは解消した？」

隣に移動してそう尋ねると湊君は少し考える素振りを見せる。そして、それが終わると完全にいつも通りの表情で答えた。

「うん、まぁね。でも、みんなが助けてくれるなら今よりもっと頑張っちゃうかも知れない」

「それじゃあ、意味ないでしょー？」

「ははっ、そうだね。それより公子」

「んー？」

「ゴメンね。僕のことを考えてくれてたのに」

謝りながら少し俯く湊君。しかし、湊君が一番触れて欲しくなかった部分に踏み込んだのはこっちだ。むしろ私の方が謝るべきだろう。

けど、湊君はきっとそれを望まない。だから…

「ちっがうなぁ。こういうときは謝るんじゃないんだよ？」

「？？　ありがとう？」

「なんで疑問系？　まぁ、いいけど、どういたしまして。それに恐かったけど、悪いことばっかじゃなかったし～」

自信が無いのか言葉尻をあげてお礼を言ってきた湊君。それに笑いつつそのお礼を受け取ると、私は今回の件の収穫があったことを湊君に知らせる。すると、それに覚えがないのか湊君は不思議そうな顔をした。

「なんかあった？」

「うん。自分のこと俺って言ってあんな本音を吐く湊君なんて初めてみたもん」

「ああ。本音はともかく一人称に深い意味はないんだけどね」

そういうと湊君は苦笑する。フフン、それでもこの私には関係ないのだよ。そんな風に思いながらその理由を説明する。

「フフン、公子の脳内湊君アルバムに永久保存決定だね♪」

「なにそれ？」

「フッフーン、それはね？　日常の観察記録だけでなく、寝ているときの湊君、食事してるときの湊君、はたまた昔実家でお風呂場

バッタリしたときに見た湊君の裸体などなど湊君の全てを未来永劫忘れないようにするための素敵な記憶領域なの♪」

自分でもとても良い笑顔だと分かるくらいの表情でそういうと、隣を歩いていた湊君がなにやら驚いている。そしてさらに横に2歩移動して距離をあけてきた。

「え、ストーカー？　すみません、そういうの困るんですけど…」

「え、遅れてきた反抗期？　嬉しいような寂しいようなでお姉ちゃんは複雑です。とりあえず、保存保存♪」

「なら走って自分の部屋へ！」

「ちょ、はや！　冗談なのに待ってよ～」

そんな風に最後には影時間時の私並みの速度で走り始めた湊君を追いかけ、みんなで屋敷にもどって休んだのだった。

第四十話　後編（後書き）

ゆかり最大のヒロインイベント（コミュ除く）を完全に喰ってしまったかなと反省しています。しかし、妄想段階で第一部ではこの湊が仲間になるというイベントは絶対必要と考えていました。これがなきゃ第一部のラストへ持っていくことができないんです。ですんで、ゆかり好きの方ごめんなさい。

第四十一話　前編（前書き）

今回のナンパは男編と女主人公時の順平と真田の話をミックスしたものです。結局、２人はナンパに成功しないんだなって思いました。

第四十一話　前編

7／21（火）
朝――森の中　〈公子　Side〉
屋久島旅行2日目の朝。日がさんさんと降り注ぐ屋久杉の森の中を、女の子だけで天然記念物だという縄文杉を見に行くために歩いている。

「空気、おいしい…。こんな森林浴なんて、巌戸台じゃ絶対出来ないですよね」

「フフッ、そうだね」

「「……」」

風花が笑顔で言ってきたので私が笑顔で答えると、風花は少し安心している。というのも、朝に誘った時点でゆかりと桐条先輩はなにやら落ち込んでいるというか、暗い雰囲気なのだ。そして、いまも2人は何かを考えているのか黙っている。それを見た風花は再び口を開いた。

「そ、そうだ、昨日の順平くん…。なんだか、やらしい話ばっかりで、困っちゃいましたよね…。私たちだけで来て、よかったかも…」

「ん？　…まぁね」

「あぅ……」

風花が話題をふっても気の抜けた返事を返すゆかり。先輩とゆかりは黙っているのは一体どっちの理由だろうか。普通に考えれば桐条と父親の件で気まずくなっていると考えられる。しかし、昨日の深夜に湊君から語られた幼少期の体験と事故に対する本音。その内容の衝撃は男である真田先輩と順平ですら言葉を失っていたほどだ。メンタルがあまり強いとは思えない他の女子なら尚の事だろう。

そして更に言うなら自分達の親族が原因で彼をそんな状況に追い込んでしまった。まぁ、それは私にも言える事だけど、出来る事はなかったと割り切る事は到底できない。それが自分たちにとって最も大切な人、またはそれと同程度であるから、余計に罪悪感は増していき。どうすれば贖罪できるのかを考えてしまう。

そんな風にまともに会話も続かないまま森を進んでいると、桐条先輩の携帯電話に着信があった。

《ピリリリリ…ピッ！》

「はい、私です。…待ってください、スピーカーホンに切り替えます。どうぞ」

『今、島の研究所にいるんだが…。廃棄されて、動かないはずだった機械が、勝手に出て行ってしまったんだ…』

スピーカーホンにして聞こえてきた声は理事長のものだった。そして、その言葉の中に気になるものがあったのか、ゆかりは「機械…？」と聞き返す。すると、風花も自身の能力で探す気なのか理事長に尋ねた。

「ええと…どういった物なんですか？　シャドウ以外だと、勝手が違うので…」

『戦闘車両の一種でね…実は“対シャドウ兵器”なんだよ』

「対シャドウ兵器…って、要するに“戦車”ってこと!?　ちょ、みんなに連絡しなきゃ！　えっと、ケータイ…」

そういうとゆかりはズボンのポケットから携帯電話を取り出し、コールしてみるがどうやら相手はなかなか取らないようでイライラしている。その様子を桐条先輩は見ると、理事長に向け現状を説明をし始めた。

「実は今、男子3名と別行動中でして。全員の招集には時間がかかりそうです」

『そうか…。とにかく、出来るだけ早く当たってくれ。私もすぐに戻るから』

「もし、目標が捕獲不能と判断される場合、破壊しても宜しいですか？」

『破壊はね、たぶん有里君しか無理だね。いやまぁ、破壊されても困るんだけど』

理事長は苦笑しているのか、笑いを含んだ声でそう言ってきた。それを聞いた私達は驚いてしまう。湊君しか倒せないってどんだけ強いのよ。てか、そんなの捕まえられるの?私がそう思うと同時に同じ事を心配したのか風花が口を開いた。

「無理って…そんなのホントに止められるんですか…?」

『とにかく、やってもらうしかない。また後で連絡するよ』

そう言い終わると理事長からの電話は切れた。そうして先輩が携帯電話を仕舞うとずっと男子連中と連絡を取ろうとしていたゆかりが振り返り話しかけてきた。

「ダメです、みんな繋がりません」

「…まあいい。まずは、我々の装備を取りに戻ろう。そうすれば山岸のペルソナでも探せる。もっとも島全体となると、簡単じゃないが…」

「もうっ！　カンジンな時に何処行っちゃってんのよ！」

ゆかりがそう叫ぶと、私たち４人は装備を取りに屋敷へと急いだ。

――海岸　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

屋久島海岸に僕らは男たちで海岸にやって来た。メンバーの女性陣の姿は無い。といっても僕は朝食後に公子から話は聞いているので問題ないけどね。そんな風に考えながら昨日と同じようにＴシャツにハーフパンツという格好でチェアに座っていると順平が鼻の下を伸ばしながら口を開いた。

「あっれー、彼女たち、まーだ起きてないのかなー？　んもー、お寝坊さんなんだから！　海は待っててくれないってのに、ねー？」

「ああ、日がかげると水温が下がり、体力を余計に消耗するからな」

「え、あー、そっスね…そこなんだ…」

「そう言えば、来がけに屋敷の使用人から手紙を渡されたんだっ《シュバッ》あっ、おい、順平！」

真田先輩が途中まで言うと、その持っていた手紙を目にも止まらぬ速さで順平が奪い取った。普段からそれぐらいのスピードで動ければかなり強くなれそうなのに…。２人を見つつそんな事を考えていると、順平は先輩に怒った口調で話しだした。

「抜け駆け禁止っス！！　メイドさんからラブレターなんて、お父さん許しません！！」

「馬鹿だろ」

「えー、なになに…”４人で、縄文杉を見てきます。”…ええっ！？」

順平はラブレターだと思っていたものがただの伝言であったこと。おまけに女性陣が海へはこないことを知るとかなりのショックを受けたのか絵文字の『ＯＴＬ』のようなポーズで砂浜に膝をついた。その手から手紙を奪い返した先輩は手紙を見るなり「これは、山岸の字だな…」と呟くが、順平はそれを無視して復活すると突然叫び出した。

「あーもう！　夏に、南の島へ来て、なんで、海に来ねーんだ！？　いいのかソレ、”人”として！？」

「お前が原因だろ」

「昨日のは、重たい空気を何とかしようって、オレなりに気ィ使

ったんスから」

順平が困った風な顔をして反論すると、真田先輩も「俺に言うな」と言い返している。どことなく先輩も残念がっているように見えるのは気のせいだろうか？2人をそんな感じで見守っていると、順平は顔をシャキっとさせ口を開いた。

「…まあでも、それはいいんス。大事なのは、ヤロウだけでどうすんのっていう事実っス！　持ち合わせが無ければ現地で調達！　これ、兵法の初歩ナリってね！　ズバリ、名付けて…〝ヤクシマ磯釣り大作戦〟！」

「磯釣り…？　ナンパの事か…？」

「略してヤシマ作戦か……」

「やめろ湊っ、色々と危ない発言はよせ！　…で、どうスか？　つか、真田サンいれば絶対イケますって！」

僕が発言し天田少年の声や、真田先輩の荒垣さんの名前の呼び方。さらにファルロスの声のことなど考えている間に。順平がやる気満々に先輩に詰め寄ると、先輩はあからさまに引いている…。

「いや、俺は…」

「…真田先輩、自信無いんスか？」

「なっ、なんだと！？」

先輩は順平に挑発されると簡単に反応した。これはもうヤシマ作戦

決行の流れだな。そう思いつつ後の展開を見ていると、順平がさらに煽り始めた。

「ま、いいっスけどね？　誰だって、負ける戦は怖いですし」

「…やってやろうじゃないか！　なっ、有里！」

「はいはい…んじゃ、作戦開始ってことで」

急に話題を振られたので適当に返事をすると満足そうに頷く先輩。そして、同意を得られると先輩は順平の方へ向き直り再び話し始めた。

「なら、いつも通り、こいつに現場指揮をさせる」

「エエッ、何スかそれ！？」

「“作戦”だと言ったろ、自分で」

「うっわ、超ヘリクツだ、それ！　おい、ちゃんとマジメにやれよ、湊？　“作戦”だかんな」

順平は先輩に不満を言いつつも僕の方を見ると、最後だけ凄みをきかせてそんな風に言ってきた。まぁ、今日は体調もちょっとイマイチだしルールを決めて勝手にやらせるか。そう考えると、２人を集めてブリーフィングを始める。

「じゃあ、今回の作戦についていくつか説明を始める。今回の作戦では各個撃破による個人戦をメインとしてポイント制でその勝敗を決める。各自様々な趣向を凝らし目標に接触。最終目標はケータ

イのカメラで一緒に記念撮影をすることだ。そしてメインでその写真に映る異性1人につき1ポイントとする」

「個人戦？　それは相手が複数人のグループだった場合もか？」

「その通り。共闘もありですが、それは双方の同意があった場合のみで。目標との接触中にその申し出をした場合は妨害行為として減点10点です。遊具や食料などの小道具は使ってもらって構いませんが、金銭の受け渡しは無しです。また、異性であれば年齢は問いませんが人間であることが最低限のルールとします」

「そうか……なら、負けた者は罰として“はがくれ”のおごりを科す！　作戦、開始！」

先輩はそういうと颯爽と走って行った。ちなみに水着は昨日、僕が渡した方なので安心だ。そしてもう1人は「負け？　負けって何？　え、ちょ、バラバラで声掛けるんスか！？」と驚いてるが、それを放っておいて僕は食べ物を買いに行くことにした。

ヤシマ作戦――海岸　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

湊の言うヤシマ作戦が開始されると、とりあえず順平は近くにいた1人でチェアに座っている女性に声をかけた。

「お、おねぇ〜さん？　良かったらぁ、僕とお茶しませんかぁ？」

「すみません、連れがいますので」

「…あ、そ、彼氏と来てるのね…」

相手が彼氏持ちだと分かると順平は大人しく、その場を去った…

――海岸　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

僕はみんなと別れると、とりあえずかき氷を３つほど買ってきた。
それを両手で持ってキョロキョロとあたりを見渡していると、かなり遠くの方に順平と真田先輩がいるのが見えた。それを確認すると、僕は近くにいた大学生か新社会人くらいの女性２人に声をかけた。

「あのー、すみません。ここらへんで帽子被った赤のトランクス履いた男子と、銀髪で緑のトランクスの男子見ませんでしたか？」

「え？　んー、ちょっと見てないなぁ。美希は？」

「私も見てないよ。お友だち探してるのかな？　ごめんね、力になれなくて」

茶髪ロングの女性が美希と呼ばれた黒髪セミロングの女性に声をかけると、その美希さんもその特徴に合う男子は見ていないと申し訳なさそうに言った。まぁ、それは分かってるんだけどね。２人はこっちの方に来てないし、視力がかなり良くないと向こうの方まで見るのは難しいだろう。そんな事を思いつつ、困った表情を作ると僕は再び口を開いた。

「あ、そうですか。教えていただいて、ありがとうございます。んー、でも困ったな。かき氷融けちゃうよ…」

「あー、そりゃ災難だね。でも、集合場所決めとかないと見つけるのは難しいと思うよ」

「ですよね…あ、そうだ。良ければこれもらってくれませんか？　このままだと融けてもったいないんで」

パラソルの下でシートに座っている2人の女性の方へ歩いていくと、僕はしゃがんで持っているかき氷を見せる。味は好みに対応できるようにイチゴ・レモン・メロンとばらばらにしてある。2人は一度かき氷の方へと視線を移してから僕の方を見ると口を開いた。

「え、いいの？　それお友だちの分でしょ？」

「そうなんですけど、見つけたときに食べれる状態か分からないんで。3種類ですが好きなの貰ってください」

「良いのかなぁ…んー、じゃあレモン貰おうかな。鈴はどれにする？」

「それじゃあ、私はオーソドックスなイチゴで」

2人がそういって選ぶと僕は笑顔で「どうぞ」と言ってかき氷を手渡す。2人はそれを礼を言って受け取ったので僕は立ち上がり去ろうとする。

「それじゃあ、僕はいきますね。貰ってくださりありがとうございました」

「え？　どうせなら食べていきなよ。友だち探してる間に君のも融けちゃうよ？」

「え、でも…」

「気にしなくていいって。ほら、ここ座って」

「あ、その…お邪魔します」

僕はいいつつサンダルを脱ぐと、2人の座るブルーシートにお邪魔してかき氷を食べた。その後、食べ終わったあともお話しをして、最後にネタばらしをすると相手は笑って写真撮影を承諾してくれた。これでまずは2ポイント…

――海岸　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

湊達の元から颯爽と去って行った真田だが、去って行ったのには理由がある。それは自身が得意とする運動についての会話で目標を攻略しようと考えたからだ。そして、元の場所から少し離れた場所にいた同い年くらいの少女を見つけると早速声をかけた。

「や、やあ！　最も効率の良い泳法を知ってるか？」

「……いえ、知りませんけど」

「バタフライは脚力が「すみません、別に興味無いんで」……あ、そ、そうか」

少女は真田に一言告げるとそのまま沖にいる友人の元へと泳いで行ってしまった。その姿を見るのを途中でやめると真田は少し落ち込みながら次の目標を探した。

――海岸　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

最初のターゲットだった大学生の鈴音さんと美希さんと別れると僕は浜辺をテクテクと歩いていた。あの2人がナンパに成功するとは思えないから、このあとは休んでても良いんだけどね。そう思いながらも周りを見ていると、泣きながら歩いている小さな女の子がいた。

「どうかしたの？」

「ふぇ？　ぐすっ…おにいちゃん誰？」

「泣いてる君が気になったから声をかけた人だよ。もしかして迷子かな？」

「ひっく…うん。おねえちゃん、どっか行っちゃったの」

舞子ちゃんと同じくらいと思われる女の子はしゃくりあげながら答えると、再び目には涙が溜まり始めた。うーん、放っておくのもあれだしね。お姉さんとやらを探すの手伝ってあげるかな。

「じゃあ、僕が探すの手伝ってあげるよ。いいかな？」

「ほんとう？　うん、いっしょにさがしてぇ」

「フフッ、了解。じゃあ、見つけやすいように肩車してあげるね」

言いながら女の子を抱き上げると、肩車をして手をぎゅっと握ってあげた。相手は少し驚きながらも喜んでいるようだ。

「えへへ、たかいねー」

「これならお姉さんも見つけやすいと思うよ。それじゃあ、行こうか」

「うん。あっちの方でいなくなったのー」

そんな風に女の子の指示を聞きながら似た気配を探すことで、女の子は無事に姉の元へと連れて行くことができた。その後、その女の子に懐かれた僕は。少しの間、その女の子と高校生と社会人の姉の計3人と遊んだ。こっちは事情がちょっと違ったがこんな遊びをしていると説明すると、別れる前の記念にと3人に囲まれるように記念撮影することが出来た。これで現在5ポイント…。

――海岸　｛Ｎｏ　Ｓｉｄｅ｝

最初の失敗からめげずに順平は次なるターゲットを探していた。スタートしてから結構な時間が経っている。その事に焦りを感じて順平は近くにいる1人の女性にとりあえず声をかけることにした。

「背中にオイル塗りましょうか～？　あ、僕、オイル塗るのスッゴク上手いんで～。

「日焼けしてるから、どいてくれる？　君、影になってるからさ」

「あ…日焼け中。失礼しました…」

頑張って声をかけてみるも順平は再びバッサリと斬られてしまった。そして落ち込みつつも思い出作りと勝負の為に次なるターゲットを探しに行った。

――海岸　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

最初の2人に加え、小学2年の沙希ちゃん・高校生3年の若菜さん・社会人の涼子さんとの写真を撮る事ができた僕は再び浜辺を1人で歩く。別にもう十分すぎると思うんだけどな。とくに作戦もないし…。そんな風に歩いていると突然大声が聞こえた。

「絵梨っ、一枝っ、真理子っ！！」

「どうしよう、完全に流されちゃってる…」

大声が聞こえた方を見ると、女性2人が遠くの方を見て心配そうな表情をしていた。その方向を見てみると、ゴムボートがかなり沖の方まで流されていた。ああ、オールで頑張ろうとしてるみたいだけど潮の流れで進んでないな。そう思いながら2人の元へと近付いていき、声をかける。

「どうしたんですか？」

「え？　あ、あの友達の乗ったボートが流されて戻ってこれないみたいなの」

「救助呼ぶにも時間かかるしどうしよう…」

2人はそんな風にオロオロして友達の方をみているが、心配するなら少しでも早く救助呼べばいいのに。何て心の中で僕は考えると、僕は上着とハーフパンツを脱ぐ。そして、最後にサンダルも脱ぐとそれらを女性らに預ける。

「これ、見といてください。ボートはこっちで何とかしますから」

「ちょっと、無理だってっ」

「いま救助呼ぶから待ってっ」

「それ濡らさないでくださいね。じゃあ、少し待ってて下さい」

僕はそういうと2人の制止を無視して沖まですぐに泳いでボートに

到着すると。そのボートの金具を掴んで浜辺へと泳いで戻った。上に乗っていた3人も浜辺で待っていた2人とギャラリーも驚いていたが、とりあえずそんな風に救出は完了したのだった。

そして、海水をシャワーで洗い流すと、服を持ってもらっていた人にタオルを借りた。その後、身体を拭いてから着替えるとお礼がしたいと言われたのでナンパ勝負の話をすると今度も笑顔で承諾してもらえたのだった。今回は社会人5人なので合計で10ポイント…。

――海岸　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

順平と真田はその後も連敗を続けトボトボと歩いていると、ばったり出くわした。相手の様子はどうだと確認すると、相手も落ち込んでいることから自分と同じ状況であることを把握する。

「うまくいかねっスね…」

「……だな」

「ナンパにゃ興味無かったんじゃ？」

「“勝負”にはこだわりたい」

順平に言われた真田は悔しそうにしながらもそう答える。そして順平も同じ事を思ったのか、ある提案を申し出た。

「真田サン、こうなったら共闘しませんか？」

「その場合、俺達の間に勝ちはなくなるぞ？」

「最下位よりマシです。それに数をこなして慣れたらまた別れた

らいいんスよ」

「……良いだろう。そうと決まったら全力でいくぞッ」

「ウスッ！！」

こうして順平と真田の共同戦線がはられることになった。しかし、２人は知らない湊が既に１０ポイントゲットしていることを。それも偶然にもそれなりのルックスを有してるグループばかりに遭遇していることを。

そんな何も知らない順平は真田と一緒に移動していると、パラソルの下のチェアで休んでいる女性２組を発見した。

「おっ、さっそく目標捕捉ッ！　じゃ、さっそく行きましょう！　まぁ、こういう所での声のかけ方はオレが教えてあげますよ。…まずは、相手と共通の話題を探し出すのが有効なんス。だから、最初は誰でも答えやすい無難な質問から入る…コレ鉄則。”どこから来たの？”とか、”海、楽しんでる～？”とかな。そういう他愛ない質問で始めて、後は、会話のキャッチボールが重要なわけ。まず、オレが声かけて気を引きますから、真田サンが質問の切り出し役ですよ？　…よし、じゃあ行くぜ。ねえ、ねえ！　お姉さんたち～！」

「ど、どこから来たの？」

少しどもりながらも、真田は順平に言われた通り質問をしてみる。しかし、急に声をかけられた女性の１人は少し面倒そうな表情で答えた。

「…え？　どこだっていいじゃん」

「あれ…あ、そんなこと言わないで教えてよ～」

あまり好感触とは思えない状況だが、順平はなんとか頑張って話を続けようとする。だが今度はもう1人の女性が返してきた。

「なんで、君に教えなきゃいけないの？」

「な、なんでって…そんな、冷たいこと言わないでよ～」

「……おい、これのどこが”会話のキャッチボール”なんだ？」

「いや、これからっすよ、これから！」

一向に状況が良くなりそうにないのを見て真田が小さい声で尋ねると、順平はやや必死になりながら挽回できると答える。それを聞いても真田は無理だろうと思っているが、順平は本気で挽回するつもりなのか再び時2人の女性に質問する。

「あの、お姉さん達、大学生ですか？　それともＯＬさん？」

「あのさ…君たち、まだ若いよね？　…高校生とか？」

「その通りだ」

相手の1人が尋ねてきたので真田は素直に答えると相手は少し不機嫌になる。その様子を不思議に思っていると、相手は口を開いた。

「ふ～ん…高校生が、屋久島観光かぁ…なんか、ムカツクよねー」

「ムカツク…と言われてもな。たまたま友人の別荘がここにあって、招かれてるだけだからな…」

「へ〜、屋久島に別荘？　スゴいじゃん、その友達。…うちらは、稼いだ自分のお金で遊んでるんだけどね」

そんな風に相手は僻みをぶつけてくるが、2人は「どうしろって言うんだ…」と困っていた。なので順平はとりあえず褒める作戦に出て「…あ、そりゃ偉いっすねえ」と言ってみた。しかし、これもまたあまり良い感触ではないようだ。

「別に偉くはないけどさ……で、君たち、何の用かな？」

「ナンパに来た」

「え…？　ははは、案外正直だね…」

片方の女性は真田が答えた用件があまりにストレートなためつい笑ってしまう。すると、それを見ていたもう1人が笑っている自分の友人に声をかけた。

「ちょっと、感心してないで、いい加減、構うのやめようよ…」

「いやいや、構ってくださいよ！　お姉さん達がキレイなんで仲良くなりたいなーって、それだけなんス！」

「あーあ、こいつら調子乗ってんなー」

「じゃ、もう行こうか。じゃあ、またね」

最後のチャンスと順平は頑張ると逆に不評だったらしく、そういうと2人組みの女性は荷物をまとめて去って行った。あとには精神的な疲労だけを負って戦果ゼロの2人が残った。その後も2人はナンパを続けたが“かなりの”お姉様や、とても美人なお姉様に見えるが実は工事前のお兄様が相手だったりと散々な結果だった。

――海岸・スタート地点　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

約束していた時間になったので湊が集合場所に戻ると2人が言い争いをしていた。どうやら途中から共闘していたらしいと推測しながら湊は近付く。

「おい、順平。どういうことだ！」

「どうって…。んな理詰めで話しちゃ、ナンパにならないんじゃ…」

「なんだと？　なら、お前のように欲望丸出しのほうが良いって言うのか？」

「“素直”って言って欲しいっスね！　大体、誰が筋肉のウンチクなんて聞きたがるんスかっ」

「なんだと…？」

そんな言い争いを続けている2人を見ながら近付くと、湊に気付いた真田が話しかけた。

「こうなったら、現場リーダー！　どっちが悪いと思う！？」

「知りませんけど、全滅ならどっちもじゃないんですか？」

「俺は“勝負”にはこだわるんだ！」

「そーだそーだ！　そんなんで納得できっか！　つかオマエ、ちゃんと考えて答…え……」

湊の答えに不満を表す2人。それを湊は面倒だなと思いつつ聞いていると途中で順平が呆けたように黙ってしまった。どうしたんだろう？と不思議そうに湊が順平を見ると、真田も同じように感じたのか、口を開き順平に尋ねた。

「どうした？　…何かあるのか？」

「おー…。最後の最後にスゲエ波だよ…！　ニクいぜ、神サマ！　つーか、マジ、カワイイ…」

順平はすごいテンションでそういうと遠くの方にいる女性に釘づけになっている。同じように真田もそちらを見ると「確かに…」にと答えた。

「やっべーよ、マジで。これ取りゃ、今までの負けなんてチャラでしょ。オシッ、ここはひとつ、みんなで行かずに、1人ずつ慎重に行く作戦で、どうスか？」

「よし、採用だ」

「うしッ、なら順番決めるっスよ！　勝った人から時計回りで。出さなきゃ負けよ、最初はグー！　ジャンケン、ホイ！」

順平がジャンケンの掛け声をしたが、湊はその女性の方を見ていた

せいで出すのを忘れてしまった。これで湊の負けが決定した訳だが、湊は目を見開きまるで2人の話が聞こえていないようだ。

「ヤリィ、勝ちぃぃ！　じゃ、オレ1番、真田サン2番、湊が最後な。オシッ！」

そういうと順平は女性の元へと1人駆けて行った。

――桟橋

順平は女性のいる桟橋へと向かうと一度真田らにアイコンタクトをとった。それに真田が頷き返すと、ゆっくりと女性に近付いていく。近付いていくとはっきりと姿が見えおよそ自分達と同じくらいの年齢の外国人の少女であることがわかった。そして、順平はその少女の後ろに立つと勇気を出して声をかける。

「あの…さっきからずっと…海、見てるね。あの…ひとり？　オレ、じゅ、じゅ、順平ってんだ」

「…じゅ？」

相手の少女は順平の言葉を聞いて不思議そうにしている。というのも、順平が緊張のあまり噛んでしまったからなのだが、順平はとりあえず会話が成立していると考え言葉を続けた。

「あ、えと…もしヒマしてたら、話でもしねえ？　1人よか、楽しいんじゃねえかな」

「…人を探しています」

「へ、へえ…」

「貴方ではありません」

「っ！？」

順平が少女にフラれショックのあまり酷い顔になっている場面を見ていた真田は、とぼとぼと落ち込みながら帰ってくる順平に向かって冷静にその口を開いた。

「斬られたな…予想以上に早かったな…」

「て、手強いっスよ、先輩…」

「よ、よし、後は、俺が勝つだけだな…」

そんな風に気合を入れると真田は順平とタッチしてから少女の元へと向かった。そして、少女の後ろに立つと先ほどの順平との共闘中に学んだ、話しかけ方から無難なものをチョイスして話しかける。

「ああ…君…海が、好きなのか？」

「何でしょうか？」

真田に話しかけられた少女は真田の質問に答えず、事務的な話し方で用件を尋ね返してた。その予想外の返事に真田は驚くが、何とか心を落ち着かせ新たな話題を振ってみる。

「あ、いや、海はいいよな。トライアスロンの選手は、プールでの練習が中心の選手より…海で鍛えている人の方が強いらしいぞ、やはり」

そんな風に、再び自分の得意な話題であるスポーツや筋トレ関係の話を続ける真田。相手は一応聞いているらしく、それを見ている順平は「い、意外と話せてるんじゃないか！？」と驚いている。しかし、見続けていると相手の様子が少し妙なのに気付き。その直後、少女は冷静に口調で口を開いた。

「そういった情報は、わたしには必要ありません」

「っ！？」

真田は順平以上にばっさり斬られると、やや俯きながら皆の元へとトボトボ帰った。だが、戻ってきた真田は顔を上げるとやや得意げな表情になっている順平らに話しかけた。

「フッ、勝ったな…お前よりも長続きしたぞ」

「長さの問題じゃねっつの！　……ああ…なんかオレ、もう泣きそうッス…」

「な、泣くな！　俺までみじめになるだろうが…」

本当にやや涙声のような情けない声で順平が言うと、真田はそれに対して少し怒り気味に返す。だが、本人もそれなり落ち込んでいるらしく、言った直後は2人とも暗い表情になっていた。そして少し経つと復活したのか順平は真剣な表情で湊に話しかけた。

「…という訳だ。オマエが何とか拾わないと、トラウマんなっちまう」

「俺は負けてない。負けてないからな……後は任せた」

2人にそのように言われると、湊はややフラフラしながら立ち上がり。返事もせずに少女の立っている桟橋へと歩き始めた。男子2人は気付かなかったようだが、いまの湊の様子は呼吸も乱れ瞳孔も揺れている状態だ。そのように正常とは思えない状態ながらも、少女に近付くと声をかけた。

「あ、あの…こんにちは」

「あなたは…」

普段と違い揺れたような声で湊が挨拶をすると、少女は湊をみて何やら驚いているようだ。それを遠くから見ていた順平と真田は、緊急事態と思い近付くことにした。しかし少女は順平達が近付いてくると、真剣な表情で湊に話しかけた。

《ざっざっざ》

「っ！？　ひとまず、危機回避を優先します。それに確認は、静かな場所でないと…」

そういうと少女は、森の中へ走って行ってしまった。そして、それを目で追っていた順平達が近付いてくると、湊に焦った様子で話しかけた。

「オマエ…何言ったワケ？　走って逃げるって、絶対なんかやっただろ…つかオマエ、追いかけ「待ってくれっ！！」《ドゴンッ！！》うわぁっ！？」

「なっ！？　桟橋が爆発したぞ！？　それに有里のあの様子、た

だ事じゃなかった。一体どうしたんだ？」

真田の言った通り順平が話しかけていると、湊は途轍もないスピードで少女を追って走っていった。さらにそのスピードに乗るための初動の踏み込みがすごかったためか、湊の足元は爆発し桟橋の木材は骨組みごと吹き飛んでしまっていた。

順平と真田はその吹き飛んだ桟橋と、湊が足をつきかなり抉れてしまった砂浜を見つつ状況を理解しようとするが原因がわからない。なので考える事を放棄すると順平は真田に声をかけた。

「なんか分かんないスけど、追いかけた方がいいっスよ！」

「そ、そうだな。いくぞ！」

「了解っス！」

お互いに返事をすると、逃げた少女とそれを追って行った湊を探すため。順平と真田の2人は森へと入って行った。

第四十一話　前編（後書き）

後編に続きます。

第四十一話　後編（前書き）

オリジナルが入れづらくても、設定段階で考えてたことは無理のないよう修正しつつ入れるようにしてます。すでに皆さんのプレイしたペルソナ３とは別物だと思いますが、のんびりと楽しんでください。

それとこの章で第一部が終わるってことで、第一話から徐々に書きなおしていたりするので。暇だったら読んでみてください。初投稿時よりは読みやすくなっていると思います。

第四十一話　後編

――縄文杉の森　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

縄文杉を見に行く途中で理事長からの連絡を受けた私達は、先輩の指示通り屋敷に戻ると召喚器をもって再び探索に出た。途中で何度か男子に連絡を入れているのだがいまだに連絡は付かない。

「はぁ…たく、男子はなにやってんのよ」

「き、きっと海で泳いでて携帯の近くにいないんだよ」

「もしかしたら、私達がいないからってナンパとかしてるかもね」

連絡がつかないことに怒るゆかり。それに対し男子のフォローもしつつ風花が答えるが、ゆかりの怒りは納まらないようで棘のある言い方でそんな事を言ってきた。しかし、それを聞いた私を含め他の女子の表情が変わった。

「ナンパ？　私達が緊急事態で動いているのに彼らはそんな事をしているのか？」

「真田先輩はともかく順平くんだったらありえるかも…。というか、湊君なら逆にナンパされてたりして…」

「は？　なにそれ、どっかの誰かが私の湊君にちょっかいかけてるって事？　某ピンク１人でも迷惑してるっていうのにっ」

「いま私は関係ないでしょうがッ！　ていうか、湊君は自分からだってナンパするタイプでしょ。おまけに成功率高そうだし」

私が怒りながら言うと反論してくるゆかり。しかし、ゆかりの言う事も一理ある。というか、順平と違ってナチュラルに女性に近付いて仲良くなっていそうだ。同じ事を風花と桐条先輩も思ったらしく頭に手を当てて複雑な表情をするが、よく考えるといまはそれどころじゃない。

「と、とりあえず対シャドウ兵器をさっさと見つけようか。それが終わったら急いで湊君の確保。及び、女性といる場合は引離す事。いい？」

「「「了解…」」」

私の言葉を聞くと3人は目的を思いだし、付近をキョロキョロと見まわしながら森の中を進む。だが、さっきの話題を少し気にしているのか焦りのようなものが見えた。そうして、さらに奥に進んでいると遠くの方からすごいスピードで何かが向かってきているのが見えた。

「えっ、なに！？」

「女…の子？」

《ヒュンッ…》

それは良く見ると水色の服を着た女の子だった。女の子は本当に人間なのかと疑いたくなるスピードで私達の進んでいる少し先を横切ると、森の奥へと走って行ってしまった。全員があまりの事にポカンとするが、なんとか意識を復活させるとみんなに話しかける。

「い、いまの何？」

「さ、さぁ？」

「人間だよねぇ？」

私がみんなにそう尋ねると、みんなも自信がないのか首をひねって難しい顔をしている。まぁ、車並みのスピードで森の中を疾走する少女なんてある意味でホラーだ。人かどうか判断に困ってもしょうがないと思う。だが、そう考えた直後再び少女の来た方から何かが向かって来ていた。

「ま、またきたっ！？」

「え…湊君？」

「「えっ？」」

ゆかりが驚きの声をあげた直後、先ほどの少女よりもさらに速い速度で1人の人間らしきものが通過していった。しかし、その人間らしきものが去って行った方を向いて風花が相手を湊君だと言ってきた。そのことに他の者は驚く。

「山岸。さっき通過していったのが湊だと言うのか？」

「え？　あ、はい。服装も昨日のものに似てましたし、たぶん間違いないと思います」

「けど、車より速かったわよ？」

「そ、それはそうだけど…」

ゆかりに聞かれて風花は困ってしまうが、仮に湊君だとすれば放ってはおけない。あのスピードで移動出来た理由は分からないが、とりあえず去って行った方へ行ってみよう。

「本人かどうか確認しに行こう。どっちにしろあんな速度で2人も移動してるなんてタダごとじゃないし」

「そうだな。湊にも探知が効けば確認する手間は省けたんだが…」

「言ってもしょうがないですよ。幸い、2人が走って行った足跡が残っているので追跡は可能です。急いで向かいましょう」

そんな風に声をかけると、私達は湊君と思われる人とその前に走っていた少女の後を追った。

――縄文杉の森〈湊　Ｓｉｄｅ〉

桟橋で声をかけるとあの人は森の中へと走って行ってしまった。僕はそれを追い掛けるため魔力で脚力をやや強化しつつ、森の中を走っている。僕の見間違いかと思ったが、あの人は間違いなく１０年前に僕を助けてくれた人だ。見た目が変わっていないなど、色々と思う事もあるが今は関係ない。

「クソッ、待ってくれ！　僕は君にっ！」

さらに速度を上げつつ走っていくとやっと彼女の後姿が見えた。ここで一気に近付くしかない、そう決めると足へ集めている魔力をさらに増やし一気に加速する。

「見失ってたまるかぁあ！！《ズザァアアッ》」

「っ！？」

一気に加速し木の間を抜けるように走って彼女の前へと回り込むと、相手は驚いた表情で急停止した。これでやっと話が出来る…けど、何を言えば。そんな風に悩んでいると相手が僕の方へ近付き話しかけてきた。

「少々驚きました。森の中ということを考え速度は時速にして７０キロと制限しましたが、追いこされるとは思っていなかったです。あなたは障害物を回避しながらでも１００キロの速度で走行できるのですね」

「あ、その…君を見失いたくなかったから…」

僕はそう言うだけで黙ってしまう。やっと会えた、ずっと会ってお礼を言いたかった相手に。けど、実際に会うと何を言えば良いのか分からない。

「ぼ、僕はずっとに君に会いたかった。会って、お礼を……」

「……やっぱり、あなたは…見つけました」

相手はそういうと僕に抱きついてきた。一体なんでこんなことに？やっと会えた相手の突然の行動に動揺していると、さらに相手は言葉を続ける。

「あなたをずっと探していました。わたしの一番の大切は、あなたの傍にいる事であります！」

「ぼ、僕は……俺は……」

その少女に抱きしめられると俺は知らないうちに涙を流していた…。

――縄文杉の森〈公子　Ｓｉｄｅ〉

私達が急いで追いけていると、やや開けた場所に出た。そしてその先に湊君と先ほどの少女が立っている。やっと追い付いた。そう思っていると、別の方向から順平と真田先輩が現れ驚きの声をあげた。

「いたいた…って、ふえっ!?　何その展開!?」

「馬鹿な、どうなってる…!?　声もかけてない筈だッ!?」

なんで順平と真田先輩がそんな事を言ったのかは分からないけど、とりあえず私たちも2人の元へと近付く。すると、後ろを走っていたゆかりが順平達に気付いたようだ。

「やぁっと見つけた、湊君…って、順平!!　どこ行ってたの!?　探したんだから」

「と言うか…皆さん、なんで水着で森の奥に…」

風花は順平達の服装を見るとそんな風に不思議そうな顔をした。確かに湊君以外は水着だけど、それはいま重要じゃない。そう、なんでか知らないが少女が湊君に抱きついているのだ。

「まったく、こっちは大変な事に……って、あれ!?　湊君…何で抱きつかれてるの?」

「てか、なんで湊君はあんなスピードで走ってたの？」

「っ！？」

私がそう尋ねると湊君は私たちに背中を向けたままだったのが、少女に抱きしめられたまま驚いた表情で振り返った。一体どうしたんだろう？そう思っていると、桐条先輩が口を開いた。

「聞いてくれ。実は少し面倒な事が起きてる。休暇中に済まないが、すぐに戻って戦う準備をしてくれ」

「いや…準備はいいよ。探し物は見つかったからね」

そんな風に話をしていると、さらに理事長までやってきた。しかし、探し物が見つかった？何を言っているんだろう。同じ事を思ったのかゆかりが理事長に尋ねる。

「理事長…どういう事ですか？」

「やれやれ…探したよ。勝手に出たらダメだろ、アイギス？」

「…はい」

抱きついたままの少女は理事長に呼ばれると返事をした。だが、その少女に抱きしめられたままの湊君の様子がおかしい。目は見開き呼吸が荒い。他の女子もそれに気付いたのか心配そうにしているので私がまず声をかけた。

「湊君、調子悪そうだけど大丈「っ！？　この人に近寄るなぁああ！！」っ！？」

「「「なっ!?」」」「うわっちゃぁ!?」「「「きゃあっ!?」」」

私が声をかけると湊君は少女を片腕に抱き一瞬で出現させたフツノミタマを振るってきた。咄嗟に後ろに跳んだため斬られることはなかったが、周囲に突風が起こりみな倒れてしまう。急に攻撃するだなんて一体どうして!?そう思っていると、湊君は少女を抱いたまま大きく後ろに跳躍し距離をとってきた。

「はぁ…はぁ…この人はやらせないっ」

「な、なに言ってんだよ。いいから、それ仕舞えって。シャレになんねえからっ」

「湊、落ち着け。誰もその少女に危害を加えるつもりはないっ」

みんなも今の湊君の異常に気付いたのか、近付かないようにしながら落ち着くよう説得する。しかし、こっちの声は届いていないようだ。湊君は私達の方を警戒しつつ辺りを見回している。

「クソッ、こんな場所じゃ…」

「どうしたでありますか?」

「待っててくれ、俺が君を安全な場所へ連れて行く」

そういうと湊君はフツノミタマを仕舞い召喚器とカードを腕輪から取り出した。そして、取り出したカードを上へと投げたかと思うと、同じように召喚器も上へと構えた。

「Ｃａｌｌ！　ブフーラ！　はぁああ！！」

《ガシャンッ》

「しっかり掴まっててくれっ、この場所から離脱するッ」

「了解しました」

「はぁああ！！」

湊君は自分の出したブフーラの氷を上と蹴りあげると、少女に声をかけた。相手もそれに答え湊君にギュッと抱きつくと、湊君は相手の子を抱いたまま信じられない跳躍を見せ上空へ跳び上がる。そして、そのまま氷の元へ行ったかと思うと、今度はそれを足場にして氷塊が砕け散る程の脚力で蹴ってどこかへと去って行ってしまった。

――桐条家・屋久島別邸・応接室　〔湊　Ｓｉｄｅ〕

この人を狙う敵から逃げると俺は桐条の屋敷へと戻ってきた。自分の部屋へ行っても良かったが、すぐに入れる部屋の方が良かったため応接室へとやってきた。

「はぁ…はぁ…」

「大丈夫でありますか？」

「…ああ、心配ない。ここなら安全なはずだから。とりあえず、座ってくれ」

「はい…」

俺がソファーを指差し着席を促すと彼女は素直に従いソファーに腰をおろした。それを確認すると俺もその隣に座り呼吸を整える。すると。隣に座っていた相手が心配そうな顔で尋ねてきた。

「あの、気分が優れないなら横になっていた方が良いと思いますが」

「いや、少し疲れただけだよ。君を追い掛けるときに魔力をそれなりに使ったから。そうだ、俺は有里湊。君の名前は？」

「【アイギス】です、わたしの一番の大切は湊さんと共にいることであります。ですので、疲労状態ならばどうかお休みください。わたしは貴方の傍にいますから」

そう言うとアイギスは俺の身体を横にさせて、頭を自身の膝の上へくるようにしてきた。いわゆる膝枕の状態なのだが、その状態で頭を撫でられるととても安心する。

「……ゴメン。じゃあ、少し休ませてもらう」

「はい、お休みなさい」

「おやすみ、アイギス…」

彼女にそういった俺は、彼女に膝に乗せた頭を抱かれ。そのまま意識を手放したのだった。

――縄文杉の森　｛公子　Ｓｉｄｅ｝

湊君が去った後、あまりの事に全員理解が追い付いていないみたい

だ。けど、私はなんとなく湊君の状態を理解し後悔する。

「迂闊だった。昨日、あんな事があったのに湊君を1人にしたなんて…」

「さっきの湊の行動の原因がわかったのか？」

「勝手な推測ですけどね」

桐条先輩に聞かれて答えると、みんなも立ちあがり私の近くへ集まって来た。そして、真剣な表情になっているので私も同じように真面目に話し始める。

「湊君は一見普段通りになっていましたが、ずっと正常な状態になれていなかったんだと思います。当たり前ですよね、今まで誰にも踏み込ませなかった心の深い部分を無理矢理暴かれたんですから」

「それと先ほどの行動がどう繋がる？」

「記憶の混乱ですよ。まともな精神状態じゃない時になにかの切欠…この場合、あの少女だと思いますが。それが引き金になって私達が敵かなにかに見えたんでしょう。だから、森の中で敵に囲まれている状況から抜け出すため、彼女を連れて去って行ったってわけです」

私が説明すると一応は理解できたのか、皆が納得した表情になる。けど、そう考えると私達はかなり幸運だったと思う。そんな風に1人で最悪な結末を考えていると、理事長が難しい顔をして口を開いた。

「だとすれば危なかったね。彼が敵の排除を選んでいたら、我々は抵抗する間もなくやられていたところだ。それにまさか彼女を抱えてあんな離脱が出来るとは…」

「……さっきの子になんかあるんスか？」

「ああ、詳しい話は後にするがあの子の身体は機械でね。総重量は１００キロ近くあるんだよ。それを相手も抱きついているとは言え、片手で抱いた状態で数十メートル跳びあがって去っていくとはね。影時間外でもあんな事が可能とは驚きだよ」

私が考えていた最悪の結末を理事長も想像していたらしく、それを聞いたメンバーは驚き直後に暗い表情なる。まぁ、当然だよね。影時間の恩恵で強化された上に全員がフルの状態でかかっても勝てない相手だ。それをこんな召喚器を持っている程度では逃げる事すら叶わなかっただろう。それに理事長が言っている事もある。湊君は影時間外でも影時間の私たち以上の動きが可能だということだ。

「……有里が走り始めた瞬間近くにいたんだが、やつの踏み込みに耐えられず桟橋は修復不可能な状態だ」

「私達が森の中を歩いていたときは高速を走る車以上の速度で走っていたさ」

「じゃあ、さっきのは極めつけってわけだ。やれやれ、彼は本当に私達の想像の上をいくね。まぁ、ここに居てもあれだし別荘に戻ろうか。安全な場所へ行くって言ってたし、有里君もきっとそこにいると思う」

先輩らと理事長がそういうと、私達は理事長の推測を信じて桐条の

別荘へと戻ることにした。ちゃんといてくれればいいけど…。

夜――桐条家・屋久島別邸・応接室

理事長に言われた通り別荘に戻ってくると、使用人の人に湊君が帰ってきているかを尋ねた。すると、掃除をしていた1人が様子がおかしい事を心配し声をかけたが、返事をせずに応接間に入って行ったと話してくれた。なので、男子が着替えてくるのを待つと慎重に近付きノックをしてから部屋へと入ることにする。

《コンコン》

『湊君、私だけど入るよー』

そんな風に声をかけるが向こうからの返答はない。もしかしたら、もういないのかな?そんな事を少し考えつつ、みんなを見て開ける事を目線で合図するとゆっくり扉を開いた。

《ガチャ》

「湊君いる?」

「湊さんはお休み中であります。お静かに願います」

「あ、あなたさっきの…」

私が声をかけて部屋に入ると、私の言葉に答えたのはさっきの少女だった。それに気付いた風花が呟くと他のメンバーも静かに部屋に入る。中に入るとさっきの少女がソファーに座っていることと、その膝を枕にしてやや抱かれる様に湊君が寝ている事以外は特に変わった点はなさそうだ。

そうやって確認するとみんなも湊君を起さないよう静かにソファー

に座っていく。そして、寝ている湊君と湊君を抱くようにして座っている少女を見ると理事長が口を開いた。

「いやはや、2人ともちゃんといて良かったね。これでもう大丈夫だ」

「あの…戦車を追うとかいう作戦は、どうなったんですか？」

「あ、それもう完了だから。彼女の名は”アイギス”。今は服で隠れてわからないが、先ほど言った通り”機械の乙女”なんだ」

「初めまして、”アイギス”です。シャドウ掃討を目的に活動中です。今日付けで、皆さんと共に行動するであります」

理事長に言われてアイギスと呼ばれた少女は私たちに自己紹介をしてきた。しかし、言われても簡単にも信じられないだろう。アイギスは本当に人間の少女にしか見えないのだから。それは他のメンバーも同じらしくみな驚いた反応を見せる。

「うそ…まるで、生きてるみたい…」

「信じられん…」

「こんなカワイイのに、ロボって…なにこのトホホ…」

ゆかりと真田先輩の驚きは分かるけど、順平だけ反応するとこ違くない？確かに可愛いけど、いまそこは重要じゃないよね。心の中でそんな風に呆れていると、みんなが落ち着いたのを見計らって理事長が話を始めた。

「１０年前、シャドウが暴走した時の保険として”対シャドウ兵器”というのが計画されてね。アイギスはその中でも最後に造られた1体…そして唯一の生き残りなんだ」

「対シャドウ兵器…ということは、まさか、ペルソナを…？」

「はい、ペルソナ呼称”パラディオン”を扱える仕様であります」

「彼女は、１０年前の実戦で大ケガを負って、ここの研究所で管理されていたんだ。なぜ今朝になって急に再起動したのか、いまいち、ハッキリしないんだけどね…まぁ、これから仲良くしてやってくれ」

桐条先輩に言われ自身の能力について説明したアイギスを見ると、理事長は笑いながら言ってきた。別に戦力が増えるのは良いし機械といってもちゃんと意志があるなら仲良くすることも可能だろう。でも、彼女がいることで湊君にどんな影響があるか分からない…。

私がそんな風に思考の海に潜りかけていると、風花が突然嬉しそうに立ちあがった。

「精神が備わった、対シャドウ兵器…すごい…すごいですっ！」

急に立ちあがったと思ったらその事か。そういえば風花は機械類に強くてそういった物が好きだったのだ。なら、ＳＦに出てくる心を持ったロボットが実在したと分かればテンションが上がるのも無理は無いだろう。そんな風花の様子を苦笑しながら見ていると、ゆかりが何かを思い出したのかアイギスに話しかけた。

「あの、ところでさ、ちょっと確認したいんだけど…あなたさっ

き、だ、抱きついてたよね？　…湊君に。その、彼を知ってるの？」

「はい、わたしにとって、この方の傍にいる事はとても大切であります」

「フム、人物認識が完全じゃないのかもね…。あ、それとも”寝ボケてる”って事かな？　んー、そいつは興味深いぞ…。フムフムフム…」

ゆかりの質問にアイギスが答えると理事長は研究者の顔になってなにやら考えている。それを聞いたゆかりは「寝ボケてるって…」と呆れているが、私はそれはないと思う。アイギスは湊君を知っている。そして、湊君もアイギスを知っていたか彼女を見て記憶の混乱を起こすくらいの何かがあったのだろう。すると、２人は以前どこかで出会ったことが……っ！？

「１０年前だ…」

「ん？　どったの公子ッチ？」

「湊君が記憶の混乱を起した理由がわかった。アイギスが怪我を負った戦いが、湊君たちが巻き込まれた戦いなんだよ」

順平に聞かれ、私がそう言うとメンバーたちは驚いた表情になる。アイギスと理事長はなんの話だという顔をしているが、２人は湊君の話を聞いていないからしょうがないか。そう思っていると、桐条先輩が真剣な表情で話しかけてくる。

「どういうことだ、草摩？」

「湊君が言ってたでしょう？　湊君の家族が影時間に遭遇した事故は事故じゃないって。湊君は戦いに巻き込まれたと言ってました。だとすると、当時戦う力を持っていたのは対シャドウ兵器くらいです。そう考えると、湊君の事故とアイギスは関わっていると思いませんか？」

「確かにそうだな。だが、それより前の機体（ナンバー）だった可能性もあるだろう？」

「それはそれで良いですけど、とりあえず湊君の事故はシャドウと対シャドウ兵器の戦いなのは間違いありません。そう考えると、湊君がその時にアイギスかそれに似た容姿の機体を見ていたんでしょう。だから、アイギスと出会ったことで当時の記憶が蘇り、アイギスを自分を救ってくれた側。私たちをシャドウ側と認識したんだと思います」

私が言い終わると聞いていた先輩や理事長が難しい表情で考えている。ゆかりたち2年組も内容は上手く理解できていないが、さっきの湊君の行動の理由は理解したみたいだ。そうすると、今度はアイギスに実際に尋ねてみるため私は口を開いた。

「ねえ、アイギス。あなたが湊君に出会ったのは１０年前？」

「申し訳ありませんが、それは不明です。わたしのメモリは過去の戦闘によって一部破損や欠損があります。そのため、メモリ内では湊さんに出会ったのは本日が初めてということになっているであります」

「ンだよ。じゃあ結局、真相はわからずじまいってことか？」

「出会ったのは本日でも、わたしにとって湊さんが一番の大切なのは変わらないであります」

「な、なんかすごく大胆な告白に聞こえるね……」

順平の言葉にアイギスが自信満々に答えると、風花は顔を赤くしながらそういった。まぁ、確かにそうだけどなんでアイギスは湊君にこだわるんだろう？出会ってたとしても、当時は小さな子供だったはず。そして１０年経ってるわけだから可愛かった近所の子供が美少年にという感じなのだろうか…。いや、ロボにそれはないだろう。そんな風に悩んでいると、理事長が全員に話しかけた。

「…まぁ、それは後で考えるとして、だ。なあ、みんな知ってたかい？　実はここ、色んなレジャー設備がズラリ揃ってるんだよ。テニスコートに、プールバーに、あとカラオケなんかも完備らしい。…聴かせちゃおうかな？　僕のメドレー」

「ええっ…」

理事長が楽しそうにいうと順平は何やら驚いてる。まぁ、普段から急にダジャレを言ってくるような人だ。シリアスな話が終わればこれぐらい言って来てもおかしくない。そうして、理事長と順平らがこの後の予定を話していると、湊君が起きた。

「ん……あ…アイギス？」

「はい、なんでしょうか？」

「……ううん、いるか確認しただけ」

「大丈夫です。わたしはちゃんと貴方の傍にいますから」

「そっか……」

そう言って笑うと湊君は再び目を閉じて眠り始めた。てか、なにあの幸せそうな寝顔!?あそこまで完全に安心しきってる表情なんて初めて見たんだけど…。

「……ねえ、アイギス。私と場所変わらない？　ほら、姉として湊君の体調気になるしさ」

「あなたは湊さんの姉なのですか？　ですが、大丈夫であります。湊さんの体調は現在良好、このままわたしが傍にいますので。みなさんはどうぞ休んでらしてください」

「い、いや、アイギスってロボットでしょ？　なら、膝枕はちょっと硬いと思うし」

「それも問題ありません。湊さんはみなさんと別れたあと、ここに到着し寝始めましたが。さきほど目を覚まされるまで８６２３秒の間、１度も目を覚まされませんでしたから。そのことから湊さんにとって寝心地は良好と判断します」

アイギスは真顔でそういうと寝ている湊君の頭を丁寧に撫でている。クッ…寝心地はきっと関係ない、湊君はどんな枕でも寝れるタイプだから。そう、これは精神的な安らぎで寝ているに違いないのだ。私相手ですらあそこまで安心した表情になったことないのにっ！！そんな風に私が心の中でそう悔しがっていると、理事長らの話に加わっていた真田先輩が突然疑問を投げかけてきた。

「そういえば、有里はアイギスがロボットだと知っているのか？　人間と思ったまま懐いているなら、あとでショックを受けるかもしれんぞ？」

「ああ、それはあり得るな。アイギス、君は湊に自分のことを話したか？」

「いえ、わたしの名称と一番の大切が傍にいることであるというのを説明しただけであります」

桐条先輩に聞かれアイギスが答えるのを聞くとみんな少し悩んでしまう。抱きかかえて移動してたのがあるから、その重さとかから気付いてる可能性もあるけど。あんだけ信頼してるっぽい相手に告白じみたこと言われて舞いあがってたかもしれない。これは判断が難しいな…。

「湊さんがわたしを人間と思っているかどうかをお悩みでしたら問題ないと思われます。わたしは森の中を疾走時に時速７０キロで走っていましたから。通常の人間では出せない速度ですし、普通の人間ではないことには気付いているはずであります」

「あ、あれ７０キロで走ってたのっ！？　てか、それより速いって湊君どんなスピードで走れるのよ…」

「わたしに追い付いた時点では、木々の間をすり抜けながら時速１００キロで走行してました。最大速力・時速１３０キロのわたしでも木々を避けながらは不可能ですので、湊さんの身体能力はとても驚きであります」

「１００キロってオマエ…。いま最初の大型シャドウ戦と同じ状

況になったら、モノレールの前に回り込んで素手で止めれるんじゃねえか？」

「「「「ありえる……（ありえるな……）」」」」

アイギスからもたらされた驚きの情報に順平が呆れながら呟くと、私たちモノレールの大型シャドウ戦を知っているメンバーも少し呆れながら同意した。メンバー内でその戦いを知らない風花だけは不思議そうな表情で首をかしげているが、後で教えておいてあげることにしよう。

そんな風に私たちが湊君の非常識さが跳ね上がっていくことにショックを受けていると、いつの間にか途中で部屋を出ていた理事長が戻ってきた。

「いま、カラオケの準備をしてもらってきたからね。それじゃあ、みんな行こうか」

「…幾月さん、本気で言ってたんですか？」

「当たり前じゃないか。これでも学校の先生らとの付き合いでいく宴会では、それなりに評判なんだよ？　歌の間に小粋なジョークを挟んだ時なんて男性教師陣には大ウケなんだから」

アハハと楽しそうに笑うと理事長は扉を開けて男性陣と桐条先輩と風花を連れて出て行った。これ私たちも行かなきゃいけないって流れだよね？でも、それだと湊君とアイギスを2人きりにすることに…。いや、相手はロボットだから間違いは起きようがないんだけど。相手が女性型で心を持ってると考えるとやっぱりこっちも複雑に…。

「うー…湊君のことどうしよう。アイギスと2人っきりってマズいよね」

「いや、ロボットにまで嫉妬してどうするのよ…」

「相手は心を持ってる上に女性型なんだよ？　おまけにアイギスにとって湊君が特別な存在である事と、湊君にとってもアイギスは何かしらの理由があって特別な存在であることが確定してます。それらを考慮して考えると湊君の中で優先順位のトップがアイギスになってるかも知れない…」

「あう、確かに……」

ゆかりは私の言葉を聞くと悩むような表情をしながら同意する。うん、やっぱりどうにか湊君を連れていくか、メイドさんに部屋まで運んでもらうかするべきだよね。そう考え、それを伝えようとすると、急にアイギスが口を開いた。

「それはわたしとって大変好ましいことであります。湊さんもわたしと居ることを望まれるのなら、常に共に居られますので」

「なっ！？　アイギスそれはダメよ。姉としても女としてもそれは認められないわ！」

「では、湊さんに直接許可を取るであります。湊さん、起きてください。少しお話があります」

「ちょ、寝てる人起しちゃダメでしょ」

ゆかりのそんな注意を無視してアイギスは湊君に話し掛け続けると、

湊君はぼんやりしたまま目を覚ましてしまった。きっと昨日は寝不足だろうから寝かせてあげようと思ったのに…。

「アイギス…どうしたの？」

「湊さんにお話しがあります。湊さんの姉とおっしゃる方から反対されましたが、わたしは常に湊さんの傍にいたいと思っています。ですので、その許可をいただきたいであります」

「……お風呂とトイレ、それと一緒にいられない用事のときはダメだけど、それ以外ならいいよ」

「ありがとうございます！」

寝ぼけながらもちゃんと思考能力は働いているらしく、湊君は実に無難なルールを決めたうえで許可を出した。それを聞いてアイギスはとても嬉しそうにしている。湊君もそれを見て嬉しそうに笑っているけど、起きてるなら今のうちに聞いておくかな。

「湊君。アイギスの事知ってるの？」

「あ、公子。アイギスの事は知ってるよ、桐条の対シャドウ兵器のラストナンバーだよね。でも、僕にとっては命の恩人だし、心を持ってるならそれは人と変わらないからいいんだ」

「それも知ってたんだ…。まぁ、知っててそれならしょうがないかな。いいよ、節度ある行動の範囲内なら一緒にいることを許可してあげる。でも、四六時中べったりはダメだよ？」

どうして湊君がアイギスの事を知っていたのかは不明だけど、今回

もまた独自の情報網とやらのおかげなのだろう。そして知った上で人として接すると言っている。姉としては弟を取られたようで面白くないが、湊君が一緒に居て安らげるなら許すとしよう。いまの不安定な湊君に一番必要なのはそういった存在だから。

そんな風に考えながらも、姉と女両方の立場から湊君を譲るつもりはないので。許可とともに釘をさしておくことにする。それを聞いたアイギスは真剣表情で答えた。

「了解であります。では、さっそく睡眠の続きをどうぞ」

「わかった。でも、もうこのまま寝るから部屋に行こう。あ、そういえばアイギスって睡眠とか動力はどうなってるの？」

「待機用のスリープモードは存在しますが、それはエネルギー節約のためのものです。そして、エネルギーは専用の台で充電する仕様であります。しかし、行動時のモーターの回転などで自家発電もされますので、毎日充電する必要はなく今晩はずっとお傍に居ても問題ありません」

アイギスは湊君の質問にきびきび答えると最後に、座りなおした湊君の手を両手で包みこむように握った。湊君はそれに視線を移すと嬉しそうに顔をあげて口を開いた。

「そっか。じゃあ、一緒に寝よう？」

「了解であります」

「「ちょっと待ていっ！！」」

「「……？？」」

湊君とアイギスが一緒に立ちあがると思わずゆかりと一緒にツッコミを入れる私。それを受けて湊君とアイギスは不思議そうな表情をしているが、いろいろとおかしいだろう。なんで急に一緒に寝ることになってるの？てか、アイギスもそれ了解しちゃってるし。

「節度ある行動を守れって言ったでしょう？」

「場所が変わるだけで、先ほどと行う事は変わりませんが？」

「いや、だってアイギスは一応女の子だし……」

「この身体は機械です。皆さんがなにを危惧しているのかはわかりませんが、例え湊さんが危険にさらされても守るであります」

「そういう事じゃなくって……」

ダメだ、向こうと完全に話がずれてる。別に危険があったとしても今日の動きを見る限りじゃ、たとえ戦闘機を出してきても湊君なら撃墜出来るだろう。そんな相手に普通の人間が勝てるはずないので、別にそこは気にしてない。

私たちはお互いに好意（？）を寄せ合う男女が一緒にいることを危険視してるのだ。それが親愛の情なのか、異性としての物なのかは分からない。しかし、このまま行かせれば今後もきっと一緒に寝るようになるだろう。そんな風にアイギスばかりに依存されては困るので私たちはそれを止めようとする。

「同じ部屋はセーフ、同じベッドはアウト、ＯＫ？」

「わかった。じゃあ、ベッドが2つある部屋にかえてもらおうか」

「わたしは椅子に座っているだけで構いませんが？」

「いいんだ。僕が隣に居て欲しいだけだから」

「わかりました。では、いきましょう」

そういうと2人は一緒に部屋を出ていった。なんとか同じベッドは阻止したが寮に帰ってからが大変そうだ。同じ事を思っているのかゆかりも隣で溜め息を吐いている。てか良く考えたら私たち誰もアイギスに自己紹介してないよ…。まぁ、明日でいいか。そう考えると少し疲れた表情のまま私たちは理事長たちのいるカラオケルームへと向かった。

第四十一話　後編（後書き）

これでメインヒロイン勢は揃いましたね。まぁ、この作品のオリキャラである金髪の少女はまだ姿を見せていませんが、この章の最終話くらいには出すつもりです。名前と姿はそのとき出ますので、名前と正体を予想でもしながらお待ちください。

それとこの章で第一部は終了ですので、何か質問があれば感想にお書きください。第二部以降のネタバレにならなければ五章設定の出張版・後書きでお答えしますので。「誰が真ヒロインなんですか？」とか「湊って原作だとレベルどの程度の強さ？」などなんでも良いので気軽にお書きください。お待ちしてます。

第四十二話（前書き）

屋久島旅行編ラストになります。ヒロインが出尽くしましたが、みなさんはどのヒロインが好きですか？　皆さんに満足していただけるよう、メインヒロインにはそれぞれメインヒロイン話を設けたりしたいんですが、力量的に無理かなって思っています。

第四十二話

７／２２（水）
朝――屋久島・研究所　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜
早朝、誰も目を覚ましていない時間帯の研究所には幾月の姿があった。彼は部屋に鍵をかけてパソコンに向かっている。

「まさか、有里君に事故当時の記憶があるとはね。これは誤算だったな。アイギスの方もなぜか彼に執着を見せているし、メモリの自動修復にロックをかけておいて正解だった」

言いながら幾月はキーボードを叩き、アイギスに関するロックや操作のためのシステムをパソコンに打ち込んでいく。彼はこれらを使い時期が来ればアイギスに特別課外活動部のメンバーらを捕らえさせるつもりなのだ。

「桐条君・真田君・荒垣君・草摩君・岳羽君・伊織君・山岸君・天田君……候補は計８人か、これなら十分だな。そして昨日新たに得られたデータは素晴らしかった。影時間外でもあれほどの運動性能を得られるとなれば、まさしく新世界の覇者だ」

嬉しそうに言う幾月は作業を中断して、今までの湊の戦闘データを大型シャドウ戦ごとに区切って表示する。そして、昨日見せた動きと、壊れたという桟橋に今朝行って測定してきた、初動の踏み込みの力のデータを新しく入力し始めた。

「初動の踏み込みの力がすごいな。あれがまともな地面だったなら一瞬で時速１００キロを超える計算だ。チーターですら２秒で７０キロ、最高速で１１０キロ強だし。現時点で生物内最速は有里君

という訳か。うんうん、このままどんどん成長してくれたまえ。そうすれば私がデスを手に入れたときの楽しみが増えるからね」

まるで子供が新しいゲームの発売日を待つかのような笑顔をみせる幾月。画面には戦闘データと共に湊のプロフィールと写真が表示されているが、彼にとって湊はただの実験動物に過ぎないらしく本人自体には欠片も興味を示さない。

幾月が湊を見ているとき、それは湊自身を見ているのではない。湊を通して完全体となったデスを手に入れた自分の姿を想像しているのだ。影時間への適性しか持たぬ湊であれほどの力を発揮するとなれば、それよりはるかに高い適性を持っている自分が持てば…と。

「いまで半数か。全てのアルカナシャドウを倒し完全体となったデスを手にいれれば、空を飛ぶ事も可能になっていたりしてね。まぁ、現時点で昨日の彼みたいな空中移動方法があるんだし、人類の夢である生身の飛行もできるといいよね」

そう言いながら楽しそうに笑うと、幾月はシステムの組み上げを再開し始めたのだった。

昼――海岸　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

屋久島旅行3日目。僕たちは起きて朝食を取ると海岸へとやってきた。今回はメンバーたちだけでなく、アイギスも一緒だ。服装はみんな水着で僕とアイギスだけが普通の服を着ている。まぁ、僕も下に水着を着ているけど。

そうして荷物をパラソルの下において全員が揃うと、浮き輪を膨らまし終えた順平が口を開いた。

「んー、華の屋久島旅行も、はや3日目か。明日はもう帰るだけだし、正直、3日じゃ短けーよなぁ…。まあでも、それっぽっちの割にゃ、色々あったか」

「理事長の歌とか、お前の歌とかな…。おかげで昨日の晩は、殆ど、寝られなかった…」

そういった真田先輩は本当に調子が悪いらしく、目の下にうっすらと隈を作っている。女性陣も疲れ気味だが隈は出来ていないところを見ると、途中で寝たのかもしれない。僕がそうして考え事をしていると、アイギスが僕や女性陣の方へ向き直り尋ねてきた。

「海岸で、何かの任務でしょうか？」

「ハハ、そんなんじゃねって。ただ遊びに来ただけだ」

アイギスはここに来た理由を分かっていないかったらしく、何の話だということを聞いてきたが順平がそれに笑って答えた。すると、今度は風花が何かを思いついたのかアイギスへ話しかける。

「そう言えばアイギスは”遊ぶ”って、分かる？」

「もちろん分かるであります。娯楽は心の栄養です」

「おおー、そうそう。へえ、結構フツーに話せんじゃん。ま、とりあえず帰る前に、いっぺんくらい、ちゃんと泳ごうぜ」

そういうと順平はアイギスの手を引いて波打ち際へ走って行った。風花と真田先輩以外の人はそれを見てすぐに僕の方を見てきたが何のつもりだろうか？まぁ、順平に対し嫉妬しないかとか、アイギス

が離れて大丈夫かといった感じで心配しているのだろうと思う。

けど、こっちは元々独りを選んできたのだ。その程度の事で心が振るえたりはしない。そもそも僕の願いはみんなが無事でいることだ。自身の幸せを願う事はないし、考えた事もないのに嫉妬も何もないだろう。そんなことを考え苦笑して返すと、走って行った2人を見ていた風花が心配そうに口を開いた。

「あ、ちょっと、順平くんっ…アイギス、塩水に浸けて平気なのかな…」

「そんなヤワじゃないでしょ」

「でも服が濡れるのは不味いんじゃない？」

風花の言葉にゆかりと公子が返すと、なぜかアイギスだけが戻ってきた。どうしたんだろう？僕がそう思っていると、同じように思ったのか風花がアイギスに声をかけた。

「あれ、海に入るんじゃないの？」

「皆さんも、ご一緒されるのが、いいであります。1人だけが楽しい行動は、本当の”遊ぶ”ではないであります」

「えー、メンドいなぁ…。ヘンなとこ律儀なんだから…」

口ではそう言いつつも、ゆかりは楽しげにアイギスと海へ入っていった。それを笑って見ていると他の女性陣も同じように続く。

「私たちも、行きましょうか」

「…そうだな」

「じゃあ、先行ってるね」

そう言って風花・美鶴さん・公子の3人も、海へ入っていった。向こうの方では先に遊んでいる3人が膝下くらいまで水に浸かって何かをしているが、あれは何の遊びだろうか？チェアに座りながらそう思ってみていると、理事長がやって来た。

「どうだい、楽しんでる？　いやぁ、色々あったけど、何とか今日は、終日羽根を伸ばせそうだね」

「…そうですね」

先輩は理事長に返事をするが何やら顔が引きつっている。まぁ、昨日のカラオケとやらのせいだろうけど、アイギスと一緒に寝ていた僕には関係のない話だ。そう思いながら寝転がると、遠くの方から順平がこっちに叫んできた。

「真田さーん！　何してんスかー！　真田サンの番っすよー！！」

「俺の番って……何をやってんだ？」

「ハハ、楽しそうで良かったよ。明日の事だけど、帰りの船の時間は言ってあったよね？　僕は多分、先に港へ行ってると思う。朝早いから、遅れないようにね」

「はい。伝えておきます」

「じゃ、寮に帰ったら、また宜しく頼むよ」

理事長がそういって真田先輩が「はい」と答えると、理事長は海岸から去っていった。…正直言って僕は理事長を信用していない。理事長は僕たちに隠し事している。隠し事をしているのは分かるが、目的が分からない。なので当分は彼の指示通りに動くつもりだが、みんなを傷つけるのであれば迷わず斬り捨てるつもりだ。去っていく背中を見ながらそう考えていると、再び順平の声が聞こえてきた。

「湊ー！　真田せんぱーい！」

「やれやれ。俺たちも行くか、有里」

「……そうですね」

大声で呼んでくる順平に呆れつつも真田先輩は立ちあがると僕を誘ってきた。なので、僕も服を脱いで水着になると、真田先輩の後ろについて皆の元へ向かった。

――浅瀬

みんなのいる浅瀬とやってくると、順平ＶＳゆかり・公子・アイギス連合軍で水の掛け合いをしていた。その近くで風花と美鶴さんは笑っている。だが、順平の方は笑っていられる状況ではないようだ。

《バシャ》

「ちょ、待ってってアイギス！　”水鉄砲”ってそういう意味じゃないから！　ウッギャー！」

「順平くん、ダウンです！」

「おっし、総攻撃チャーンス！」

アイギスがすごい勢いで順平に水をかけ続けると、順平は勢いに負けて倒れた。それを見た風花がタルタロスのノリで言うと、ゆかりもそれに乗って攻撃を始めようとする。すると、公子が上に腕を上げて号令をかけた。

「今だ、総攻撃！」

「ちょ、タイム、マジ無理だっつ……ギャー！！」

順平はそう叫ぶと浅瀬なのに沈んでいった。てか、アイギスの攻撃すごいな。服が濡れるのも構わず、バシャバシャと両手を高速で動かし水をかけている。これはまともに戦っては勝てないだろう。そう思いながら僕は水に魔力を通して操り、順平を救出してあげた。まぁ、高さは5メートルくらいまで上げてるけど。

「ふぅ、なんでか知らないけど助かったぁ…って、おわぁ！？なんだこの高さっ！！　お、おい、絶対これ湊だろ！　いいか、絶対に普通に降ろせよっ。フリじゃないかんな！？」

「何の話？　あ、関係ないけど氷のアート作りたくなってきたな。どこかに丁度いい水の柱があれば、ブフ系で凍らせようかな」

「やめろっ！　マジで死ぬからっ、この身体包んでる水解けって。この高さ結構恐いんだぞ！」

「良いの？　んじゃ、解除っと」

「馬鹿っ、急に解除したらって…うわぁー！？≪バシャーン！！

≫」

順平に言われたので顔以外を覆っていた水を解除すると、順平は水と一緒に5メートルの高さから落下した。まぁ、水と一緒に流されてるからダメージは無いけどね。そう思いながら、順平を放っておいて驚いている表情をしている女子の元へ向かう。

「やぁ、何かして遊ぼうか」

「い、いいけど、さっきの水は何？　あれもまた魔力でなんかしたの？」

「ん？　まぁね、水に魔力を通して水ごと魔力を操作したんだよ」

そう説明しながら自分の腕のまわりに水のリングを作ってみせると、女性陣は「おぉー」と感心している。まぁ、常時操作してる訳だから結構疲れるんだけどね。

「驚きであります。湊さんは様々な特技をお持ちなのですね」

「別に特技じゃないよ。僕は術者タイプでもあるから魔力をある程度操作出来るだけだから」

「術者タイプ？　という事は、なにか他にも系統があるのか？」

「ええ、知り合いの話だと大きく分けると3タイプあるらしいです。でも、大概の人はタイプが分かれてもそれほど強く特徴が出たりしないので。僕みたいに複数系統に特化してるのは珍しいみたいですけど」

そういうと、話を聞いてきた美鶴さんは少し考える素振りを見せたあと、顔をあげて僕に再び話しかけてきた。

「その…もしよければだが、どんな事ができるか見せてくれないか？　もっと君がどんな事が出来るかを知りたいんだ」

「……いいですよ。って言っても、僕は何が出来るかを完全に把握している訳じゃないので、いま出来ると分かっていることだけですが」

「ああ、それで構わない。よろしく頼む」

「了解です」

僕が了承すると柔らかい笑顔で美鶴さんが頼んできたので、僕もそれに笑顔で返事をする。さて、いま出来る事と言ってもなにをしようかな。ハッキリ言うと最近は術を纏うために魔力操作の練習しかしてなかったから、他のことは分からない。けどまぁ、簡単なことからやっていくか。そう決めると、僕は足を水から抜き水面に着いた。

「よいしょっと…」

「えぇっ!?　す、水面に立ってるっ!?」

「これは足の表面に魔力を纏わせてるんだ。魔力は半分影時間のような異空間の性質を持ち合せてるから、純粋にこっちの性質しか持たない水とは反発させることが出来るってわけ。ああ、反発させる事が可能ってだけで、意識しないと反発しないからそこは注意ね」

そんな風に水面に立っている僕に驚いているゆかりに言うが、相手は全く聞いていないようだ。まぁ、魔力が使えない人には説明しても、ほとんど理解出来ないだろうからしょうがないけどね。心の中で思いながら密かに苦笑すると、次の技に移る。

「次は道具に魔力を纏わせるって技です。これは道具自体の耐久性を上げる他に、少し変化を加えると武器の攻撃力を上げたりもできます」

いいながら僕はフツノミタマを右手に持って魔力を纏わせる。そして、水面に立ったまま誰もいない方へと高速で振り抜いた。

「はぁっ！！《ザシュンッ！！》…とまぁ、魔力を斬撃のまま飛ばしたりもできるので、これはかなり実戦向きの技です」

「う、海が割れただと……」

「知ってるであります。モーゼの十戒というモノに出てくる有名な場面です」

「あってるけど、なんか間違ってるよアイギス…」

そういって風花や他のみんなも僕の飛ばした斬撃で割れた海を見ている。割れたと言っても魔力とかはセーブしたから長さにして１０メートル、深さは１メートル強程度だろう。そんな風に考えている間に割れた海も元に戻ったので、気を取り直して最後の技に移る。

「次で最後にしますが、最後はただの魔力解放です。いま出来る中で最強の防御技でもありますが、これやるとかなり疲れるんで緊急用ってとこですね」

「ま、待って。解放ってことは今みたいに何か放出するってことよね？　なら、私たちが海岸にあがってからにして」

「いいよ。威力はセーブするけど、パラソルくらいまで行ってて」

「「「「わかった」」」」「了解であります」

僕に返事をすると女性陣はすぐに海からあがってパラソルまで避難した。順平と真田先輩も僕が何かすると思ったのか、一緒に避難していたのでこれなら少し強めにしてもいいかな。

『やめときなさい。貴方が今考えてる出力でやればクレーターが出来るわ』

「そう？　じゃあ、もう少し威力を絞って……よし」

彼女に言われ使う魔力をさらに抑え準備を終えると、僕は海岸のみんなに手を振って始める事をしらせる。周囲には人もいないし、向こうも気付いて手を振り返してきたので早速やろう。

「魔力解放――――オーバードライブッ！！」

『ちょっ、このお馬ｋ《ドゴーンッ！！》』

彼女が何か言っていたが、その声をかき消すように。解放された魔力によって周囲の海水は吹き飛び、同じく地面も吹き飛んだため爆音が轟いた。さらにいまも魔力の解放を止めていないので、僕の周りには薄っすらと発光している魔力が高い《キュインキュイン》という音を立てている最中である。

「おおー、すごいね。魔力に阻まれて海水が全然こっちにこないよ」

『お馬鹿っ！　なにがオーバードライブよっ、出力抑えるように言ったでしょう！』

「ちゃんと抑えたよ。これでも全体の５パーセントも出してないよ？」

『ほ、本当に？　貴方また魔力の量が上がったんじゃないの？』

彼女はふよふよと空中に浮きながら僕に言ってくると、その間も驚いた表情をしている。まぁ、確かにこの出力で前は３０パーセント近く使ってたからね。いまではそれを５パーセント未満で出せるのだから、最近の訓練はかなり効果があったという事だろう。

「魔力使うと次の日には同じ分だけ増加してる気がするけど、それでかな？　だから最近の訓練時は魔力切れ起こしてないでしょ？」

『普通は次の日じゃ全回復すらしないわよ。貴方、本当にどんな身体してるの？』

「中肉中背？」

『そういう事じゃないわよ…。それと、もう魔力止めなさい。お友達が貴方の周囲から消えた地面と海水見て驚いているから』

「りょーかい《シュウン…》」

言われたので僕は素直に魔力の解放を止める。すると、魔力によって阻まれていた海水が僕の方へと雪崩れ込んできたので、すぐに足に魔力を纏わせてそれの上を歩いて皆の元へと向かった。

――海岸

魔力の解放を終えて水面を歩きながらみんなの元へと向かったが、現在の天候は雨へと変わっている。といっても、普通の雨ではなく僕の魔力で吹き飛んだ海水が今になって落ちてきたのだ。女性陣はパラソルの下、男性2人はスペースの関係上パラソルの下に入れず海水でずぶ濡れになっている。

「フフッ、水も滴るなんとやらってとこかな？」

「別に泳ぎに来たから濡れるのはいいけどよ…。なんでオマエは濡れてないんだよ？」

「それも魔力とやらの力か？」

「まぁ、そんなとこです」

真田先輩に聞かれたので笑って答えると、その間に海水の雨は止んだ。結構大量に吹き飛んだんだな、森の方には届いてなくて良かった。まわりを見ながらそう考えていると、みんながパラソルの下から出てきた。

「なんか湊君だけマンガの世界みたいだね」

「いや、私たちもペルソナ使える時点でそっち側のはずなんだけど…」

「まぁ、それが霞むぐらい湊君がぶっとんでるってことだね」

出てきた2年女子トリオは言いながら苦笑して僕を見てくる。そうは言っても、僕もなんで僕だけ魔力が使えるのか分からないんだから、しょうがないじゃないか。そんな風に話を聞きつつ心の中で反論してると、アイギスが僕に話しかけてきた。

「湊さん。わたしも魔力が使えるようになりたいであります」

「え？　いや、たぶん無理じゃないかな。知り合いもこの世界では、その人らと僕しか魔力回路持ってないって言ってたし」

「そうですか…。とても残念です」

「まぁ、アイギスにはアイギスにしか出来ない事があるから気にする事ないよ」

落ち込みながら少し俯くアイギスにそういって頭を撫でると、アイギスは「湊さん…」と嬉しそうに言って顔をあげた。

「フフッ…可愛いね」

「可愛い…でありますか？」

「うん。感情によって表情をコロコロ変えるから可愛いなって」

「ありがとうございます。湊さんもとても端整な顔立ちをしておられるであります」

「そう？　自分では分からないけど、嬉しいよ。ありがとね」

可愛いと褒めるとアイギスも僕の容姿を褒めてきた。まぁ、僕自身は自分の容姿を気にした事もないんだけど、アイギスに褒めてもらえると嬉しい。そして2人で笑い合ってると、急に後ろから衝撃が来た。

「おっと」

「2人だけの世界禁止っ。それは姉である私とだけ許可します」

「そんな世界展開した覚えないけどね…。でも、公子と2人の世界とか嫌だな。なんか身の危険感じるし」

「2人だけしかいないんだし、普段は我慢してる私への愛を解放して良いんだよ？」

「そんなものないから…」

そんな風に抱きついてきた公子の言う事に呆れつつも、僕らは屋久島で、楽しいひと時を過ごした。アイギスという新メンバーも加わり、ますます賑やかになりそうだな。そして、次の日楽しかった屋久島旅行も終わり、無事、寮へと帰ったのだった。

7／23（木）
夜更け――辰巳ポートアイランド・裏路地　≪Ｎｏ　Ｓｉｄｅ≫
溜り場の常連たちが、今日も騒いでいる。その輪から外れたところで、荒垣が1人苦しそうに座り込んでいた。

「うっ…ハァ、ハァ…」

そうして荒垣が苦しんでいるとそこへ、3つの人影が近付いていく。その近付いてきた1人、ストレガのタカヤは荒垣の近くで立ち止まると話しかけた。

「随分と苦しそうですね」

「オマエらか…」

荒垣は声をかけられると苦しそうにしながらも顔をあげて、声をかけてきた者達の姿を見る。相手は以前から少しばかり理由ありで付き合いのあるストレガの3人だった。荒垣は付き合いがあるため既に3人の姿を見慣れている。だが、他の者は違っていた。

「やべぇ、あいつらだ…」

「あー、あの3人が例の？　ほんとだ、キテんねー！」

「バカ！　行くぞ！」

溜まり場の常連たちはそんな風にひそひそと会話すると、そそくさと散って行った。そのいつもの様子をチドリが何の感情も抱かず見ていると、同じように見ていたタカヤが呆れたように口を開く。

「何故、他の者は、私を見るたび、姿を隠そうとするのでしょう。まるで、路地裏のネズミですね」

「…さあな」

「ジン…彼にカプセルを」

息も絶え絶えといった感じに返事をする荒垣を見ると、タカヤはジンに指示した。言われたジンはアタッシュケースから薬の入った袋を取り出し、荒垣に手渡す。その薬は人工ペルソナ使いがペルソナのコントロールを失わないよう制御するためのもの。

“制御剤”。人工ペルソナ使いがそれを摂取した場合、それは強過ぎるペルソナの力をなんとか安定してコントロールできるレベルに落ち着かせる効果がある。しかし、ぎりぎりとはいえペルソナを制御出来ている自然覚醒型の荒垣がそれを摂取した場合、それはペルソナ能力を封じる効果がある。それを飲んだ事で体調を落ち着かせると、荒垣は呼吸を整え立ちあがった。

「…悪ィ。礼はいつもの方法で…」

「待ちや」

荒垣が礼を言って去ろうとすると、それを見ていたジンが声をかけ引きとめた。何の用だと思いつつも声をかけられ、荒垣が振り返るとタカヤが口を開いた。

「今回は代価を頂く代わりに、話を聞かせて欲しいのです。あの“ペルソナ使い”達が、何やら騒がしいのですよ。彼らはこのところ、月が真円になるたび“宴”にくり出す…。あの“塔”にも頻繁に立ち入っている…何故、あんな戦いを始めたのです?」

「……」

「知っているのでしょう? 言えませんか? 仲間…だからですか?」

「違うッ！　俺ぁもう、連中の仲間なんかじゃねえ」

タカヤが静かに尋ねると、“仲間”という言葉に反応し否定する荒垣。それをみてタカヤは顔に笑みを浮かべ再び情報を求める。

「なら、教えてください。“赤の他人”より、今はカプセルの方が大事なのでは？」

「チッ…離れてた身だ、詳しい事は知らねぇ。ただ…あの敵を全部ヤれば、影時間や、あの気味の悪ィ“塔”が消える…そう、聞いてる」

「影時間を消す…という事ですか？　どういう事です！？　なぜペルソナ使いが、影時間を消すなどと…」

荒垣の話を聞くとタカヤは感情を表し、特別課外活動部のメンバーらの行動が理解できないと声をあげた。荒垣はその突然の変化に「ああ？」と不思議そうにするが、タカヤはさらに続ける。

「しかもあの“滅びの塔”までも！」

「ああ？　“滅びの塔”だ…？　…あんなブキミなモン、消せるってんなら試すだろ」

タカヤの反応を不思議に思いつつも荒垣が聞き返すと、ストレガのメンバーは黙ってしまう。そう、仲間ではないといっても荒垣は根柢の部分で向こう側と同じなのだ。どうせ説明したところで、自分たちの話を理解出来る者など、同じ研究の被害者以外では湊しかいない。そう考え無駄な説明はしないことにした。

「……最後にお尋ねしたいのですが、あなたは向こうの銀髪の女性の素性を知っていますか？　また、連絡手段をお持ちですか？」

「銀髪の女？　誰だそりゃ？　俺が知ってるメンバーは、男女３人ずつだ。最近になって増えたヤツなら知らねえ」

「そうですか。もしもの時の為に、こちらに付いていただきたかったのですが…」

そういってタカヤは暗い表情で俯く。タカヤは女装時の湊の正体を知らず金で雇われてる情報だけを持っていたため。その強さから同志とはいかずとも“協力者”、または最低でも敵になる事だけは避けたかったのだ。だが、どんなに調べても素性が判明しないため荒垣にも尋ねたのだが、それは失敗に終わった。

そして、少しの間沈黙がおりると、依頼のため時間を確認したジンがタカヤに声をかけた。

「タカヤ…」

「ええ、分かっています」

声をかけられ返事をすると、ストレガの３人は今日の依頼をこなすため去って行った。そして、あとには荒垣だけが残る。

「フッ…今さら戻れっかよ…。俺の力は、もう…昔みてえな純粋なモンじゃねえ…」

吐き捨てるように１人そう呟くと、荒垣も裏路地をあとにした…。

夜――ラウンジ　〔湊　Ｓｉｄｅ〕

朝、目覚めて朝食を食べると、僕たちはすぐに港へと向かいフェリーに乗った。帰りはアイギスも一緒なので、行きよりも賑やかな雰囲気での帰宅ということになった。そうして、フェリーと車に乗る事数時間。僕らはやっと寮へと帰って来た。

「あー、つっかれた…向こう出たの、割と早い時間だったけど、結構かかったなぁ」

「皆さん、お疲れ様でした。とりあえず、今夜はゆっくり休んで、今後の戦いに備えておいて下さいね」

「わーってるって。オレ、シャドウとの戦いの為に、夏休み、予定入れてないもんね」

風花に言われ、荷物を床に置いてソファーに座りつつ順平は笑顔で答える。だが、それを聞いたメンバー達は順平に可哀想なものを見る視線を送った。まぁ、しょうがないよね。だって、戦うのは夜なんだから、日中の予定を組んでも泊まりとかでなければ影響は少ないのだ。そう思っていると、ここでも突っ込み職人が仕事をした。

「…それ、ただヒマなんじゃないの？」

「う、うるせーな…」

「まぁ、好き好きだけどさ。とにかく、あと6体…満月のシャドウをやっつければ、終わる…。無気力症の事件とか、そういうのも全部無くせるワケでしょ。私たちにしか出来ないこと、頑張んないとね」

そうやってゆかりがやる気を見せつつ言うと、他の者もしっかりと頷いた。……これからは僕も仲間になれるよう歩み寄らなければならない。時間はかかるだろうけど、そんなみんなを守れるかという不安が今よりも大きくなるだろう。もっと強くならなくちゃ…。

深夜――寮・2階廊下　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

影時間も終わり、全員が寝静まった頃。男子のフロアである2階廊下に動く人影があった。

「……一番奥、ここですね」

小さい声で呟きながら最奥の部屋のドアの前にいる人物はアイギス。現在は屋久島のときと違い、ロボットであることがばれないようにするための服は着ていない。そのため、機械である事がわかる四肢がむき出しとなっている。

「では、あの方のお傍にいるためのミッションを開始します。ファーストフェイズとして、室内への侵入のため鍵の解錠を実行します」

ドアの前に立ったアイギスはそう呟くと、解錠用のピッキングツールを指先に装備して湊の部屋へ侵入しようとする。本来ならば、美鶴や他の女性陣にも作戦室で待機しているよう言われたのだが、アイギスにとっては湊の傍にいることがもっとも優先すべき事。いかにこれから仲間になる者に言われたとしても、命令でもなければ当然自身の目的を優先した。

「では、解錠開始しま《ガチャ…ゴンッ》いたっ」

「っ!?　ご、ゴメン。ゆっくり開けたつもりだったんだけど…」

「あ、いえ。つい言ってしまっただけで、実際にはなんのダメージもありませんので大丈夫です。それより起きてらしたんですか？」

「……入って」

いざ解錠せんとした瞬間、ドアが開けられると外開きのため廊下側に居たアイギスの顔面にドアがぶつかった。そのことに開けた本人である湊は驚き焦るが、アイギスは真顔で返事をし、さらに聞き返す。すると、キョロキョロと廊下を見まわすと湊は答えずにアイギスを部屋へ入れた。

――湊自室

湊はアイギスを部屋へ入れるとすぐに自分のベッドへと向かった。アイギスは湊が答えないことを不思議に思ったが、とりあえず腕を引かれるまま一緒にベッドへと向かう。そして、ベッドの傍で手を離すと湊はベッドに入ってからアイギスへ話しかけた。

「本当は寝ようと思ったんだけど、なんか眠れなくて。そしたらアイギスは部屋の前にきたから声をかけるために開けたんだ」

「気付いておられたのですね。ですが、湊さんのおかげでミッションが無事達成できたであります」

「ミッション？」

湊が自身が部屋の前にきていたことに気付いてたと言われ驚くアイギス。だが、結果的に元々の目的である部屋への侵入が達成できたことに喜ぶと。それを知らない湊が不思議そうに聞き返してきた。

そしてアイギスは尋ねられたことに答えようとしたのだが、先にベッドに入った湊が自身の横のスペースをポンポンと叩いた。アイギスはそれをここに来いという指示だと受け取り、誘われた通りいそいそとベッドにお邪魔した。

「お邪魔するであります」

「どうぞ。で、ミッションて何？」

「ミッションとはあなたの傍にいるため、まずは部屋に侵入するというものでした。ですが、解錠する前に湊さんが扉を開けてくださったので、大幅に時間を短縮する事ができました。感謝するであります」

アイギスはベッドに入り足にタオルをかけると、そう言って座ったまま湊にペコリと頭を下げる。そして言われた方の湊はそれをみて笑顔になると、口を開いた。

「フフッ、別に何もしてないけどね。むしろ、アイギスの顔にドアぶつけちゃったし」

「ダメージは無いので無問題であります」

「そっか。……ねぇ、アイギス。一緒に寝よ？」

「はい」

一緒に寝ようという湊の申し出をアイギスが受けると、湊は少し場所を移動してベッドに横になる。それを見るとアイギスも同じようにベッドに横になり、湊の頭を胸に抱いた。急にそうされた湊は少

し驚くが、すぐに落ち着くと自分もアイギスの身体へ手を回し抱きしめ返す。

「……おやすみ、アイギス」

「はい、おやすみなさい」

胸に抱かれそのまま目を瞑ると、湊は穏やかな表情ですぐに寝息をたて始めた。そして、その顔を見て自然と笑顔になると、頭を撫でながらアイギスも眠りについたのだった。

第四十二話（後書き）

風花やチドリを出した時もそうでしたが、基本的に出したばかりのキャラは数話の間は少し出番を多めにするようにしてます。というのも、私がこの作品内でそのキャラのイメージを掴むのに一番いい時期が出始めだからです。あとになってキャラの把握不足になると、動かしづらいので出番が自然と少なくなるという事態になりかねません。なので、そこら辺は注意しています。

第四十三話（前書き）

今回はテストの結果発表の回になります。一応、教科は中間の方は確定で、期末になるとそれに下の教科が足されるということにしてます。

中間テスト：現代文・古典・数学・英語・歴史・科学・物理
期末テスト：保健体育・技術家庭科・美術ｏｒ音楽（選択授業）

ちなみに、寮生ではゆかりと公子は音楽。他は全員が美術を選択してる設定です。なんで管弦楽部の風花も美術？と思われるかもしれませんが、音楽は歌のテストもあるからです。風花は人まで演奏はできても、歌うのは少し恥ずかしいため美術を選んでいます。

第四十三話

7／24（金）
朝――自室
「朝です！　起きて頂きたいであります」

朝、僕が寝ていると頭の上からそんな声が聞こえてきた。そういえば昨日はアイギスが一緒に寝てくれたんだっけ。そう思いながら抱きしめられて動けないので、顔だけを上に向けるとアイギスがジッと僕の顔を見ていた。

「おはようございます。無事に起床しましたね。任務完了であります」

「うん、おはよう。でも、目覚まし時計は？　一応、時間がセットされてたと思うんだけど」

「目覚まし時計は起動前です。『5分前行動！』…と標語が貼ってありましたので、5分前に起こしてみました」

アイギスはそういうと僕を抱きしめるのを一度やめて、枕元に置いてあった目覚まし時計を見せてきた。確かに時刻はいつも起きる時間の約5分前だ。別に起きる時間は適当に決めているので問題ないが、5分前行動の意味を勘違いしてるな。そう苦笑しながら目覚ましを受け取ってセットを解除すると、急にドアがノックされた。

《コンコン》

『ゴメン、ねえ、起きてる？　実は“あの子”がどこ探しても居

なくて、ちょっと手伝って欲しいんだけど。屋久島の時みたいに、勝手に出てったかも知れなくて…』

「わたしの名前は“アノコ”ではありません。アイギスなら、ここにおります」

『え…？』

ゆかりの言葉にアイギスが反応すると、ゆかりはドアの向こうで驚いた声をあげた。そして、僕が答える前に《ガチャ》とドアが開き、ゆかりが入ってきた。

「アイギス！？　あなた、いつの間に…」

「この方が就寝中に、ドアの開錠を行いこの部屋への侵入を試みました」

「モロ“不法侵入”じゃん！　夜は作戦室に居てって言ったでしょ！？」

「いえ、試み、いざ解錠しようとしたとき、湊さんがドアを開けてくださったんです。ドアの前にいたため顔面にドアがぶつかるというアクシデントもありましたが、わたしはちゃんと招かれてここにいるのであります」

話を途中まで聞いてアイギスが不法侵入したと思ったゆかり。アイギスはそれに真顔のまま説明を返すと、ゆかりは視線を鋭くして今度は僕をキッと睨んできた。いや、別に訪ねてきた人がいれば部屋にあげる事くらいあるよ。だが、そう言ってもきっと納得しないんだろうな。

さて、どうやって話をおさめるかなと考え始めると、アイギスがベッドから出て立ち上がり。ゆかりに向かって口を開いた。

「今後、わたしの待機場所は、ココが良いかと思いますが、何か？」

「なっ…唐突に何言ってんの？」

「問題点があれば速やかに対処します」

そう言われると、ゆかりは「えーと…んーっと」と悩み始めた。別にいいと思うけど、なんでそんなに考えてるんだ？

「え…問題点は…えっと…多分、寮則に違反してるはず…ってか、あなたも何か言ってよ！」

「僕は寮則で例外を認められてるから、ここに居て良いよ」

「ちょっ…なにオッケー出してんの！？」

「ありがとうございます！」

僕が許可を出すとアイギスは笑顔でお礼を言ってきた。その後ろではゆかりが驚いている表情をしているが、僕はベッドから出るととりあえず顔を洗うことにした。

「早速、装備品を運び入れるであります。湊さん、予備弾装類は床に置いていいですか？」

「邪魔にならないように端の方ならね」

顔を拭きつつ服を着替えようとしていると、アイギスが自身の装備品の置き場を聞いてきたので。僕は部屋の端の空いている空間を指差す。最初は剣とかを立てかけておいたんだけど、今はフツノミタマしかないし。それも白金の腕輪に収納している。だから、ぽっかりと空間が空いているのだ。だが、それを聞いていたゆかりが慌てた様子で大声を出す。

「弾装!?　ダ、ダメダメ!!」

「「……??」」

なんでダメなのかわからず、僕とアイギスが揃って不思議そうな表情でゆかりを見ると。ゆかりは「不思議そうな顔すんなっ!」と怒ってきた。いや、急に怒られても…。そんな風に考えていると、アイギスがなんで怒られているのか分からないまま表情まま口を開いた。

「ですが、わたしはこの方の傍に…」

「しょうがないな…。じゃ、3階に部屋を用意してもらうから、そっち行ってよね。あと、勝手に寮の外へ出たりしないでよ?」

「命令であれば、従うであります」

「ハァ…なんか疲れた…。じゃ私、朝練あるから行くね…」

《バタン》

そう言うと、ゆかりは肩をすくめて出て行った。よく分かんないけ

ど、大変なんだなぁ。僕は朝練には出てないから、今日もゆっくり登校だ。いや、別に登校義務はないからアイギスとお出かけもいいな。まぁ、どっちにしろ着替えないといけないので、僕は寝巻のシャツを脱いで新しいTシャツに着替えた。

そうして、下も制服のズボンをはいて半袖のカッターシャツに袖を通していると、アイギスが小さくなにか呟いている。

「なるほど…皆さん本来は、朝になると“学校”へ行く訳ですね」

「まぁ、僕は特待生だから授業に出なくてもいいんだけどね」

「そうなんですか？　人によって学業形態も様々なんですね。なるほどなー」

アイギスは話を聞くと、ひとりで感心しうなずいている。ロボットなのにやけに人間くさいな。まぁ、それだけ心がちゃんとあると言う事なんだろう。そう考えるとそろそろ寮を出る時間なので、今日はどうするかを決めるか。

とりあえず、行かないにしても昼休みに試験の結果だけは見るつもりだ。だから、制服に着替えてる訳だけど、アイギスはどうしようかな？お出かけ中に学校よるならアイギスも制服じゃないと目立ってしまうと思うし。

「んー…アイギスも制服着る？」

「制服…ですか？」

「うん。僕の持ってる女子用のやつで改造してないのが残ってる

から、着るならあげるよ？」

言いながらクローゼットを開けて改造前の女子の制服を取り出す。サイズは男である僕のものだけど、体格差は胸や駆動部の出っ張りで補完され丁度くらいになるだろう。足の方もニーソックスで隠せば問題ない筈だ。そう考え、出した服をアイギスに渡すと興味深そうにみている。

「着方分かる？」

「はい。これを身に着ければ外出していいのですか？」

「1人だったら分からないけど、今日は僕も一緒だし服さえ着てればいいんだけどね。途中で学校に用があるから、その制服はそこに入るために必要なんだ」

「なるほど、“学園用迷彩”ですね。ならば、早速装備したいと思います」

アイギスはそう言うと冬服の女子の制服を着始めた。途中で着辛そうにしている時は、少し手伝う事で無事に着替えは終了した。うん、どこからみても人間にしか見えないや。

「フフッ、とっても似合ってるよ」

「ありがとうございます。これで“学校”へ潜入しても、ばれないで任務をこなす事が出来るであります」

「ばれそうになったら、いっその事本当に転入させちゃうから大丈夫だと思うけどね。でもま、あと2日で夏休みだから実行に移す

としたら9月かな。…よし、それじゃあ僕とデートしようか」

「はい。詳細な地形データを把握するため案内をお願いするであります！」

真面目な表情で言ってきたアイギスに笑って返すと、僕は財布やケータイなどの貴重品を持って出かける準備した。今日はスニーカーじゃなくてエンジニアブーツで行こう。いざって時に柔らかい靴だと、アイギスを抱いて走りづらいから。そんな風に考えて僕らは下に下りていくと、もう誰も残っていないので扉に鍵をかけて街へと出かけた。

――巌戸台商店街

まず最初に僕らがしようと思ったのは食事だ。現在の時刻は9時過ぎ。学校は始まったばかりだが、遊ぶ店などはまだまばらにしか開いていない。なので、僕の朝食をとって時間を潰し。少し遊んで昼休みに試験結果だけ見てまた午後も遊ぶことにしたのだ。

「地形データ照合……ここは、“巌戸台商店街”ですね。ですが、わたしに入っているデータとは齟齬が発生しています」

「データが更新されてなかったのかな？　なら、歩きながらデータを更新していくといいよ」

「了解であります」

アイギスが前に起動していたのは１０年前だ。それから損傷を修復して保管されていたとしたら、きっとデータは１０年前でストップしているのだろう。まぁ、なんで戦力になる者がずっと保管されていたのかとか、急に動いて仲間になったのかは不思議だけど。誰の

思惑にせよ、ずっと会いたかった相手に再会できたんだ。いまはそれでいいとしよう。

「あ、そう言えばアイギスって食事できるの？」

「栄養摂取などは不要ですが可能であります。ですが、味覚センサーのようなものは開発者がシャレでつけたものなので、人間のそれと異なっており味の批評はできません」

「……アイギスってベロあるの？」

「ベロ…というと、舌のことですか？　はい、あります」

そういうとアイギスは「んべ」と言った感じに舌を出した。普通に人間のような赤い舌だが、一体なにで出来ているんだろう？そう思いアイギスのベロを指でつまんでみた。

「あっ…」

「……なに今の声？」

「ひへ、ひゅうひはわはれへおほろひははへへふ（いえ、急に触られて驚いただけです）」

「いや、アイギスって別にベロ使って発音してる訳じゃないから、僕にベロつままれてる状態でも普通に話せるよね」

「軽いジョークであります。ですが、急に触られて驚いたのは本当です」

急に変な声を出したアイギスに僕が驚くと、アイギスはまるで本当に舌をつままれている人間のような話し方をした。だが、アイギスは発声器官と舌は無関係のため、それを指摘すると真顔でジョークだと言ってくる。この子も結構いい性格してるな。そう思いながらもケータイを取り出すとあるところへ電話することにした。

「……？　どこへ連絡されているのですか？」

「ん？　ちょっとね……桐条か？　私だ」

『次代様。先日はろくなお構いも出来ず申し訳ありませんでした』

「いや、休暇だというのに無理におしかけて済まなかった」

僕が電話した相手は桐条武治氏。別に世間話をするつもりで電話した訳ではないので、さっそく本題に入ろう。

「実は折り入って頼みがある。私をお前たちのラボに連れて行って欲しいのだ」

『ラボ…と言いますと、影時間に関わることですか？』

「いや、アイギスのヴァージョンアップをしようと思ってな。直接戦闘には関係ないのだが、食事が可能と言うなら一緒に食事を楽しみたいだろう。なので、ちゃんと人間の味覚に対応した味覚センサーへ変更してやりたいのだ」

僕がそういうと相手は電話の向こうで『むぅ…』と何か考えている。まぁ、自分たちの最先端技術に関わる事だし、おいそれと人に見せる事は出来ないだろう。だけど、出来る事なら僕はアイギスと普通

に食事をしたい。なので、今回のお願いと言うわけだ。

『分かりました。では、連絡を入れておくので車を用意させます。それにお乗りください』

「ああ、無理を言って済まないな、感謝する。私とアイギスは厳戸台の駅前にいるので、そこへ車を回してくれ」

『わかりました。では、失礼します』

「ああ、またな…《ピッ》」

武治氏との電話を終えると僕はケータイをポケットにしまい、アイギスの方へ向き直る。すると、アイギスは不思議そうな表情で首をかしげて僕を見てきた。

「フフッ、いまからラボに行くよ。アイギスの味覚センサーを人間のそれに対応したものに変えるんだ」

「よくわかりませんが、仕様の変更という事ですね。承知しました」

「うん。それじゃあ、車がくるから駅前で待ってよう」

「了解であります」

その後、僕たちは武治氏が用意してくれた車に乗って桐条のラボへと向かった。そこでアイギスのメンテナンスと味覚センサーの交換。それと今後食事をするのならということで、新たにいくつかのパーツを加えて食べたものを全て消化しエネルギーに変換できる仕様に

なったのだった。

昼休み――教室　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

午前の授業を終えてゆかり達とお昼を食べていると、クラスの男子が試験の結果が貼られたとクラス全員に伝えてきた。今回は色んな事があったしちょっと自信無いんだよね。

「今回はちょっと落としたかな」

「いろいろあったし、しょうがないわよ」

「まぁね。てか、一番心配な湊君がなぜか来てないし…」

そう言って私は話しかけてきたゆかりと自分の間の席である、湊君の席を見る。確かに成績で言えば順平が最下位なのは確定だろう。でも、湊君は試験最終日まで意識不明で入院していた。そして目を覚ましてすぐに学校へ来て、私たちが試験を終えるのと同じ頃に全教科を解き終えたらしい。湊君ならやりそうだけど、さすがに前回に比べたら点数は悪くなっていると思う。

「今朝にアイギスを探した時に会ったけどね。アイギスったら昨日の夜に湊君の部屋に侵入しようとしたんだって」

「なっ！？　それって、夜這いってこと！？　くっ、私だって我慢してるのにっ」

「我慢以前に考えるんじゃないわよ…。でもまぁ、それは未遂で終わって湊君が自分で部屋に招き入れたんだって。で、朝アイギスの居場所を聞きに行くと中から自分はここにいるって言ってきたから部屋に入ったってわけ。そしたら、２人ともベッドに身体起こし

て座ってたのよ。どうやら昨日は一緒に寝たみたいね」

「同じベッドはダメっていったのに、帰ったらお説教しなきゃ…」

私はそう言うと机からメモ帳を取り出して、今日の予定に湊君への道徳の講義をする事を書き加える。うん、例え相手がロボットといっても女性型だし。寮に来たその日に一緒に寝るのはダメだもんね。まぁ、会ったその日に一緒に寝てるんだけど、あっちは旅行でこっちは日常生活。そのメリハリはつけてもらわなくちゃ。

「つか、そろそろ結果見にいかね？　昼休み中に見ておきてーしさ」

「あぁ、そだね。じゃあ、公子も食べ終わってるならいこ？」

「わかった。じゃあ、いこっか」

言いながらお弁当箱を仕舞うと、私たち3人はテストの結果を見るために職員室前廊下へと移動した。

――職員室前廊下

みんなで一緒になって職員室前にくると先輩たちと風花もやってきていた。相手もこっちに気付いたので軽く挨拶をして、試験結果の表に目を通す。すると、みんなの目が点になった。

――――――――――――――――――――

［第2学年　成績順位一覧］

順位／２６３中―　氏　名　―点数／１０００―

１位　　―有里　湊―１０００点―

２位　　―草摩　公子―　９２４点―

３７位　―山岸　風花―　８６９点―
１２４位―岳羽ゆかり―　７３８点―
２５０位―伊織　順平―　４３１点―

［第３学年　成績順位一覧］
順位／２６７中―　氏　名　―点数／１０００―
１位　　―桐条　美鶴―１０００点―
６３位　―真田　明彦―　８２５点―

いやいやいや、流石におかしいでしょ。これはいくらなんでも酷過ぎる。いや、別に順平の成績の話ではない。それも確かに酷いが、私が言っているのは湊君の成績だ。当日まで昏睡してた上に一気に全教科解いて満点はないだろう。そう思いながら集団から出ると、他の人も少し暗い表情になっていた。

「化け物かあいつは…」

「先生方も前代未聞だと驚いていたよ。まぁ、女性教師の中には笑っている方も何名かおられたがな」

「ああ、湊って女の先生とも仲良いですからね。つっても、これはなぁ…」

真田先輩が本気でゲンナリしていると、事前に教師の方の話を聞いていたらしく桐条先輩が先生たちの反応を教えてくれた。まぁ、順平が言った通り。湊君はクラスを担当してる女性教師とは基本的に仲がいいので、笑っていたのはその先生たちだと思う。そう考えながら苦笑いしていると、話題を少し明るくしようと思ったのか風花が桐条先輩に話しかけた。

「け、けど、桐条先輩も同じ満点じゃないですか。おめでとうございます」

「ありがとう。だが、私は普通に勉強をしていたからな。湊は試験前もタルタロスや学外の友人と遊んでいたようだし、点数は同じでも条件が違うさ」

「まぁ、確かに…でも、満点は「湊さんが一番であります」……ありますか？」

突然覚えのある声が聞こえてきたので、私たちがそっちを見るとなぜかアイギスと一緒に湊君が立っていた。てか、アイギスっ！？

「ちょっ、なんでアイギスがいるの！？」

「あ、皆さん。こんにちは」

「こんにちはじゃなくって、なんで湊君はアイギスを連れてきてるの！？」

私がアイギスが来ていることに驚くと、向こうも気付いて挨拶をしてきた。だが、そんな呑気に挨拶をしてる場合ではなくゆかりも怒り気味に湊君に問い詰める。すると、湊君なんでもないような表情で口を開いた。

「なんでって、僕だってテストの結果くらいみるよ」

「そうじゃなくて、なぜこいつを学校まで連れてきたんだと聞いているんだ。おまけに制服まで着させて、どこでそんなものを…」

「湊さんの改造前の物をいただいたであります。“学園用迷彩”です！」

真田先輩の言葉に、元気よくアイギスがそう返すと。風花は「“学園用迷彩”って……」と小さく呟いている。まぁ、その独特の表現はどうでもいいけど、湊君はずっとアイギスといるために学校を休んでいたのか。姉としてそんな事は許しておけない。そう思い注意することにした。

「ダメでしょ、湊君。学生なんだからちゃんと学校にこなきゃ」

「前にも言ったけど、僕には登校義務はないよ。成績さえ良ければいいんだし、今回のテストでその条件はクリアしてるって言えるよね」

「そんな事はどうでもいいの。今は、学校サボって私以外とデートとか、なにしちゃってんのって部分が問題なのよ」

「いや、公子ッチ。途中からただのやっかみみたいになってんぞ…。つか、さっきから気になってたんだけど。アイギス、オマエなに飲んでんだ？」

順平がそう言うと、アイギスが何か飲んでるとは気付いていなかった全員がアイギスの方を見る。そして、聞かれたアイギスはストローから口を離すと、その紙コップを私たちに見えるよう腕ごと前に突き出して順平の質問に答えた。

「ストロベリーシェイクであります。湊さんに買ってもらいました」

「最初は店で食べてたんだけど、お昼休みになりそうだからバーガーとポテトだけ向こうで食べてきたんだよ。シェイクは飲みながらでも移動できるからね」

「……アイギス、君は食事ができたのか？」

「はい。それに加え、午前中にラボの方でヴァージョンアップを行ったので。味もわかりますし、食べた物をエネルギーに出来るようになりました」

アイギスはそう言い終わると再びシェイクに口をつける。そんな様子を湊君は楽しそうに見ているが、説明された私たちは驚きっぱなしだ。そもそも、某ネコ型ロボットのような創作物（フィクション）でもないロボットが食事をするという発想にいくことがないし。それを知ったからといってヴァージョンアップをさせようとも思わない。それをこっちに戻ってすぐにおこなうあたり、やはり湊君は常人とは違うんだなと思い知らされる。

そんな風に思いながら目の前の2人を見て呆けていると。他の者より再起動が早かった風花が、湊君に向かっておずおずと口を開いた。

「み、湊君はなんでアイギスが食事できるかって発想になったの？」

「デート前に店が開くまで朝食でも食べて時間潰そうと思ってね。それで僕だけ食べるのもあれだし、聞いてみたんだ。それで、食べれるけど味覚センサーは開発者がシャレで作ったから人間とは全く違うって言われて。だったら、ちゃんと一緒に食事できるようにしようと思ったってわけ」

「そ、そうなんだ。良かったね、アイギス」

「はい、湊さんのおかげであります」

うーん、なんかすごく嬉しそうだなぁ。まぁ、心があるんだし感情もどんどん芽生えていくんだろうけど。このままいくと、アイギスはかなり湊君に依存しそうだ。それに湊君もアイギスと居れて嬉しそうだし…。やっぱり2人には登校義務が無いというのが、普段から一緒にいられる意味でかなりのアドバンテージになっていると思う。これはアイギスも学校に行けるようにするべきかな?

「湊、君は今日は授業を受けないのか?」

「湊さんはわたしとデートであります。この後は詳細な地形データ入手のために街をまわる予定です」

「公子ッチじゃないけど、マジで学校サボって制服デートかよ…。お前、補導されんなよ?」

桐条先輩が湊君に尋ねると、なぜか湊君と腕を組んで答えるアイギス。人間性はまだ希薄なのにどこでそんな小技の情報を仕入れてきた…。そして、そんな様子に呆れながらも順平が心配して声をかけると。湊君はポケットから黒い革の手袋を出して両手にはめ、ニッコリと笑いながら口を開いた。

「警察なんて一撃で潰せるから大丈夫だよ。それにアイギスも実弾装備してるから戦えるし」

「敵が攻めてきても、ハチの巣にしてやるであります《ジャキン

ッ！≫」

「揃って、物騒だなおいっ！？　つか、ギャグだよな？　いいか、絶対すんなよっ。容疑者を知る友人Ａなんかでテレビ出たくねえかんな！？」

順平はそう言って、指先のカモフラージュ用シャッターを解除して、両手の指先をこっちに向けているアイギスと黒い笑顔の湊君に注意する。しかし、なんでこの２人はこんなに殺る気満々なんだろう…。そんな風に考え呆れながら見ていると、ゆかりも困ったような諦めたような表情で２人を見ながら呟く。

「てか、この２人って寮内最強の組み合わせよね。アイギスは機械だから速度もパワーも人外で実弾ていう遠距離攻撃も可能。んで、湊君なんてアイギス以上の身体能力（スペック）でこの前の件で空中戦もある程度いけるって分かったし…。ホントに２人だけで遊ばしてて大丈夫かな？」

「……急に不安になってきたな。誰か行って暴走しないように見張っておくか？　いや、だが、他の者には午後の授業があるか…」

「そもそも、本気で２人が逃走した場合、俺達は完全に置いてきぼりだぞ。加えて有里は山岸のレーダーにも引っかからない。そんなやつらを見張る事など全員でやっても不可能だ」

「くっ…一番厄介な相手が味方とはな。いいか、２人とも絶対に騒ぎを起こすなよ？　もしこの約束を破れば罰を受けてもらう」

桐条先輩は真田先輩の言葉を聞いて少し焦った表情になりながらも、なんとか真剣な表情をつくり２人に脅しをかける。だが、２人から

返って来たのは期待していた素直な返事とはかけ離れていた。

「…正当防衛ならなにやっても許されるよね？」

「ですね。わたしの最大積載量は３００キロを超えていますので、大型自動二輪程度なら投げ飛ばす事も可能です。では、遅くならないうちに出発しましょう」

「そうだね。それじゃあ、僕らはもう行きますね。晩御飯は外で食べるからいりませんから。みんなは午後の授業頑張って」

「それでは、失礼するであります」

湊君とアイギスは私たちにあいさつをすると、そのまま本当に去って行った。だが、湊君は革の手袋を着けたままだし、靴はよりにもよってエンジニアブーツだった。ある意味、完全に戦闘向けの服装じゃない。思考も今日は攻撃的だしアイギスをナンパしようとした者がいれば軽く長期入院コースにしてしまいそうだ。先輩も同じ考えに至ったのかすぐにどこかに電話をしている。

「そうだ、有里湊とアイギスを至急マークしろ。……馬鹿者っ、２人を拘束しようとすれば病院送りで済めば良いような状況になるぞ。逆に何も知らずに２人に絡んで、正当防衛という名の虐殺にさらされる者が出ないよう注意しろと言っているのだ。ああ、そうだ。絡もうとした時点で意識を刈り取ってもいい。その方が相手のためだ」

「……なんかスゲェ大事になってるな」

「最強の戦闘力を有した代わりに、一般常識を有していない２人

だからな。何も知らず見た目に騙されアイギスをナンパしようものなら相手は集中治療室に直行だぞ。そんな事態にならんようにデートをさせるには、アメリカ大統領の護衛クラスの厳戒態勢をひく必要があるんだろう。まったく、とんだＶＩＰ待遇……いや、草摩の次期当主が相手だし、これが本来の姿なのか？」

真田先輩が不思議そうな表情で言うと、他の人も湊君の立場を思い出したらしくハッとした顔になる。けど、湊君が次期当主だと知っている人間はかなり少ない。加えて本人は軍１つに匹敵するほどの戦力を有している。そんな相手に護衛も何もないだろう。

そう考えつつ、私たちは出来る事がなくなったので。素直に教室に戻って午後の授業を受けたのだった。

夜――ラウンジ　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

「ただいま戻りました」

そういって寮のラウンジに入るなり、座っていたみんなに声をかけたアイギス。午後は言ってた通り、ポロニアンモールやポートアイランドの方をまわったりしていた。そして、最後に夕食を済まし帰りが今になったのだ。

僕がそんな風に今日のことを考えていると、アイギスは帰る前に買ってきたケーキをテーブルにおいてみんなに話しかけた。

「お土産であります。好みが不明だったため全て違うモノを選びました」

「うわっ、これ美味しいけどすごい高いお店のやつじゃん。良いの？　こんなの貰っちゃって？」

「気にしないで良いよ。今回のテストで学園から報奨金貰えるから買ったんだし」

ゆかりに尋ねられて笑って答えると、公子と美鶴さんも一緒になって3人はキッチンへと向かった。たぶん、お茶とか食器の準備をするんだろう。それを見送りつつ僕はトイレの方で手を洗い席に戻ると、既にソファーに座っていたアイギスが風花に話しかけられていた。

「デートはどうだった？」

「地形データもある程度入手できましたし、大変有意義な時間でした。それと、人間の中には食事を生き甲斐とする方もおられると聞きますが、食事が可能になったため改めてその意味が理解できたであります。今日食べたものでは“もんじゃ焼き”というものが興味深く気に入りました」

「そうなんだ、楽しめてよかったね。でも、危ない事とか、騒ぎになるようなことはなかった？」

風花はアイギスの話を聞くと柔らかい笑顔で楽しそうにしている。だが、学校で会った時から他の人と同様、僕たちのことを気にしていたらしく。心配そうな表情で尋ねてきた。といっても、別に特に問題は無かったと思うけどね。そういった意味を籠めて笑顔を向けると、アイギスも自信満々に答えた。

「全戦全勝だったであります！」

「ぜ、全戦全勝って、お前ら本当に戦ったのかっ！？」

「いやだなぁ、そんな事してませんよ。僕もアイギスも一切手は出してません」

「……君たちをマークしていたグループの者からの報告と随分違っているようだが？」

真田先輩の質問に答えると、そんな風に少し怒ったような雰囲気で言ってきたのは美鶴さんだ。飲み物の準備が終わったらしく、ティーポットとカップを何個かトレイからテーブルに置いて行く。そして、その後ろからは食器を持ったゆかりと、コーヒーのポットと残りの人数分のカップを持ってきた公子がやってきて席に着く。けど、違うと言われても本当に手を出していないしなぁ。そう考えていると、順平が恐る恐る尋ねた。

「ほ、報告ってどんなのが挙がってるんスか？」

「ポロニアンモールでアイギスをナンパしてきた男ら計８名を謎の技で噴水に投げ入れる。ポートアイランドでは恋人連れと思い絡んできた不良４名をまたも謎の技で吹き飛ばす。そして長鳴神社でたむろってゴミを散らかしていた不良３名は周囲に異常なプレッシャーを放つ事で泣いて謝らせたそうだ。他にも行く先々で似たような問題を起こし、最後はずっとついて来ていたからという理由で、グループの者たちを……。まぁ、その者たちは無事だが二度と同じ任務には付きたくないと言っているらしい」

「ほら、手は一切出してないでしょ？　」

「「そんな屁理屈が通る訳ないでしょっ！！」」

「えー…」

報告には確かに僕らが暴力を振るったという情報は無いのに、ゆかりと公子は揃って怒ってくる。なんで怒るんだろう?不良から女性であるアイギスを守るためにやったんだから、正当防衛じゃん。それに僕がやったのは魔力で身体能力を強化し、目で追えないスピードで拳を寸止めで繰り出しただけだ。吹き飛んだのはその威力の余波が衝撃として相手にぶつかったというわけ。寸止めで暴力振るったと言われたらたまったもんじゃない。

そう考えながらも、説明したところで怒ってくるのは変わらないと思うので。僕は黙ってコーヒーを飲みつつ、他の人が選び終わって余ったケーキを自分の前に持ってきて食べ始める。チョコケーキ美味しいなぁ…と思いながら、たまに横に座っているアイギスにもケーキを食べさせていると、アイギスは口に入っていたケーキを飲み込みメンバーらに話題を振る。

「…それよりも、ただいま満月の2週間前であります」

「あー、そう言や、そろそろ増え出す頃だな、無気力症…つーか“影人間”?　たーく…正直、キリがねえよな。被害に遭ってる人にゃ悪ィけど」

「キリはあるであります。過去に各地に飛散したシャドウは残りあと6体。それらを殲滅すれば、災いは、影時間と共に消えるであります」

「オッケー、アイギス。要は、“試験の出来”より、“戦いの出来”が重要ってことね。…よし!」

「調子に乗るな伊織。復習くらいきちんとやっておけ。自らの敗北に学ぶ。これはシャドウとの戦いにも言える事だしな」

アイギスの話を都合の良いように解釈し喜んでいた順平。それに対し、飲んでいた紅茶のカップから口を離した美鶴さんが諫めると、「へ、へーい…」と順平はしょぼんとした。まぁ、それはそれ、これはこれってやつだ。順平は赤点も多数出てるようだし、夏休みは補習になりそうだな。そんな風に考えつつ、僕らはその後もお茶の時間を楽しんだのだった。

第四十三話（後書き）

アイギスが食事が可能なのは公式です。本編では液体の物だけ飲食可能のように言われてますが、ケータイのアプリかなんかであった方だと固形物も普通に食べれる事が判明しているそうです。そして味覚が人間とは別物ということでしたので、そことエネルギー変換機能をオリジナルで変えさせていただきました。

まぁ、某ネコ型ロボットのようななんでも溶かす炉があるわけではないですが、それに近い物を新たに積んだと思ってください。ついでに言いますと、ちゃんと湊とおそろいの歯ブラシを新しく買ったので歯磨きもするようになります。

第四十四話（前書き）

原作沿いとか嘘、乙……と言いたくなる作品ですが。まぁ、なんだかんだで日常部分のオリジナルテキスト率高いですからね。それもしょうがないかなぁと思います。

第四十四話

7／25（土）
朝――自室
今日は1学期最終日。学校に行って全校集会を受けて、そのあとは自分たちの教室でホームルームを受ける。まぁ、成績表も渡されるらしいが、基本的に成績なんてどうでもいいので、僕にとっては夏休み前に顔を見せておこうという意味しかない。

「湊さん、起きてください。朝です」

「フフッ、おはようアイギス」

「おはようございます。ご気分はいかがですか？」

「良好かな。君がいてくれると落ち着くんだ」

言いながら横に寝ているアイギスの髪を指で梳く。相手はそうされて不思議そうにしているが、僕もとくに意味があってやっている訳じゃない。“ただなんとなく”、理由なんてそれぐらいだ。他にも、触れているだけで安心感があるとか、可愛いと思ったからなど。理由をつけようと思えばいくらでもつけれるが、実際に意味は無いんだから理由はそれで良いと思う。

そんな風に無駄な事を小難しく考えながら髪を梳き続けていると、廊下の方からバタバタという騒がしい音が聞こえてきた。そして、それが僕の部屋の前まで来たかと思うと、乱暴にドアが開かれた。

《ガチャンッ！》

「やっぱりいたっ！」

「なんで2日続けてこっちにいるのよ！」

「公子さん、ゆかりさん、おはようございます。わたしに何か用がありましたか？」

急に入って来た公子とゆかりにアイギスがベッドから出て話しかけると、相手は少し怒った表情のまま近付いてきた。そして、2人揃って僕の事をキッと睨むと、アイギスの方へ向き直り口を開く。

「昨日も言ったけど、アイギスの部屋は3階になったでしょ。なんでこっちで湊君と一緒に寝てるのよ？」

「いえ、湊さんがわたしの部屋にお泊りにこられたので、湊さんの安眠を考えわたしがこちらに行くと進言したんです。それを湊さんも了承されたので、今日もここに居るというわけであります」

「……湊君が発端ってわけ？」

「共に寝るという意味ではそうであります」

事の経緯をきいて一段階迫力が増したゆかりの質問にアイギスが答えると、2人はいまだベッドで横になっていた僕に近付いてきた。なにをされるか分からないけど、魔力で身体を強化しておこう。そうして身体の硬度を高めると。ベッドのわきで止まった公子が足を振りあげ、渾身の踵落としを僕のお腹にかましてきたっ！？

「はぁあああっ！！」

《ダンッ！》

「あぶなっ！？」

下着が完全に見えるレベルで振りあげた足から繰り出された踵落としは、ベッドのマット部分がくの字になるほどの威力だった。身体の硬度を高めている状態で僕を蹴ると足を痛めると思って跳び上がり避けたが、下手したら公子は自滅骨折してたかもな。

空中でそんな風に思いながら、自分の判断が良かったと感じていると。今度はもう1人が空中の僕の襟を掴んで背負い投げの要領で床に叩きつけてきた。てか、どんな反射神経だよ…。

「せりゃぁあああっ！！」

《ドゴンッ！》

「あー…地味に痛い。てか、床板割れたし」

「自分の罪を数えなさい」

「天に代わって私たちがあなたを更生してあげるわ」

あまりに見事に技が決まったため、強化され硬くなっていた僕の身体が落ちた床板は無残にも割れてしまった。だが、コンビネーションアタックをかましてきた2人は完全にプッツンしているようで、僕と床板の心配をせずに見下すかたちで立っている。てか、2人ともスカート丈短いから完全に見えてるんですけどね。そう思ってぼーっとしていると、横の方から金属の音が聞こえてきた。

「《ジャキン！》2人ともその方から離れなさい。従わない場合は即座に発砲します」

「えっ、ちょっ、アイギスっ！？」

「ま、待って私たちは別にっ」

「警告は1度きりです、早く離れなさい」

真剣な表情でアイギスが指先の銃口を2人に向けると、向けられた公子とゆかりはかなり焦っている。だが、何を言っても聞くつもりは無いのか、アイギスは冷たく言い放ち銃口は向けたままだ。そうして、突然そんな事を言われた2人が動けずにいると、廊下の方からバタバタと走ってくる音が聞こえてきた。

「おいっ、一体何の音だっ」

「すげー音したけど、大丈夫かっ！？」

「っ！？　アイギス何をしている、銃を下ろせ！」

入ってきたのは真田先輩・順平・美鶴さんだ。3人はさっきの僕が床に叩きつけられた物音で、駆けつけたんだろう。しかし、部屋に入るなり床に寝ている僕と、その脇に立ってアイギスに銃口を向けられている公子とゆかりを見て驚いている。そして、驚きながらも美鶴さんが2人に標準を定めているアイギスにやめるように言うと、アイギスは銃口を向けたまま答えた。

「その命令はきけません、この2名は湊さんに危害を加えました。このまま続行するつもりならば、わたしは目標を排除します」

「お、落ち着けってアイギス。状況はわかんねえけど、2人だっ

て別に必要以上に湊を傷つけたりしねえってっ。だから、な？　ゆっくりでいいから、銃口向けんのやめようぜ」

「先ほどの攻撃は常人なら骨折し、内臓破裂している威力です。それでも必要以上に傷つける意思がないと？」

「そ、それは……」

順平がなんとかアイギスに2人に銃口を向けるのをやめさせようとするが、アイギスは視線を公子とゆかりから離さず反論する。それを聞くと言い返せない順平は困った表情で口ごもってしまう。まぁ、確かに必要以上に傷つける意思が無かったかどうかは微妙だ。けど、それは常人が相手の場合。相手が僕であれば無事で済むだろうと思って2人はやったはずだ。

そんな風に考察しつつゆっくり起き上がると。僕はアイギスの銃口に自分の指を合わせて撃てないようにして話しかけた。

「気にしないでいいよ。あんなの遊びだし、僕が避けたのは僕を蹴って公子が骨折するのを避けるためだから」

「しかし、この2名の攻撃はコミュニケーションのレベルを超えています。湊さんの安全を考えるならば、敵と見なし最低でも拘束しておくべきかと」

「大丈夫だって。だから、セーフティ戻して銃口仕舞って？」

「……わかりました。あなたの命令ならば言う通りにします」

アイギスはそう言うと、僕と合わせていた手を離して指先のカモフ

ラージュ用シャッターをしめた。そうして標準から外されると、いままで狙われて緊張状態にあった2人は緊張が解けたのか床にペタンと座り、「ハァ…ハァ…」と荒く呼吸をしている。まぁ、銃口を向けられたら、普通の学生はこうなるよね。そう思いつつ、落ち着かせるように2人の頭を撫でてやる。

そうして事態が一応の落ち着きを見せると、入り口で動けないでいた美鶴さんがアイギスへと近付き。怒った様子で口を開いた。

「……どういうつもりだ、アイギス。いくら湊に攻撃したからと言っても、彼女たちもお前の仲間だぞ」

「わたしの一番の大切は湊さんの傍にいることです。その湊さんを傷つけようとするのならば、その相手はわたしの敵であります」

「お前の仕事はシャドウを殲滅する事だ。同じシャドウと戦う者を守る事もその仕事の中に入っているが、それはみな平等のはず。湊と他の仲間たちは同等の存在に扱え」

「拒否します。わたしは湊さんの安全を最優先に考えます。この思考はパピヨンハートに宿る自我によるものです。これを変更させたければ核の変更を行ってください」

「くっ……」

そう言いきったアイギスの表情は真剣なものだ。パピヨンハートがどんなものかは分からないが、それが今の“アイギス”という人格を生み出している核なんだろう。僕を優先するのを止めさせるなら、それを変更しろということは、自分は絶対にその考えを変えないことを意味する。そう、例え自分がこの“7式アイギス”の身体に宿

れなくなったとしてもだ。

そんな事を言われては美鶴さんも強く言い返せないらしい。それはそうだ、いくら機械に宿るとはいえ1つの心をそう簡単に別のモノと変えられる筈がない。それをした場合、いくら割り切ろうが仲間を目的のために切り捨てたのと変わらないのだから。もしアイギスにそんなことをすれば僕は桐条と敵対するだろう。

「……そんな事をすれば僕はこの寮から出ていきます」

「なんなんだ、君たちは……はぁ、わかった。湊を最優先に考えてもいいが、仲間に銃を向けるのはやめろ。その場合は徒手格闘によって無力化し、拘束するにとどめるんだ。この命令が聞けないなら、アイギスはラボにいてもらう」

「了解であります」

美鶴さんが呆れたような表情で僕とアイギスを見て言うと、アイギスも命令の内容に満足したのか素直に頷いた。けどまぁ、命令って選り好みして良い物じゃないと思うんだけどね。とはいえ、命令される方にも心はあるんだから当然聞けないものあるだろう。そう考えると、やはりアイギスの心は未熟なりにちゃんと自我が形成できているようだ。

そう考えつつ、撫でている間に落ち着いた2人に手を貸して立ち上がらせると、僕は2人に向かって笑顔で話しかけた。

「それじゃあ、床板の修繕を業者に頼むから、君らの方に請求まわしておくね」

「へ…？　何の話？」

「だから、さっきゆかりが僕を背負い投げしたでしょ？　で、そのとき僕が落とされた場所の床板が割れたんだよ。そのままじゃ危ないから今日中に修理させるけど、その代金は君ら持ちってこと」

「「え、え～っ！？」」

なんで2人はそんなに驚いてるんだろう？自分たちが原因で壊れたんだから、それを直すための費用は本人らが払うのが当然だ。それを言われたからと言って、そんなに驚く事はないだろう。そう思っていると、慌てた様子でゆかりが僕に言いよってくる。

「ま、待ってよ。私、この前の旅行で水着買っちゃったから今お金無いのよっ」

「私だってそうだよっ。お小遣いもないし、普段はバイトも出来ないからかなり金欠なの！」

「それで？　別に恋人じゃないんだし、僕が誰と一緒にいても怒られる筋合いないよね？　それなのにベッドのマットはダメにされるわ、床板が割れる威力で投げられるわで可哀想なのは僕の方だと思うんだけど？」

僕がそう言うと2人は「「うう～…」」と何も言い返せずに唸っている。まぁ、公子の踵落としでベッドのマットがダメになったのは本当だ。公子が踵落としをしてから少し時間が立っているがマットが元の平らな状態にならず、ややくの字に折れ曲がったまま。そっちは自分でベッドごと買い換える事にするから費用を請求しないけど、床板の方は罰の意味も込めて本人らが払ってもいいと思うのは

何もおかしくないだろう。

「ベッドは買い換えるから払わなくていいけど、自分たちが壊したんだからこれぐらい払うよね？」

「「……はい、立て替えといてください」」

「無利子でいいよ。お金ができたら払ってね」

「「ありがとうございます…」」

公子とゆかりはそう言うとトボトボと歩きだし、他の者と一緒に部屋を出ていった。てか、一学期最後だってのに朝から随分と騒がしかったな。普通の寮ならこんな事はありえないだろう。そう思って苦笑していると、アイギスが心配そうな顔をして話しかけてきた。

「そう言えば、湊さん。背中は大丈夫ですか？　床板が割れるほどの威力なら、行動に支障をきたすレベルの怪我を負っていてもおかしくないはずですが」

「ああ、あれは魔力で肉体の硬度を高めてたから割れたんだよ。いくら強くても人間みたいな柔らかいものを叩きつけただけで、こんなに割れる訳ないでしょ？　素の人間でこんな割れ方する叩きつけ方すれば、相手が死んじゃうよ」

「そうでしたか、無事で何よりであります」

「心配してくれてありがとうね」

僕はそう言いながらアイギスの頭を撫でると、さっきと同じように

アイギスは不思議そうにしている。こういう親愛の意味を籠めたコミュニケーションというのがまだ理解出来ないんだろう。けどそれは、今後僕らと一緒に居るうちにゆっくりと理解していけばいいのだ。だから、いまは何も考えなくていい。

「よし。それじゃあ、僕も今日は学校行ってくるから留守番お願いね。桐条関係の修理屋呼ぶから大丈夫だと思うけど、ちゃんとこの前の水色の服着といてね」

「わかりました。皆さんが留守にしてる間の警備はお任せください」

「うん。でも実弾はダメだよ？　それは相手も発砲してきたときだけね」

「了解であります！」

しっかりとした返事をアイギスが返してくると、僕はそれを笑って見ながら学校へ行く準備をした。そして、寮を出る前に桐条関係の店へ連絡して修繕を依頼し、僕は学校へ向かったのだった。

放課後――教室

全校集会で終業式をしたあと、僕たちは教室でホームルームを受けた。高校でも夏休みの宿題は出るらしく、宿題のプリントやら課題を書いた紙やらを配られた。そうして、今学期の授業を終え帰る準備をしていると、物理の竹ノ塚先生が教室に入ってきた。

「おう、有里。ちょっといいか？」

「なんですか？」

「部活のことだ。有里は他校に合宿行くの、知らないだろ？　あのな、今後の学校間交流の一環として、今度の7月29日の水曜日から一泊二日で少し田舎の方にある“八十稲羽高校”というとこへ行く。その前2日の月曜と火曜も学校で練習があるから学校に来なさい。私の物理法則で、筋肉が何倍にもなるからね。それじゃ、忘れるなよ」

先生は部活の連絡事項を告げると返事を聞かずに、そのまま教室を出ていった。てか、面倒だな…。八十稲羽に行くのは別に良いけど部活の練習とかさぁ。そう思っているのが表情に出ていたのか、こちらへ振り返っていたゆかりが諌めるような口調で話しかけてきた。

「もう、また面倒だなとかって思ってるでしょ？　確かに疲れるとは思うけど、湊君はなんでも出来るんだからやらなきゃ勿体ないよ？　それに合宿は女子も一緒に行くから、私も参加するしさ。1人じゃないんだし、それなら良いでしょ？」

「別に1人でも良いけど？　てか、そもそも集団行動自体が嫌いなんだよね」

「いっつも誰かしらといるくせにオマエ集団行動嫌いだったンかよ…」

僕らの話を聞いていたのか順平はそう言うと、呆れたような表情をする。まぁそういうけど、集団と小グループは別物だろう。僕は学校や影時間以外では基本的に多くて5・6人程度の集団でしか動いていない。僕的にはそれ以上の人数での活動が集団行動という判断だ。

「数人くらいなら良いんだよ。けど、１０人近くになると面倒って話」

「ふーん、オレっちはクラスの男子とか呼んで、カラオケ大会したりするのも結構好きだけどな」

「まぁ、順平はお祭りみたいなノリ好きそうだもんね。でも、合宿良いなぁ。私も湊君と一緒にお泊りしたいー」

公子はそう言うと身体を乗り出して僕の肩と首に腕をまわし後ろから抱きついて来る。暑いから止めて欲しいんだけど、朝の事もあるし拒否したら拗ねそうなので我慢しておく。そして、公子に言われたゆかりは少し苦笑しながら返事をする。

「それは私に言われてもね。薙刀部も合宿とかしないの？」

「去年はあったけど近場だったな。今年は……そうか、視察名目で同行すれば良いんだ！　早速、理緒に言って道連れにしてこよっと♪」

嬉しそうに公子は言うと、カバンを持ってそのまま教室を出て行ってしまった。残された僕たちは少しの間ポカンとする。

「……視察って生徒もできるのか？」

「無理じゃない？　日帰りならともかくさ」

「てか、理緒を巻き込むのやめてあげなよ公子…」

順平とゆかりが公子の発想自体が上手くいかないだろうと話してい

る中。僕は、どこからくるんだという自信で大丈夫だから一緒に視察のために同行しようと、言い寄られているであろう理緒に同情していた。

夜――辰巳ポートアイランド・裏路地　〜チドリ　Ｓｉｄｅ〜

今日も私たち3人は辰巳ポートアイランドにやってきた。というのも、あの荒垣という男に制御剤を渡すためだ。まあ、それ自体は依頼の前のついでだけどね。そう思いながら、前を歩くタカヤとジンの方をぼーっと見ながら歩いていると、いつもの裏路地に相手は座っていた。それを見つけたタカヤはゆっくり歩いて行くと、声をかけた。

「こんばんは。お元気そうで何よりです」

「……」

「ほれ、薬や」

「……オウ」

相手はジンから薬を渡されると短く返事をしてそれをコートのポケットにしまった。私たちに言われたくないだろうけど、なんで夏でもコートを着てるのかしら?暑くないならいいけど、湊みたいにTシャツに七分丈のズボン穿いたりして涼しく過ごせばいいのに…。

そんな事を考えている間に相手は立ち上がると、去っていこうとする。だけど、タカヤは去っていこうとする相手の背中に話しかけた。

「そう言えば彼ら…また1人、面白い仲間を加えたようですね。…もとい、あれは1人ではなく“１つ”でしょうか」

「別に興味ねぇ」

「……」

興味ねえって言う割には今度はその情報を知っているらしい。前回来た時はあの銀髪の女の情報どころか、私たちの知っている向こうのペルソナ使いの人数とすら知ってる数が合っていなかった。あれから、また向こうの相手に勧誘されて情報を貰ったのだろうか？

私が1人そう考えている間もタカヤは荒垣という男に話し続ける。

「あなたから聞いた事…本当のようですね。彼らは本当にやる気のようだ。まったく嘆かわしい…これでは私たちも、立たない訳にはいきません」

「…っ！？」

「彼らが何をしようと構わない…力の使い道は持ち主が決める事です。しかし彼らは影時間を消すと言っている。それは力そのものを否定する事です。それだけは、何があっても許容できません」

「好きにすりゃいい…」

タカヤの言葉を聞いて少し驚いた顔をしたけど、荒垣という男はそういうと再び歩き出そうとする。だが今度は、ジンが話しかけ再度立ち止まることになった。

「待ちや。お前…どないする気や。知っとるで。戻って来いて、誘いが来とるやろ」

「ムカつくぜ、このストーカー野郎が」

「わしらはアイツらを止める。アイツらに味方する言うんやったら、真っ向カタキ同士や…ええんか？」

「前にも言ったろ。俺にはもう、関係ねえ…」

相手はそれだけ言い捨てるとそのまま《コツコツ》と足音をさせて、駅の方へと去って行った。残された私たちも復讐代行の依頼をするためその場を離れながら話をする。

「彼は強情ですね。まぁ、折角得た力を命を縮めてまで抑えているわけですから、ただ何も考えずに毎日を生きているような人間に比べたらマシですが」

「確かに根性入っとるとも取れますが、所詮は表側で生きてきた人間や。自分が恵まれた環境におるからそんなん出来とるってのをまるで理解してませんわ」

「フフッ…確かに。目的に必要な力を得るために命を削っている私たちに対して、あの方は持っている力を捨てたくて自傷行為にも似た事をしている。ただ、責任から逃げているようにしか見えませんね」

ジンの言葉を聞いてタカヤは楽しそうに笑っている。タカヤは、力を持つ者はその力の大きさに応じて、同じだけの責任を負わねばならないと普段から言っている。その考えにジンも賛同しているみたいだから、あの荒垣という男の行動は少し許せないのだろう。私に言わせればどうでもいいって感じだけどね。

「しかし、彼が戻るとすれば向こうは１０人ですか」

「男４人に女６人。ゆーても、男の方の内１人は桐条の研究員やった幾月っちゅうやつですから、戦力だけで言えば実質９人ですわ。そやチドリ、あいつらの力どんなもんか分かるか？」

「……最近増えた機械の人形の力は分からないけど、機械だし物理戦闘は普通の人間より強いんじゃない？」

ジンに訊かれ私が答えると、タカヤとジンはそれはそうだなと納得している。そして、この前の満月に感じた中で敵戦力とこちらの戦力を分析して順位付けしてみて、それを聞いている２人に伝えるため話を続ける。

「個人の能力で言えば、あの銀髪の女は未知数過ぎて分かんない。それを除けばタカヤが一番強いと思う。次点であの荒垣って男かな」

「そもそも召喚もせんとスキル使えるっちゅうのが意味不明やったしな……。んで、他はどうや？」

「次が前に外で待ってた女の、何度も建物に出たり入ったりしてた方。もう１人外で待ってて途中で建物に入った女も向こうでは強い方だけど、私がその２人の間くらいに入る感じ」

「もう１人というと桐条の娘ですか。自分たちが始めた研究のわりに実力はそれほどでもないんですね」

私の分析を聞いてタカヤはそんな風に感心している。まぁ、確かに出来そこないの私たちの方が平均的な力が上というのはとんだ皮肉

だ。ペルソナが心の力で強くなるというなら、平凡な日常を生きてきたやつらと、地獄を見てきた私たちでは基礎が違うというわけだ。

「その桐条の娘の次が拳で戦ってた方の男。ジンはその次ね。それから中にいたもう2人は同じくらいだけど、男の方が少し弱い感じ。それと外でずっと待機してた女は完全に非戦闘員。私みたいな感知タイプの力を持ってるけど、戦闘力は有してないみたい。感知した限りだとだいたいこんな感じよ」

「ちょー待っていっ、わしはもっと上やろ！」

「物理戦闘も考慮した結果よ。はっきり言うと向こうは身体能力だけならこっちより上だもの」

私がいった戦闘力の順位に納得がいかず抗議してきたジンに言い返すと、ジンは「クソッ、体力馬鹿どもが…」と負け惜しみを言っている。私はそれを無視していると、ふと気付いたような表情でタカヤが口を開いた。

「もし仮にの話ですが、私たち以上の何かを抱えている湊が力に目覚めたとすれば、どれほどになると思いますか？」

「あん？　そりゃ、運動神経もええし、力も強いんやし。かなり上の方ちゃいますか？」

「……チドリはどう思いますか？」

タカヤは口調は楽しそうだが、なにかを探るような視線を私に向けてそう尋ねてくる。そんなことを聞かれても答えられるはずがない。湊は力に目覚めていないし、一般人にしても適性が低すぎるのだ。

あれでは“ＩＦ”の話をする以前の問題だ。だけど、タカヤはきっとそんな答えを求めているわけではないのだろう。私が答え辛い事を理解してあえて聞いて来るのは正直ムカつく…。

「……未知数。あの銀髪の女に次いで強くなるかもしれないし、直接戦闘タイプじゃないかもしれない。だから、何とも言えない」

「フフッ、そうですね。少し意地の悪い質問をしました。いまのことは忘れてください。では、そろそろ目的地へ行きましょう。ターゲットを確認しておきたいのでね」

言いながら少し歩くペースを上げたタカヤ。私はその後ろを黙ってついて行きつつ、湊が力に目覚めた場合を考え複雑な気持ちで歩いたのだった。

――ラウンジ　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

学校帰りに家具を売っている店に行って、前よりも少し大きいサイズのベッドを買ってきた。店の人にはいつ送りますかと聞かれたが、僕は手で持って帰りますといって本当に途中まで手で持って帰って来ていた。まぁ、誰もいない場所でちゃんと腕輪に入れたけどね。そうして、ついでに夕食も済ませてから寮に帰るとラウンジには天田少年がいた。

「…あ、おかえりなさい！　今日からここでお世話になる、天田乾です。皆さんの邪魔にならないようにするので、どうか宜しくお願いします！」

「やあ、月光館学園・巌戸台分寮へようこそ。ここでは僕がルールだからちゃんと覚えておいてね。僕がカラスは白色だと言えば、君も白だと答えるんだ。それが守れなければ、出来るまで順平と一

緒に寝かせるからね」

「よ、よくわかりませんが、高校生ともなると規則に厳しいんですね…。わかりました、郷に入れば郷に従えといいますし、気をつける事にします」

「うん、良い心がけだ。分からない事があれば真田先輩に聞けば教えてくれるからね」

「はい、ありがとうございます」

天田少年はしっかりと挨拶してお礼まで言ってくると、僕はその横を通って自室へ戻ろうとする。だが、寮生は全員ラウンジにいたため僕と天田少年のやり取りを見ており、そのことについて突っ込みを入れてきた。

「ちょっと待て！　なんで俺と一緒に寝ることが罰ゲームみたいになってんだ！」

「そんな事はどうでもいいが。有里、お前は小学生になに嘘を教えているんだ！」

「順平と寝る事が罰ゲームなのは変えようのない事実だけど、どこが嘘なんですか？」

「いつからお前がここのルールになったんだ。この寮にはこの寮の寮則をいうものがある。ルールと言えばそれくらいで、あとはお互いに気を遣って生活するくらいだ。個人がルールなんて独裁政治的なものはない」

怒ったような言い方で突っ込みを入れてきた順平には適当に返して、真田先輩には自分の発言のどこが嘘なのかを聞き返した。すると、真田先輩は何を馬鹿な事を言った感じに返してきた。それを聞いていたテーブル席の方でお茶を飲んでいる女性陣5人は、アイギスを除いて複雑そうな表情をしているがどうしたんだろうか？そう考えつつ僕は、冷たい表情の仮面を被ると落ち着いた口調で口を開いた。

「……アイギス、この男を拘束し女子トイレに放り込んでおけ」

「Ｙｅｓ，　ｍａｓｔｅｒ．」

「っ！？　ま、待てっ。一体なんのつもりだ！？　こ、こっちにくるなアイギス！」

「大人しくしてください。抵抗しなければ、無駄に傷付くこと無く終了しますから」

僕が命令すると、アイギスは席を立ちじりじりとソファーでグローブを磨いていた真田先輩へと近付いて行く。その様子から相手が本気だと判断した真田先輩はグローブと手入れの道具をテーブルに置くと急いで立ち上がり、後ずさりを始めた。

そんな様子を男子2人はハラハラ、女性陣は気の毒そうに、そして僕は冷たい表情の仮面を貼りつけたまま見ていると。アイギスがついに仕掛けたっ。

「目標を拘束しますっ！」

「クソッ、そんなことされてたま「先輩後ろっ！」なにっ、いや、しまった！？」

「覚悟ッ」

「ぐわぁっ！！」

アイギスが走って近付こうとすると、先輩はソファーから離れ走って逃げようとした。なので、その隙をついて大声で注意を逸らすと、見事にその隙をつかれアイギスに倒されたという訳だ。そして地面に倒れた先輩に近付くと、アイギスはそれを肩に担いで女子トイレへと向かっていく。

「や、やめろっ。本気でやめろっ！」

「わたしはただ湊さんの命令を実行しているだけです。中止の決定権はありません」

「有里ッ、アイギスにやめるように言えっ！！」

肩に担がれたまま先輩は暴れるが、相手は機械。多少暴れたところでホールドが解かれる訳もなく、先輩はかなり必死になっている。だけど、まだ自分の立場というものが分かっていないらしいな。そう思い僕は冷たい表情のまま薄く笑い、さらに指示を出す。

「ちゃんと女子トイレの奥に置いて来るんだ。その間にカメラを構えておくからな」

「了解であります。トイレから出るのはわたしが先の方が良いですか？」

「勿論だ。アイギスが出てきて、すぐに後を追って出てきた変態

という構図が望ましい。それだけを見れば、見た者は『きっとアイギスが来るまでずっと待機していたんだろう…』と思う筈だからな」

「ドン引きです！　…で、あります。他の方も覗かれないようご注意ください」

「俺がそんな事をするわけないだろうがっ！！」

アイギスが女性陣へと注意を促すと、真田先輩は怒鳴るように反論した。やれやれ、トイレの前まで行ってまだそんな言い方が出来るとは、真田先輩のプライドの高さはかなりのものだな。そんな風に呆れつつ、この冗談に飽きた僕は普通の表情に戻ってアイギスに話しかけた。

「アイギス、それもういいから僕の部屋行こう。帰りに新しいベッド買ってきたからさ」

「もう真田さんをからかうのは終わりでありますか？」

「うん。流石に、男が入ったトイレを使うのは女性陣も少し抵抗あると思うからね。ゆっくり床に置いてあげな」

「わかりました。お疲れ様であります」

言いながらアイギスはゆっくりと先輩を床に置くと、階段の前まで移動していた僕の元へ歩いてきた。一方、床に置かれた方は膝をついて「ハァ…ハァ…」とかなりお疲れのようだ。ずっと暴れてたし無理もないけどね。そして、僕は隣まできたアイギスをお姫様抱っこで抱き上げると、天田少年に向かって笑顔で口を開く。

「というわけで、場合によっては過激な罰も与えるから注意してね」

「わ、わかりました。気をつけます」

「よろしい。じゃあ、僕はアイギスと一緒に部屋の模様替えしてるから。用があったら来てね」

「はい、これから宜しくお願いします」

引き攣った笑顔で挨拶してきた天田少年から視線を外すと。僕は言った通り、アイギスを抱きあげたまま自分の部屋へと向い。古いベッドは腕輪に仕舞って後で捨てることにして、新しく買ってきたベッドを置くなど模様替えをしたのだった。

第四十四話（後書き）

この作品のアイギスは湊優先率が原作よりも高いです。公子をおさえてトップに躍り出るくらいに。そして、この作品での順平・真田・ジンは不遇率高いです。でもまぁ、原作だとイベントシーンくらいしか見てませんからね。主人公がメチャクチャな人間だったら日常はきっとこんなもんだったはずです。

あと、五章設定にも書きますが、チドリの言ってた戦闘力順位は『有理、タカヤ、荒垣、公子、チドリ、美鶴、真田、ジン、ゆかり、順平』の順って意味です。そして、ストレガのメンバーは荒垣さんが前に言ってた男女3人ずつを『真田、順平、幾月、美鶴、公子、ゆかり』と判断したため、まだ湊の存在には気付いていません。

余談ですが、アイギスの『ドン引きです！』は中の人ネタです。気になる方はゴッドイーターをプレイしてみてください。

第四十五話　前編（前書き）

今回は女主人公の方にある部活の合宿イベントです。合宿先はペルソナ４の舞台である稲羽市で、中学生時代の天城雪子も出ます。ただし、たまに勘違いしている人がいますが、交流先は『八十稲羽高校』でＰ４の主人公らの学校は『八十神高等学校』で別物です。

自分の住んでいる場所も、同じ市内に高校は７つありますから。別に同じ市内に２校あってもおかしくないですよね。

第四十五話　前編

7／29（水）
朝――駅前
夏休みに入り、今日で4日目。昨日と一昨日は学校で弓道部の練習に参加し、1日中走っていた。というのも、別に弓を射る気分じゃなかっただけなんだけどね。おまけに途中で薙刀部の2人がきてそっちで練習試合形式で公子の実力向上を図っていたから、結局一度も弓に触る事なく合宿の日を迎えたというわけだ。

いま自分たちがいるのは駅前。ここに集合して目的地の方まで電車で向かうんだけど、なぜか本当に公子と理緒がやってきていた。まさか視察が許可されたのか？

「公子と理緒もくるの？」

「まぁね、公子に連れられて職員室行ったら許可されてさ。視察目的っていうけど、そっちの基礎練に参加させてもらう以外は遊びだよ」

「そうなんだ。まぁ、田舎だけど良い場所だよ。空気も都会と違って綺麗だしさ」

「え？　湊君行ったことあるの？」

2人に向かって僕が合宿先の話をすると、公子がキョトンとした様子で聞き返してきた。僕はそれに笑顔をみせると返事をする。

「公子らと暮らす前に一回ね。その時は遠縁のおじさん家族と一

泊で行ったけど、おじさん達がずっと偉そうにしてたから旅館の人たちには悪い事したよ」

「そうなんだ……。じゃあ、暇な時間があったら案内とかお願いしてもいいかな？」

「そんなに知ってるワケじゃないし、何年も前だから案内できるか分からないけどね。それでも良いなら喜んで」

「うん、ありがとう！」

公子に案内をお願いされてそれを了承すると、公子は嬉しそうに笑っている。その隣では理緒も笑顔になっているし、今回の合宿はそれなりに楽しくなりそうだ。僕らがいない間のこっちの守りは美鶴さんをリーダーに真田先輩・順平・風花・アイギスが頑張ってくれる。みんな強くなってるし、アイギスも加わったので戦力は充分だ。

そう思い安心しながら、電車がくるのを待っていると。近くに立っていた宮本が僕に気付き話しかけてきた。

「お、おい有里。お前、本気でその格好で行くのか？　お前、これ部活の合宿だぞ？」

「分かってるよ。だから、こうやって夏用の勝負服で来たんじゃないか」

「いや、勝負服って遊ぶ気満々じゃねえか……」

宮本はそんな風に僕の服装へと文句をつけてくる。言われた僕の服装は、上から『麦わら帽子・サングラス・半袖アロハ・ハーフパン

ツ・サンダル』といった感じだ。もちろん、アロハは素肌に着てボタンは1つもしていない。これで夏も涼しく過ごせるって作戦だ。それを見せつけるように立っていると、突っ込みを入れてきた宮本の横から結子が感心したような声をあげた。

「うわぁー、湊君の腹筋すごいね。ムキムキじゃないのに絞り込まれてるって感じで、6つに割れてるじゃん」

「あ、ホントだ。合宿行く服装じゃないけど、確かにすごいね」

結子と一緒にゆかりも現れると、僕の腹筋をみて驚いている。てか、別に身体自慢でこんな服装してるわけじゃないけどね。僕はあくまでコーディネート全体で勝負しているのだ。そのことに苦笑しつつも、2人に返事をすることにする。

「別に普通に運動してたらこうなっただけだよ。てか、ゆかりは何度も僕の身体見てるでしょ？」

「「「…えっ？」」」

「なっ、ちょっ、誤解されるような言い方しないでよっ！」

その場にいた公子とゆかり以外の3人が驚いた表情をすると、ゆかりは顔を赤くしながら焦った様子で僕に怒ってくる。別に僕は間違ったことは言っていないのに、怒られる理由が分からないんだけど？そんな風に相手の言葉を不思議に思いながら、僕は口を開いた。

「なんで？　別に変なこと言ってないじゃん」

「知らない人が聞いたら変な想像するでしょっ。……いい？　湊

君が言った私が身体を見たとかってのは、湊君は他の人が居ても構わず着替えたりするからだからね？　絶対に誤解しないでよ？」

「お、おお」

「う、うん」

ゆかりが真剣な表情で驚いていた人に向かって言うと、相手はその迫力に少し気圧されながら返事をした。そんな様子を眺めながら時刻を確認するとまだ電車がくるまで時間があるので、さらに話を続ける。

「ってか、この前一緒に海に行った時にも見てると思うんだけどね。背中におぶりながら泳いだりもしたし」

「それはそうだけど、順平じゃないんだし。異性の身体をマジマジと見たりはしないわよ」

「そうなの？　公子は結構思いっきりみてたけど」

言いながら公子の方を向くと、公子はニッコリと笑いながら返事をしてくる。

「私のそれは湊君限定だからいいのよ。他のじゃがいも達に興味無いし。逆に聞くけど、湊君は私たちのことあんまり見てなかったよね？」

「まぁ、見たところでって感じだしさ。似合ってたし、可愛いとか綺麗とかって感想はあるけど。見慣れたら普段着と変わらないよ」

「それはそれでどうかなって思うけど…。でも、湊君って他の男子と異性との距離感違うよね。この前も廊下で出会っただけで挨拶で頬にキスしてきたし。その後は窓から飛び降りて桐条先輩に話しかけに行ったりさ。なんていうか、清々しいほどに下心がないって言うの？」

結子が最初呆れたようにいいつつ途中から学校での僕の行動を考察すると、他の女子たちも何故か納得して頷いている。確かに下心は無いけど、そもそも距離感なんて別に意識していない。それを他の男子たちと違うと言われてもね。

「異性と言っても友達だからね。女性として扱うけど、そこに邪な想いを混じらせることはないよ。公子らにも言ったけど恋人とか作るつもりないし」

「ふーん、湊君かなりモテるのに勿体ないね」

「そうでもないよ、いまの友達って距離は気に入ってるから。皆も変に異性として接するより、今みたいな友達の方が気楽でしょ？」

結子の言葉に返事をすると、今度は理緒が気遣うように言ってきた。僕はそれに苦笑しつつ普通の笑顔に切り替えて尋ねると、公子が急に手を挙げた。

「いいえ、生殺し状態です！　恋人を作る気がないのは分かったから、早く私と婚約してください！」

「……嫌だよ」

「なんで？　自分で言うのもなんだけど、顔は別に悪くないし。

家事だってちゃんと出来るよ？　スタイルだって今はピンクにも負けてるけど、将来はお母さんみたいになる予定だし。かなりの優良物件だよ？」

「いっつも思うけど、なんで公子の比較対象は私なのよ……。てか、私だって普通に成長してるんだけど？」

公子にピンクという呼び名で比較対象に出されたゆかりは、相手に呆れながらも自分のスタイルもいまだ成長していることを伝える。まぁ、僕にはどうでもいいんだけど、本人たちにはスタイルの良さでなにかしらあるのだろう。

「その成長の上限が私はかなり高いもん。お母さんは桐条先輩よりスタイル良いんだから」

「母親がスタイル良いからって娘までスタイル良く育つかなんて分からないじゃない。ってか、私の母親も別にスタイルは悪くないわよ」

「ゆかりはこんな事言ってるけど、湊君はどっちの方が好み？　ポイントじゃなくてトータルで判断してね」

「……4人の中だと、理緒が一番スタイル良いよね」

「「「「えっ？」」」」

僕が公子の質問に答えると、聞いていた4人は一瞬ポカンとした。そしてすぐに視線を理緒に移したかと思うと、公子・ゆかり・結子の方も見ていく。そして、僕の言ったことが事実だとわかると、理緒は顔を赤くし、結子は少し残念そうに。そして、自分たちの話題

だと思っていた公子とゆかりは片や恨めしそうに、片やしょんぼりといった表情になった。

「さて、電車もきたしそろそろ行こうか」

「う、うん」

「はーい…」

「むぅ……」

「はぁ……」

そうしてそれぞれの返事を聞きつつ電車に乗ると、僕たちは稲羽市にある“八十稲羽高校”へと向かった。

昼間――八十稲羽高校・練習場

電車に揺られ、部活の仲間たちと交流先の他校へとやって来た。“八十稲羽高校”ちなみにこれは“やそいなば”と読む。今日明日と、この学校の生徒らと合同練習の予定だが、公子と理緒は基礎錬には参加するがそれはランニングや筋トレだけだ。薙刀部があるかは不明だが、今回は弓道部の交流なのでしょうがない。

そうして、高校についた僕たちは更衣室で練習着に着替えると、両校それぞれで整列した。

「「「「宜しくお願いしまーす」」」」

「「「「宜しくお願いしまーす」」」」

お互いにそうやって挨拶をすると、竹ノ塚先生と向こうの高校の顧問の先生は1時ごろまでウォーミングアップをしておくよう言い残して、職員室へと去って行ってしまった。なので、両校の部長の指示で準備体操を終えると、ウォーミングアップのメニューの話になった。

「まずは基礎練からだね。せっかくだから、ランニングは山まで行こうか。ウチのほうだと高低差が無いから、いい練習になりそうだよね」

「それはいいけど……なんで湊君は着替えてないのよ」

「体操服と大差ないじゃん。それに帽子も被ってるし、急な日光にやられないようサングラスかけてる僕の方が運動向けだと思うけど？」

「相手の高校の人らが注目してるのよ……」

結子とゆかりに言われて、八十稲羽の部員らの方を見てみると。確かに僕を見てヒソヒソと言っている人たちがいる。だが、靴を履き替え上をTシャツにすれば立派に運動着と言えるし、別にとやかく言われることないと思う。まぁ、着替えないけど。

「よし、『第1回学校対抗ランニング大会』を始めようか」

「…交流会って、交流するんじゃないの？　ナニ、ランニング大会って…」

「ふむ、教えてあげよう。学校対抗ランニング大会とは文字通り山まで走って帰ってくるという単純なものだ。しかし、ただ走った

だけではつまらない。そこで学校対抗というわけさ」

僕が発案したイベントを相手の学校の生徒は上手く理解できていないようなので、説明すると途端に両校の生徒が僕に注目してくる。部長さん達もなにをするか考え始めていたようだが、ここまで注目されたのなら、最後まで言って僕の意見を押し通すとしよう。

「それって勝負して意味あるんですか？」

「あ、負けたほうは、片付けと清掃…で、どう？　賭けるものがあったほうがホンキにならない？」

「えー、結子はマネージャーだから走らなくていいけど、私ら練習後に片付けまでするって結構きついんだよ？」

向こうの生徒が尋ねてくると、思いついたように結子が内容を足した。それに対し、ゆかりはあまり乗り気でないようだ。確かに疲れた状態で片付けや清掃を全部するのはキツイと思う。でもそれがどうした？そう、それが嫌なら勝てばいいだけだ。そう思ってると、結子がゆかりに聞き返した。

「あれ？　ダメ？　勝ちにこだわる…って、こういうの無いと、難しくない？」

「いやそうだけど…。てか、私らで決めて良いことじゃないし」

「それって私らも参加して良いの？」

「さぁ？　でも、基礎錬しか参加できないし。やるなら参加するしかなくない？」

2人が話している横で公子と理緒も話をしているが、勿論やるなら参加させるつもりだ。勝敗の決め方は考えていないけど、もし上位に入った人の人数で勝負とかなったら2人もかなりの戦力になるからね。そう思いながら、僕は勝負の方法を考えると口を開いた。

「よし、体調不良者とマネージャーは折り返し地点とスタート・ゴールでちゃんと走ってるか見といて。それで勝敗だけど、どっちが多く上位10人に入れるかにしよう。勿論、それだけだとゆっくり走る人がいるだろうから。男女にそれぞれに時間を設定し、それ以内に帰ってこれなかった人は筋トレ5セットってことで。そして、負けた方は練習後の片付けと清掃ってことでいこうか」

「うわぁ…やりたくないなぁ…」

「なに？　誰だ、いま文句言ったやつは！　それでは条件を足してやる。上位10人に入り尚且つこの服装のまま走る俺に勝った男子には、公子やゆかりとの合コンをセッティングしてやろうっ。そして、女子には俺が私財を投じて限定品を取り寄せてやる！　スイーツだろうが、海の幸だろうが好きな物を選ぶが良いッ」

「そ、それって同じ学校のオレらも岳羽さんらと合コンできるのか？」

「愚問だな。相手側には悪いが貴様らが勝ったなら、向こうに帰ってから好きなメンツを集めてやる。女子も合コンが良いなら真田先輩などを呼んでやろう。なお、男女同時スタートでは女子が不利なため男子は10分遅れでスタート。そして、マネージャー諸君には大会運営の労を労い、この街で評判の店のスイーツをさしいれるので心配しないでくれ。店はそちらの方が詳しいだろうから頼むぞ」

俺がそう言い終わると同時に両校の生徒らのやる気の声が爆発した。向こうは田舎のため刺激が少ないのか、合コンやネットで見た限定スイーツの話題で盛り上がり。こちらも男子は自分が呼んで欲しい女子の名前を言ったりしている。そして、女子は女子で合コンや欲しい物の話で盛り上がるなど、反応は同じようなものだ。

「勝てば合コン、勝てば合コン！」

「これは負けられない…！」

「見てるだけでスイーツとかラッキー♪」

そんな風に喜んでいる者たちを見て、満足していると急に後ろから頭を叩かれた。その衝撃で帽子が飛びそうになったので、手で押さえてから後ろを振り向くと。ゆかりと公子が少し怒った表情で立っていた。

「どうした？　何か不満があるのか？」

「なんで俺モードになってるか分かんないけど、なんで勝手に人を勝ったときの景品にしてるのよ」

「私たち一言も良いなんて言ってないんだけど？」

「なんだその事か。……安心しろ、俺の負けは絶対にあり得ない。魔力は使わないが、手加減する気はないからな。お前たちは全力で走り勝った時になにを貰うかでも考えていろ」

自信満々に言うと2人はそれもそうかと納得してくれた。女子の方

では俺に勝つという条件を付けていないため、きっとゆかりと公子は上位１０人に入れるだろう。なにを注文されるか分からないが、この前アクセサリーは買ってあげたので、今度は財布やカバンなどを要求してくる気がした。

――スタート地点

コースの説明と折り返し地点へのマネージャーの配置が終わると、まずは女子がスタート地点についた。往復で１０キロ程度なので遅くても１キロ５分もかからないとすると、早ければ３０分から４０分で帰ってこれる筈だ。そして、制限時間を決めるとついに女子がスタートした。

「いくよー。よーい、スタート！」

マネージャーが声をかけると、女子は一斉にスタートした。最初は集団で走る事になるが、すぐに公子たちが先頭に躍り出るだろう。そう思いながら待っていると、結子が話しかけてきた。

「湊君、ホントにそれで走るの？」

「帽子とサングラスは外すけど、他はこのままで走るよ」

「なんだかんだで、ウチの男子って体力あるし足も速いよ。流石にサンダルだとキツイと思うけど」

「まぁ、見てなって。それじゃあ、そろそろ時間だし預かっといてね」

「うん。けど、ホント大丈夫かなぁ…」

そんな結子の心配をよそに僕はスタートラインから少し離れた場所で足場を整える。直線距離では僕のいる場所の方が遠くなるから、集団に入っていなくても誰も咎めたりはしない。そして、近くに落ちていた大きめの石を踏んで地面に埋めると、それをスターティングブロックの代わりにして僕は構えた。そう、集団に埋もれないために距離が遠くなっても、１人でスタートした方が良いのだ。

「もうすぐ１０分でーす。それじゃあ、男子の方もいくよ。よーい、スタート！」

「「「うぉおおおおっ！！」」」

「全力で行くッ」

そうして、雄叫びをあげながらスタートした男子たちから離れ、僕は最初から短距離走型のスタートを切った。サンダルとは言ってもビーチサンダルではなく、踵や足首も止めるとこがついているタイプのサンダルだ。走るにはなんの問題もないっ。

「っ！？　速ぇっ、最初から飛ばし過ぎだろ！？」

「集団から抜けてたのはスタートダッシュのためかよっ」

「クソっ、合コンのために田舎育ちの根性見せてやるぜ！」

後ろの方からそんな声が聞こえてきたが、僕はそれらを全て無視して全力で走り続けた。

――ゴール地点　〜Ｎｏ　Ｓｉｄｅ〜

女子のスタートから既に３０分が経過していた。その間も双眼鏡や

らを使ってマネージャーたちはマラソンの経過を見ていたのだが、先頭集団は後続者らをかなり引き離しており。はっきり言って独走状態に近かった。そして、ついに先頭の者がグランドへと帰ってきた。

「待て卑怯者ー！！」

「卑怯もなにもないよっ。勝手にスピード緩めたのそっちだし！」

「あ、あんたら…どんな体力してんのよ…」

そんな風に騒がしくグランドへと入ってきたのは3人。先頭は前を全てあけたアロハシャツの男。そしてその数十メートル後ろを走る2位は茶色の髪を後ろでまとめている女子。そのさらに後ろで疲れた表情で走っている3位は、体操服の袖をまくってタンクトップのようにしている茶髪の女子だ。アロハシャツの男は何故か2位の女子に文句を言われているようだが、両者の差は最後まで埋まらず、ついにゴールした。

「やったー、僕がいっちばーん！」

「湊君があんなこと言わなければ、私が勝ってたかもしれないのにー」

「いやっ、それ以前に、なんでっ、息切れしてないのよ…？」

タンクトップの女子改め、3位でゴールしたゆかりはそう言って湊と公子を見て、本気でゲンナリしている。一方、言われた2人のうち湊はずっとスタートダッシュのペースのまま走り続けていたにも拘らず、多少汗をかいているだけで息の乱れは無し。そして、公子

の方はというと、普通に汗をかいて軽くだが息を乱している程度だ。

「なんでって言われてもね。ある意味、僕の体力は無尽蔵だから」

「私もそんな感じかな。あのペースでこの程度の距離なら体力配分の心配しないで走れるもん」

「うぅ…、こっちはかなり頑張ってついて行ってたのにぃ」

ゆかりはそんな風に2人の理不尽なまでのハイスペックぶりに文句を言うと、グランドに座り込んでしまった。

――グランド　｛湊　Ｓｉｄｅ｝

ゆかりが座り込んでしまったので、僕らも近付いてその横に腰を下ろした。すると、結子がタオルを持って歩いてきた。

「3人ともお疲れー」

「はぁ、サンキュー結子。ホント疲れたよぉ。折り返し地点について少し走ってたら、短距離走かってペースで走ってる人もいるしさ」

「しかもそれからすぐに追い付いて来たかと思ったら、走ってる私たちのほっぺをプニってくるの。いくら湊君でも勝負で負けるのは嫌だから、足とか顔とか狙って攻撃したんだけど全部軽業で走りながら避けるし…」

「おまけに最後は『今夜、身体を清めて部屋で待っとけ』とか耳元で呟いて来て。思いっきりこけそうになったわよ……」

タオルを渡してきた結子にゆかりと公子が愚痴ると、相手は「はは…」と苦笑いしている。まぁ、最初は邪魔する気なかったんだけど、追い付いちゃうと暇だったんだよね。男子の方は前半にかなりのハイペースで引っ張ったから、折り返し地点につく頃にはかなりの体力を消耗しているはずだし。上位１０人は僕以外全員女子になる予定だ。

「あ、理緒が帰ってきた。ってことは、理緒が４位だね」

「お疲れー」

「ハァ…ハァ…、さ、３人ともっ、速いね…ハァ…」

「あー…私はかなり頑張ってやっとって感じだったけどね。公子はともかく、ずっと短距離型のペースで走ってた誰かさんはホント変態だわ」

みんなで戻ってきた理緒を迎えると、理緒に返事をするついでに僕の事を貶してくるゆかり。そうは言ってもあれが長距離型の走りなんだからしょうがないじゃないか。短距離型の走りだったら、１００メートルで１０秒切ってるんだし。１キロを１０００秒、１０キロを１０００秒の１６・７分で走れることになる。今回は２０分強で走っているのでそう考えたら抑えてる方だ。

「みんなが合コンしなくて良いようにって頑張ったんだよ」

「それなら最初から人をだしにして企画作らなければ良かったでしょ？」

「これも合宿の思い出になるじゃん。僕は参加者に楽しんでもら

おうとしただけだよ」

「いやぁ、男子はみんな死にそうな顔で走ってたし。あんまり良い思い出じゃないと思うな」

「それもわざと。僕以外は女子だけが上位独占できるようにって、後半ばてるの確実なペースで引っ張ってやったから。そろそろ良いかなってとこで一気に引き離したら『こ、ここでさらにペース上げれるとかふざけんなよ！』って言ってたし」

僕がそう言うと４人は「うわぁ…」と言って男子たちに同情している。いや、僕が悪いみたいな事になってるけど、ウチの学生の中には何人か体育を一緒に受けている人間もいたからね？そいつらは僕の体育の成績しってるはずだし。それでも参加してきたんだから、既に自己責任の領分だ。

きっと勝てた場合はここの４人は呼ばれただろうし。女子部の部長さんとかも呼ばれたかもしれない。合宿に来て疲れているのに、そんな事に付き合わせるのも悪いから頑張ったのだから、文句を言われる筋合いはないだろう。心の中で１人そう思っていると、さらに後続の女子グループが帰ってきた。

「あ、もう上位１０人決まるね」

「うちがすでに４人決まってるから、あと２人入れば勝ちだね」

「んじゃあ、とりあえず僕は上位１０人に連絡先だけ聞いて来るよ。それとマネージャーの差し入れの件も」

「いってらっしゃい。浮気しないでね～」

公子は立ちあがってゴールした人らの方へ向かう僕へそう言うと、笑顔でひらひらと手を振ってくる。それに思わず苦笑すると、先に八十稲羽の子にお店の話をきいてから、呼吸の整った入賞者へ連絡先を聞いて回ったのだった。

夕方――高校前

マラソンの後、疲れた様子で帰ってきた男子らにお疲れ様という声をかけて、本格的な合宿を行った。黒紅以外の弓は前に部活見学で1度使っただけなのでいけるか不安だったが。特に問題なく的に当て続けた。そして、合宿を終えると僕たちはいま高校の前にいる。そう、勝負は6対4でうちの学校が勝ったのだ。そのことを振り返りつつ、結子が笑顔で話しかけてきた。

「いやぁ、最後2人駆け込みだったけど、勝てて良かったよねぇ」

「1~4位と9・10位だもんね。慣れもあるのかも知れないけど、体力とか地力だと向こうの人たちの方が上って感じだったね」

結子にそうやって笑顔で返したのは理緒。マラソンの後、公子と理緒は筋トレなど一緒に出来るものだけ参加して、途中からは僕と八十稲羽のマネージャーの子1人と一緒にケーキの買い出しをしていた。まぁ、こっそり向こうでお茶をしてから帰ってきたのは、向こうのマネージャーさんも共犯という事で秘密にしてある。

「けど、帰ってきた男子らホントに悲惨だったよね。合コン目的じゃない人も勝負だからって参加したのに、集団にペース引っ張られちゃって途中でばてたみたいだし」

「おまけに湊君がトップでゴールしたって聞いたら、『化け物か

よ…』って本気でゲンナリしてたしね」

「あの反応は普通だと思うわよ？　アロハにサンダルなんてふざけた格好してるんだもん。真剣にやってるのを馬鹿にされてるみたいで腹が立つけど、疲れてるせいで怒る気力もないってね」

呆れた表情でゆかりはそう言うと、僕の事をジト目でみてくる。ってか、馬鹿にされてるような気になると言われてもね。相手の言ってる事に少し困りながらサングラスの位置を直すと、僕はゆかりに向かって口を開く。

「合宿の説明では服装は原則自由。ただし、動き易い服装である事って書いてたし。僕はなにも規則は破っちゃいないよ」

「あぁ、権力を持たせちゃいけない典型ってこういう人間を言うのね。本当なら規則違反なのに、それを逆手にとって実力でカバーしてるから問題ないと認めざるを得ないってね……」

ゆかりがそう言うと、公子と理緒まで困った表情で話しに乗ってくる。

「うちの学校の特待生制度もそれだよね。条件である成績は桐条先輩と一緒で満点トップでクリアしてるから。授業の出席義務もなし、他の生徒の邪魔しない限り先生たちも注意出来ないし。学校の母体である桐条グループの娘も湊君に甘めだから、窓から飛び降りようが『こらこら、危ないぞ』で済むっていうね。普通の学校ならとっくに退学だよ」

「桐条先輩が甘いっていうのは大きいよね。あの人って自分にも他人にも厳しいじゃない？　それなのに、湊君と居る時は子供相手

にしてるみたいに穏やかな表情で笑ってるもんね。お姉様って慕ってる後輩とかが騒いでたよ。最近だと、『お姉様の寵愛を一身に受ける弟君』とか『唯一の安らぎを得た女帝』だっけ？　そんな風に呼ばれてるよね」

「ああ、はいはい、そんなのもあったね。…けどさ、最近だとあっちだよ。ほら、“謎の美少女転校生”。あれに何人もの男子が引っかかって、ゆかりらみたいにファンクラブまで作られたらしいじゃん」

理緒らの話を聞いていると、結子も楽しそうに話題を振ってきた。けど、謎の美少女転校生ってもしかして、『奏　有理』のことか？その前の、『お姉様の寵愛を一身に受ける弟君』とか『唯一の安らぎを得た女帝』の話も聞いた事なかったし。やけに僕だけ学校内の情報に遅れてる気がする…。別に流行とかは気にしないけど、会話に入れないのは寂しい。そう思い、僕は尋ねることにした。

「……ねぇ、そういう情報ってどこで聞くの？」

「え？　そういうのって噂とか、学校で密かに騒がれてたことのこと？　んー、大体はいつの間にか女子の間でネタとして出てくるかな。男子の方ってそう言うのないの？」

「いや、知らない。てか、どれも初耳だったし」

「ふーん、じゃあちょっと待ってね。おーい、ミヤ！」

結子は大きな声で宮本の名前を呼ぶと、先輩らと話をしていた宮本は不思議そうな顔をしてこっちを向いた。そして、さらに手招きをすると先輩らに頭を軽く下げて抜けてから、面倒そうな表情でこっ

ちまで歩いてきた。

「なんだよ？　俺、先輩らと練習メニューについて話してたんだけど？」

「ゴメンゴメン、すぐ済むから。でさ、男子の方って噂話とか学校内での騒がれた話とかってしないの？」

「あぁ？　噂とか騒がれた話ってなんだよ？　普通に雑談程度ならするけど、女子と同じような話かわからねえぞ？」

そう言って宮本は頭を片手でかきながら適当に返事する。しかし、それを聞いた公子が宮本の方を向いて話しかけた。

「“謎の美少女転校生”とか、『お姉様の寵愛を一身に受ける弟君』とかって話は？」

「まぁ、それぐらいはあるよ。最近になって聞くようになった話だし。けど、どっちかっていうと“無敗の帝王、敗れる”って話の方が運動部とか格闘技好きなやつは盛り上がったな」

「そうなんだ。でも、そういう話題に疎そうなミヤでも知ってるのに、なんで湊君は知らないの？」

「いや、僕に言われても……」

さっき４人が話していたことを、宮本や他の男子の間でも話題になっていたことがわかると。結子は不思議そうな表情で聞いてきた。しかし、どこでそんな話が出ているのかも知らなかった僕が、その原因を理解出来る訳もなく。首を横に振った。だが、その理由は以

外にも宮本が答えた。

「いやなんでって、そりゃこいつ雑談とかあんまりしねえからだろ。授業終わるとどっか行ったりするし、昼休みは基本的に自分の席でまわりの人間と話しする程度だろ？　そりゃ、休み時間に時間潰しでするような話、聞く機会ないって。つか、ぶっちゃけお前クラスの男子に仲良いやつ少ないだろ」

「仲良いやつの定義によるけど、そもそもうちの学校の男子だと同級生は順平・友近・宮本・小田桐・べべしか知らないし。先輩でも真田先輩・荒垣さん・平賀さん・高木さん・グルメキングしか名前知らないよ？　なんか、公子とかゆかり目的に話しかけて来る人多くてさ。面倒だから本人に直接言えって言っても聞かないし。しつこいから無視ってたら逆恨みで待ち伏せとかされて、一発でのして駅前に磔にしてから話しかけてこなくなったんだよね」

「あ、遊んでると思ってたら、そんな事してたのっ！？　てか、私ら目的の逆恨みで湊君にそんな事した奴って誰よ！」

「だから名前知らないって。まぁ、僕が廊下歩いてたら目逸らして端っこによる人とかいるし、その人らじゃないの？」

怒ってる公子にそう返すと、「だったら今度そいつらチェックして問い詰めてやるっ」とさらに怒りに震えている。同じくゆかりの方も自分が原因で僕がそんな風になっているとは知らず、とても申し訳なさそうな顔をしているので頭を優しく撫でてやる。

「気にしなくていいよ、昔からこういうの慣れてるしさ。中学時代だって公子に優しくされてる事を快く思ってなかった人らに、同じように狙われたりしてたから」

「じゃ、じゃあ、湊君が高校生の不良の人たちと喧嘩してたのって…」

「ああ、まさにそれだね。最初は中学の同級生とか先輩だけだったのに、いつの間にか高校生にも狙われる様になったからね。それの相手したあと休んでたら、急に公子に薙刀で撲殺されそうになって驚いたよ」

フフッと笑いながら答えると公子は「うぅ…ゴメンなさい」と抱きついて謝ってきた。別に気にしてないって言ってるのに、なんで謝ってくるんだろう?謝られると逆にこっちが申し訳なるんだけどな。そう思い苦笑していると、宮本がおずおずと尋ねてきた。

「じゃ、じゃあよ。お前のその眼帯ってもしかして…」

「いや、これは10年前に両親が死んだときの事故でやったものだよ。今じゃ隻眼での生活にも慣れてるからなんの不便もないけどね」

「そ、そうか。……悪ぃ、なんか俺お前のこと誤解してたぜ。上から目線で下の人間笑ってるようなやつだと思ってた。いっつもふざけてるし、どんだけ甘やかされて育ったボンボンだ…ってさ。けど、俺なんかじゃ想像できないくらいハードな過去持ってたんだな」

宮本はそういうと俯いてしまった。理緒や結子も僕の目の事や、両親の事は話していなかったから、少なからず驚いたようで暗い表情をしている。まさか旅館の案内待ちでこんな雰囲気になるとは思ってなかったな。そう考えながらこの空気をどうしようかと思ったが、とりあえず宮本に声をかける事にした。

「別に気にしてないって。それにボンボンは本当だし」

「いや、見かけや表面的な行動だけで分かったつもりになってたのは俺だ。だから、有里。俺のことを1発殴ってくれ！　お前が気にしないって言っても、このままじゃ俺の気が収まらねえ。お前が望むなら何十発でもいい。俺の事を本気で殴ってくれ！」

「え？　いや、それはやめといた方が良いよ……」

「宮本、そんな事したらアンタ死ぬよ？」

「止めないでくれっ、俺は有里に頼んでるんだ」

急に殴れと言ってきた宮本に、公子とゆかりが考え直すように言うが宮本は断固として譲る気は無いようだ。ってか、自分が許せないから殴ってくれってどこのメロスだよ。いや、セリヌンティウスでも良いけどさ。僕が困っていると、さらに結子と理緒も宮本の説得に移った。

「やめときなってミヤ、湊君も困ってるしさ」

「てか、ボクシング部の人でも1発でKOされるようなパンチだよ？　そんなの受けたら、明日の練習に響くって」

「頼む有里っ、俺の我儘を聞いてくれ！」

「「「「（ダメだこいつ、話し聞いてない…）」」」」

シュバッと頭を下げてきた宮本をみて女子ら4人が似たような表情

をしている。きっと宮本に呆れているんだろうなと思いつつ、どうやったら宮本を諦めさせれるかを考えることにした。そもそも、本気で殴れってのが無茶だ。

いまの僕の本気ならパンチ1発で車を数メートル吹き飛ばせる。そんな威力で宮本を殴れば、少年向けバトルマンガ並みに吹っ飛んでいってしまうだろう。それを説明したところで誰も信じないだろうし、実演して見せたら騒ぎになってしまう。なにか良い手は無いだろうか…。

「宮本。僕が本気で殴ったら冗談抜きで死んじゃうよ？」

「真田先輩を倒したらしいし、さっきの話で腕っ節が強いのも分かった。だけど、俺だって鍛えてるんだ。パンチ1発くらいで死んだりしねえよ」

「認識甘過ぎ。前にキレかけた状態で江古田の机殴ったときは、真ん中から割れて足もグチャって広がったんだよ？」

「それにこの前、公子がダメにしちゃったベッドのマットに冗談でパンチしたら。湊君の拳だけマット突き抜けたからね？」

「「「……は？」」」

変に自信を持って大丈夫だという宮本に、再度ゆかりと公子が説明をすると。言われた本人に加え結子と理緒までポカンとしている。しかし、それを事実だと証明するため、僕は近くに落ちていた大きめの石を拾って宮本に渡した。

「ほら、これ握って硬さ確かめてみて」

「お、おお。まぁ、普通にどこにでもある石の硬さだな。ほれ」

「うん、じゃあ見ててね……っ！！」

《バシュンッ》

「「「「「っ！？」」」」」

宮本から石を返してもらうと、注目しておくように言ってから石を上に放り投げた。そして5人が僕と石をジッと見ているのを確認してから、僕は落ちてきた石を両手の拳を衝突させる形で挟み。その威力で石を砂状に変えてやった。割るでも、砕くでもなく、まさに“粉砕”という表現がぴったりの光景にみな目を見開き驚いている。

「とまぁ、これが僕の拳の威力なんだけど。これでも本気のパンチ受ける？　知ってまだやるって言うなら僕も本気で殺ってあげるよ。その代わり先に遺書書いておいてね」

「ほ、本気でやるの“やる”の部分が今違ってなかったか？」

「馬鹿ッ、そんな細かいとこ気にするよりも先に、考え直しなさいよ！」

「え？　あ、ああ…殴ってもらうのはまた今度な。それに遺書の書き方も知らねえし……」

宮本は冷や汗をかきながらそう言うと、僕に殴られる事を諦めたようだ。それにより、なんとか先ほどまでの空気が元の状態に戻り、女子らがホッと安心している。僕がそれを見て笑っていると、セーラー服を着た1人の少女がこちらに気付いてやってきた。

「月光館学園の部員さんでいらっしゃいますか？　天城屋旅館から、お迎えに参りました」

「えっ？　あ、ど、どうもありがとうございます。あの、旅館で働いてる…ワケじゃないですよね？」

「いえ、ただの手伝いです。天城屋旅館女将の娘の、【天城（あまぎ）　雪子（ゆきこ）】です」

僕らの宿泊先の天城屋旅館から迎えに来てくれた雪子ちゃんが丁寧に返すと、結子は「女将の娘…若女将？　かぁっこいい～」と感心している。ゆかり達もそれに頷き同意すると。公子が雪子ちゃんに笑顔で質問した。

「あの、高校生ですか？」

「いえ…中学生です」

「中学生で家業手伝うってどんだけケナゲ…じゃあやっぱり、後を継ぐんですか？」

「それは…まだ、分かりません」

結子に聞かれた雪子ちゃんは、若干困った表情をすると少し間を開けて返事をした。さっきよりも少しだけ暗い表情になってるってことは何かしら悩みがあるんだろう。それに気付いたゆかりが結子を注意した。

「…あんまり人の事情に首突っ込まない！」

「はーい…ごめんね、いつもお節介って言われてて…」

「いえ…ヨソから来られるかたとお話しするのは、楽しいですし…」

軽く笑いながら雪子ちゃんがそう言うと、結子は「ほんとゴメンね」と再び謝った。まぁ、悪気があって聞いた訳じゃないのが、相手も分かってるの軽く笑って「いえ、本当に大丈夫ですから」と答えている。

そして、言い終わって雪子ちゃんが視線を移すと、僕と目が合った。なにやら驚いているようだが、どうしたんだろう?そんな風に不思議に思って声をかけようとしたとき、遠くの方からさらに1人の和服の女性がやってきた。

「あっ、雪ちゃん!　車の鍵、持ってってない?」

「あ、葛西さん。車の鍵なんて…あれ?　これ何?」

雪子ちゃんは言いながらポケットから何かを取り出した。…どうやら、車の鍵のようだ。すると、雪子ちゃんは少し顔を赤くして慌てている。

「ご、ごめんなさい。家の鍵と間違えたみたい…」

「いーのいーの。じゃ、買い物行ってくるわね。」

「あっ、買い物なら私行こうか?」

「い、いーのいーの！　雪ちゃんは買い物しないで！！　あ、ほら…重いし、ね？　それより、“ちえちゃん”来てたわよ。勉強見てって」

雪子ちゃんが手伝いを申し出ると、女性は何やら慌てている。相手を思い遣ってる風に言っているが、どっちかって言うと遠回しながらも厄介に思っている感じだ。そしてそれを気付かれないよう、すぐに話題を逸らすと。雪子ちゃんは「あっ、うん、分かった」と返事した。

「…あ、もしかしてお客さん？　ごめんなさいねえ、べらべらと。天城屋旅館の仲居です。今晩はごゆっくりしていってくださいね」

話を終えてから僕らに気付いた仲居さんは、そう言うと車の鍵を受け取って立ち去った。そこで話も一区切りついたので、雪子ちゃんは僕らの方に向き直り口を開く。

「すみません、それじゃ、行きましょうか。こちらです」

「「「「はーい」」」」

返事した僕らは自分たちの荷物を持つと、雪子ちゃんに案内されて旅館へと向かったのだった。

第四十五話　前編（後書き）

済みません、かなり長いですよね。どこで分けるかを考えてたんですが、キリの良いところで分けたらこんな風になってしまいました。さらに後半に続きますが、よろしくお願いします。

第四十五話　後編（前書き）

合宿編の続きですが、今回はひどい捏造というか改変が多数あります。「ペルソナ４も未プレイなのによく設定を使ったなこの愚か者めっ」と、言われてもしょうがないレベルですが。まぁ、反省はまた今度したいと思います。

それと先に説明しておきますが、この作品内の理緒は結子を西脇とは呼びません。湊たちと同じタイミングで出会って「結子でいいから」って言われましたからね。結子と呼んでいます。

第四十五話　後編

夜――天城屋旅館・椿の間　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

私たちが泊まる事になった“天城屋旅館”。ここはどうやら、地元随一の老舗旅館らしい。そして、湊君が遠縁の親戚と一緒にきたのもここの旅館らしい。まぁ、その親戚はもう破門されてるから、私たち草摩一族とは無関係になってるけどね。

そして私たちは自分らが割り当てられた部屋にきて、荷物を置くと。とりあえずお茶を淹れてひと息つく事にした。そうしていると、私たちの部屋に結子がやってくるなり口を開いた。

「ひっろー…ぜいたくー…。いいのかな、ウチらが泊まったりして。怒られない？」

「いや、怒られるって誰からよ？」

「え？　えーと…政府とか？」

ゆかりに聞き返されると、考えていなかったのか適当に答えて笑う結子。別に世界最高級のホテルのスイートルームに税金で泊まってる訳じゃないし、私立の高校なら合宿で高級旅館に泊まるくらいあり得るだろう。それになにより、政府の人間では絶対に怒る事ができない人物がこっちにはいる。まぁ、寮の人間以外には話を広めない方が良いから言わないけどね。そう思ってると、理緒が呆れたような表情で口を開いた。

「なに言ってんの……ってか、結子はこの部屋じゃないでしょ？」

「それがさー！　聞いてよー！　何の手違いか、私、ミヤと同じ部屋なんだよ！！」

「ふうん……って、え？　同じ部屋？　宮本って…男だよね」

「男だよ！　あれでも！！　部屋割りしたの、誰よ。適当過ぎ、マジで」

理緒に聞かれると八つ当たりの怒りのままに返事をする結子。しかし、最後にはその怒りも呆れに変わり、困った表情で最後はぶつぶつと文句を言っている。うーん、でもさぁ。その部屋割りって多分こっちのせいでずれてるんだと思うだよね。そう思い、私は結子にこの部屋の部屋割りが書かれた紙を渡した。

「なにこれ？　この部屋の部屋割りじゃん……っ！？　な、なんでこっちは湊君が混じってんの！　おっかしいでしょ、女子3人に男子1人混じるとかあり得ないっての！」

「いや、私とかゆかりは寮でも一緒に寝てるからおかしくないんだよ。それにプラスして今回薙刀部の視察目的だから私と理緒がセットにされたことで、こんな部屋割りってわけ」

「つーか、そっちは2人だけってのは不思議だけど。いま宮本って故障気味なんでしょ？　結子はよくその世話してるから、それで同じ部屋にされたんじゃない？」

「あー、ありうるかも……はぁ」

ゆかりに言われると、その考えで一緒にされた可能性が最も高いと思ったのか。結子は溜め息を吐きながらやっと部屋割りの理由が理

解できたといった感じのようだ。それにみんなで同情しつつ、結子の分のお茶を淹れてあげると。理緒が口を開いた。

「その、宮本、故障気味って…大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないから湯治できるここ選んだみたい…。もー、アイツずーーーっと黙っててさ。悪化してんの！　ホント、やばかった！　もーーー、バカ！　バカなんだよ！　心配させてさぁ！！」

「…なんか、いいコンビだね」

「はあ？　冗談じゃ…あ、今何時？　ミヤの薬の時間だった。じゃあ、また後でね！！」

何バカ言ってんのという顔をしたあと時間を確認すると、結子は出されたお茶を飲み干してから去って行った。口では色々言いながらも結局ほっとけないんだね。それに思わず笑ってしまうと、理緒も笑いながら話しかけてくる。

「…何だかんだ言って、面倒見いいよね。結子って、何か…お母さん、って感じ。本人は嫌がるだろーけど」

「そだね。んじゃあ、お茶も飲み終わったしお風呂でも行こうか」

「あ、湊君はどうする？　部屋に鍵かけたら戻ってきたとき困るんじゃ？」

「んー、なんかアロハから普通の私服に着替えてたから何か用事してるみたい。ご飯の時間には戻るって言ってたし、それまでは戻ってこないんじゃないかな？　てか、別に旅館の人に言えば開けて

もらえるしね」

「そっか。じゃあ、戸締りだけして温泉に行くとしますか」

話を聞いて安心したゆかりがそう言って立ち上がると。私たちもお風呂の準備をして、みんなでお風呂に入りに向かったのだった。

――天城屋旅館　〈湊　Ｓｉｄｅ〉

僕は自分たちの部屋に案内されたあと、冗談で着ていた夏服から普通の私服に着替えてある部屋へと向かっていた。というのも、僕と目が合って相手が驚いていたのが気になったからなんだけどね。そうして、旅館の庭のようなところを歩いていると、暗くなり始めたこの空気の中。１人立っている少女を見つけた。

「……お久しぶりです」

「そうだね、久しぶり。前に来たのは5年くらい前かな？」

「あの時はお互いに小学生でしたね。会ったのはその１度きりですが、今日あなたを見たらすぐに気付きました」

「僕もだよ。ってか、こっちに合宿でくるって言われた時に、もしかしたら会えるんじゃないかなって思ってたんだ」

言いながら笑顔で近付くと、向こうも笑顔を返してきた。そう、僕は前に遠縁のおじさん家族に連れられて来た時に、雪子ちゃんに会っていたのだ。というのも、おじさんが嫌がらせのために連れてきて、僕の分の部屋はとってないから一晩中外で立っておけと言われたからだ。

当時既に心が壊れていた僕は、黙って言う通りにしていると。それに気付いた旅館の人が僕を従業員の暮らす建物へといれてくれたのだ。末端も末端のくせに「自分は草摩だ」と、偉そうにしていた家族らに嫌な思いをしていたはずなのに。旅館の人たちは僕を建物にいれると、まかないの食事とタオルや着替えを貸して、寝る場所までくれたのだ。

「あの時はありがとう。ずっと偉そうにしてたあの人たちに、旅館の皆さんはかなり嫌な思いをしてたはずなのに」

「私はなにもしてません。ただ、外にいたあなたを家の方へ連れて行っただけですから。それに、働いてる皆さんも、あのお客様には嫌な思いをしてましたが。あなたはあのお客様が去って行ったあとに、私たちに謝って片付けを手伝ってくれたじゃないですか」

「旅館側にはなんの落ち度もなかったからね。偉そうにして難癖つけてたあの人が悪いんだから、一緒に来てた僕が謝るのは当然だよ」

「フフッ、大人なら分かりますけど、普通の小学生はそんな事できませんよ」

雪子ちゃんはそう言って楽しそうに笑う。まぁ、当時は色々と虐待されてても何も言い返さず、ただ周りの人には気を遣って過ごしていた。そして、そんな小学生は確かに異様に見えたはずだ。でも、この旅館の人たちはそれを優しく迎えてくれた。そんな人たちが迎えてくれるからこそ老舗旅館として多くの人が何度もきたりするんだろうなと、1人納得していると雪子ちゃんが話しかけてきた。

「でも、なんか雰囲気変わりましたね。以前よりずっと明るくな

って、笑顔を見せてくれましたし」

「ああ、前は心が壊れてたからね。宗家の伯父さん夫婦と暮らすようになってから、何とか今みたいな人間らしさを取り戻せたんだよ」

「そうだったんですか？　その……大変だったんですね」

「そうでもないよ。最近だと普通に楽しく過ごしてるし、こうやって雪子ちゃんにもまた会えた。僕はむしろ恵まれてる方さ」

少し暗い表情で僕を心配してくれる雪子ちゃんの頭を撫でながら笑うと、向こうは少し顔を赤くして恥ずかしそうにしている。だが、嫌な訳ではないらしく、少しすると笑顔になった。そうして、僕と雪子ちゃんが話をしていると、遠くの方からずっとこっちを見ていた気配が急に動き、走って近付いてきた。

「こらー！　雪子から離れろー！」

「ち、千枝っ！？」

「とりゃー！！」

《バシッ！》

雪子ちゃんが千枝と呼んだ相手は、大声を出しながら走ってくると。僕の数メートル前で跳び上がり、蹴りを放ってきた。だけど、こっちはずっと物陰からみているのを知ってたんだ。なので、そんな物は振り返らなくても対処できる。そう考えつつ1歩横にずれると、目標を失っても空中にいるため止まれない相手の蹴り足を右手で上

に弾いて空中で後転させる。

「うわっ！？」

《ボフッ》

「よっと。やあ、初めまして」

空中でひっくり返された相手は驚いていたが、そのままお姫様抱っこの状態で受け止めると。僕は笑顔で相手に挨拶をする。だが、相手は何が起こったのか理解が追い付いていないのか、目を開いて固まったままだ。なので、再起動を促すため更に話しかける事にした。

「フフッ、随分と可愛らしいヒットマンだね」

「えっ？　あ、あの、そのっ」

「何やってるの千枝。相手はうちのお客さんだよ？　大丈夫だったから良かったものの、急に後ろから蹴るなんて何考えてるの？」

「だ、だって、雪子がしつこくナンパされてると思って…」

雪子ちゃんに怒られると、お姫様抱っこされたままの少女はシュンとしてしまう。まぁ、そういう理由なら不意打ちかましてもしょうがないかな。普通にやったら中学生の女の子が高校生の男に勝てるとは思えないし。

「雪子ちゃんのお友達かな？　僕は有里湊、よろしくね」

「え、えっと、【里中（さとなか）　千枝（ちえ）】です。急に襲いかかってゴメンなさい」

「別に気にしてないよ。それに千枝ちゃんも雪子ちゃんに用があったんでしょ？　何分もあんな物陰から見てないですぐに来たら良かったのに」

「き、気付いてたんですか？」

「フフッ、まぁそういうの得意だから」

驚いている千枝ちゃんに答えると、雪子ちゃんも一緒になって驚いているようだ。確かに普通の能力じゃないけど、あれだけジッと見られてたら勘が良ければ気付けるだろう。そのため驚いている2人がおかしくて、笑っていると相手が不思議そうな表情になるので笑うのをやめる。

「ゴメンゴメン。それで、千枝ちゃんは雪子ちゃんに用があるんじゃないの？」

「あ、そうだ。仲居さんの人にも言ったけど、雪子に勉強見て欲しいのよ。ほら、夏休みの宿題結構出たから」

「いいよ。じゃあ、私の部屋でやろうか」

雪子ちゃんはそう返事をすると歩きだした。なので、僕も千枝ちゃんを抱っこしたまま後ろをついて行く。そう言えば、前に来た時も雪子ちゃんの部屋で待たされてから、案内された部屋に移ったので雪子ちゃんの部屋に行くのはこれで2回目だな。そう思っていると、抱っこされたままの千枝ちゃんが話しかけてきた。

「あ、あのぉ、有里さん？」

「別に歳もそんなに変わらないから、呼び捨てでいいよ。敬語もいらないし」

「んー…じゃあ、湊くん。あのさ、降ろしてくんない？」

「なんで？　歩くより楽でしょ？」

「いや、普通に歩けるし恥ずかしいから…」

千枝ちゃんは疲れた表情で僕にそう言ってきたので、「そう？」と返しつつ彼女をゆっくりと地面に下ろした。すると、相手は安心したようでホッと息を吐いている。公子らは別にこれぐらいじゃ気にしないのに、中学生ってのも複雑な年頃なのかな？そう思いつつ、僕らは再び雪子ちゃんの後に付いて行き彼女の部屋へと向かった。

――雪子自室

雪子ちゃんについて行くと、奥にある雪子ちゃんの部屋に通された。老舗旅館の一室であるため、いくら私室といえど品のある和室造りだ。中はこれといって派手なものはないが、大人しめな女の子の部屋といった感じで片付いている。

「座布団、使っていいから適当に座って」

「ほいほーい。はい、湊くんの座布団」

「うん、ありがとう。勉強って何するの？」

「学校で出た夏休みの宿題だよー。受験の年だからちゃんと休みの間も勉強するようにって、多めに出されてるんだ」

千枝ちゃんはそう言うと嫌そうな顔をしながら、カバンに手を入れ数学の問題集や社会の授業のものと思われるプリントなどを取り出した。一言断るとそれらを手に取り内容を見ていく。……大して難しいとは思わないけど、もしかして千枝ちゃんっておつむが順平なのかな?失礼かもしれないが、それを確かめるため僕はクイズを出す事にした。

「問題です。A君のお小遣いは３０００円、B君のお小遣いはA君の６０％、C君のお小遣いはB君の１３０％。さて、C君のお小遣いはいくらでしょうか？　ちなみにこれは小学生の問題です」

「え、えぇっ!?　ちょ、ちょっと待って、急にそんな問題出されたってあたしっ。えーと、B君はA君の６０％……ってことは、A君のお小遣いに６０を掛けて…ってこれじゃダメだ。流石に１８万は貰い過ぎだもの…」

問題を出された千枝ちゃんは焦りながらも何とか答えを出そうと唸っている。苦手なことでも頑張ろうとするのはすごく好感がもてるな。でも、途中に聞こえてきた呟きはいただけない。６０％なのに６０をそのまま掛けてどうする。そこは０．６を掛けなきゃ。いくら中学生でも、これは順平クラスのおつむだな。

「うー…わっかんない……。つか、あたしそういう頭使うキャラじゃないしさ」

「答えは２３４０円よ。パーセントは１００を1として考えるから、６０％だったら０．６、１３０％だったら1．３になるの。だから、B君のお小遣いである３０００の６０％つまり１８００円を、1．３倍して出た２３４０円がC君のお小遣いってわけ。キャラと

か関係なくこれぐらい覚えておかないと、受験で悲惨な目に遭うよ？」

「だから雪子に教えてもらいにきたの。なのに湊くんがいるし、問題出してくるし…湊くんって女の子虐めるのが趣味な人？」

「さぁ？　よくドSって言われるけど。まわりにMっぽい人しかいないから言われてるようなもんだからね。よく分かんないよ」

学習机の方から筆記用具と勉強道具を用意してきた雪子ちゃんに言われると、千枝ちゃんはテーブルに突っ伏して僕をジト目で見てきた。なので、質問されたことに答えつつ、勝手に千枝ちゃんの社会のプリントに、休み明け最初の定期試験に出そうな問題をチェックしていく。

「ほら、千枝。遊んでないで身体起こして。勉強しに来たんでしょ？」

「だーって、湊くんがさぁ」

「湊くんって…この人、高校生だよ。そんな慣れ慣れしく呼んじゃダメだよ」

「いや、僕が良いって言ったんだよ。高校って言っても歳は2つくらいしか離れてないからね。雪子ちゃんも敬語無しで、呼び捨てで良いよ」

「え？　いや、あの私は……」

雪子ちゃんは言われると困ったような表情になる。別に困らせるつ

もりはないけど、接客業の手伝いしてるだけあって。年上の人に友達感覚で接するのは抵抗あるのかな？そう思って苦笑していると、身体を起こした千枝ちゃんが雪子ちゃんに話しかけた。

「相手が良いって言ってんだから気にしないで良いじゃん。遠慮しすぎても逆に失礼になるし、雪子も湊くんって呼びなよ」

「でも…いいんですか？」

「うん、敬語も無しで良いよ。その方が仲良くなったみたいで嬉しいから」

「じゃあ、わかりました…じゃない、わかった。これからは湊くんって呼ぶね」

まだ少し恥ずかしいのか頬をやや赤くしているが、雪子ちゃんは笑いながらそう言った。僕もそれに笑顔で頷き返すと、一緒になって宿題をして。2人の勉強を見てあげたのだった。

――帰り道

勉強会が終わると時刻はすでに7時を過ぎていた。いくら田舎の方は知り合いが多いとは言っても、こんな時間に女の子を1人で帰らせる訳にはいかない。そう思い僕は千枝ちゃんを家まで送る事にした。

「そういや湊くんって部活の合宿で来てるって言ってたよね？部活って何してんの？」

「色々してるけど今回は弓道部の合宿だよ。八十稲羽の人らと交流会でね」

「ああ、あそこかぁ。そっちも良いけど、あたしは八十神高等学校の方行くつもりなんだ。家からだとそっちのが少し近いし、なにより規則とかゆっるいかんね。最低限の勉強やってれば五月蝿く言われずに、卒業まで楽しく過ごせそうじゃん？」

千枝ちゃんはたまに何かの武術の型で蹴りを放ちつつ、楽しそうに話してくる。そういえば、僕に跳びかかってきた時も蹴りだったし。なんかの武術なり運動とかしてんのかな？

「そういえば、さっきからやってるのって何の技？　空手とかではないよね」

「これ？　これはね、あたしが考えたカンフーだよ。って言っても、全部を考えた訳じゃなくて好きなカンフー映画のアクションから取り入れた動きなんだ。だから、自己流カンフーって感じ？」

「へぇ、カンフーか。でも、自己流にしては動きのキレが良いね。成長期だし身体がしっかり出来てきたら、男でも簡単に倒せるようになるんじゃないの？」

「……人の渾身の蹴りを簡単に弾いておいてそれ言う？　あれ、地味にショックだったんだよ？」

僕が笑って褒めたにもかかわらず、千枝ちゃんはカンフーの型を止めると。僕の事をジト目でじっと見てくる。けど、だから地味に僕に突っかかってきてたのか。厭味ったらしくって感じじゃないけど、なんか変に人をSだとかロリコンぽいだとか勉強中に言ってたからな。そういう性格じゃなくて、悔しくて少し仕返ししてきてたのか。

「これでも僕も結構強いからね。一般人が相手なら片手でやっても負けないのだよ」

「うっわー、負けてショック受けてる中学生相手にそういう自慢はないわぁ。これもう何か奢ってもらわないと、心に負った傷を癒やせないね」

「お腹空いてるの？　だったら先に言えば良いのに。別にご飯くらい連れてってあげるよ？」

「いいのっ！？　ヨッシャッ、じゃあビフテキでよろしくぅ！」

僕が晩御飯をご馳走するというと、千枝ちゃんは嬉しそうにガッツポーズをしている。そんなに外食が好きなのかな？ってか、ビフテキって何？もしかして、ビーフステーキのこと？前に少し歳いった先生がそんな風にステーキを呼んでた気がするし、たぶんそれで合ってるよね。心の中で相手の希望したメニューが何かを確認すると、僕は連絡を入れる事にした。

「……あ、そう言えば天城屋旅館の番号知らないや」

「なに？　雪子ン家になんか用があるの？」

「ほら、ご飯食べてくるなら食事だけキャンセルしておこうと思って。まぁ、すでに用意されてるなら、他の部員に食べてもらうけどさ」

「ふーん。じゃあ、ちょっと貸して」

「ん？　どうぞ」

貸してと言われて僕は千枝ちゃんにケータイを渡すと、千枝ちゃんは番号をいくつか押して電話をし始めた。たぶん、相手は天城屋旅館か雪子ちゃんの自宅の方の電話だろう。

「……あ、雪子？　あたしあたし、いま湊くんのケータイでかけてるんだ。でさ、今から湊くんとご飯食べてくるから、湊くんの分の晩御飯キャンセルできるならしておいて欲しいんだって」

『んー、お吸い物とかご飯みたいなのは出来るけど。お刺身とかは今日中に食べないといけないから、ちょっと難しいと思う。別に出さなくて良いってだけなら、配膳しないで旅館の皆の賄いにまわすけど』

「代金はそのまま払うつもりだから、配膳だけしないでもらったら良いよ。急にゴメンね」

『え？　ああ、聞こえてるんだね。でも、別に大丈夫だよ。お風呂でのぼせて夕食食べれないとかって人もよくいるから』

千枝ちゃんが電話を始めると向こうからの声が聞こえていたので、僕もこっちの声が聞こえるよう千枝ちゃんの肩に顎を乗せて話しかけた。すると、ちゃんと聞こえたようで雪子ちゃんが返事をしてくれた。よし、これで夕食の件はクリアしたな。そう思っていると、再び電話から雪子ちゃんが話しかけてきた。

『けど、なんで急にご飯食べに行く話になったの？』

「いたいけな中学生の心を傷つけた罰ってやつよ。それにあたしって明日３０日が誕生日でしょ？　だから会えてるうちに祝いたか

ったのよ、きっと」

『そんなはずないでしょう？　もう……ゴメンね湊くん』

「いや、食事に誘ったのは僕だから別にいいよ。ってか、千枝ちゃん明日誕生日なんだ？」

「まあね、夏休みだからって友達呼んでパーティーとかは別にしないけど。明日の夜は家族でちょっと豪華っぽいご飯と、誕生日ケーキ食べて祝うくらいかな」

聞かれると明日の予定を思い浮かべつつ答える千枝ちゃん。でも、そういう家族の団欒とかって良いよね。僕がそういうのをやってもらったのは、親がいた時を除けば公子らと暮らすようになってからだ。いつも一緒に食事をしていても少し特別な感じがするから不思議だよね。

『まぁ、話はわかったから、厨房の方に伝えておくね』

「うん、お願いします」

『千枝、あんまり湊くんに迷惑かけちゃダメだよ？』

「わかってるって。ご飯食べたらすぐに帰るし。それじゃあ、またね《ピッ！》」

千枝ちゃんは電話を終えると、僕にケータイを返してきた。なので、僕も肩に顎を乗せるのをやめると、普通に立ち上がる。

「じゃあ、次は千枝ちゃんの家にかけて。連絡しないで帰りが遅

くなると家の人も心配するから」

「そう？　まあ、わかったよ……あ、お母さん？　あたし。友達とご飯食べてから帰るから、少し遅くなる。……え？　高校生だよ？　雪子の旅館に泊まってるお客さん。帰りも送ってもらうから大丈夫だから。うん…うん…はーい、じゃあねー《ピッ！》」

「ちゃんと許可は出た？」

「中学生だけならダメって言われたけど、高校生って説明したらどこの知り合いかって聞かれた。結局、ちゃんと送ってもらうなら良いけど、あんまり遅くならないようにだって」

ケータイを僕に返しながらそう言って千枝ちゃんは笑顔になる。この時間に友達とだけで外食するのって、楽しいもんね。高校生でもそうなんだから、色々と制約のある中学生なら尚の事だろう。許可も無事に出たし、そうと決まればさっそく行くとしよう。

「んじゃ、行こうか。お店はどこがいい？」

「結構、有名なステーキハウスがあるの。値段は庶民的よりはちょいするけど、同じグレードの肉を食べようと思ったら、他所よりはるかに安いんだ。そこで良い？」

「任せるよ。それじゃあ、食べた後も少し寄りたいとこあるから、早めに行こうか」

「了解♪」

そういうと僕らは一緒に、千枝ちゃんオススメのステーキハウスで

食事をしに向かった。

――天城屋旅館・椿の間　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

お風呂と食事を終えた私たちは既に布団のひかれた部屋でゴロゴロしていた。他の者は反対してきたが、ジャンケンで勝利したため私と湊君の布団が隣で、通路用のスペースを開けて私の上側に理緒、そして湊君の上側にゆかりの布団という配置だ。まぁ、全員が通路スペース側に頭がくるようにしてるんだけどね。

そうして、今ここには結子を含めた女子４人が集まっている訳だけど、結子には私の布団でゴロゴロするように言い、湊君の布団には私が寝ている。そして、ふと話題が途切れると結子が思い出したように呟いた。

「そういや、湊君だけ最後までご飯こなかったね」

「あー、なんか旅館の人に聞いたらキャンセルの電話があったんだってね」

「え、なんで？　せっかくきたのに勿体ないじゃん」

返事をしたゆかりに結子が不思議そうな表情で更に返す。でも、本当に勿体ないよね。なんでキャンセルしたんだろ？そう思っていると、ゆかりが寝転がったまま肘をついて上半身を軽く起こして、口を開いた。

「なんか外でご飯食べてくるからだってさ。夕方ここに案内してくれた子いたじゃん？　湊君とあの子知り合いだったらしいよ。それで旅館来てから、あの子とその友達の子の勉強見てあげてたんだって」

「へぇ、なんか普通に良いお兄ちゃんじゃん。じゃあ、その2人と一緒に外食ってこと？」

「いや、友達の子を家まで送ってたんだけど、途中で一緒にご飯食べる話になって2人で食事しに行ったんだってさ」

ゆかりが説明してくると、私たち3人も同じように寝たまま肘をついて上半身だけ起こす体勢になる。そして、聞き終わった私たちの表情は似たようなものになっていた。そう、「なんで家に送るはずが2人っきりの食事に変わってるの？」という、意味不明な流れに対する疑問のせいだ。

「相手の子も中学生だよね？　旅館の子が中3らしいから、相手も中3か……ギリセーフ？」

「いや、アウトじゃない？　親切なお兄さんが送り狼みたいになってるし」

「てか、仲良くなるの早過ぎでしょ。だって、旅館来てからってことは2・3時間だよ？　それで2人だけで食事に行くとか、手が早いってレベルじゃないよ」

「……湊君てさ。大人になってから出張とか行ったら、行く先々で女作ってそうだよね。本人は友達とかのつもりでも、相手が本気で好きになっちゃったりとかさ」

全員が湊君の行動について議論していると、最後に理緒の言ったことが容易に想像できてしまい。思わず全員が口を噤んだ。うん、冗談抜きであり得そうで困る。流石に本人に自覚が無くても、そこま

でいったら怒るだけでは済ませられないだろうなと密かに思ったのだった。

――夜道　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

ご飯を食べ終わったあと、僕らは少しだけ買い物をした。明日が誕生日という事でプレゼントをあげるつもりだったのだが、結局はレンタルビデオの店に販売コーナーに売ってる『成龍伝説』という映画の初回特典付きＤＶＤを贈る事になった。服とかじゃなくて良いのかと聞いたら。

「断然こっちのが嬉しい！」

と、おっしゃられたので、素直にそれをプレゼント用に包装してもらい買ったというわけだ。支払いを終えた後に、「１日早いけど誕生日おめでとう」と渡すととても喜んでもらえた。その後の帰り道も終始ご機嫌で、家まで送った時は「また明日ね」と言われたのには思わず笑ってしまった。僕らは明日の夕方前には帰るので、会えるかどうか分かんないからね。

「ふぅ、けど意外と距離あったなぁ。少し遅くなっちゃったよ」

言いながら僕は１人で旅館への帰り道を歩いている。女の子がフラっと来るぐらいだから近所の子だと思ったら、普通に離れてるんだもんな。ご飯食べたり買い物してて遅くなってから家に送り届けたため、すでに１１時を過ぎてしまった。

「明日の交流会も雰囲気だけ参加するから別に良いんだけど…っ！？　誰だっ！！」

急に感じた異様な気配に向かって大声を出すと、異様な気配が１つ

に集まっていく。上手く気配が掴めないが、どうやら人間ではないらしい。ペルソナやシャドウに近い気配だ。

『フフッ、君こそ誰だい？　私は神さ、この世界に秩序をもたらすね。まぁ、いまはあまり力は出せないが別に問題はないさ』

「神？　シャドウ風情が神を語るのか？」

『フハハハッ！　シャドウを知ってるのか、そうか。……でもね、いかに全ての力が使えないと言っても、シャドウ程度と同じにされては困る！』

僕が相手に聞き返すと、敵は笑ってから言葉を返し攻撃をしてきた。腕を組んだ髪の長い人間の下にベルトのついた拘束具のようなデザインの身体が存在する敵。名前も知らないし、本当にシャドウなのかも分からない。でも、大型のシャドウよりも圧倒的にヤバい感じがする。クソっ、影時間でも無いって言うのにっ！

「フツノミタマっ！」

《ザシュンっ！》

『良い物を持ってるじゃないかっ、普通の人間とは違うと思ったけど。君は本当に誰で、何者なんだい？』

そう言っている間も敵の攻撃は続いている。敵は一束ごとにかたまっている髪の毛を、鞭や剣、または槍のように使って攻めてくる。それらを受け流し、斬れるものは斬り飛ばすことでなんとか攻撃を防いでいるが、その攻撃スピードが尋常じゃない。

『おやおや、なにを気にしているんだい？　ああ、一般人に気付

かれるかもしれないと思っているんだね。それなら、こうしようか』

敵がそういうと、僕と敵の周囲が赤い変な空間へと変わった。外の気配も微かに感じる事から、これは自分たち2人だけを異空間へと切り離したのだろう。だが、それなら都合が良い。ここなら本気で戦っても問題ないって事だからなっ。

「魔力解放ッ！！」

『ッ！！　すごいじゃないか、何だいそれは？　魔力？　初めて知ったよ』

「神を語るお前の望みはなんだっ！」

『人の望みを知り、世界をより良いものにすることかな。でも、今はまだその時じゃない。だから、君みたいな不思議な子と遊んであげるんだ――――メギドラオン』

相手が呪文を唱えると、上に光が集まりそれらが力の奔流となって僕に向かってきた。本能があれはヤバいと告げている。だが、こんなふざけたやつを放ってはおけない。なので、僕も解放する魔力の量を増やし迎え撃つ。

「はぁあああ！！」

《ドゴォオオオオンッ》

『……いいね、君。面白いよ。暇潰しのつもりだったけど、存外楽しめそうだ。私の名前は【イザナミ】、生き残れたら覚えておいてね――――マハガルダイン』

《ゴォオオオッ！！》

「チッ…」

メギドラオンとかいう訳の分からない魔法を魔力で防ぎきると、相手は楽しそうに笑いながら強力な風の魔法を放ってきた。僕はそれが発動しきる前に、足に魔力を集めて高速離脱した。てか、なんだよコイツは。1発1発がまともに喰らえば致命傷になりそうなモンばっかりだ。このままじゃ、防戦一方になりそうだし、こっちから攻めて敵に攻撃させないようにしないとっ。

「はっ！！」

《ザシュンッ》

『飛ぶ斬撃？　ますます、普通の人間とは思えないよ。名前を教えてくれないか？』

「有里湊だよっ、僕の望みはお前が消えることだ！」

《ガキンッ》

『良い名前じゃないか。しかし、君は人間じゃないね。私が知りたいのは純粋な人間の望みだ。だから、君の望みは受け入れられない』

イザナミはそう言ってフツノミタマと複数の髪の束を合わせた大剣をぶつけて、僕を遠くへ弾き飛ばしてきた。そしてさらに髪の毛を使った攻撃の速度を上げ攻めてくる。魔力で脚力を強化していなければ、すぐに追い付かれてしまいそうだ。なので、さらに速度を上

げるとしよう。

「カデンツァ！《パァア…》」

『それも初めて見たよ。本当に不思議なものを沢山持っているね――――マハラギダイン』

「Ｃａｌｌ！　ブフーラ×２！！」

《フシュゥウウウウ！！》

カデンツァの効果で加速すると、一気に敵の髪の攻撃範囲から抜け出した。だが、相手はそれを気にした様子もなく、炎を放ってきたので。僕はフツノミタマをしまい腕輪からブフーラのカード２枚と召喚器と取り出し真っ向から受ける形で放った。こっちの術の方が威力は弱いが重ねがけしたおかげでなんとか相殺し合う事が出来た。だが、どうやってこんな相手倒せばいいんだ。

『もしかして勝つ方法でも考えているのかい？　諦めなよ。君の攻撃は全て私に届かないんだから』

「五月蝿いっ。この街で勝手な真似をしようするなら、僕はそれを止めなくちゃいけないんだよ！」

『ん？　君はここの住人ではないはずだ。なのに、この街になにか気になるモノがあるのかい？』

「なんだって良いだろ、そんなものっ！　Ｃａｌｌ！　ブフーラ×マハジオ×マハガル！　氷の礫を喰らえ！」

何か僕に興味を持ったイザナミに向かい3枚のカードを使った合体魔法を放つ。氷塊を雷で砕き、やや帯電したその礫を風で敵にぶつけるという技だ。いかに高速で動く髪とはいえ、面で攻めてくる攻撃は防ぎきれないらしく。人型の部分や、胴体へとそれらが襲いかかる。

『ほう、やるじゃないか。でもね、その程度の威力では私を傷つける事すらできんさ――――メギドラオン』

「消耗が激しいって言うのにッ、はぁあああああ!!」

《ドゴォオオオオンッ》

『そんな同じ技ばかり使う訳がないだろう？　喰らえ』

《ザシュンッ、ザシュンッ、ザシュンッ》

「ぐあぁぁッ」

敵のメギドラオンを再び最強の盾である魔力解放で防ぐと、敵はそれが解除される瞬間を狙って幾つもの髪で突き刺してきた。身体に纏った魔力で多少は弾いたため、手足が多少斬られるだけで済んだ傷もあるが、1つだけ腹を貫通された。そして敵はそれを地面に刺す事で逃げれないようにしてくる。

『案外最後は呆気なかったね。でも、君みたいな面白い子が興味を持ったものが何か興味あるな。あれかい？　泊まっている旅館の娘、それと夜に一緒に歩いていた娘。その2人かな？　じゃあ、君を殺したら、あの2人とも遊んであげよう』

「っ！！　貴様ぁあああああああああッ！！」

イザナミがこの街に住む2人の少女のことを言った瞬間、俺の中で何かがキレた。あの子達はやらせない。こいつはこの場で仕留める。そう思い、召喚器を仕舞うとすぐにフツノミタマを呼び出した。

「はぁっ！」

《バシュンッ！》

『まだやるのかい？　そんなにあの娘たちが気に入ったんだね。遊ぶのが楽しみだ』

「消えろぉおおおおお！！」

《ズシュンッ、ズシュンッ》

余裕を見せてくる相手に向かって最高速で近付くと、迫ってくる髪の毛を全て斬り払っていく。思った通りだ。敵はこの太刀の攻撃をガードできる術を持っていないっ。このまま接近し、全ての魔力を籠めた一撃で殺してみせる。

『アハハハハッ、すごい。どんどん人間離れしていくね。このまま一気に来るつもりかな？　なら、私も大技で迎え撃とう――――コンセントレイト』

そう唱えるとイザナミの上に光が発生し、その光が相手の身体を包んだ。すると、相手の身体は薄い光を纏った状態になる。なにやら凄まじい力の集中を感じる。きっとあれで魔法の威力をあげたのだろう。ってことは、次に来る魔法ごとあいつを斬らなければ、こっちの負けだっ。

『さぁ、終わりだ――――メギドラオン』

「はぁあああッ、届けぇえええええええ！！」

身体強化にまわしていた魔力も敵に向かって跳び上がると同時に、全てフツノミタマの強化にあてる。そして、敵の放った今までとは比べ物にならない威力のメギドラオンへ突っ込む前に、それを敵に向けて振るうと俺は光りに包まれた。

――河川敷

光りがおさまるとまわりの風景が元の状態に戻っていた。だが、まだ完全に終わった訳じゃない。そう、身体に大きな刀傷を負ったイザナミが倒れているからだ。さっきまでは宙に浮いていたのに、いまは地面に倒れ、髪の毛もだらんと力なく垂れている。

「はぁ…はぁ…。くっ、どうだイザナミ。僕の勝ちだっ」

『……力で及ぶ筈のない人間がっ、虚像を越えて私に傷を負わせただとっ』

「あいにく僕のフツノミタマは霊剣でね。実体のないものでも斬る事が可能みたいだ」

言いながらフツノミタマを仕舞って立ち上がると、警戒しながらイザナミへと近付いて行く。

『認めないっ、絶対に認めない！　再び力を集めた時には、絶対に殺してやるぞ有里湊！』

そういうとイザナミは靄のようになって消えてしまった。完全に倒

す事は出来なかったが、さっきまでの異様な気配は消えた。力を集めるまでって言ってたし当分の間は大丈夫だろう。それまでに僕も力を付けて、雪子ちゃんと千枝ちゃんのいるこの街を絶対に守ってやる。

「そうはいっても今日は引き分けだな…カデンツァ《パァ…》」

とりあえず貫通されたお腹の傷を魔法で回復させ塞ぐ。手足の傷はすぐに治ったけど、お腹の傷はちょっと時間がかかるみたいだ。どうせ敵もいないし、貧血も問題ないレベルなので。ゆっくりと傷が塞がるのを待つと僕は旅館へと戻った。うん、千枝ちゃんとお肉いっぱい食べに行ってて良かったよ。

第四十五話　後編（後書き）

どこで戦ってんだ…という感じですね。てか、イザナミの力が不十分だとか、千枝にＤＶＤ買ったりだとかオリジナルに走りすぎました。でも、もしこの作品を書き終えてまだ書く気力があったら、この作品の数年後の設定でＰ４Ｇの二次創作も書いてみたいです。ですんで、書いた時には「ああ、あんときのか」と思ってください。

第四十六話（前書き）

いままで『お気に入り小説登録数』の伸びがゆっくりだったんですが、合宿編の２話を投稿したら一気に１０名ほど増えました。中学生の雪子と千枝のおかげですかね？

第四十六話

7／30（木）
朝――天城屋旅館・椿の間
昨日のイザナミとの戦闘後、影時間の少しあとに旅館に帰ってきたら。案の定、入り口とかは閉まっていた。なので、少し回復していた魔力で身体強化し、跳躍で中庭の方から入った。服もボロボロになってたし、静かに部屋に入るとなぜか結子も寝ていたが。僕は着替えだけ持って2時まで入れる温泉に向かい、血や汚れを洗い流してから寝たというわけだ。

そして、朝目覚めると公子が僕に抱きついて寝ていた。まぁ、ここは僕の布団で公子がおまけで寝ている立場だから、文句は言われないだろうけど。健康のために高めの設定温度でついている冷房の中では、これは流石に暑い。

「公子、暑いから離れて」

「えぇ～…私、まだ寝たい…」

「寝ぼけてないで離れて。てか僕、朝にも温泉入りたいし」

「朝風呂？　それなら私も入ってこようかな。んー……はぁ」

手足をしっかり伸ばして背伸びをする公子。まだ寝たいといいながらも温泉の方が魅力的らしく、もう起きるようだ。それを笑ってみてから僕は布団から出て、着替えをカバンから探す。すると、若干はだけていた浴衣の前を直しながら起きあがった公子が話しかけてきた。

「そういえば、昨日は何時に帰ってきたの？」

「0時過ぎかな？　そのあとはお風呂入ってすぐに布団で寝たって感じ」

「なにそれ？　そんな時間まで中学生連れ歩いてたってこと？……湊君、ちょっとお話ししようか」

公子はそういうとカバンから着替えを探していた僕の肩を、後ろからグッと掴んできた。チドリもそうだったけど、最近の女の子は握力も強いんだね。地味に痛いよ。掴まれた肩の痛みに耐えつつ、無視してカバンから着替えを取り出すと。僕は公子の方へ振り返った。

「相手の子の家が遠かったんだよ。一緒にいたのは家に送り届けた9時過ぎまでで、その後はこっちに戻ってくる途中に変なシャドウみたいなのと戦闘したの。正直、大型シャドウより強くて焦ったけど、ギリギリ勝てたよ」

「それ本当？　でも、シャドウはタルタロスのある港区周辺にしか出ない筈じゃ？」

「相手も自分はシャドウとは別の存在って言ってた。念話以外で流暢に話してくるシャドウとか初めてだったから驚いたよ。でも、力が再び集まるまで出てこれないらしいから、とりあえずは安心かな。まぁ、こっちも服を1枚ダメにされたけどね」

フフッと笑いかけながら掴む力の緩んでいた公子の手を外すと、僕は着替えを持って立ち上がる。すると、公子もササッと自分のカバンから着替えや化粧水を取り出すと立ち上がったので、僕らは一緒

に温泉へと向かったのだった。

朝食――旅館内食堂

温泉に入ったあと部屋に戻ると、布団が片付けられ誰もいない状態だった。他の3人もきっと朝風呂に向かったのだろうと思って、ゆっくりしていると4人が一緒に帰ってきたので。着替えをカバンに仕舞うと貴重品を持って僕らは朝食を食べに向かった。

そして、いまは旅館内にあるレストランに来ている。晩御飯は宴会場のような広間で食べたらしいが、朝はバイキング形式のためこっちで好きな席に座って食べる形式になっている。席に荷物を置いてご飯やおかずを取ってくると、僕らは一緒に食べ始めた。

「そういや、湊君っていつの間に帰ってきたの？」

「夜中だよ。みんな寝てたから静かに着替えとか取って、温泉に入ってから寝たって感じ」

「ふーん。でも、私が寝ちゃってたから布団空いてなかったじゃん。誰んとこで寝たの？」

「誰のとこって自分のとこだけど？　公子が寝てたから少し横にずらしてそのままって感じでね。まぁ、抱きつかれてたせいで暑くて起きちゃったけど、朝風呂にはいい時間だったらそのまま起きてお風呂行ったってわけ」

結子に聞かれて食事をしながら答えると、それを聞いた結子と理緒がなにやら驚いた表情をしている。それにゆかりが2人と視線を合わせると。首を横に振ってなにかを伝えたみたいで、首をかしげつつも2人は食べるのを再開した。ってか、いまのなんだよ…。

「けど、会ったその日に女の子と食事って手が早過ぎない？」

「ん？　ああ、ゆかりから聞いたのか。いや、その子の誕生日が今日らしくてね。せっかく仲良くなったのに、お祝いもせずにってのはちょっとと思ったんだよ」

「なるほど。まぁ、それなら理由としてはまぁ分かるかな」

訳の分からないことを公子が言ってきたので、僕は昨日の千枝ちゃんとの食事の理由を説明した。本当は食事を先に決めて、そのあとに誕生日だと知ったんだけど。変に疑われるのも嫌だし、尤もらしい理由で説明してみたが、どうやら信じてくれたようだ。そう思いながら、食事を続けていると、ゆかりがパンにマーガリンを塗りながら話しかけてきた。

「でも、湊君って若女将の子と知り合いだったんだね。なんで旅館に案内されてる間に話しかけなかったの？」

「そりゃ、仕事中だもの。手伝いとはいえ仕事は仕事。軽い挨拶程度ならいいけど、思い出話みたいな雑談するのはアウトだから案内後にしたんだよ」

そう説明すると聞いてきたゆかりは「ふーん」と何やら興味無さげだ。僕は気にしないから別に良いけど、他の人にやったら失礼だからね、それ。そんな風にその後も、僕らは他愛無い会話をしながら朝食を食べた。

昼前――フロント

朝食を食べ終えた後、部屋に戻って休憩しながら僕らは帰る準備を

した。旅館を出た後はまた八十稲羽高校に行って合同練習をして、解散後はそのまま電車に乗って帰るという流れ。なので、ここにはもう戻ってこないのだ。

「もうちょっと、ゆっくりしたかったなぁ」

「合宿の宿には豪華すぎるけど、確かに2泊くらいして温泉楽しみたかったね」

先生がチェックアウトしてる間、僕らは荷物を持ってフロントの近くに座っていた。そこで、結子が名残惜しそうに呟くと、笑いながら理緒が同意する。確かにあまり有名ではないが隠れた名所の老舗旅館ってので、密かに人気がある。そんな場所をたかが高校の部活合宿の宿泊先に選ぶ辺り、うちの学校はだいぶ金を持っているようだ。

「けど、どっかの誰かさんは温泉好きのくせに、温泉よりも地元の中学生を楽しんでたよねぇ…」

「中学生と遊ぶことを楽しんだだけね。中学生を楽しむとか犯罪っぽいから」

「大して変わんないでしょ。家に送るだけのはずが夜まで連れ歩いてなにしてたんだか」

うちの学校について考え事をしてると、突然、公子とゆかりが悪意に満ちたセリフを僕にぶつけてくる。さっきまでは普通だったくせに、旅館を出る直前になって何を言ってるんだ。そう思って2人のことを見ると、揃ってジト目で旅館の入口の方を指差した。その指した方向を見てみると、雪子ちゃんと千枝ちゃんがキョロキョロし

ながら立っていた。

「あの2人がどうかしたの？」

「明らかに誰か探してるよね？」

「違うよ。きっと迷子の子ネコでも探してるんだよ」

「湊君は1回、犬じゃなくて本物のお巡りさんのお世話になった方が良いんじゃない？　てか、いますぐ連絡しようか？」

「リアルファイトは得意だよ。国家権力には屈しないんだ」

公子がジト目のままケータイを取り出すと、『1・1・0』のボタンを押す真似したので。僕は笑顔で言い返した。だが、それを聞いた瞬間に公子とゆかりは頭に手を当てて首を横に振っている。まぁ、理緒と結子はなんだか驚いた表情をしてるけどね。そんな様子を眺めつつ笑っていると、遠くから大きな声で呼ばれた。

「おーい！　湊くーん！」

「「「「えっ、湊くん？」」」」

「……君らも同じように呼んでるでしょうが」

千枝ちゃんが僕を発見して、名前を呼びながら手を振ってきたので僕も手を振り返すと。相手の呼び方に疑問を持ったのか女性陣が聞き返してくる。自分らも同じ呼び方のくせに何が気になるんだと思っていると、理緒が口を開いた。

「いや、中学生が会ったばっかりの年上を名前呼びって珍しいと思うよ？」

「……田舎だとこれが普通です」

「そんな訳ないからっ」

僕が理緒に説明すると、ゆかりがすぐさま突っ込みを入れてくる。そう言えば、ゆかりも色んな土地を転々としてたんだっけ。くそっ、それなら田舎の情報も持ってて当然か。そんな風に少し悔しく思っていると、雪子ちゃんと千枝ちゃんが僕らの座っているところまでやってきた。

「みなさん、こんにちは。昨日は休めましたか？」

「うん。旅館の人も親切だし、温泉も気持ち良かったよ」

「そうですか。それは良かったです」

雪子ちゃんは近付いて来るとまず僕らに挨拶をした。それに公子が笑顔で答えると、安心したのか向こうも笑顔になっている。そして、二・三言葉のやり取りをしたところで、僕は暇そうにしている千枝ちゃんに話しかけた。

「それで、千枝ちゃんは何しにきたの？　僕に何か用でもあった？」

「ひっどーいっ！　昨日、また明日ねって言ったじゃんっ」

「いや、僕らが帰るの今日だから会えるかどうか分からなかった

し。ノリで言っただけだと思ったんだよ」

「だから、朝ご飯食べて昨日買ってもらった『成龍伝説』を見てから会いに来たんだよ。いっやー、ホントに良かったよー。今まで観てきた中で一番の名作だね！　ありがとう、湊くん！」

千枝ちゃんは嬉しそうに言うと、座っている僕の右手を両手で握ってブンブンと握手してきた。こんなに喜んでもらえたなら、プレゼントした甲斐があったというものだ。相手の笑顔を見て僕も笑顔になると、握手をやめた千枝ちゃんが再び口を開く。

「そういや、昨日買ったのまだ渡してないの？」

「ん？　ああ、会う機会がなかったからね。実は昨日、旅館に帰ってきたの０時過ぎてたから」

「うわっ遅っ、そんな時間まで何してたの？　ここらへん田舎だからどこも閉まってるよ？」

「んー、まあ散歩がてらって感じかな。けど、会いに来てくれて丁度良かったよ。雪子ちゃん、ちょっと来て」

流石に謎の存在であるイザナミと戦っていたとは言えず、適当にはぐらかすと。僕は手招きして雪子ちゃんを呼んだ。雪子ちゃんは不思議そうな顔をしながらも素直にやってきたので、僕はしゃがむようにジェスチャーをする。

「しゃがめば良いの？　これでいい？」

「うん。じゃあ、ちょっと動かないでね」

雪子ちゃんがこっちの指示通りに僕の前でしゃがむと、僕は腕輪に入れておいたプレゼントを取り出す。それから少し頭を撫でて髪を整えると、僕は雪子ちゃんの頭に昨日買った赤いカチューシャを付けた。そして、ポジションを微調整してここだという位置が決まると、僕は腕輪から鏡を取り出して雪子ちゃんに渡してあげる。

「……これ、カチューシャ？」

「うん。千枝ちゃんに誕生日プレゼントあげるなら、雪子ちゃんには前のお礼に何かプレゼントしようと思ったんだ。昨日、ご飯食べた後に千枝ちゃんの意見を聞きつつ選んだんだよ？」

「そうそう。服とかアクセサリーとか色々あったけどさ。なんでも似合いそうだから逆に困っちゃって。でも、やっぱり雪子は赤が似合うね！」

「そ、そうかな？　でも、こんなの貰っちゃってもいいの？」

「気にしないでよ、お礼の気持ちだしさ。それに千枝ちゃんの言った通り、とっても似合ってるよ」

千枝ちゃんに似合っていると言われて恥ずかしそうにしている雪子ちゃんが、遠慮がちに聞いてくるので。僕はそれにお礼だから気にするなと返す。だが、まだ何か戸惑っているようなので、笑顔で似合っているというと。雪子ちゃんは顔を赤くして鏡で顔を隠してしまった。

うんうん、こういう初な感じのリアクションって可愛いよね。そう思いながら、鏡に手をかざして腕輪に仕舞い顔を隠すものを奪って

しまう。すると、急に顔を隠していた物がなくなった雪子ちゃんは驚いたようだ。

「あっ……。そ、その…あんまり褒めないで。似合ってるとか言われると、その、恥ずかしいから」

「良いじゃん別に。マジで雪子に似合ってるよ？」

「も、もう、分かったからっ」

恥ずかしがりながら、これ以上褒めるのをやめるように言う雪子ちゃん。だが、千枝ちゃんは何をそんなに気にしているんだと、軽いノリで褒め続ける。それがやはり恥ずかしいのか、雪子ちゃんの口調は少し怒り気味になってるな。それを見つつ苦笑していると、恥ずかしさでやや俯いていた雪子ちゃんが顔をあげて小さい声で話しかけてきた。

「…あの、2人ともありがとう」

「いいえ」

「気にしなさんな！」

そんな風に僕と千枝ちゃんは雪子ちゃんのお礼に笑顔で返事をした。雪子ちゃんもそれを見て嬉しそうにしている。そう、僕らをその少し隣で見ている同級生たちとは正反対に…。

「湊くーん、お姉さん達とちょーっとお話ししようかぁ？」

「いえ、僕の方からは別に話す事はなにもないので、壁とでもお

話ししておいて下さい」

「へぇ、中学生の子とは話せて私らとは話せないんだ？」

「君らとは向こうでも話せるけど、雪子ちゃんと千枝ちゃんとは今日しか話せないもの。優先順位はこっちの方が上でしょ」

やれやれといった感じに言い返すと、ゆかりはムスッとして、公子も理解は出来るが納得できないといった様子で「むぅ…」と唸っている。てか、そんな中学生を怯えさすようなことしないでよね。そう思ってジト目で公子のことを見ていると、千枝ちゃんが話しかけてきた。

「この人たちは湊くんの友達？」

「同じ学校の同級生だよ。まぁ、1人は従姉だけど」

「へぇ…んで、この中に彼女さんいたりする？」

「ちょ、ちょっと千枝！　急にそんなこと聞いたら失礼だよ」

「フフッ、別に良いよ。で、彼女だよね？　この中にはいないかな。てか、生まれてこの方僕に恋人がいた事とかないしね」

4人の方を見て悪戯っぽく笑って聞いてくる千枝ちゃんに、雪子ちゃんが焦りながら怒るが別にそんな気を遣わなくて良いのに。そう思いつつ笑って答えると、なぜか2人とも意外そうな表情で「へぇー」と言った。なんだ？それは僕が女遊びしてそうって意味なのか？僕はそんな風に心の中で相手のリアクションに小さく傷ついていると、雪子ちゃんが感心したような口調で話してくる。

「湊くんって、モテそうなのに意外だね」

「いまは恋人作る気が無いからね。ってか、自分のことで精一杯で余裕がないっていうのが正直なところかな。君らも受験に向けて頑張ってたら恋人作って遊ぼうとか思わないでしょ？」

「まぁねー。つか、別に好きな人もいないしね。けど、雪子は学校でもよく告られてるよ？」

「べ、別にそんな事ないからっ。もうっ、千枝は余計なこと言わないで！」

千枝ちゃんが僕の話に同意しつつ、雪子ちゃんの学校での様子を話してくると。雪子ちゃんは顔を赤くして、否定した。別に本当だろうが冗談だろうが気にしないけど、本人が嫌がっているならからかうのはやめておこう。そう思った僕は、雪子ちゃんではなく千枝ちゃんをからかうことにした。

「人の事言ってるけど、千枝ちゃんだって告白されたりしてんじゃないの？」

「あたし？　そんなの全然。むしろ男友達って感じに思われてる方が多いくらいだよ。ま、男子の持つ、“女の子のイメージ”とはかけ離れてるだろうから、当たり前っちゃ当たり前だけどね」

「そんな事ないでしょ。２人ともタイプは違うけど、僕は同じくらい可愛いと思うよ？」

「「なっ！？」」

ニッコリと笑いかけながら可愛いと褒めると、途端に言われた2人は驚き顔を赤くしている。本当は千枝ちゃんだけをからかう予定が、からかうことなくただ本当に思っていることを伝えるだけになるとは計算外だ。でもまぁ、表情がころころ変わって面白いので結果オーライとしよう。心の中で1人そんな風に考えていると、顔を赤くしたままの千枝ちゃんが口を開いた。

「ちょ、ちょっと、雪子はともかく私までからかうのやめてくれないかな？」

「わ、私だってからかわれたら困るわよ。けど、湊くんも笑顔でそうやって言ってくるのやめてよ。ビックリするから」

「からかってるつもりは無いけどね。きっと高校に入ったら色んな男子に声を掛けられると思うよ？」

「「も、もう、いいからっ！」」

「フフッ、はいはい」

照れて恥ずかしそうにしている2人にさらに言うと、揃って照れ隠しに怒ってきた。しかし、これ以上言うと流石に本気で怒ってきそうなので、僕もやめておく事にする。けど、本当に冗談抜きで2人はモテると思うけどね。うちの学校で言うところの公子とゆかり的な人気でさ。まぁ、全員タイプは違ってるけど、整った顔立ちしてるし性格も良いのは共通している。高校では密かにファンクラブでも出来たりして。

「はぁー…なんかすっごい顔熱い」

「フフッ、顔赤くなっててお風呂上がりみたいだね」

「湊くんがからかってきたせいでしょうが…。てか、さっきみたいなの地元とかでも言ってんの？」

「小さい頃から各地を転々としてたから地元ってのはないんだけど。まぁ、今住んでる地域の方では言ったりもするね。だって、素直に人褒めるのに言葉なんてそんなにないでしょ？」

顔を手でパタパタ扇いでる千枝ちゃんと、その隣に立っている雪子ちゃんに。同意を求めるよう、身振り手振りしながら言うと。なぜか、相手は疲れた表情をしている。そして、雪子ちゃんが少し暗い顔をして返事をしてきた。

「いや、千枝が言ったのはそういう意味じゃないと思うけど…。はぁー…なんか、前会った時とギャップがすごいね。私、湊くんはお兄さんっぽい感じの人だと思ってたんだけど」

「ん？　君ら高校生に夢見過ぎじゃない？　自分らの2年後を想像してごらんよ、身体ばっかり成長して中身あんまり変わってないでしょ。つまり、お兄さんっぽいイメージは見た目に騙されてるだけってことだよ。中身なんて大差ないって」

「それ高校受験する人に言う？　高校生活に色々と夢見てんのに、一気に夢がぶち壊れたじゃん」

「夢を見過ぎて現実を見れてない子供を、正しい方に導くのも大人の役目なんだよ」

「いーじゃん、夢見たって。こっちはまだ中学生なんだよ？　それに大人とか言ってるけど、中身はあたしらと変わんないって自分で言った直後だし」

ちょっと現実的なこと言うと千枝ちゃんは、拗ねたようにムスッとし。さらに僕をジト目で見てきた。だけど、僕は現実的な話をした理由を千枝ちゃんに説明する。

「いやいや、いつまでも子供の気分でいちゃダメだよ。千枝ちゃんは１５歳になったから、あと１年で結婚出来るんだし」

「あ、そうか。男の人は１８歳だけど女の人は１６歳だから、千枝もう来年の今日には結婚出来るんだ」

「い、いや、１６になったからって急に結婚したりしないからっ。つーか、相手もいないしっ」

「じゃあ、結婚する気になったら僕のこと貰ってよ。家事とかはちゃんとやるから、しっかり養ってね♪」

結婚について言われて焦っている千枝ちゃんに笑顔で言った直後、隣の方から頭を狙ってすごい勢いで靴やカバンが飛んできたのでノールックではたき落とし。さらに公子が椅子を踏み台にして踵落としをしてきたので、それも見ないで右手で止めた。ふぅ…４人はここが公共の場ってわかってんのかな？

「すみません、公共の場で危ないんでやめてもらえますか？」

「その手どけてもらえる？　中学生に結婚申し込む犯罪者の頭を、殴って正気に戻さないといけないからさ」

「うん、これおもいっきり蹴りだよね。てか、公子の蹴りだと正気に戻る前に昇天するからね」

「私は世の中の女の子のためを思えば、公子のそれも良いと思うけど？」

掴んでる間も足に力を籠めてきている公子に、呆れながら僕の言ったことに対し。少し離れた場所に座っている理緒がとても良い笑顔でエグイ事を言ってくる。理緒もこういう冗談言ったりするんだね…。そう思っていると、ゆかりが電話している声が聞こえてきた。

「あ、先輩。岳羽です。いま合宿先の旅館にいるんですが、湊君が15歳の誕生日を迎えたばかりの中学生に結婚を申し込んだんです。……はい、すごい楽しそうに言ってたんで本気だと思います。ええ、はい…はい…そうですね。私たちも参加するんで今夜は寮の女子全員で集まるという事で。はい、じゃあまた帰る前に連絡します《ピッ》」

「いまの女子会の連絡だよね？」

「違うよ？　桐条先輩主催の『道徳・倫理・一般常識』を湊君に教えてあげようっていう集まり。良かったね、湊君が大好きな女の子が5人も集まるよ」

「アイギスは正確にはガイノイドだけどね…。てか、知ってるから教えてくれなくていいよ。それなら、アイギスに教えてあげな」

本気で美鶴さんに電話したらしいゆかりに尋ねると、目だけ笑っていない笑顔で答えてきた。別に女の子大好きなんて設定はないはず

だが、他の人にはそう思われているのだろうか？まぁ、良いけどさ。そう思いつつ、目の前で突然の事に驚いている中学生2人に笑顔で話しかける。

「あ、気にしなくていいからね。うちの学校だと割とこういうの普通だから」

「そ、そうなの？　都会の学校って田舎と全然違うんだね」

「いや、そんな訳ないから…。なんでも信じちゃだめだよ雪子」

僕の冗談を真に受けた雪子ちゃんに、千枝ちゃんはそんな風に注意する。てか、僕の言ったことが都会の方では普通だと思ったのか雪子ちゃん。きっと純粋なんだろうな…。そう考えつつ、怒っている4人を適当になだめ、僕らは今日は暇だという2人と一緒に交流会の2日目を過ごしたのだった。

夕方――八十稲羽駅ホーム

八十稲羽高校で軽く合同練習の後、向こうの生徒さんらと別れ僕たちは駅までやってきた。お見送りで雪子ちゃんと千枝ちゃんが来てくれたが、電車がくるまでもう少しだな。そんな風に時間を確認してケータイを仕舞っていると、千枝ちゃんと雪子ちゃんが話しかけてきた。

「じゃあ、またね湊くん」

「また休みがあったら遊びにきてね」

「うん。君らも元気でね」

そういって僕は2人の頭を撫でると、2人は少し恥ずかしそうにしている。公子らや他の部員の何人かがこっちを見ているが、見てくんなと言いたい。何故なら少し恥ずかしそうにしながら笑っている2人に、邪まな視線を送っている男子が何人かいるからだ。

2人に見えないようにしながら、そいつらに絶対零度の微笑を向け顔を逸らさせると。僕は撫でるのをやめた。そして、顔をあげた雪子ちゃんが口を開く。

「たまには連絡くれる？」

「ケータイ持ってないとちょっと難しいかな？　手紙ってのも趣があっていいとは思うけど」

「あー、あたし親に、高校決まるまでケータイはダメって言われてるからなぁ」

「うちもそうだよ。ケータイがあると、どうしても気が散って勉強しなくなるからって。別にそんなことないと思うけどね」

千枝ちゃんと雪子ちゃんは、高校までケータイはダメと言われている事に不満を持っているようだが。ご両親の考えは間違っちゃいないと思うけどね。だって、2人はいま実際に友達との連絡のためにケータイを欲しがっているのだから。こんだけ欲しがっているなら、実際に持ったら少しの間は毎日のように電話やメールをするに違いない。

「僕の番号とアドレス教えておくから買ったら連絡してきてよ。それまでは家の電話とかでかけてきたら、こっちからかけ直してあげるし」

「え？　なんでわざわざかけ直すの？」

「君ら電話代知らないの？　家電からケータイにかけたら馬鹿高いんだよ。そんな事してたら2人のご両親が困るだろうから、電話代気にしなくていいこっちからかけるの」

「ふーん、そっか。んじゃ、あたしの家の番号教えておくからケータイ貸して」

そういって千枝ちゃんが手を向けてきたので、ポケットからケータイを取り出すと彼女に渡す。持ってなくてもある程度の使い方は分かるらしく、アドレス帳に自分の名前と家の電話番号。そして、誕生日や好きな物を打ち込み登録したようだ。そして、僕に返すかと思いきや、千枝ちゃんはそのまま雪子ちゃんにケータイを渡した。

「ほい、雪子。雪子も誕生日とか好きな物登録しておきな」

「た、誕生日は良いけど別に好きな物はいいでしょ」

千枝ちゃんからケータイを受け取った雪子ちゃんは、同じように名前や電話番号を登録しながら苦笑している。まぁ、登録してたら誕生日に贈ってもいいけどさ。『肉ッ！！』とか登録されても、なんのだよって話し。わざと魚肉とかあげたくなるよ。

「うん、登録出来た。はい、湊くん」

「あ、もっかい貸して」

「え？　うん、はい」

登録を終えた雪子ちゃんがケータイを返してくると、千枝ちゃんがもう一度貸してと言うので渡した。なんか嫌な予感というか次の行動が読める気がするよ。そう、たぶん千枝ちゃんはアドレス帳で女子の登録件数を見ているはずだ。そう思っていると、案の定千枝ちゃんが声をあげた。

「うっわー、アドレス帳の名前女子ばっかり…」

「さらっと、嘘つくな女子中学生。ちゃんと男子も同じくらい登録してるから」

「異性と同性の登録数が同じくらいって、それだと男子が少ないのか女子が多いかって事じゃないの？」

「……雪子ちゃんの突っ込みって鋭いを超えて突き刺さるレベルだね。いや、言ってる事は間違ってないんだけどさ。こう、心に直接ダメージがくるような…ね」

別に友人の男女比を悩んだ事はないが、改めて年下の子にまで言われると何か考えさせられるものがある。しかも、千枝ちゃんのような悪戯心すらない１００％素の感想っていうのが、また攻撃力を上げている要因だろう。きっと将来は素でドSなことをいう女と言う事で、密かにMの男に人気が出るに違いない。

「ま、まぁ、人の交友関係は気にしないでよ」

「でも、中学生に養ってもらおうとする危ない人じゃん」

「いや、あれ冗談だからね。ってか、言われて顔真っ赤にしてた

くせに今さら余裕かまさないでよ」

「う、うっさいなぁ。会ったばっかで中学生を口説いてくるとは普通思わんでしょうが」

そういって千枝ちゃんは顔を少し赤くしてそっぽ向けた。そんな事しても可愛いだけなんだけどね。そう思いつつ、笑ってみていると電車が遠くからやってきた。そして、一緒に笑っていた雪子ちゃんもそれに気付く。

「あ、電車きたね。それじゃあ湊くん、バイバイ」

「たまに連絡するから」

「うん、2人も元気でね。……なにかあったら連絡して。2人のことは絶対に守るから」

「…??　良く分かんないけど、わかった。なんか困った事があったら連絡するから」

「湊くんも何かあったら私たちに連絡してね」

昨日のイザナミの残した言葉が気になり2人に声をかけるが、何も知らない2人はなんの話だと不思議そうな表情をする。けど、あいつは力が集まったらここでまた何かをするのだろう。そのとき狙われるのは、僕かこの2人か、また別の人か…。それは分からないが、この街で何かが起これば巻き込まれる可能性がある。だから、そのときは全力で2人を守ろうと心に誓った。

「じゃあ、本当にさよなら。また会おうね」

「うん、プレゼントありがとう。これ大切にするから。またね」

「もう中学生を口説いちゃダメだよ。またね」

笑いながら言ってきた2人の手を振ると、僕は荷物を持って電車に乗った。2人にはちゃんとケータイの番号とアドレス書いた紙を渡しておいたので、暇があったら連絡して来るだろう。合宿自体はそこまで面白いと思わなかったけど、彼女らと仲良くなれたのは良かったと思う。こうして僕らの合宿は終わりを告げたのだった。

夜――ラウンジ

合宿を終え電車でこっちまで戻ってくると駅で解散した。そして、初日のマラソンの景品について公子とゆかりと話しながら帰ってくると。寮のラウンジにはみんなが揃っていた。そして、中に入ると順平が話しかけてきた。

「…ういっす、おかえりー。よう、合宿どうだった？　向こうのガッコにカワイイ子いた？」

「向こう学校じゃないけど、いたよー。2人も」

「マジかよ！　あー、オレも合宿ついて行けば良かったなぁ」

「まぁ、相手は中学3年生だし。どっかの誰かさんは初日で2人で食事に行ったり。帰りの電車待ってる間に連絡先を交換したりしてたけどね」

女の子の話を聞いてきた順平に公子が笑顔で答えると、順平はとても悔しそうな顔をした。だが、それに続けて公子が僕の方をジト目

で見ながら話すと、途端に順平と先輩らは呆れた表情になり。風花は可哀想な物を見る目つきで見てきて、アイギスは良く分からないのか首をかしげている。

「……有里、お前はなんのために合宿に行ってきたんだ」

「流石に中学生は危ないんじゃないかな……」

「湊、相手が16歳になったからといってすぐ結婚出来るわけじゃないんだぞ？　そもそも、君は18歳になるまで結婚できないし、未成年の場合は親権者などの同意が必要になってくる。付き合う分には構わないが、結婚についてはもっと慎重に考えたらどうだ。それに、以前キスした少女もいるのだろう？　一目惚れというものもあるのだろうが、結婚は女性関係を全て解決してからすべきだと思うぞ」

「あー…はい、そうですね。もう何か面倒なんで、どうでもいいです」

美鶴さんにこんな態度を取るつもりはなかったが、帰りの電車でも色々と言われ続け。４人が寝たり席を外して解放されたかと思うと、今度は男子たちが話しかけられていた。面倒だったので「予約済みだから手出すなよ」と適当に脅してそいつらは黙らせたが。精神的に疲れている状態でここまで真面目に言われれば、流石にこんな態度になってもしょうがないだろう。

「つーか、写真とか撮ってねえの？　姿が分かんねえと、なんも言えねえよ」

「写メだったら湊君が撮ってたと思うよ。交流会の間、自分の番

とかアドバイス求められた時以外は、基本的に3人でいたし」

「そっか。湊、写メみしてくれよ」

雪子ちゃんと千枝ちゃんの写真がないかと聞いてきた順平にゆかりが答えると。順平は軽い調子で俺に写真を見せてくれと言ってきた。てか、もう疲れてる状態で相手するのが面倒過ぎる。そう思った俺はケータイを取り出すと、データフォルダを開いた状態で順平に投げ渡した。チドリとのキス写真はロックフォルダに入れてるし、メールフォルダとアドレス帳もさっきロックしたので安全だ。

「……勝手に見てろ、俺はもう休む。見終わったら充電しとけよ。明日使ってるうちに電池減ったらお前らのケータイ逆パカっすかんな。んで、スライド式ってんなら、限界超えてスライドさせきるし。スマートフォンならフツノミタマでさらにスマートにしてやる」

「わ、わかった。ちゃんと、充電しとくよ。つ、疲れてんだろ？静かにしてるからゆっくり休めよな」

「ああ、お前らも適当に休めよ。じゃあな」

俺は少し驚いた様子のみんなにそれだけ言い残すと、部屋に戻って休むことにした。

影時間――自室

部屋に戻ってすぐにベッドで寝ていると、何かの気配がする。いや、いつものか。そう思って目を開き身体を起こすと、ベッドの近くにファルロスが立っていた。

「やあ、こんばんは。それにしても…君の周りもだいぶ賑やかに

なって来たよね。どう？　みんなとは、うまくやれてる？」

「さぁね…まぁ、それなりに？」

「命を預ける関係なんだから、大事にしなきゃ」

ファルロスは少し怒った表情をすると僕を注意してくる。それに笑って「はいはい」と答えると、相手は話を続ける。

「…あと1週間で、次の満月だよ。準備は出来てるかい…？　って、最近は、あんまり心配してないけどね」

そこで1度区切り笑顔を見せるファルロス。だが、すぐに少し暗い表情になると、真剣な口調で話してきた。

「でも、気をつけて。昨日の夜に君が戦った相手じゃないけど、なにかイレギュラーな気配を感じるから。それが何かは僕にも分からない。でも、本当に気を付けてね。……また、会いに来るよ」

そういうと、ファルロスは消えてしまった。イレギュラーな存在？昨日のイザナミみたいなヤツの事か？そんな風に考えたが、結局答えは分からない。なので、僕は考える事をやめると再び寝直したのだった。

第四十六話（後書き）

千枝の「雪子は赤が似合うね」をここで捏造してみました。そして、湊が２人を守ることを約束したので、ペルソナ４の話を書くときにはチョロっと登場させたいと思います。

一応言っておきますと、２人とは仲良くなってますが彼女らは４主人公のハーレム構成員なので、湊との間にフラグは建築されていません。まぁ、多少はされているかもしれませんが、もうＲｅ：Ｃａｌｌ本編には名前や電話でしか登場しないので、進展はしないです。

第四十七話　前編（前書き）

この作品内のオリジナル設定で、オルギア・モード発動中はアイギスの瞳が青から赤に変わるようにしています。

それと、この第四十七話で実質『第一部』終了なんですが、章で分けると大型シャドウ戦してないんで中途半端になってしまうんですよね。ここで切って、次の章でジャスティス＆チャリオッツとハーミットやらせるか悩みます…。

第四十七話　前編

８／１（土）
昼前――自室
一昨日、合宿から帰り。次の日である昨日は１日寝ていた。起きたのは３時過ぎで支度をしてラウンジへ降りると、なぜか少しビクビクしていたメンバーらがいた。しかし、なにかの不安がなくなるとケータイに入ってた画像について色々と訊かれたので、答えたりしているうちに１日が終わってしまった。

「はぁ、昨日は贅沢な休日の使い方をしてしまった。だけど、起きた後に屋久島での写真について聞かれたのは結構疲れたな」

『それもしょうがないんじゃない？　だって、何人もの女性と一緒に写真撮ってたんだもの』

「いや、元々は順平が言いだした企画じゃん。それ説明したら順平と真田先輩が叫んでたけど、向こうはちゃんと写真撮影できたのかな？」

『さあ？　けど、どっちにしろ１０人も集まってなかったみたいで、貴方の１人勝ちって話で終わったでしょ』

ベッドから出て顔を洗っていると、彼女が後ろに浮かびながら話しかけてくる。まぁ、確かに言った通り僕の１人勝ちってことで終わったけど、やけに女子たちが怒ってたっけ。理事長に戦車探しさせられてたときに、ナンパなんかして遊んでたのかって。

僕は一応、人命救助とか迷子の案内してたから、そんなでもなかっ

たけど。2人は美鶴さんに氷漬けにされかけていたな。今日、頑張ってタルタロスで鍛える予定だから、やめてくれって言って逃れてたけど、本当に行くつもりなのだろうか？

「今週が満月だから今日はたぶん、僕も参加させられるな…」

『まぁ、アイギスも参戦するようになったんだから、動きを見といたら良いじゃない。それに腕の銃火器以外にも、徒手空拳での戦い方を教えてもいいでしょうしね』

「あー…そうか、銃弾がなくなっても戦えないとマズイもんね。美鶴さんとかラボの方に言って、格闘系のデータをインストールさせておいてもらおうか。よし」

そんな風に今後やることを決めると、僕は服を着替えて自分の部屋を出た。

――ラウンジ

着替えて部屋を出てラウンジに下りていくと、ラウンジに順平と天田少年を除く全員が揃っていた。そして、僕が階段を下りていく音で気付いた公子が声をかけてきた。

「おはよう、湊君」

「うん、おはよう。順平と天田少年はまだ寝てるの？」

「天田君はいつもの長鳴神社だよ、順平はまだ寝てるっぽいけどね。けど、なんで湊君は天田君を天田少年って呼ぶの？」

テーブルで少し遅い朝食を食べていた公子に挨拶を返して尋ねると、

公子はコーヒーのカップから口を離して答えた。しかし、僕の天田少年の呼び方が気になったのか、少し不思議そうに尋ねてきたので、僕も向かいの席に座って答える。

「とくに意味は無いよ。まぁ、彼も戦うようになったら“天田”って呼び捨てにすると思うけど」

「……そうならないと良いな。いくら戦える力があったとしても、天田君はまだ小学生なんだもん」

「関係ないでしょ。世界ではもっと小さい頃から兵士としての洗脳教育を行われて、9歳とかで銃持って戦ってる子もいるんだから。それに比べたらこの活動は“化け物”が相手な分、精神衛生的にも楽だと思うよ？」

公子が少し表情を暗くして天田少年が部活に参加することがないよう願ったので、僕はそれに淡々と返すと一度言葉を区切る。すでに朝食を食べ終えた公子は真面目な表情で聞いているので、僕はさらに言葉を続けることにした。

「それに戦う理由も『無気力症の人を救う』とか、『一般人が襲われないようにする』って分かりやすいものだしね。『神のための聖戦』なんて理由で人を殺させる戦争より、よっぽど綺麗なもんだよ。勿論、本人の意思が重要だけど、彼が戦う事を決めたなら他の人間はなにも言っちゃいけない。ペルソナっていう、大人も簡単に倒せる力を得たなら、『子供』であることなんて戦わせない理由にはならないからね」

「随分とドライな考え方だね。まぁ、私も頭では理解出来るんだけどさ。そこまで割り切って考えたりできないもんなのよ。思考と

感情を分ける草摩の教育受けてる私でこうなんだから、他の人なんてもっとそうだと思うよ？」

「ま、そうだろうね。僕はそういったものに感情が震えることがないから想像しか出来ないけど。他の人が悩んでるのも分かってるから、そこまで否定しようとは思わないよ。でも、現段階で戦う可能性があるんだ。だから、そんな願ってばっかりいないで、少しは覚悟しとけって話し」

「はぁ…湊君は優しいんだか、ドSなのかよく分からないね。いや、先に心配して言ってくれてるのは分かるけど。悩んでる人をさらに追い詰めるセリフだからね、それ？　ま、ここは素直に聞いておくけどさ」

そう言ってテーブルに肘をついて苦笑する公子。ソファーの方に座っている他の人も、話は聞こえていたはずだ。向こうの雰囲気がちょっと硬くなってるのが分かるしね。でも、公子にも言った通り。各自で覚悟しておいてもらわないと、戦闘になった時に彼にばかり気がいっては困るからね。非正規のメンバーとはいえ、リーダーを任されることもある身としては言っておかなくてはならないのだ。

そんな風に思いつつ、公子が食器を片付けるために席を立ったので。僕も席を立ちソファーの方へ向かい美鶴さんにさっき考えた事を伝える。

「美鶴さん、アイギスについてお願いがあるんですけど」

「ん？　なんだ、言ってみろ。聞ける事なら聞こうじゃないか」

「戦闘時に弾薬がなくなった場合や、貫通属性の攻撃が効かない

相手にペルソナ無しで立ち向かう可能性を考慮して。アイギスに徒手格闘用のデータをいくらかインストールしておいて欲しいんです。それに乱戦になった場合、味方に当たる可能性もありますから銃火器は使えなくなってしまいますし」

「ふむ、そうだな。…わかった、ラボの方に伝えて用意させておこう。今度の大型シャドウまでには間に合うはずだ」

僕が戦闘時のことを考えて、アイギスについてお願いすると。少し考えた顔をした後に頷き、美鶴さんは笑顔で了承してくれた。僕もそれに笑顔でお礼を言うと、今度は他の人にも今夜タルタロスに向かう事を伝える。

「昨日、順平と真田先輩が言ってたし今夜はタルタロスに行こうと思うんだけど、用事ある人いるかな？」

「俺は大丈夫だ。最近、トレーニングばかりだったからな。満月までに実戦の感覚をしっかりと維持しよう」

「そうですね。アイギスも増えたし私もちゃんとバックアップしなきゃ」

僕が予定を聞くと真田先輩が大丈夫だといって頷く。そして、風花もそれに頷きやる気は十分のようだ。他の人も見まわすと同じように頷いてるし、あとは順平が起きてから聞く事にしよう。そう考え、先にアイギスの戦闘方法などについて本人から聞いておくことにした。

「ところでアイギス。君が銃火器で戦うのは分かったけど、他の仕様も教えといてくれる？」

「了解しました。わたしには、特別な機能が搭載されているであります。オルギア・モードについてご説明するであります」

アイギスはそういうと立ちあがって、真面目な顔で説明を始めた。

「これは、わたしのリミッターを、一時的に強制解除するモードの事であります。オルギア・モード発動中は、一時的に攻撃力が大幅に高まります。ただ、思考による制動も一部解除されるため、その間は完全自律行動となります。また、いったんオルギアを発動すると、オーバーヒートするまで止まれません。オーバーヒートからの回復には、相応の時間を要するであります。オルギア発動を維持できる時間はわずか。使い所が肝心であります。説明は以上です…。復唱は必要でしょうか？」

「いや、大丈夫だよ。でも、オルギア使用後にメンテナンスとかって必要なの？」

「特別損傷してない限りは、オーバーヒートの熱が冷めれば問題ないであります」

「ふーん、そっか。んじゃあ、屋上でちょっと戦おうか。他の人も見た方が分かりやすいと思うし」

オルギア・モードの説明を終えたアイギスに笑顔で言って立ち上がると、僕は階段を指差して屋上へ向かうようアイギスに言う。すると、他の人は少し驚いているようだ。

「屋上でって、まだ昼にもなってない時間だぞ？　大丈夫なのか？」

「い、いや、それより湊君ってアイギスと戦えるの？」

「なんで？　パピヨンハートとかっていうのがアイギスの心が宿ってるものなら、ボディぐらい大破させても問題ないでしょ？」

「さすがに大破させられては私たちも困るが…」

「いいから、みんなも行くよ。どんなものか知っといた方がいいでしょ？」

困惑気味のメンバーらに公子が声をかけると、他の人もゆっくりだが立ちあがり僕らについてきた。そして、僕らは模擬戦のために屋上へ向かった。

――屋上

屋上に向かう途中にアイギスには実弾ではなく、ゴム弾に変えるように指示をして弾薬を換装させた。まぁ、ゴム弾って言っても当たれば骨が折れたりは普通にするんだけどね。そんな事を考えながら屋上に着くと、メンバーらは入り口近くにいさせて僕とアイギスだけが屋上の真ん中で対峙する。

「準備はいいかい？　思考能力があるうちに言っておくけど、ペルソナを使っても構わないからね。オルギアの発動タイミングは任せるけど、殺す気できな」

「あなたを殺すくらいならわたしは自爆を選びます。ですが、命令とあらば殺す気はありませんが、本気で戦うであります」

「うん、それでいいよ。じゃあ、はじめようか」

僕はそういうと鞘に入れっぱなしの日本刀を構える。これは前に黒沢さんのところで買ったものだ。流石にみんなと模擬戦するときにフツノミタマだと危ないからね。鞘に入れっぱなしなのは、いざとなれば鞘と刀の二刀流に変更できるためだし。刀では折れてしまうかもしれない使い方も安心してできるからという訳だ。そう考えている間にニコニコと笑っていた顔から表情を消し、相手に向けて殺気を放つ。そして、公子がコールした。

「それじゃあ、模擬戦開始！」

「いきますっ！」

「……こい」

公子がコールした瞬間、アイギスは最大速力で僕へと向かってきた。だけど、僕は自分でもっと速く動ける。なので、急に来ようが対応できるのだ。それを見せつけるように相手の横をすり抜け、刀の柄を眉間にぶち当てる。

《ガスンッ》

「ぐっ」

「甘いよ、それで本気なの？　それじゃあ、僕は君を戦闘には連れていけないな」

「まだですっ」

《ジャキンッ！　ダダダダダダッ》

アイギスは体勢を立て直すとすぐに僕に両腕を向けて銃を撃ってき

た。僕はそれを後ろに跳躍しながら、武器で弾いていく。すると、アイギスは銃を撃ちながら、ペルソナを召喚した。

「ペルソナッ！　キルラッシュ！」

命令を受けたペルソナ“パラディオン”は、アイギスの攻撃の射線を塞がぬよう浮かび上がりながら僕の方へと突進してきた。こっちからだとペルソナでアイギスの姿が隠れて、銃弾の発射口がわからないな。そう思っている間も銃弾は飛んできているし、パラディオンも迫っている。なので、僕はアイギスがいる地点を中心に円を描くように動き始めた。

「パラディオンそのまま追って！」

《ダダダダダダダッ》

「弾の無駄遣いだよ。それに身を守る鎧を自分から離して、どうやって敵から身を守るの？」

感情の籠っていない言葉をアイギスに放つと、僕は途中で進路を変えてアイギスへと向かっていく。手の向きで弾丸の軌道は予測できるし、こっちは魔力を使ってさらに加速できるからね。さっさとオルギア・モードを使わせるため僕はジグザグに走りながら、アイギスへと接近した。

「速いっ！？　マシンガンの弾を生身で避けるなんてっ」

「この距離なら銃なんてなんの役にも立たないね」

《ドゴン！》

「あぐっ」

驚いているアイギスへと接近し、そのままの勢いで膝蹴りを胸に叩きこむとアイギスは衝撃に声をあげた。だけど、こっちの攻撃はまだ終わっていない。蹴りの威力で身体が浮いたアイギスの腕を掴むと、僕は片手で引っ張りこっちに戻ってきたアイギスのボディに回し蹴りを放って遠くへと転がす。

《ガシャンっ》

「あぁっ」

「使いなよ、オルギア・モード。いまの君のパワーじゃ僕には勝てない」

「くっ、発動ッ、オルギア・モード！」

《キュイイイイイイイイイン》

アイギスがオルギア・モードの発動した瞬間、アイギスのヘッドホン型のユニットが高速で回転し始めた。そして、さらに普段は青色の瞳が赤に変わり、そこから人間らしさの光が消えた。

「……」

《ガシュンッ》

普段よりも機械的な雰囲気を発したアイギスは言い終わると、さっきよりも速い速度で接近してきた。けど、これじゃあ速度が上がっただけで大して変わらないぞ？そう思っていると、走りながら右手をこちらに向け、左手でそれを支えながら撃ってきた。

《ダダダダダダダッ》

「おっと、器用な真似するな…」

「……」

「力で勝てるとでも？」

銃弾を左右に避ける事で相手を観察していると、接近してきたアイギスは撃つのを止めて僕に両腕を伸ばしてきた。拘束するって言ったけど、人間の骨が簡単に折れるほどの力で言われてもね。そう思いながら、刀を仕舞うと真っ向から受け止め組み合う形になった。

魔力で身体の硬さを強化してて良かったよ。じゃないと、両手が使い物にならなくなるとこだった。そんな風に相手のパワーに感心してる間も、押し合いは続いている。てか、その反動で屋上の床の表面が削れてるんですけど…。

「ッ！！」

「確かにすごい力だね。速度も速くなってたし、それに合わせて弾幕で敵の動きを制限して仕留めにくるのも良いと思うよ」

「……ッ！！」

「……十分な戦力になるのは分かった。でも、僕の方が君よりも速いし力も強いんだよ！」

そう言うと僕は力を上げてアイギスをドンドン押していく。身長差はあんまりないけど、それでも僕の方が背が高い。だから、少し上から押し込む事が出来るのだ。そうやって力を上げ続けるとついにアイギスは膝を折って地面につけた。

《ガシャン…》
「……ッ」

「膝ついて終わりになるとでも思った？　相手が戦える状態で離すわけないだろ」

僕は、まだ必死にこっちを押しているアイギスに言うと、そのまま相手が仰向けになる状態で押し倒す形になる。完全にお尻ついちゃってるけど、蹴りを放てないよう僕も足で相手の足を押さえているので、アイギスができることは無くなってしまった。

そして、フッと力が抜けたかと思うと、アイギスの瞳の色が青色に戻り。高速で回転していたユニットは停止して煙が出ている。別に変なニオイはしないから単純にオーバーヒートの熱を逃がしているみたいだな。

「はぁ…はぁ…」

「お疲れ様。あれだけの力があるなら大丈夫だよ、今夜の探索にも参加してね」

「は、はい…はぁ…了解です…」

アイギスはロボットなのになぜか息切れをしている。だがまぁ、ちゃんと返事もしたし気にしなくて良いや思う事にした。そして、ガッチリ組んでいた手を離すと1度離れて、疲れた様子のアイギスをお姫様抱っこする。そうして、僕はアイギスを抱っこしたまま屋上の入り口で見ていたみんなのところへ向かった。

「やぁ、オルギア・モードがどんなものか理解できた？」

「そうだな。パワーとスピードがかなり上がるのは分かったが、ペルソナの召喚はどうなんだ？」

「ペルソナの召喚も可能ですが、敵殲滅型の思考に切り替わっているので補助スキルなどは使えません。攻撃系のスキルのみ発動可能であります」

「そっか。なら、アイギスがオルギア・モードになってるときは、私らが補助にまわった方が良いね」

美鶴さんの尋ねられアイギスが答えると、公子はそう言って「フムフム」と何か考えている。銃火器っていう遠距離武器に加えて、聞いてた使えるスキルの関係上アイギスは後衛型だ。でも、公子が言った通り、オルギア・モード中は攻撃特化の前衛型になるようだし。それに合わせてみんなの動きも考えておいた方が良いだろう。

「しかし、普段はアイギスを優遇しているくせに、本当に容赦していなかったな」

「ていうか、生で走って弾丸避けるの見れるとは思ってなかったよ。２人とも真剣にやってるのに映画みたいでちょっと面白かったかも」

「しかも、そのあとは正面からの力勝負だもんね。ロボット相手に押し勝つとかどんなパワーよ…」

……他の３人も公子と美鶴さんみたいにオルギア・モードとか、それを使っている場面で自分がどう動くかとか考えなよ。そんな風に

呆れつつも、僕らは下に戻ると起きてきた順平に説明し、影時間になってからタルタロスへと向かったのだった。

影時間――市街地　〜公子　Ｓｉｄｅ〜

影時間になり今日は久しぶりにタルタロスの探索を行った。アイギスという新しいメンバーが入ってからは初の戦闘だったけど、特に問題なくチームワークを発揮する事ができていたと思う。そうして、私たちはいま寮に向かって帰っているところだ。

「しっかし、オレらも結構な大所帯になってきたよな。そう考えっとリーダーが2人いるってのプラスだよな」

「まぁね、2チームにしたら人数合わないけど、少ない方には湊君がいれば安心だしね」

「そうだな。使用可能スキルや弱点などを考慮してチーム分けするなら。Aチーム『湊、伊織、岳羽』Bチーム『草摩、明彦、私、アイギス、山岸』といったところか」

「逆に寄せてもいいと思いますよ？　湊くんの方にゆかりとアイギスを入れて、順平を私の方に入れるんです。そうすれば、こっちは全体でフォローできるし、湊君は2人の弱点の雷のスキル持ちに集中できますから」

桐条先輩の考えたチーム分けに別の案を伝えると、先輩は「それもいいな」と頷いている。本当なら湊くんの単独突破が最強なんだけど、チームで行動するなら湊君はフォローにまわる。なので、どうせならそのフォローする範囲を狭めて攻撃に集中できるようにした方が良いと思ったのだ。

「あんまり頼りにされても困るんですけどね。僕だってすぐにフォロー入れるばっかりじゃないし」

「そうは言っても、実際に全体をフォロー出来ているしな。この人数の動き全てを把握し、フォローしながら指示を出す。1人で何役こなしているんだと思ったくらいだ」

「山岸がアナライズしていれば、湊は他の敵のアナライズをしていたからな。非常に効率的な攻め方が可能になった」

真田先輩の言葉に同意しつつ桐条先輩は満足げに笑っている。確かに久しぶりの探索にも関わらず、今日はみんな調子が良かった。上手くフォローしあえていたし、個々の戦闘スキルも以前よりずっと上がっていた。なんだかんだ、みんなもトレーニングを続けていたので、その成果は十分あったという訳だ。

「この調子なら今週の満月もなんとかいけそうですね」

「あんま油断してやられないでよ？　あんたが倒れたら、湊君かアイギスが運ばなくちゃいけないんだからね？」

「やられねぇっつの！　てか、倒れる心配オレだけかよっ！」

ゆかりに言われて順平が焦ったように言い返す。その様子を見て思わずみんなが笑っていると、突然それは現れた。

《ジャラ…》

「っ！？　シャドウの反応！　敵です！」

「なっ、街中にシャドウ反応だと!?　まだ満月じゃないぞ!」

風花が突然声をあげたかと思えば、それを聞いて真田先輩が驚いている。確かに街中にシャドウが出るには早過ぎる。大型シャドウではないとすればイレギュラーか?そう思って周囲を警戒していると、風花がさらに続けた。

「敵の反応は…っ!?　死神ですっ、死神タイプです!」

「馬鹿なっ、やつが街中に現れるだとっ!?」

「え?　なんスか?　やつってその死神タイプとか言うのはそんなヤバいやつんスか?」

「忘れたのか、シャドウのアルカナは魔術師から刑死者の12種類だ。死神なんてものは存在しない。だが唯一の例外が死神タイプ“刈り取る者”だ!　マズイ、全員逃げるぞっ。勝てる相手じゃないっ」

桐条先輩が焦ったように言うと、順平やゆかりも状況のマズさを理解したのか緊張した表情になる。私も話だけは聞いてたけど、まさか遭遇することになるなんてっ。

「山岸、敵の位置は?　反対側に急いで逃げるぞ」

「敵の位置……正面ですっ。で、ですがもうすぐそばに!」

《ジャララ…》

風花が言った直後に私たちもその姿を肉眼で捉えることが出来た。

血塗られた仮面とコート、身体のまわりに浮くように存在する鎖、ロングバレルの2丁拳銃、そのどれもが異様さを放っている。だが、なによりも異様なのはその雰囲気だ。まるで周囲の生物から生気を吸っているかのような、死を撒き散らすイメージ。

それが私がやつをみて思った事だ。他のみんなも相手のその雰囲気にのまれてしまっている。そう、逃げる事も忘れこんな事していたのが私たちのおかした致命的なミスだった。相手が頭の上で両方の銃を当てたかと思うと、私たちめがけて凄まじい雷が放たれたのだ。それに気付いたときにはもう避ける事はできない距離だった。

《ドゴーンッ！！》

「「「きゃあっ！！」」」「「うわぁっ！！」」」「「あぁっ！！」」」

雷が迫ってきたと分かった瞬間に私たちは衝撃で飛ばされていた。敵の放った雷が目の前で爆発し、その余波で吹き飛ばされたのだ。だけど、攻撃の余波で吹き飛ばされただけなので、怪我は軽い。これなら態勢を立て直して逃げれるかもしれない。起き上がりながらそう思って、敵に視線を送るとその途中に倒れている人がいた。

「っ！？　湊君っ！？」

声をあげつつ状況を理解する。そう、さっきの雷は偶然外れて目の前に当たったんじゃない。攻撃の予兆を感知した湊君が、ギリギリのところでそれを受けたのだ。私たちはそのおかげで攻撃の余波だけを受けて吹き飛ばされた。だが、その攻撃をまともに受けた人間はどうなる？いくら速いといっても雷ほどではない。しかも、あのタイミングではまともに防御もできていないはずだ。つまり、湊君

は生身であの威力を受けてしまった。

「そ、そんな…」

「クソッ、有里っ！　聞こえてるか、有里っ！！」

「ぜ、全然、動いてないよ…」

他のみんなも自分が無事な理由を理解し、立ち上がりながら湊君に声をかけるがピクリとも動かない。身体から煙がたち、近くにはフツノミタマが転がっている。敵が再び動き始めたが、私はそれにも構わず湊君の元へ走っていた。

「行くな、草摩！」

「先輩たちは逃げてっ、私は湊君を連れて逃げるから！」

「っ！？　公子ちゃん、避けてっ！」

「なっ！？」

風花に言われて前に視線を戻すと、敵がまた魔法を放つ構えに移っていた。思わず身体の前で腕を交差させてガードを体勢を取るが、今度の攻撃は私たちの知っているどの魔法とも違うものだった。超高密度のエネルギーのようなものが発生したかと思うと、それは私たちのいる辺りに落下し、周囲の物ごと私たちを吹き飛ばした。

《ドゴォオオオオンッ》

そして、私たちは吹き飛ばされる感覚の中、その轟音にのまれた。

第四十七話　前編（後書き）

中編に続きます。

あ、死神と出会った場所はとくにイメージはありませんが、都会の片側2車線か3車線あるような広い場所を想像してください。深夜ということで車や人はいない設定ですけど。

第四十七話　中編（前書き）

今回の話でいままで『謎の声の女』や『金髪の少女』と呼ばれていたキャラが実体で登場します。名前も最後に呼びますので、みなさんの予想が当たっていたか答え合わせしてみてください。

第四十七話　中編

――市街地　〈公子　Ｓｉｄｅ〉

耳が聞こえない。自分が吹き飛ばされているのだけが分かる。あ、落下した。いま地面を転がってる。そんな風にどこか他人ごとのように自分の状況を理解する。しかし、少し経つと感覚が戻ってきた。身体中が痛む。右腕が熱い、そして変な方向へと曲がってる。骨が折れてしまっているようだ。

「ぐっ……あ…」

呻き声をあげながら顔だけなんとか動かし、まわりの状況を見てみた。かなり大きめの道路だったのが幸いし、周囲の建物への被害はない。しかし、アスファルトが粉々になりクレーターが出来ている。さっきの魔法はあそこに落ちたらしい。

「げほっ…げほっ…」

咳き込んだ拍子に口から血を吐く。さっきから口の中が鉄の味しかしないと思ったら、血が出ていたのか。内臓にもダメージがあるみたいだし、当然か。そんな風に考えながらさらに周囲を見ると、私の仲間が倒れているのが見えた。みんな倒れてる。誰１人としてピクリとも動かない。

《ジャラ…》

頭の働かない状態で仲間が倒れているのを見ていると、金属の音が聞こえた。その方向に顔を向けると、さっきの敵がいた。なんだ、まだいたのか。もう、放っておいて欲しい。どうせこのままにして

いても死ぬだろう。なのにあいつはまだ何かするつもりなのか。

そう考えていると、またあいつは魔法を放つ体勢になっていた。眩い光が見える。きっと最初に放ってきた雷だろう。そんな風にのんきに考えていると、案の定、敵は雷を放ってきた。なにも出来ない。逃げる事も、叫ぶ事も、そうして諦めて瞼を閉じて衝撃が来るのを待った。

「……？？」

しかし、いつまで待っても衝撃が来ない。不思議に思って目を開けると、私の前に光りの壁が展開していた。

「フフッ、どうにか間にあったわね」

「うっ…あ……だ、れ？」

「あら？　貴女はまだ意識があったのね。安心しなさい、貴方達は助かるから。だから、いまは眠ってなさい。次に起きた時には全て終わってるから――――メシアライザー」

すでに意識が朦朧としているため、顔はよく見えないが女の子らしき相手はそう言った。そして、聞き慣れない言葉を言った直後、私の身体から痛みが引いてきた。折れていた腕もゆっくりとだが、熱も痛みを消えていく。そうか、さっきのは回復魔法か。そう思ったところで私は意識を手放した……。

――ベルベットルーム　〜湊　Ｓｉｄｅ〜

「おや？　お客様ではありませんか、どうやってここに？」

「……ここは？　ベルベットルーム？」

イゴールの声が聞こえ、気がついた僕はいつの間にかベルベットルームへ来ていた。ドアをくぐった覚えはないし、どうしてベルベットルームにいるんだろう？そう考えていると、突然、彼女の声が聞こえてきた。

『時間がないわ、よく聞きなさい』

「あれ？　声しか聞こえない…」

『その理由は後でわかるわ。それで、現実世界ではまだ死神との戦いは続いてる。今の貴方は現実に肉体をおいて精神だけ無理矢理連れてきた状態よ』

「っ！？　なら、急いで戻らないと！」

彼女に言われるまで忘れていた。僕は突然現れた敵“刈り取る者”の攻撃を受けて気を失ったんだ。もう少し気付くのが早ければ魔力で防御する事もできたけど、タイミングが間に合わず。みんなに当たる前に自分の身体で止めるのがやっとだった。そうして思い出し焦っていると、テオドアが不思議そうに声をかけてきた。

「…？　湊様は誰と話しておられるのですか？」

『答えてる暇はないわ。いいこと？　今から貴方にある１つの選択を迫るわ。その選択はどちらも正解じゃない上にどちらも大きな犠牲を払う事になるの』

「…？　一体何の話をしてるの？」

彼女の言っている意味がよく分からない。大きな犠牲を払う選択とは一体…。

『単刀直入に言えば、このまま戻ったところであの子達は助けられない。運が良ければ今後戦えない身体になる程度で済むわ。けど、現実的な見方をすれば貴方ともう1人か2人が生き残るくらいで、あとは死ぬという結果でしょうね』

「なっ！？　どうしてそんなっ！？」

『相手が悪かったわね。あいつは今の貴方達が勝てる相手じゃないわ。タルタロスならフロアを逃げれば追ってはこなかった。けど、あそこは街中。怪我で動けない者を抱えて影時間が明けるのを逃げて待つしかないけど、既にみんなまともに動ける状態じゃないもの』

「くッ……なら、僕が囮になれば！」

僕は姿の見えない彼女に向かって言い返し、拳を強く握る。確かにあいつは規格外の強さだ。この前戦ったイザナミの不完全体よりも強いだろう。けど、それでも速さは僕の方が上だ。なんとか攪乱し、時間を稼いでやればなんとかなるんじゃないだろうか。そう思って言ったのだが、彼女からは淡々とした言葉が返ってきた。

『無理よ。死神は知能も発達してるから、貴方が脅威でもない限り弱って動けない者を狙うわ』

「じゃあ、どうすれば良いって言うんだッ！！」

「お、落ち着いてください湊様。一体どうされたんですか？」

「友達がっ……僕の仲間が死んでしまうんだッ」

みんなを救いたいのに、どうにもならない状況。そして今もなお、現実世界ではみんなが死神の脅威にさらされている。その事に焦りと怒りがわき上がり、つい大声を出してしまった。エリザベスが心配して声をかけてくれるが、僕はみんなの、仲間の事が心配でそんな事を気にしていられない。

『フフッ……素直になったわね。今の貴方になら選ばせることが出来るわ』

「選ぶ？　一体何を？」

『鍵のついた扉の前へ行きなさい。そのベルベットルームでも特別厳重に閉ざされている扉の前に』

言われて周囲を見回してみる。このベルベットルームには沢山の扉がある。形も様々で、布のかかっているものや、ドアノブの上に鍵穴が存在するものもある。これでは、どれがその扉か分からない。なので、僕はみんなに尋ねる事にした。

「扉？　……イゴール、エリザベス、テオドア。このベルベットルームで最も固く閉ざされた扉はどれ？」

「扉ですか？　一体何の？」

「答えてる時間はない。イゴール、君なら知ってるだろう？　教えてくれ」

「……最も固く閉ざされた扉と言えば、そこの布が掛けられているものです」

「これか？」

テオドアが聞き返してきたが、説明する時間も惜しい。そう思いベルベットルームの主であるイゴールに聞くと、紫色の布の被った扉を指差した。僕はその前までいくと、確認しながら布を取った。すると、そこには真っ白の扉があり、それは光っている鎖で厳重に巻かれていた。それを見ていると、イゴールが口を開いた。

「しかし、その扉は何者にも開けることは出来ません。力でも術でも傷一つ付けることができませんでしたから」

「……これでいいの？」

『ええ。それを封じている錠や鎖を斬りなさい』

確認すると、彼女はこの目の前にある扉で合っていると言ってくる。そして、これを封じている鎖を斬れと言ってくるが、どうやって？腕輪の中には並みの武器しか入っていない。それではこれは斬れないだろう。そう、フツノミタマくらいの強さでなければ。だが、その武器は今…。

「でも、武器はいま現実世界に…」

『呼べば応えるわ。あれは現実には存在しない霊剣、ならば主と定めた者の呼び掛けには応えるはずよ』

「……こい、フツノミタマ」

《シュンッ》

彼女に言われた通り、僕はフツノミタマを頭の中でイメージし呼び出すと。フツノミタマは手にしっかり握られた状態で現れた。よし、これなら。そう思って斬ろうとすると、突然イゴールが驚きの声をあげた。

「っ！？　そ、その武器をどこで？」

「これ？　僕が持ったら無の剣が変化したんだよ」

「馬鹿な！？　こちら側でも神話上の存在の武器が現世の人間を選んだですとっ」

いつになく驚いて冷静さを欠いているイゴールにエリザベスとテオドアも驚いているが、僕は今そんな事を気にしている暇はない。僕は扉の方へ身体を向けると、巻いてある鎖に狙いを定めた。

『さあ、早く斬りなさい』

「うん、ハァッ！」

《ガシャン、ガシャン…》

フツノミタマを鎖に向け振り降ろすと、光を放っていた鎖は斬れて光りを失い落下した。その音がベルベットルーム内に響く。そして音が止むとエリザベスが呆けたように呟いた。

「いままで傷つけることさえ叶わなかった鎖が……」

『さぁ、奥へ』

「わかった」

「いけません、お客様っ！　その扉にだけは入ってはなりません！」

「……ゴメンね」

《ギィ…バタン》

イゴールは僕の事を心配して言ってくれたようだが、僕は急がなくちゃならない。なので、扉に入り閉まる直前に謝ると、イゴールは悲しそうな顔をしているのが見えていた。

「あ、ああ…行ってしまわれた」

「あの扉はどこへ通じているのですか？」

「お前たちは知らなかったな。現世の時間にして１０年前、あの扉は突如現れたんだ。それ以来、何をしても開かなかったあの扉。だが、たまに魔力が漏れ出ることがあった。その魔力に中てられただけで、マーガレットですら数日の間苦しんだのだ」

イゴールが説明すると、エリザベスは「姉上が？」と驚く。それを見ながらテーブルに肘をついて指を組み、それを口の前に持っていってからイゴールはさらに話を続ける。

「ああ。魔女ですらも苦しめる魔力。そんな物が存在する場所がどこかなど、私には想像もつかない。だから、人間であるお客様が無事で済むとはとても……」

「っ！？　湊様…」

暗い表情で告げたイゴールの言葉を聞き、僕を心配して扉の方を見るエリザベス。しかし、すでに扉は元あった場所から消えていた。

――扉内・鏡道

「これは鏡？」

扉に入り少しあるくと、不思議な光りを帯びた洞窟に繋がっていた。歩いている場所は平らになっていて整備された感じだが、アーチ状になっている壁などはごつごつとした岩のようなままの状態になっている。だが、よく見るとそれらはキラキラと光りを反射させている鏡だということが分かった。

『ええ、全て鏡よ。けど、少し特別なの』

「…映像が映ってる。順平やゆかり、いや他のみんなもいる」

『そうよ。それは現実世界に起こった事を映しているの』

そう、その鏡はそれぞれが不思議なことに映像が流れていた。モノレールで大型のシャドウと戦う僕・ゆかり・順平。タルタロスのエントランスでエンペラーとエンプレスと戦う公子・真田先輩・順平・風花。この前のホテルでラヴァーズと戦っている公子・ゆかり・真田先輩・美鶴さん。実際に戦ったメンバーと同じものもあれば、違っている映像もある。しかし、そのどれもに共通していることがあった。そう…。

「……僕と公子が一緒に映ってるものがない」

『当然よ。だって、貴方と公子は本来同一の存在だもの』

「僕たちが同一の存在？」

まわりの映像を見ながら進んでいると、彼女が一緒に映っているものがないのは当然だと言ってきた。その意味も分からないが、それよりも同一の存在というのはどういう事だろう？そう思っていると、彼女が尋ねてきた。

『平行世界という言葉は知っているわね？』

「パラレルワールドのことだね」

『そう。そのどの世界でも貴方達2人は同時に存在しなかった…なぜなら2人は世界で同じ役目を与えられた存在だったから』

同じ役目？また分からない事が出てきた。しかし、まわりに映っている映像によって何となくだが、理解し始めていた。そう、映像自体は少しずつ違っている部分はあるのだが、どこでも戦いの時は僕か公子がリーダーをしているようなのだ。つまり、僕らはその“リーダーになること”は決まっているが、“どっちが”リーダーになるかは世界に生まれた方になるといったことなんだろう。

「…つまり、どの世界でも僕か公子のどっちかがその役目の立場にいたってこと？　じゃあ、なんでこの世界では2人が同時に存在するの？　それにどうして君はそんな事を知って…」

『ずっとここで見ていたからよ。救うことに失敗し終わる世界や、犠牲を払って救われた世界。ええ、それこそ星の数ほどね』

「じゃあ、この世界の行く末も君にはわかるの？」

『…いいえ、分からないわ。だって、貴方がいるもの』

「僕が？」

色んな世界のこの場所で見てきたという彼女。なら、どの世界でも同じようなことが起こっているみたいなので、この世界の今後も理解できるのだろうかと思い聞いてみたが。答えはノーだった。しかも、理由が僕がいるからってどういう事だろう？そんな風に考え聞き返すと、彼女は話し始めた。

『ええ。貴方と公子はどちらかが、定められた滅びに抗うため生み出された“世界の子”になるはずだった。そして、その力を持って生まれたのは先にこの世に生を受けた公子だったの。けど、なんの運命の悪戯か貴方も別の命として生を受け世界の子の歩むはずだった人生を歩み始めてしまった。その本来の歩み手との違いの影響か、かなり歪んで過酷になっていたけどね』

「じゃあ、僕は誰なの？」

『もはや、世界の可能性から外れた存在よ。良い意味で言えば、その世界の子すら縛りつけた運命を、唯一打ち破れるかもしれない存在』

「…その、世界の子すら縛りつけた運命って公子が死ぬって事？」

『別にいますぐってわけじゃないし、それは運命に抗えた世界の話だけどもね。そもそもこの世界の公子はすでに世界の子じゃないから大丈夫よ。まぁ、このままでは終わった世界のようにバッドエ

ンドになりそうだけど』

公子がこのままいけば死んでしまうのかと思い不安になったが、この世界ではもう大丈夫だと言われ安心する僕。しかし、さらに続けられた言葉で僕はいま現実世界で起こっている事を思い出した。

「……どうすれば公子を、みんなを助けられるの？」

『そのまま進みなさい。そして、その鏡道に映る世界から目を背けないで』

彼女に言われさらに歩き続けると、周りの映像が変わった。今までは小窓で沢山の映像が流れていたのが、壁全体を使って大きな１つの映像を映し始めた。

『知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった…フフッ、そう今の貴方は誰でもない。ただの旅人よ。そして、いまからカードが示す旅路を辿り、貴方が得るはずだった未来を見てもらうわ』

「（これは公子？　僕に再び命を与えてくれた大切な家族）」

『愚者…それは誰よりも自由で、何者にも縛られぬ者』

そう説明されると、再び映像が変わった。そこには必死にシャドウと戦う順平が映っている。

「（次は順平。自分が弱いことに悩みながらも、本当に頑張ってる強いやつ）」

『魔術師…それは誰よりも“臆病”で、誰よりも強い意志を持つ

者』

どうやらアルカナの説明をするたびに映像が変わるらしいな。今度は一生懸命、みんなに指示を出す風花が映った。

「（これは風花。他人が傷つく事を誰よりも嫌う優しい子）」

『女教皇…それは皆を受け入れ、他者に“残酷”な現実を変えようとする者』

また映像が変わった。そこには報告書を見て苦しそうな表情をしている、美鶴さんが映っている。

「（次は美鶴さん。誰よりも皆を気遣いながらも、世界のために自分の心を犠牲にしている人）」

『女帝…それは皆を愛しながらも、結果のため心に“虚栄”を張り続ける者』

今度は真田先輩が真剣にトレーニングに励んでる映像だ。

「（真田先輩。仲間のために平気で命をかける人）」

『皇帝…それは“傲慢”と思われようとも、仲間のために全力を尽くす者』

そして、映像が変わったと思うと映っている人物に驚いた。そこには馬に跨ったようなペルソナを召喚している荒垣さんが映っていた。

「（これは荒垣さん？　常に誰かを気遣ってる面倒見の良い人）」

『法王…それは“怠惰”に溺れそうになりながらも、皆を思いやる優しき者』

荒垣さんの映像が終わると、次はベッドに座り膝を抱えているゆかりが映っている。

「（次はゆかりだね。公子や伯父さんたち以外で初めて家族になってくれると言ってくれた人）」

『恋愛…それは“裏切り”を恐れながらも、絆を信じる者』

っ！？荒垣さんの時以上の驚きだ。アイギスが映ったのはいいけど、まさかムーンライトブリッジで子供の僕を抱きしめてる映像とは。

「（アイギス。僕の命を救ってくれた人）」

『戦車…それは“挫折”を経て尚、進み続ける者』

アイギスの次は初めて見る映像だ。天田が槍を持ってトレーニングをしている。

「（これは天田？　親がいないって部分は僕と似た境遇だけど、もっと冷静で大人な考え方をできるやつ）」

『正義…それは“偏見”を持ちながらも、最後には正しき答えを導ける者』

そして、次は手術着のような物を着た今よりも子供の頃のジンが映っている。

「（次はジンか。本来他人であるはずの僕を、弟のように気にかけてくれたやつ）」

『隠者…それは“貪欲”なまでに知識を得て、自らの望みを叶える方法を探す者』

今度はタカヤか、棺桶が人間なったと思ったらそれを銃で撃ち殺している。

「（タカヤ。同じ桐条に運命を狂わされた者として僕を同志と言ってくれた人）」

『運命…それは本来あった人生に多くの“誤算”を与えられながらも、その結末を自らの手でつくり出そうとする者』

続いて映ったのは黒い三頭犬と、その後ろで吠えている虎狼丸。あれが彼のペルソナなのだろうか？

「（これは虎狼丸か？　いまなお主人を想い居場所を守る忠犬）」

『剛毅…それは世界の“本性”を見て尚、強き意思を曲げず立ち向かう者』

そして、遠くの方に光が見える。この鏡道ももうすぐ終わりだと思っていると、血塗れで倒れているチドリの映像が映った。

「（もうすぐ終わりか、最後はチドリ。僕と同じように自分の命に価値を持てない子）」

『刑死者…それは他者を救うため、避けられぬ“犠牲”に自らを捧げることができる者』

「鏡道が終わった…ここは外か？」

鏡道と呼ばれる洞窟を抜けると、そこは外だった。いや、むしろ庭園と言った方が正しいか。色とりどりの草花が咲き誇り、どれもがキチンと手入れされている。そうして、僕は庭園の中を進んでいると、真っ白のガゼボがあった。そこへ近付いていくと、テーブルと椅子が置かれてあり。椅子には1人の少女が座っている。

「君は…」

「知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった…。その旅人である貴方はアルカナの示す旅路を辿り、得るはずだった未来を見て何を思った？」

「……あれは仲間や敵になるはずだった人たちなんだね」

「……」

実体で見るのは初めてだけど、彼女が尋ねてきたので僕は見て思っていたことを聞いてみた。しかし、彼女は何も答えない。なので、僕は素直にいまの気持ちを言うことにする。

「みんな僕にとって大切な人だ。他の世界なんて知らない、僕は誰も失いたくない」

「けれど、アルカナが示すのはその旅路の先に待つものが、“絶対の終わり”だという事よ。いかなる者も絶対に“死”は避けられ

ない」

「それは分かってる。……でも、それはいまじゃないッ、僕はみんなを死なせたくないんだ」

真剣な表情で冷たく言い放つ彼女に僕も言い返す。すると、彼女は柔らかく笑い口を開いた。

「ならば、覚悟を示しなさい。ただの旅人…いいえ、傍観者である貴方がすでに動き始めた世界に介入し戦う意志を」

「介入し戦う意志？」

「そう、さっきは言わなかったけど、貴方は本来生まれるはずのなかった存在。さらに、世界の子と呼ばれる、救世の可能性を秘めた存在が歩むはずだった道を歩み始めてしまった。この世界はそれが許せないのよ」

そこまで言うとテーブルに置かれたカップを手に取り、相手は口を付けた。しかし、こっちとしては言われたところで意味がわからない。だって、生まれた理由は世界が認めたからなんだろう？

「そ、そんなこと言われても、僕が何かして生まれたりその道を選んだ訳じゃないよ」

「ええ、その通りよ。だって、生まれることを許可したのは世界だし、歩み始める場面に世界の子をいさせなかったのも世界だもの。けれど、世界はそのミスを帳消しにするつもりか貴方を殺したいみたい」

「なっ！？　そんな勝手な話があるかっ。全部、その世界とやらが自分で起したミスだろう！」

その世界の意思とやらを彼女から聞いて僕は思わず言葉を荒げる。一度は認めたくせに都合が悪くなったから殺されるなんて冗談じゃない。そう思っていると、彼女は表情を真剣なものに戻し、再び話し始めた。

「世界にとってはそんなの関係ないわ。配役を失敗したからミスキャストである貴方を殺して世界をリセットするの。そして、新たな世界を始めて今度こそシナリオ通りのキャストで救世の道を歩む…ってね。今回の死神“刈り取る者”も世界の送ってきた刺客よ。といっても、世界が起したのは『タルタロスで遭遇する』ものを『街中で遭遇する』に変えただけの因果律の操作だけどね」

「……じゃあ、今回のことは全部僕のせいだってこと？　僕と一緒にいたから皆は巻き込まれたって「違うわっ！」……でも、実際にそうなってるじゃないか」

「結果的にはそうかもしれない。でも、それは遭遇した理由だけ。貴方のせいじゃないの、自分を責めないで頂戴」

彼女は僕のせいじゃないと言ってくれるが、どんな理由があったにせよ。敵の狙いは僕だ。そんな人間が傍にいたばっかりにみんなは今も危険にさらされてしまっている。どんなに謝っても許される事じゃない。そう思い俯きかけると、彼女が声をかけてきた。

「世界から弾かれていた貴方の属性は旅人。すでに世界は貴方を受け入れないつもりなのか、貴方が旅人になっている間に世界はどの属性もすでに満席になっているの」

「それがどうしたって言うんだ。正規の属性が無ければ死ぬとでも？」

「その通り。でも、たった1つだけ空いている席があるの。それは、この世の誰にも座ることができない席……けど、貴方には座る権利があるわ」

「どうして僕にだけ？」

「それはその席が特殊だからよ。選べば助けられるかも知れない。でも、同時に共に歩む事もできなくなるわ。だって、それは本来ならば存在しないものだから」

属性の意味は分からないが、鏡道の話から考えるならアルカナのことか？まぁ、僕はペルソナも持ってないんだし、属性もなにもあったようなもんじゃない。そして、自分が死ぬのなんて別に構わない。けど、仲間を救えるって言うなら選んでやるさ。

「助けられるのなら、共に歩めなくたっていい。だから、僕に力をくれ」

「…本当にいいの？　この力を得れば世界の枠から外れ、救済する場合でも世界は貴方の因果律に干渉できなくなる。しかも、今回のような刺客をまた送ってくると思うわ。つまり、「いいんだ」…」

「例えどんな敵が来たって、僕は戦うって決めたから」

選べば今後も今日のような敵が襲ってくるようになると彼女は言うが、そんなことは関係ない。むしろ、僕だけを狙うなら好都合だ。

そう思い、彼女の目をしっかりと見て戦う覚悟を決める。すると、彼女は一瞬だけ哀しそうな表情をしてすぐに苦笑した。

「……わかったわ。といっても、これは最初から貴方のモノだったのだけどね」

「僕のモノだった？」

「そうよ、だから返すわ。右目を媒体としてこの場所に封印されていた貴方本来の力を」

「っグァぁあああ！？」

彼女の手から光りの球が出たかと思うと、それは僕の右目に吸い込まれた。その瞬間、全身に激痛が走り、危なく倒れそうになる。しかし、なんとか倒れる事だけは防ぐと、俺は右目の眼帯を解いた。

「どう？　本当の自分に戻った気分は？」

「ハァ…ハァ……。そういう事か、確かにこれは俺にしか使えない力だ。それに君がなぜ俺にしか見えていなかったのかも理解できたよ」

「なら、もう大丈夫ね。さぁ、いきましょう現実世界へ」

「ああ、俺と共にゆこう――――アリス」

第四十七話　中編（後書き）

皆さんの予想は当たっていましたか？アリスはこの作品内で湊に次ぐキーパーソンになります。

ちなみに今回のアリスが言っていた『魔術師…それは誰よりも“臆病”で、誰よりも強い意志を持つ者』ってやつは、一応タロットの意味を使って書いてます。『”』で縛られているものは、そのアルカナの逆位置の意味です。そして、他の部分は正位置での意味の中からキャラに合っていると思ったものを選びました。

それと『ガゼボ』ってなんぞ？と思った方もいるでしょうから、説明しておきますと。庭園や公園にある柱と屋根があるだけの建物のことです。なんか貴族とかがお茶してそうな場所を想像していただければ、多分、それであってると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9453s/

PERSONA3　Re:Call

2011年10月20日08時24分発行